秋田県文化財調査報告書第423集

岩　倉　館　跡

――日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV――

２００７・８

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年 8 月発見、高さ 7 cm、凝灰岩。

岩倉館跡

（いわくらだてあと）

――日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV――

2007・8

秋田県教育委員会

遺跡遠景（北→）：南に鳥海山を望む

遺跡遠景（東→）：西に日本海を望む

調査区中央部（北東→）

Ⅰ～Ⅴ郭全景（真上）

ＳＤ3501・3502・3503（北→）

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に先だって、平成15年度と16年度に由利本荘市で実施した岩倉館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

調査の結果、中世城館に伴う土塁、空堀、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡等の遺構や、陶磁器、卒塔婆などの遺物が発見されました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、東日本高速道路株式会社、由利本荘市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年８月

秋田県教育委員会
教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の24冊目である。

2　本書は、平成15年度（2003年度）、平成16年度（2004年度）に調査した、秋田県由利本荘市福山字岩倉に所在する岩倉館跡の調査成果を収めたものである。各年度の調査範囲は第４図に調査区割り図に示した。

3　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の１『本荘』、25,000分の１『本荘』・『岩谷』、東日本高速道路株式会社提供の１千分の１工事計画図、株式会社シン技術コンサルに委託した遺跡地形測量図である。

5　遺跡基本層位と遺構土層中の土色、遺物の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2001年版によった。

6　発掘調査における遺構図と遺構配置図および調査区地形図等の作成、空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

7　第５章「自然科学的分析」には、株式会社加速器分析研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社吉田生物研究所に委託した分析報告書の一部を収載した。

8　出土した金属製品の一部は、保存処理を株式会社東都文化財保存研究所に委託した。

9　出土した木製品の一部は、保存処理を吉田生物研究所に委託した。

10　本書に掲載した陶磁器の一部の実測図作成とそのトレースは、有限会社アイテックスに委託した。

11　本書の草稿執筆は、第４章第２節１・７・10を大渕和峰、第４章第２節６を伊藤いづみ、第４章第２節２～４・12を足利直哉、第４章第２節５を海道澄子、第４章第２節８・11・13・16を佐藤広志、第４章第２節９・14・15を丸山涼子、佐々木彩子、平野左近が行い、補筆および出土遺物とその他を栗澤光男が行った。編集は、栗澤が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＡ・・・柱穴列　　ＳＫＩ・・・竪穴状遺構
ＳＥ・・・井戸跡　　ＳＫ・・・土坑　　ＳＮ・・・焼土遺構
ＳＱ・・・集石遺構　　ＳＤ・・・溝跡、空堀、竪堀　　ＳＦ・・・土塁跡
ＳＲ・・・土器埋設遺構　　ＳＷ・・・炭窯　　ＳＭ・・・通路跡
ＳＸ・・・性格不明遺構、その他の遺構　　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

なお、遺構図面中に記したＰは掘立柱建物跡、柱穴列、竪穴状遺構に伴うピットを示している。

2　遺構番号は、調査対象区が広範囲であることや調査工程の絡みから、平成15年度の調査箇所に割り当てられていた１～500番に続けて、501番から500ごとに6000番までの番号を平成16年度の各調査箇所に割り当てた。また、割り当てた番号を超過して遺構が検出した調査箇所には、予備番号にした6001番以降の番号を順に割り当てた。このため各調査箇所の遺構番号は不連続とっなている。

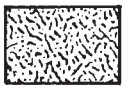
3　遺構の重複関係は、重複する遺構が著しく多いため、その関係が明確にできた遺構のみとした。

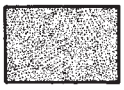
4　調査箇所の基本層序と遺構の堆積土には算用数字を使用した。

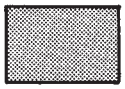
5　文章中のⅠ～Ⅳ期は、岩倉館跡のⅠ期（創建期）～Ⅳ期（終末期）までの生活面を表す。

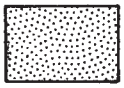
6　挿図中の遺物番号は、各調査箇所ごとに遺構内外の出土を問わず通し番号を付した。図版中の遺物番号は、各図版ごとに付した。また出土遺物は、その主なものを一覧表にして掲載した。

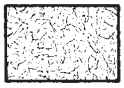
7　挿図中に使用した主なスクリーントーンは以下のとおりであり、このほかについては個々に挿図中に示した。

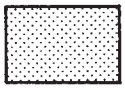

…焼土

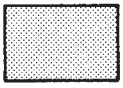

…漆

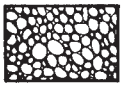

…羽口の被熱部分

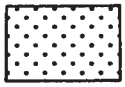

…陶器の釉


…煤


…砥石の擦り面


…内外面黒色処理


…羽口のガラス質溶解部分


…五輪塔のガジリ

目　　次

巻頭図版
序
例言・凡例
目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 10
　第１節　遺跡の概観 …… 10
　第２節　調査の方法 …… 12
　第３節　調査の経過 …… 12
　第４節　整理作業の方法と経過 …… 19
第４章　調査の記録 …… 20
　第１節　基本層序 …… 20
　第２節　検出遺構と遺物 …… 29
　　1　Ⅰ郭の検出遺構と出土遺物 …… 30
　　2　Ⅱ郭の検出遺構と出土遺物 …… 58
　　3　Ⅲ郭の検出遺構と出土遺物 …… 65
　　4　Ⅳ郭の検出遺構と出土遺物 …… 92
　　5　Ⅴ郭の検出遺構と出土遺物 …… 139
　　6　Ⅵ郭の検出遺構と出土遺物 …… 182
　　7　Ⅶ郭の検出遺構と出土遺物 …… 190
　　8　Ⅷ郭の検出遺構と出土遺物 …… 195
　　9　Ⅸ郭の検出遺構と出土遺物 …… 207
　　10　Ⅹ郭の検出遺構と出土遺物 …… 218
　　11　Ｄ区の検出遺構と出土遺物 …… 227
　　12　Ｅ区の検出遺構と出土遺物 …… 236
　　13　南調査区の検出遺構と出土遺物 …… 244
　　14　北調査区Ａの検出遺構と出土遺物 …… 245
　　15　北調査区Ｂの検出遺構と出土遺物 …… 257
　　16　北調査区Ｃの検出遺構と出土遺物 …… 280
第５章　自然科学的分析 …… 282
　第１節　放射性炭素年代測定結果 …… 282
　第２節　出土材の樹種同定 …… 286
　第３節　卒塔婆放射性炭素年代測定結果 …… 287
　第４節　卒塔婆樹種同定 …… 290
第６章　まとめ …… 291
図版
報告書抄録
付図１～４

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善とともに、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340㎞の高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路と仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路を連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続される。平成９（1997）年２月に新潟市から青森市が日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうち岩城Ｉ・Ｃ～秋田空港Ｉ・Ｃ間は平成14（2002）年10月までに、秋田南Ｉ・Ｃから能代東Ｉ・Ｃ間は平成18（2006）年７月に開通している。

岩倉館跡に係る本荘～岩城間の21.3㎞については、平成９（1997）年２月15日付の第13次施行命令を経て、路線が発表された。これに伴い、日本道路公団東北支社仙台建設局長（現東日本高速道路株式会社）から、秋田県教育委員会教育長あてに、埋蔵文化財包蔵地確認の依頼があった。

これを受けて秋田県教育委員会では、平成11（1999）年から平成14（2002）年に計画路線内の分布調査を実施した。この結果、岩倉館跡を含む周知の遺跡６箇所と、新発見の遺跡８箇所の計14遺跡が路線内に存在することを確認した。このため埋蔵文化財包蔵地および包蔵地と推定される地区については、今後確認調査が必要であることと、確認調査の結果記録保存の必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施すべきことを回答した。平成14（2002）年に岩倉館跡の確認調査を行った結果、遺跡の大部分が路線内に係ることが判明したため、事業計画の関連から平成15・16（2003・2004）年の２か年にわたって発掘調査を実施した。

第２節　調査要項

遺　跡　名	岩倉館跡（いわくらだてあと）（遺跡番号　６ＩＫＤ）
遺跡所在地	秋田県由利本荘市福山字岩倉１外
調査期間	平成15年７月１日～11月28日
	平成16年５月11日～10月29日
調査面積	35,900㎡（平成15年度：13,500㎡、平成16年度：22,400㎡）
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	平成15年度
	利部　　修（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事兼調査班長）
	渡辺　淳一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
	伊藤いづみ（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
	大渕　和峰（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
	佐藤　広志（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

平成16年度

栗澤　光男（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主査兼調査班長）

伊藤　伸吾（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）

渡辺　淳一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）

高橋　　純（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）

藤田　賢哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）

進藤　　紀（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）

山田　祐子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）

足利　直哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

伊藤いづみ（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

大渕　和峰（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

海道　澄子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

佐々木彩子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

佐藤　広志（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

平野　左近（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

丸山　涼子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

総務担当者　平成15～17年度

藤原　康悦（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）

平成18年度

時田　慎一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）

調査協力機関　東日本高速道路株式会社　由利本荘市教育委員会

第２章　遺跡の環境

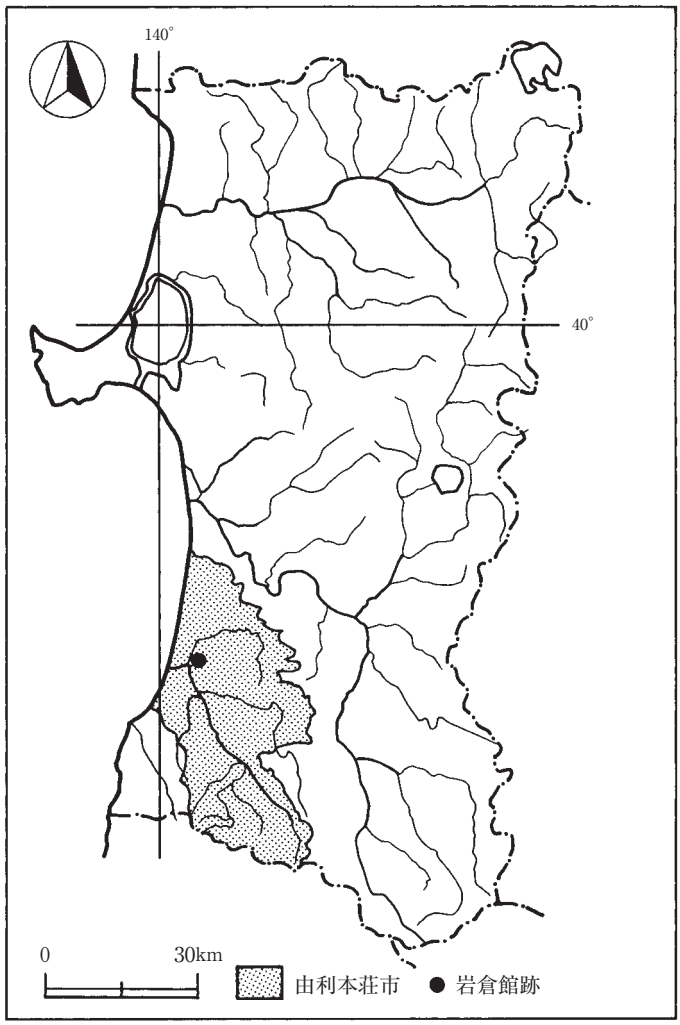
第１節　遺跡の位置と立地

岩倉館跡が所在する由利本荘市は、秋田県の南西部に位置し、北は秋田市、東は大仙市・横手市・雄勝郡羽後町・湯沢市、南西はにかほ市、南は山形県酒田市・飽海郡遊佐町・最上郡真室川町に接し、西は日本海に面している。鳥海山麓に源を発し、芋川・石沢川などの支流を持つ子吉川が、市内のほぼ中央部を北西に向かって流れ下り日本海に注ぐ。また、市内を南北にＪＲ羽越本線が縦貫し、市中心部から由利本荘市の矢島地区まで南東に鳥海山麓線が通っている。さらに、海岸沿いに秋田・山形両県を結ぶ国道７号が走り、これから芋川に沿って国道105号が大仙方面に、石沢川に沿って国道107号が横手方面に、子吉川に沿って国道108号が湯沢方面に走っており、交通の一大要衝地となっている。

岩倉館跡は由利本荘市の本荘地区東部に所在し、ＪＲ羽越本線羽後本荘駅の北東約2.1㎞、北緯39度23分45秒、東経140度04分49秒に位置している（第１図）。

遺跡周辺の地形を地形区分図（第２図）によって大まかに見ると、東から権山山地（Ⅰａ）・鬼倉山山地（Ⅰb）、出羽丘陵に連なる中央丘陵地（Ⅱc）、子吉川・芋川低地（Ⅲａ・Ⅲｃ）、北由利・子吉川丘陵地（Ⅱｂ・Ⅱｄ）があり、その西に本荘・西目砂丘地（Ⅲｇ・Ⅲｈ）があって海岸線に至っている。

遺跡は鬼倉山山地の西側に広がる中央丘陵地から西に延びる標高80m前後の急峻な尾根西端部に立地している。



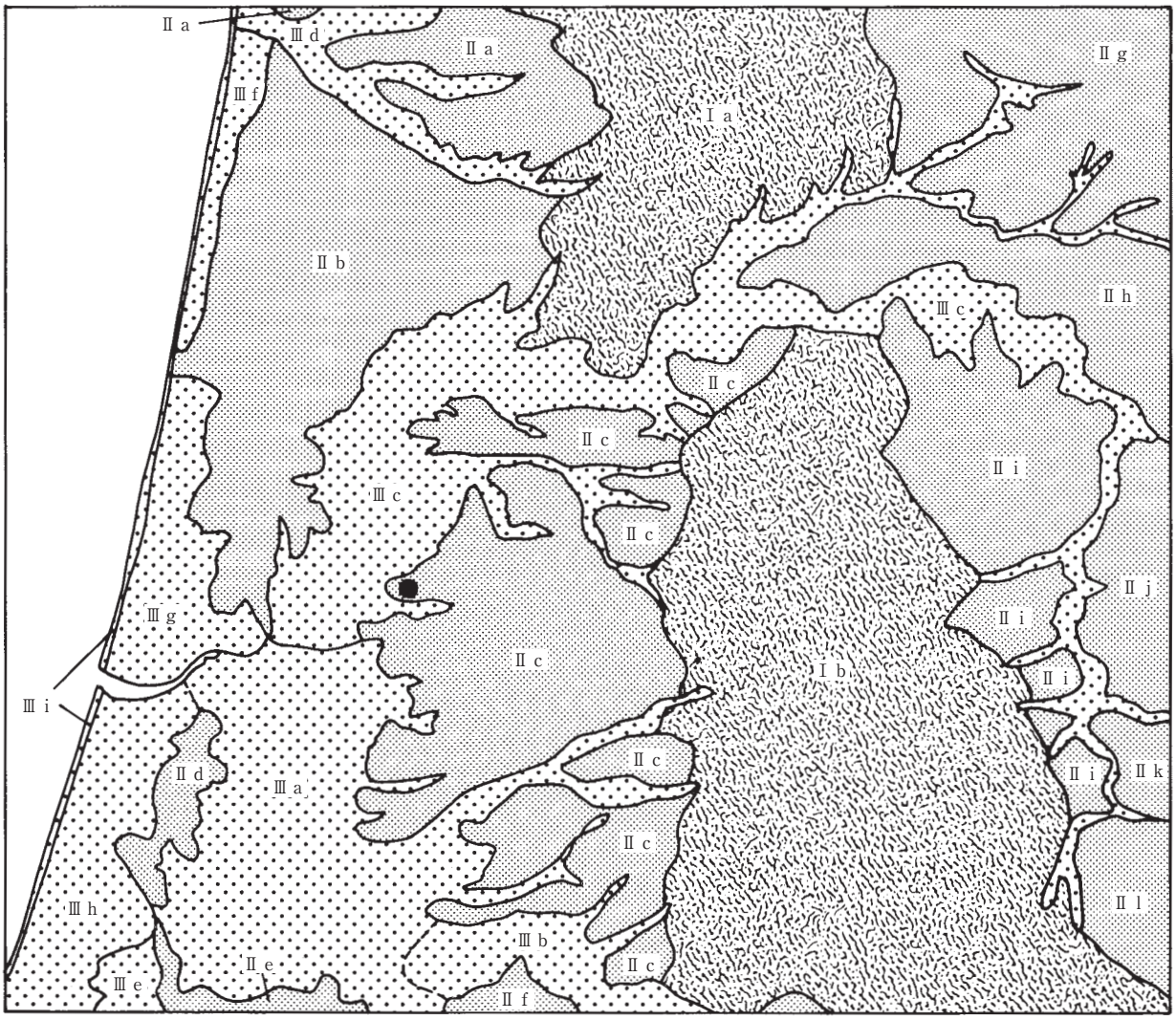
第１図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

由利本荘市域には、旧石器時代から近世までの遺跡が多数確認されており、これらの遺跡は、日本海に注ぐ子吉川、西目川などや、その支流の諸河川流域の平地と、段丘や丘陵地に分布している。

第３図の岩倉館跡と周辺遺跡位置図の図幅は、南北11.75km・東西8.00km の地域である。ここでは、当地域の遺跡を中心に歴史的環境を概観する。

なお、図副地域で旧石器時代の遺跡は確認されていないが、由利本荘市域における



● 岩倉館跡

権現山山地	（Ⅰａ）・鬼倉山山地	（Ⅰｂ）		── 山　地
岩城山陵地	（Ⅱａ）・北由利丘陵地	（Ⅱｂ）・中央丘陵地	（Ⅱｃ）	── 丘陵地
子吉丘陵地	（Ⅱｄ）・葛法丘陵地	（Ⅱｅ）・石橋丘陵地	（Ⅱｆ）	
中ノ俣丘陵地	（Ⅱｇ）・扇森丘陵地	（Ⅱｈ）・上川大内丘陵地	（Ⅱｉ）	
岩野目沢丘陵地	（Ⅱｊ）・小羽広丘陵地	（Ⅱｋ）・桧山丘陵地	（Ⅱｌ）	
子吉川低地	（Ⅲａ）・石沢川低地	（Ⅲｂ）・芋川低地	（Ⅲｃ）	── 台　地
衣川低地	（Ⅲｄ）・西目低地	（Ⅲｅ）・由利砂丘地	（Ⅲｆ）	── 低　地
本荘砂丘地	（Ⅲｇ）・西目砂丘地	（Ⅲｈ）・海浜低地	（Ⅲｉ）	

第２図　地形区分図

旧石器時代の遺跡としては、子吉川上流域の鳥海地区国見遺跡、矢島地区桃野Ⅰ・Ⅱ遺跡・花立梨平遺跡、芋川流域の大内地区才の神遺跡が確認されている。これらの遺跡からは、ナイフ形石器・掻器・石刃などが採集されている。

縄文時代の遺跡は、早期の菖蒲崎貝塚（12）・子吉川底遺跡（13）、前期の船岡台遺跡（23）・土谷白山遺跡（40）・土花遺跡（47）・オシダテ遺跡（48）・菖蒲崎貝塚・子吉川底遺跡、中期の田尻遺跡（15）・薬師堂遺跡（20）・鳴瀬遺跡（42）・船岡台遺跡、後期の大浦遺跡（10）・田尻野遺跡（16）・上谷地遺跡（７）、晩期の長老沼遺跡（17）・東町遺跡（18）・成沢台遺跡（44）・大浦遺跡・田尻野遺跡が確認されている。菖蒲崎貝塚は子吉川と芋川の合流点に位置し、日本海沿岸における数少ない縄文早期の貝塚として重要な遺跡である。平成14年に調査が行われ、貝層の面積が約800㎡以上あって、貝層の厚さが最大で１m40cm あることが分かった。また、貝層から出土した貝は99％を汽水性のヤマトシジミが占めていた。この他にウグイ等の魚類やガン・カモ類に属する鳥類遺体と共に人骨も出土した。当該遺跡は河川堆積物に厚く覆われた標高０m以下にある低湿地性の貝塚であり、まだ多くの貴重な考古資料が埋蔵されているようである。船岡台遺跡は由利本荘市南西部の丘陵地に所在し、前期末の土坑８基、中期の竪穴住居跡１棟が検出され、前期大木式土器・円筒下層式土器・北陸系の土器や石鏃・石斧・魚形文刻石などが出土している。上谷地遺跡は平成13・14年に調査が行われ、県内で初めての発見となる縄文時代後期の水さらし場遺構が検出された。この遺構はトチの実のアク抜きを行った施設であり、縄文人の生業と食物加工の技術を知る有益な資料である。

弥生時代の遺跡としては、土花遺跡（41）が確認されている。弥生土器が少量出土したのみで、当時の様子を解明するに至っていない。

古代の遺跡（奈良・平安時代）は、樋ノ口遺跡（４）・上谷地遺跡・新谷地遺跡（６）・土谷遺跡（14）・葛法窯跡（26）・新ウルイノ遺跡（33）・横山遺跡（34）・大覚遺跡（35）・岩瀬堤遺跡（36）・宮崎遺跡（49）・子吉大堤遺跡（57）・土花遺跡が確認されている。葛法窯跡は、由利本荘市南西丘陵地の麓に所在し、８世紀末～９世紀初頭に操業の中心を置く半地下式の登り窯が３基検出された。遺物は全て須恵器で、坏・台付坏・台付碗・壺・甕が出土した。坏はロクロ水挽きによって形成され、切り離しは回転ヘラ切り、切り離し後の再調整のないものであった。横山遺跡は、由利本荘市北東の沖積地に所在し、10世紀の水田跡が住居とともに発見されている。十和田ａ火山灰の堆積状態からこの水田は、915年以前に営まれたと考えられる。古代の水田跡は、県内では初の発見例である。上谷地遺跡の所在する土谷地区は、古くから多数の遺物が出土しており、特に昭和６年６月13日の「本荘時報」では大正年間の耕地整理中の角材発見が伝えられ、本荘西部の古雪地区と共に由利柵の推定地のひとつといわれている。由利本荘市教育委員会では、４次にわたって上谷地遺跡の分布調査を行い、北宋銭・土師器・須恵器・箸片・加工痕の残る板材が出土した。また、平成13～15年度の調査では、掘立柱建物跡・井戸跡等から、北宋銭・土師器・須恵器・木製品等が出土した。大覚遺跡からは祭祀用木製品、土谷遺跡からはフイゴの羽口・大量の鉄滓や須恵器系中世陶器、新谷地遺跡からは土師器・須恵器や鉄滓が出土している。

中世の遺跡としては、集落跡の大坪遺跡（２）・大浦遺跡・立花遺跡、鋳造遺跡の堤沢山遺跡（５）や城館跡がある。大坪遺跡は、子吉低地の東端に位置し、溝跡から中国産の青磁・白磁、常滑焼・渥美焼、須恵系中世陶器等が出土している。大浦遺跡は芋川河口から900m上流の右岸に位置する。13

第３図　岩倉館跡と周辺遺跡位置図

世紀～15世紀の陶磁器や銭貨と共に、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡、竪穴状遺構、道路跡が検出された。土花遺跡は、万願寺地区の南部に所在し、珠洲系陶器や中国製の磁器と共に、建物跡・井戸跡や火葬墓が検出されている。堤沢山遺跡は新谷地遺跡の北西側に隣接し、梵鐘等の仏具の生産施設が検出されている。城館跡は岩倉館（１）、平岡館（９）・川口館（11）・子吉館（19）・埋田小館（21）・蝦夷館（22）・花館（24）・葛法山館（25）・荒城館（27）・万願寺館（28）・株切館（30）・本荘城（32）・鳴瀬館（45）・エゾ館（50）・山崎館（59）・蒲田館（60）・潟保館（66）・豊後館（67）・大学館（68）・田高館（69）の館跡が確認されている。通説では、由利氏が平安時代末期から鎌倉時代の初期までこの地を支配したとされ、『吾妻鏡』には文治５（1189）年の奥州合戦の際に、鎌倉方に捕らえられたが、その立居が認められ、本領安堵された由利惟平の記事が見られる。健保元（1213）年の和田合戦の後は、幕府女房の大弐局が由利郡地頭となり、一族の小笠原氏に受け継がれ、分割譲渡を繰り返すなかで地縁的結合をもった庶子が党的性格の独立勢力になったものと推測される。北条得宗家の専制・鎌倉幕府滅亡・南北朝の争乱を経て、小豪族が割拠する「由利十二頭」の時代となる。「由利十二頭」の時代は、天正18（1590）年の奥羽仕置・太閤検地で終わりを迎え、中央政権の地域支配として由利五人衆が設定されたが、慶長７（1602）年には、関ヶ原の戦の功から最上義光の支配となり、重臣の楯岡満茂が入部した。この時に、満茂が統治の拠点として尾崎山に築いた本荘城を中心に、江戸期を通じて近世城下町として本荘は発展を遂げた。

引用・参考文献

秋田県　『土地分類基本調査　本荘』　1980（昭和55）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

本荘市　『本荘市史史料編・Ⅰ上』　1984（昭和59）年

本荘市　『本荘市史通史編・Ⅰ下』　1985（昭和60）年

本荘市教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　1985（昭和60）年

本荘市　『本荘市史通史編・Ⅰ』　1987（昭和62）年

秋田県教育委員会　『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』　第７号　1992（平成４）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（由利地区版）』　2001（平成13）年

秋田県教育委員会　『大浦遺跡―芋川災害復旧等関連緊急事業に係る埋蔵文化財調査報告書―』　秋田県文化財調査報告書第336集　2002（平成14）年

本荘市教育委員会　『土花遺跡（第二次調査）―上野新田地区担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』　本荘市文化財調査報告書第20集　2003（平成15）年

秋田県教育委員会　『横山遺跡―内越地区担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』　秋田県文化財調査報告書第363集　2003（平成15）年

秋田県教育委員会　『大坪遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅧ―』秋田県文化財調査報告書第375集　2004（平成16）年

秋田県教育委員会　『上谷地遺跡・新谷地遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅡ―』　秋田県文化財調査報告書第395集　2005（平成17）年

第１表　周辺遺跡一覧表（１）

番号	遺 跡 名	遺跡地図登録番号	種　別	主な遺構・遺物
1	岩倉館	５―15	館跡	土塁・空堀・掘立柱建物跡、中世陶磁器・卒塔婆
2	大坪		集落跡・鍛冶生産	溝跡・鍛冶炉、土師器・須恵器・中世陶磁器・羽口・鉄滓
3	苧種坂Ⅲ		製鉄	羽口・鉄滓
4	樋ノ口		集落跡・館跡	掘立柱建物跡・溝跡、土師器・須恵器・羽口・鉄滓
5	堤沢山		鋳造遺跡	梵鐘鋳造遺構・フイゴ座、鋳型（仏具）・羽口・鉄滓
6	新谷地	５―69	遺物包含地	溝跡、土師器・須恵器・鉄滓
7	上谷地	５―68	集落跡	水さらし場遺構、縄文土器（後期）・石器 井戸跡、土師器・須恵器・木製品
8	湯水沢		製鉄	製鉄炉・鍛冶炉・炭窯、土師器・須恵器・羽口・鉄滓
9	平岡館	５―８	館跡	土塁・空堀
10	大浦	５―13	集落跡	掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・道路跡、陶磁器・木製品
11	川口館	５―14	館跡	消滅
12	菖蒲崎貝塚	５―16	貝塚	土坑・炉跡、縄文土器（早期・前期）・シジミ貝・魚骨
13	子吉川底	５―17	遺物包含地	縄文土器
14	土谷	５―18	遺物包含地	製鉄炉、中世陶磁器・羽口・鉄滓
15	田尻	５―19	遺物包含地	縄文土器（中期）
16	田尻野	５―20	遺物包含地	縄文土器（後期・晩期）
17	長老沼	５―21	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石鏃・石匙・石斧
18	東町	５―22	遺物包含地	縄文土器（晩期）
19	子吉館	５―23	館跡	土塁・空堀・馬場跡
20	薬師堂	５―24	遺物包含地	縄文土器
21	埋田小館	５―25	館跡	
22	蝦夷館	５―26	館跡	
23	船岡台	５―27	遺物包含地	縄文土器（前期・中期）
24	花館	５―28	館跡	
25	葛法山館	５―29	館跡	
26	葛法窯	５―30	窯跡	須恵器
27	荒城館	５―33	館跡	腰郭
28	万願寺館	５―34	館跡	帯郭・空堀
29	三条山	５―35	遺物包含地	縄文土器
30	株切館	５―50	館跡	
31	石脇中町	５―63	遺物包含地	縄文土器
32	本荘城	５―64	城跡	縄文土器・陶磁器
33	新ウルイノ	５―65	遺物包含地	土師器
34	横山	５―66	集落跡	水田跡・竪穴住居跡、土師器・須恵器
35	大覚	５―67	遺物包含地	土師器・須恵器・木製品
36	岩瀬堤	５―70	遺物包含地	須恵器
37	土谷田ノ沢	５―71	遺物包含地	鉄滓
38	土谷堤下	５―72	遺物包含地	
39	土谷堂ヶ沢	５―73	遺物包含地	
40	土谷白山	５―74	遺物包含地	縄文土器（前期）
41	土花	５―75	遺物包含地	掘立柱建物跡・井戸跡、縄文土器・弥生土器・土師器・中世陶磁器
42	鳴瀬	５―79	遺物包含地	
43	碁石	５―81	遺物包含地	
44	成沢台	40―１	遺物包含地	縄文土器（晩期）・石器
45	鳴瀬館	40―２	館跡	土塁、縄文土器・土師器・中世陶器・鉄滓・焼米
46	中鳴瀬	40―３	遺物包含地	溝跡・土坑、縄文土器・羽口・鉄滓

第２表　周辺遺跡一覧表（２）

番号	遺 跡 名	遺跡地図登録番号	種　別	主な遺構・遺物
47	土花	41―１	貝塚	縄文土器（前期）・石鏃・石匙・石錘・貝類（ヤマトシジミ）
48	オシダテ	41―２	遺物包含地	縄文土器（前期）
49	宮崎	41―３	遺物包含地	北大式土器・土師器・須恵器・人骨
50	エゾ館	41―４	館跡	縄文土器（前期）
51	鉢沢	41―22	遺物包含地	縄文土器
52	御月森	41―26	遺物包含地	縄文土器
53	汭下	41―28	遺物包含地	縄文土器
54	弁天前	41―31	番屋敷	干拓番屋敷
55	北沢	41―32	遺物包含地	縄文土器・石棒
56	碁石	41―34	遺物包含地	縄文土器
57	子吉大堤	５―78	遺物包含地	土師器・羽口・鉄滓
58	南福田	40―４	遺物包含地	縄文土器（中期・後期）・石器
59	山崎館	40―５	館跡	土塁・空堀
60	蒲田館	40―６	館跡	土塁・空堀・竪堀
61	瑞光寺経塚	40―７	経塚	経石
62	客殿森	41―７	遺物包含地	縄文土器（中期）・土師器・須恵器
63	井岡	41―８	遺物包含地	土師器・須恵器・墨書土器・子持勾玉
64	鷹橋	41―９	遺物包含地	土師器・須恵器
65	根子の沢	41―10	遺物包含地	縄文土器（中期・後期）・石鏃・石匙・石皿・石棒
66	潟保館	41―11	館跡	腰郭・空堀
67	豊後館	41―17	館跡	主郭
68	大学館	41―18	館跡	腰郭・空堀
69	田高館	41―19	館跡	礎石
70	中ノ目Ⅰ	41―21	遺物包含地	縄文土器（前期・中期）・石鏃・石匙・石錘
71	寺ヶ沢Ⅰ	41―23	寺院跡	
72	大股	41―24	寺院跡	礎石
73	太平	41―25	寺院跡	石碑
74	沼田	41―33	遺物包含地	土師器・須恵器
75	向谷地	41―35	遺物包含地	土師器・須恵器
76	新櫃	41―36	遺物包含地	土師器・須恵器
77	中沢	41―37	遺物包含地	縄文土器
78	川袋	41―38	遺物包含地	縄文土器（中期）・土師器・須恵器
79	西ノ沢	41―39	遺物包含地	縄文土器（中期）・石棒
80	大西目Ⅰ	41―40	遺物包含地	縄文土器
81	内山	41―41	遺物包含地	縄文土器（中期）・土師器・須恵器
82	大西目Ⅱ	41―42	遺物包含地	土師器・須恵器・銭貨
83	堅田	41―43	遺物包含地	須恵器
84	堅田沢	41―45	遺物包含地	縄文土器
85	大森	41―46	遺物包含地	土師器・須恵器
86	大森橋	41―47	遺物包含地	縄文土器（晩期）・土師器・須恵器
87	小深田	41―52	遺物包含地	土師器・須恵器
88	湯ノ沢	41―55	遺物包含地	土師器・須恵器
89	中の目Ⅱ	41―56	遺物包含地	土師器・須恵器
90	館ノ後	41―57	遺物包含地	縄文土器
91	前ヶ沢	41―58	遺物包含地	土師器・須恵器
92	寺ヶ沢Ⅱ	41―59	遺物包含地	羽口・鉄滓・須恵器
93	下山	41―61	番所	唐船番所跡

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

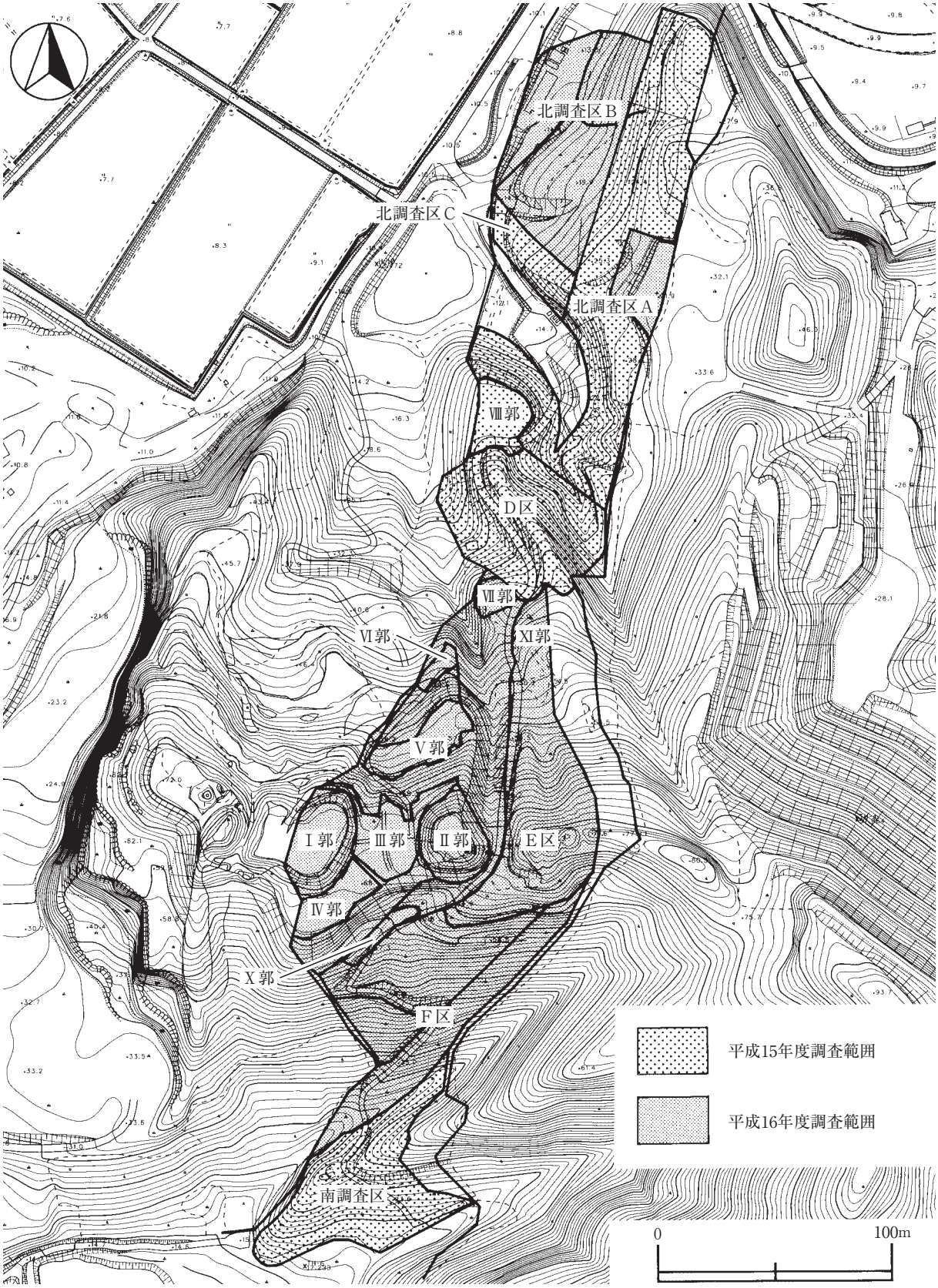
岩倉館跡は、本荘地区東部にある中世城館である。出羽丘陵鬼倉山山地の西側に広がる中央丘陵地から西に延びる標高80m前後の急峻な尾根西端部に立地している。尾根上及びその周辺を占地しており、自然地形を巧みに利用し、非常に見晴らしの良い高台に造られた、防御を主体とした山城である。頂上からは眼下に本荘平野を一望できる。

また、岩倉館跡は古くから中世城館として周知されている遺跡であり、『秋田県の中世城館』によると「昭和50年頃から、採石場として、現在にいたるまで、採石が続けられている。したがって、館全体の約三分の二は削り取られ、現在は、真にその一部を残すだけとなり、往時を偲ぶことは不可能。由利郡郡村誌に「東西二町、南北二町三拾間、回字形をなし、土手敷猶存す」とあり、また、「ふるさとの歴史」（南内越郷土史研究サークル）に「郭上に馬蹄形の土塁あり、その広さは約0.3ha 程。中腹に岩倉山岩倉寺跡あり。礫石並に庭園と思われる庭石等、数ヶ存在する。東方に井戸あり、直径約1.5m程。湿地のため、溜め井と思われる。南方中腹に湧き水あり。常時之を使用していたものと考えられる」とある。岩倉下、居屋敷、長者屋敷、前田、鳥岡等の小字がある。」と記載されている。

確認調査時に、尾根を平坦に造成した郭、郭と郭の間を仕切る空堀、郭下の斜面に削り出された腰郭、郭縁辺部に巡る土塁・段状遺構などが現地形で明確に確認されている。

岩倉館跡の範囲は、南北（長軸方向）580m、東西（短軸方向）300mと推定される。このうち、工事区域にかかり調査対象となった区域は、遺跡のほぼ中央部を南北に縦貫しており広範囲にわたる。このうち館跡の範囲（縄張り）は、およそ－11ラインから90ラインの間であり、90ライン以北は館跡の外にあたる。

調査箇所は調査工程の関係で、便宜上Ⅰ郭～Ⅹ郭、北調査区Ａ・Ｂ・Ｃ、Ｄ～Ｆ区、南調査区に分けた（第４図）。なお、１年目は北調査区Ａ・Ｃ、Ｄ区、南調査区、Ⅷ郭を行い、２年目はⅠ～Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ郭、北調査区Ｂと同Ａの一部、Ｅ・Ｆ区の調査を行った。北調査区は東側（Ａ）から西側（Ｂ）に標高を下げるが、東・西側とも平坦な地形である。また北調査区Ｃは沢地の斜面にある。一方館内には、大小の郭が10箇所あり、標高の低い北からⅧ郭→段状遺構が検出されたＤ区→Ⅶ郭・Ⅸ郭へ、さらに竪堀をはさんでⅦ郭の南西上方にⅥ郭がある。ここから斜面をのぼるとⅤ郭にでる。さらにⅤ郭の南側の急な斜面をのぼっていくと、Ⅲ郭に至る。このⅢ郭の西にⅠ郭、東にⅡ郭が位置する台地があり、南側にはわずかな標高を下げてⅣ郭がある。そしてⅣ郭南東の急斜面を下るとⅩ郭である。またⅡ郭の東側の尾根上には３条の堀切が南北に並行してほぼ等間隔に掘られている。空堀はⅡ郭の急斜面に数本掘られている。南調査区は館跡の中心部から約130mほど南に下ったところに位置する南西―北東を向く尾根部分である。


北調査区Ｂ
北調査区Ｃ
北調査区Ａ
Ⅷ郭
Ｄ区
Ⅶ郭
Ⅵ郭
Ⅺ郭
Ⅴ郭
Ⅰ郭
Ⅲ郭
Ⅱ郭
Ｅ区
Ⅳ郭
Ⅹ郭
Ｆ区
南調査区
平成15年度調査範囲
平成16年度調査範囲
0
100m

第４図　調査区割り図

第２節　調査の方法

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。具体的には、日本海沿岸東北自動車道建設工事の道路中心杭（ＳＴＡ306＋00）を原点とし、国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線とした。これに直交するラインを東西基線とし、この東西南北に沿って４×４ｍの方眼杭を打設した。原点にＭＡ50の呼称を付し、東西方向には、４ｍ毎に「…ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ…」という２文字のアルファベットを、南北方向には、同様に「…48・49・50・51・52…」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。

調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的に縮尺１／20で作図した。また、堀跡や竪穴状遺構、溝跡などは平面実測の迅速化と省力化を図るため、トータルステーションによる測量を行い、断面図は縮尺１／20、１／40で作成した。また、遺構配置図作成のため、ほぼすべての遺構および調査範囲もトータルステーションにより測量した。検出遺構の写真撮影は、35mm のモノクロ、カラーリバーサル、ネガカラー、デジタルカメラを使用した。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成15年度には７月１日から同年11月28日まで、平成16年度には５月11日から10月29日まで実施した。以下、調査日誌を基に調査の経過を記す。

平成15年度調査

【第１週】７月１日～７月４日

７月１日、北内越公民館で作業員説明会を行う。発掘機材・資材を搬入し、調査区の環境整備作業（草刈り・雑木撤去）を開始し、並行して重機による表土除去を行った。

【第２週】７月７日～７月11日

調査区北部南側を重機による表土除去を行い、並行して北部西斜面にベルトコンベアーを設置、環境整備作業（草刈り、土嚢、通路階段設置他）、北側北部斜面の粗掘りを行った。危険箇所へ保護柵、看板設置などを行った。

【第３週】７月14日～７月18日

調査区北側北部の粗掘り、鋤簾がけを行い、並行して北側北部・西部の精査を進めた。結果、竪穴状遺構１基と多数の柱穴を検出した。実測のため４ｍグリッド地点にコノエ鋲を設置した。14日社会保険労務士の庄司氏、安全管理指導員の窪目氏が来跡。17日午後、作業員の健康診断を実施した。

【第４週】７月22日～７月25日

調査区北部・西部の遺構精査と排土置場東側斜面、沢部を重機による表土除去を行った。沢地南北にベルトを設定し両側を掘り進めた。北調査区Ｃから土坑状の遺構（SX15）を検出、遺構内から10～30cm 前後の礫が集中して出土した。23日で北側北部の表土除去作業を終了した。同日午後より８月からの作業員追加の選考会を実施（由利本荘文化会館）。北調査区Ａで溝跡（SD25）を検出。沢部堆積土は暗褐色土で、縄文土器片少量出土。北西端斜面から、五輪塔の頭部１基出土、ほかに柱穴様ピット６基検出。24日由利本荘市教育委員会の長谷川氏、佐々木氏が来跡。

【第５週】７月28日～８月１日

調査区北側北部平坦部及び西斜面の精査を進めた。溝跡（SD25）と南側の溝跡の平面実測、精査を行う。南側斜面の表土除去。29日８月から採用の新作業員へ説明会。（株）シン技術コンサル来跡、調査区北・中央のグリッド杭打設開始。８月１日現在、新たに25名の作業員が加わる。由利本荘市文化財保護協会の鎌田氏、今野氏が視察及び資料提供のため来跡。

【第６週】８月４日～８月８日

調査区北側北部及び西斜面の精査を行った。土坑、柱穴様ピットなどを検出。北調査区Ａから土器埋設遺構（SR100）を検出。

【第７週】８月18日～８月22日

調査区北側中央部・南部の調査（基本土層・柱穴群・斜面遺構の精査）、北側沢部の表土除去を開始。北調査区Ａから溝跡（SD150・162・163）３条、土坑（SK147・148）２基をそれぞれ検出。21日由利本荘市教育委員会長谷川氏ほか26名が視察、見学のため来跡。

【第８週】８月25日～８月29日

25日より集中豪雨のため、作業中止。調査区内は泥状のため、草刈り、土留め用土嚢積み、機材整理を行った。26日午後、地質調査のため秋田大学の石山助教授ほか２名来跡。29日埋蔵文化財センター職員による発掘技術研修会を岩倉館跡・樋ノ口遺跡で開催した。

【第９週】９月１日～９月５日

調査区南側平坦部、西側斜面の精査を行う。北調査区Ａから炭窯（SW215）検出、精査。南側平坦部（郭＝曲輪）の精査。ベルトコンベアー移動に伴う作業。道路公団の出口氏、文化財保護室の武藤氏が来跡。

【第10週】９月８日～９月12日

検出した遺構（炭窯 SW215）の精査・実測、西側斜面の粗掘り、並行して調査区南側の草刈り、南側平坦部の表土除去など行う。Ⅷ郭から焼土遺構（SN217・218・219）を検出。９日公団側と条件整備について協議。安全管理指導員が巡回し安全指導を行った。

【第11週】９月15日～９月19日

調査区南側平坦部の遺構の精査、東側斜面の粗掘りと遺構確認作業を行う。段上遺構を確認するための作業、ベルトコンベアー移動に伴う作業を進める。（株）シン技術コンサルによるグリッド杭打設。19日大雨により調査区での作業は中止。

【第12週】９月22日～９月26日

南側平坦部、斜面の整備作業（草刈り・雑木寄せ）及び段上遺構の遺構確認作業を進めた。平坦部で竪穴状遺構を１基検出。

【第13週】９月29日～10月３日

Ⅷ郭で検出した竪穴状遺構（SKI238・239）、土坑（SK231・242）の精査と実測を行った。さらに竪穴状遺構（SKI260）を新たに検出。段上遺構の写真撮影を実施。南側斜面は草木・枝の伐採作業、トレンチ設定・掘削を進めた。（株）シン技術コンサルによる南側平坦部のグリッド杭打設。ABS 秋田放送局の町田氏ほか４名が遺跡を撮影のため来跡。

【第14週】10月６日～10月10日

段上遺構の上部掘り下げ作業。竪穴状遺構（SKI240・260・270）の精査。D区から焼土遺構（SN261）を検出。南西斜面の精査開始、段上遺構内頂部のテラス状遺構を精査し遺構と遺跡を遠景から撮影する。鹿児島県埋蔵文化財センターの石川氏ほか２名が来跡。

【第15週】10月13日～10月17日

南調査区のトレンチを掘り下げ土層を精査。Ⅷ郭を調査。竪穴状遺構（SKI240・260・270）の精査は終了。南西斜面の上段部分にテラス状遺構を確認した。

【第16週】10月20日～10月24日

南西斜面の谷部に３つの段を確認。Ⅷ郭から竪穴状遺構（SKI280）、柱穴を検出。

【第17週】10月27日～10月31日

南側平坦部の調査（遺構断面図作成・ベルトコンベアー移動、貼り床を除去して柱穴３基検出）、尾根部段上遺構内（断面を精査）、沢部段上遺構（中央平坦部を精査、溝跡検出）の調査、南側調査区トレンチ土層を写真撮影した。

【第18週】11月４日～11月７日

南側平坦部の調査（柱穴様ピット17基検出）。尾根部段上遺構内の溝跡を精査。沢部段上遺構の調査。南調査区トレンチ断面の土層を実測。船木文化財保護室長来跡。（株）西部建設が樋ノ口遺跡の排土を運搬。

【第19週】11月10日～11月14日

南側平坦部の調査。沢部掘り下げ。調査区中軸線の土層ベルトを写真撮影し、土層断面図を作成した。西側斜面下方に遺構は無いと判断、排土置場とした。10日（株）シン技術コンサル測量・図化作業を行う。

【第20週】11月17日～11月21日

南側平坦部と沢部段上遺構の調査、調査区中軸線の土層ベルトの土層断面図を作成。段上遺構内最上部の溝跡は、段を囲うのではなくクランク状に構築した跡が認められる。ベルトコンベアーを平坦部へ移動。埋蔵文化財センター所長・総務課長・調査課長・職員で平成16年度の調査方法について協議。

【第21週】11月25日～11月28日

調査区の遺構を精査し記録した。機材運搬と撤収のための準備作業をした。日本道路公団秋田工事事務所・西部建設、文化財保護室、埋蔵文化財センター副所長・調査課長が同席し調査の確認を行い、平成15年度の調査を終了した。

平成16年度調査

【第１週】５月11日～５月14日

５月11日、作業員説明会を行う。午後に発掘機材を搬入し、コンテナハウス周辺、調査区、移動通路・トイレ等の環境整備を行った。14日午前９時より日本道路公団秋田工事事務所・（株）西武建設代表原田氏と条件整備等の協議。Ⅰ～Ⅴ郭の環境整備作業（階段設置・草刈り・木根除去）を開始した。

【第２週】５月17日～５月21日

Ⅰ～Ⅶ郭と北調査区Ａの調査を開始した。Ⅰ～Ⅶ郭へ土層観察用トレンチを設定し掘り下げ作業を行った。水準測量及び光波測量、重機使用等について委託業者と日程協議を行い、調査区まで機材等の運搬作業が行われた。Ⅴ郭西端第１トレンチから珠洲系陶器片出土。（株）横山砕石会社の重機・砂利運搬車について協議。調査区危険箇所へ保護柵・看板を設置。

【第３週】５月24日～５月28日

Ⅰ～Ⅶ郭の雑木を撤去、粗掘り作業及び遺構確認精査を行った。排土置き場や調査工程の再検討を行い、粗掘りを進めた。Ⅳ郭の東側で土坑１基、南側で溝跡１条を検出した。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ郭第１トレンチより鉄製刀子、青磁片などが出土。Ⅴ郭西端部第３トレンチで青磁、白磁片、染付片が出土した。

【第４週】５月31日～６月４日

北調査区Ｂの調査を開始した。Ⅰ～Ⅶ郭、北調査区Ａで掘り下げと遺構確認作業を行った。また北調査区Ａ中央付近に土層観察用トレンチを設定し掘り下げ作業を行った。調査前の現況及びトレンチ

内の土層を撮影した。Ⅰ～Ⅳ郭で土坑、溝跡、柱穴様ピットなどを検出した。また、Ⅳ郭で検出した竪穴状遺構（SKI1502）の堆積土中から炭化米が多量に出土した。６月２日北調査区Ａの調査を終了した。４日埋蔵文化財センター所長が来跡し「作業の安全と事故防止」を指導した。

【第５週】６月７日～６月11日

Ⅰ～Ⅶ郭、北調査区Ｂの掘り下げ作業を進めた。遺構確認の範囲を調査区のⅦ郭（平坦部）に広げた。Ⅲ郭において、竪穴状遺構・柱穴列・土坑・井戸跡を検出、精査を開始した。須恵器系中世陶器（擂鉢）１点出土。Ⅴ郭西端第１トレンチから材（杭）を検出。７日未明から８日午後まで大雨のため、調査区での作業は中止。ヤード内で炭化米など遺物洗浄抽出作業を行う。９日Ⅰ郭平坦部の調査を広げる。 10日Ⅰ郭平坦部より青磁碗２点、銭貨１点が出土。同郭14～15日表土中より瀬戸美濃産の天目茶碗片１点出土。Ⅲ郭平坦部不明遺構（SX1720）、柱穴様ピット（SKP1721～1730）を検出、精査を行う。不明遺構（SX1720）は木根や枝、板材などが埋められており、平面形が円形で水も湧き出たことから井戸跡と推定（後にSE1720に変更）。

【第６週】６月14日～６月18日

Ⅰ～Ⅶ郭の遺構確認と精査、土層観察用トレンチの掘削作業と精査を行った。結果、土坑、溝跡、柱穴様ピットなど検出。測量・図化作業を行う。Ⅴ郭中央部と西側第３トレンチから青磁片、白磁片、染付、珠洲系陶器片が出土した。Ⅵ・Ⅶ郭西側トレンチから鉄滓出土。16日Ⅲ郭平坦部井戸跡内（SE1720）より墨書で「大霊追善供養大菩薩」と記された卒塔婆が出土した。

【第７週】６月21日～６月25日

Ⅰ～Ⅳ郭の整地層までの掘り下げ作業と北調査区Ｂで粗掘り、遺構確認作業を行った。Ⅹ郭に仮置きした排土の除去作業を行った。Ⅰ～Ⅳ郭平担面は現段階で３段５面を確認、整地層（旧地表面）までの深さは約３ｍ。Ⅵ・Ⅶ郭で検出した遺構の精査。21日（月）職員会のため現場休み。22日（火）台風６号接近に伴い、作業は中止。ヤード内で遺物洗浄作業に切り替える。遺物コンテナを中央調査課へトラックで輸送。６月までの検出遺構数はSKI３基、SK７基、SN３基、SQ２基、SD10条、SX５基、SKP327基。遺物はコンテナ換算で約３箱。

【第８週】６月28日～７月２日

北調査区Ｂの遺構確認精査を行い、掘立柱建物跡と考えられる多数の柱穴群と溝跡を確認した。Ⅴ郭では竪穴状遺構と溝跡など、Ⅰ～Ⅳ郭北側斜面下周辺に遺構が集中していることを確認。その斜面には館構築の際の盛土と思われる黄褐色土が約３ｍほど堆積し、Ⅰ～Ⅳ郭からの流れ込みも含まれると推定される陶器類が散発的に出土した。28日（月）午前測量委託業者（（株）シン技術コンサル）と協議。30日、Ⅰ～Ⅳ郭のグリッド坑打設作業開始。

【第９週】７月５日～７月９日

５日より、各調査区のグリッド坑打設開始。Ⅰ～Ⅳ郭第３トレンチ、Ⅶ郭下層部の掘り下げ作業開

始。北調査区Ｂで遺構確認作業を進めた。Ｖ郭の平坦部斜面で、すそを巡るコの字上の溝跡を検出。Ｖ郭平坦部中央付近で陶器片、鉄製品（馬具・刀子）、銭貨（洪武通宝・永楽通宝）が出土。北調査区Ｂで土坑２基検出。また北調査区Ｂ西側でトレンチ調査及び地形を把握するための環境整備作業（草刈り・土嚢積み）を行った。

【第10週】７月12日～７月16日

Ⅰ～Ⅶ郭で検出した竪穴状遺構、井戸跡、土坑、溝跡等の精査を行った。今週は天候不順が続いたため発掘作業に支障を来した。13日と14日は激しい降雨があり調査区での作業を中止した。15日午前中、作業員の健康診断（由利本荘市職業訓練センター）。同日調査区南部中央・北部の空中写真撮影を実施した。

【第11週】７月20日～７月23日

Ⅰ～Ⅳ郭で検出した竪穴状遺構、井戸跡、土坑、溝跡の精査を進めた。またⅥ郭での遺構確認・精査をほぼ終了し遺構の範囲確認と地形測量を行い、概観を把握した。Ｆ区の調査を開始した。20日より激しい降雨があり作業がたびたび中断した。安全管理指導員が巡回し安全を指導した。

【第12週】７月26日～７月30日

Ⅰ～Ⅴ郭の遺構確認を行い、Ⅴ郭で新たに集石遺構２基、焼土遺構３基、土坑２基を検出し、並行して溝跡・柱穴様ピットの精査を進めた。Ⅰ～Ⅳ郭・北調査区Ｂを（株）シン技術コンサルによる測量・図化作業。30日Ⅶ郭の調査を終了した。

【第13週】８月９日～８月13日

Ⅴ郭で検出した土坑底部（下層）に、炭化米の層（約10～20cm）を確認、土坑３基（東端部）を含む複数の遺構が集中していることを確認。Ⅱ郭東端で土塁（SF1923）１条を検出。Ⅲ郭西側で溝跡（SD1816）１条を検出した。11日～13日（株）シン技術コンサルによるⅢ郭とⅣ郭の測量・図化作業。

【第14週】８月16日～８月20日

16日Ⅰ～Ⅴ郭、北調査区Ｂの遺構確認と精査、図化作業を行った。またＦ区の粗掘りと遺構確認作業を行った。17～20日は大雨のため、調査区での作業を中止した。19日午後２時から課長を交えて岩倉館跡調査員で職員会。20日未明から午前にかけて台風通過、被害状況を確認した（遺構用シート類飛散・防風ネット類破損）。

【第15週】８月23日～８月27日

北調査区Ｂの粗掘り・遺構確認作業。Ｆ区の草刈り・雑木等除去作業。北調査区Ｂは引き続き掘立柱建物跡、柱穴列、溝跡の精査。Ⅰ～Ⅳ郭は竪穴状遺構、土坑を精査。Ⅴ郭は集石遺構付近の溝跡（SD2059）、土坑をそれぞれ精査した。（株）シン技術コンサル測量・図化作業。８月27日（金）湯水

沢遺跡において埋蔵文化財センター職員による発掘技術研修会。

【第16週】８月30日～９月３日

Ⅰ～Ⅴ郭と北調査区Ｂの遺構確認と遺構精査作業を行った。また各調査区で検出した遺構の図化作業を（株）シン技術コンサルが行った。８月31日台風のため現場作業を中止した。９月１日昨日の台風で現場までの通路の一部に土砂が溜まったため、その除去作業を行った。２日県教育庁の木村教育次長、船木文化財保護室長、大野埋蔵文化財センター所長、文化財保護室職員２名が岩倉館跡視察のため来跡した。３日安全管理指導員が巡回し安全指導を行った。

【第17週】９月６日～９月10日

Ⅰ～Ⅳ郭の遺構確認と遺構精査作業。Ⅴ郭の遺構確認を行って溝跡５条、焼土遺構（SN2398・2399）２基を検出。９日Ⅴ郭の空中写真撮影を行い、10日Ⅴ郭の調査を終了した。６日～10日（株）シン技術コンサルによるⅠ～Ⅴ郭の測量・図化作業。

【第18週】９月13日～９月17日

Ⅰ～Ⅳ郭の遺構確認および遺構精査作業。(株)シン技術コンサル測量・図化作業。Ｅ区とＦ区は重機による表土除去作業と排土運搬作業を継続。台風接近に備え、安全対策と環境整備（シート看板類の補強・土留め柵・土嚢袋設置）を行い万全を期した。17日（金）県教育委員会、由利本荘市教育委員会来跡。北調査区Ｂの空中写真撮影を実施し、調査を終了した。

【第19週】９月21日～９月24日

Ｆ区の粗掘りと遺構確認作業。21日Ｅ区の粗掘りを開始し、沢地西側の遺構確認作業を行う。Ⅰ～Ⅳ郭の遺構確認と精査。24日Ⅰ郭の空中写真撮影。同日Ｆ区の調査を終了した（遺構・遺物は検出されなかった)。

【第20週】９月27日～10月１日

Ⅳ郭の遺構確認および遺構精査作業。（株）シン技術コンサル測量・図化作業。Ｅ区の尾根部分に土層観察用トレンチを東西に１本設定して調査を行い、空掘３条（SD3501～SD3503）を検出した。30日国立歴史民俗博物館千田嘉博助教授来跡。10月１日Ⅳ郭の空中写真撮影。同日Ⅰ～Ⅳ郭の調査を終了した。

【第21週】10月４日～10月８日

Ⅸ郭の調査を開始し、粗掘りと遺構確認作業を行う。Ｅ区の遺構確認と精査。（株）シン技術コンサル測量・図化作業。８日午後Ⅸ郭・Ｅ区を中心に北側上空から空中写真撮影を実施した。Ⅸ郭で焼土遺構と柱穴様ピット（SN２基、SKP20基)、Ｅ区で溝跡と炭窯（SD３条、SW１基）を検出した。

【第22週】10月12日～10月15日

Ⅸ郭の遺構確認作業を行い、焼土遺構１基を確認した。並行して検出した土坑・柱穴様ピットの精査を進めた。Ｅ区の重機用通路の地山面で空堀（SD3507～SD3509）を検出した。また竪堀（SD6538）を検出した。15日Ｘ郭の調査を開始した。

【第23週】10月18日～10月22日

Ⅸ郭の遺構を精査。Ｘ郭の粗掘りと遺構確認作業と遺構精査。（株）シン技術コンサルで丘陵の南部尾根から沢にかけて遺構・地形の測量・図化作業を行った。Ⅸ郭で掘立柱建物跡、竪穴状遺構を検出した。22日調査区丘陵南部から北部の空中写真撮影を実施した。発掘作業員へ、離職に伴う社会保険等の手続き説明会を実施。安全管理指導員の佐々木氏、鈴木氏より機材搬出に伴う安全指導。

【第24週】10月25日～10月29日

Ⅸ郭・Ｘ郭・Ｅ区の遺構の図化ほか最終確認作業を実施。並行して機材撤収のための準備作業をした。28日午前Ⅸ郭・Ｘ郭・Ｅ区の空中写真撮影を実施。同日午後文化財保護室の吉川文化財主事立ち会いのもと、日本道路公団秋田工事事務所に調査終了の確認と現場引き渡しを行い、翌29日全ての調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、発掘調査終了後に秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行った。

出土した遺物については、洗浄・注記・接合・器種の分類作業を行い、実測が必要な遺物を選択した。この後、実測・拓本・トレース・写真撮影などの作業を行った。また、これらの作業と並行して、出土した木材、炭化物などのサンプルを選択し、科学分析や木製品と鉄製品の保存処理を委託した。

検出した遺構については、発掘調査現場で記録した実測図をもとに第２原図を作成した。なお、平成16年度の遺構平面図・遺構配置図等は実測委託したトータルステーションの実測データと、調査員が作成した手取りによる平面図の合成を行い、各調査箇所ごとに遺構の平面配置等を検討した上で第２原図を作成し、トレースをして挿図を作成した。トレースは挿図の大きさによって適宜縮尺を考慮して行った。報告書の作成に当たっては、各調査箇所ごとに遺構番号を付した関係から、各箇所ごとにまとめて掲載した。

第４章　調査の記録

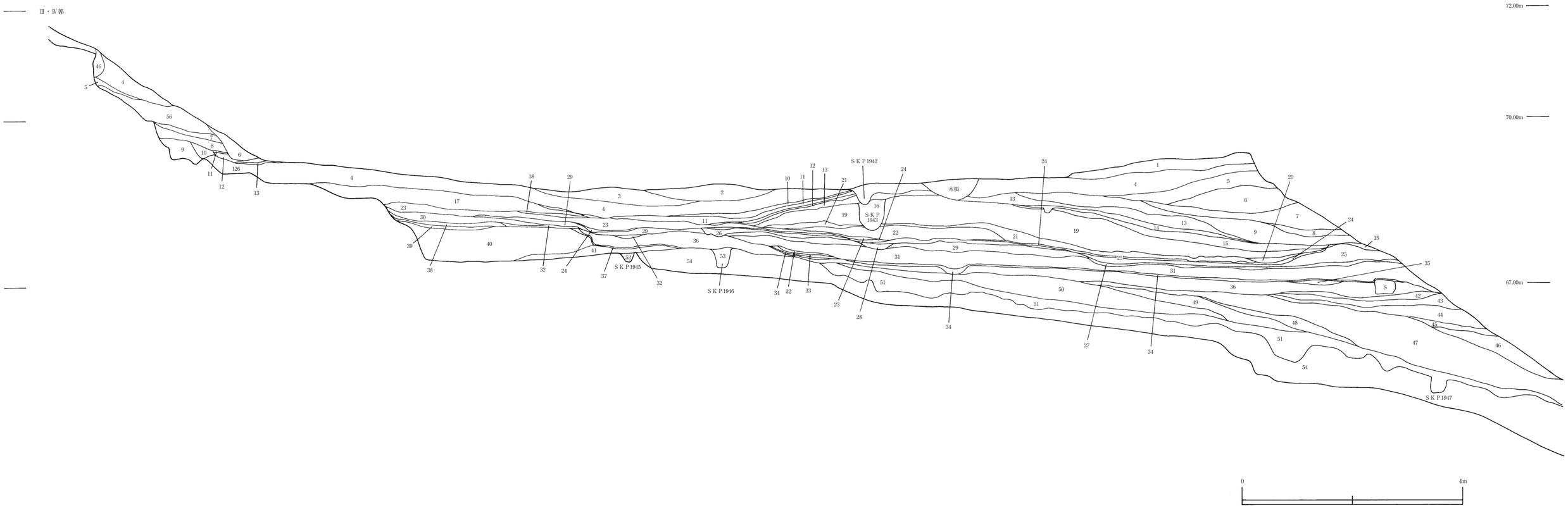
第１節　基本層序

遺構の基本層序は、Ⅰ郭についてはＭＴ37グリッド杭とＭＲ35グリッド杭を結ぶラインで確認した。Ⅱ郭についてはＭＧ36グリッド杭とＭＥ36グリッド杭を結ぶラインで確認した。Ⅲ・Ⅳ郭については確認調査時のトレンチ（ＭＬ30グリッドからＭＰ33グリッド）を利用し確認した。Ⅴ郭についてはＭＩ45グリッドからＭＨ44グリッドを通るラインで確認した。Ⅵ郭についてはＭＫ48グリッドからＭＦ54グリッドを通るラインで確認した。Ⅶ郭についてはＬＴ59グリッド杭からＬＴ62グリッド杭を通るラインで確認した。Ⅷ郭についてはＭＢ80グリッド杭とＬＳ80グリッド杭を結ぶラインで確認した。Ⅸ郭についてはＬＰ53グリッド杭とＬＲ57グリッド杭を結ぶラインとＬＮ48グリッド杭とＬＱ51グリッド杭で結ぶラインで確認した。北調査区ＡについてはＬＥ95グリッド杭からＬＤ95杭を結ぶラインで確認した。北調査区ＢについてはＬＱ111グリッド杭とＬＬ120グリッド杭を結ぶラインとＬＬ111グリッド杭とＬＨ109杭を結ぶラインで確認した。各区での層序は以下の通りである（第５～９図）

【Ⅰ　　郭】　１層：黒褐色土（10YR2/3）　２層：暗褐色土（10YR3/3）
３層：にぶい黄橙色土（10Y6/4）

【Ⅱ　　郭】　１層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）　２層：砂利層、黄褐色土（10YR5/6）

【Ⅲ郭・Ⅳ】　１層：表土、黒褐色土（10YR3/2）　２層：黄褐色土（10YR5/6）
３層：黄褐色土（10YR5/6）　４層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）
５層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）　６層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）
７層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）　８層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
９層：炭、黒色土（10YR1.7/1）　10層：オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
11層：炭、黒色（2.5YR1.7/1）　12層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）
13層：褐色土（10YR4/4）　14層：炭、黒色（7.5YR1.7/1）
15層：にぶい橙色土（2.5YR6/3）　16層：明黄褐色土（10YR6/8）
17層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　18層：明黄褐色土（10YR6/8）
19層：明黄褐色土（10YR6/8）　20層：黄褐色土（2.5Y5/3）
21層：炭、黒色（7.5YR1.7/1）　22層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
23層：黄褐色土（2.5Y5/3）　24層：炭、黒色（7.5YR1.7/1）
25層：褐色土（10YR4/4）　26層：にぶい黄色土（2.5Y6/3）
27層：にぶい黄色土（2.5Y5/3）　28層：炭、黒色（7.5YR1.7/1）
29層：にぶい黄色土（2.5Y6/4）　30層：炭、黒色（7.5YR1.7/1）
31層：黄褐色土（2.5YR5/3）　32層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）



第５図　調査区の基本層位（１）

33層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）　34層：黄褐色土（10YR5/6）
35層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　36層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
37層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　38層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
39層：にぶい黄褐色土（2.5Y6/4）　40層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
41層：旧表土、黒褐色土（10YR3/2）　42層：旧漸移層、にぶい黄褐色土（10YR5/4）
43層：にぶい黄褐色（10YR4/3）　44層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
45層：黄褐色（2.5Y6/4）　46層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
47層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　48層：黄褐色（2.5Y6/4）
49層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　50層：黄褐色（2.5Y5/3）
51層：黒褐色（10YR3/2）　52層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）
53層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）　54層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）

【Ⅴ　　郭】　１層：褐色土（10YR4/6）　２層：褐色土（10YR4/4）
３層：褐色土（10YR4/4）　４層：灰黄褐色土（10YR4/2）
５層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　６層：暗褐色土（10YR3/3）

【Ⅵ　　郭】　１層：黒褐色土（2.5Y3/2）　２層：明黄褐色土（2.5Y7/6）
３層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）　４層：褐色土（10Y4/4）
５層：褐色土（10YR4/4）　６層：黄褐色土（10YR5/6）
７層：黄褐色土（10YR5/6）

【Ⅶ　　郭】　１層：暗褐色土（10YR3/4）　２層：褐色土（10YR4/4）
３層：黄褐色土（10YR5/6）　４層：黄褐色土（10YR5/6）
５層：黄褐色土（10YR5/6）　６層：黄褐色土（10YR5/6）
７層：黄褐色土（10YR5/6）　８層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）
９層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）　10層：褐色土（10YR4/4）
11層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）　12層：黄褐色（10YR5/6）
13層：暗灰黄色土（2.5Y4/2）　14層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）

【Ⅷ　　郭】　１層：褐色土（10YR4/4）　２層：褐色土（10YR4/6）
３層：暗褐色土（10YR3/3）　４層：褐色土（10YR4/4）
５層：褐色土（10YR4/6）

【Ⅸ　郭　①】　１層：暗褐色（10YR3/3）　２層：褐色土（10YR4/4）
３層：褐色土（10YR3/3）　４層：褐色土（10YR4/6）
５層：黄褐色土（10YR4/6）　６層：黄褐色土（10YR5/6）
７層：褐色土（10YR4/6）

【Ⅸ　郭　②】　１層：褐色土（10YR4/4）　２層：暗褐色土（10YR3/4）
３層：黄褐色土（10YR4/3）　４層：暗褐色土（10YR3/4）
５層：黄褐色土（10YR5/6）　６層：にぶい黄橙色土（10YR6/3）
７層：明黄褐色土（10YR6/8）

【Ｄ区尾根部】　１層：暗褐色土（10YR3/3）　２層：褐色（10YR4/4）
３層：明黄褐色土（10YR5/6）　４層：褐色土（10YR4/4）
５層：暗褐色土（10YR3/4）　６ａ層：褐色土（10YR4/6）
６ｂ層：黄褐色（10YR5/6）

【Ｄ区　沢部】　１層：暗褐色土（10YR3/3）　２層：褐色土（10YR4/6）
３層：褐色土（10YR4/4）　４層：黄褐色土（10YR5/6）
５層：褐色土（10YR4/6）　６層：褐色土（10YR4/6）
７層：黄褐色土（10YR5/6）　８層：褐色土（10YR4/4）
９層：黄褐色土（10YR5/8）　10層：褐色土（10YR4/6）
11層：黄褐色土（10YR5/6）

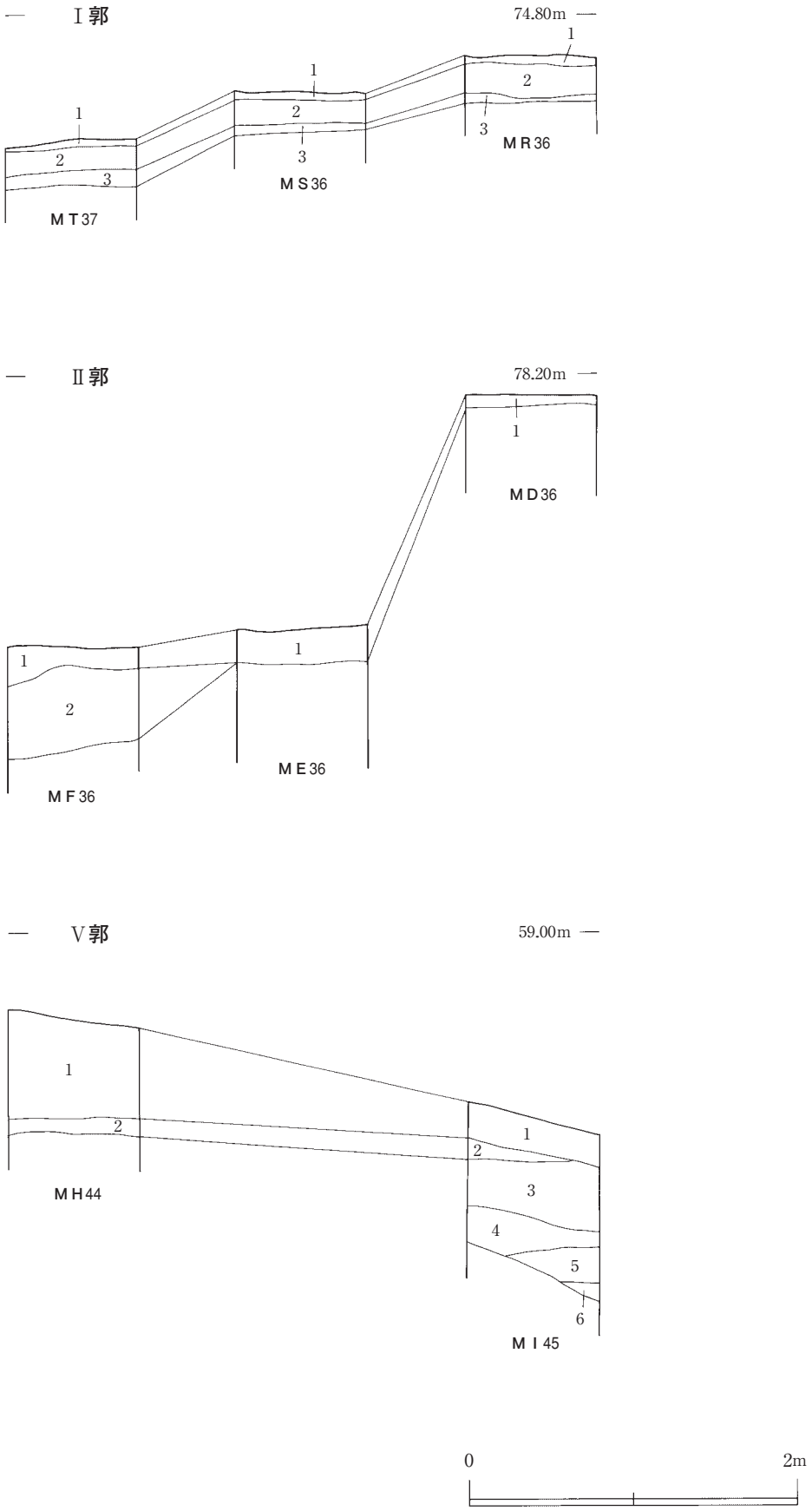
【北調査区Ａ】　１層：暗褐色土（10YR3/4）　２層：褐色土（10YR4/4）
３層：褐色土（10YR4/3）　４層：にぶい黄褐色土（10YR5/3）

【北調査区Ｂ（Ｉ区）】
１層：暗褐色土（10YR3/4）　２層：明黄褐色土（10YR7/6）

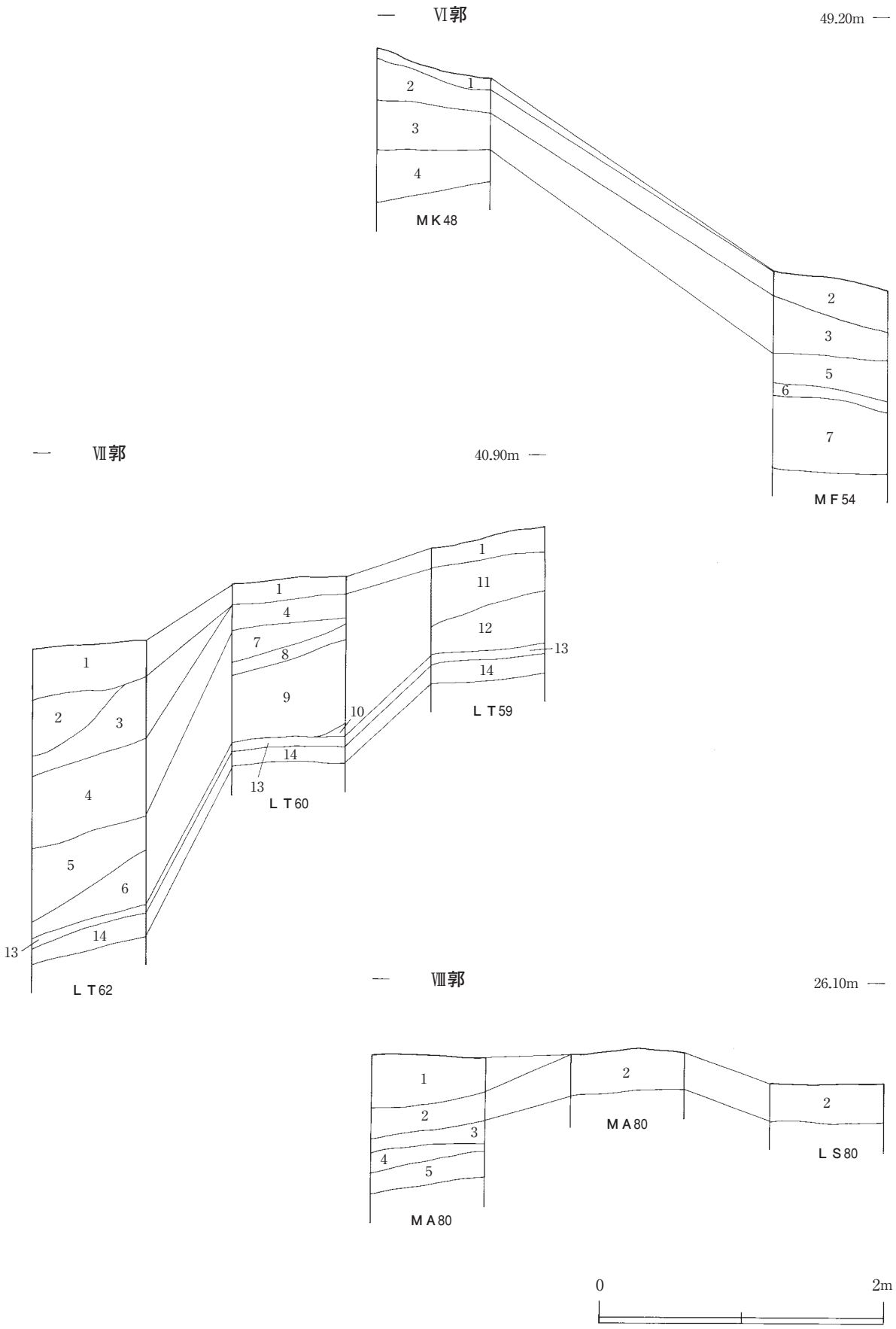
【北調査区Ｂ（Ｊ区）】
１層：暗褐色土（10YR3/4）　２層：明黄褐色土（10YR6/8）
３層：黄褐色土（10YR5/6）　４層：にぶい黄橙色土（10YR7/4）
５層：にぶい黄橙色土（10YR5/4）　６層：にぶい黄褐色土（10YR7/3）

【北調査区Ｃ】　１層：暗褐色土（10YR3/3）　２層：暗褐色土（10YR3/4）
３層：暗褐色土（10YR3/4）　４層：褐色土（10YR4/4）
５層：褐色土（10YR4/6）

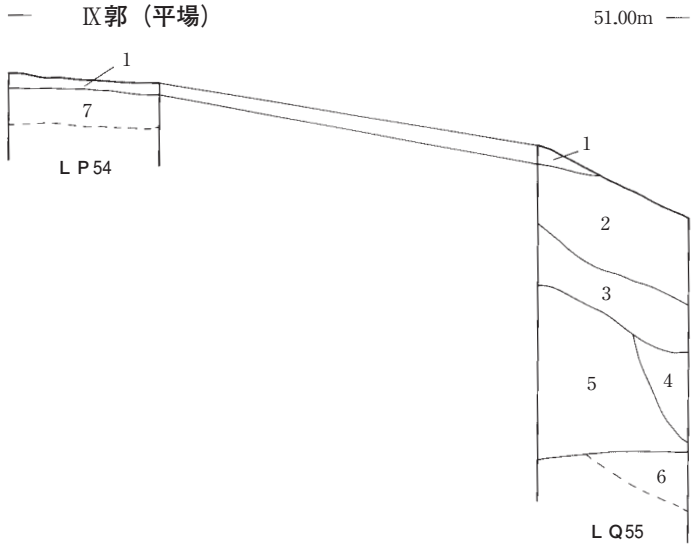
＊土層観察ベルト崩落のためＤ区・北調査区Ｃの土層図なし

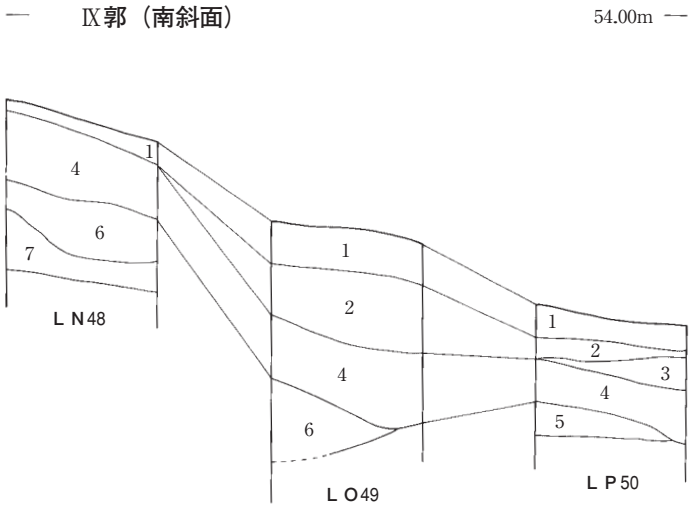


第６図　調査区の基本層位（２）

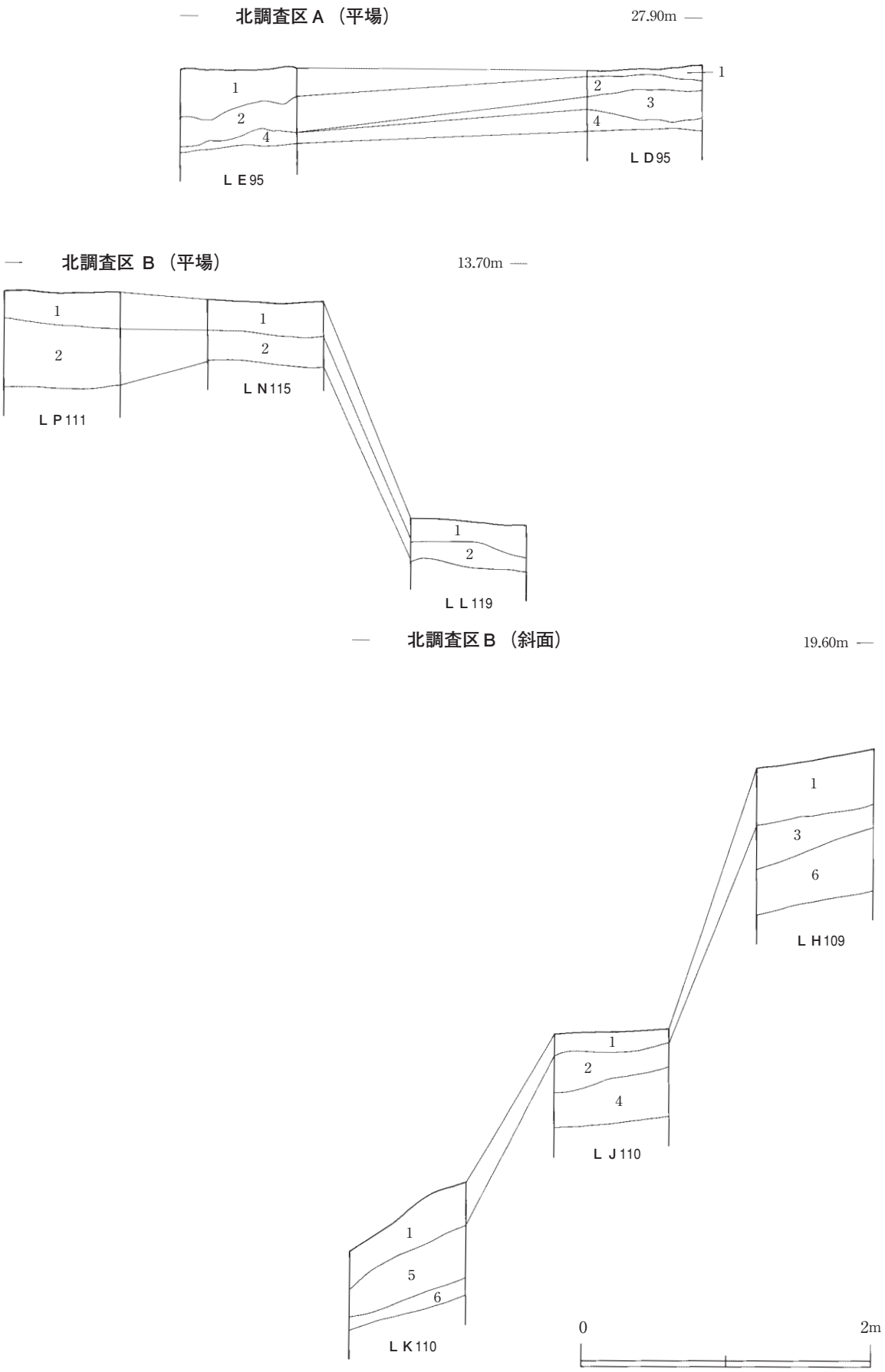


第７図　調査区の基本層位（３）





第８図　調査区の基本層位（４）



第９図　調査区の基本層位（５）

第２節　検出遺構と遺物

発掘調査の結果、岩倉館跡で検出した遺構は、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡、空掘、土塁など総数3,351遺構である。また、出土した遺物は、中世陶磁器・木製品・金属製品・石製品などが整理用コンテナで約114箱分である。各調査箇所で検出した遺構の内訳は以下の通りである。

【Ⅰ　郭】
掘立柱建物跡・・・・・・３棟　竪穴状遺構・・・・・・４基
土坑・・・・・・・・・・・30基　溝跡・・・・・・・・・・６条
柱穴様ピット・・・・・ 295基

【Ⅱ　郭】
掘立柱建物跡・・・・・・３棟　土坑・・・・・・・・・・２基
焼土遺構・・・・・・・・・３基　溝跡・・・・・・・・・・１条
土塁跡・・・・・・・・・・１基　柱穴様ピット・・・・・９基

【Ⅲ　郭】
竪穴状遺構・・・・・・・11基　井戸跡・・・・・・・・・３基
土坑・・・・・・・・・・・４基　溝跡・・・・・・・・・・５条
柱穴様ピット・・・・・ 354基

【Ⅳ　郭】
竪穴状遺構・・・・・・・22基　土坑・・・・・・・・・・６基
焼土遺構・・・・・・・・・３基　集石遺構・・・・・・・９基
溝跡・・・・・・・・・・・５条　その他の遺構・・・・・４基
柱穴様ピット・・・・ 1,039基

【Ⅴ　郭】
掘立柱建物跡・・・・・・２棟　竪穴状遺構・・・・・・８基
土坑・・・・・・・・・・・14基　焼土遺構・・・・・・・８基
集石遺構・・・・・・・・・３基　溝跡・・・・・・・・・・21条
柱穴様ピット・・・・・ 208基

【Ⅵ　郭】
掘立柱建物跡・・・・・・１棟　竪穴状遺構・・・・・・４基
土坑・・・・・・・・・・・３基　焼土遺構・・・・・・・１基
柱穴様ピット・・・・・ 108基

【Ⅶ　郭】
溝跡・・・・・・・・・・・３条　柱穴様ピット・・・・・64基

【Ⅷ　郭】
掘立柱建物跡・・・・・・１棟　竪穴状遺構・・・・・・６基
土坑・・・・・・・・・・・４基　焼土遺構・・・・・・・８基
溝跡・・・・・・・・・・・３条　柱穴様ピット・・・・ 182基

【Ⅸ　　郭】　掘立柱建物跡・・・・・・５棟　竪穴状遺構・・・・・・２基
焼土遺構・・・・・・・・３基　柱穴様ピット・・・・・39基

【Ⅹ　　郭】　竪穴状遺構・・・・・・・１基　土坑・・・・・・・・・・１基
焼土遺構・・・・・・・・・１基　溝跡・・・・・・・・・・４条
柱穴様ピット・・・・・・５基

【Ｄ　　区】　土坑・・・・・・・・・・・10基　焼土遺構・・・・・・・６基
溝跡・・・・・・・・・・・５条　炭窯・・・・・・・・・・１基
段状遺構・・・・・・・・・１基　柱穴様ピット・・・・・３基

【Ｅ　　区】　竪穴状遺構・・・・・・・８基　溝跡・空堀・・・・・・10条
土塁跡・・・・・・・・・・１基　炭窯・・・・・・・・・・１基
柱穴様ピット・・・・・・８基

【北調査区Ａ】　土坑・・・・・・・・・・・11基　土器埋没遺構・・・・・１基
焼土遺構・・・・・・・・・１基　溝跡・・・・・・・・・・７条
炭窯・・・・・・・・・・・１基　柱穴様ピット・・・・ 180基

【北調査区Ｂ】　掘立柱建物跡・・・・・・７棟　柱列跡・・・・・・・・・５条
竪穴状遺構・・・・・・・５基　土坑・・・・・・・・・・19基
焼土遺構・・・・・・・・・１基　溝跡・・・・・・・・・・13条
柱穴様ピット・・・・・ 472基

【北調査区Ｃ】　土坑・・・・・・・・・・・３基　その他の遺構・・・・・１基
柱穴様ピット・・・・・・35基

【南 調 査 区】　通路跡・・・・・・・・・・１条

１　Ⅰ郭検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ6002（第11図）　ⅠかⅡ期

ＭＲ36、ＭＳ35・36、ＭＴ35グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ6337・6357と重複し、本遺構が最も古い。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ４）3.73m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ２）3.36mである。柱掘形は径0.38～0.69mの隅丸方形・円形を呈し、深さは0.16～0.42mである。堆積土は暗褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、Ｎ―21°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6005（第12図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＲ35、ＭＴ35・36、ＭＳ35グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6327、ＳＫＰ6004・6017・6221と重複し、本遺構は、ＳＫＰ6017・6221より古く、ＳＫ6327、ＳＫＰ6004・6349より新しい。桁行４間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ４）6.64m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ５）2.10mである。柱掘形は径0.22～0.44mの楕円形・隅丸方形を呈し、深さは0.12～0.34mである。堆積土は暗褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でＮ―74°―Ｗである。遺物は砥石が１点出土した。

ＳＢ6081（第13図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＴ35・36グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）1.90m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ２）1.38mである。柱堀形は径0.18～0.33mのほぼ円形を呈し、深さは0.08～0.13mである。堆積土は暗褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でＮ―66°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

（２）竪穴状遺構

ＳＫⅠ6030（第14図、図版14―１）　Ⅲ期相当

ＭＲ34グリッドの地山面で検出した。ＳＫⅠ6050、ＳＫ6035・6341と重複し、ＳＫⅠ6050より新しく、ＳＫ6035より古い。平面形は長軸（北東―南西）2.32m×短軸（北西―南東）2.28mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.17mである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。西壁には出入口と考えられる張り出し部が付設されている。この張り出し部の大きさは長軸0.66m×短軸0.64mである。また、底面で２基の柱穴（Ｐ１・２）を検出した。各柱穴の大きさは径0.13～0.43m、深さ0.08～0.24mである。遺物は青磁１点と鉄製品１点が出土した。

ＳＫⅠ6040（第15図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＰ37、ＭＱ36・37・38、ＭＲ36・37グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6015、ＳＫＰ6027・6055・6057・6058・6078・6089・6103・6171・6175・6176・6179・6296と重複し、本遺構はＳＫＰ6296より新しく、それ以外より古い。平面形は長軸（北―南）5.82m×短軸（東―西）4.53mのほぼ方形を呈し、検出面からの深さは0.51mである。壁の傾きは垂直である。底面は平坦で壁溝が巡る。北側に途切れる部分があり、出入口と考えられる。壁から壁溝まで0.30～0.50mの平坦面がある。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。また、柱穴22基（Ｐ１～Ｐ22）、土坑２基（Ｐ23・Ｐ24）を検出した。各柱穴の大きさは径0.03～0.77mで、底面からのは深さ0.01～0.63mである。検出した柱穴のうち、Ｐ１～Ｐ11の11基は支柱穴と考えられる。土坑（Ｐ23）は長軸（東―西）0.65m×短軸（北―南）0.5mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.11mである。土坑（Ｐ24）は長軸（東―西）0.75m×短軸（北―南）0.72mのほぼ円形を呈し、床面からの深さは0.20mである。いずれも底面は平坦で、壁の傾きは急である。

ＳＫⅠ6050（第14図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＲ33・34、ＭＳ33・34グリッドの地山面で検出した。ＳＫⅠ6030・ＳＫ6006・6065・ＳＫＰ6093・6099・6101・6117・6149・6187・6188と重複し、本遺構は最も古い。平面形は長軸（東―西）5.04m

×短軸（北―南）3.70mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.45mである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。また、底面で柱穴16基（Ｐ１～Ｐ16）を検出した。各柱穴の大きさは径0.05～0.77mで、底面からの深さは0.06～0.73mである。遺物は青磁、白磁、珠洲系、越前焼、瀬戸・美濃などの陶磁器（第23図１・４、第25図17・18・21、第26図24）少量と石臼１点（第28図39）が出土した。

ＳＫＩ7269（第16図）　Ⅱ期相当

ＭＰ39・40、ＭＱ39・40グリッドの北東斜面の漸移層で検出した。平面形は長軸（北西―南東）4.66m×（北東―南西）1.75mの北東側が開口する弓状を呈し、検出面からの深さは1.7mである。遺構の堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。また、壁溝１条と柱穴２基を検出した。壁溝は長さ1.7mで、幅は0.24m、底面からの深さは0.2mである。各柱穴の大きさは径0.05～7.7mで、深さは0.18～0.29mである。遺物は青磁１点が出土した。

（３）土坑

ＳＫ6006（第17図）　Ⅳ期相当

ＭＳ33グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ6050と重複し、本遺構が新しい。南側が攪乱を受けているため残存範囲において、平面形は長軸（北西―南東）0.96m×短軸（北東―南東）0.76mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁１点と炭化米が少量出土した。

ＳＫ6007（第17図）　Ⅲ期相当

ＭＰ・ＭＱ36グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.94m×短軸（北―南）0.77mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6008（第17図）　Ⅲ期相当

ＭＱ35・36グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6025と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（北西―南東）1.06m×短軸（北東―南西）0.89mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.42mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は６層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6009（第17図）　Ⅳ期相当

ＭＳ38グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6031と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（北東―南西）1.44m×短軸（北西―南東）1.04mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.16mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6010（第17図）　Ⅳ期相当

ＭＲ38グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.43m×短軸（北―南）1.09mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層に分けられ、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6011（第18図）　ⅢかⅣ期相当

ＭＲ35・36グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6012と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）0.81ｍ×短軸（北東―南西）0.7ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.9ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は５層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6012（第18図）　Ⅳ期相当

ＭＲ36グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6011、ＳＫＰ6138と重複し、本遺構はＳＫ6011より新しく、ＳＫＰ6138より古い。西側が攪乱を受けているが、残存部分の平面形は長軸（北西―南東）0.82ｍ×短軸（北東―南西）0.64ｍの長方形を呈し、検出面からの深さは0.13ｍである。部分的に木根による攪乱を受けているが、底面はほぼ平坦で、壁の傾きは全体的に急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6014（第18図）　Ⅲ期相当

ＭＱ35グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.95ｍ×短軸（北―南）0.82ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.2ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は５層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6015（第18図）　ⅡかⅢ期

ＭＱ36・37グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ6040、ＳＫＰ6027と重複し、本遺構はＳＫＩ6040より新しく、ＳＫＰ6027より古い。平面形は長軸（北―南）0.58ｍ×短軸（東―西）0.4ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.12ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6016（第18図）　Ⅳ期相当

ＭＳ37・38グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）2.44ｍ×短軸（北東―南西）0.86ｍの hon 細長い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.34ｍである。底面は幾分凸凹しており、南から北に傾いている。壁は緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は染付（第23図８）などの陶磁器が少量出土した。

ＳＫ6017（第18図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＳ34グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ6323と重複し、本遺構はＳＫＰ6323より古い。平面形は長軸（北東―南西）0.98ｍ×短軸（北西―南東）0.84ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.18ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6018（第18図）　Ⅳ期相当

ＭＴ・ＮＡ31グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）2.25ｍ×短軸（北―南）0.86ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.08ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は青磁が１点出土した。

ＳＫ6019（第18図）　Ⅳ期

ＭＳ34グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.78ｍ×短軸（東―西）0.55ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.05ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は

１層で、自然堆積である。遺物は染付が１点出土した。

ＳＫ6024（第19図）　Ⅳ期相当

ＭＲ37・38グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.52m×短軸（北―南）1.32mの円形を呈し、検出面からの深さは0.3mである。底面は東側が一段低くなっており、壁の傾きはやや急である。検出面から深さ約0.18mに21個の礫が配されていた。堆積土は１層である。遺物は鉄製品１点と洪武通宝１点（第27図31）が出土した。

ＳＫ6025（第17図）　Ⅱ期相当

ＭＱ36グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6008と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北―南）0.52m×短軸（東―西）0.26mの楕円形を呈するものと推定される。検出面からの深さは0.3mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6029（第19図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＳ37グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ6180と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）1.9m×短軸（北東―南西）0.78mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器10点と湯口鉄塊１点（第26図28）が出土した。

ＳＫ6031（第17図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＳ38グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6009と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.5m×短軸（北西―南東）0.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.34mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6035（第19図）　Ⅳ期相当

ＭＲ34グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ6030と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（北西―南東）0.52m×短軸（北東―南西）0.52mの方形を呈し、検出面からの深さは0.51mである。底面はやや丸みを帯びており、壁の傾きは急である。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁が２点出土した。

ＳＫ6052（第19図）　Ⅳ期相当

ＭＲ36グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.54m×短軸（北西―南東）0.50mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.13mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6065（第19図）　Ⅳ期相当

ＭＳ34グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.64m×短軸（北西―南東）0.56mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.1mである。底面は平坦で、壁の傾き緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6240（第19図）　Ⅰ期相当

ＭＱ33・34グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ6399と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）0.66m×短軸（北東―南西）0.62mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.85mである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6245（第19図）　ⅡかⅢ期相当

ＭＳ・ＭＴ31グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.13ｍ×短軸（北西―南東）1.06ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.25ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは東側がやや外側に開き、西側は垂直である。堆積土は６層に分けられた。遺物は青磁４点、白磁１点、珠洲系陶器４点（第24図10～13）などの陶磁器と鉄製品１点が出土した。

ＳＫ6260（第19図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＴ36グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ6284と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（東―西）0.57ｍ×短軸（北―南）0.52ｍの方形を呈し、検出面からの深さは0.21ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6295（第19図）　Ⅳ期相当

ＭＲ32グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.67ｍ×短軸（北東―南西）0.59ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.10ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6300（第20図）　Ⅳ期相当

ＭＴ35グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.02ｍ×短軸（北西―南東）0.78ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.16ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6311（第21図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＰ35・36グリッドの地山面で検出し、検出面は地山面である。ＳＤ6045と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.74ｍ×短軸（北西―南東）0.68ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.53ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は５層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6327（第20図）　Ⅰ期相当

ＭＲ34・35グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6005、ＳＫＰ6219と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北東―南西）0.87ｍ×短軸（北西―南東）0.54ｍの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.33ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6330（第20図）　Ⅰ期かⅡ期相当

ＭＲ32グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.87ｍ×短軸（北東―南西）0.84ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.4ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6386（第20図）　Ⅳ期相当

ＭＲ・ＭＳ32グリッドの地山面で検出した。ＳＤ6381と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長軸（北東―南西）0.66ｍ×短軸（北西―南東）0.61ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.23ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは垂直である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ6387（第20図）　Ⅳ期相当

ＭＴ・ＮＡ31グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.77ｍ×短軸（北―南）0.61

ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.81ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。遺物は出土しなかった。

（４）溝跡

ＳＤ6045（第21図、図版14―２）　ⅠかⅡ期相当

ＭＰ35・36・37グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6311と重複し、本遺構が新しい。Ⅰ郭東端に沿うように緩やかに弧を描いて延びる溝で、長さ9.75ｍ、幅0.28ｍ、検出面からの深さは0.14ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。また、溝底面で径0.05～0.15ｍほどの杭跡と思われる穴が13個検出された。これらの深さは溝底面から0.20ｍ前後である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6377（第21図）　Ⅲ期相当

ＮＡ31グリッドの地山面で検出した。Ⅰ郭の南縁に沿う溝跡である。長さ2.32ｍ、幅0.32ｍ、検出面からの深さは0.4ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6378（第22図）　Ⅲ期相当

ＭＳ31・32、ＭＲ32グリッドの地山面で検出した。ＳＤ6381、ＳＫＰ6338と重複し、本遺構が最も新しい。北東―南西を向く溝で、長さ5.21ｍ、幅0.28ｍ、検出面からの深さは0.27ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。溝底面で柱穴３基（Ｐ１～Ｐ３）を検出した。Ｐ１は長軸0.23ｍ×短軸0.15の楕円形を呈し、深さは0.28ｍである。Ｐ２は径0.22ｍのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.46ｍである。Ｐ３は長軸0.42ｍ×短軸0.23ｍの楕円形を呈し、深さ0.44ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6381（第22図）　Ⅲ期相当

ＭＳ・ＭＴ31グリッドの地山面で検出した。ＳＫ6386、ＳＤ6378、ＳＫＰ6382・6383・6388と重複し、ＳＫＰ6388より新しく、それ以外より古い。弧状を呈する溝で、長さ6.7ｍ、幅0.9ｍ、検出面からの深さは0.14ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

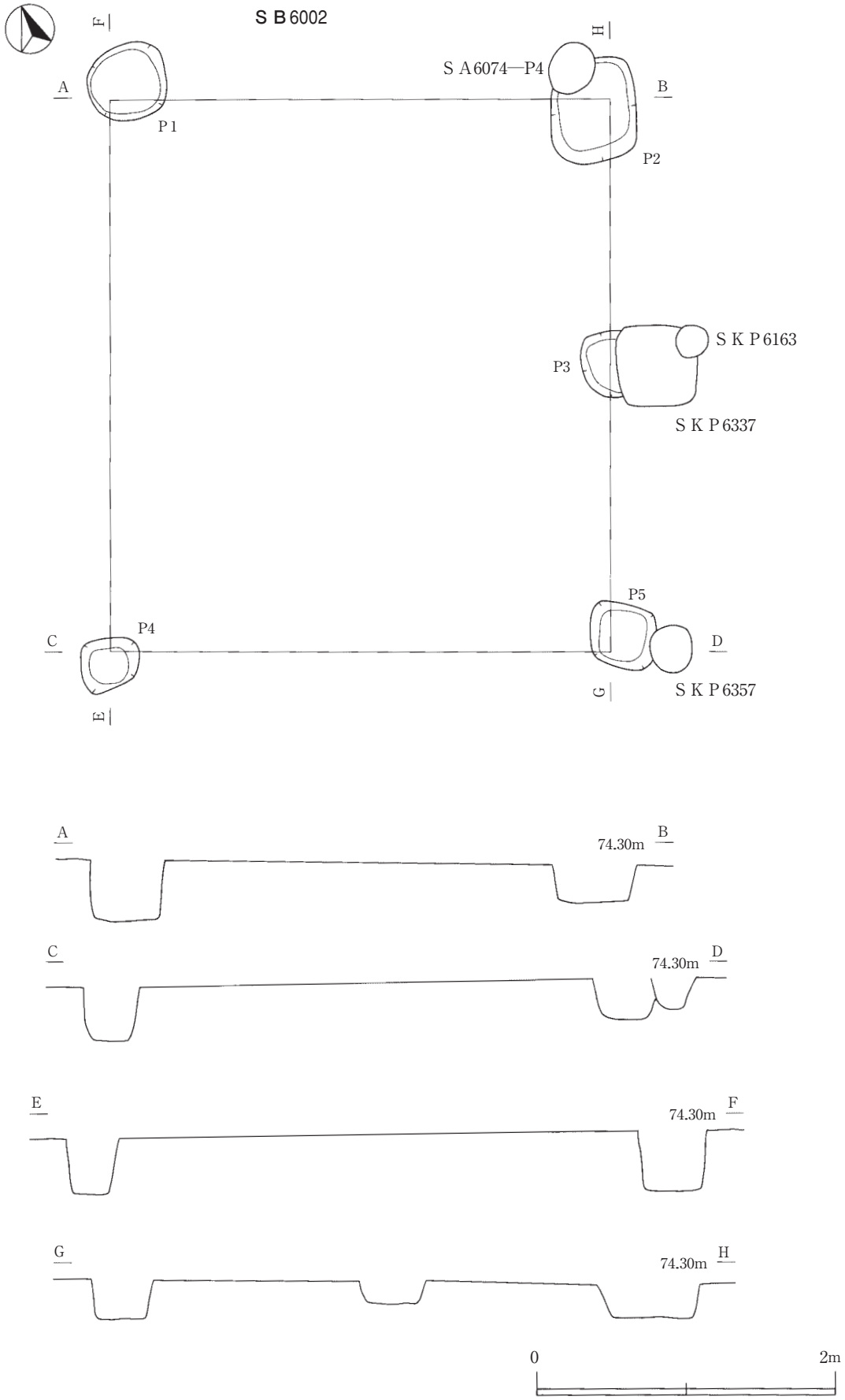
ＳＤ6385（第21図）　Ⅲ期相当

ＭＲ・ＭＳ31グリッドの地山面で検出した。ほぼ直線的に北東―南西を向く溝で、長さ3.07ｍ、幅0.24ｍ、検出面からの深さ0.18ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。溝中央部の底面で柱穴１基を検出した。長軸0.28ｍ×短軸0.22ｍ、深さ0.23ｍの柱穴である。遺物は出土しなかった。

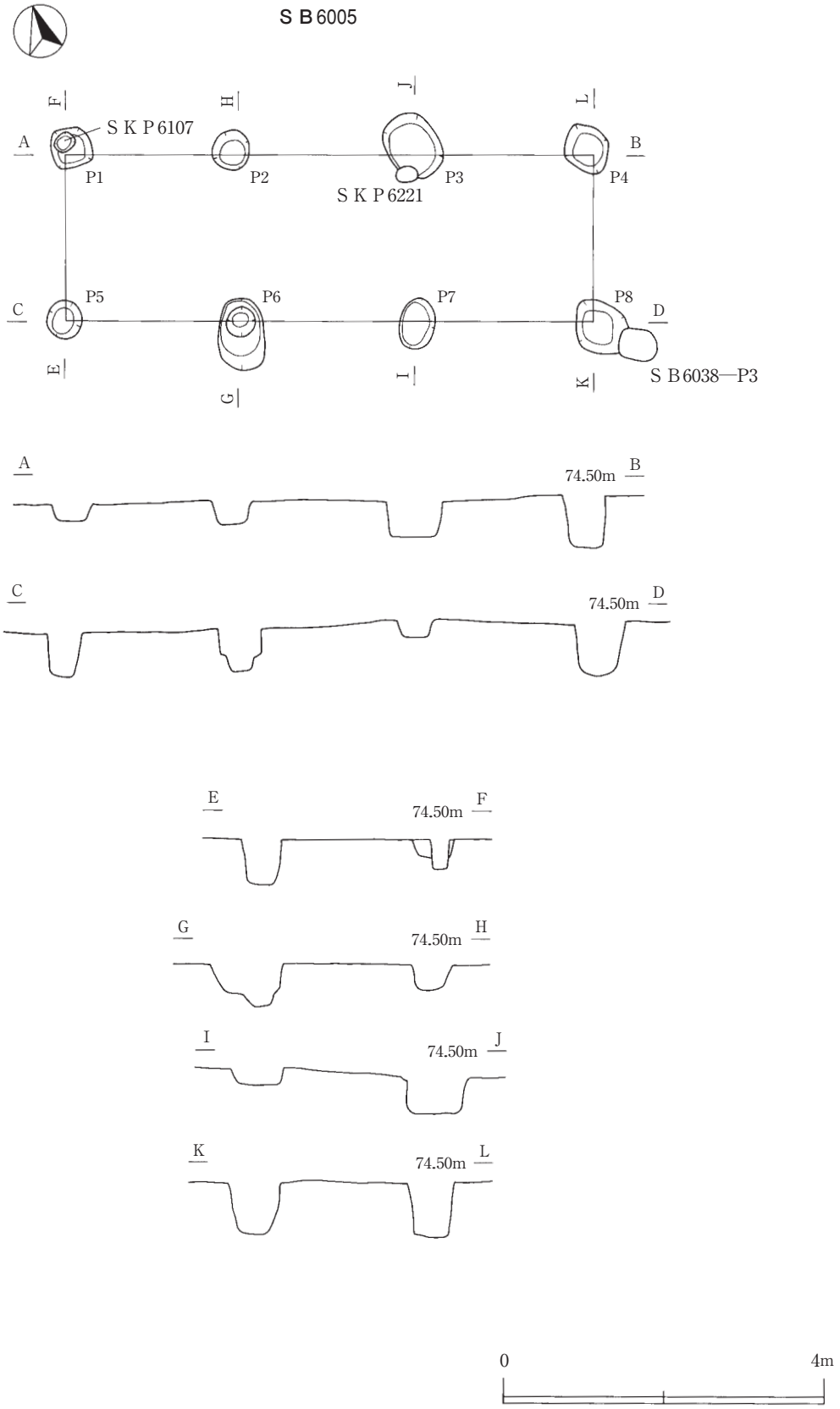
ＳＤ6400（第22図）　Ⅲ期相当

ＭＱ33、ＭＲ33・34グリッドの地山面で検出した。北東―南西に向かってほぼ直線的に延びる溝で、長さ5.89ｍ、幅0.40ｍ、検出面からの深さは0.25ｍである。底面はほぼ平坦で、中央部付近は段状になっている。壁の傾きは急である。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

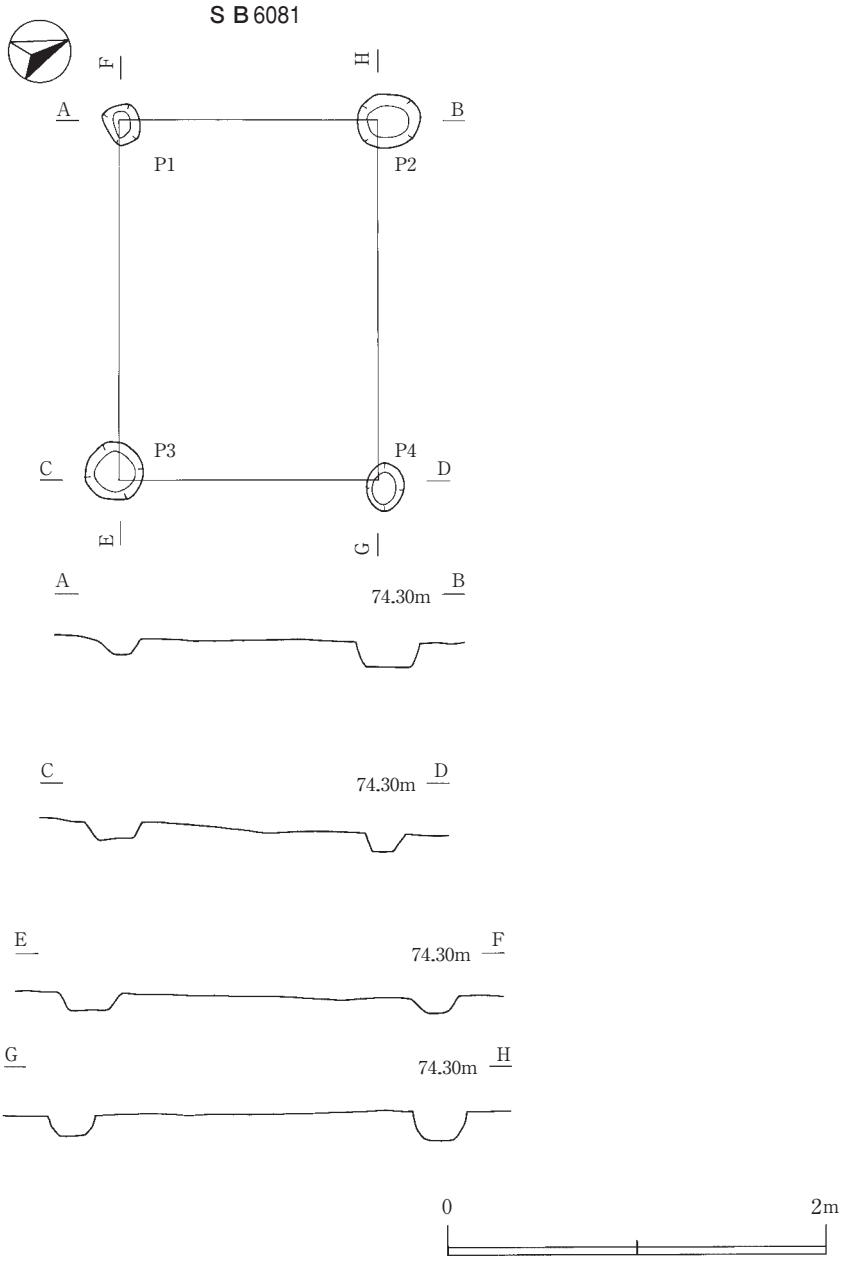
第10図　Ⅰ郭遺構配置図



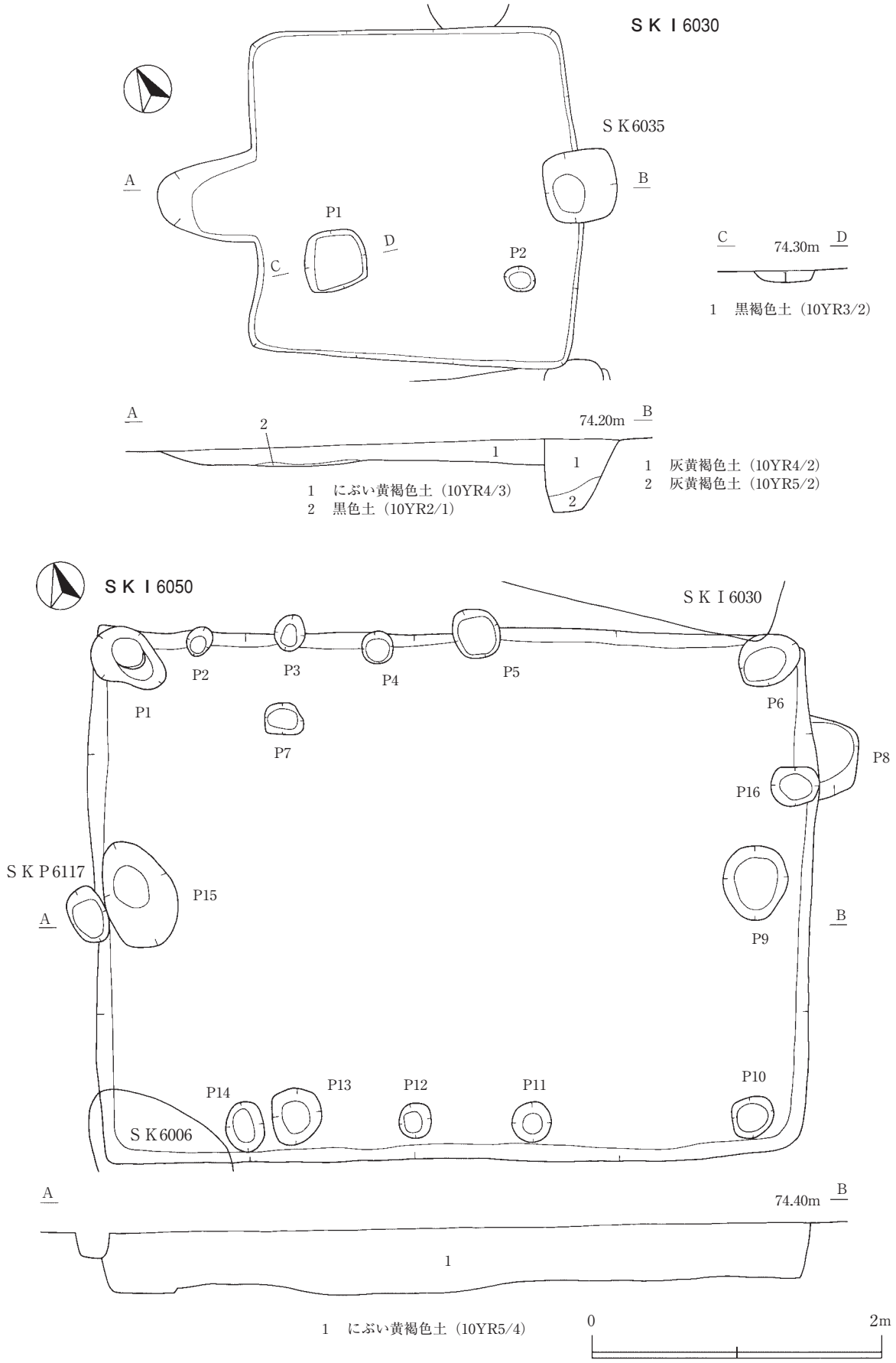
第11図　掘立柱建物跡（１）



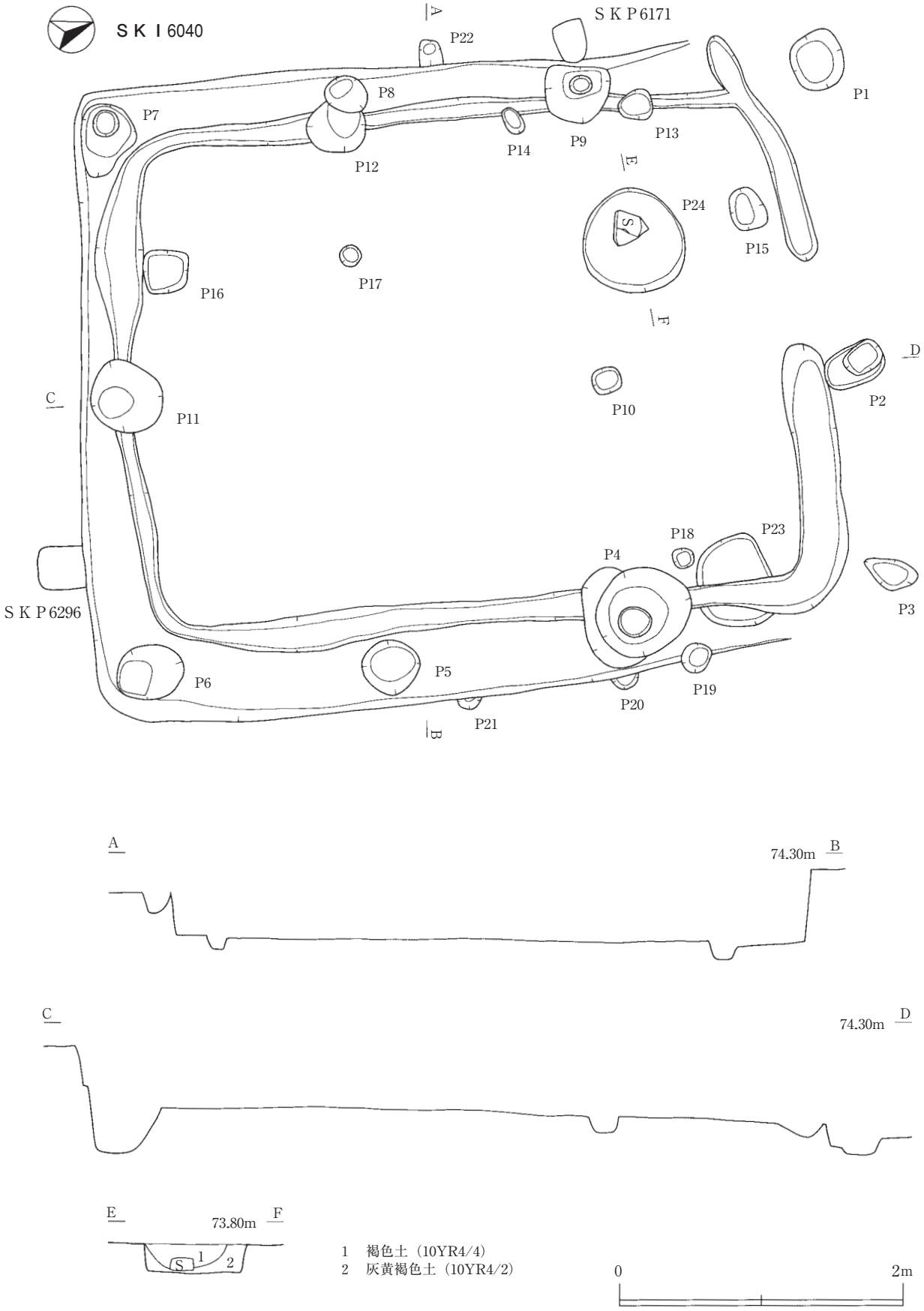
第12図　掘立柱建物跡（２）



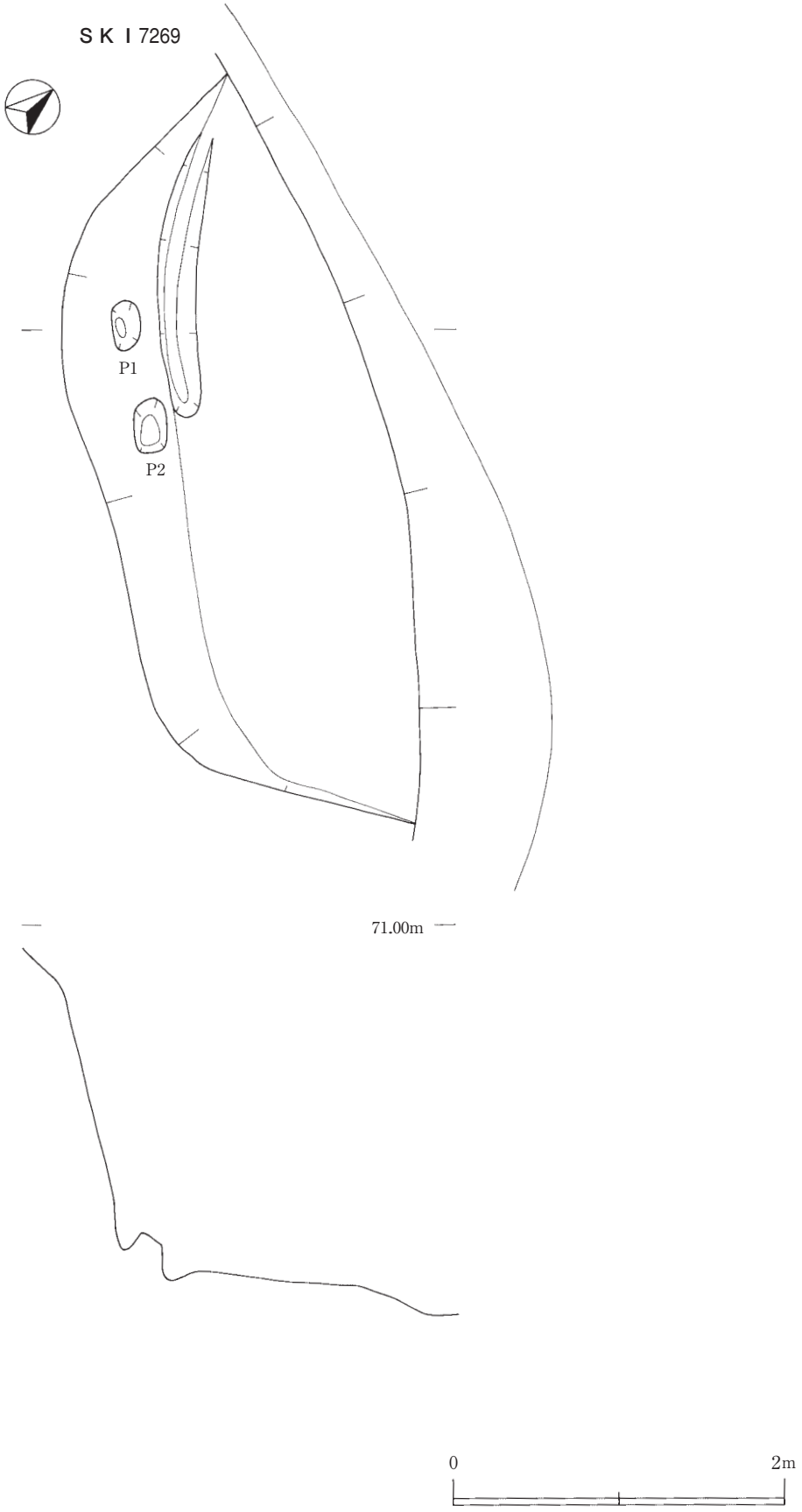
第13図　掘立柱建物跡（３）


ＳＫＩ6030
ＳＫ6035
A
B
P1
P2
C
D
C
74.30m
D
1　黒褐色土（10YR3/2）
A
2
74.20m
B
1
1
2
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　黒色土（10YR2/1）
1　灰黄褐色土（10YR4/2）
2　灰黄褐色土（10YR5/2）
ＳＫＩ6050
ＳＫＩ6030
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P16
ＳＫＰ6117
P15
A
B
P9
P14
P13
P12
P11
P10
ＳＫ6006
A
74.40m
B
1
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
0
2m

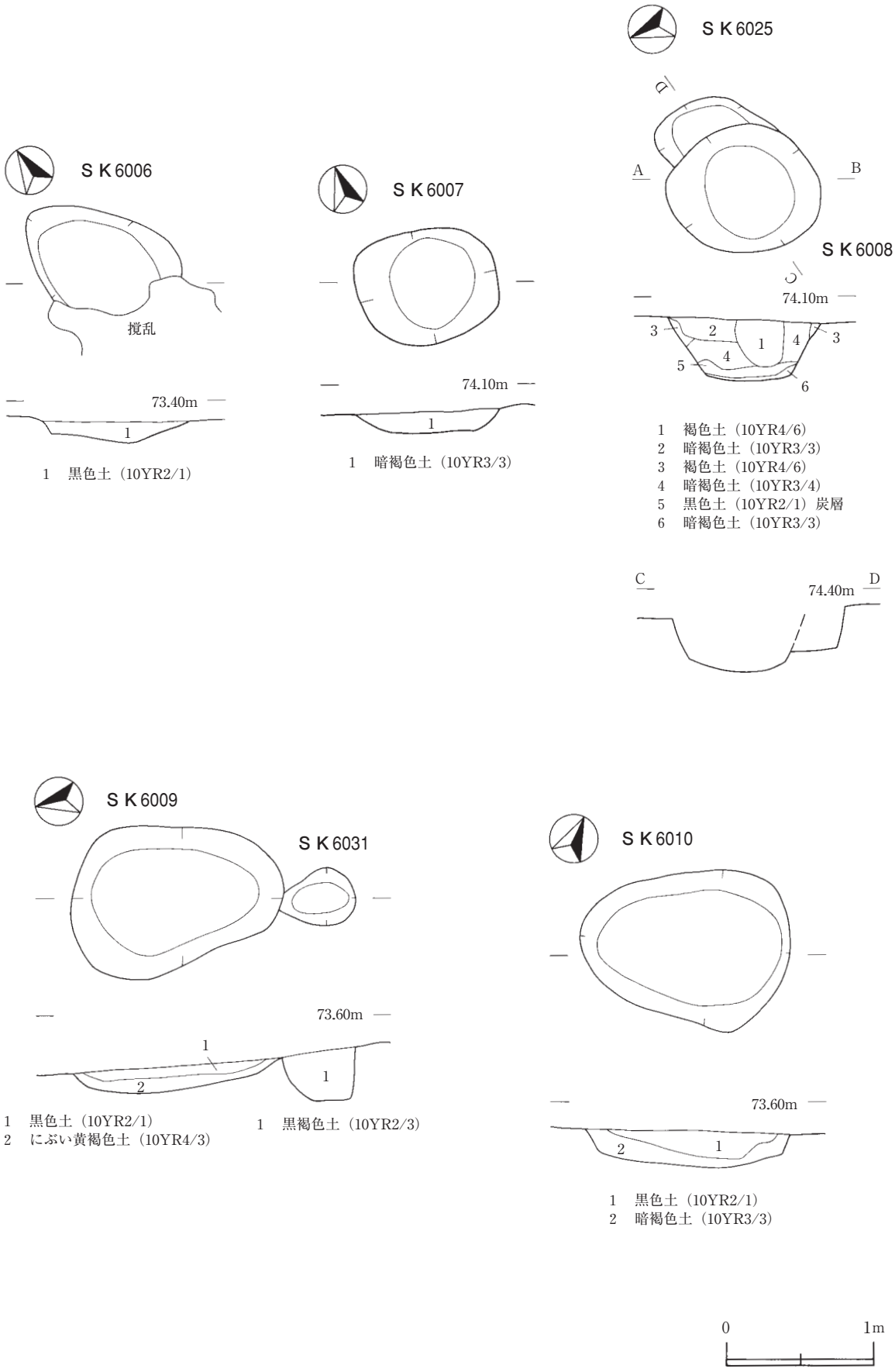
第14図　竪穴状遺構（１）


ＳＫＩ6040
ＳＫＰ6171
ＳＫＰ6296
A
B
C
D
E
F
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
74.30m
73.80m
1　褐色土（10YR4/4）
2　灰黄褐色土（10YR4/2）
0
2m

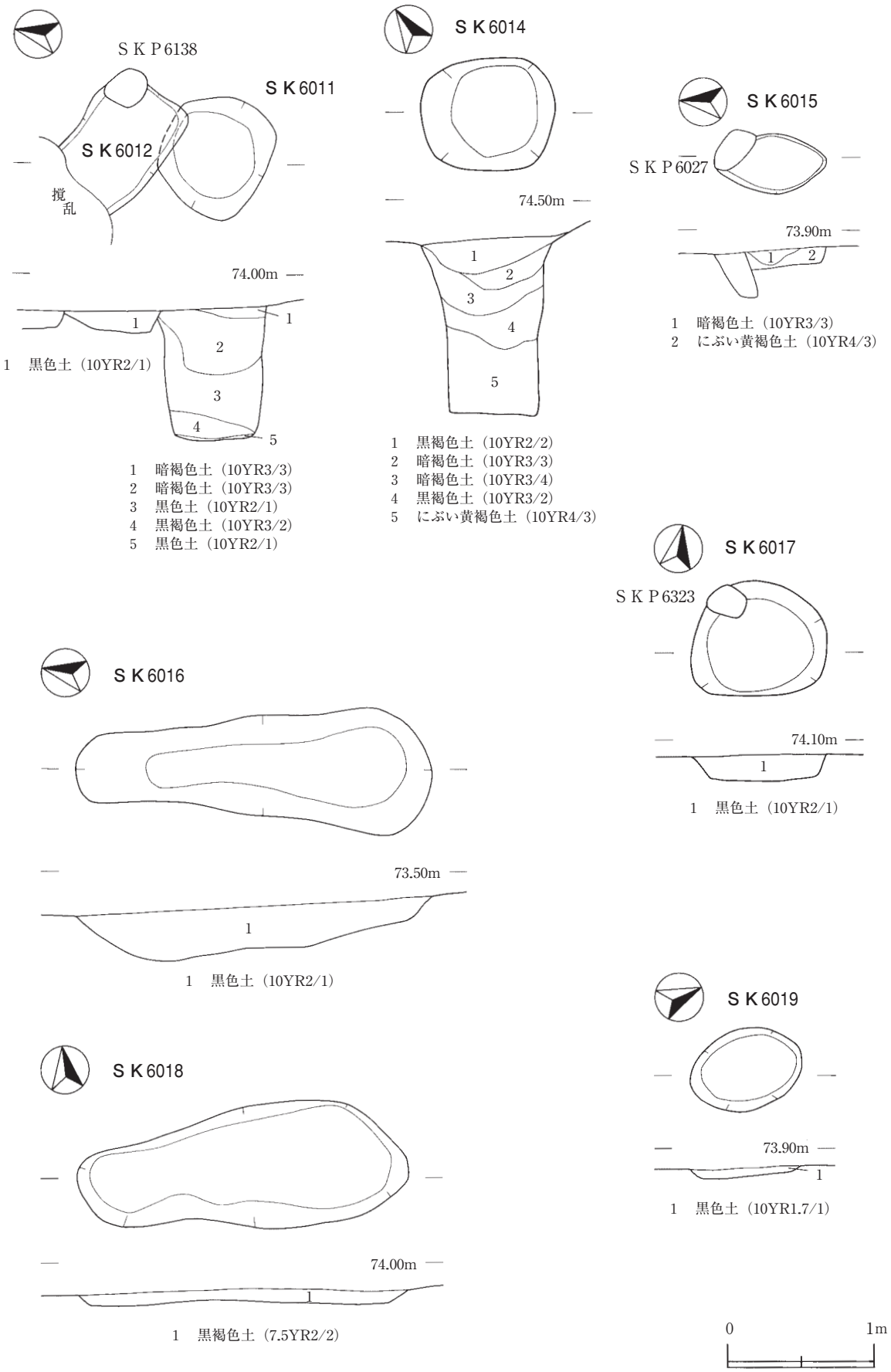
第15図　竪穴状遺構（２）



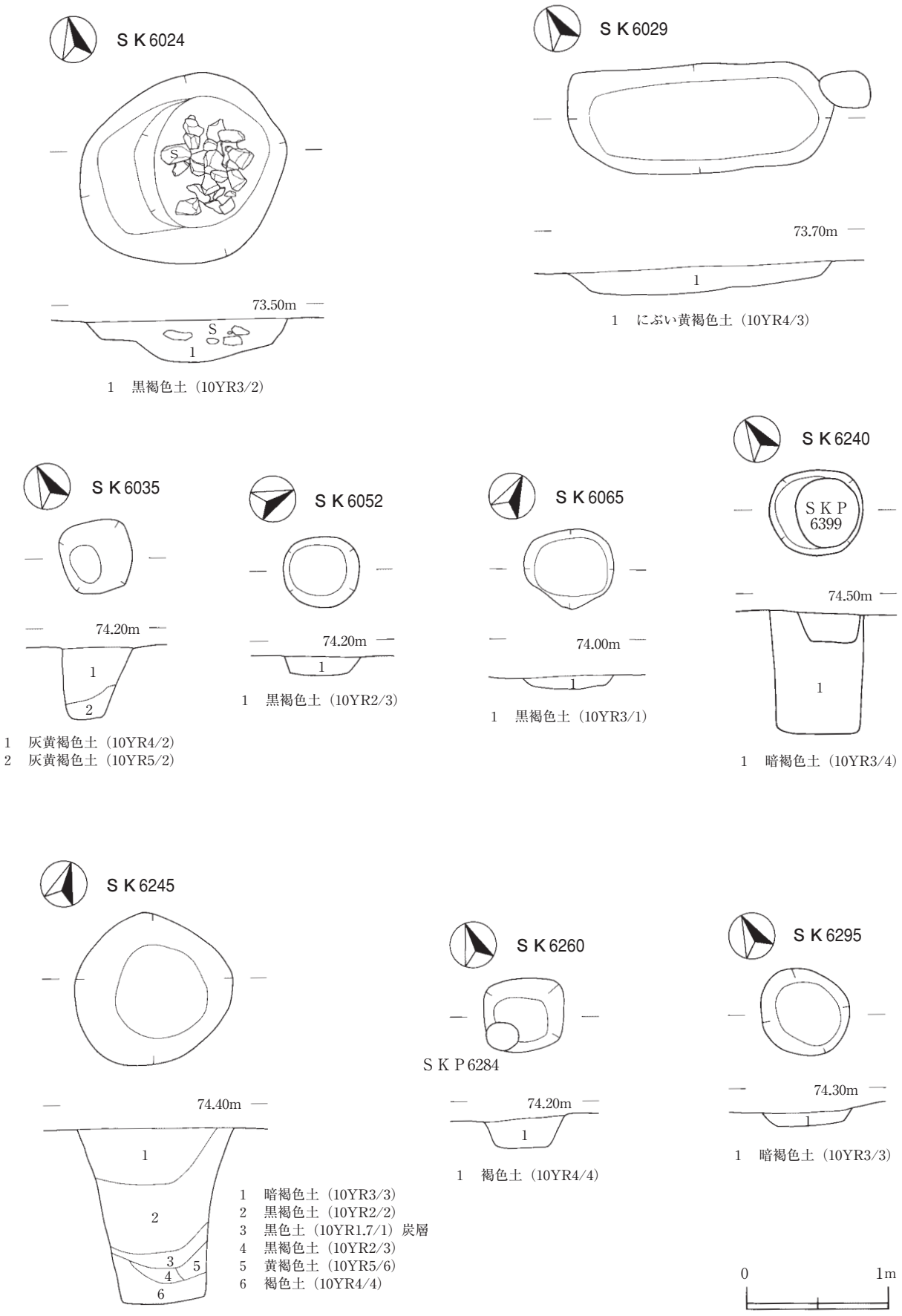
第16図　竪穴状遺構（３）


ＳＫ6006
撹乱
73.40m
1
1　黒色土（10YR2/1）
ＳＫ6007
74.10m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＫ6025
A
B
ＳＫ6008
74.10m
1
2
3
4
5
6
1　褐色土（10YR4/6）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　褐色土（10YR4/6）
4　暗褐色土（10YR3/4）
5　黒色土（10YR2/1）炭層
6　暗褐色土（10YR3/3）
C
D
74.40m
ＳＫ6009
ＳＫ6031
73.60m
1
2
1
1　黒色土（10YR2/1）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
1　黒褐色土（10YR2/3）
ＳＫ6010
73.60m
2
1
1　黒色土（10YR2/1）
2　暗褐色土（10YR3/3）
0
1m

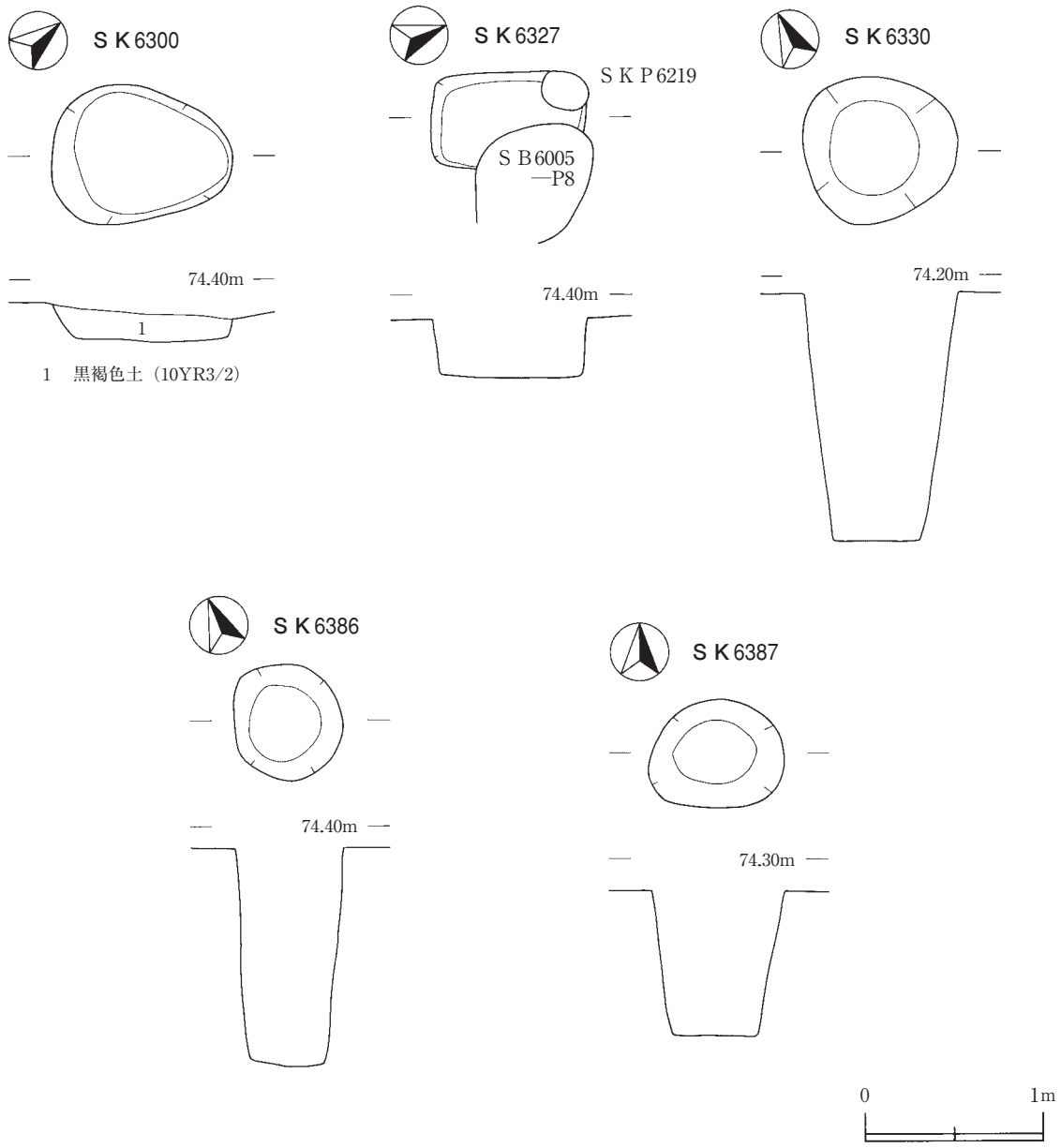
第17図　土坑（１）


ＳＫＰ6138
ＳＫ6011
ＳＫ6012
撹乱
74.00m
1
2
3
4
5
1　黒色土（10YR2/1）
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　黒色土（10YR2/1）
4　黒褐色土（10YR3/2）
5　黒色土（10YR2/1）
ＳＫ6014
74.50m
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　暗褐色土（10YR3/4）
4　黒褐色土（10YR3/2）
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ6015
ＳＫＰ6027
73.90m
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ6017
ＳＫＰ6323
74.10m
1　黒色土（10YR2/1）
ＳＫ6016
73.50m
1　黒色土（10YR2/1）
ＳＫ6018
74.00m
1　黒褐色土（7.5YR2/2）
ＳＫ6019
73.90m
1　黒色土（10YR1.7/1）
0
1m

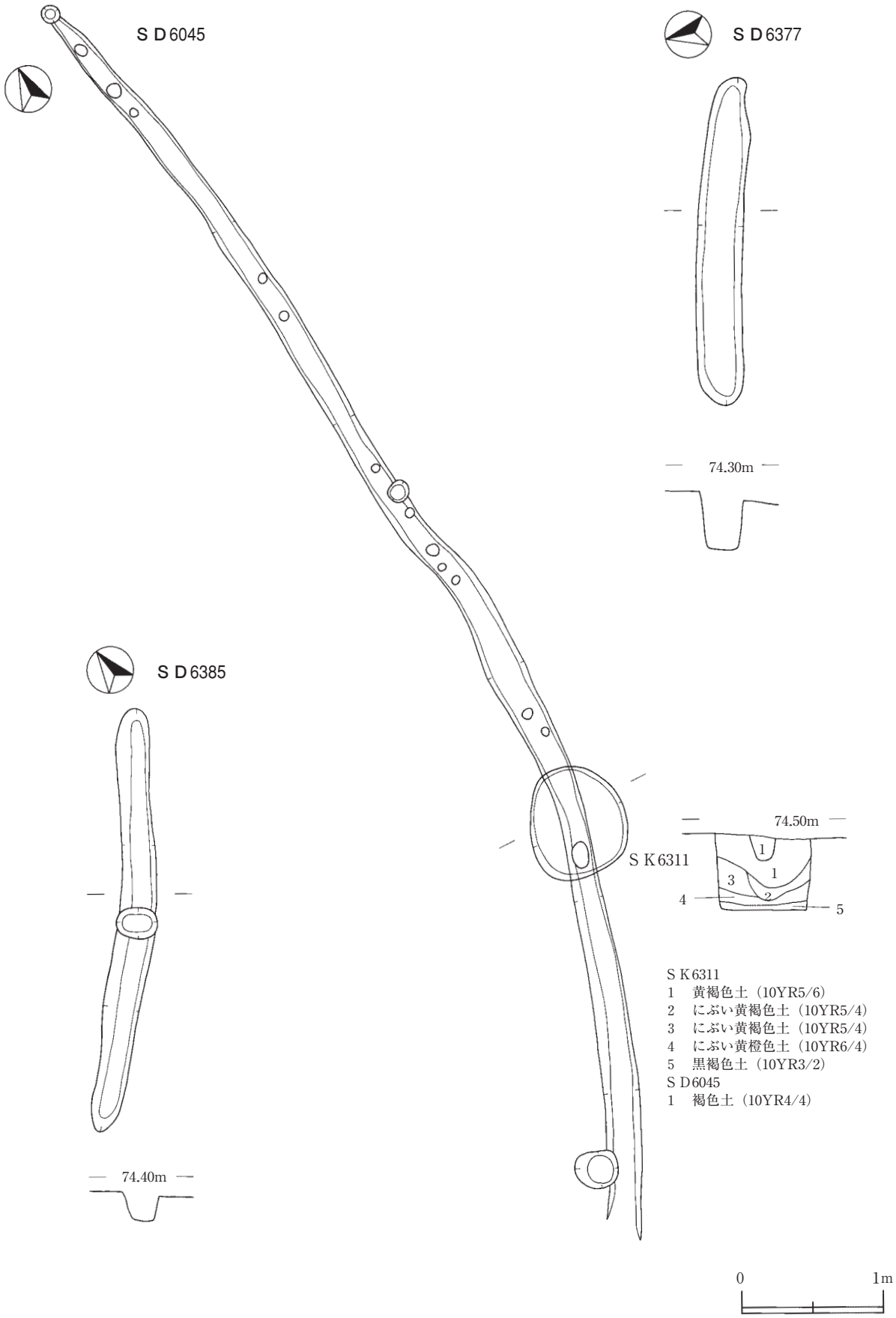
第18図　土坑（２）


ＳＫ6024
S
73.50m
S
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ6029
73.70m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ6035
74.20m
1
2
1　灰黄褐色土（10YR4/2）
2　灰黄褐色土（10YR5/2）
ＳＫ6052
74.20m
1
1　黒褐色土（10YR2/3）
ＳＫ6065
74.00m
1
1　黒褐色土（10YR3/1）
ＳＫ6240
ＳＫＰ
6399
74.50m
1
1　暗褐色土（10YR3/4）
ＳＫ6245
74.40m
1
2
3
4
5
6
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　黒褐色土（10YR2/2）
3　黒色土（10YR1.7/1）炭層
4　黒褐色土（10YR2/3）
5　黄褐色土（10YR5/6）
6　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ6260
ＳＫＰ6284
74.20m
1
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ6295
74.30m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
0
1m

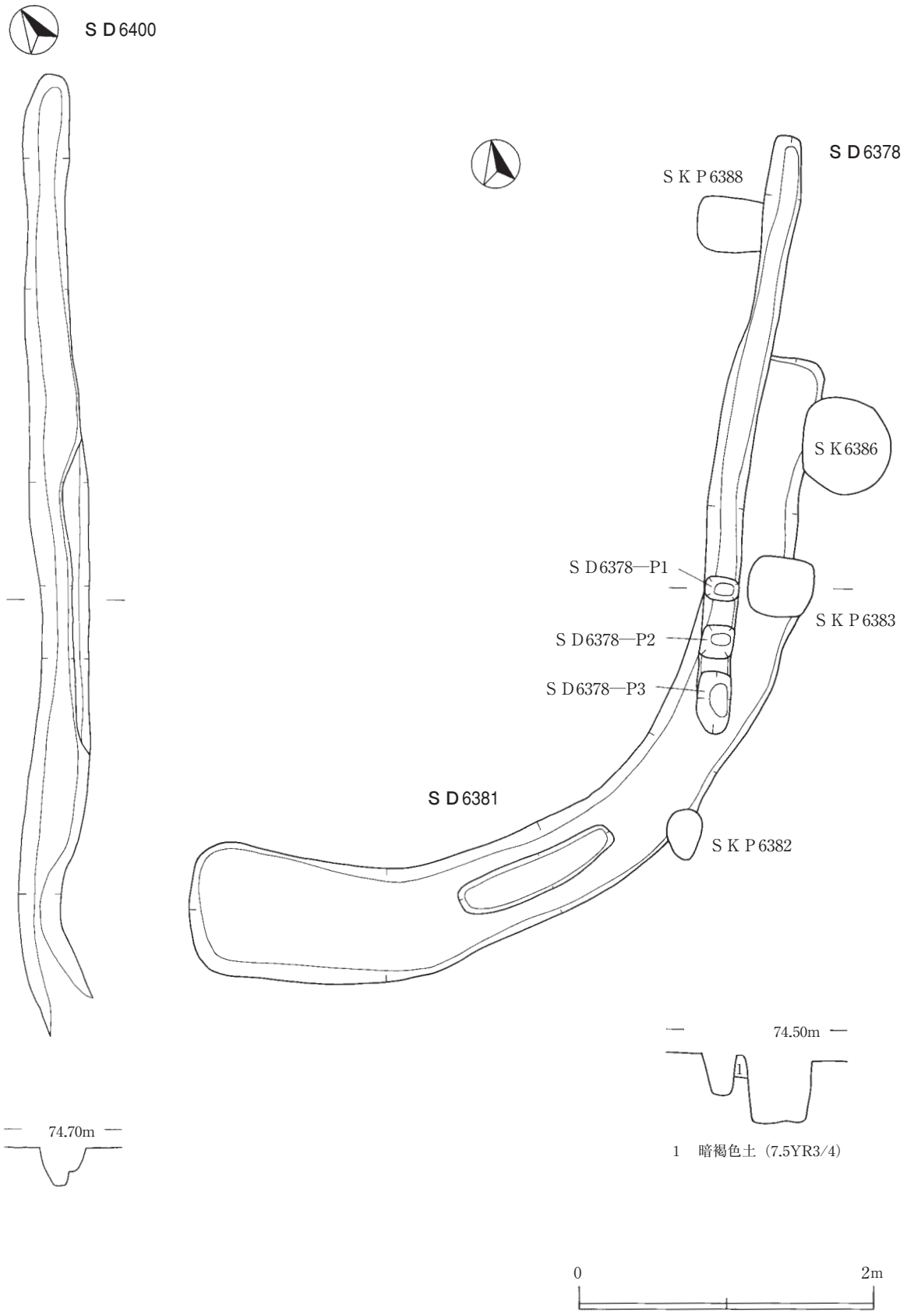
第19図　土坑（３）


ＳＫ6300
74.40m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ6327
ＳＫＰ6219
ＳＢ6005
—P8
74.40m
ＳＫ6330
74.20m
ＳＫ6386
74.40m
ＳＫ6387
74.30m
0
1m

第20図　土坑（４）


ＳＤ6045
ＳＤ6377
74.30m
ＳＤ6385
74.40m
ＳＫ6311
74.50m
1
1
3
2
4
5
ＳＫ6311
1　黄褐色土（10YR5/6）
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
4　にぶい黄橙色土（10YR6/4）
5　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＤ6045
1　褐色土（10YR4/4）
0
1m

第21図　溝跡（１）

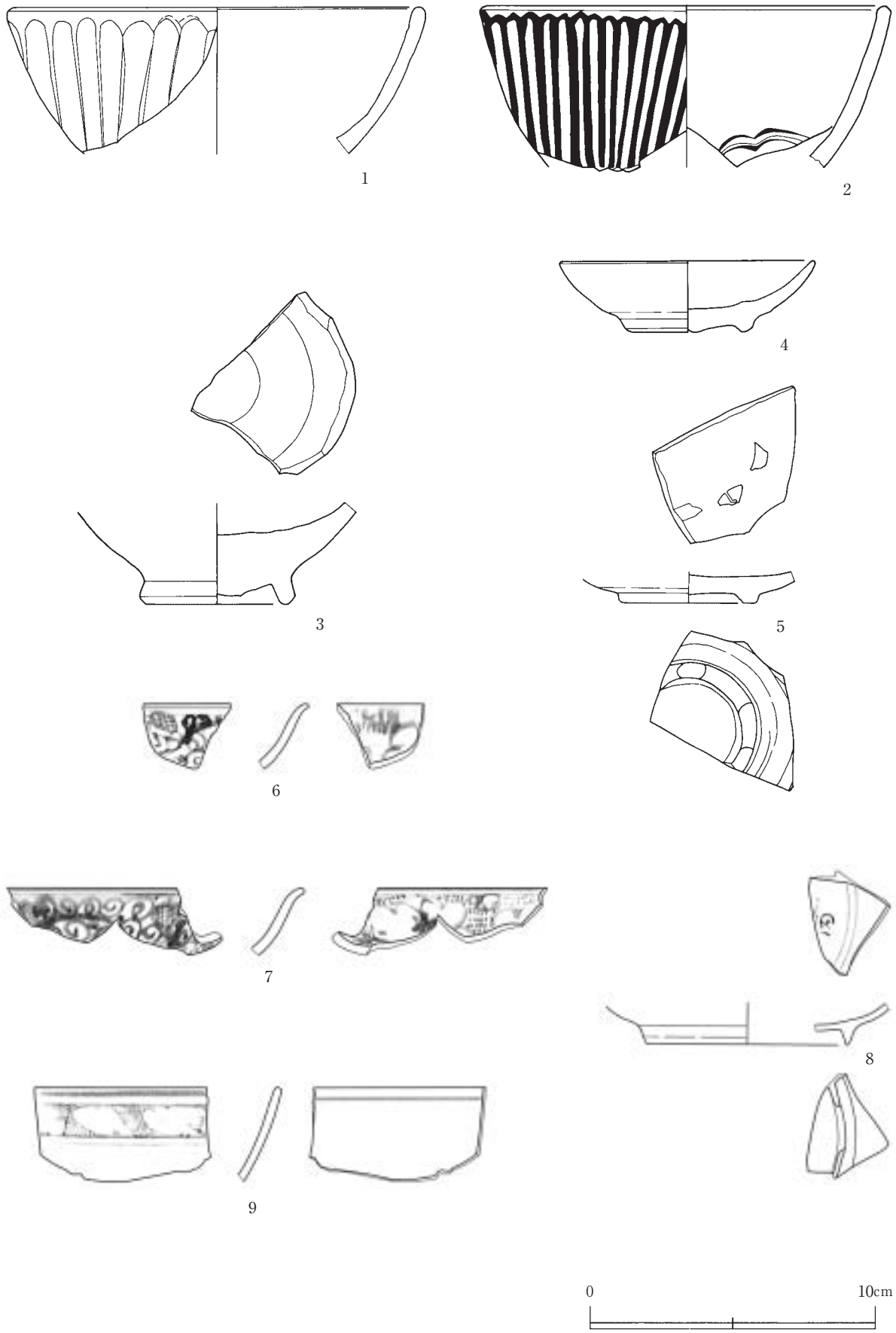

ＳＤ6400
ＳＤ6378
ＳＫＰ6388
ＳＫ6386
ＳＤ6378―P1
ＳＫＰ6383
ＳＤ6378―P2
ＳＤ6378―P3
ＳＤ6381
ＳＫＰ6382
74.50m
1
74.70m
1　暗褐色土（7.5YR3/4）
0
2m

第22図　溝跡（２）

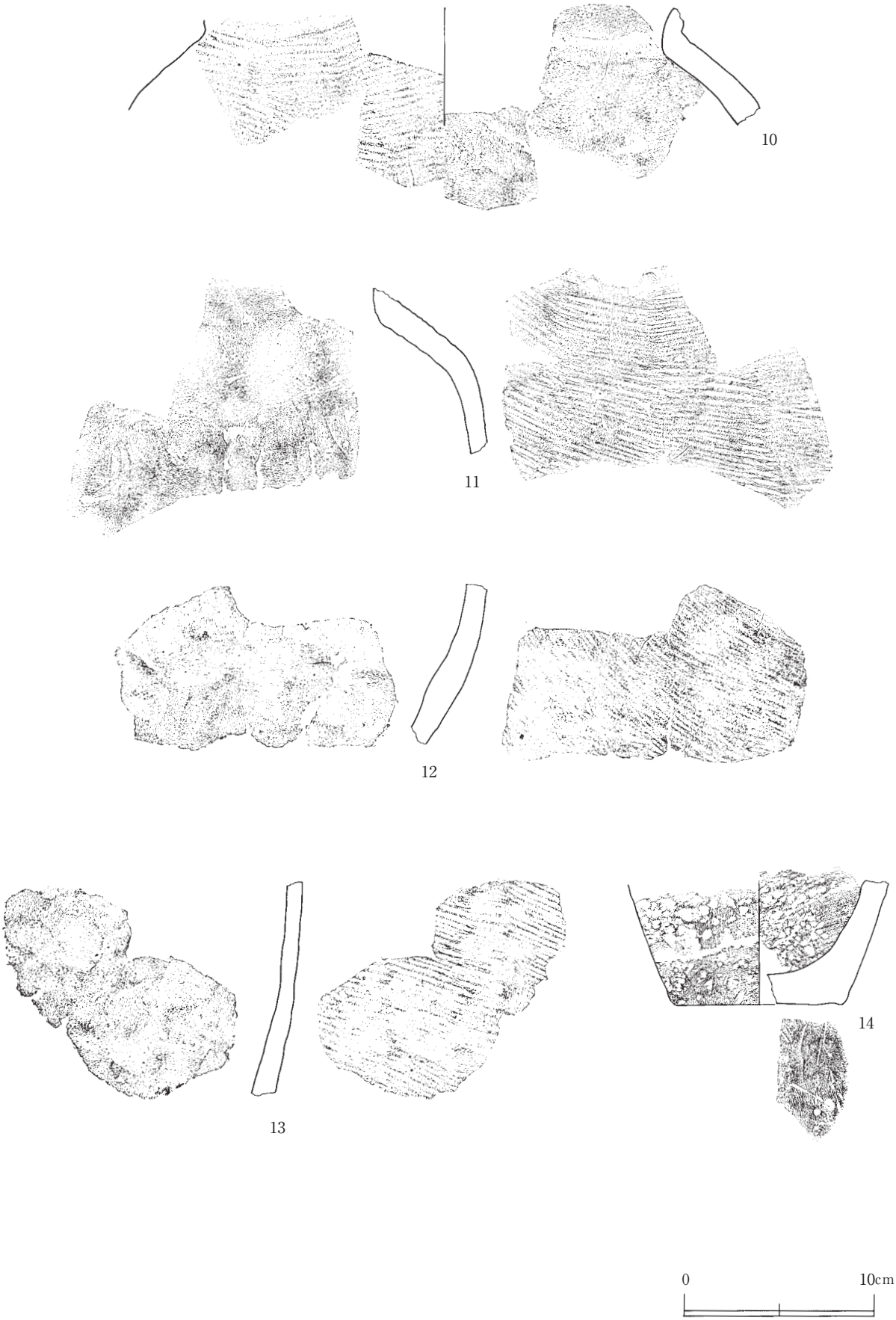
第３表　Ⅰ郭出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
23- 1	37- 1	SKI6050	磁器	青磁	碗	(14.3)	—	—	15Ｃ中	蓮弁文
2	2	MS35	磁器	青磁	碗	(13.9)	—	—	15Ｃ後	蓮弁文
3	3	MS33	磁器	青磁	碗	—	—	(4.9)	15Ｃ後	
4	4	SKI6050	磁器	白磁	皿	(8.9)	2.5	(3.9)	15Ｃ中～後	
5	5	MR38	磁器	白磁	皿	—	—	(4.5)	15Ｃ後～16Ｃ前	切り高台
6	6	NA34	磁器	染付	碗	—	—	—	15Ｃ後～16Ｃ前	
7	8	SK6330	磁器	染付	碗	—	—	—	15Ｃ後～16Ｃ前	
8	7	SK6016	磁器	染付	皿	—	—	(7.1)	15Ｃ後～16Ｃ前	
9	9	SKP6021	磁器	染付	碗	—	—	—	15Ｃ後～16Ｃ前	
24-10	38- 2	SK6245	陶器	珠洲系	甕	—	—	(24.6)		
11	1	SK6245	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
12	3	SK6245	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
13	4	SK6245	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
14	5	MR34	陶器	珠洲系	壺	—	—	(8.7)		両面が焼け
25-15	6	MR38	陶器	珠洲系	擂鉢	(41.5)	—	—	15Ｃ代	
16	7	NA31	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—	15Ｃ代	
17	8	SKI6050	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—	15Ｃ代	
18	—	SKI6050	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—	15Ｃ代	
19	9	MT31	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
20	10	43.44	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
21	11	SKI6050	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
26-22	12	MS34	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
23	14	MS34	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
24	13	SKI6050	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
25	39- 1	NA36	陶器	瀬戸・美濃	皿	(9.3)	2.3	(4.9)		
26	2	MQ38	陶器	瀬戸・美濃	皿	(11.5)	2.5	(6.4)		
27	3	MS34	金属	—	釘	9.7	1.5	1.2		重さ28.8ｇ
28	4	SK6029	金属	—	湯口鉄塊	4.7	3.4	0.3		重さ59.9ｇ
29	5	MT38	金属	—	不明	7.9	3.0	0.9		重さ27.3ｇ
30	6	MT35	金属	—	不明	3.1	2.3	0.5		重さ3.3ｇ
27-31	7	SK6024	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寶　重さ3.4ｇ
32	8	MR38	金属	—	銭貨	2.4	—	—		不明　重さ2.5ｇ
33	9	MR38	金属	—	銭貨	2.4	—	—		不明　重さ2.6ｇ
34	10	MS34	金属	—	銭貨	2.4	—	—		不明　重さ0.8ｇ
35	11	SKP6317	石製品	—	砥石	17.9	3.1	2.4		重さ198.4ｇ
28-36	12	NA35	石製品	—	石鉢	—	—	—		
37	13	MR32	石製品	—	石鉢	—	—	—		
38	14	MR38	石製品	—	石臼	15.8	9.8	4.3		茶臼
39	15	SKI6050	石製品	—	石臼	13.4	9.1	10.7		

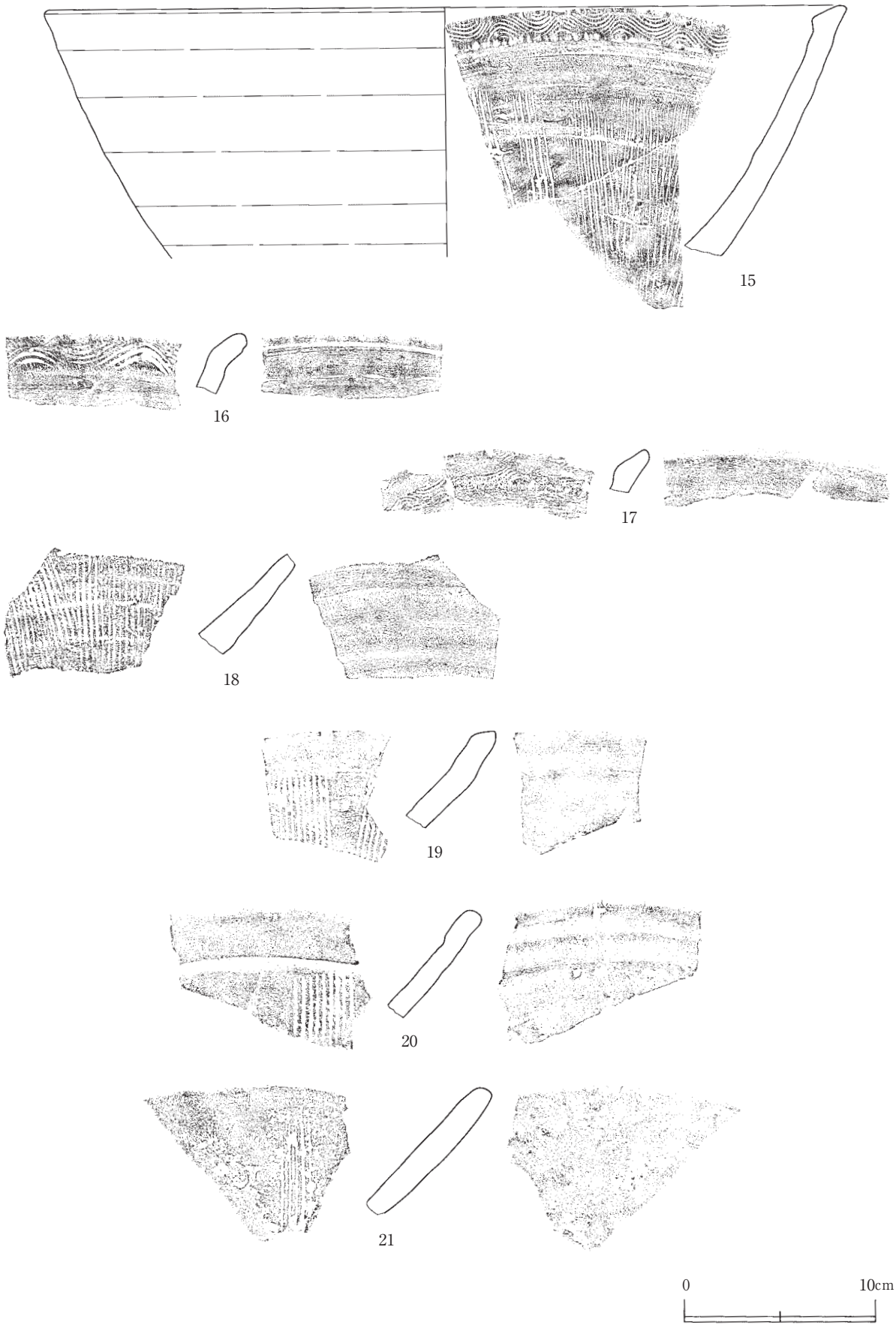
※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属・石製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
なお、（　）内の数値は推定値である。



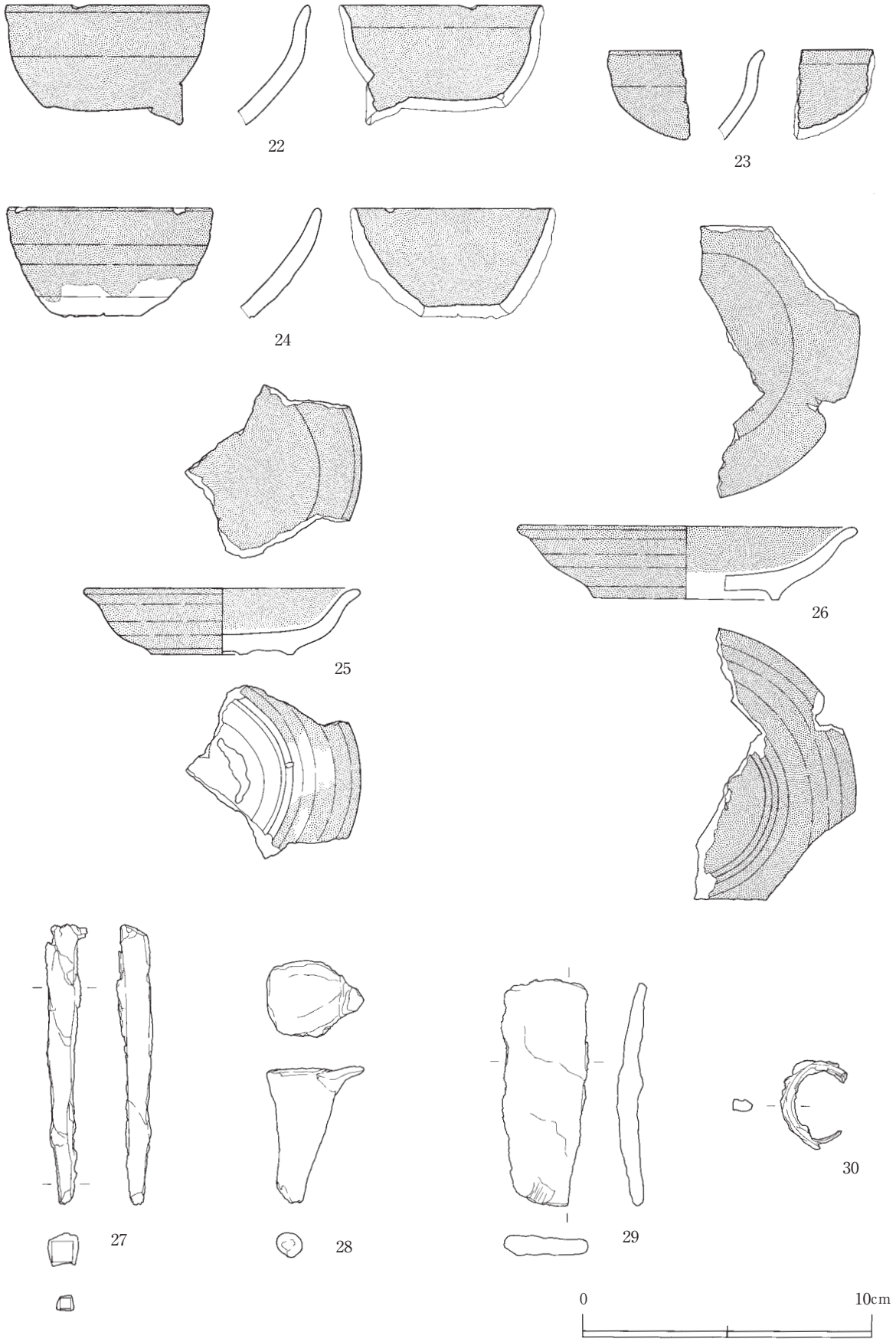
第23図　Ⅰ郭出土遺物（１）



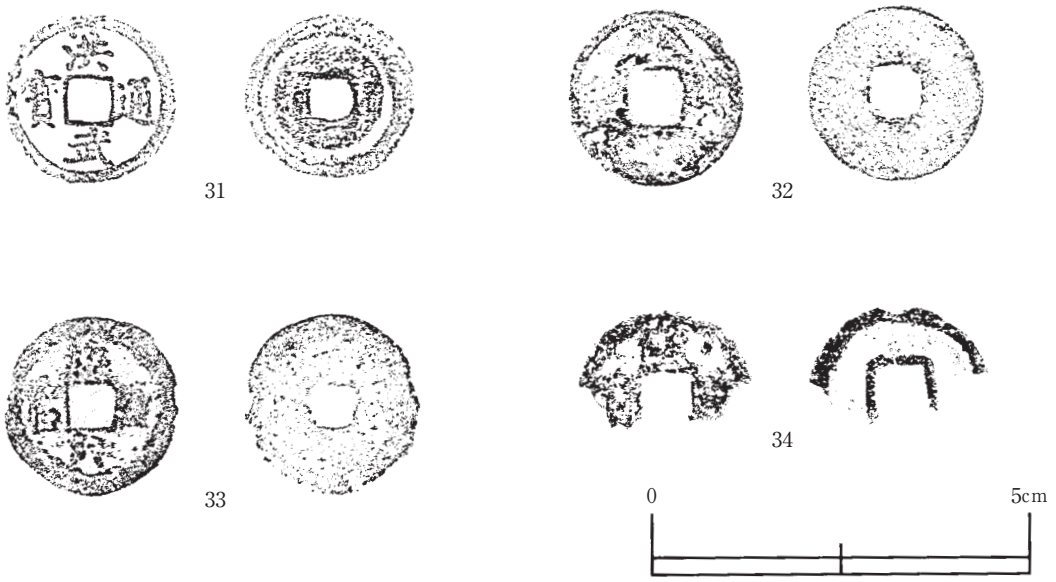
第24図　Ⅰ郭出土遺物（２）

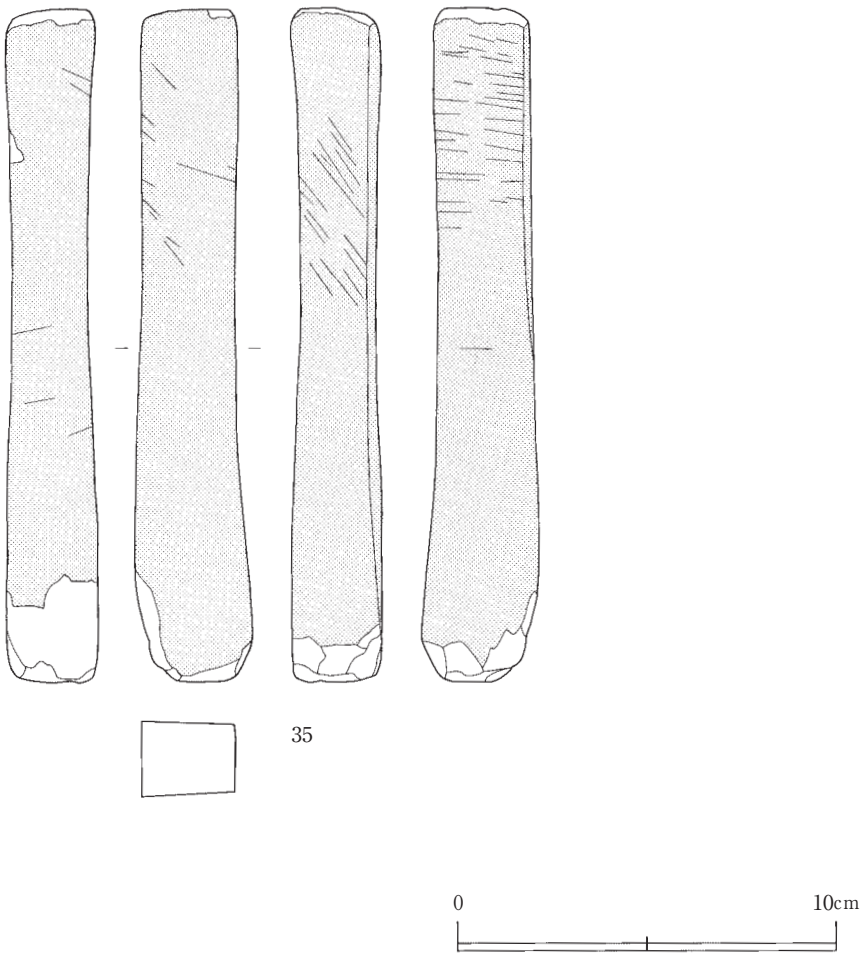


第25図　Ⅰ郭出土遺物（３）

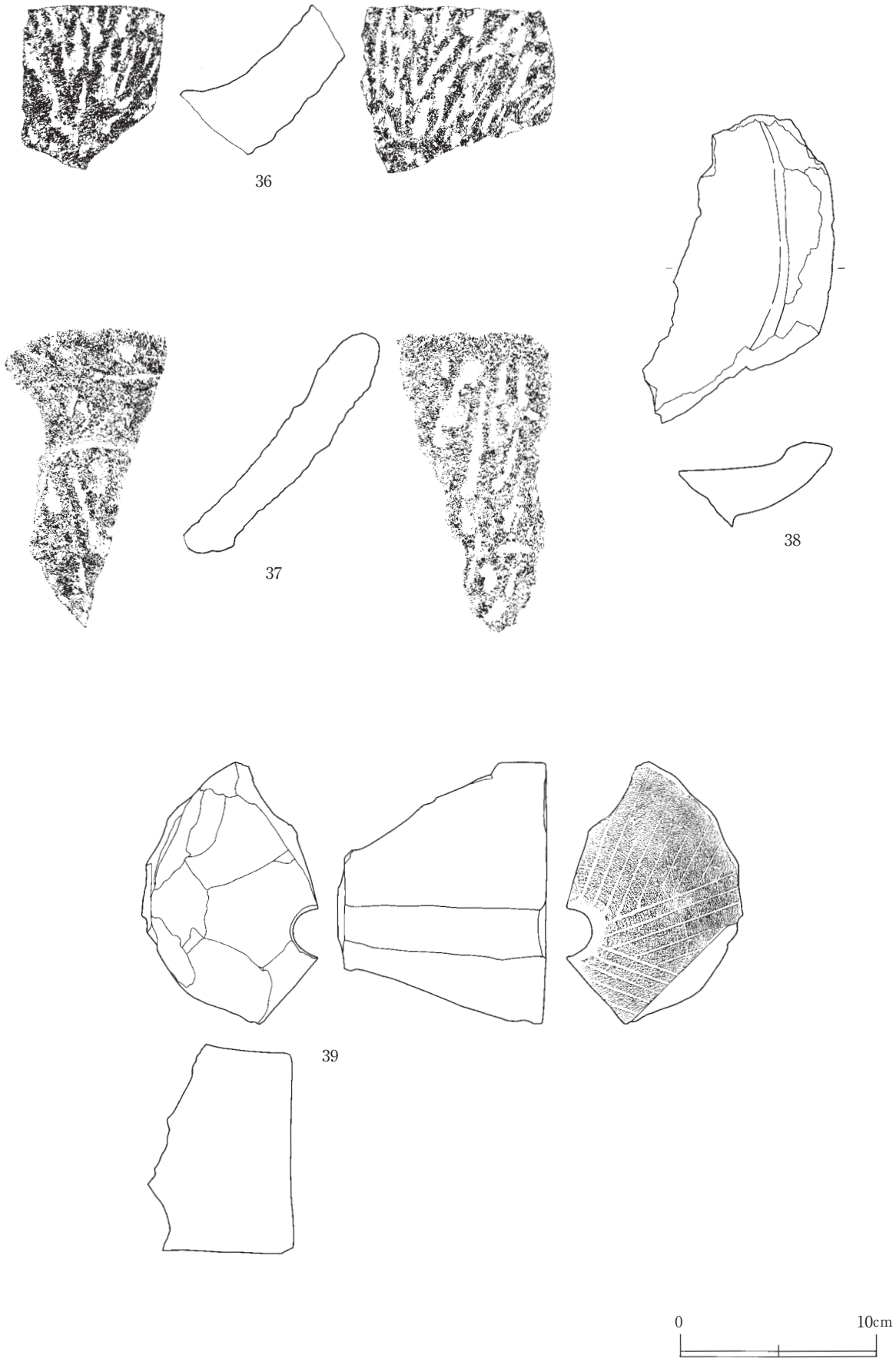


第26図　Ⅰ郭出土遺物（４）





第27図　Ⅰ郭出土遺物（５）



第28図　Ⅰ郭出土遺物（６）

２　Ⅱ郭の検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ6509（第30図）　Ⅳ期相当

ＭＦ34グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6515、ＳＤ6510、ＳＮ6504・6506と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ２）2.20m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ３）1.34mである。柱堀形は径0.19～0.26mの円形で、深さは0.32～0.55mである。堆積土はにぶい黄褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でＮ―90°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6514（第30図）　Ⅳ期相当

ＭＥ35グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6515、ＳＫ6501・6502と重複し、ＳＫ6501・6502よりも古いが、ＳＢ6515との新旧関係は不明である。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）1.93m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ２）1.84mである。柱堀形は径0.22～0.35mの楕円形で、深さは0.32～0.44mである。堆積土はにぶい黄褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でＮ―４°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ6515（第31図）　Ⅳ期相当

ＭＥ34・35、ＭＦ34・35グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6509・6514、ＳＤ6510と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。桁行３間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ５）4.43m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ２）1.65mである。柱堀形は径0.03～0.56mの円形・楕円形で、深さは0.49～0.67mである。堆積土はにぶい黄褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でＮ―０°で磁北を指している。遺物は出土しなかった。

（２）土坑

ＳＫ6501（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＥ35グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6514、ＳＫ6502と重複し、ＳＢ6514よりも新しく、ＳＫ6502より古い。平面形は長軸（北東―南西）0.74m×短軸（北西―南東）0.54mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

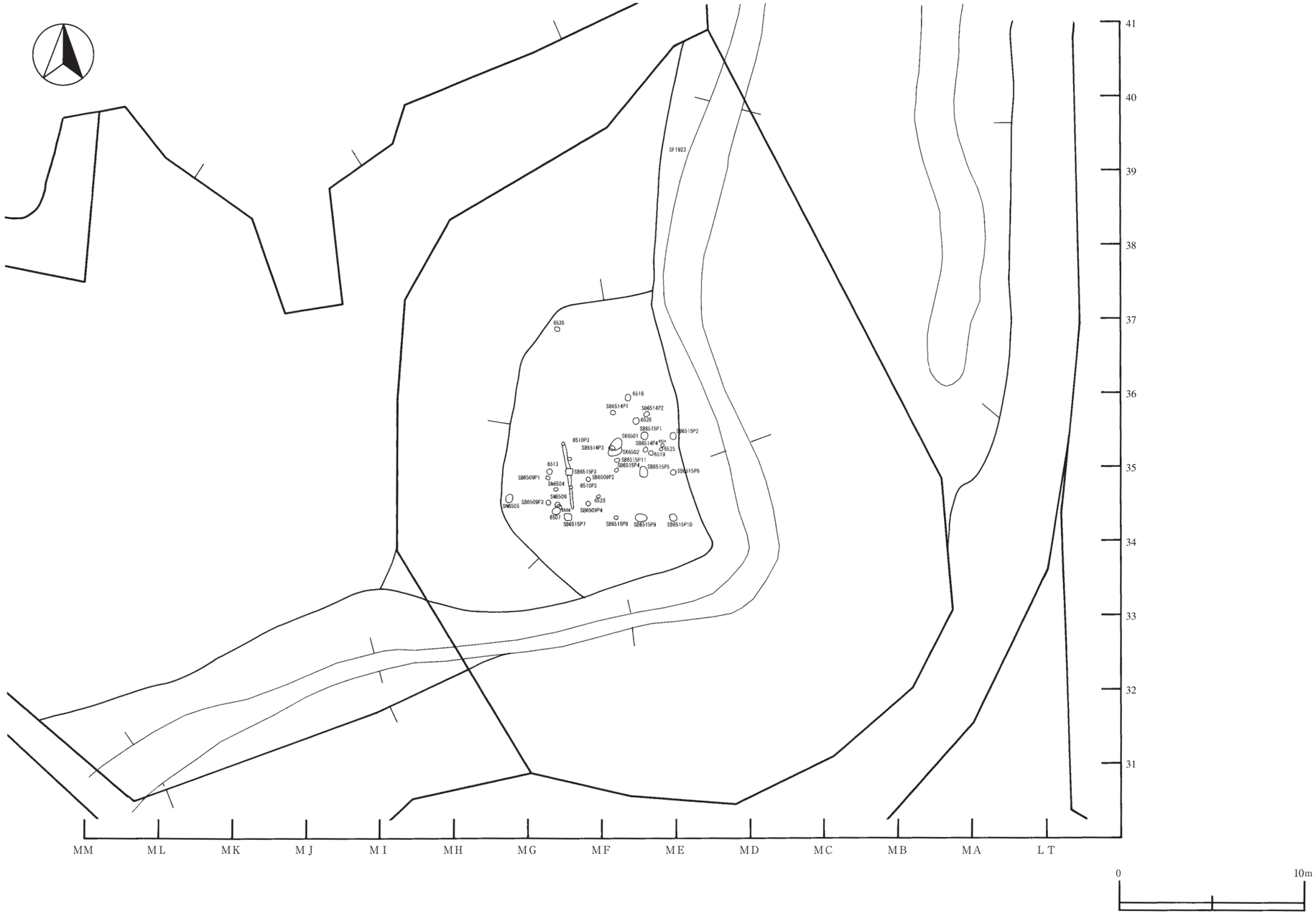
ＳＫ6502（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＥ35グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6514、ＳＫ6501と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は残存する範囲で、長軸（東―西）0.77m×短軸（北―南）0.3mの楕円形と推定され、検出面からの深さは0.12mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層である。遺物は出土しなかった。

（３）焼土遺構

ＳＮ6504（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＦ34グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6509と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長軸（東―西）0.25m×短軸（北―南）0.17mの楕円形範囲に明褐色の焼土が広がる。焼土の厚さ



第29図　Ⅱ郭遺構配置図

は0.01ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ6505（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＧ34グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.48ｍ×短軸（北西―南東）0.37ｍの楕円形範囲に明褐色の焼土が広がる。掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ6506（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＦ34グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6509と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長軸（東―西）0.3ｍ×短軸（北―南）0.26ｍの楕円形範囲に明褐色の焼土が広がる。掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

（４）溝跡

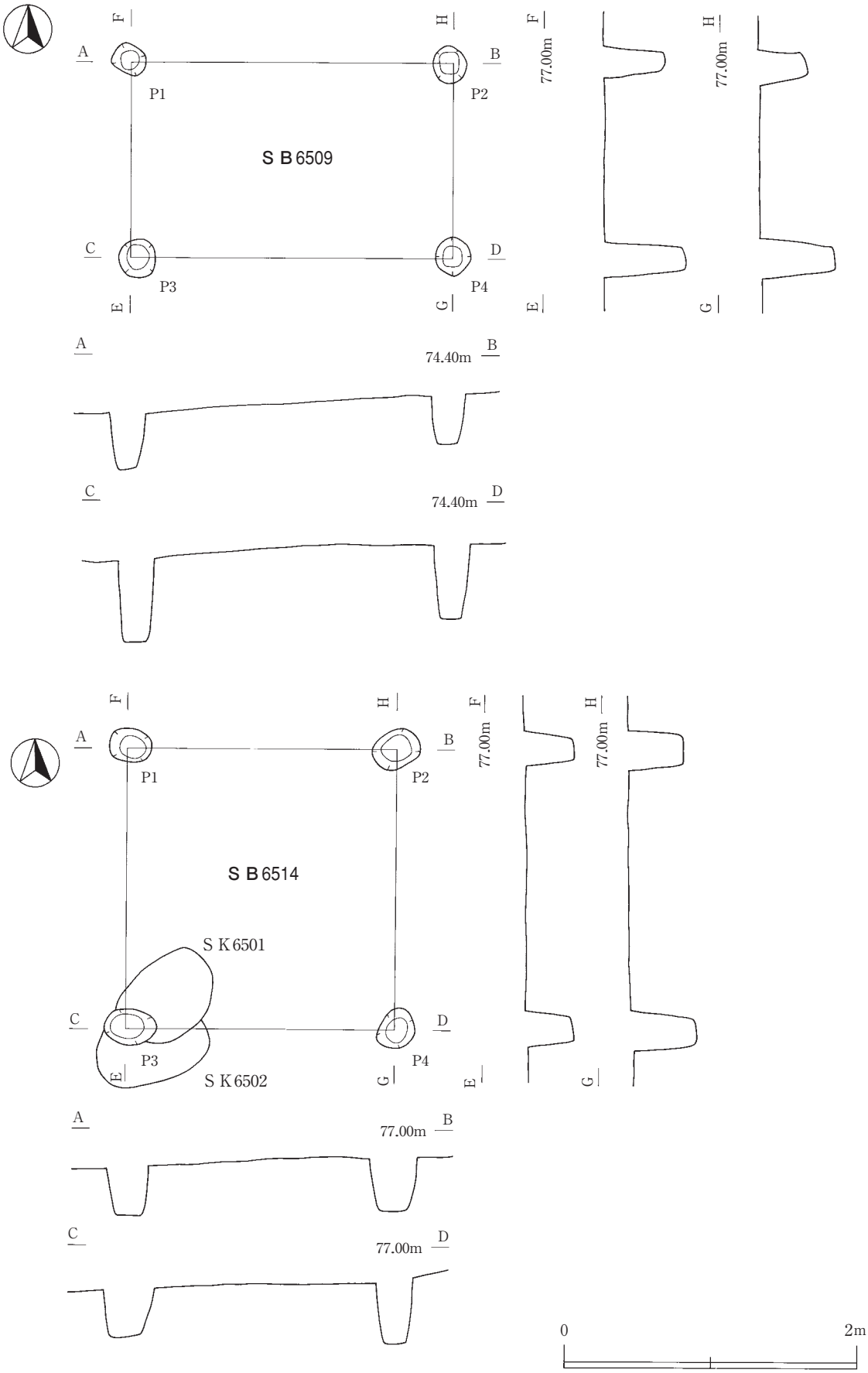
ＳＤ6510（第32図）　Ⅳ期相当

ＭＦ34・35・36グリッドの地山面で検出した。ＳＢ6509・6515と重複し、ＳＢ6515よりも古いが、ＳＢ6509については新旧関係不明である。ほぼ南―北を向く溝で、長さ3.65ｍ、幅0.1ｍ、検出面からの深さは0.14ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは急である。溝底面でピット２基（Ｐ１・２）検出した。各柱穴の底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜である。堆積土は１層である。各ピットの大きさは、径0.15～0.19ｍで、深さ0.2～0.26ｍである。遺物は出土しなかった。

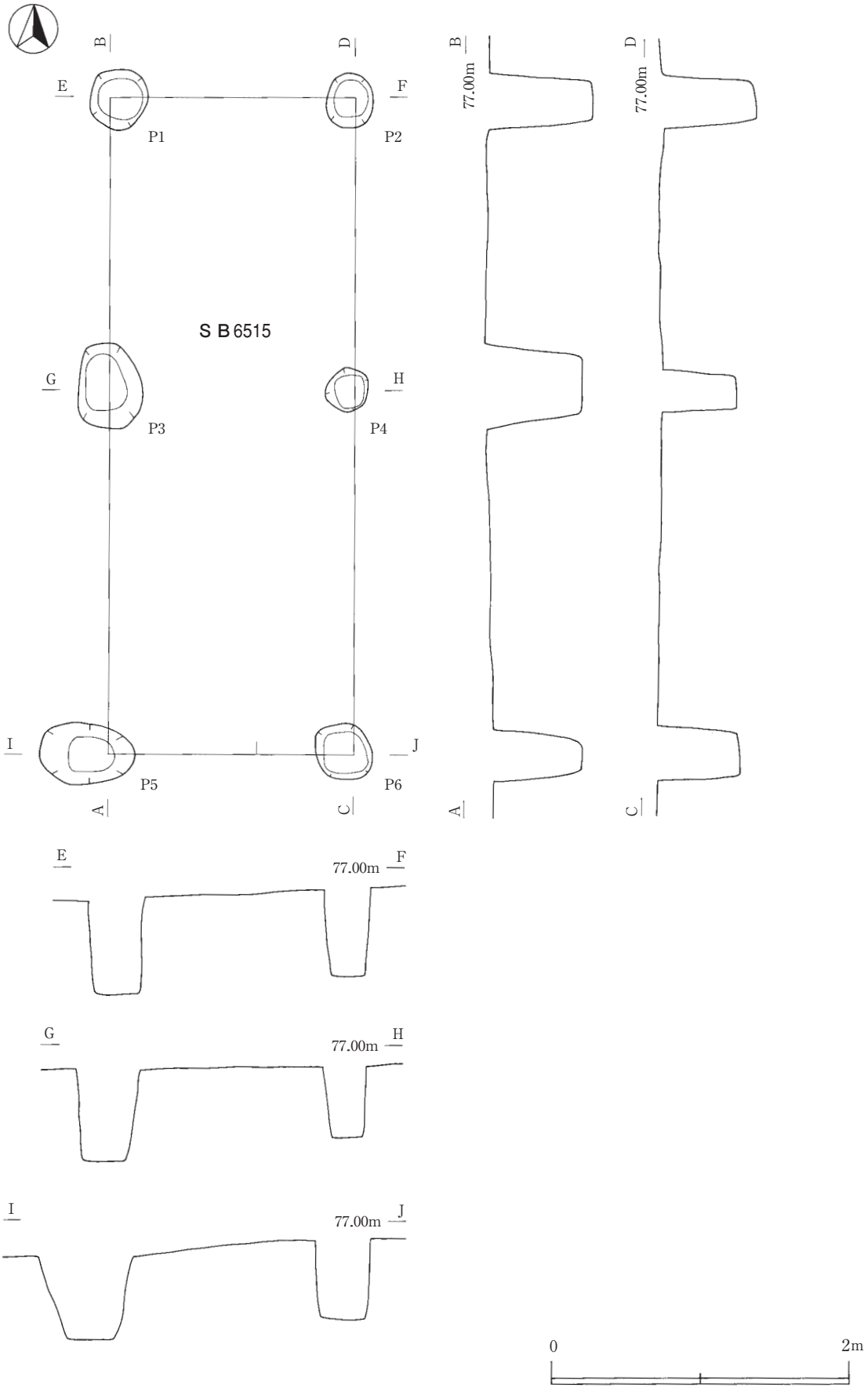
（５）土塁跡

ＳＦ1923（第29図）　Ⅳ期相当

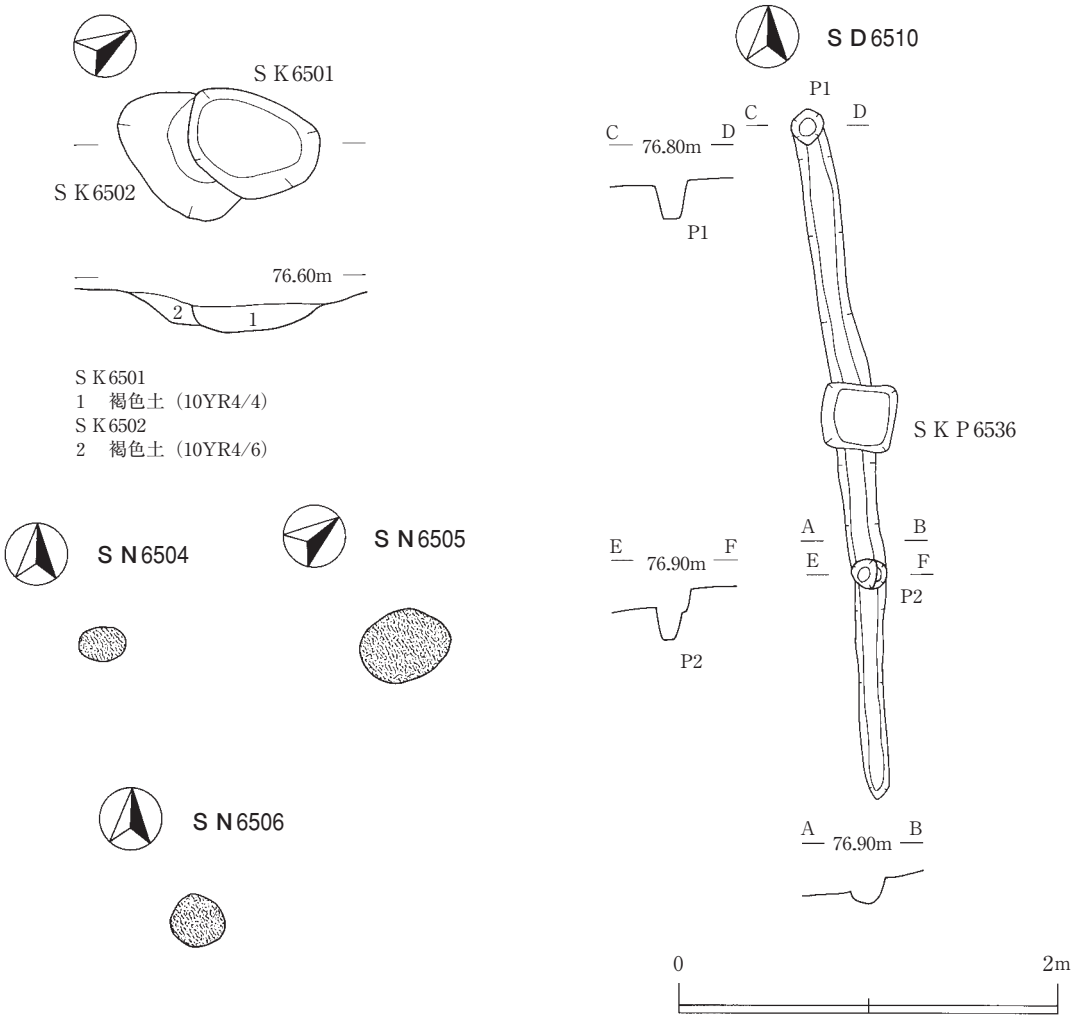
Ⅲ郭の南端～Ⅱ郭の東端～Ⅴ郭の東端の表土及び漸位層土直下で検出した。土塁の東側には竪掘と考えられるＳＤ6538が存在し、土塁の頂部から掘の底面まで、連続した急斜面となっていて人の侵入を拒んでいる。また、土塁の南側は比高差約12.9ｍの切岸状の急斜面でこちら側も容易に入り込めないようになっている。このような構造になっていることから、土塁は東側の竪掘と南側の切岸を合わせた巨大な防御施設であると考えられる。東・南の急斜面も土塁の一部と捉える。平面形は全長（西―東―北）92.2ｍを測るが、上端幅は1.1～1.2ｍで、基底幅は2.9～6.3ｍである。本遺構は一連の土塁であるが、その造成時の特徴から３つに区分することが出来る。１つ目はⅡ郭～Ⅲ郭～Ⅴ郭までの北に向かいながら高度を下げる部分。ここでは旧地形も現在の姿と大きな差はないと考えられ、沢から急傾斜で立ち上がる尾根状の地形を利用し、西側の斜面を若干削り取ってはいるものの、ほとんど手を加えずに土塁として利用している。２つ目はⅡ郭の部分。ここでは郭面を作り出す際に、東側と南側の斜面際を残し平坦面を掘り下げて造成し、土塁を作り出している。３つ目はⅡ郭～Ⅲ郭～Ⅳ郭までの西に向かいながら高度を下げる部分。ここではⅡ郭で作り出した土塁に連続して土を盛って土塁を作り出している。南側は一部崩落しているが、幾層にも土を盛り上げて土塁を作り出している様子が断面観察で見られた。



第30図　掘立柱建物跡（１）



第31図　掘立柱建物跡（２）



第32図　土坑・焼土遺構・溝跡

３　Ⅲ郭の検出遺構と出土遺物

（１）竪穴状遺構

ＳＫＩ7222（第34図、図版19―２）

ＭＬ・MM38グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ7223・7224・7243と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は北西側を近年に撹乱を受けて失っているが、検出した範囲で長軸（東―西）5.72m×短軸（北―南）4.56mの北側がＵ字型に開口する半楕円形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは0.76mである。付随する柱穴を４基検出したが、配置には規則性がなく、上屋の構造を想定するのが難しい。堆積土は11層に分けられ、Ⅲ期の整地の際に数回に渡り埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.16m～0.54mで、深さ0.24m～0.48mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7223（第34図、図版19―２）

MM38・39グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7222・7224・7243と重複し、ＳＫＩ7222・7243より古く、ＳＫＩ7224より新しい。平面形は北側を崩落で、西側を近年に受けた撹乱で失っており、更にⅡ期の遺構との重複により、全容を把握できなかったが、僅かに検出した範囲で長軸（東―西）3.6m×短軸（北―南）2.34mの方形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは0.5mである。堆積土は２層に分けられ、Ⅱ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7224（第34図）

MM37・38グリッドのＳＫＩ7223底面及びＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7222・7223・7243と重複し、本遺構が最も古い。平面形は西側を近年に受けた撹乱で失い、北側はＳＫＩ7223と重複していて、全容を把握できなかったが、検出した範囲で長軸（東―西）５m×短軸（北―南）3.32mの北側がＵ字型に開口する半楕円形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは0.4mである。本遺構はＳＫＩ7223造成の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7243（第34図）

ＭＫ38・39、ＭＬ38・39グリッドのＳＫＩ7222底面及びⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ7222・7223・7224と重複し、ＳＫＩ7222より古く、ＳＫＩ7223・7224より新しい。平面形は北東側を近年に撹乱を受けて失っているが、検出した範囲で長軸（東―西）11.58m×短軸（北―南）4.84mの北側が開口するコの字型の長方形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは1.14mである。付随する溝跡を１条検出した。溝跡は全長（北―南―東）3.96m、最大幅（北―南）0.26mを測り、壁に沿ってＬ字状に延びる。底面からの深さは0.06mである。堆積土は３層に分けたが、ＳＫＩ7222造成の際及びⅢ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7273（第35図）

ＭＫ31・32・33、ＭＬ31・32・33、MM32・33・34グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ7274・7275と重複し、本遺構が最も新しい。土層観察トレンチで南側を失ってはいるが、平面形は長軸（北東―南西）10.6m×短軸（北西―南東）10.4mの方形と推定され、検出面からの深さは北壁付近で0.48mである。底面は南に行くほど標高を下げるがほぼ平坦で、壁の傾きは急傾斜で立ち上がる。付随する溝跡１条と柱穴11基を検出した。検出した範囲で溝跡は全長（南―北―東―南）19.68m、最大幅（北―南）0.36mを測り、壁に沿って南側が開口し、コの字状に延びる。底面からの深さは0.08mで

ある。

堆積土は19層に分けたが、底面と考えられる。層の下に一括して埋め戻された痕跡が見られる事から、本遺構は１度、建て替えが行われていることが分かった。上位の１～17層は数回に渡り行われたⅢ期の整地の時に、数回に渡り埋め戻されたと考えられる。柱穴の大きさは径0.20～1.02mで、深さ0.10～0.82mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7274（第36図）

ＭＪ30・31・32、ＭＫ30・31・32グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7273・7275と重複し、ＳＫＩ7275より新しく、ＳＫＩ7273より古い。平面形は東側は調査できておらず全体は明らかでないが、検出できた範囲では長軸（北東―南西）9.86m×短軸（北西―南東）3.12mの南側が開口したコの字型の長方形と推定され、検出面からの深さは北壁付近で1.38mである。付随する溝跡１条を検出した。溝跡は検出した範囲で全長（北西―南東）1.86m、最大幅（北東―南西）0.22mを測り、北壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.1mである。堆積土は幾重にも重なる様に見えるが、Ⅱ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。柱穴の大きさは径0.22～1.86mで、深さ0.10mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7275（第36図）

ＭＫ31・32、ＭＬ31・32グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7273・7274と重複し、本遺構が最も古い。平面形は東側は調査できておらず全体は明らかでないが、検出した範囲では長軸（北東―南西）6.42m×短軸（北西―南東）3.4mの南側が開口するコの字型の長方形と推定され、検出面からの深さは北壁付近で1.04mである。付随する溝跡１条を検出した。溝跡は検出した範囲で全長（南東―北東―南西）8.4m、最大幅（南西―北東）0.8mを測り、壁に沿ってＬ字状に延びる。底面からの深さは0.46mである。堆積土は３層に分けたが、ＳＫＩ7274造成の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。柱穴の大きさは径0.08～0.84mで、深さ0.10mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7290Ａ（第37図）

ＭＩ31・32グリッドの南西向き斜面のＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7290Ｂ・7291・7294と重複し、ＳＫＩ7290Ｂより新しく、ＳＫＩ7291・7294より古い。本遺構は既存のＳＫＩ7290Ｂの底面を整地し、壁を共用し、溝を作り直して同じ場所で再造成したもの考えられる。平面形は西側を後の整地で、南及び東側を崩落で失っているが、検出した範囲で長軸（北東―南西）9.56m×短軸（北西―南東）4.56mの南西側が開口するコの字型の長方形と推定され、最も深い北側で検出面からの深さは0.48mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。付随する溝跡１条と柱穴１基を検出した。溝跡は全長（北西―南東）4.26m、最大幅（北東―南西）0.3mを測り、直線的に延びる。底面からの深さは0.1mである。堆積土は２層に分けられ、Ⅱ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.03～9.56mで、深さ0.10～0.48mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7290Ｂ（第37図）

ＭＩ31・32グリッドの南西向き斜面のＳＫＩ7290Ａ底面及びＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7290Ａ・7291・7294と重複し、本遺構が最も古い。平面形は西側を後の整地、南及び東側を崩落で失っているが、検出した範囲で、長軸（北東―南西）9.56m×短軸（北西―南東）4.56mの西側が開口するコの字型の長方形と推定され、最も深い北側で検出面からの深さは0.62mである。底面は平坦で、壁の傾

きは緩やかである。付随する溝跡１条と柱穴２基を検出した。Ｄ２は全長（北西―南東）4.18m、最大幅（北東―南西）0.24mを測り、直線的に延びる。底面からの深さは0.18mである。堆積土は２層に分けたが、ＳＫＩ7290Ａ造成の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.24～9.56mで、深さ0.12～0.62mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7291（第38図）

ＭＨ32・33グリッドの南西向き斜面の表土下の漸位層下面及びⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ7290Ａ・Ｂ7294と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は南側と南東の隅を崩落により失っているが、検出した範囲で、長軸（北西―南東）5.28m×短軸（北東―南西）4.3mの南西側がＵ字型に開口する半楕円形を呈し、最も深い北東側で検出面からの深さは0.86mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。付随する石囲い炉１基・溝跡１条・柱穴２基を検出した。炉跡の平面形は長軸（北西―南東）1.24m×短軸（北東―南西）0.88mの楕円形を呈し、底面からの深さは0.28mである。覆土には粉状の炭化物が充填していて、上面に４点の角礫が環状に配されていた。溝跡は全長（南―北―南東）5.8m、最大幅（北西―南東）0.41mを測り、弧を描きながら延びる。底面からの深さは0.08mである。堆積土は下位が一括して埋め戻されたものと考えられ、上位が斜面上方からの流れ込みと考えられる。各柱穴の大きさは径0.41～5.80mで、深さ0.08～0.86mである。遺物は青磁が１点、白磁が２点、染付が１点出土した。

ＳＫＩ7294（第38図）

ＭＨ32・33、ＭＩ31・32・33グリッドの南西向き斜面のＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7290Ａ・Ｂ・7291と重複し、ＳＫＩ7290Ａ・Ｂより新しく、ＳＫＩ7291より古い。平面形は後の整地や崩落によって一部を失っているが、長軸（北東―南西）7.12m×短軸（北西―南東）６mの南西側が開口したコの字型の隅丸長方形と推定され、最も深い北東側で検出面からの深さは0.6mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかで不明瞭ながら階段状である。付随する柱穴を１基検出した。堆積土は８層に分けた。各柱穴の大きさは径247.12で、深さ0.20～0.60mである。遺物は出土しなかった。

（２）井戸跡

ＳＥ1720（第39図、図版18・20―１）

ＭＪ34・35グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）2.61m×短軸（北西―南東）2.38mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.9mである。底面は上面に比して狭小で、丸みを帯びている。壁の傾きは緩やかであり、東側には小さな段差が認められるが井戸跡本来の掘り込みかは定かではない。堆積土は４層に分けられ、下位の２層は井戸を廃棄した際、一括して埋め戻されたものと考えられる。中から拳大の礫が７点検出した。そのうちの２個には黒く焼けた痕跡が見られた。また、上位の２層は腐食した植物遺体が充填された層と遺構周辺に広がる表土からの漸位層主体で、井戸の廃棄時には、完全に埋め戻されてはいなかったと考えられる。遺物は廃棄時に投げ込まれたと考えられる礫の外に、卒塔婆が１点出土した。

ＳＥ7238（第19図、図版18・20―２）

ＭＯ34グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）2.89m×短軸（東―西）2.79mの円形を呈し、検出面からの深さは2.09mである。底面は広く平坦で、現在でも水が湧出している。

壁の傾きは西側が急であり、東側はやや緩やかで小さな段差が認められるが井戸本来の掘り込みであるかは定かではない。堆積土は６層に分層されたが、どの層位にも明確な差異は認められず、拳大から人頭大の礫が全層位から出土していることから、廃棄時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は中世陶器が２点、自然木と思われる木片が１点出土した。

ＳＥ7300（第40図）

ＭＨ32・33グリッドのＳＫＩ7291底面で検出した。ＳＫＩ7291と重複しているが、新旧関係は不明である。本遺構の東側高所には除去不可能な木根があり崩落が十分に予想されたことと、南東側が急斜面であったため、安全面を考慮して、上面形を検出し約1.5m掘り下げた時点で調査を切り上げた。平面形は長軸1.72m（北東―南西）×短軸1.44mの楕円形を呈する。検出面から1.54mの深さまで検出した。なお、ボーリング棒による試掘では更に１m以上は深くなるのではないかと予想される。壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層でⅡ郭に特徴的に見られる明褐色土に小礫が混入する基盤層土が充填されていたことから、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は染付が１点出土した。

（３）　土坑

ＳＫ1833（第40図）

ＭＮ37グリッドのⅣ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.09m×短軸（北西―南東）0.74m の楕円形を呈し、検出面からの深さは0.4m である。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は１層で、表土・漸位層土と同質の土であるため、遺構廃絶時には開口したままで、後に自然堆積したものと考えられる。覆土中から出土した４点の角礫は流れ込んだものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ1993（第40図）

ＭＭ37グリッドの北向き緩斜面のⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.58m×短軸（東―西）0.56mの円形で北側は斜面に面していて、一部崩落している。検出面からの深さは0.16mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7293（第40図）

ＭＩ31グリッドの南向きの斜面際のⅢ期生活面で検出した。ＳＫＩ7290Ａ・Ｂ・7294と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長軸（北―南）1.2m×短軸（東―西）1.13mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.58mである。底面は平坦であるが検出面に平行に南側に傾斜していて、壁の傾きはやや急である。堆積土は単層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7296（第40図）

ＭＯ33グリッドのＩ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.12m×短軸（東―西）1.05m略円形を呈し、検出面からの深さは0.41mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、Ⅲ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第33図　Ⅲ郭遺構配置図

（４）溝跡

ＳＤ1816（第41図）

ＭＮ32～38グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ7222・7273と重複し、ＳＫＩ7222・7273よりも古い。平面形は、長さ22.97ｍ×幅4.76ｍ測り、グリッドの36ラインのやや北側で最も幅が狭く、南北に行くに従って、鼓のようにそれぞれ幅を広げる。検出面からの深さは0.56ｍである。箱掘の形状を示し、底面は平坦でグリッドの34ライン付近から南側に行くに従い徐々に標高を下げ、壁の傾きは緩やかである。堆積土は10層に分けられ、観察した箇所によって異なった色・具合・混入物が見られるものの、Ⅱ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は珠洲系が１点出土した。

ＳＤ1903（第42図）

ＭＨ36・37グリッドのⅢ期生活面で検出したⅡ郭西斜面下の裾に沿って北東―南西に延びる溝で。平面形は長さ6.6ｍ×幅0.19ｍを測り、緩やかに蛇行しながら延びる。検出面からの深さは0.05ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6401（第42図）

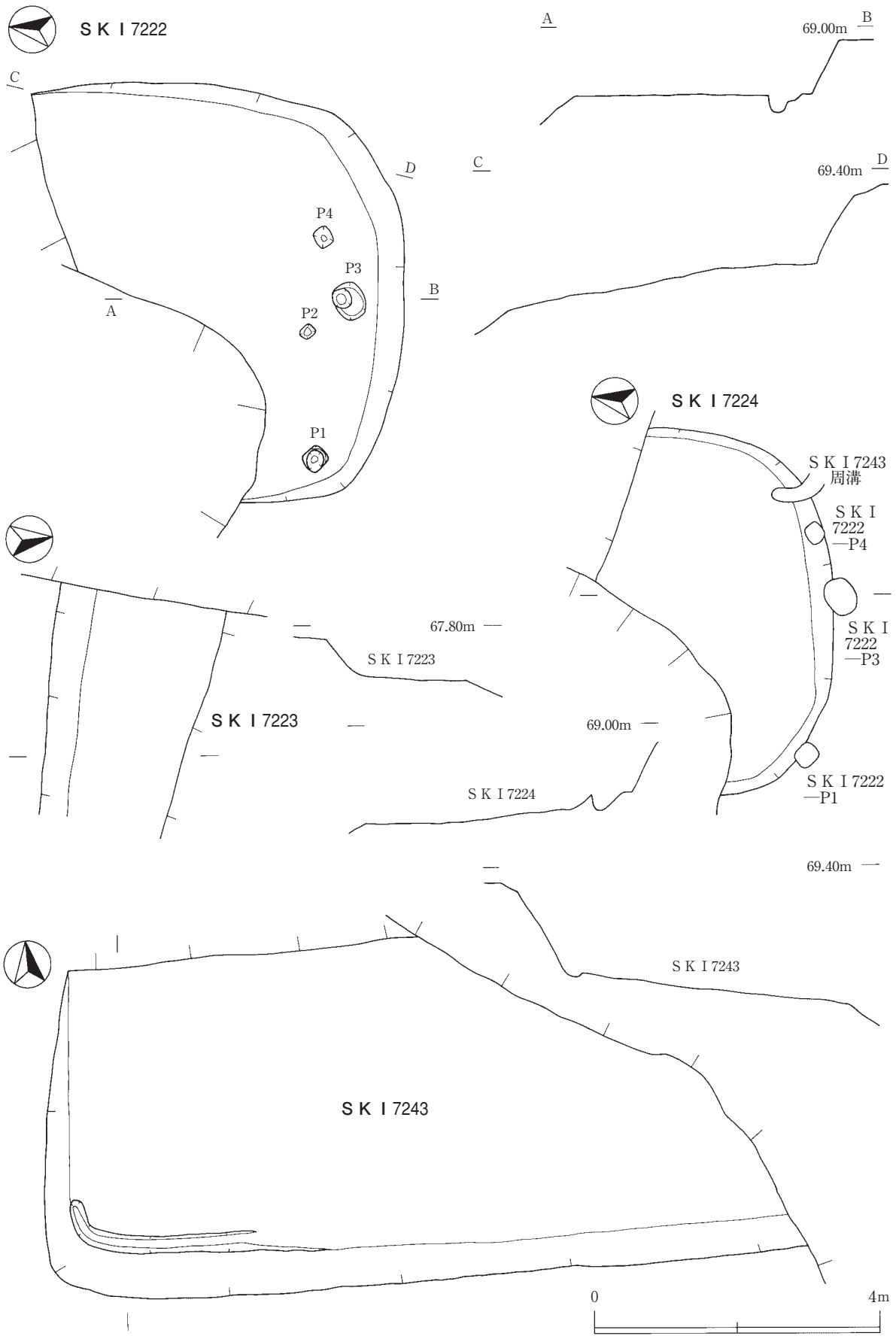
ＭＥ39・40、ＭＦ38・39、ＭＧ38グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＤ6403と重複し、本遺構が新しい。蛇行しながら延びる溝である。両端を削平されているが、検出した範囲の平面形は長さ14.4ｍ×幅0.35ｍを測り、検出面からの深さは0.1ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6403（第42図）

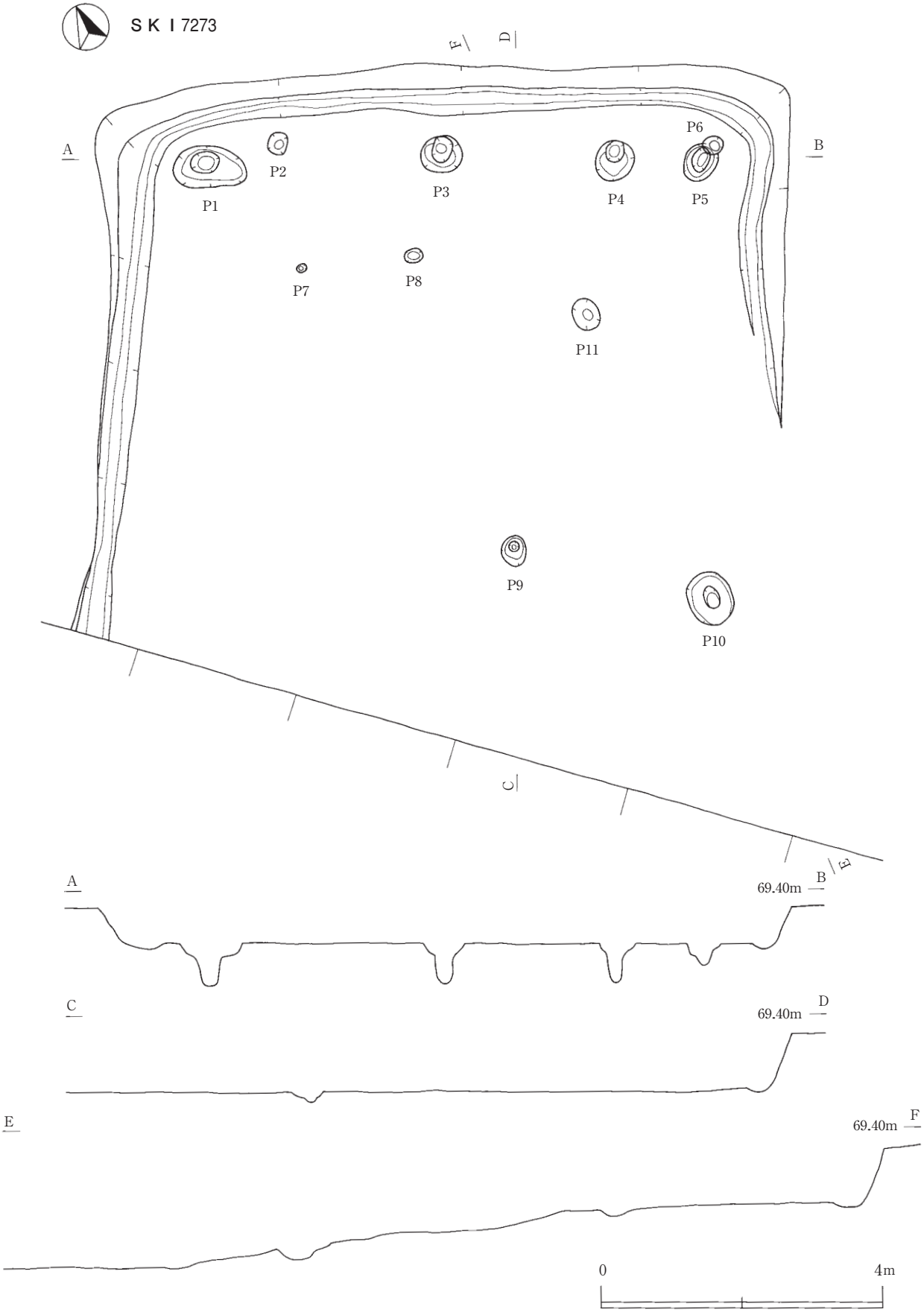
ＭグリッドのⅢ期生活面で検出した。後の整地で両端を失っているが、検出した範囲の平面形は長さ9.2ｍ×幅0.28ｍを測り、やや蛇行しながら延びる。途中で途切れていて明言できないが、ＳＤ6405と同一の連続した溝であることも考えられる。検出面からの深さは0.13ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。付随する柱穴を２基検出した。各柱穴の平面形は、Ｐ１が長軸（北―南）0.28ｍ×短軸（東―西）0.22ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.41ｍ。Ｐ２が長軸（北西―南東）0.27ｍ×短軸（北東―南西）0.23ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.46ｍである。堆積土は１層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器が１点出土した。

ＳＤ6405（第42図）

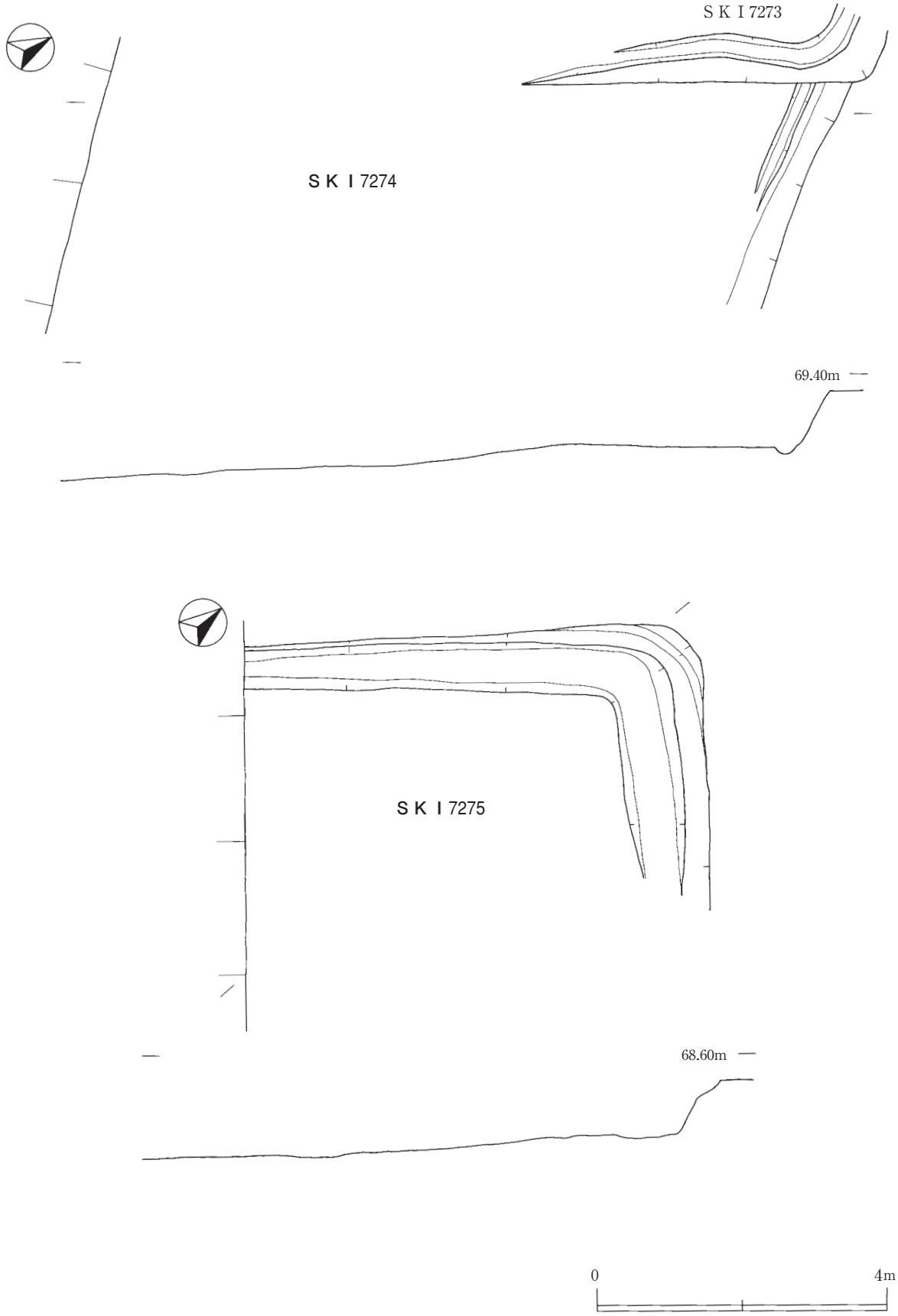
ＭＥ40グリッドのⅢ期生活面で検出した。後の整地で両端を失っているが、検出した範囲の平面形は長さ3.5ｍ×幅0.2ｍを測り、やや南側に湾曲しながら延びる。途中で途切れていて明言できないが、ＳＤ6403と同一の連続した溝であることも考えられる。検出面からの深さは0.04ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、Ⅳ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。


ＳＫＩ7222
A
B
C
D
P1
P2
P3
P4
69.00m
69.40m
ＳＫＩ7224
ＳＫＩ7243
周溝
ＳＫＩ
7222
—P4
ＳＫＩ
7222
—P3
ＳＫＩ7222
—P1
67.80m
ＳＫＩ7223
ＳＫＩ7223
69.00m
ＳＫＩ7224
69.40m
ＳＫＩ7243
ＳＫＩ7243
0
4m

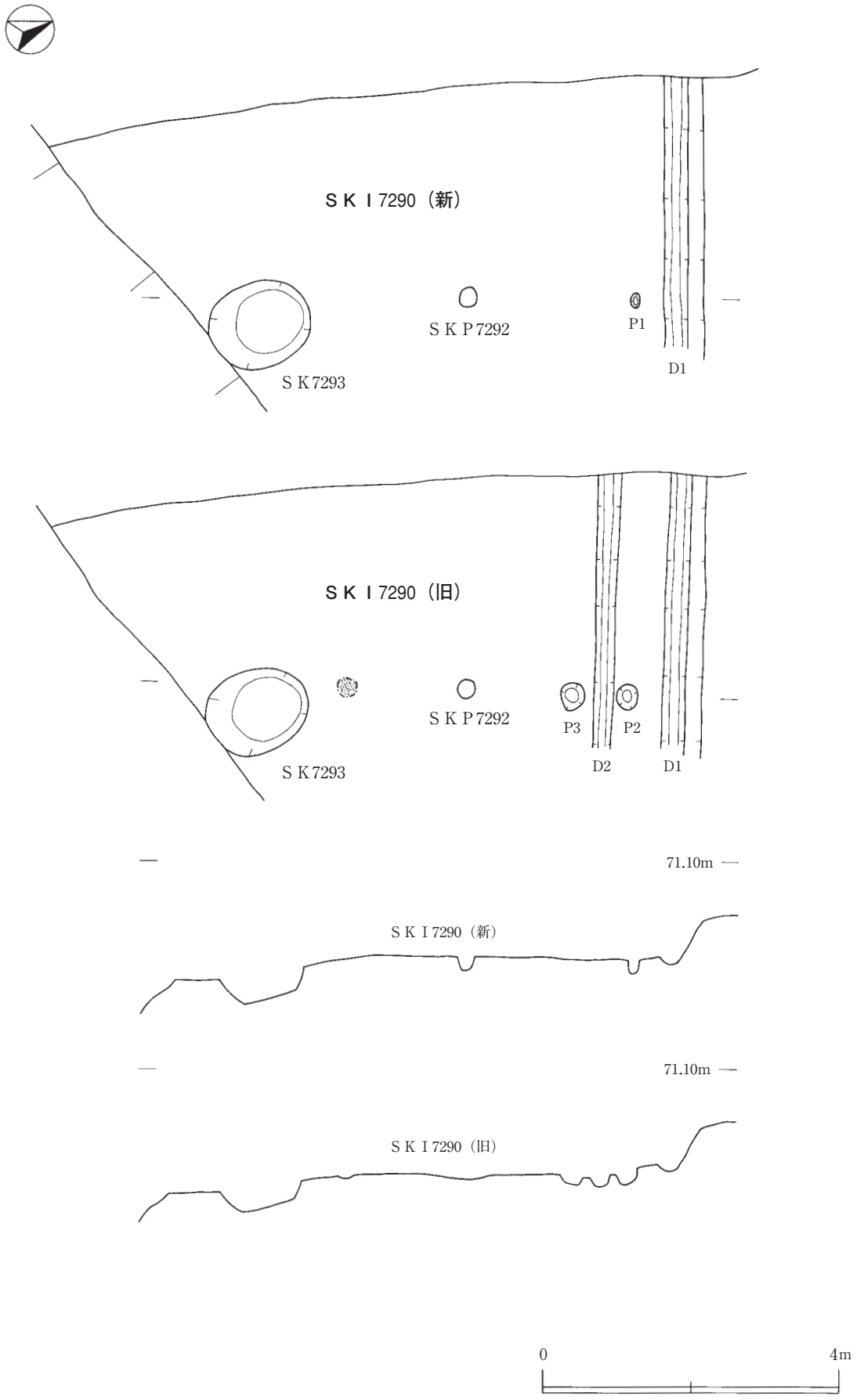
第34図　竪穴状遺構（１）


ＳＫＩ7273
A
B
C
D
E
F
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
69.40m
69.40m
69.40m
0
4m

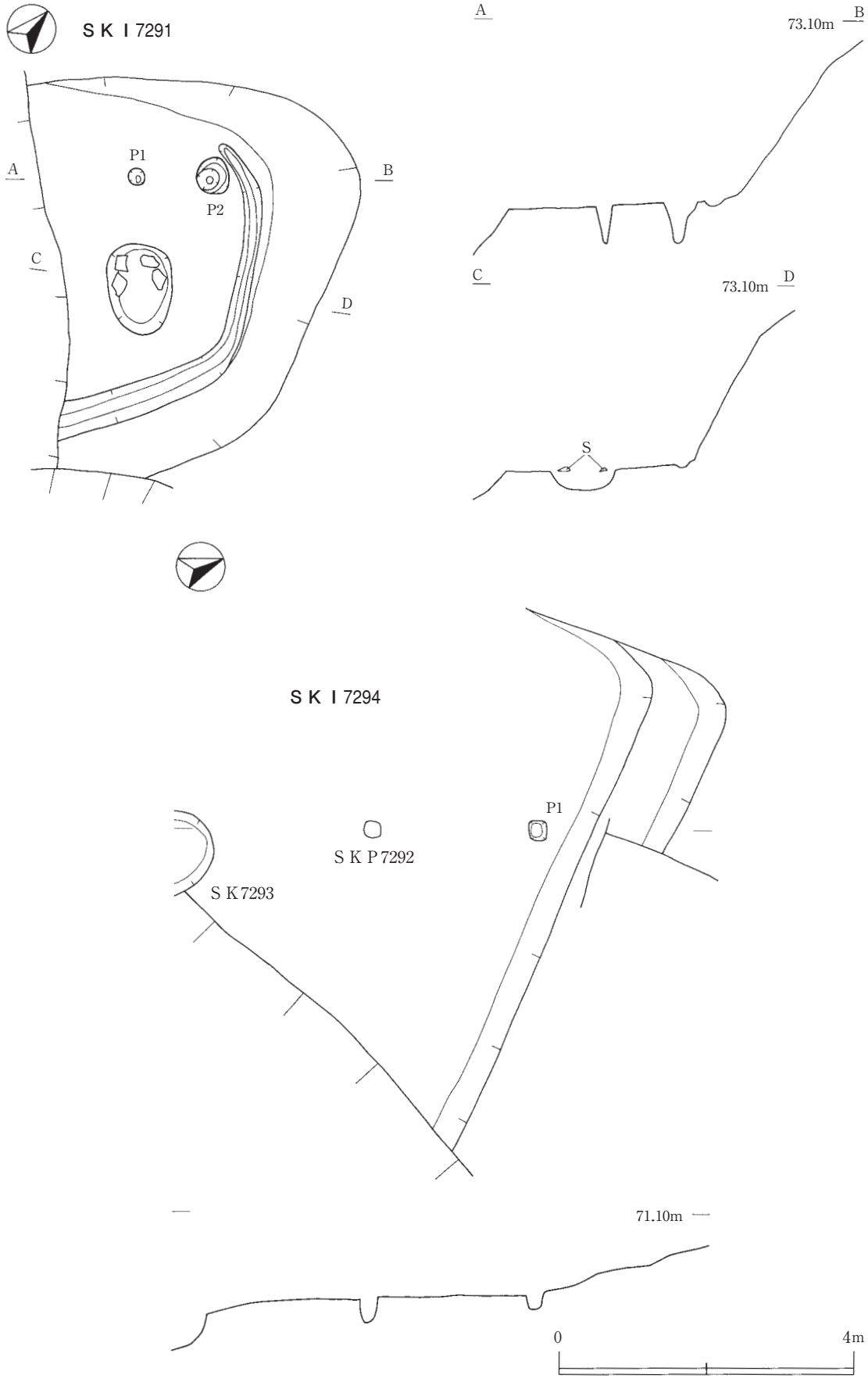
第35図　竪穴状遺構（２）



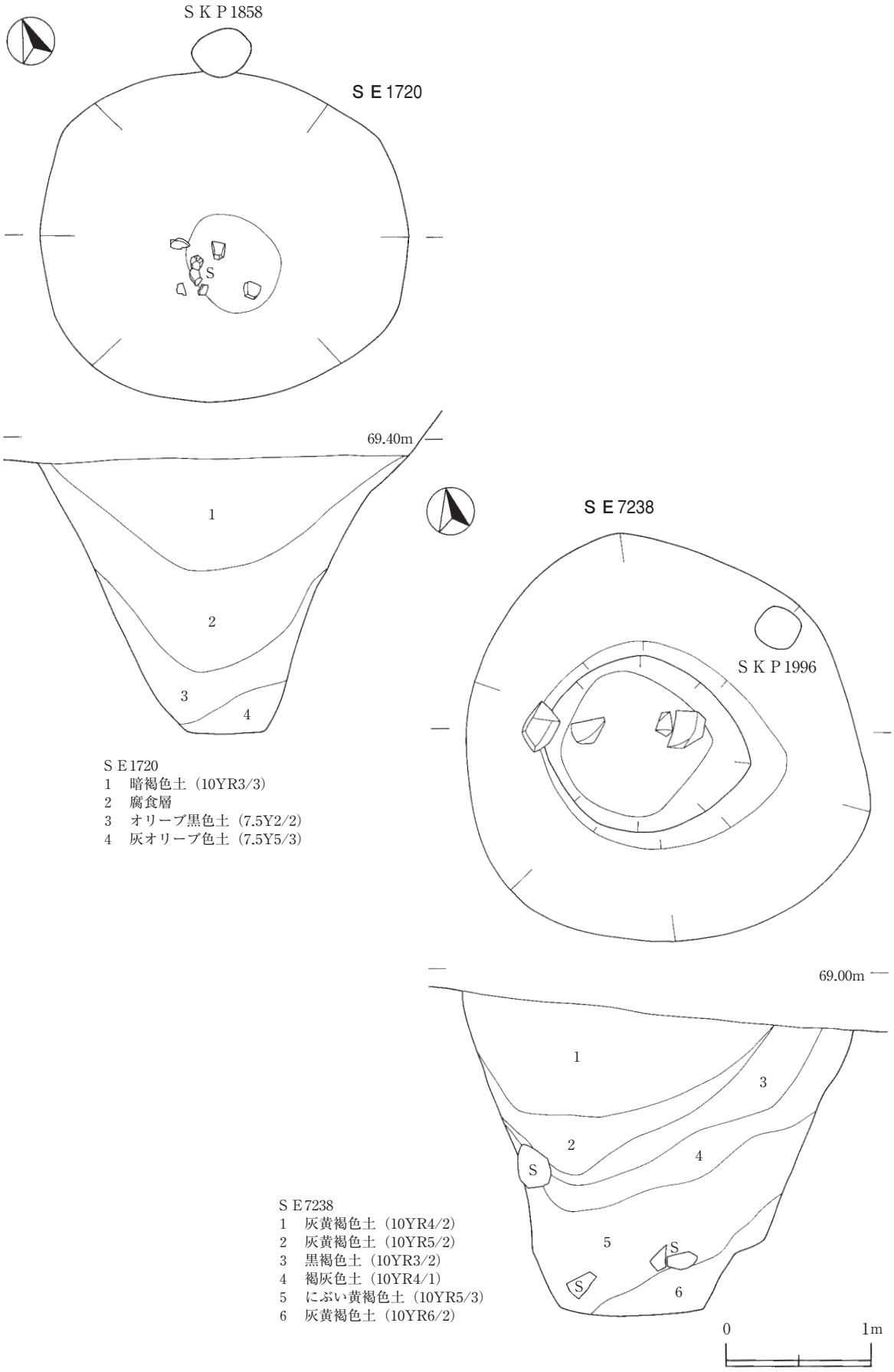
第36図　竪穴状遺構（３）


ＳＫＩ7290（新）
ＳＫＰ7292
P1
D1
ＳＫ7293
ＳＫＩ7290（旧）
ＳＫＰ7292
P3
P2
D2
D1
ＳＫ7293
71.10m
ＳＫＩ7290（新）
71.10m
ＳＫＩ7290（旧）
0
4m

第37図　竪穴状遺構（４）


ＳＫＩ7291
A
B
C
D
P1
P2
73.10m
73.10m
S
ＳＫＩ7294
P1
ＳＫＰ7292
ＳＫ7293
71.10m
0
4m

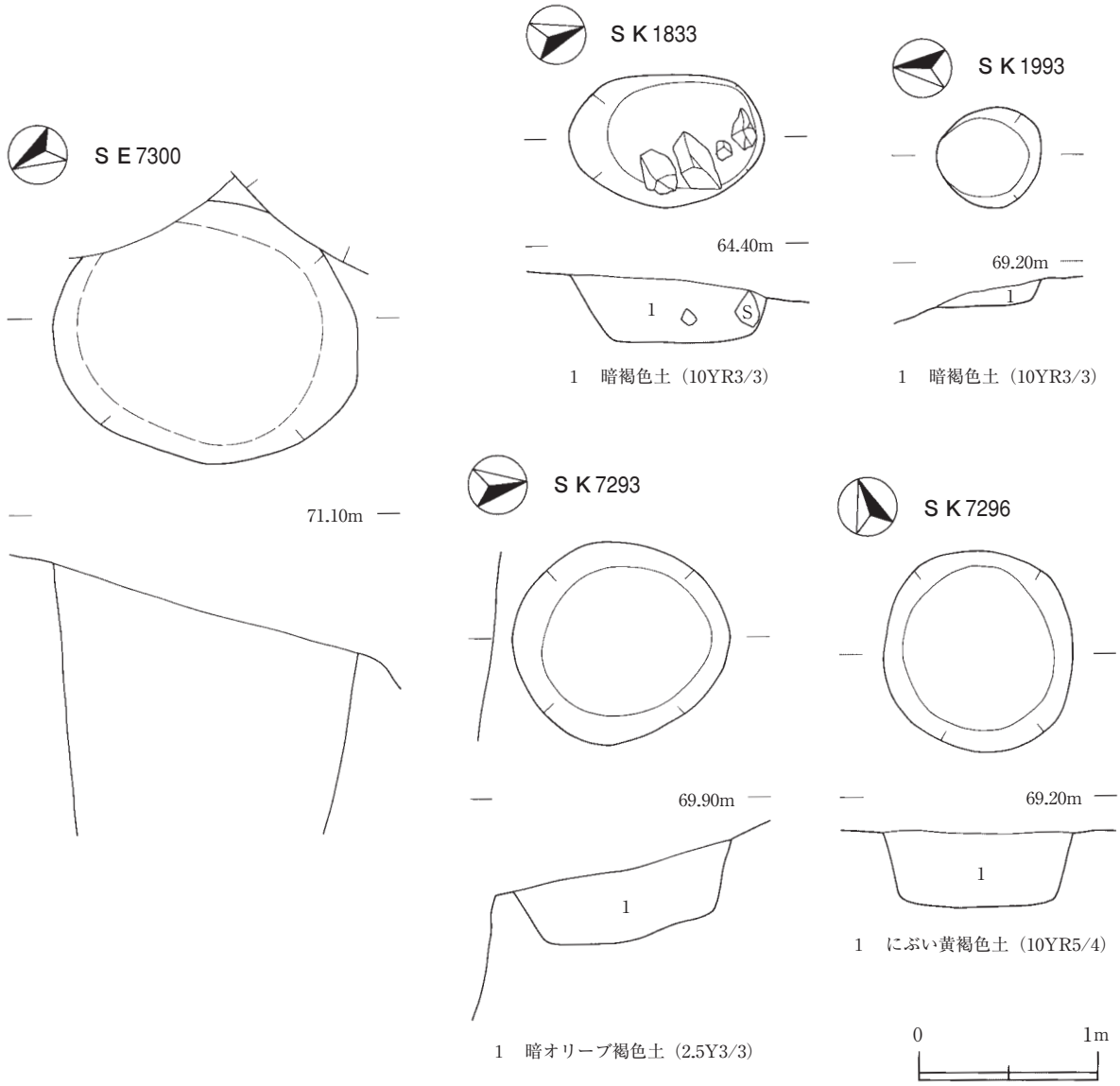
第38図　竪穴状遺構（５）



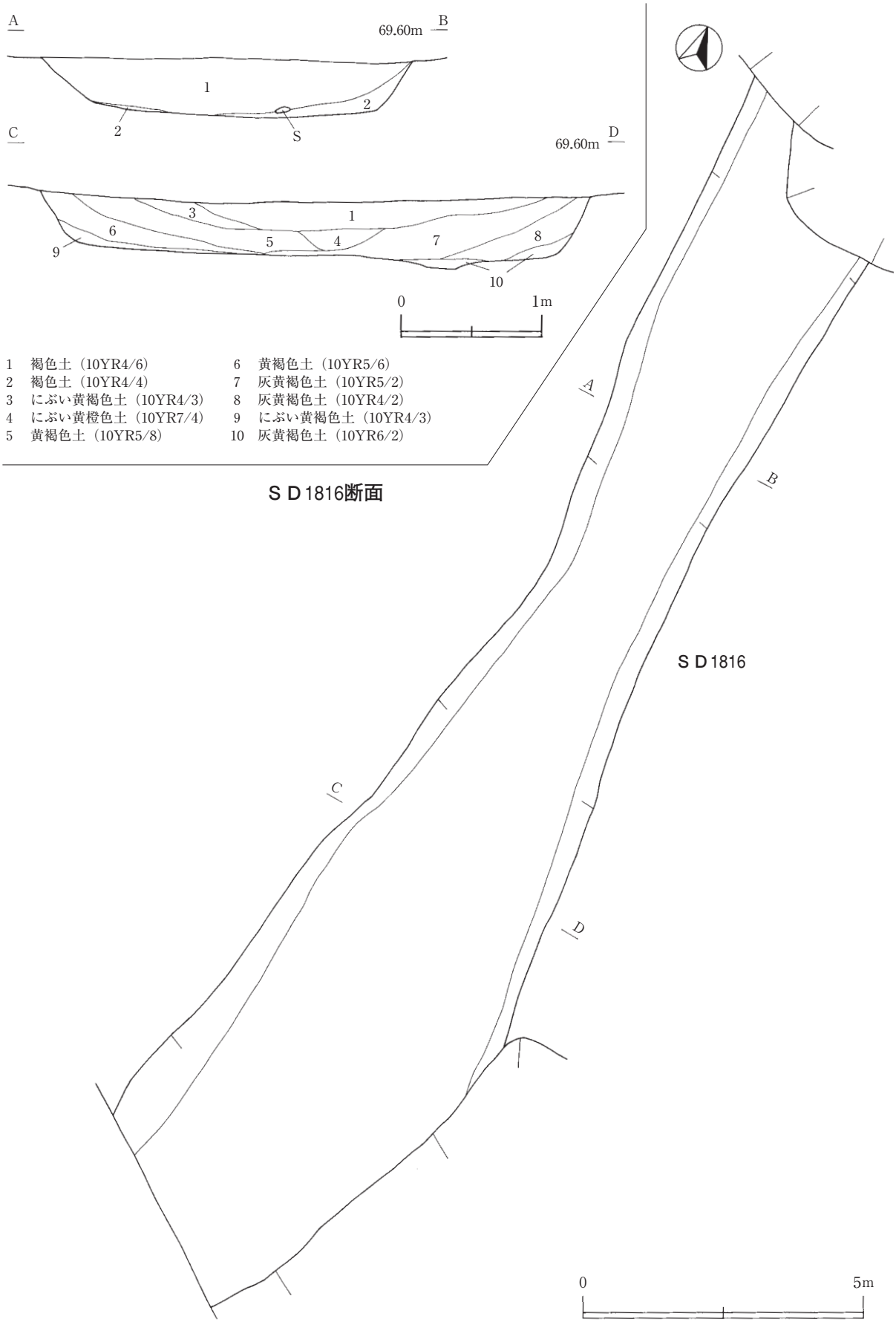
ＳＥ1720
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　腐食層
3　オリーブ黒色土（7.5Y2/2）
4　灰オリーブ色土（7.5Y5/3）

ＳＥ7238
1　灰黄褐色土（10YR4/2）
2　灰黄褐色土（10YR5/2）
3　黒褐色土（10YR3/2）
4　褐灰色土（10YR4/1）
5　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
6　灰黄褐色土（10YR6/2）

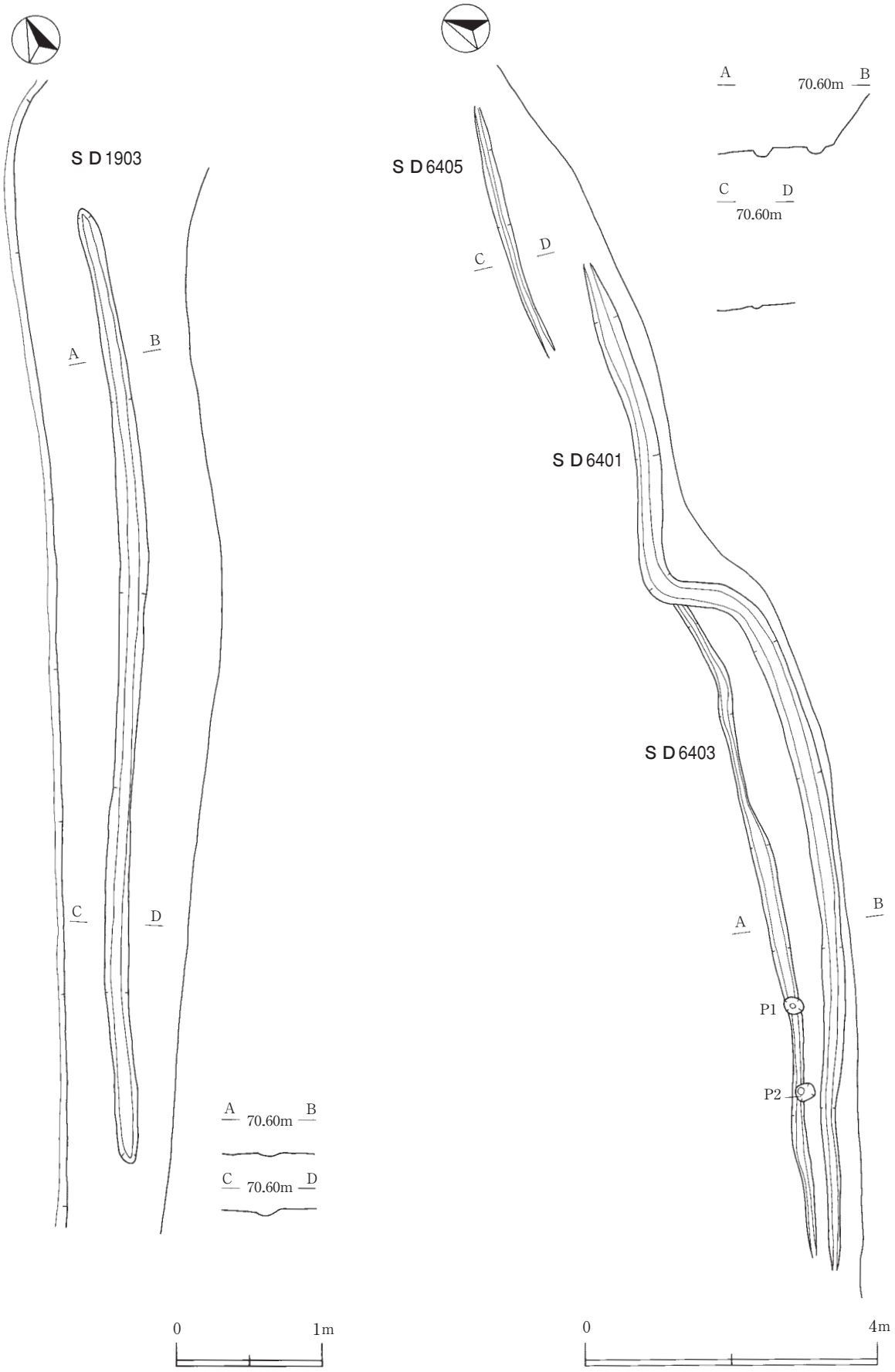
第39図　井戸跡


ＳＥ7300
71.10m
ＳＫ1833
64.40m
1
S
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＫ1993
69.20m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＫ7293
69.90m
1
1　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
ＳＫ7296
69.20m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
0
1m

第40図　井戸跡・土抗


A
B
69.60m
1
2
2
S
C
D
69.60m
3
1
6
5
4
7
8
9
10
0
1m
1　褐色土（10YR4/6）
2　褐色土（10YR4/4）
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
4　にぶい黄橙色土（10YR7/4）
5　黄褐色土（10YR5/8）
6　黄褐色土（10YR5/6）
7　灰黄褐色土（10YR5/2）
8　灰黄褐色土（10YR4/2）
9　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
10　灰黄褐色土（10YR6/2）
ＳＤ1816断面
A
B
C
D
ＳＤ1816
0
5m

第41図　溝跡（１）


ＳＤ1903
A
B
C
D
A 70.60m B
C 70.60m D
0
1m
ＳＤ6405
C
D
A
70.60m
B
C
D
70.60m
ＳＤ6401
ＳＤ6403
A
B
P1
P2
0
4m

第42図　溝跡（２）

第４表　Ⅲ郭出土遺物一覧表（１）

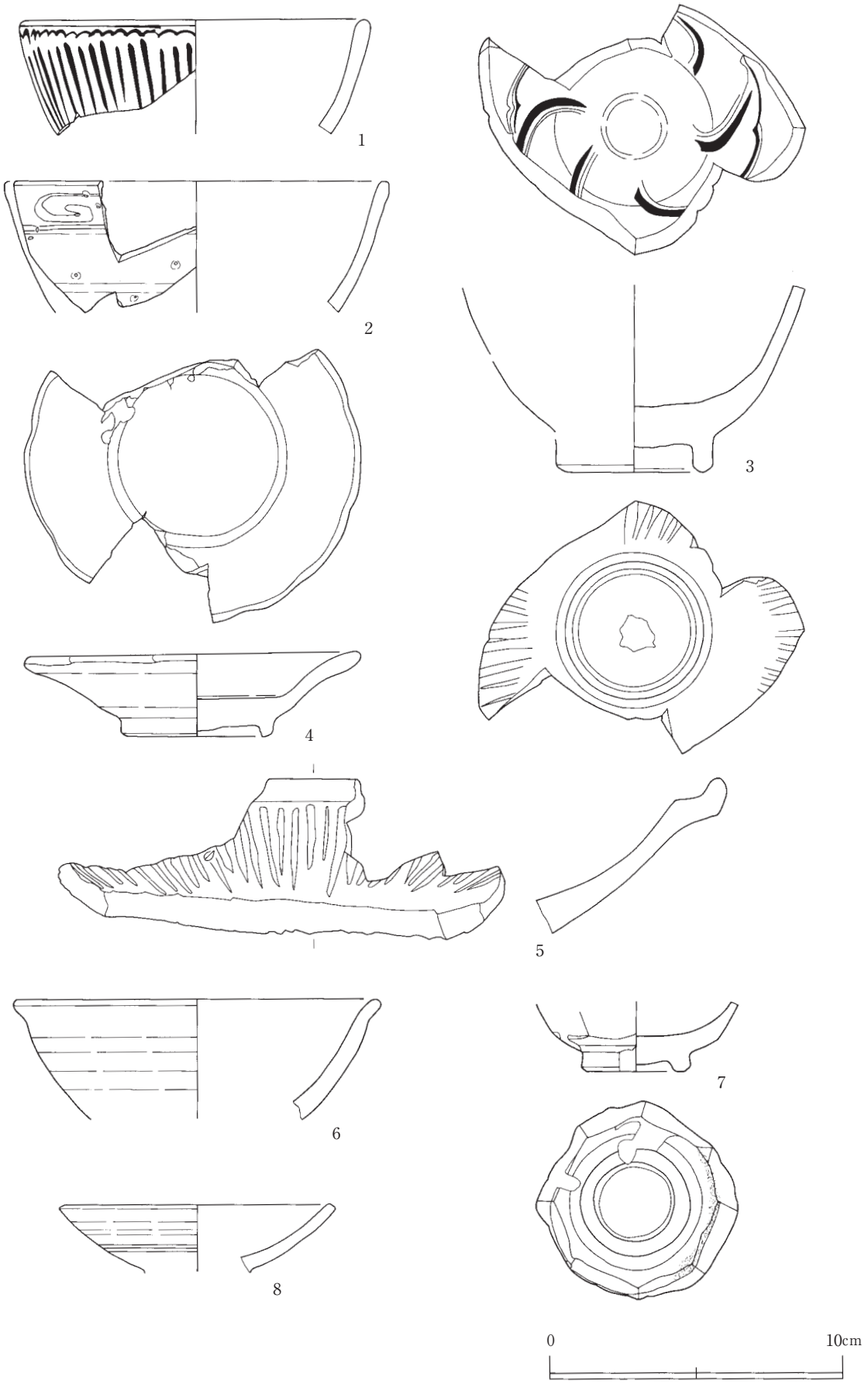
挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
43- 1	40- 1	MH38	磁器	青磁	碗	(11.6)	—	—	15Ｃ後～16Ｃ前	蓮弁文
2	2	SD1816	磁器	青磁	碗	(12.9)	—	—	14Ｃ末～15Ｃ	雷文
3	3	MH34	磁器	青磁	碗	—	—	(4.6)	15Ｃ後	
4	4	MK32	磁器	青磁	Ⅲ	(11.1)	2.9	(4.6)	15Ｃ後～16Ｃ	
5	5	MK38・39	磁器	青磁	盤				15Ｃ後～16Ｃ前	
6	41- 1	ML31	磁器	白磁	碗	(12.2)	—	—	15Ｃ前	
7	3	MO36	磁器	白磁	碗	—	—	(3.3)	15Ｃ後～16Ｃ前	
8	2	ML39	磁器	白磁	Ⅲ	(9.0)	—	—	15Ｃ後～16Ｃ前	
44- 9	4	MH35	磁器	染付	碗	—	—	—		
10	5	MK38	磁器	染付	碗	—	—	—		
11	6	SKI7291	磁器	染付	Ⅲ	—	—	(4.7)		
12	7	MH33	磁器	染付	Ⅲ	—	—	(9.5)		
13	8	MH32・34	陶器	珠洲系	擂鉢	(42.2)	17.1	(17.0)		MI45・MK44と接合
45-14	9	SD1816	陶器	珠洲系	擂鉢	(31.5)	—	—		MO33通過＋MO32
15	10	MI32	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		片口鉢MI45と接合
16	11	ML39	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		MD47と接合
17	12	MI35	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
46-18	13	MH32	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
19	14	NH34	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
20	15	MM34	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
21	—	ML39	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
22	16	MO33	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
23	—	MI32	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
24	—	MH34	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
47-25	—	MH34	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
26	—	MJ32	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
27	—	SE7238	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(14.7)		
28	—	ML39	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(15.0)		
48-29	17	MO36	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
30	18	MK32	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
31	19	MH34	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
32	20	MK31	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
33	21	MH34	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
48-34	42- 1	SKI7273	土器	瓦質土器	鉢か風炉	—	—	—		
35	3	MN32	磁器	朝鮮青磁	Ⅲ	(8.3)	2.8	(3.4)	15Ｃ代	
36	2	SKI7274	陶器	瀬戸・美濃	Ⅲ	(10.4)	—	—		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、Ａ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径を示す。なお、法量の（　）内の数値は推定値である。

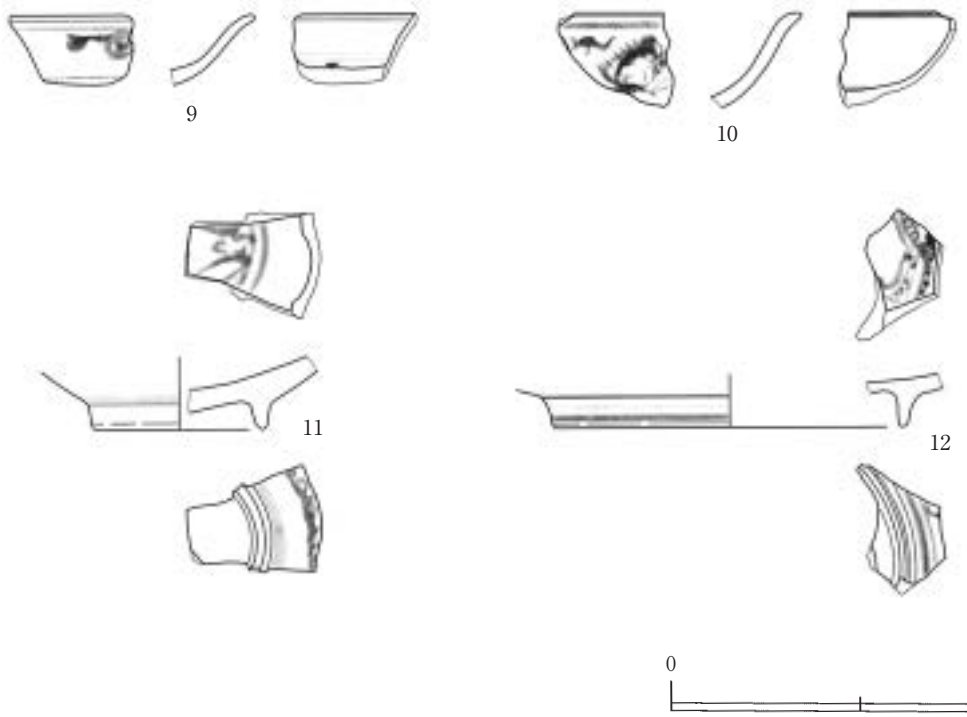
第５表　Ⅲ郭出土遺物一覧表（２）

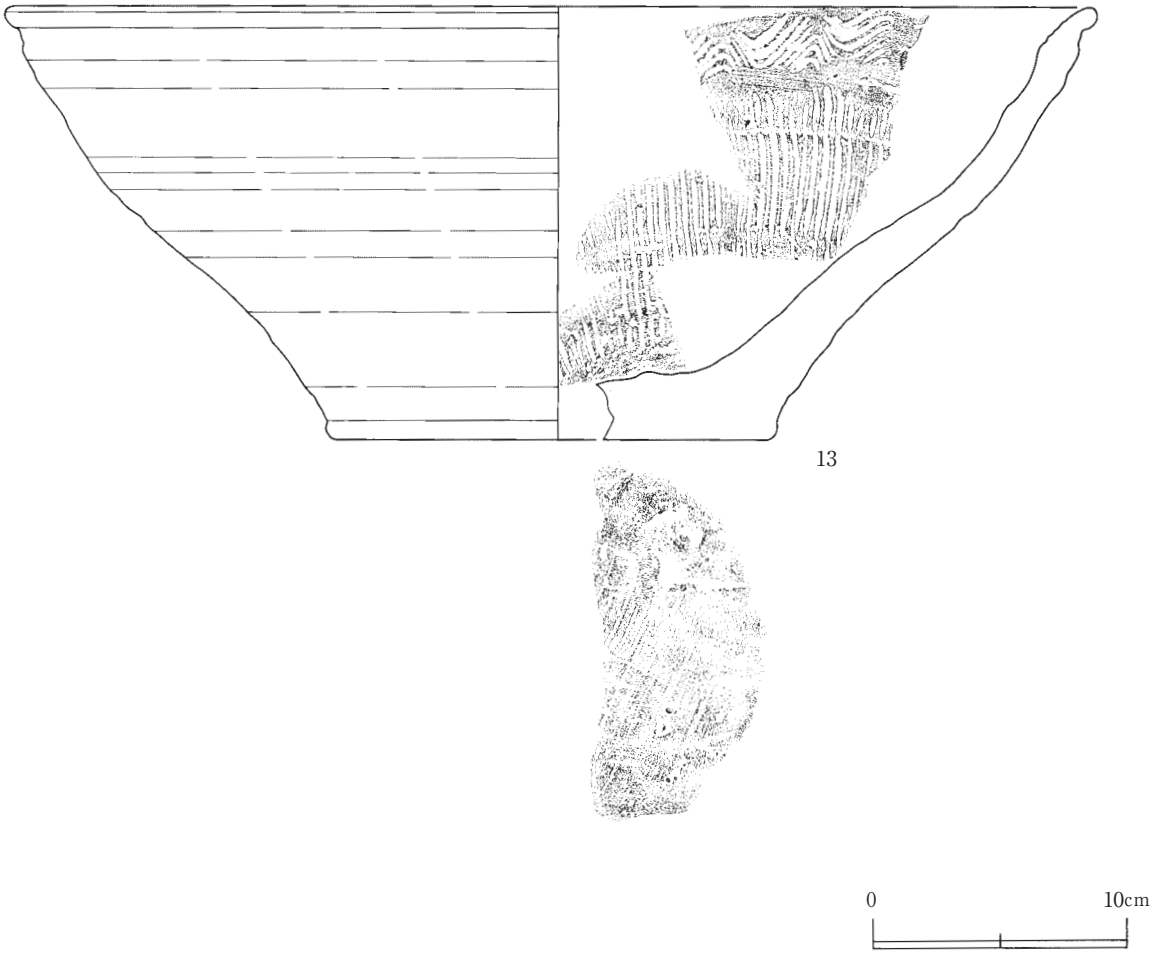
挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
37	4	MO33	陶器	瀬戸･美濃	天目茶碗	—	—	—		
38	5	MI33	金属	—	釘	6.6	1.1	0.6		重さ7.0ｇ
39	6	SKP1924	金属	—	釘	7.1	1.4	0.5		重さ6.5ｇ
40	7	ML37	金属	—	不明	6.6	2.8	2.2		重さ70.5ｇ
49-41	8	ML39	金属	—	鉄製鎌	21.9	9.5	1.1		重さ101.8ｇ
42	43- 1	SF1923	金属	—	火打金	10.5	3.8	0.9		重さ51.9ｇ
43	2	SKI7291	金属	—	銭貨	2.4	—	—		元祐通寶？　重さ8.3ｇ
44	3	MN37	金属	—	銭貨	2.3	—	—		紹聖元寶　重さ2.4ｇ
45	4	MH34	石製品	—	砥石	12.0	4.3	3.2		重さ230g
46	5	MO34	石製品	—	砥石	8.5	2.8	2.0		重さ61.6g
50-47	6	SKI7291	石製品	—	石臼	31.7	27.6	6.8		
48	8	SKI7291	石製品	—	石臼	18.9	10.1	11.4		
49	9	MH34	石製品	—	石臼	14.4	4.0	4.0		茶臼
51-50	7	SE1720	木製品	—	卒塔婆	102.8	12.1	0.9		
52-51	10	MN33	土器	—	坩堝	(　6.8)	—	—		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属・石製品・木製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。なお、法量の（　）内の数値は推定値である。

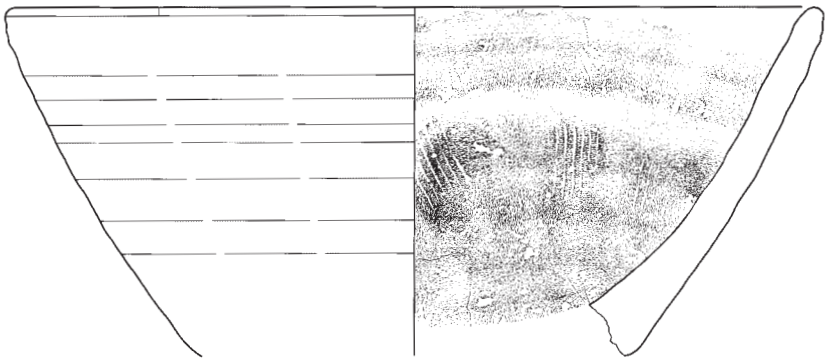


第43図　Ⅲ郭出土遺物（１）

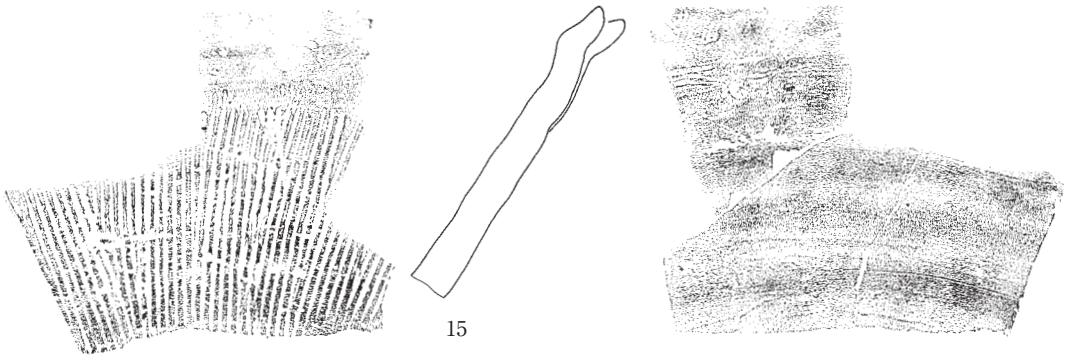




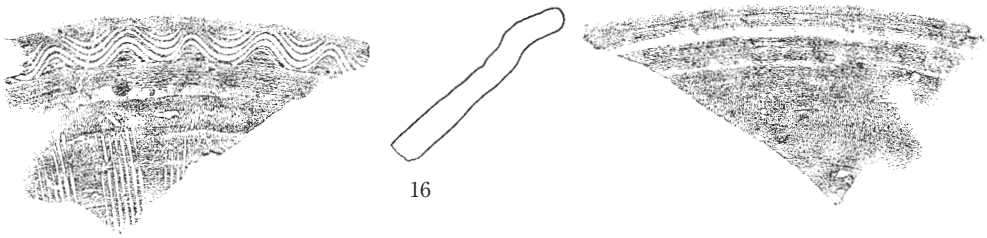
第44図　Ⅲ郭出土遺物（２）



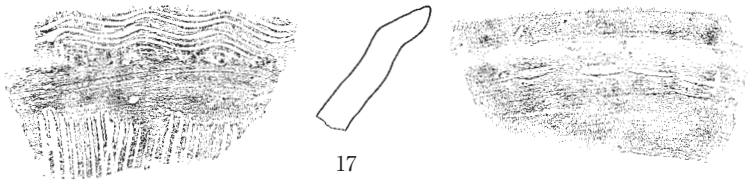
14



15



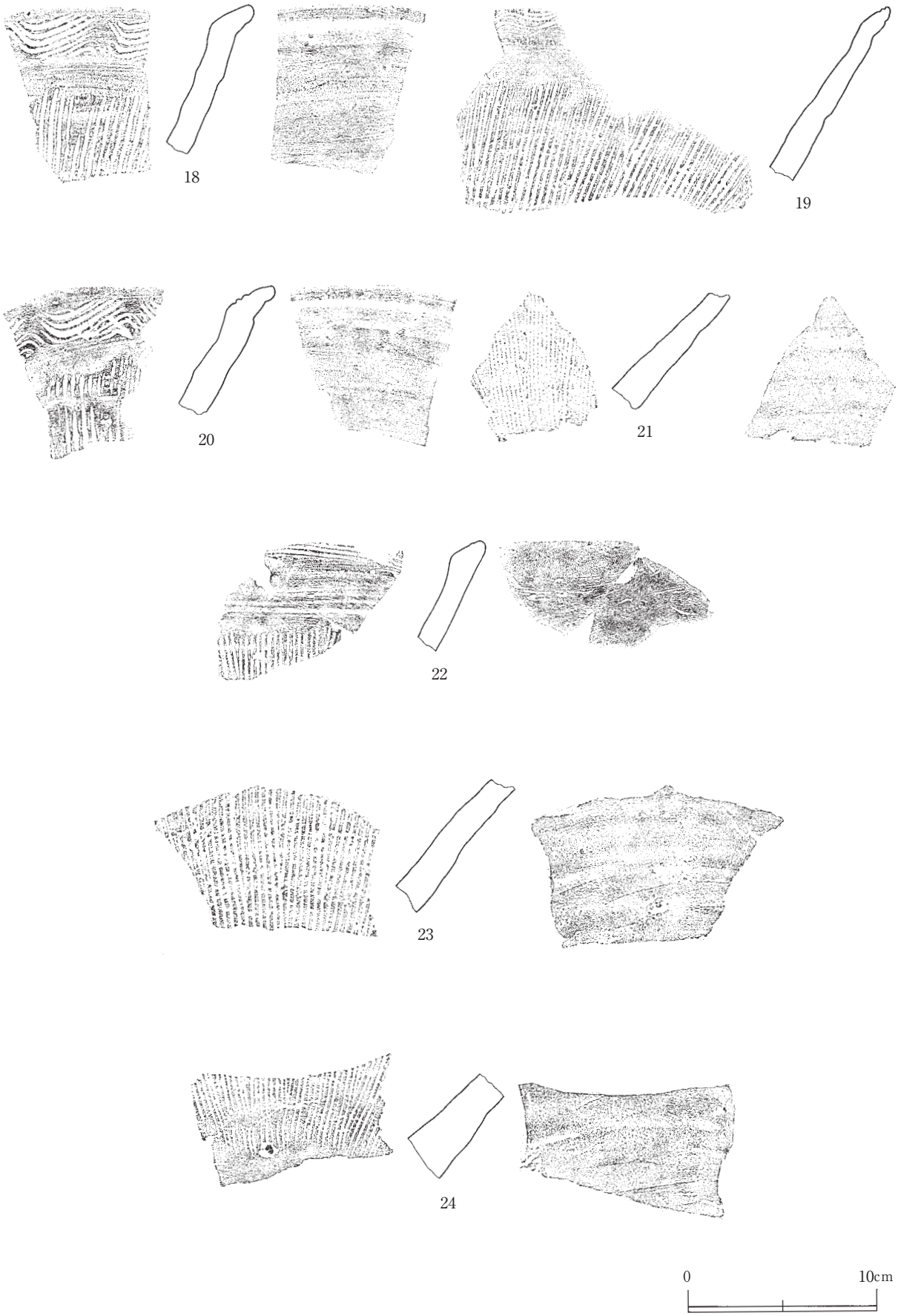
16



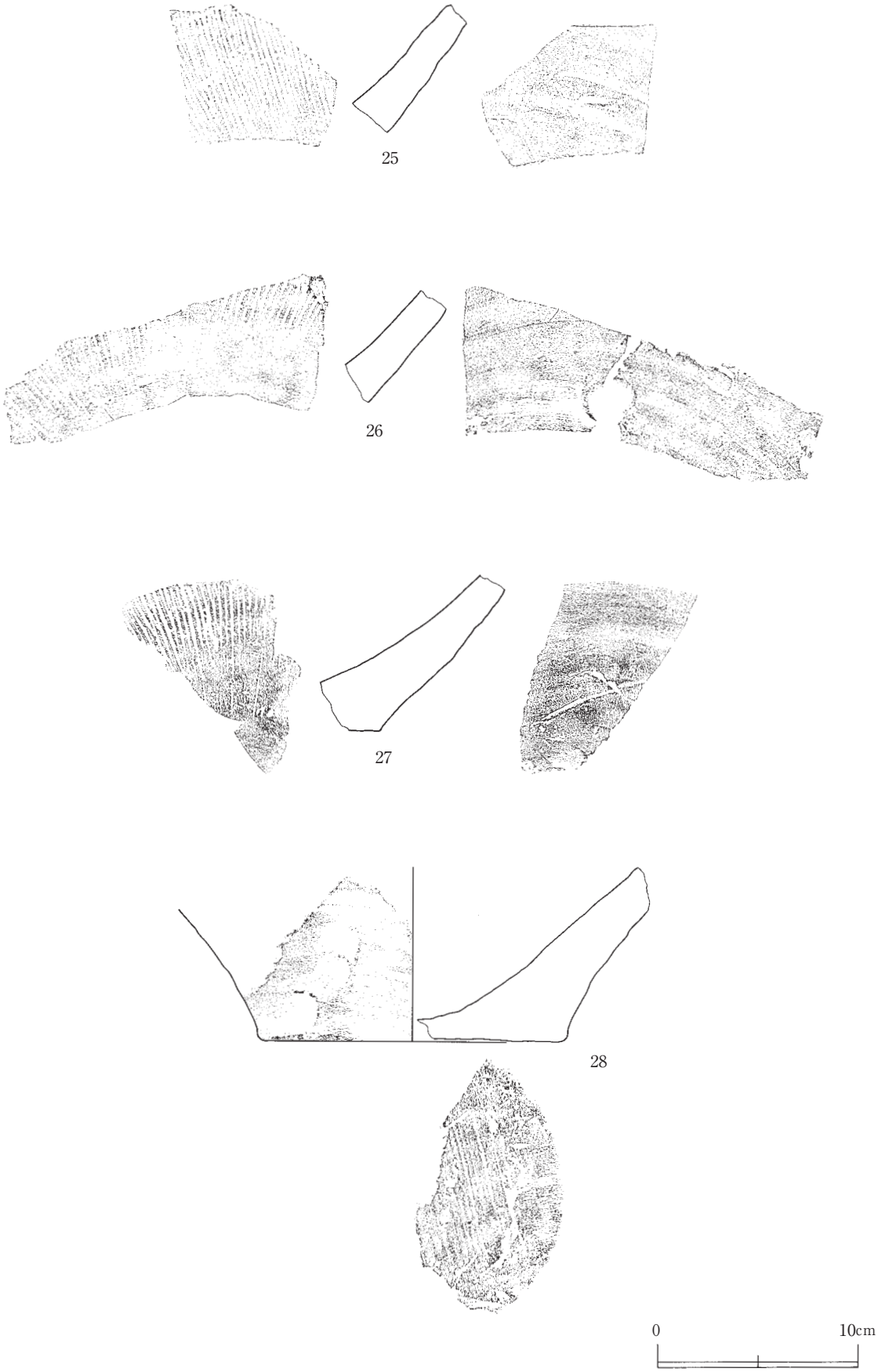
17

0　10cm

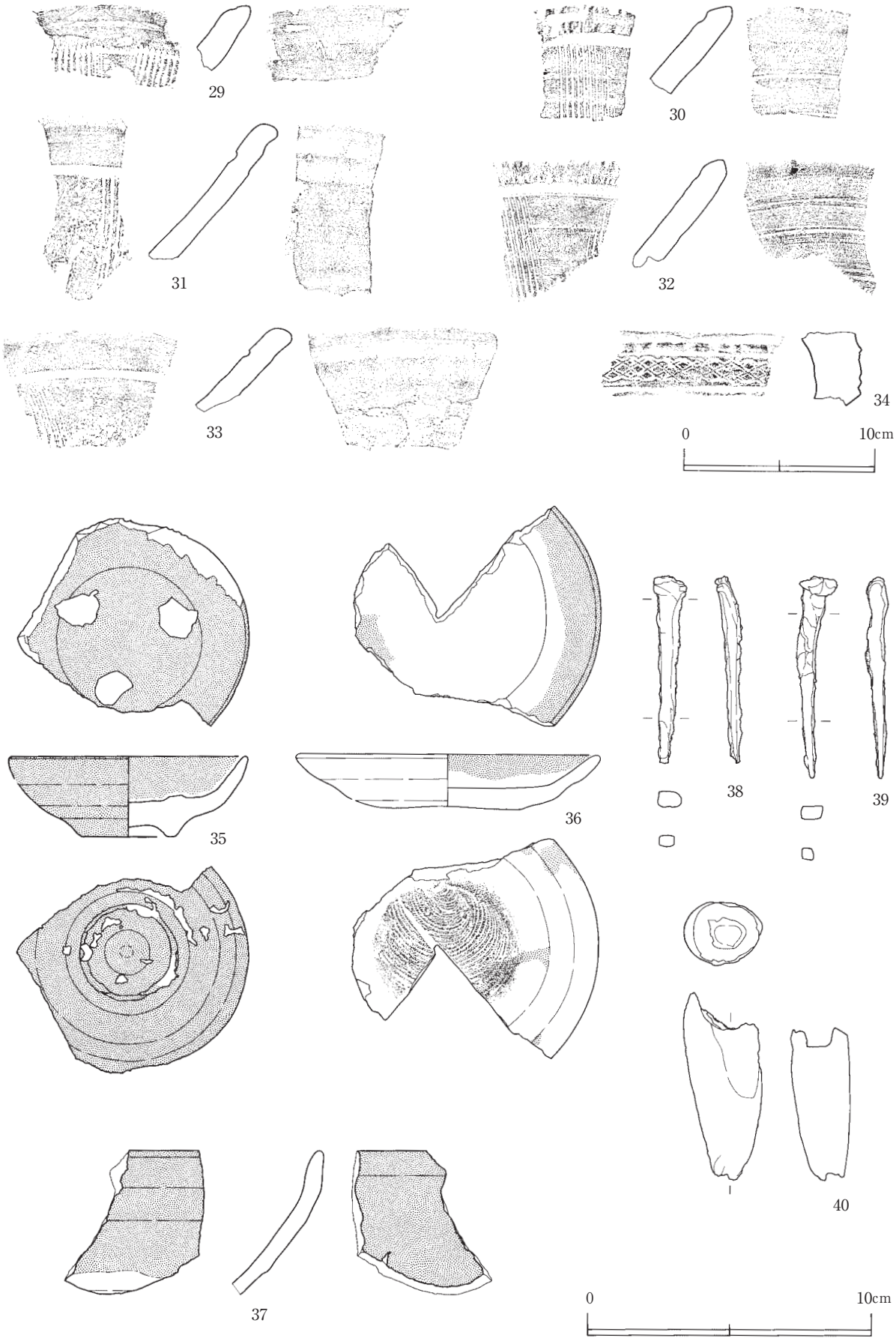
第45図　Ⅲ郭出土遺物（３）



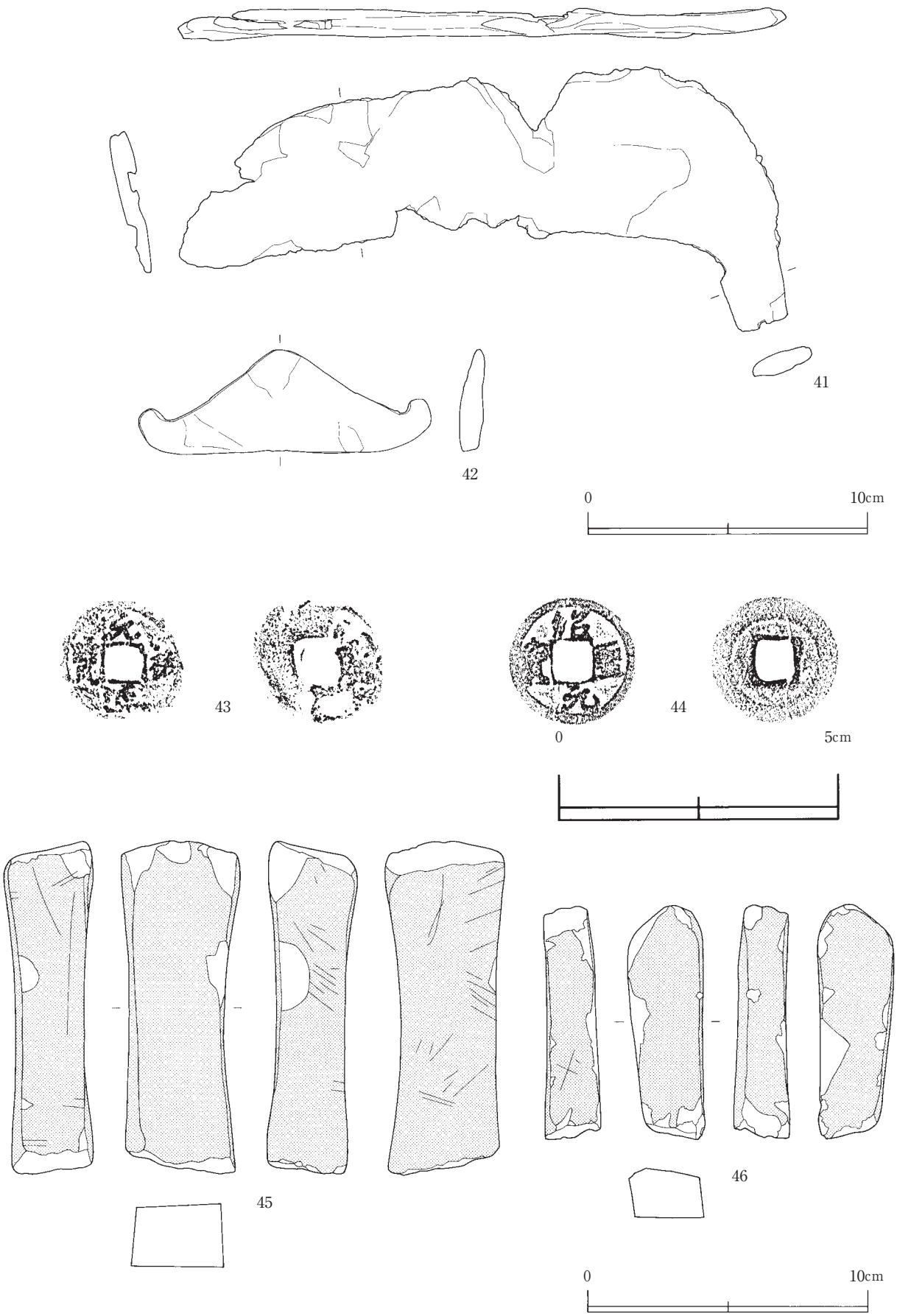
第46図　Ⅲ郭出土遺物（４）



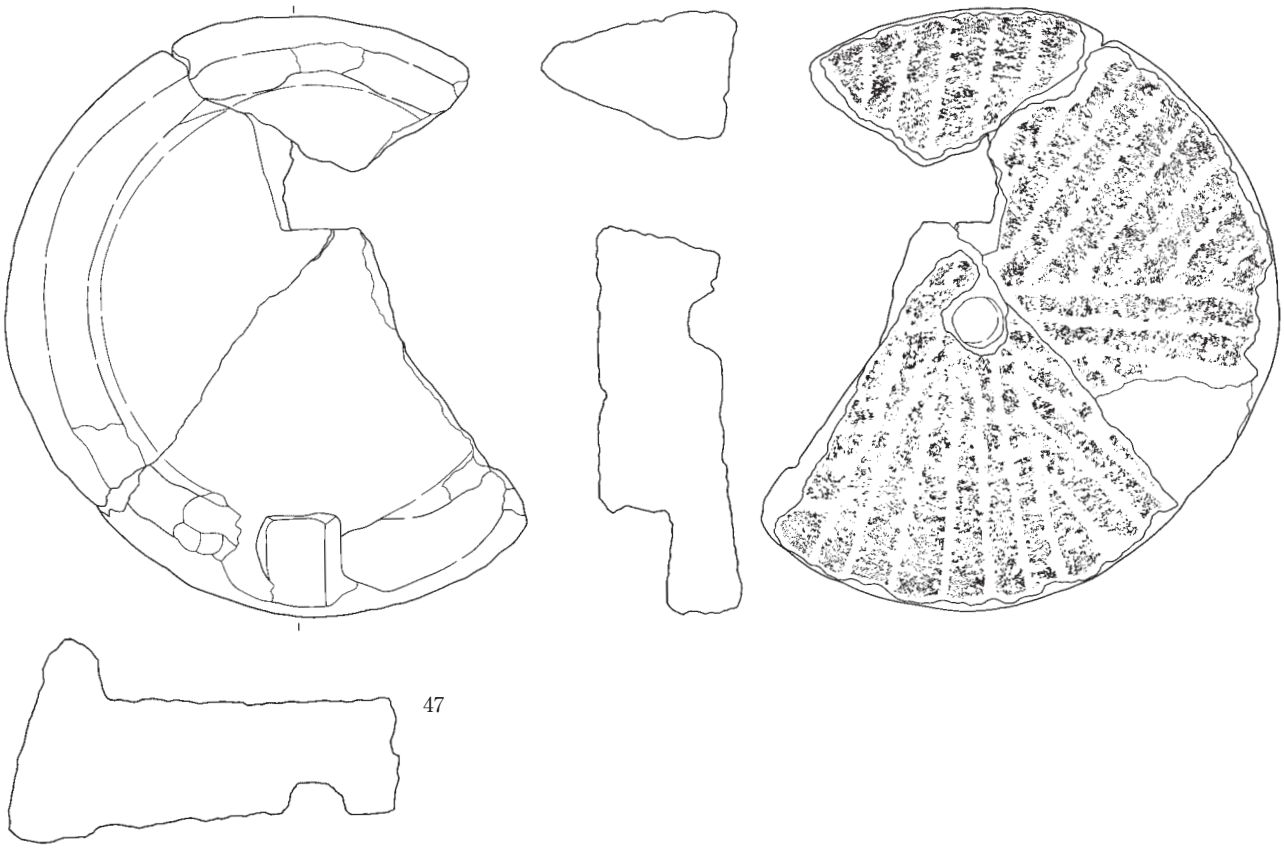
第47図　Ⅲ郭出土遺物（５）

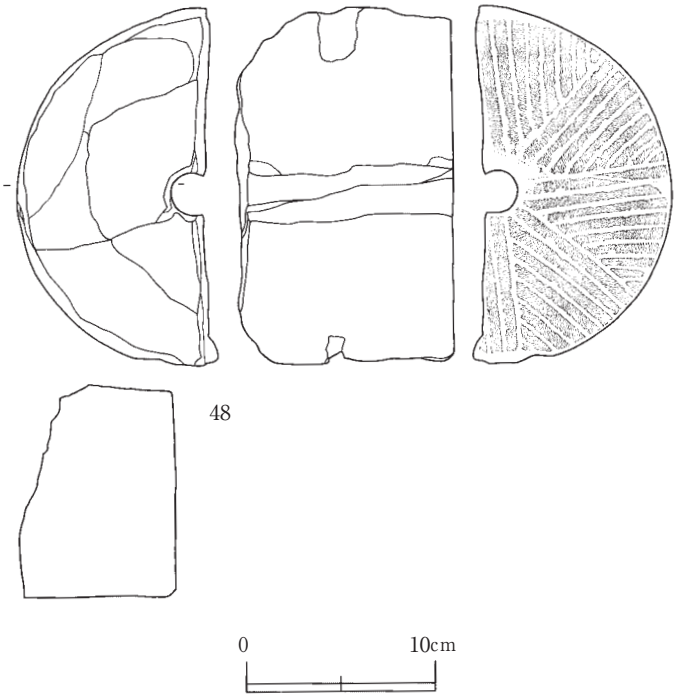


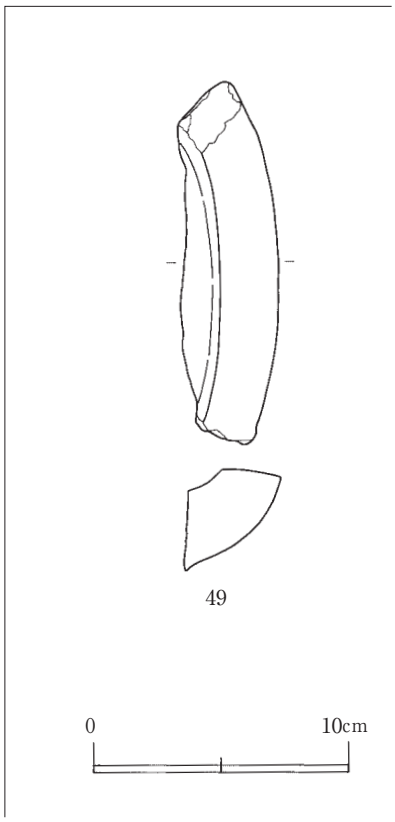
第48図　Ⅲ郭出土遺物（６）



第49図　Ⅲ郭出土遺物（７）

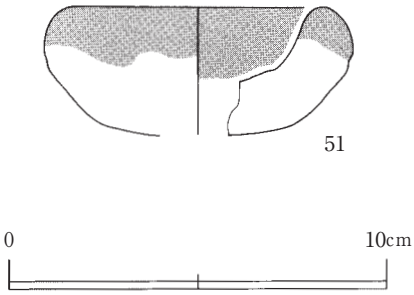






第50図　Ⅲ郭出土遺物（８）

第51図　Ⅲ郭出土遺物（９）



第52図　Ⅲ郭出土遺物（10）

４　Ⅳ郭の検出遺構と出土遺物

（１）竪穴状遺構

ＳＫＩ1502（第54図）

ＭＲ28・29、ＭＳ28グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＰ8055と重複し、本遺構が古い。平面形は南東の隅を倒木痕によって撹乱されているが、検出した範囲で長軸（北東―南西）3.76ｍ×短軸（北西―南東）3.74ｍの方形を呈し、検出面からの深さは0.29ｍである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは北西の隅が急で、他はやや緩やかである。付随する柱穴を５基検出した。南東隅の柱穴は撹乱により失われているが、本来はサイコロの５の目の様な配置になっていたものと考える。なおＰ４とＰ５は重複しており、Ｐ４が新しい。堆積土は11層に分けられ、下位の３層は自然堆積、上位は一括して埋め戻されたものと考えられる。堆積土中から大量の炭化米が出土した。その総量は924ｇにものぼる。各柱穴の大きさは径0.18～0.29ｍで、深さ0.29ｍである。遺物は青磁片や銭貨が出土した。

ＳＫＩ1645（第55図）

ＭＯ31・32、ＭＰ31・32グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は遺構の重複などで残存状況は良くないが、長軸（北東―南西）6.42ｍ×短軸（北西―南東）2.6ｍの隅丸長方形と推定され、最も深い南西で検出面からの深さは0.26ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。付随する溝１条と柱穴を５基検出した。本来は竪穴のコの字型の壁に沿って延び、柱穴配置は長軸方向に３本、短軸方向に２本の６本柱であったと推定されるが、南西の柱は遺構の重複で失われている。溝跡は全長（北東―南西）3.8ｍ、幅（北西―南東）0.25～0.3ｍを測り、壁に沿ってほぼ直線的に延びる。底面は丸みを帯びて、壁の傾きは緩やかである。各柱穴の大きさは径0.23～0.38ｍで、深さ0.42～0.57ｍである。遺物は青磁が１点出土した。

ＳＫＩ6721（第56図）

ＭＳ28・29、ＭＲ29グリッドのⅢ期生活面で検出した。ＳＫＩ1502と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）5.97ｍ×短軸（北東―南西）3.56ｍの南側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い北側で検出面からの深さは0.64ｍである。底面は北側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きは急である。付随する溝１条と柱６穴基を検出した。主柱穴はＰ１～Ｐ４・Ｐ６が考えられる。溝跡は全長（東―西）3.95ｍ、最大幅（北―南）0.20～0.29ｍで直線に延びる。底面からの深さは、0.36ｍである。各柱穴の大きさは径0.18～0.30ｍで、深さ0.20ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6743（第57図、図版22・23）

ＭＰ31・32、ＭＱ31グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＩ6759と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）5.87ｍ×短軸（北西―南東）3.22ｍの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い南西側で検出面からの深さは0.19ｍである。底面は南東側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。付随する溝１条と柱穴４基を検出した。溝跡は全長（東―西―南東）7.09ｍ、最大幅（北西―南東）0.17～0.32ｍで、南西側はＳＫＩ6759によって切られているが、奥壁に沿ってコの字状に延びると考えられる。底面からの深さは0.19ｍである。各柱穴の大きさは径0.30～0.45ｍで、深さ0.63～0.67ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6759（第57図）

ＭＰ30・31、ＭＱ30・31グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＩ7593、ＳＫＰ7517・7556と重複し、ＳＫＩ7593より新しく、ＳＫＰ7517・7556より古い。平面形は長軸（北東―南西）3.55ｍ×短軸（北西―南東）2.0ｍの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い南西側の検出面からの深さは0.47ｍである。底面は平坦である。壁の傾きは、急である。付随する溝１条と柱穴３基を検出した。溝跡は全長（南東―北西―南西―南東）4.73ｍ×最大幅（北西―南東）0.16～0.22ｍで南東側の溝は途中までしか検出できなかったが、壁に沿ってコの字状に延びると考えられる。各柱穴の大きさは径0.19～0.28ｍで、深さ0.17～0.33ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6788（第58図）

ＭＰ30・31、ＭＱ30・31グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＩ6759・7593と重複し、本遺構が古い。平面形は遺構の重複などで残存状況は良くないが、長軸（北東―南西）4.66ｍ×短軸（北西―南東）2.87ｍの東側が開口するコの字形の長方形を呈する。底面は平坦である。壁は検出できなかった。付随する溝１条と柱穴４基を検出した。各柱穴の大きさは径0.11～0.35ｍで、深さ0.15～0.17ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6892（第59図）

グリッドの北西向き斜面でＩ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）4.0ｍ×短軸（北西―南東）2.73ｍの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い北西側の検出面からの深さは0.17ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは、やや急である。付随する溝１条と柱穴４基を検出した。溝跡は全長（東―西―南西）5.58ｍ、最大幅（北西―南東）0.18～0.27ｍ。奥壁に沿ってコの字状に延びると考えられる。各柱穴の大きさは径0.21～0.30ｍで、深さ0.68～0.72ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6936（第60図）

ＭＰ31・32、ＭＱ31・32グリッド南東向き斜面のⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）3.05ｍ×短軸（北東―南西）2.76ｍの南東側が開口したコの字型の隅丸長方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは1.34ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直であり、壁面には工具痕が明瞭に残り、同様の遺構を作った際の状況を知る上で貴重な資料となっている。付随する溝１条と柱穴６基を検出した。溝跡は全長（東―西―南―東）5.88ｍ、最大幅（北東―南西）0.18ｍで壁に沿ってコの字状に延びる。底面からの深さ0.00ｍである。南側の溝は徐々に浅くなり、次第に消滅しているが、本来は更に延びると考えられる。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５が主柱穴と考えられ、Ｐ６は

柱穴以外の役割を果たしていたことも考えられる。各柱穴の大きさは径0.23～0.58ｍで、深さ0.15～0.54ｍである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6943（第61図）

ＭＰ32・33、ＭＱ32・33グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ6936・6967、ＳＤ6963と重複している。平面形は遺構の重複などで残存状況は良くないが、検出した範囲で、長軸（北東―南西）6.36ｍ×短軸（北西―南東）2.3ｍの下底側が開口した台形を呈し、検出面からの深さは最も深い西側で0.09ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはわずかな立ち上がりが見える程度である。付随する溝１条と柱穴４基を検出した。本来は竪穴の壁に沿って溝があり、長軸方向に３基、短軸方向に２基の全６基の柱穴からなる構造であったと考えられる。溝跡は全長（北東―南西）3.13ｍ、幅（北西―南東）0.23～0.33ｍを測り、壁に沿って緩やかな弧を描きながら延びる。深さ0.00ｍである。各柱穴の底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。各柱穴の大きさは径0.20～0.32ｍで、深さ0.17～0.36ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6967（第62図）

ＭＯ32・33、ＭＰ32・33グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ6743・ＳＫ7296と重複している。平面形は長軸（北―南）7.42ｍ×短軸（東―西）3.75ｍの東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い西側で検出面からの深さは、0.32ｍである。底面は東側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きは、やや急である。付随する溝１条と柱穴９基を検出した。各柱穴の大きさは径0.12～0.27ｍで深さ0.44～0.67ｍある。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6973（第63図）

ＭＱ31・32、ＭＰ31・32グリッドの北西向き斜面のＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ6976と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）5.66ｍ×短軸（北西―南東）3.06ｍの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは、0.80ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。付随する柱穴５基を検出した。各柱穴の大きさは径0.16～0.48ｍで、深さ0.40～0.44ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6976（第64図）

ＭＰ30・31、ＭＱ31グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ6743・6983、ＳＫＰ1695と重複している。ＳＫＩ6983によってほとんど切られているが、平面形は長軸（北西―南東）3.75ｍ×短軸（北東―南西）3.60ｍの南東側が開口する楕円形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは、0.8ｍである。底面は平坦である。壁の傾きは急である。付随する溝１条と柱穴４基を検出した。溝跡は全長（北東―南西）1.4ｍ、最大幅（北西―南東）0.25ｍを測り、奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.08ｍである。各柱穴の大きさは径0.16～0.35ｍで、深さ0.33～0.41ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ6983（第64図、図版22・23）

ＭＱ30・31、ＭＲ30・31グリッド南東向き斜面のＩ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）11.02ｍ×短軸（北西―南東）2.97ｍの南東側が開口したコの字型の隅丸長方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは1.53ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急であるが、南側の一部で

崩落の痕跡が見られる。付随する土坑１基・溝１条・柱穴11基を検出した。土坑の平面形は長軸（北―南）1.02m×短軸（東―西）0.63mの楕円形を呈し、底面からの深さは32mである。これの覆土には炭化物の小片が多く混入していることから、この場で火を焚いた可能性がある。溝跡は全長（北東―南西）4.05m、最大幅（北西―南東）0.22mを測り、やや蛇行しながら奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.09mである。各柱穴の大きさは径0.14～0.37mで深さ0.04～0.63mである。遺物は青磁が２点、鉄製品が１点出土した。

ＳＫＩ7509（第65図）

ＭＱ30・31、ＭＰ31グリッドのⅢ期生活面で検出した。ＳＫＩ6759と重複している。平面形は長軸（北東―南西）3.55m×短軸（北西―南東）1.96mの南東側が開口する楕円形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは、0.33mである。底面は南東側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きは急である。付随する柱穴２基を検出した。各柱穴の大きさは径0.26～0.35mで、深さ0.14～0.28mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7529（第66図、図版○22・23）

ＭＲ29・30、ＭＳ29・30グリッド南東向き斜面のＩ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）3.91m×短軸（北西―南東）2.86mの南東側が開口したコの字型の隅丸長方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは1.56mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する溝跡１条と柱穴５基を検出した。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。溝跡は全長（北東―南西）2.94m、最大幅（北西―南東）0.35mを測り、蛇行しながら奥壁に沿って延びる。底面からの深さは0.18mである。底面には厚さ0.03～0.12mの焼土がまとまって堆積し、その下から炭化した材木と、屋根部材に用いられたと推定される炭化した茅がまとまって出土した。その状況から見て本遺構は焼失したものと推定される。各柱穴の大きさは径0.19～0.33mで、深さ0.54～0.73mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7530（第69図）

ＭＳ29、ＭＴ29、ＮＡ29グリッド南向き斜面のＩ期生活面で検出した。平面形は長軸（東―西）6.06m×短軸（北―南）2.75mの南側が開口したコの字型の隅丸長方形を呈し、最も深い北側で検出面からの深さは1.26mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかで丸みを帯びているが、大規模な崩落の痕跡が見られ本来の姿をとどめていない。遺物出土しなかった。

ＳＫＩ7593（第67図）

ＭＰ30、ＭＱ29・30、ＭＲ30グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ6721と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）5.35m×短軸（北西―南東）3.70mの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは、0.45mである。底面は平坦である。壁の傾きはやや急である。付随する溝１条と柱穴６基を検出した。Ｐ１～Ｐ６までが主柱穴と考えられる。溝は全長（南東―北西―南東―南）7.62m、最大幅（北西―南東）0.17～0.37mを測り、奥壁に沿ってコの字状に延びる。底面からの深さは0.07mである。各柱穴の大きさは径0.20～0.34mで、深さ0.36～0.56mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7858（第68図）

ＭＯ30・31、ＭＰ29・30・31、ＭＱ29・30グリッドのⅣ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）9.70m×短軸（北西―南東）3.53mの南東側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い北

西側で検出面からの深さは、0.38mである。底面は南東側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きは急である。付随する溝１条と柱穴10基を検出した。溝跡は全長（北東―南西）8.35m、最大幅（北西―南東）0.18～0.27mを測り、奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは28mである。各柱穴の大きさは径0.19～0.47mで、深さ0.29mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ8050（第70図）

ＭＲ28・29、ＭＳ28・29グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ1502と重複し、ＳＫＩ1502より古い。遺構の重複関係や整地時の削平ているが、検出した範囲で平面形は長軸（北東―南西）2.32m×短軸（北西―南東）2.26mの方形と推測され、検出面からの深さは0.17mである。底面は平坦で、壁の傾きはかなり緩やかである。付随する柱穴を３基検出したが、配置には規則性がなく、上屋の構造を想定するのが難しい。各柱穴の大きさは径0.18～0.25mで、深さ0.01～0.08mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ8282（第70図）

ＭＯ32・33、ＭＰ32・33グリッドのＩ～Ⅱ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―北西）3.30m×短軸（北西―南東）2.21mの南東側が開口する楕円形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは、0.28mである。底面は平坦である。壁の傾きは緩やかである。付随する柱穴４基を検出した。各柱穴の大きさは径0.18～0.29mで、深さ0.12～0.25mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ8285（第70図）

ＭＯ33・34、ＭＰ33・34グリッドのＩ～Ⅱ期生活面で検出した。遺構の重複関係などで全体を知ることは出来ないが、検出した範囲での平面形は長軸（北東―南西）4.9m×短軸（北西―南東）1.47mの隅丸長方形と推定され、最も深い西側で検出面からの深さは、0.15mである。付随する柱穴１基を検出した。底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜で立ち上がる。柱穴の大きさは径0.30～0.40mで、深さ0.21mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ8305（第71図）

ＭＮ31・32、ＭＯ31・32グリッドのⅣ期生活面で検出した。遺構の重複関係などで全体を知ることは出来ないが、検出した範囲での平面形は長軸（北西―南東）5.35m×短軸（北東―南西）5.25mの１辺が開口するコの字型の方形と推定され、検出面からの深さは、最も深い西壁で1.27mである。付随する柱穴１基を検出した。この周辺に見られる竪穴状遺構と異なり溝は検出されなかった。また他の遺構に比べて角が明瞭で、奥壁に緩やかな段が付く。底面は平坦である。壁の傾きは急である。堆積土は２層に分けたが、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。柱穴の大きさは径0.20～0.23mで深さ0.17～0.50mである。遺物は出土しなかった。

（２）土坑

ＳＫ1574（第72図）

ＭＴ24・25グリッドのⅣ期生活面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.45m×短軸（北―南）1.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.22mである。底面は平坦で、壁の傾きは西側が緩やかで、東側はほぼ垂直である。堆積土は２層に分けたが腐食した木片が疎らではあるが、全層位から出土し

ていることから一括して埋めたれたものと考えられる。しかし他のⅣ期の遺構と堆積土が異なる。このことから本遺構はⅣ期の活動時に廃棄物を投棄した土坑であると考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7815（第72図）

ＭＲ25グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.91ｍ×短軸（北東―南西）0.83ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは1.02ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜で立ち上がる。堆積土は３層に分けたが、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7816（第72図）

ＭＭ30グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.34ｍ×短軸（北東―南西）1.23ｍの楕円形の北西側に全長（北東―南西）0.42ｍ×最大幅（北西―南東）0.44ｍの溝状の張り出しが付設されている。検出面からの深さは1.02ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は２層に分けたが、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7885（第72図）

ＭＭ30グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.14ｍ×短軸（東―西）0.94ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.41ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁が１点、鉄製品が１点出土した。

ＳＫ7903（第72図）

ＭＱ28グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は径１ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.34ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜である。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられれる。堆積土は１層である。遺物は青磁が１点出土した。

ＳＫ7926（第72図）

ＭＲ・ＭＳ28・29グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ7925と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）2.17ｍ×短軸（北西―南東）2.14ｍの円形を呈し、検出面から１ｍ掘った時点で調査を打ち切った。その後のボーリング棒による追加調査で、更に１ｍほど深いことがわかった。底面を検出することは出来なかったが、壁の傾きは緩やかである。堆積土は、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。本遺構はその立地、規模等から井戸跡の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

（３）焼土遺構

ＳＮ6948（第73図）

ＭＰ・ＭＱ30グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＰ1653・6788と重複し、本遺構が最も古い。平面形は遺構の重複などで全容は不明だが検出した範囲で、長軸（北東―南西）1.42ｍ×短軸（北西―南東）0.72ｍの不整形範囲に焼土ブロックが密に混入した黒色土が広がる。焼土を含む黒色土の厚さは0.01ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ6959（第73図）

ＭＯ29・30、ＭＰ30グリッドのⅣ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.98m×短軸（東―西）0.37mの不整形範囲に橙色の焼土が広がりそれを囲むように、黒褐色土と灰褐色土が広がる。焼土の厚さは0.02～0.04mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ6962（第73図）

ＭＰ30・31グリッドのⅣ期生活面で検出した。ＳＫＰ1648・1516と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北西―南東）0.89m×短軸（北東―南西）0.71mの略三角形範囲に焼土ブロックが密に混入した黒色土が広がる。焼土を含む黒色土の厚さは0.07mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

（４）集石遺構

ＳＱ1573（第73図）

ＭＲ26グリッドのⅣ期生活面で検出した。長さ（東―西）0.76m×幅（北―南）0.3mのやや縦長の範囲に礫４個が集積されていた。礫は総じて平たいもので、いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ1584（第73図）

ＭＱ27グリッドのⅣ期生活面で検出した。長さ（東―西）0.5m×幅（北―南）0.3mの範囲に礫４個が集積されていた。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ1588（第73図）

ＭＰ28グリッドのⅣ期生活面で検出した。長さ（東―西）0.63m×幅（北―南）0.36mの範囲に礫３個が集積されていた。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ1600（第73図）

ＭＯ3028グリッドのⅣ期生活面で検出した。長さ（東―西）1.06m×幅（北―南）1.0mの範囲に礫７個が集積されていた。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ1672（第73図）

ＭＯ・ＭＰ31グリッドのⅢ期生活面で検出した。長さ（西北―東南）2.26m×幅（北東―南西）2.1mの範囲に礫14個が集積されていた。後述するＳＱ6878と同一目的の遺構である可能性が高いが、本遺構の下層には斜面を掘り込んだ竪穴状遺構が多数存在し、そこを整地するには大量に土が必要であったが、その整地を強固にする目的で埋め込まれた遺構である。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。

ＳＱ6878（第74図）

ＭＯ31・32、ＭＰ32グリッドのⅢ期生活面で検出した。長さ（東―西）3.72m×幅（北―南）2.1mの縦長な帯状の範囲に礫58個が集積されていた。本遺構はⅢ郭とⅣ郭を区分する境界をなす遺構で、これより北東がⅢ郭、南西がⅣ郭となり、本遺構を挟んで0.10～0.30cm程度の段差があり、この段

差を持って郭の区画をしていたようである。数個の礫に被熱した痕跡を認めたが、概ね自然石を利用した小規模な石垣であると考えられる。本遺構調査後はⅡ期整地層が検出され、これまでに調査で見られたⅢ郭とⅣ郭の区画が消滅する。Ⅰ～Ⅱ期にはⅢ郭とⅣ郭は連続した同一の生活面であった事が推定される。

ＳＱ6879（第74図）

ＭＰ32グリッド東向き斜面の黒色土下層で検出した。長さ（北―南）2.1ｍ×幅（東―西）1.38ｍの範囲に43個の礫が集積されていた。礫のまとまりは大きく２カ所あり、どちらも礫の平坦な面を上にして、ほぼ１列に整然と並び、等高線に直交する。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ6880（第74図）

ＭＰ32グリッド東向き斜面の黒色土中位で検出した。長さ（東―西）1.14ｍ×幅（北―南）0.48ｍの範囲に８個の礫が集積されていた。礫は等高線に平行する形で置かれている。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

ＳＱ6881（第74図）

ＭＱ32グリッド東向き斜面の黒色土中位で検出した遺構で時期は不明である。長さ（東―西）1.5ｍ×幅（北―南）0.62ｍの範囲に８個の礫が集積されていた。いずれの礫にも被熱や加工の痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。

（５）溝跡

ＳＤ1517（第75図）

ＭＮ31・32グリッドのⅢ期生活面で検出した。北西―南東に延びる溝跡で、ＳＤ1511と重複し、本遺構が新しい。検出した範囲で長さ4.27ｍ、幅0.38ｍ、検出面からの深さは0.45ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ1568（第75図）

ＭＯ29・30、ＭＰ29・30グリッドのⅣ期生活面で検出した。北西―南東に延びる溝跡で、南東側を失っているが、検出した範囲で長さ3.45ｍ、幅0.17ｍ、検出面からの深さは0.06ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、そこから続く壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ7817（第75図）

ＭＰ27、ＭＱ27・28、ＭＲ28グリッドのⅢ期生活面で検出した。北西―南東に延びる溝跡で、両端を失っているが、検出した範囲で長さ4.92m、幅0.23m、検出面からの深さは0.07m である。底面はやや丸みを帯びて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ8011（第75図）

ＭＱ28、ＭＲ28グリッドのⅢ期生活面で検出した。北西―南東に延びる溝跡で、更に両側に延伸すると考えられるが、検出した範囲で長さ2.34ｍ、幅0.22ｍ、検出面からの深さは0.07ｍである。底面

はやや丸みを帯びていて、そこから続く壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ8060（第75図）

ＭＱ28グリッドのⅡ期生活面で検出した。北西―南東に延びる溝跡で、後の遺構造成などで両端を失っているが、検出した範囲で長さ1.15m、幅0.17m、検出面からの深さは0.06mである。底面は丸みを帯びていて、そこから続く壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（６）その他の遺構

ＳＸ1506（第76図）

ＭＰ29、ＭＱ29グリッドのⅣ期生活面で検出した。炉跡１基・足入れピット１基・１間×１間の柱穴４基からなる建物とで構成される。炉跡の平面形は遺構の重複で完全ではないが、長軸（北西―南東）0.32m×短軸（北東―南西）0.26m以上の円形と推定され、検出面からの深さは0.12mである。底面は緩やかな丸みを帯び、そこから続く壁の傾きは緩やかである。堆積土は３層に分けたが、いずれにも焼土が充填されていてその中から僅かに鍛造剥片が出土している。足入れピットの平面形は長軸（北東―南西）0.46m×短軸（北西―南東）0.38mの楕円形を呈し、検出面からの深さは35mである。底面はほぼ平坦で、炉跡に近い側の壁の傾きはやや急で、他は緩やかである。各柱穴の平面形はＰ１が長軸（北西―南東）0.21m×短軸（北東―南西）0.2mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さが0.2m。Ｐ２が１辺0.17mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さが0.19m。Ｐ３が長軸（北東―南西）0.24m×短軸（北西―南東）0.22mの楕円形を呈し、検出面からの深さが0.29m。Ｐ４が長軸（北東―南西）0.2m×短軸（北西―南東）0.17mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さが0.3mである。各柱穴の底面は平坦で、Ｐ３には小さな段差があり、Ｐ４には角材の柱痕跡が見られ、壁の傾きはいずれも急傾斜である。各柱穴間の芯々距離はＰ１～Ｐ２間が2.13m、Ｐ１～Ｐ３間が2.01mである。堆積土は３層に分けられた。これ以外に付随する施設は検出できず、工人の作業時の様子を明確にすることは出来なかった。遺物は出土しなかった。

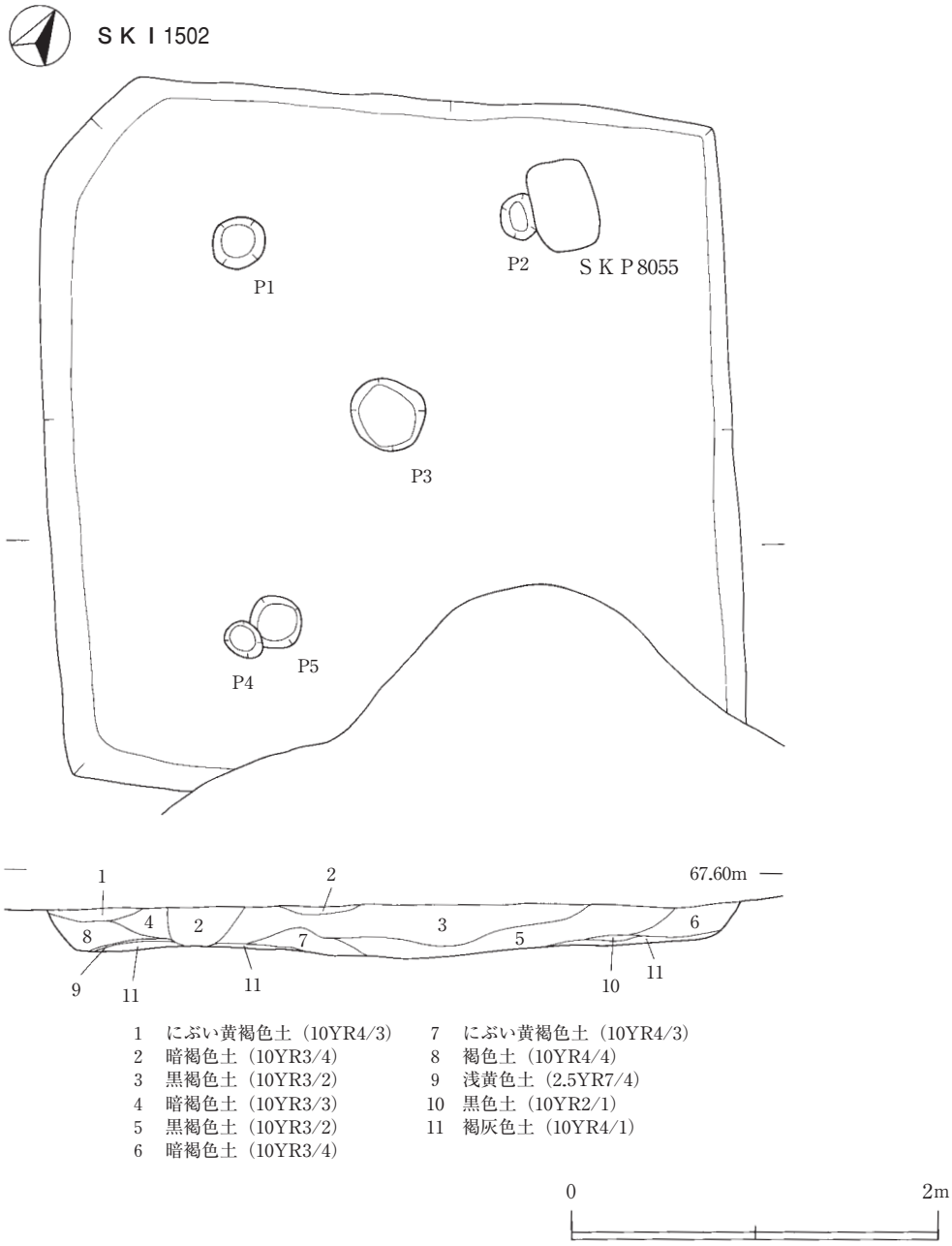
ＳＸ6937（第76図）

ＭＰ33グリッド南東向き斜面のⅠ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.77m×短軸（北西―南東）0.62mの南東側が開口したコの字型の隅丸方形を呈し、最も深い北西側で検出面からの深さは0.24mである。本遺構は立地・構造は他のコの字状の竪穴状遺構に類似しているが、規模に大きな隔たりがあり、遺構の性格を考えるには、今後の発掘調査の成果を待ちたい。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、斜面上方からの流れ込みによる堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＸ6963（第76図）

ＭＰ32・33グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.85m×短軸（北東―南西）0.47mを測り、弧状を呈している。検出面からの深さは0.4mである。底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜で立ち上がる。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

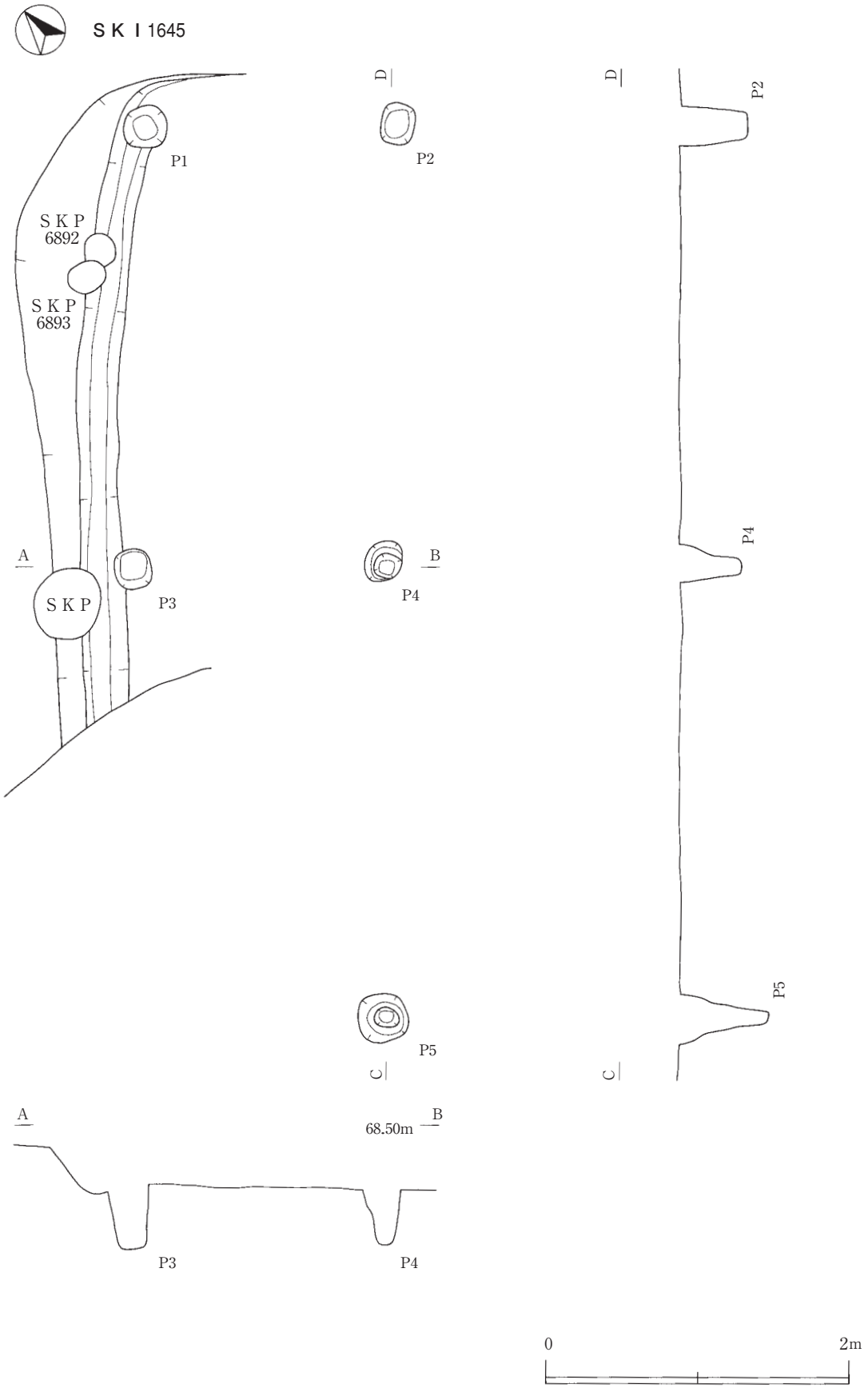
第53図　Ⅳ郭遺構配置図



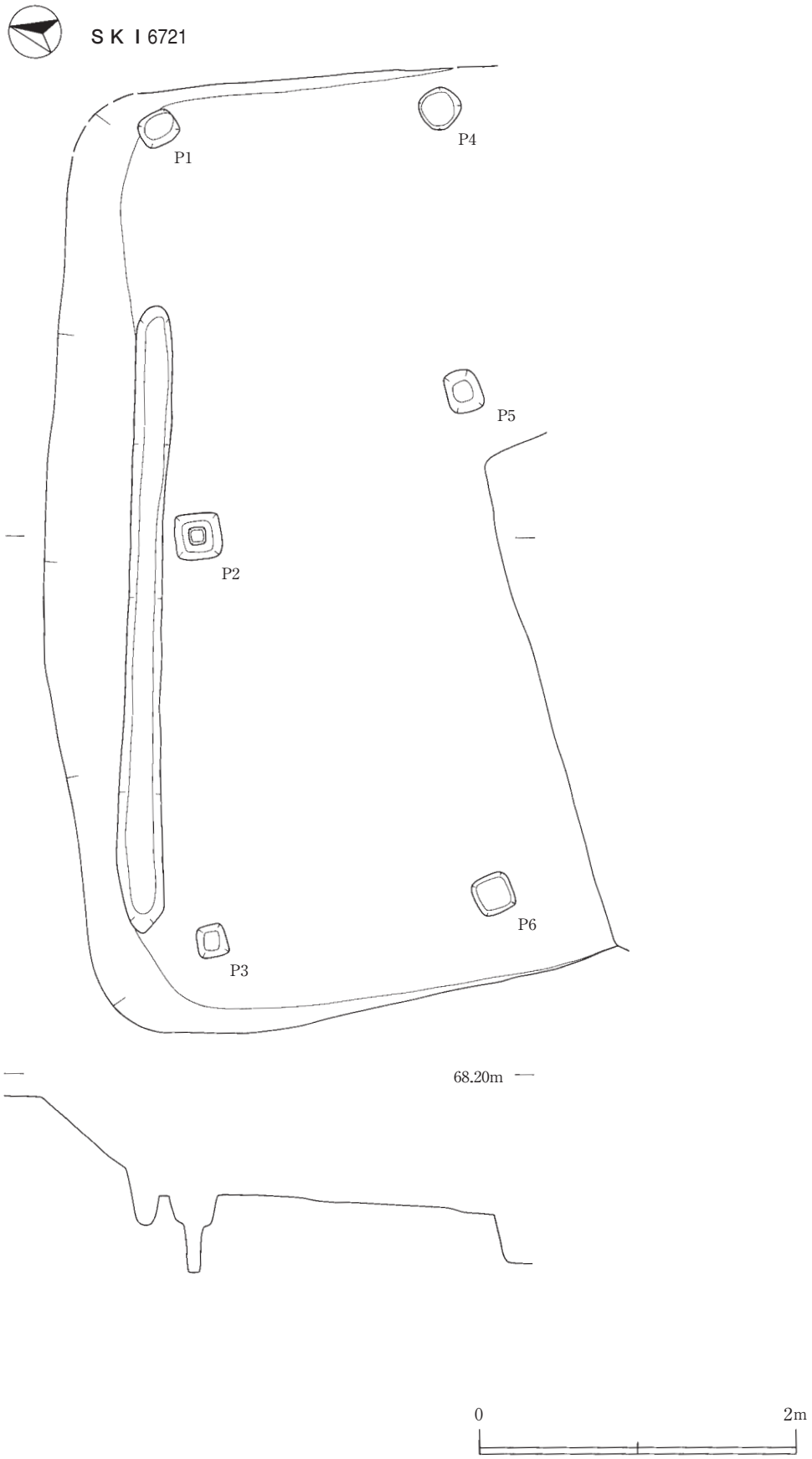
第54図　竪穴状遺構（１）

ＳＸ6995（第76図）

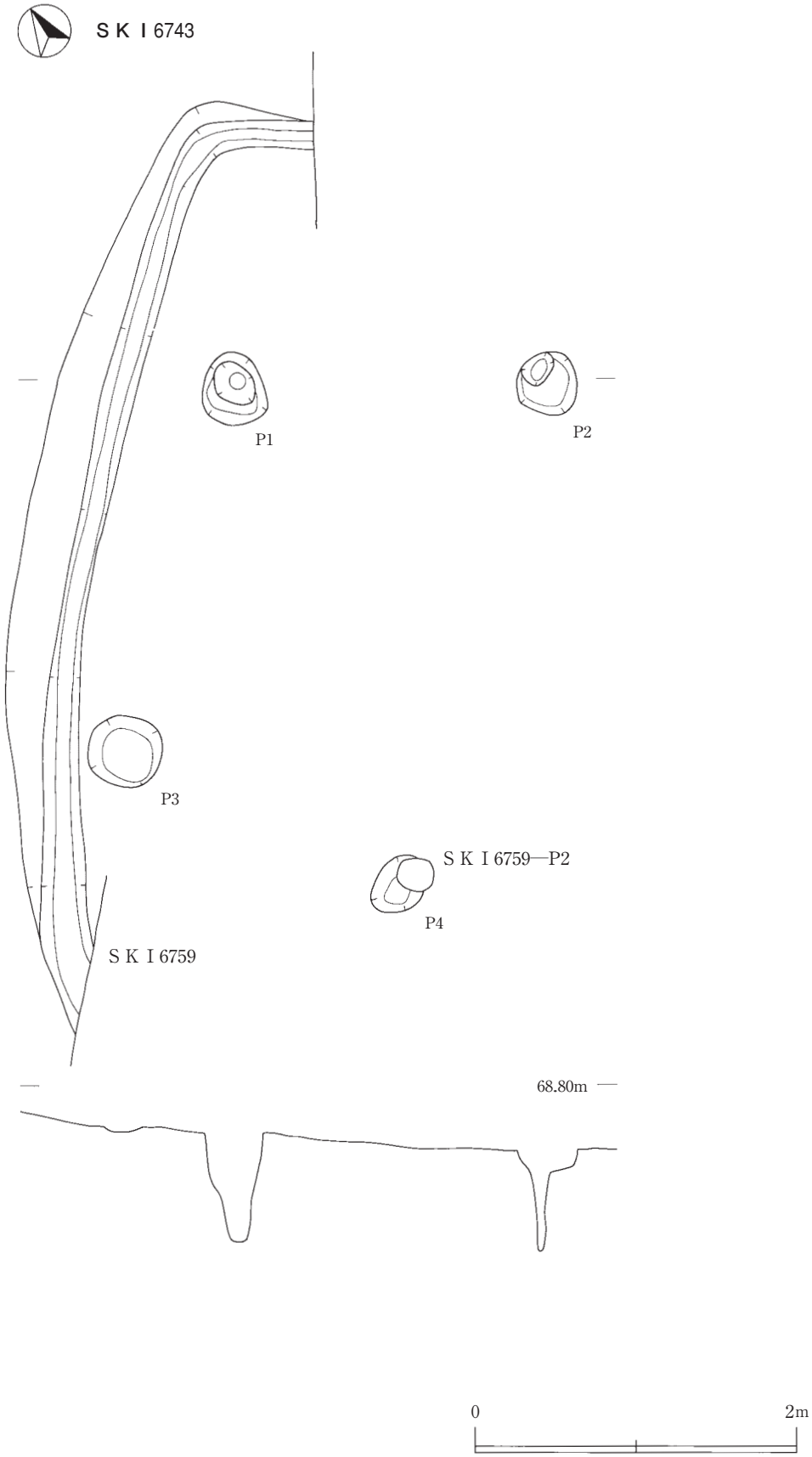
ＭＯ32・33グリッドのⅢ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.02ｍ×短軸（北東―南西）0.3ｍを測り、溝状を呈している。底面は平坦で、壁の傾きは急傾斜で立ち上がる。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。


ＳＫＩ1645
P1
ＳＫＰ
6892
ＳＫＰ
6893
A
ＳＫＰ
P3
D
P2
B
P4
P5
C
68.50m
A
B
P3
P4
D
P2
P4
P5
C
0
2m

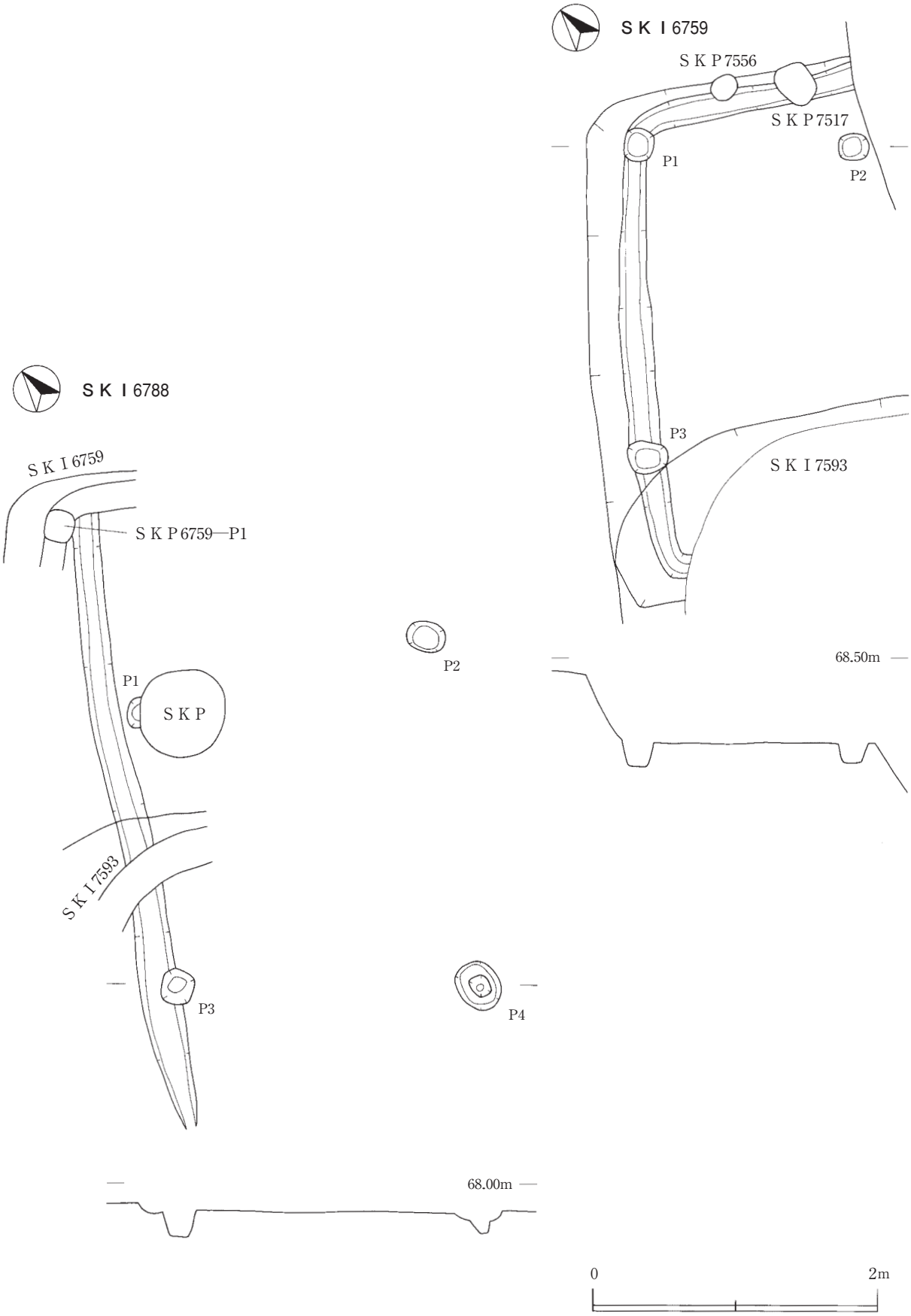
第55図　竪穴状遺構（２）



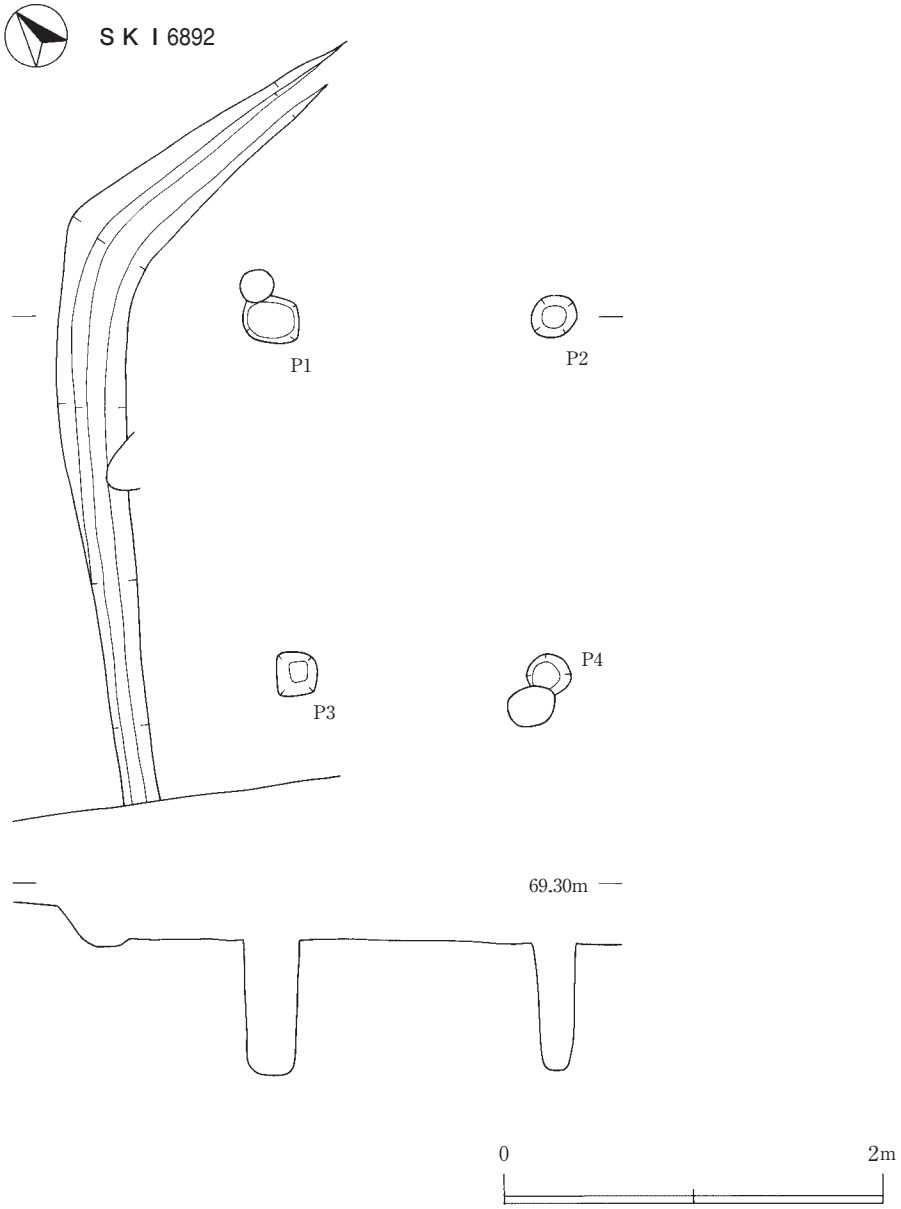
第56図　竪穴状遺構（３）



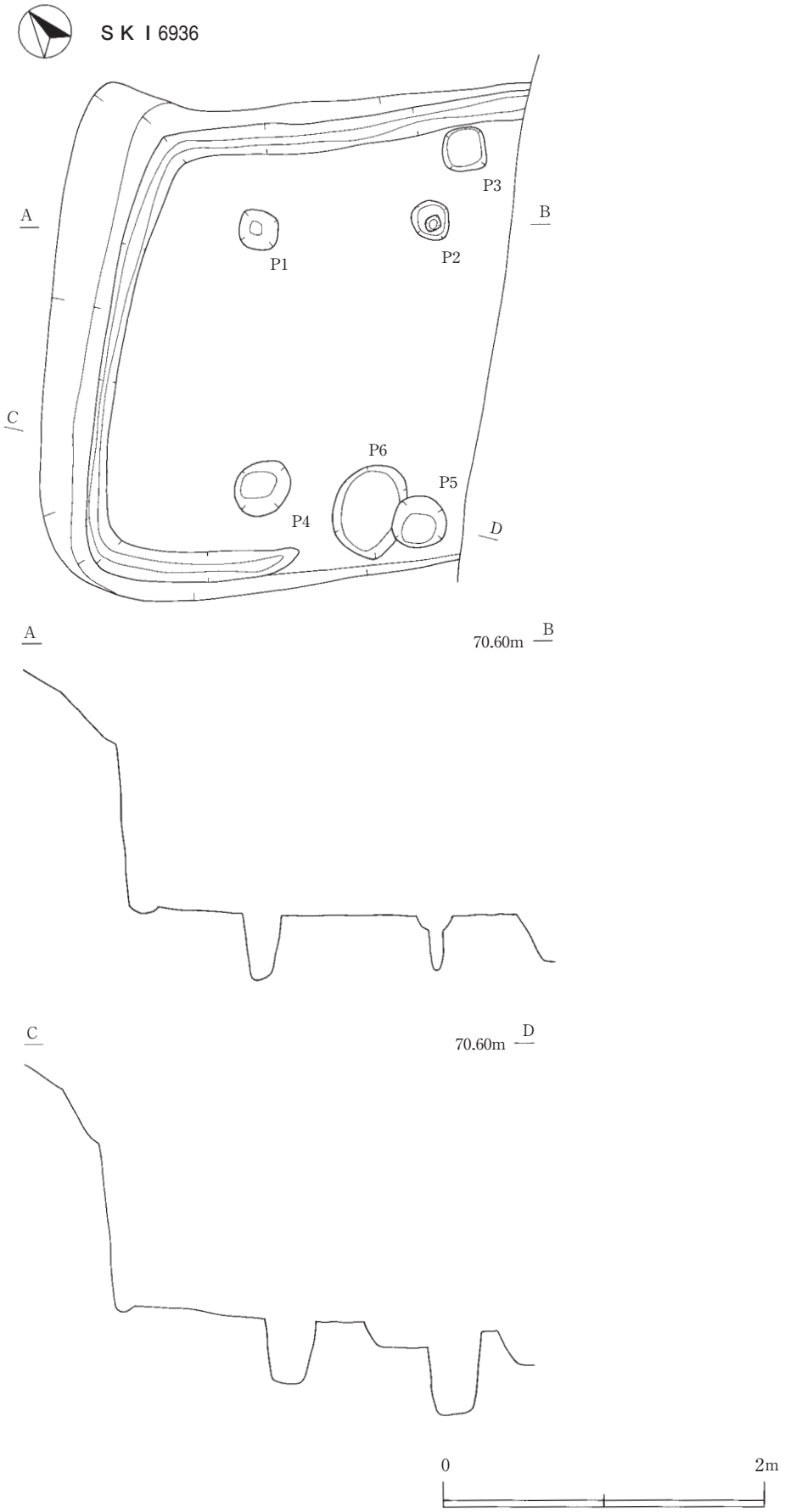
第57図　竪穴状遺構（４）


ＳＫＩ6759
ＳＫＰ7556
ＳＫＰ7517
P1
P2
P3
ＳＫＩ7593
68.50m
ＳＫＩ6788
ＳＫＩ6759
ＳＫＰ6759—P1
P1
ＳＫＰ
ＳＫＩ7593
P3
P2
P4
68.00m
0
2m

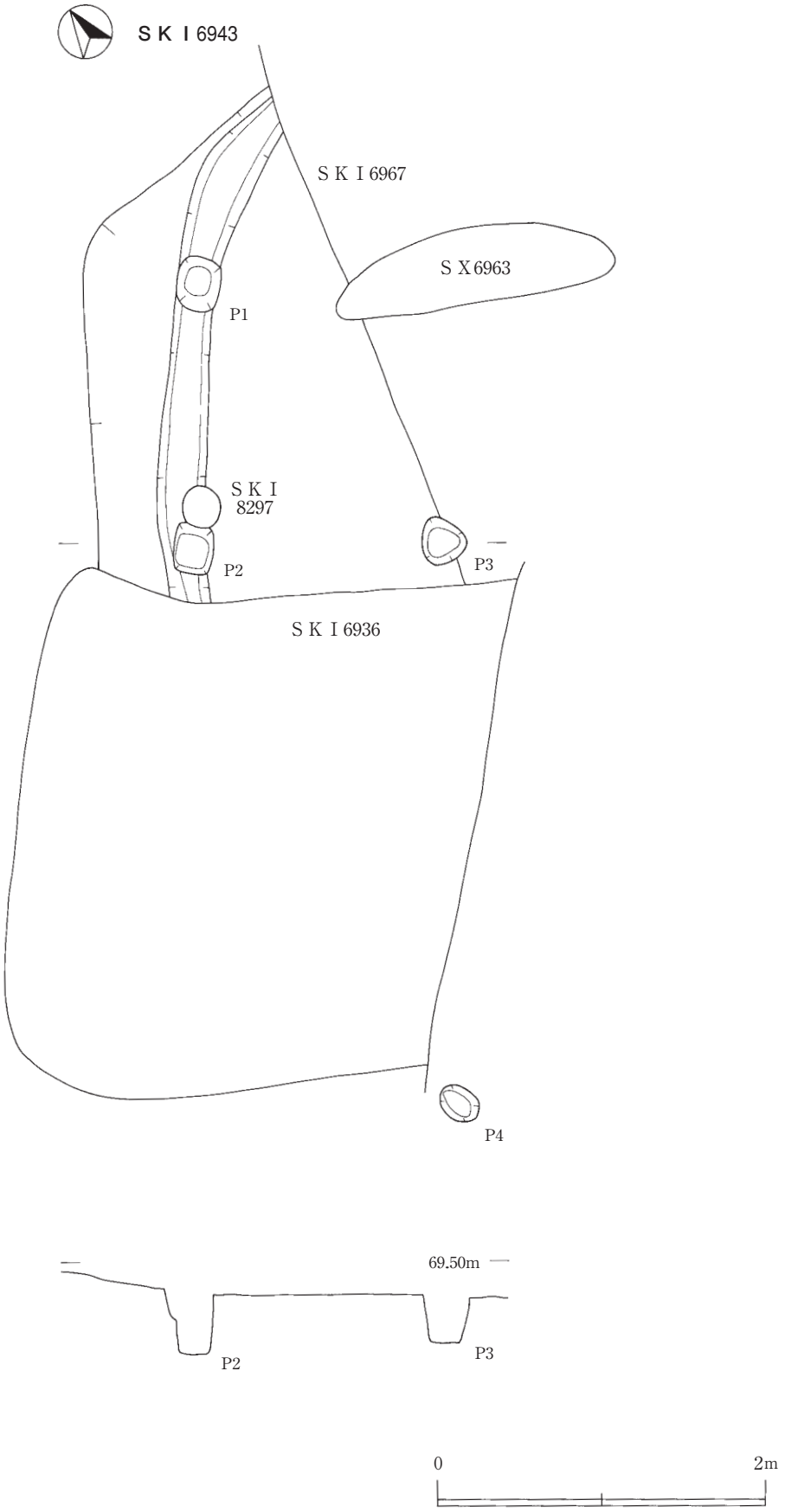
第58図　竪穴状遺構（５）



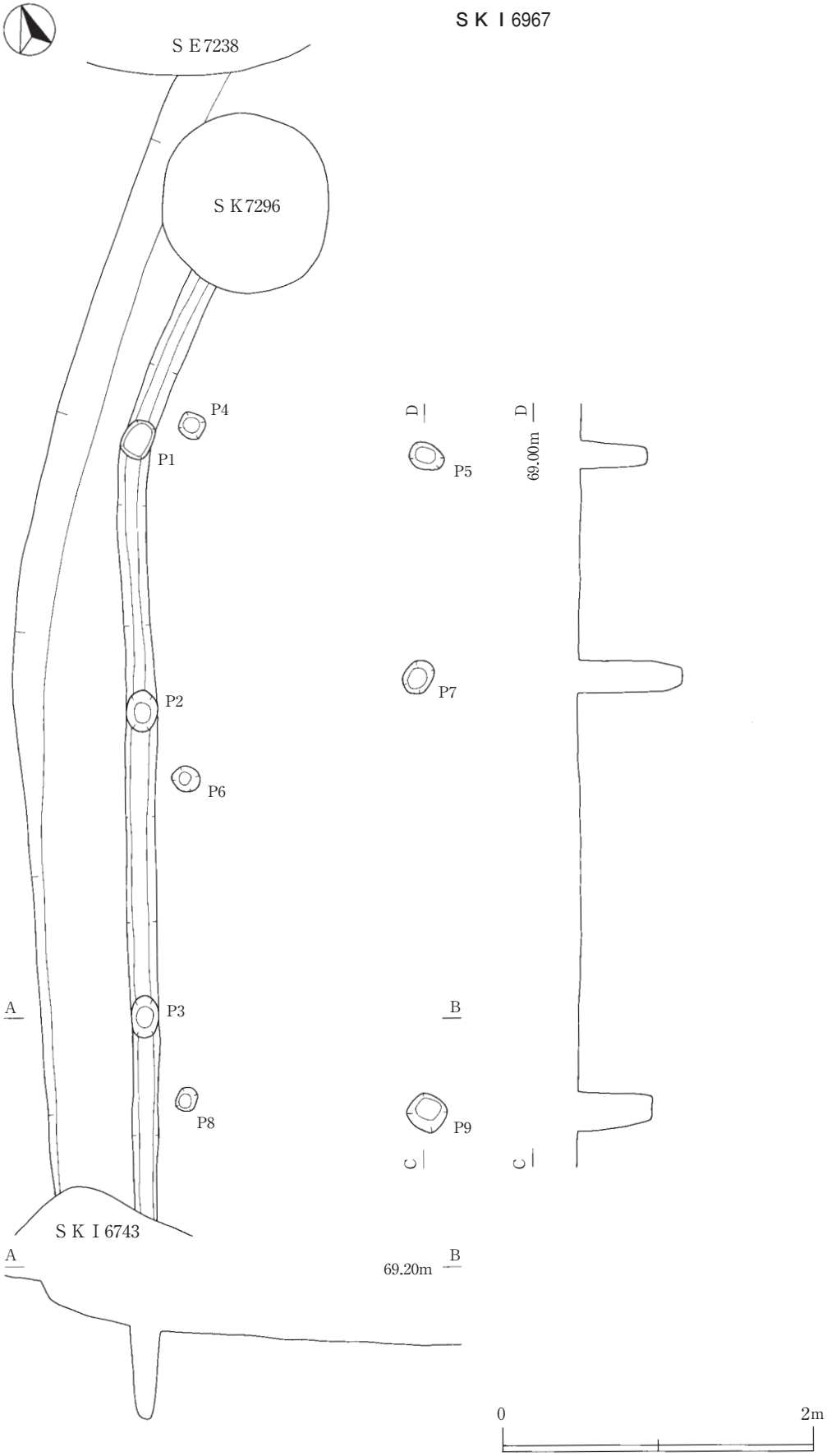
第59図　竪穴状遺構（６）



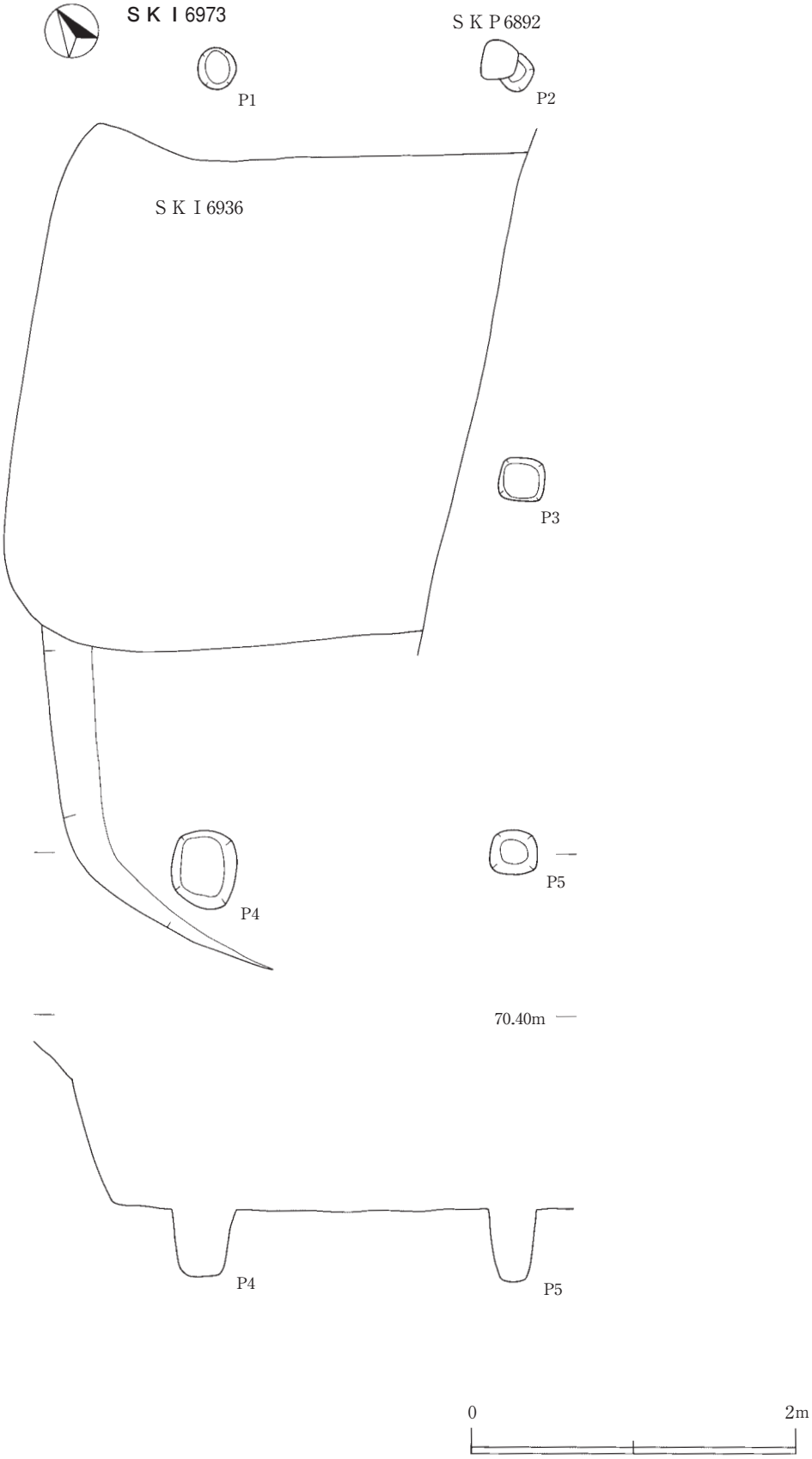
第60図　竪穴状遺構（７）


ＳＫＩ6943
ＳＫＩ6967
ＳＸ6963
P1
ＳＫＩ
8297
P2
P3
ＳＫＩ6936
P4
69.50m
P2
P3
0
2m

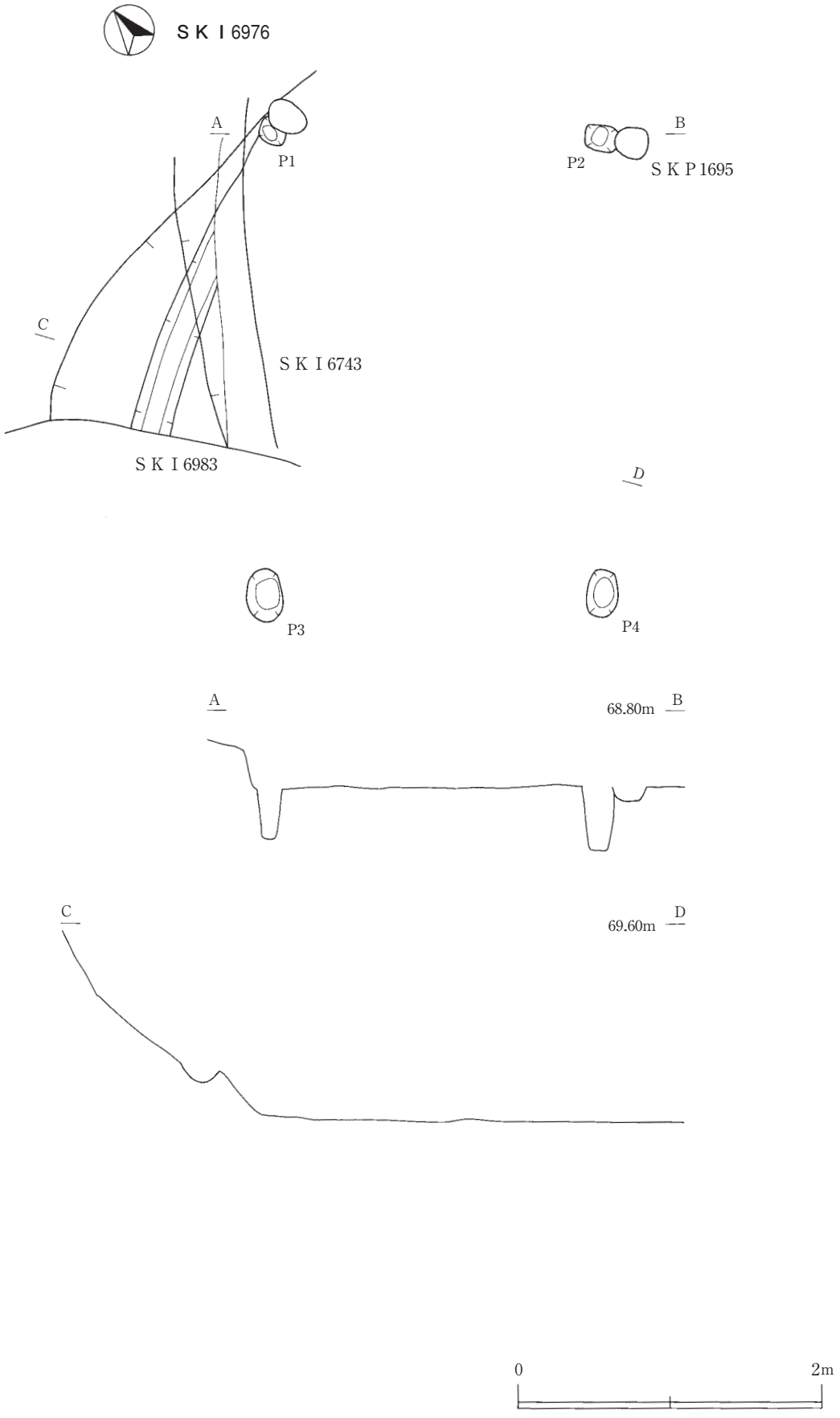
第61図　竪穴状遺構（８）


ＳＫＩ6967
ＳＥ7238
ＳＫ7296
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
B
C
D
69.00m
69.20m
ＳＫＩ6743
0
2m

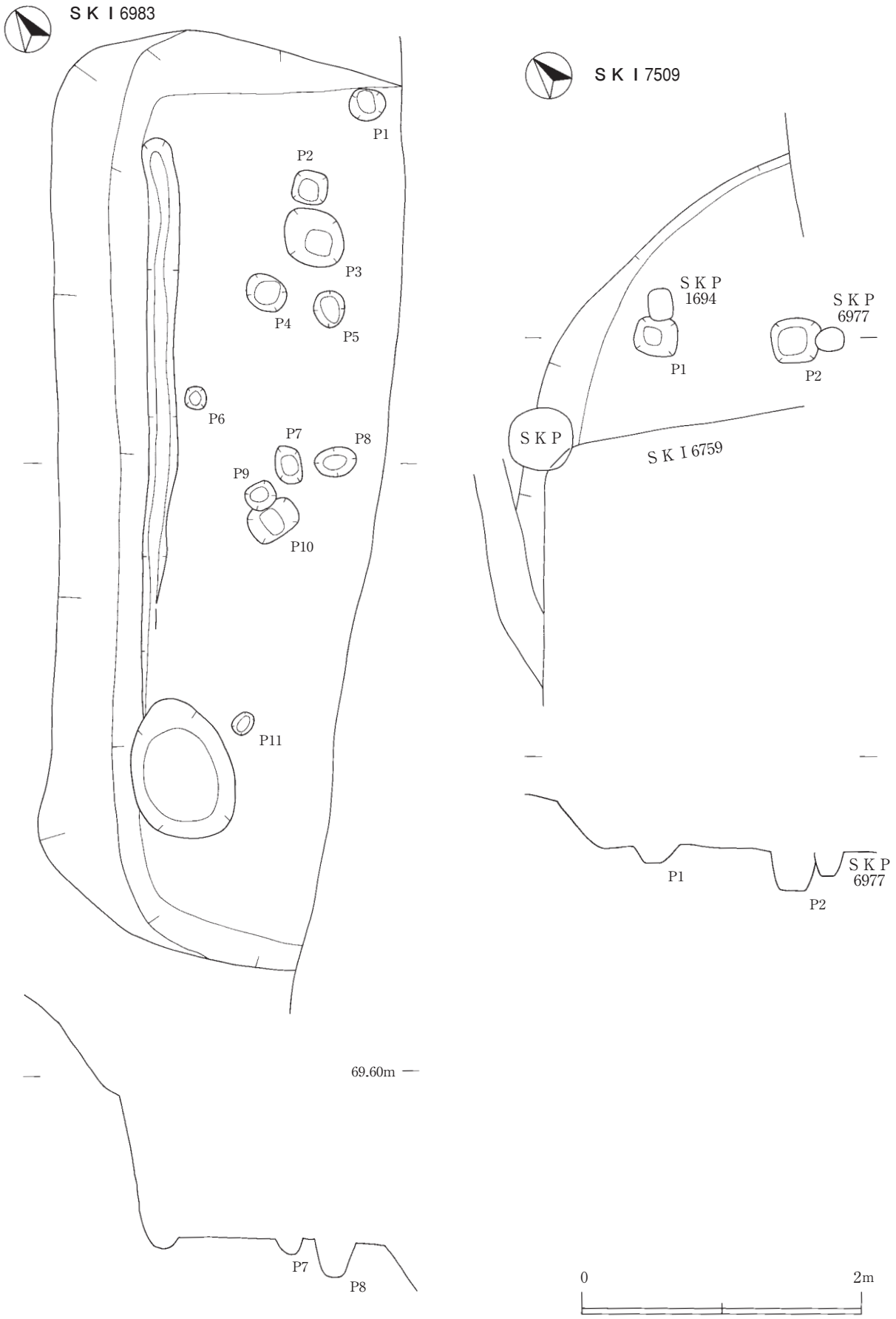
第62図　竪穴状遺構（９）



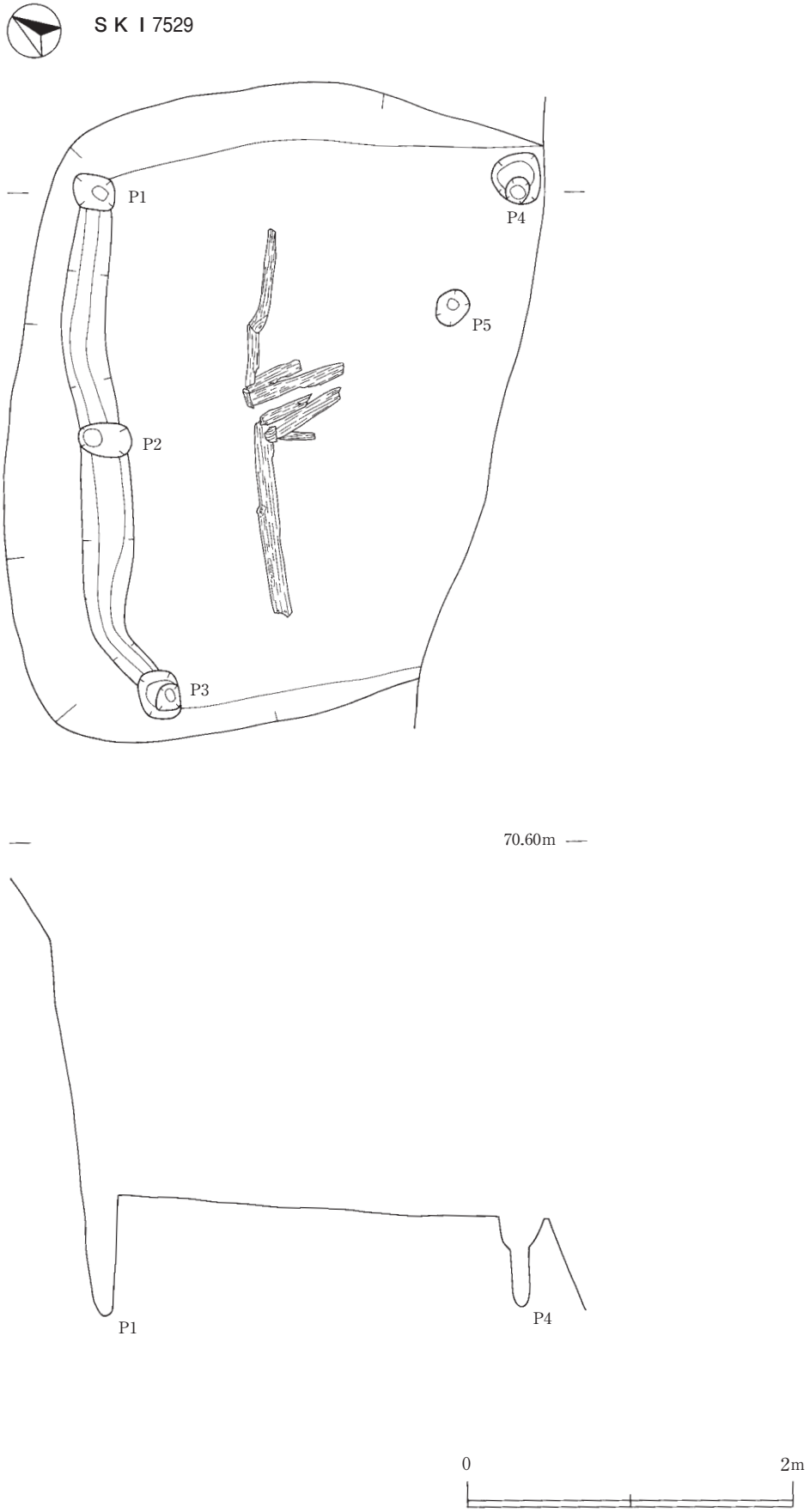
第63図　竪穴状遺構（10）



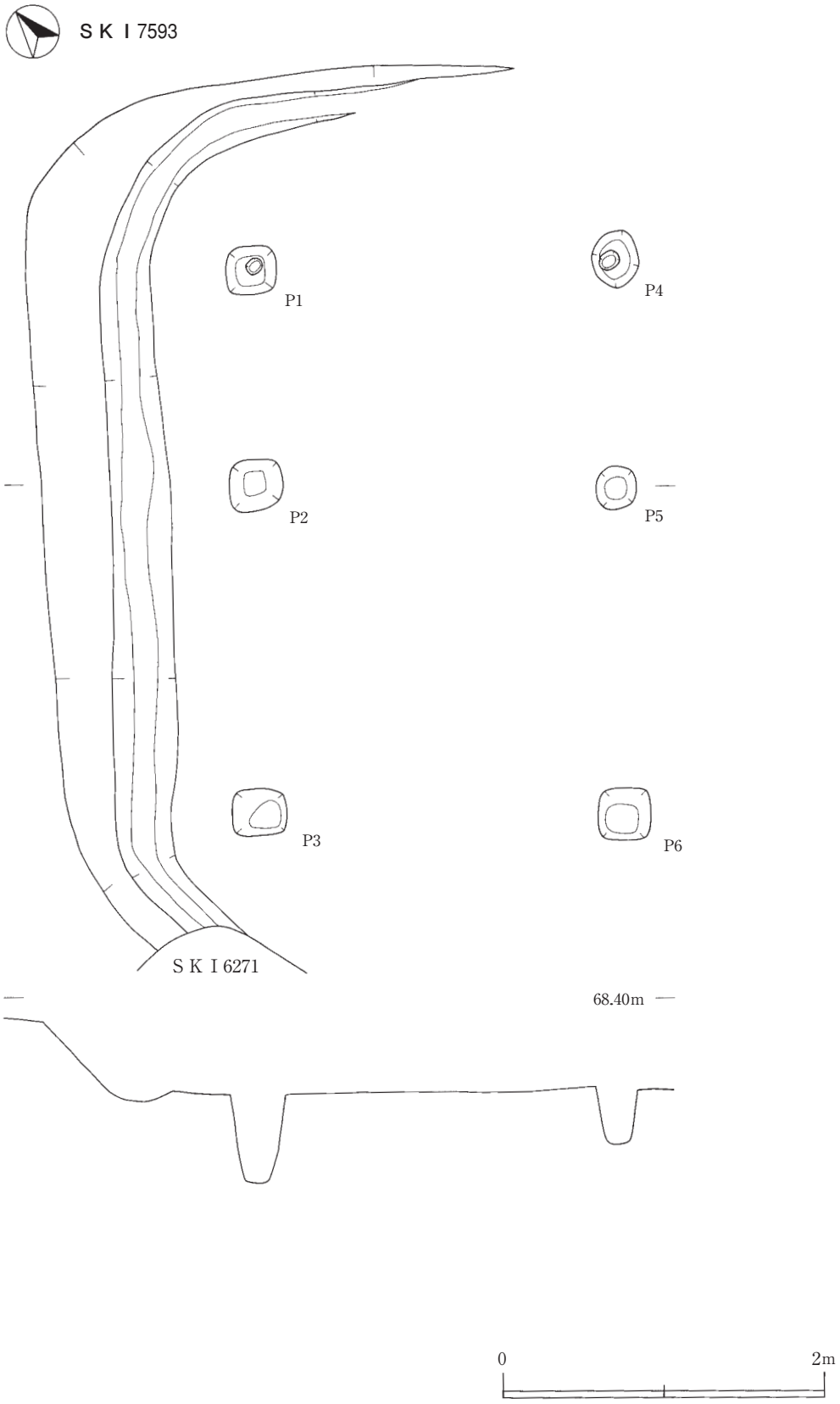
第64図　竪穴状遺構（11）



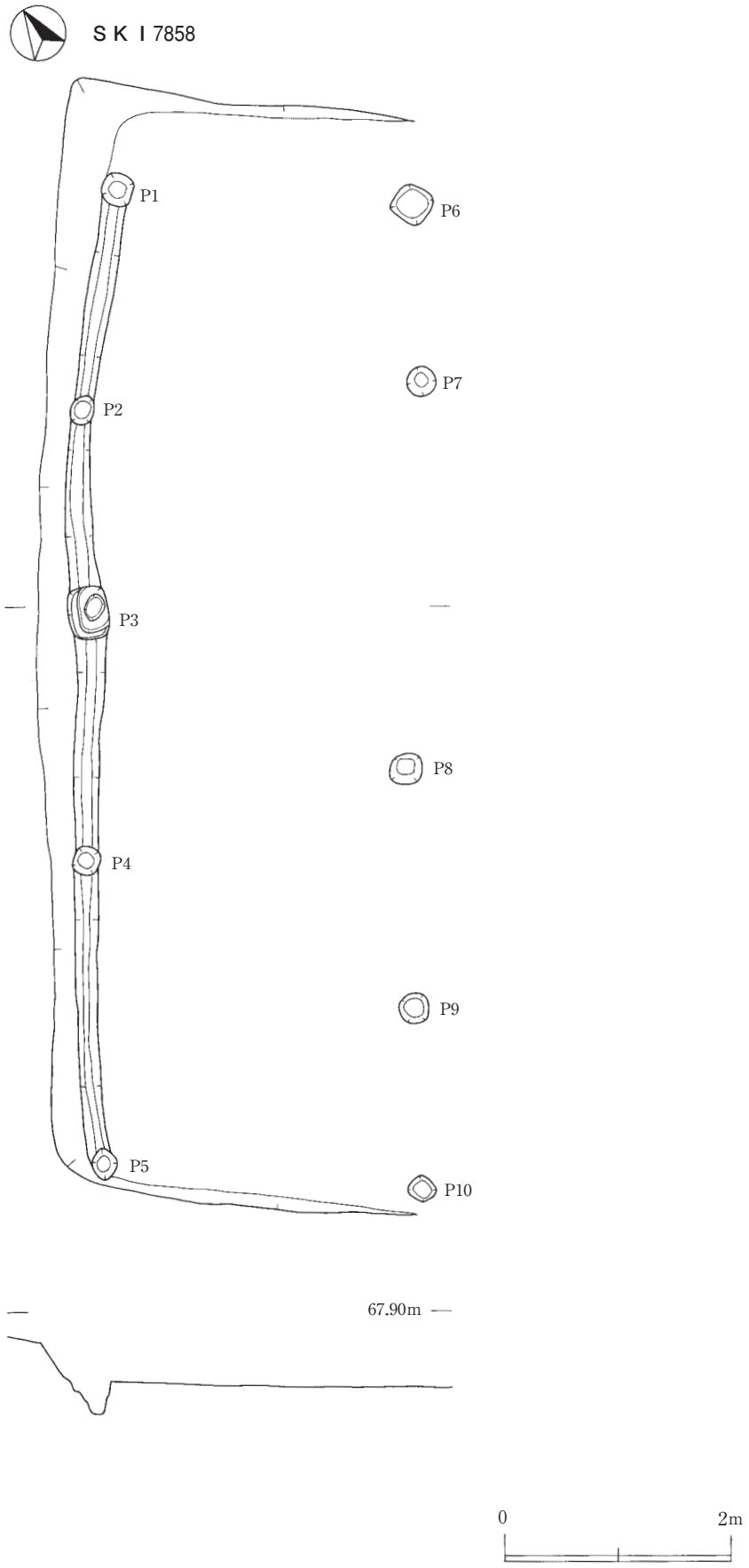
第65図　竪穴状遺構（12）



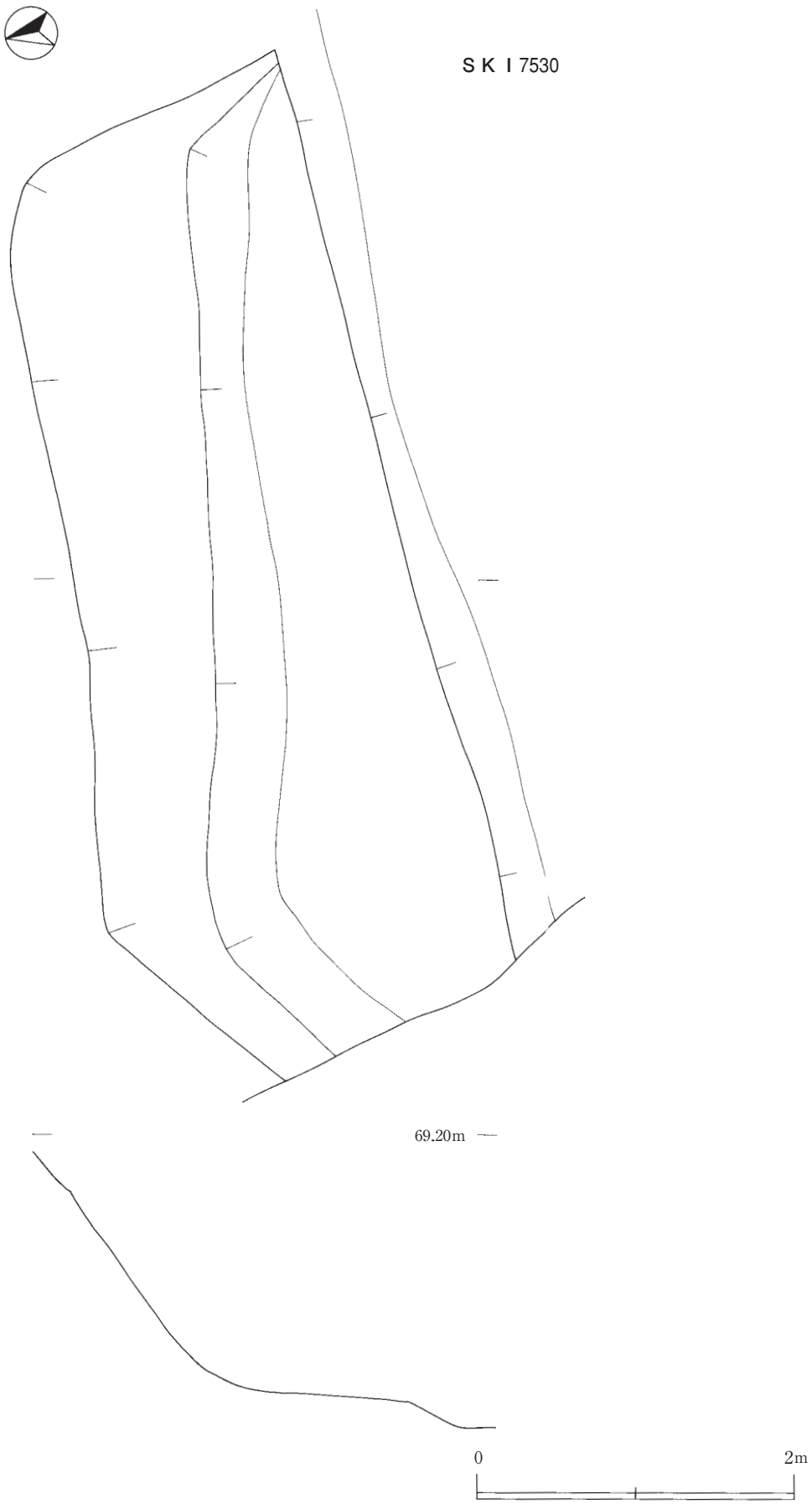
第66図　竪穴状遺構（13）



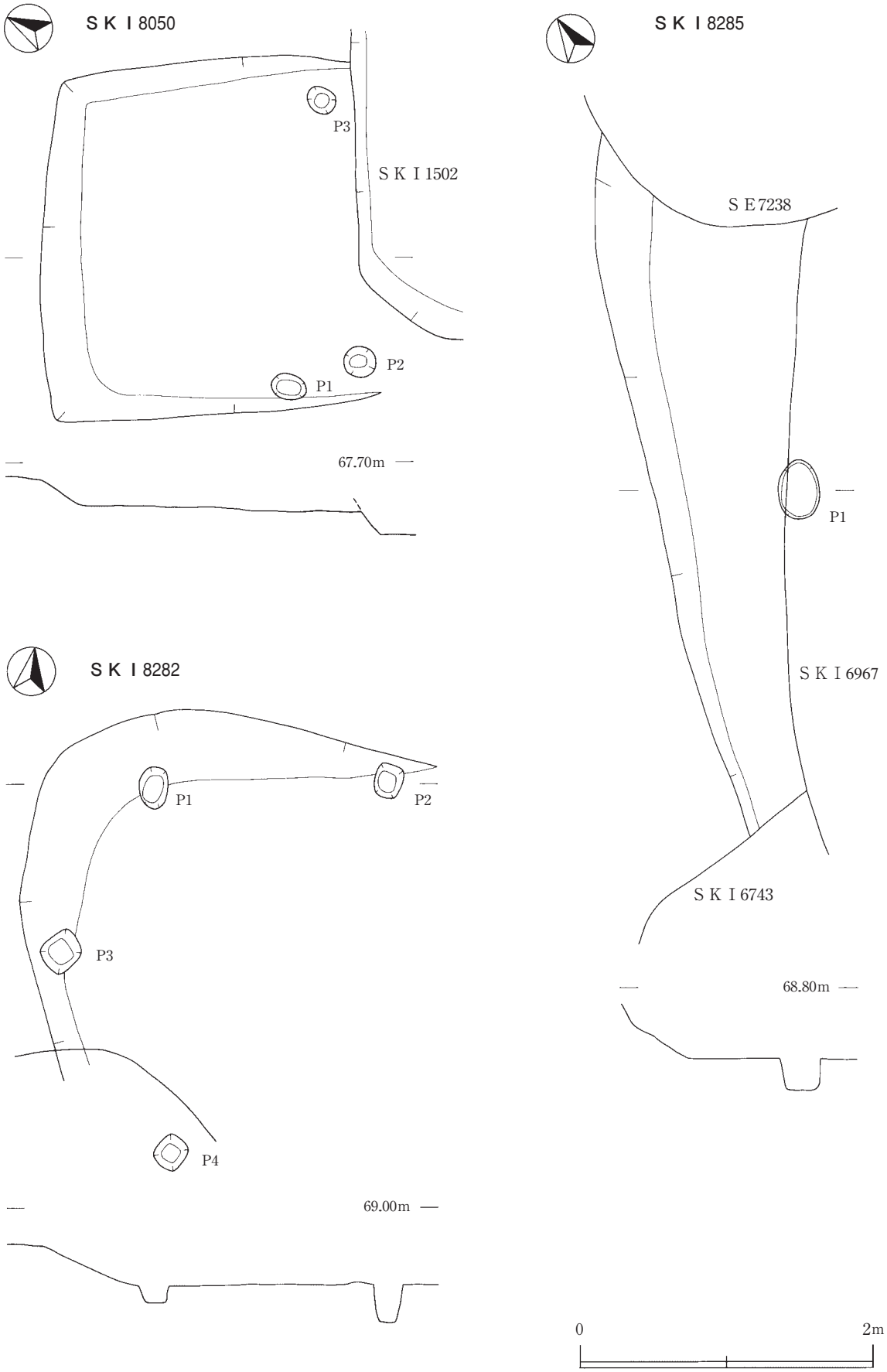
第67図　竪穴状遺構（14）



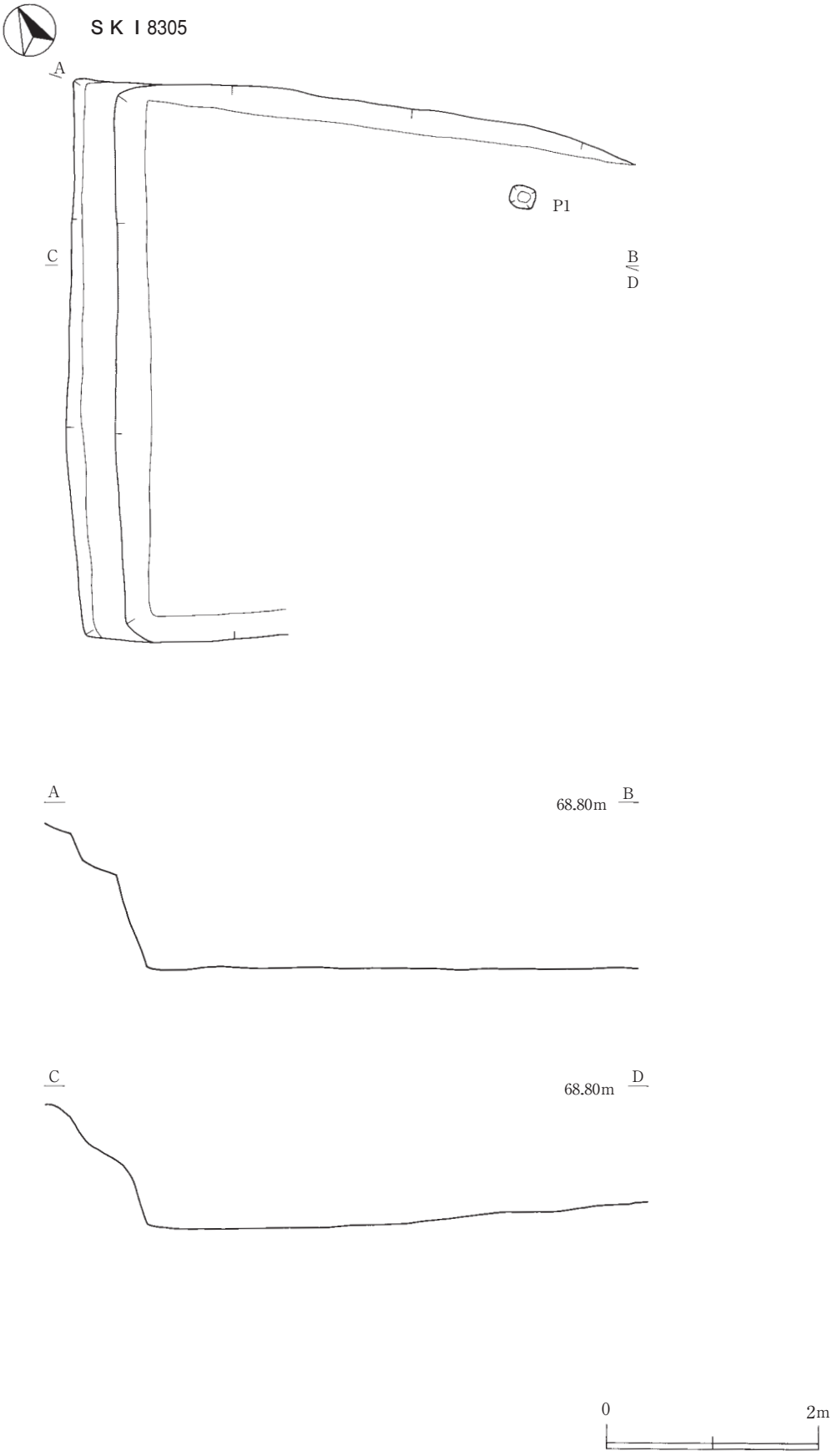
第68図　竪穴状遺構（15）



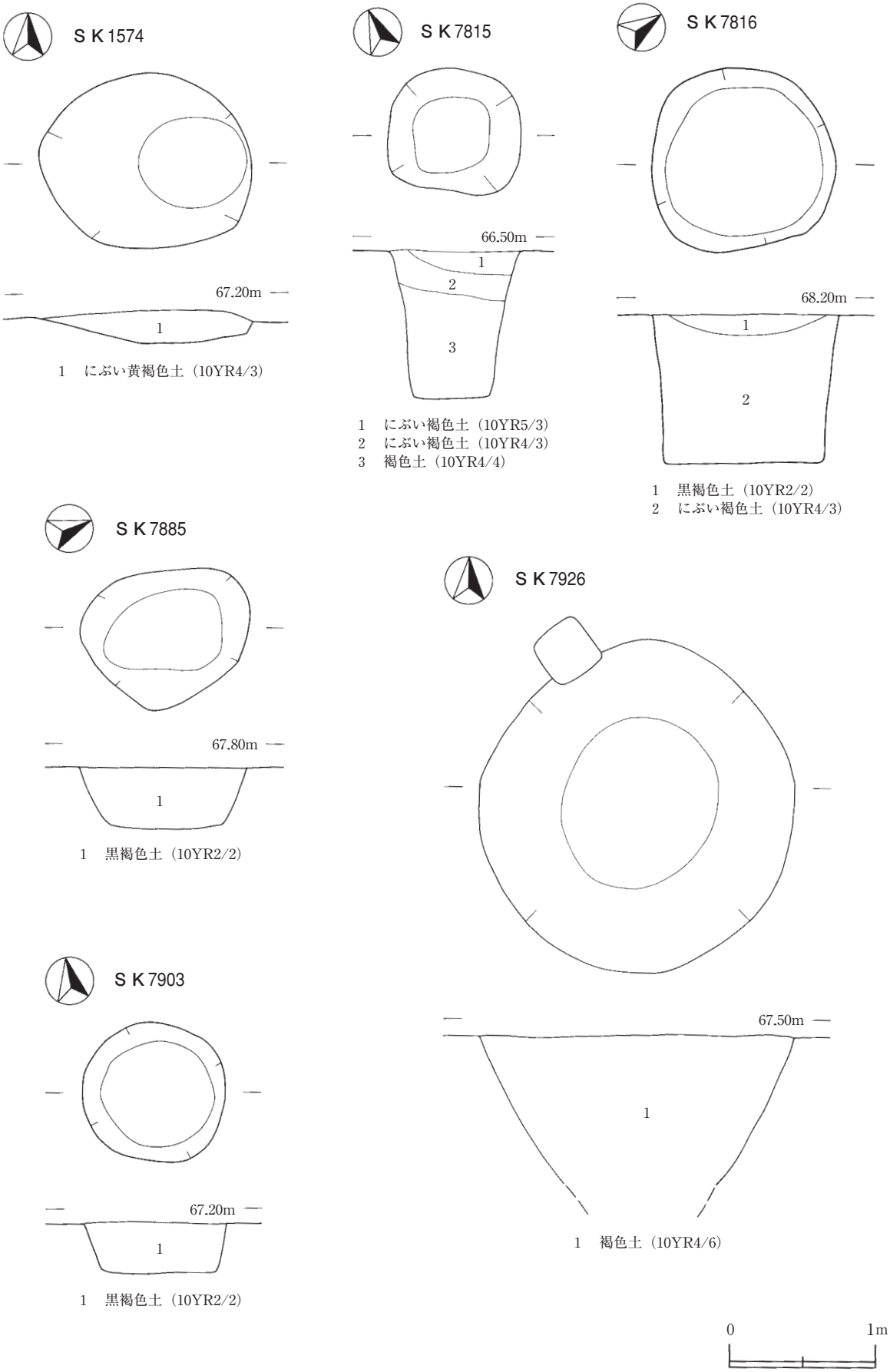
第69図　竪穴状遺構（16）



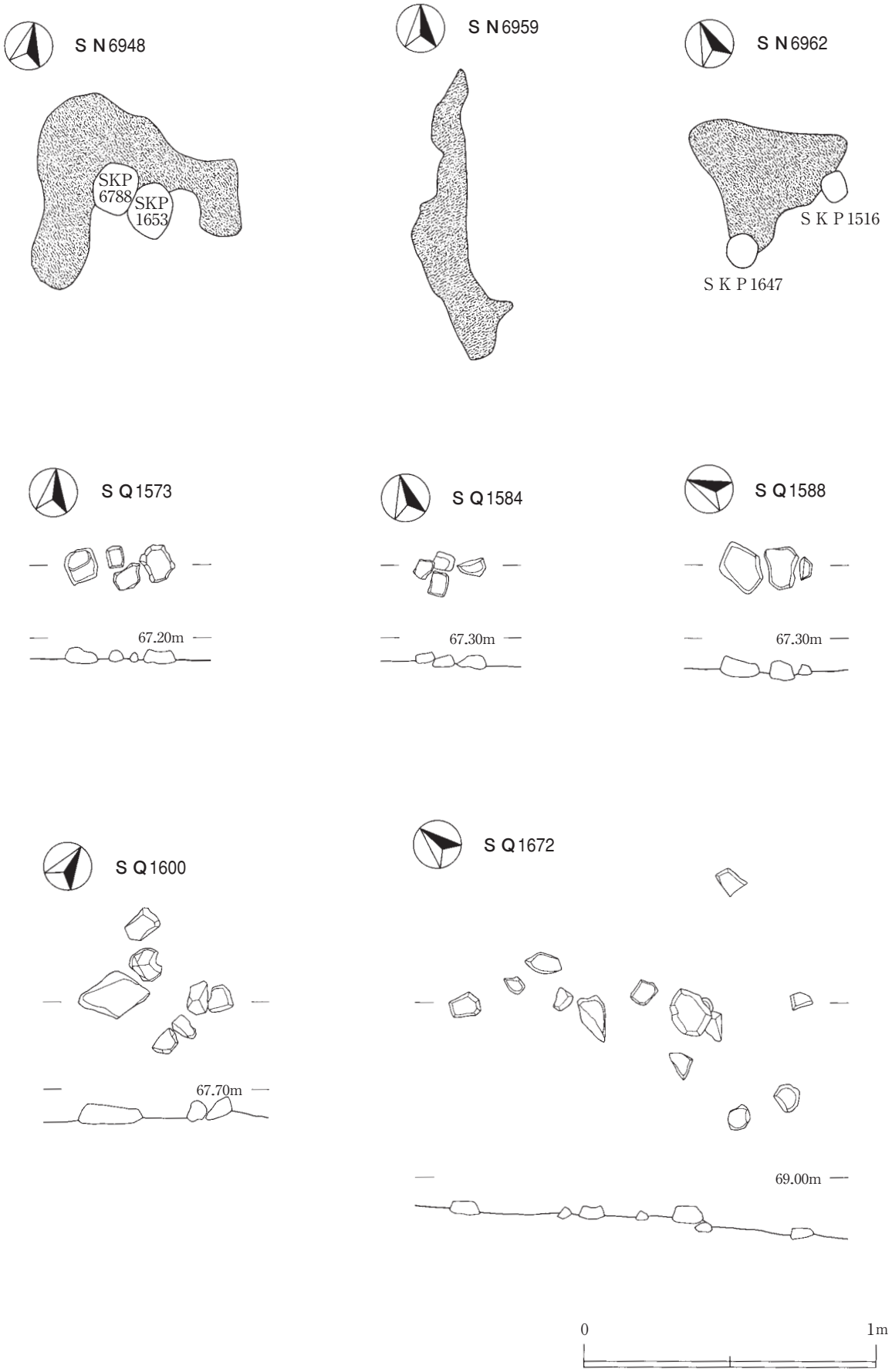
第70図　竪穴状遺構（17）



第71図　竪穴状遺構（18）


ＳＫ1574
67.20m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ7815
66.50m
1
2
3
1　にぶい褐色土（10YR5/3）
2　にぶい褐色土（10YR4/3）
3　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ7816
68.20m
1
2
1　黒褐色土（10YR2/2）
2　にぶい褐色土（10YR4/3）
ＳＫ7885
67.80m
1
1　黒褐色土（10YR2/2）
ＳＫ7926
67.50m
1
1　褐色土（10YR4/6）
ＳＫ7903
67.20m
1
1　黒褐色土（10YR2/2）
0
1m

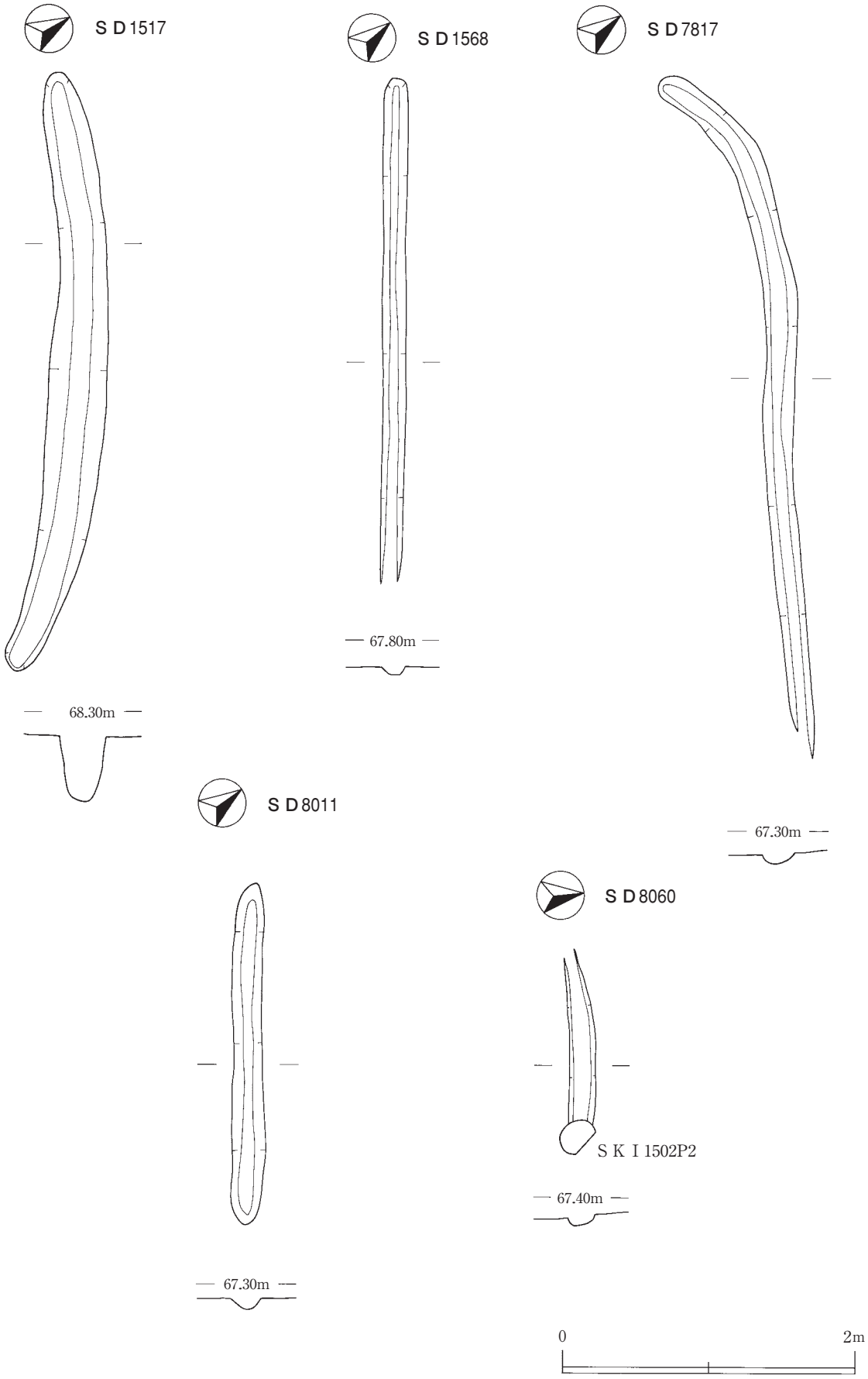
第72図　土坑（１）



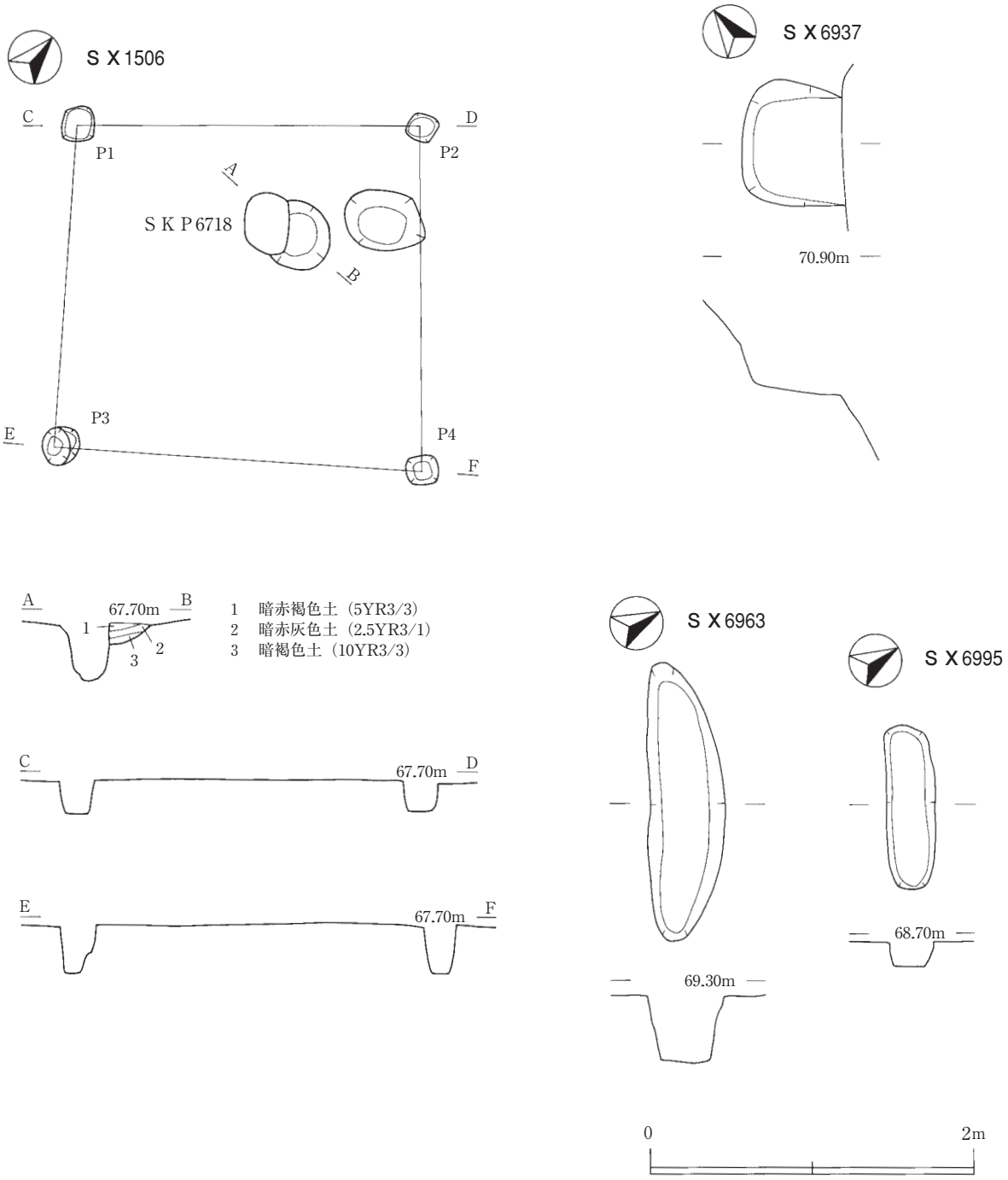
第73図　焼土遺構・集石（１）

ＳＱ6878
69.00m
ＳＱ6879
A
B
C
D
70.20m
69.40m
ＳＱ6880
69.40m
ＳＱ6881
68.90m
0
2m

第74図　集石（２）


ＳＤ1517
68.30m
ＳＤ1568
67.80m
ＳＤ7817
67.30m
ＳＤ8011
67.30m
ＳＤ8060
ＳＫＩ1502P2
67.40m
0
2m

第75図　溝跡


ＳＸ1506
C
D
P1
P2
A
ＳＫＰ6718
B
P3
P4
E
F
ＳＸ6937
70.90m
A
67.70m
B
1
2
3
1　暗赤褐色土（5YR3/3）
2　暗赤灰色土（2.5YR3/1）
3　暗褐色土（10YR3/3）
C
67.70m
D
E
67.70m
F
ＳＸ6963
69.30m
ＳＸ6995
68.70m
0
2m

第76図　その他の遺構

第６表　Ⅳ郭出土遺物一覧表（１）

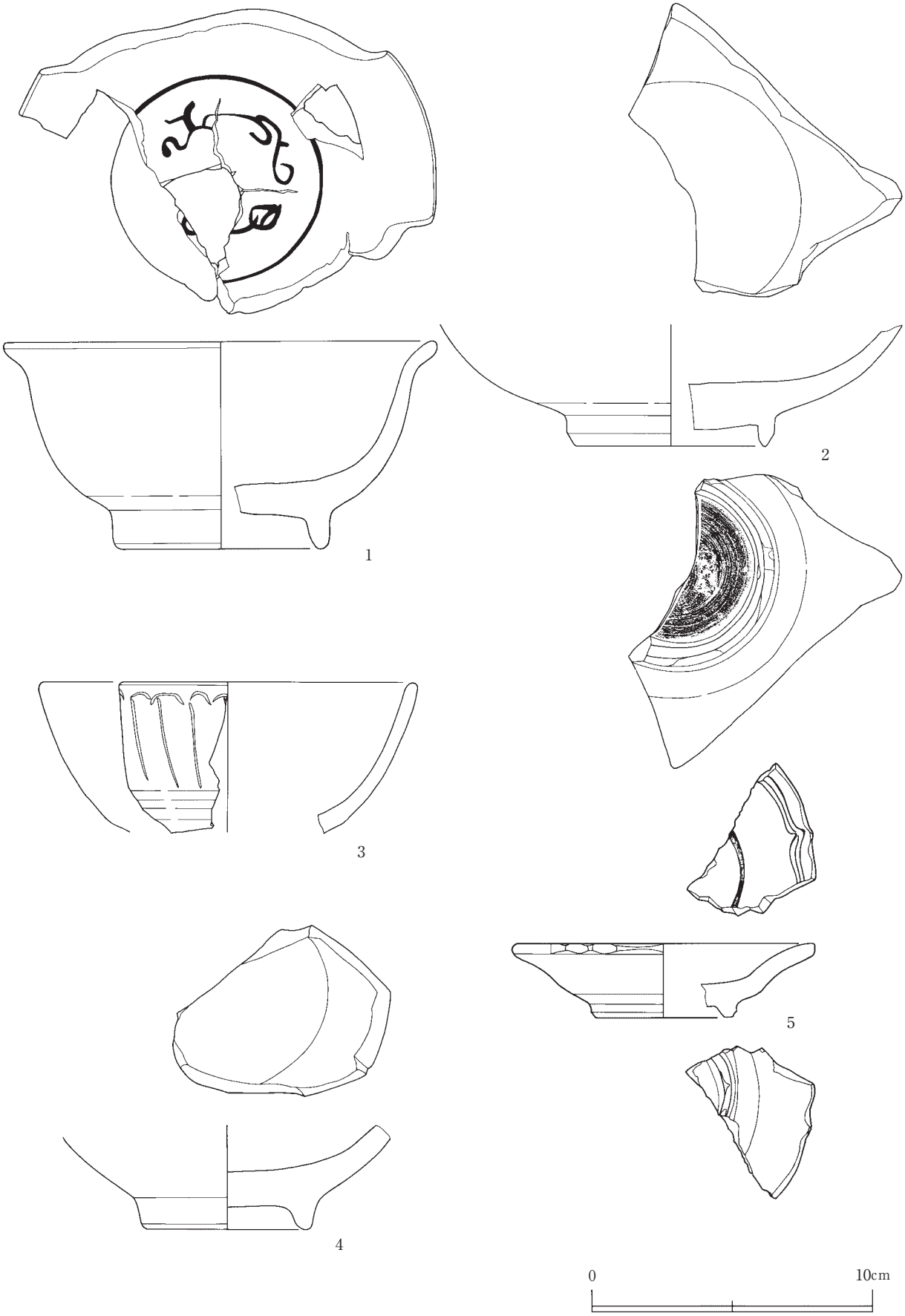
挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
3	3	SKI6983	磁器	青磁	碗	(13.2)	—	—	15C末～16C前	
4	4	MS27	磁器	青磁	碗	—	—	(5.7)		
5	5	SKP1516-1	磁器	青磁	皿	(10.5)	2.7	(4.9)		龍泉窯系
78- 6	6	SKI6983	磁器	青磁	皿	(9.8)	—	—		
7	45- 1	MR27	磁器	青白磁	水差し	(2.5)	4.8	—	15C後	
8	2	MR26	磁器	白磁	皿	(7.6)	—	—		
9	3	MS25	磁器	白磁	皿	(8.2)	—	—		ハカマゴシ
10	—	MO31	磁器	白磁	不明	—	—	—		
11	4	MP31	磁器	染付	皿	(12.2)	—	(7.4)	15C後～16C前	
12	5	MS・MR25	磁器	染付	碗	—	—	—	15C後～16C前	雷文
13	6	表採	磁器	染付	皿	—	—	—	15C後～16C前	
14	7	MQ26	磁器	染付	皿	—	—	—	15C後～16C前	
15	8	MS25	磁器	染付	碗	—	—	—		
79-16	9	MS25	磁器	染付	碗	—	—	(3.6)	15C末～16C前	ゴケ底
17	10	MR25	磁器	染付	皿	—	—	(7.5)	16C後	安土桃山時代
18	11	MR27	磁器	染付	皿	—	—	(8.2)	15C後～16C前	
19	12	SKP1598	磁器	染付	皿	—	—	(7.3)	15C後～16C前	
20	13	MQ28	磁器	染付	皿	—	—	(6.2)	15C後～16C前	
21	14	NA26	磁器	染付	皿	—	—	(7.0)	15C末～16C前	
22	46- 1	MN29	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
23	2	MR29	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
24	3	MN29	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
25	4	NA25	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
80-26	—	SK7905	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
27	—	SKP6853	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
28	—	SK7905	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
29	—	SK7815	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
30	—	SK7905	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
31	5	SKP7845	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
32	6	MP29	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
33	—	SK7905	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
34	7	MR27	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
35	—	MN・MO22	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
36	8	MN・MO22	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
37	9	MN29、MP28	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
81-38	10	NA30	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	(11.7)		
39	11	NA26	陶器	珠洲系	甕か壺	—	—	—		
40	46-12	表採	陶器	珠洲系	甕か壺	(14.5)	—	—		
41	13	MN30	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
42	—	SKI6983	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
43	14	MS27	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
44	—	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、Ａ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径を示す。なお、（　）内の数値は推定値である。

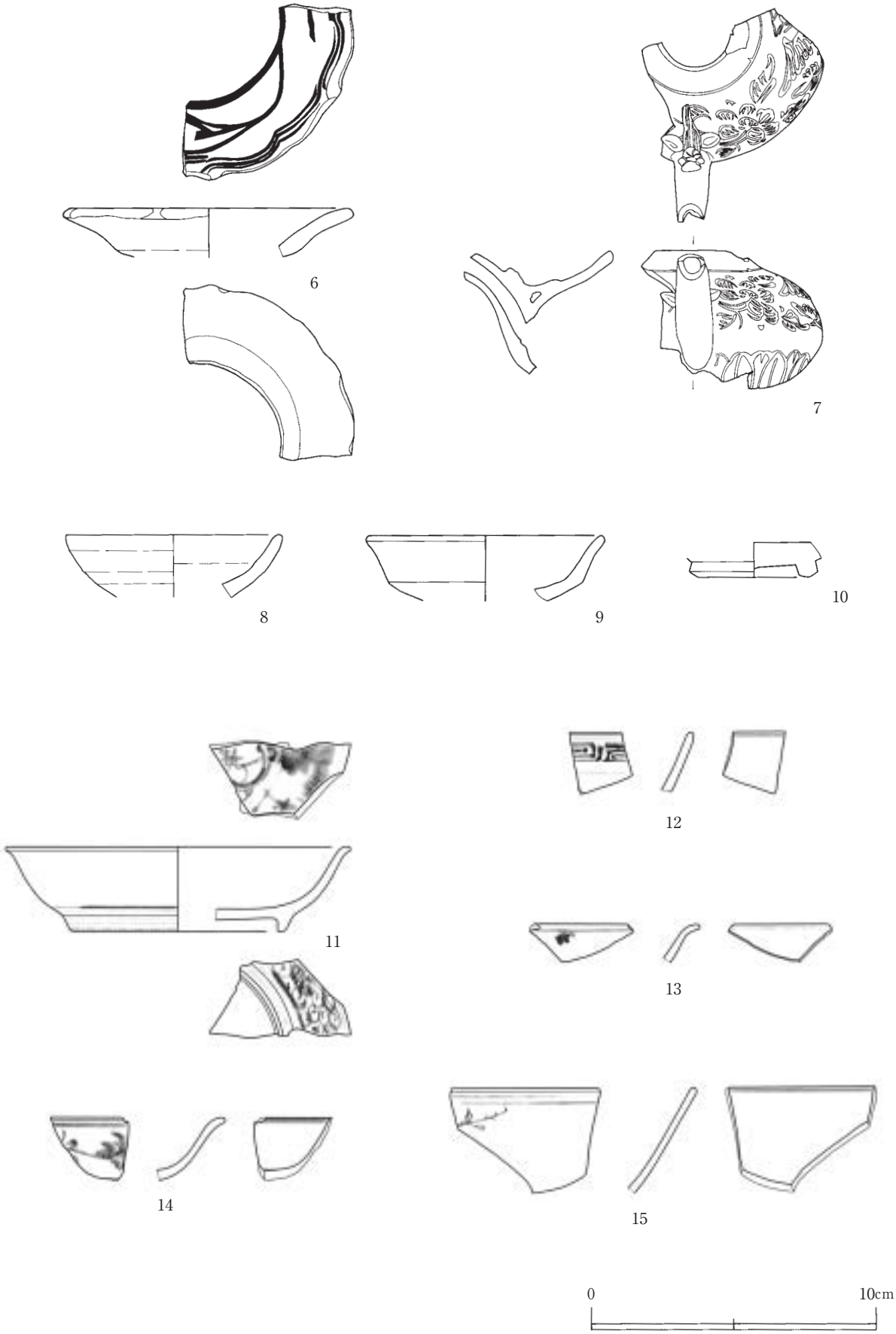
第７表　Ⅳ郭出土遺物一覧表（２）

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
81-45	—	SKI6983	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
46	—	MR27	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
82-47	15	MR26	陶器	珠洲系	擂鉢	(32.0)	12.1	(13.1)		
83-48	17	MS25	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
49	16	MO31	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(12.0)		
50	18	SKP1509	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(11.3)		
51	—	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(11.8)		
52	47-1	SK7829	陶器	越前	擂鉢	—	—	—	16C	
84-53	2	MR30	陶器	越前	擂鉢	—	—	—	16C	
54	5	MQ26	陶器	越前	擂鉢	—	—	—	16C	地場産？
55	3	SKP1501	陶器	越前	擂鉢	—	—	—	16C	
56	6	MM30	土器	瓦質土器	火鉢	—	—	—		
57	4	MR・MS25	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
58	7	MP32	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—	15C	
59	8	表採	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—	15C	
60	9	表採	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—	15C	
85-61	10	MM29	金属	—	鉄製刀	35.4	3.5	1.2		重さ145.3ｇ
62	11	MS25	金属	—	足金物	3.6	3.0	0.3		重さ12.5ｇ
63	12	MN30	金属	—	足金物	3.0	3.2	0.2		重さ12.4ｇ
64	13	MR27	金属	—	足金物	2.6	3.9	0.4		重さ21.8ｇ
65	14	SKI6983	金属	—	不明	11.0	1.6	0.6		重さ14.0ｇ
66	15	SKP6965	金属	—	不明	8.7	1.4	0.5		重さ8.7ｇ
67	16	MQ27	金属	—	不明	11.8	1.3	1.1		重さ34.5ｇ
68	17	MN29	金属	—	釘	5.5	0.9	1.0		重さ4.2ｇ
69	18	MP26	金属	—	不明	6.0	6.0	0.6		重さ38.3ｇ
70	48-1	MP29	金属	—	銭貨	2.4	—	—	初鋳年1368年	洪武通寶　重さ3.8ｇ
71	2	MO31	金属	—	銭貨	2.4	—	—	初鋳年1408年	永楽通寶　重さ2.7ｇ
72	3	SKI1502	金属	—	銭貨	2.4	—	—		元？通寶　重さ2.1ｇ
86-73	4	OO38・39	土製品	—	羽口	—	—	—		
74	5	MS25	石製品	—	砥石	4.3	1.7	1.1		重さ8.5ｇ
75	6	MR26	石製品	—	石臼	—	—	—		
76	7	MQ27	石製品	—	石臼	—	—	—		
87-77	8	SQ6878	石製品	—	石臼	—	—	—		
78	49-1	MO29	石製品	—	石臼	—	—	—		

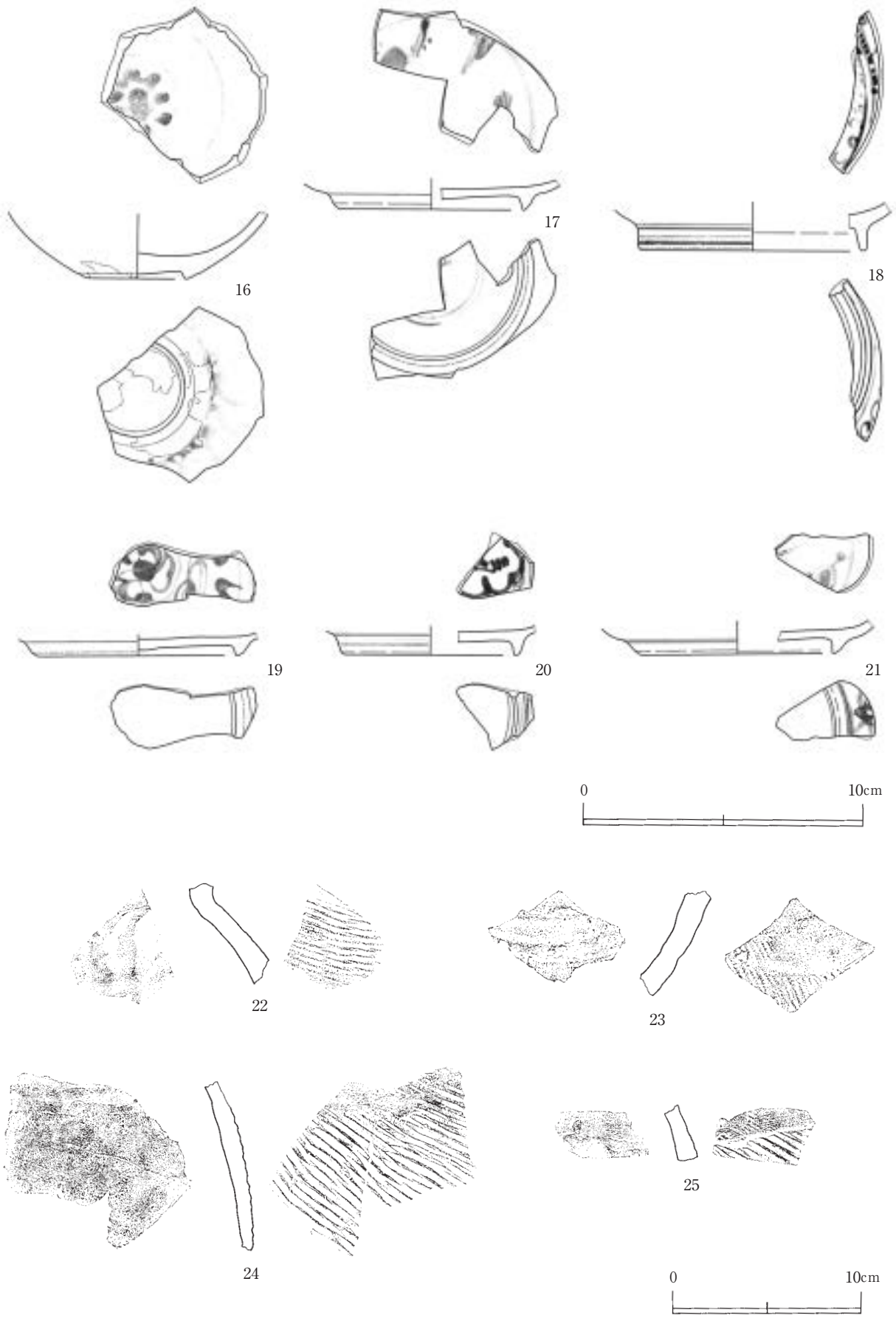
※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属・石製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さで、金属の銭貨ではＡ：径を示す。なお、（　）内の数値は推定値である。



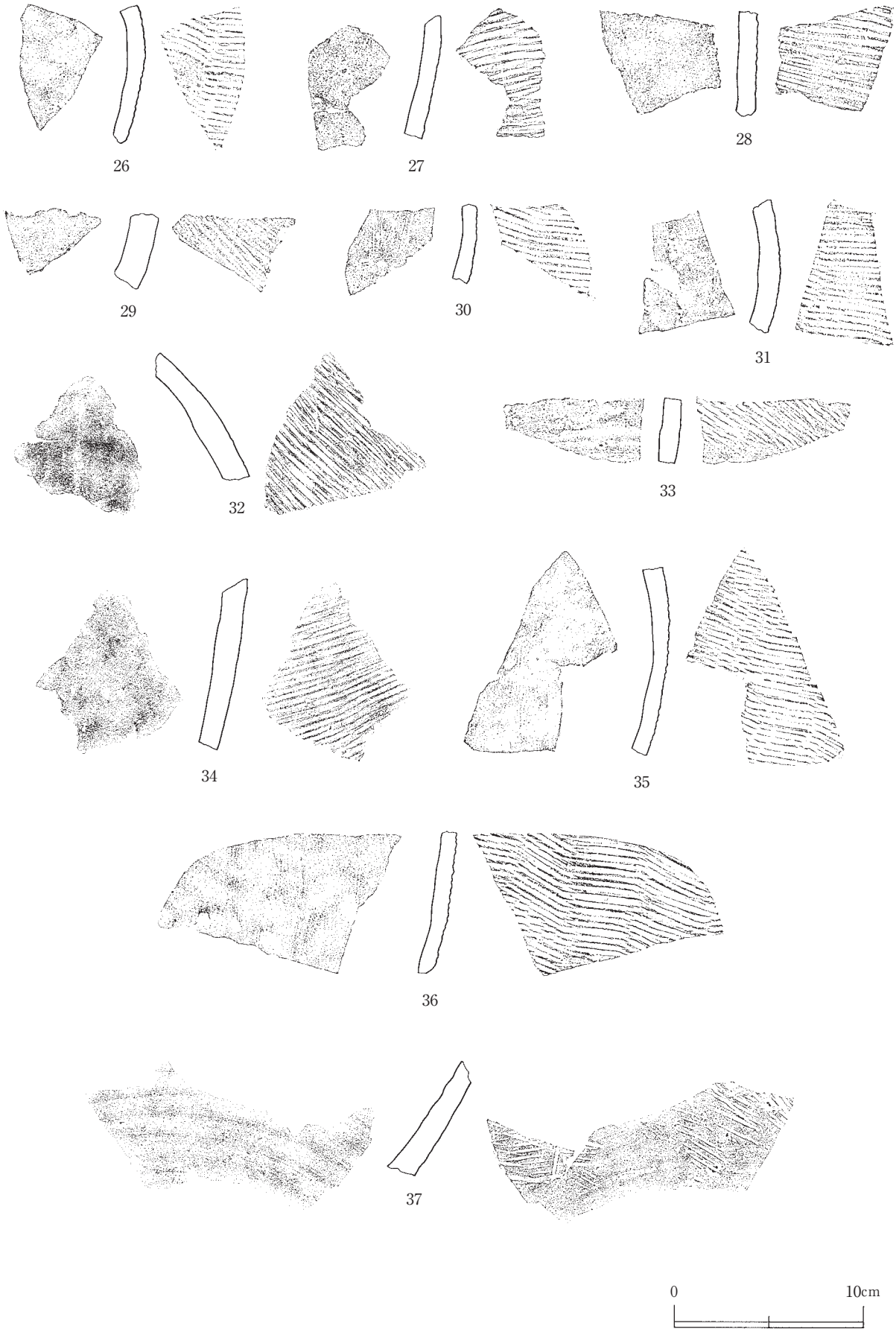
第77図　Ⅳ郭出土遺物（１）



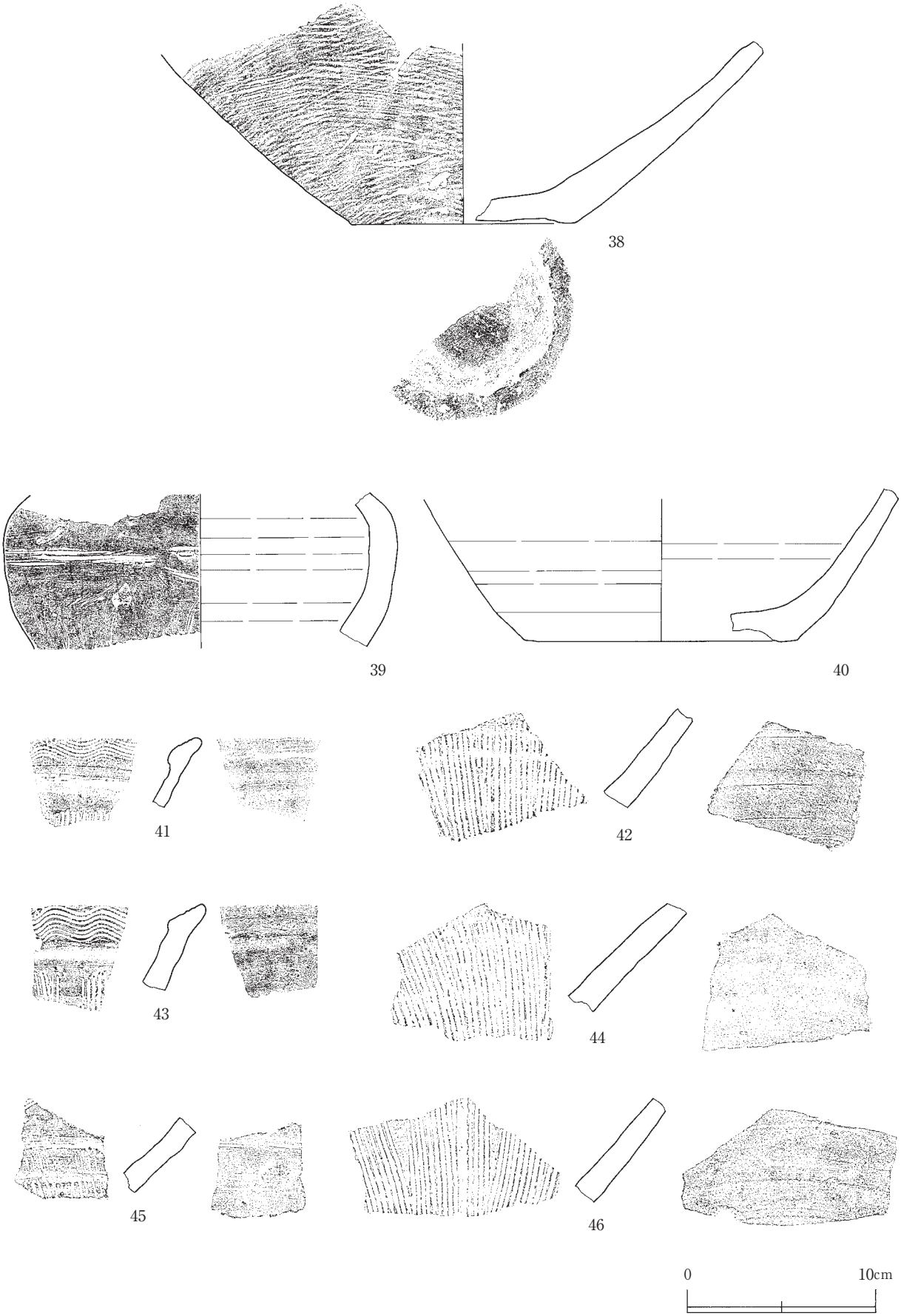
第78図　Ⅳ郭出土遺物（２）



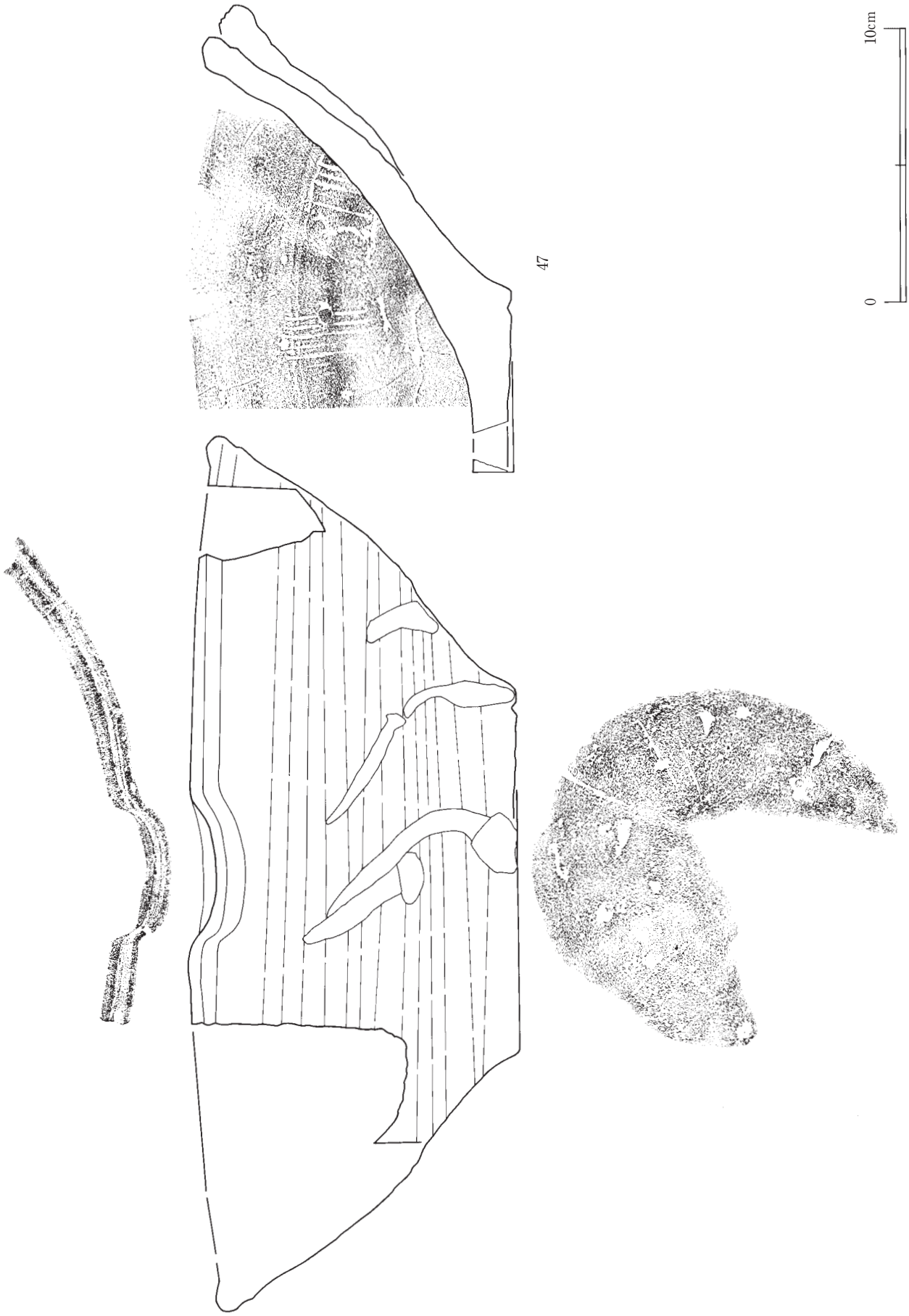
第79図　Ⅳ郭出土遺物（３）



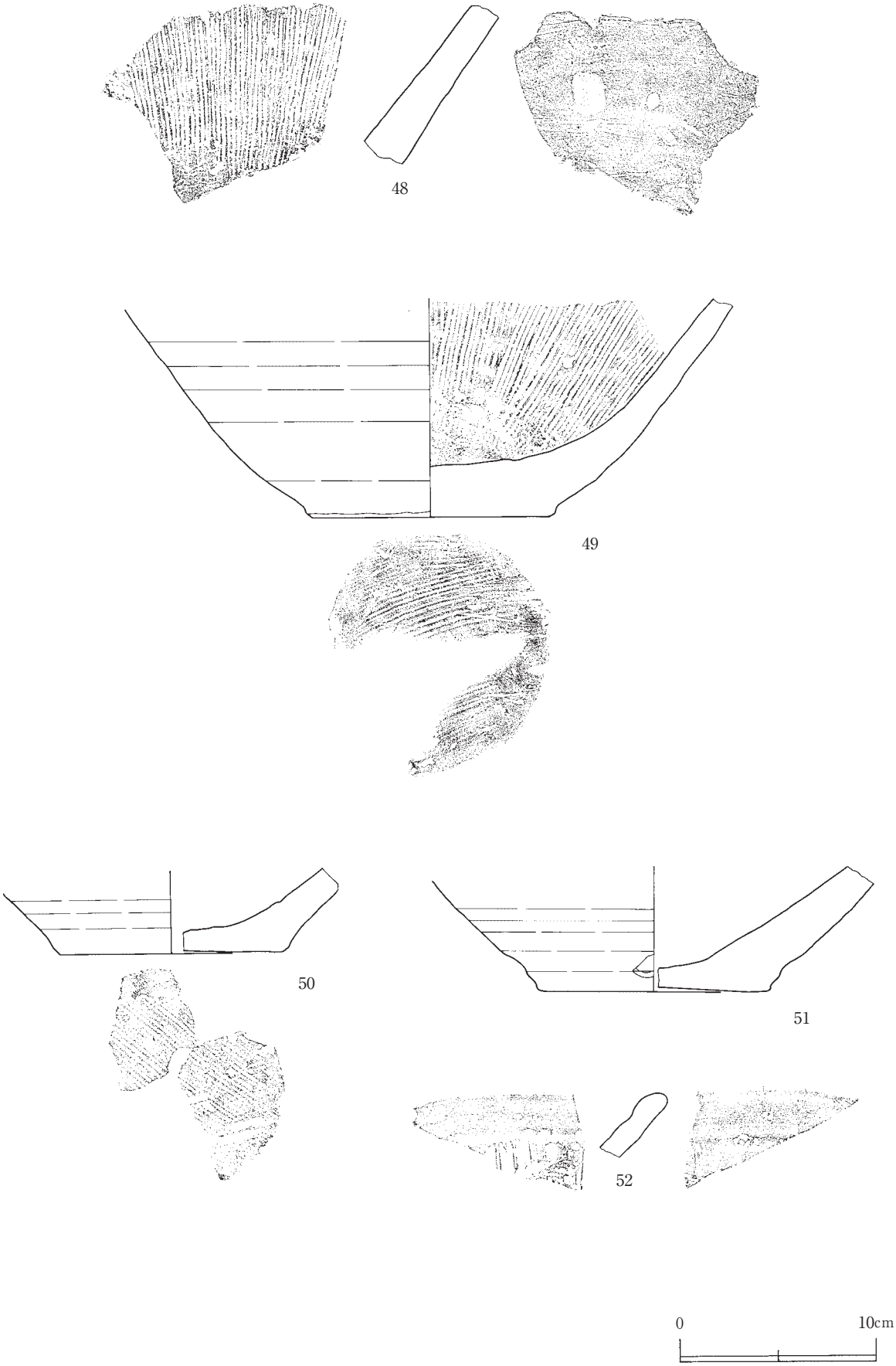
第80図　Ⅳ郭出土遺物（４）



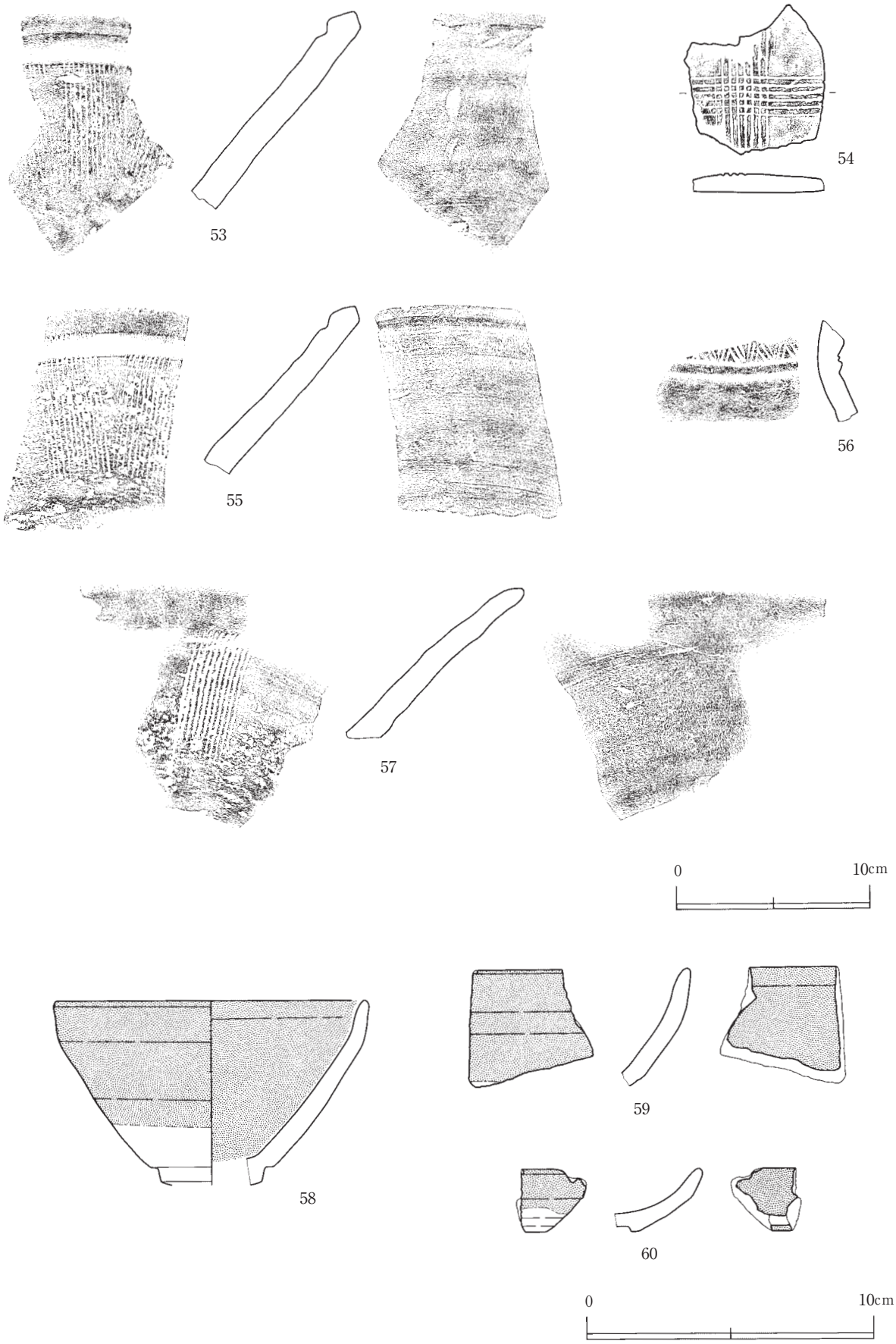
第81図　Ⅳ郭出土遺物（５）



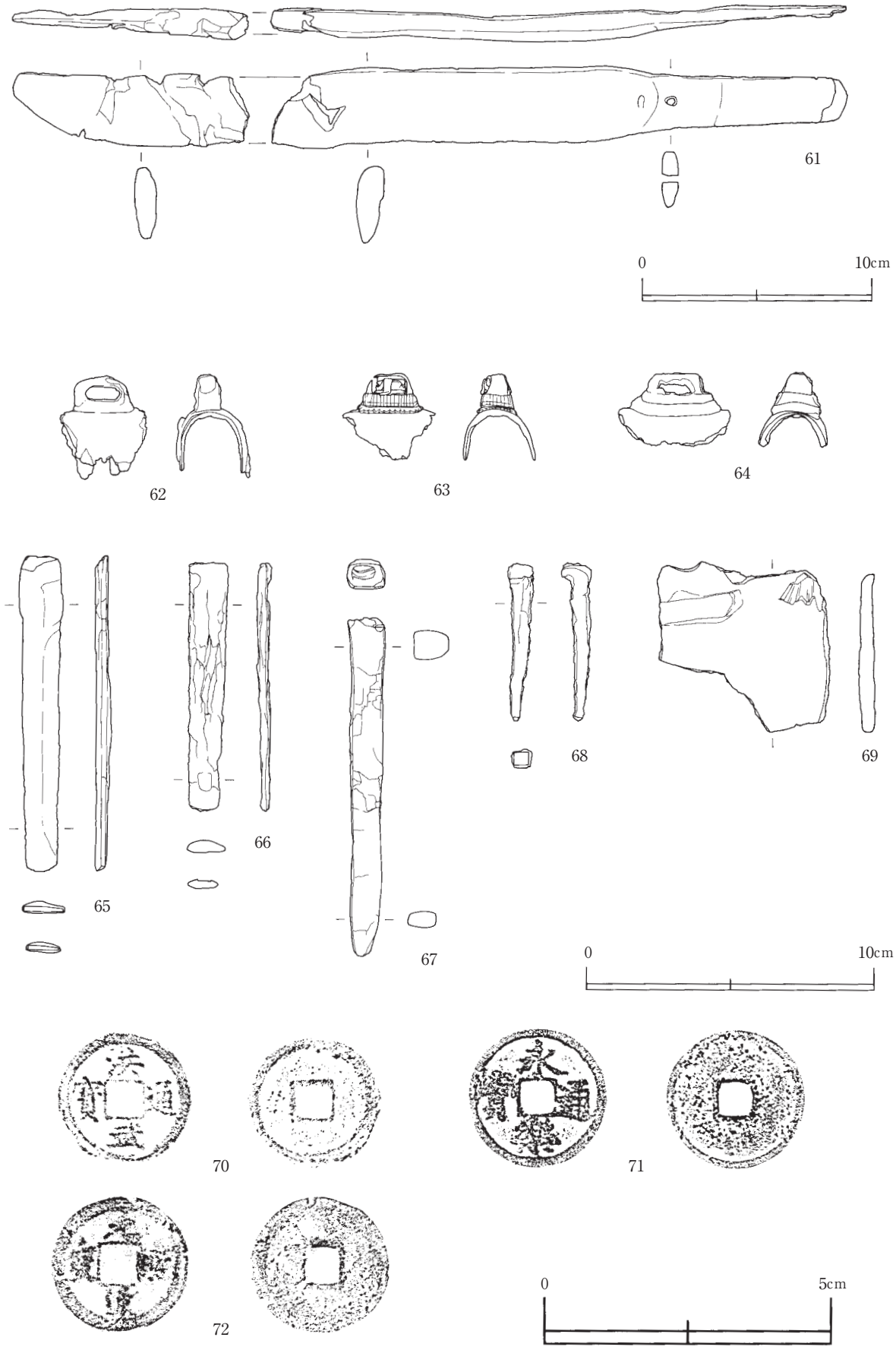
第82図　Ⅳ郭出土遺物（６）



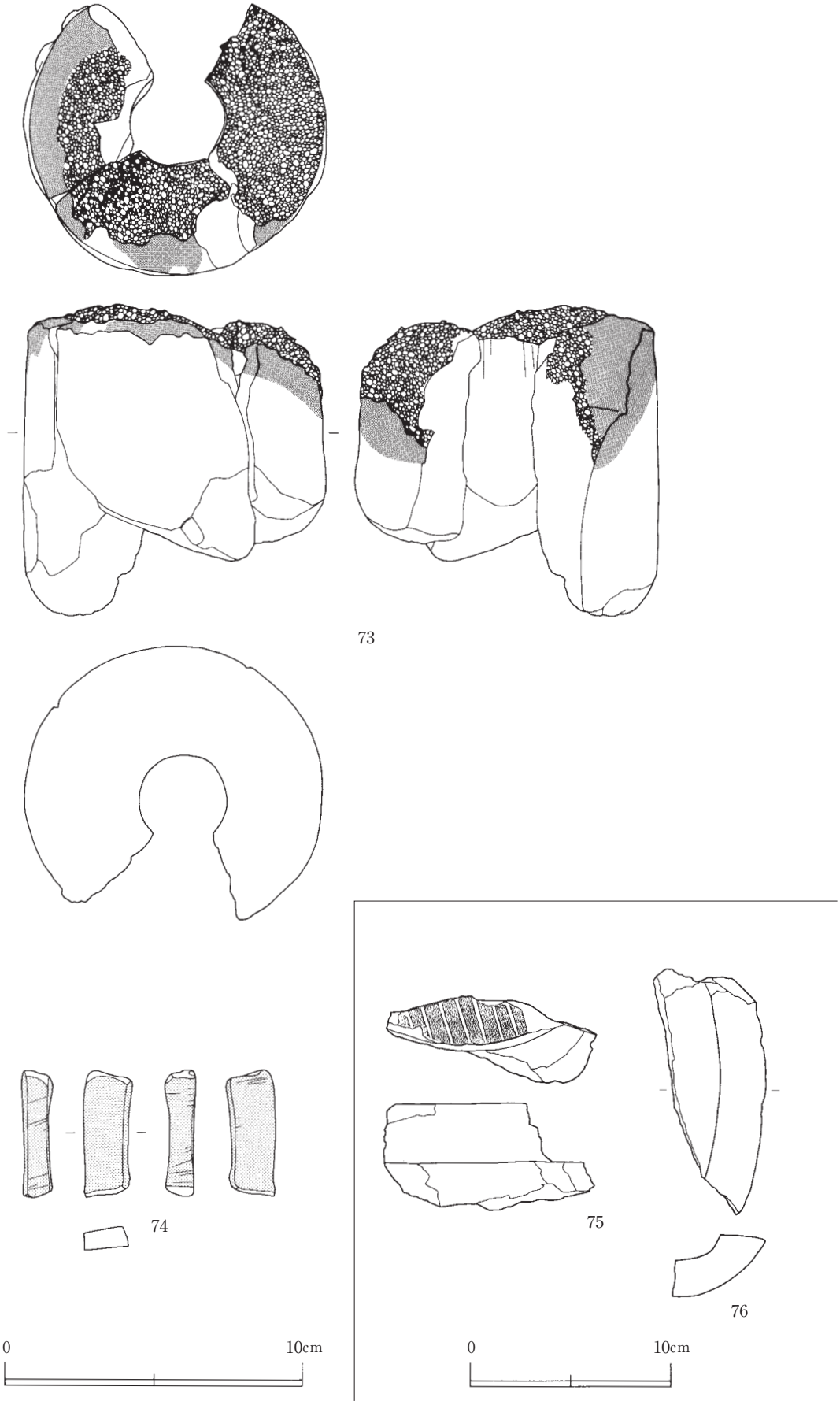
第83図　Ⅳ郭出土遺物（７）



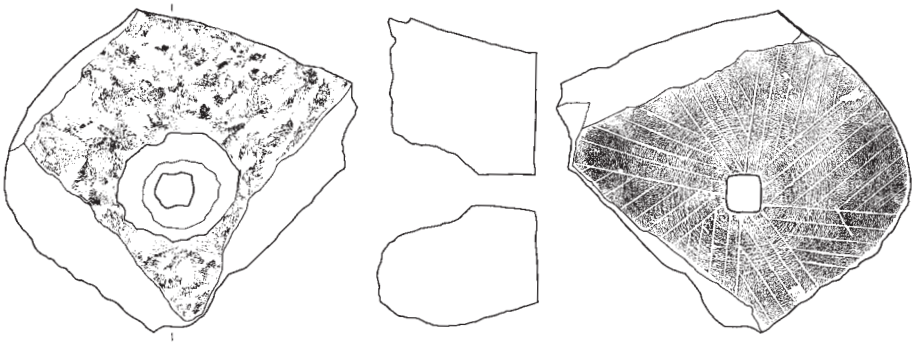
第84図　Ⅳ郭出土遺物（８）



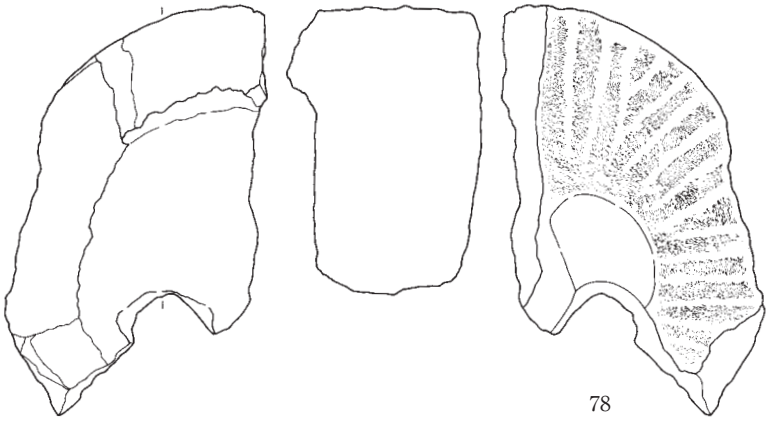
第85図　Ⅳ郭出土遺物（９）



第86図　Ⅳ郭出土遺物（10）



77



78

第87図　Ⅳ郭出土遺物（11）

５　Ｖ郭の検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ2043（第89図）

ＭＦ44・45、ＭＧ43・44・45、ＭＨ44グリッドのⅢ期生活面で検出した。規模は、桁行４間×梁行２間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ５）8.07m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ８）3.96mである。柱掘形は径0.42～0.69mの隅丸方形を呈し、深さは0.29～0.51mである。堆積土は、Ｐ６はにぶい黄褐色土、Ｐ９は黄褐色土の１層である。Ｐ２とＰ10は２層に分けられ、他は褐色土の１層であり、建物方位は北側柱列でＮ―75°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ2131（第90図）

ＭＤ46、ＭＥ46・47・48、ＭＦ46・47・48グリッドのⅢ期生活面で検出した。ＳＢ2129・ＳＢ2401・ＳＤ2090と重複し、本遺構はＳＤ2090より新しく、ＳＢ2129・ＳＢ2401との新旧関係は不明である。規模は、桁行４間×梁行２間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ４）8.13m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ９）4.38mである。柱掘形は0.24～0.59mの隅丸方形を呈し、深さは0.24～0.42mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は北側柱列でＮ―69°―Ｅである。遺物は白磁が１点出土した。

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ2036（第91図）

ＭＤ・ＭＥ47・48グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＢ2043・ＳＫ2100と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北東―南西）4.23m×短軸（北西―南東）1.8mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.46mである。底面は平坦で、南西側の底面が一段高く、北東側と南西側の底面には0.12mの段差があり、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は３層に分けたが、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は銭貨が１点出土した。

ＳＫＩ2130（第91図）

ＭＦ45・46、ＭＥ45・46グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＡ2047、ＳＤ2088、ＳＤ2090、ＳＫＰ2156、ＳＫＰ2349と重複し、ＳＡ2047、ＳＤ2088、ＳＤ2090、ＳＫＰ2156より古く、ＳＫＰ2349より新しい。平面形は長軸（北―南）2.54m×短軸（東―西）2.24mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.34mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。付随する柱穴を３基検出した。各柱穴の堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられるである。Ｐ１の堆積土中から炭だまりが検出されたが、その性格は不明である。各柱穴の大きさは径0.38～0.44mで、深さは0.07～0.21mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2155（第92図）

ＭＥ・ＭＦ47・48グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＢ2043・ＳＫＰ2020・2022と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北西―南東）2.6m×短軸（北東―南西）1.75mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.22mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2188（第92図）

ＭＤ・ＭＥ45グリッドの北西向き斜面のⅡ期生活面で検出した。ＳＡ2035・2073と重複し、本遺構が最も古い。平面形は奥行き4.35ｍ（北西―南西）×幅3.16ｍ（北東―南西）で北西側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い南東側の高さは0.82ｍである。底面は北西側に向かって緩やかに傾斜するが、本来は平坦面を作り出していたもの考えられる。南東側壁の傾きはほぼ垂直であり、Ｌ字状の断面形をしている。付随する溝１条と柱穴12基を検出した。溝は全長（北東―南西）1.95ｍ、最大幅（北西―南東）0.32ｍを測り、奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.07ｍである。溝の底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.14～0.35ｍで、深さは0.22～0.42ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2263（第93・94図）

ＭＦ43・44、ＭＧ43・44、ＭＨ43、ＭＩ42・43グリッドの山際斜面のⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ2265、ＳＡ2420、ＳＥ2347、SK2320、ＳＫＰ2159・2202・2225・2247・2406・2409と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（東―西）14.8ｍ×短軸（北―南）1.7ｍの細長い長方形を呈し、検出面からの深さは0.07ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁が４点、珠洲系が１点出土した。本遺構は付随する溝や柱穴がないことから居住施設とは考えにくい。

ＳＫＩ2264（第93・94図）

ＭＥ・ＭＦ44グリッドの北西向き斜面のⅡ期生活面で検出した。ＳＡ2420と重複し、本遺構が古い。南東側部分は調査できなかったが、平面形は長軸（北東―南西）2.59ｍ×短軸（北西―南東）1.32ｍの北西側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い南東側の高さは0.78ｍである。底面は北側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きは垂直で、Ｌ字状の断面形をしている。付随する溝１条と柱穴１基を検出した。溝跡は全長（北東―南西）0.8ｍ、最大幅（北西―南東）0.14ｍを測り、壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.05ｍである。溝の底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2265（第93・94図）

ＭＦ43・44、ＭＧ43グリッドの山際斜面のⅡ期生活面で検出した。ＳＡ2420・ＳＫＩ2263と重複し、ＳＡ2420より古く、ＳＫＩ2263より新しい。平面形は長軸（北東―南西）7.18ｍ×短軸（北西―南東）1.73ｍの北側が開口するコの字形の長方形を呈し、最も深い南側の高さは、0.77ｍである。底面は北側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きはほぼ垂直に立ち上がり、Ｌ字状の断面形をしている。付随する溝１条と柱穴２基を検出した。溝は全長（北東―南西）0.84ｍ、最大幅（北西―南東）0.22ｍを測り、奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.06ｍである。溝の底面は平坦で、壁の傾きは南側はやや急に、北側は緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2289（第93・94図）

ＭＫ41・42、ＭＪ41・42グリッドの北西向き斜面のⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ2349と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北東―南西）5.04ｍ×短軸（北西―南東）1.03ｍの北西側が開口

するコの字形の長方形を呈し、最も深い南東側の高さは、1.08mである。底面は北側に向かって緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作り出していたものと考えられる。壁の傾きはほぼ垂直で、Ｌ字状の断面形をしている。付随する溝１条と柱穴１基を検出した。溝は全長（北東―南西）1.46m、最大幅（北西―南東）0.12mを測り、奥壁に沿って直線的に延びる。底面からの深さは0.05mである。溝の底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は３層に分けられ、斜面からの流れ込みと考えられる。遺物は出土しなかった。

（３）井戸跡

ＳＥ2357（第95図）

ＭＩ42、ＭＪ42・43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.69m×短軸（北東―南西）1.64mの円形を呈し、検出面からの深さは1.5mである。底面は平坦で、壁の北側は急であり、南側は一部崩落があり、切岸の傾斜に沿うようにして立ち上がる。堆積土は５層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも少量の水が湧出している。

（４）土坑

ＳＫ2010（第95図）

ＭＤ48グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.11m×短軸（北西―南東）1.04mの楕円形を呈し、検出面からの深さは2.19mである。底面は平坦である。壁の傾きは急である。堆積土は11層に分けられ、11層の炭層は遺構が機能していた時期に除湿効果をねらって入れた物と考えられる。また３層までは自然堆積で、やや時間差を置いて、２層は一括して埋め戻されたものと考えられる。本遺構は小型の「むろ」の様な貯蔵施設であったと考えられる。遺物は炭化米が52ｇ出土した。

ＳＫ2011（第95図）

ＭＥ49グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.15m×短軸（北西―南東）0.88mの楕円形である。検出面からの深さは0.46mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は鉄製品が１点出土した。

ＳＫ2024（第95図）

ＭＦ48グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.94m×短軸（北西―南東）0.88mの円形を呈し、検出面からの深さは1.2mである。底面は平坦で、壁の傾きは南側は急であり、上半はほぼ垂直である。堆積土は４層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2030（第95図）

ＭＧ48グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.97m×短軸（東―西）0.79mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.9mである。底面は丸みを帯び、壁には崩落の痕跡が見られ、急である。堆積土は７層に分けた。攪乱と崩落によるものを除けば全て自然堆積である。堆積土中か

ら炭化米が出土した。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2031（第96図）

ＭＤ49グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.07ｍ×短軸（北―南）0.98ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.44ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は５層に分けられる。遺物は銭貨が１点出土した。

ＳＫ2092（第96図）

ＭＦ46グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は直径0.64ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.68ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は３層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は炭化米が47ｇ出土した。

ＳＫ2100（第91図）

ＭＤ47・48グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫ2036と重複し、本遺構が新しい。平面形は径1.08ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.1ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2157（第96図）

ＭＤ47グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.22ｍ×短軸（北西―南東）0.91ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.88ｍである。底面は平坦で、北側の壁の傾きはほぼ垂直であり、南壁が途中から緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2184（第96図）

ＭＭ42・43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.11ｍ×短軸（東―西）0.72ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.56ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2200（第96図）

ＭＨ・ＭＩ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.36ｍ×短軸（北西―南東）1.15ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.17ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は鉄製品が１点出土した。

ＳＫ2228（第96図）

ＭＩ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.86ｍ×短軸（東―西）0.65ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.28ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは西側が緩やかに、東側は急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2311（第97図）

ＭＫ42グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.75ｍ×短軸（北東―南西）0.62ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.45ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2320（第97図）

ＭＩ43グリッドの地山面のⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.87ｍ×短軸（北―南）

0.69mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.32mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2400（第97図）

ＭＤ49グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.80m×短軸（北東―南西）0.78mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.85mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（５）焼土遺構

ＳＮ2102（第97図）

ＭＧ・ＭＨ45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2059と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（東―西）0.67m×短軸（北―南）0.46mの楕円形範囲に明赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.04mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2167（第97図）

ＭＨ47グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.29m×短軸（東―西）0.27mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2168（第97図）

ＭＭ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.66m×短軸（北―南）0.6mの楕円形範囲に、中央部は灰白色の硬化した焼土と、その周囲に橙色の焼土が広がり、さらにその周りは黒く炭化している。焼土の厚さは0.01～0.08mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2195（第97図）

ＭＩ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.21m×短軸（東―西）0.19mの楕円形範囲に明赤褐色土の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2196（第97図）

ＭＪ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.56m×短軸（東―西）0.32mの楕円形範囲に、にぶい赤褐色土の焼土が広がる。焼土の厚さは0.04mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2398（第97図）

ＭＮ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.4m×短軸（東―西）0.28mの楕円形範囲に、にぶい赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.06mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2399（第97図）

ＭＪ45グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.75m×短軸（東―西）0.42mの楕円形範囲に明赤褐色土の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ2403（第97図）

ＭＮ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.42ｍ×短軸（北西―南東）0.35ｍの楕円形範囲に、中央ににぶい赤褐色の焼土が、その周りに極暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01～0.04ｍで、掘り込みは見られない。遺物は瓦質土器が４点出土した。

（６）集石遺構

ＳＱ2013（第98図）

ＭＣ47グリッドのⅡ期生活面で検出した。長軸（北東―南西）2.62ｍ×短軸（北西―南東）1.41ｍの楕円形範囲に、0.03～0.4ｍの角礫・円礫計306個が集められていた。いずれの礫にも加工痕や被熱痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。遺物は白磁が３点、珠洲系の中世陶器片が19点、瓦質の中世陶器片が37点、瀬戸焼が１点が出土した。

ＳＱ2054（第98図）

ＭＦ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。長軸（北東―南西）1.12ｍ×短軸（北西―南東）0.9ｍの円形範囲に、0.06～0.3ｍの角礫57個が集められていた。いずれの礫にも加工痕や被熱痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。遺物は出土しなかった。

ＳＱ2055（第98図）

ＭＧ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。長軸（北東―南西）0.87ｍ×短軸（北西―南東）0.72ｍの円形範囲に、0.14～0.3ｍの角礫15個が集められていた。いずれの礫にも加工痕や被熱痕跡は見られない。礫群を取り上げた後に掘り込みは検出できなかった。遺物は出土しなかった。

（７）溝跡

ＳＤ2059（第93・94図）

ＭＧ44・45、ＭＨ43・44・45、ＭＩ43、ＭＪ43、ＭＫ43、ＭＬ43・44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＮ2102と重複し、本遺構が古い。平面形は長さ29.36ｍ×幅0.72ｍを測り、コの字状に延びる。検出面からの深さは0.3ｍである。堆積土は１層であり、炭化米が半分以上占めている。遺物は和鏡が１点、炭化米が11,024ｇ、炭化稗が471ｇ、炭化蕎が19ｇ出土した。

ＳＤ2087（第93・94図）

ＭＦ44・45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ2130・ＳＤ2088・2089・2090・ＳＫＰ2218・2401と重複し、ＳＫＩ2130・ＳＤ2088・2089・ＳＫＰ2401より新しく、ＳＤ2090・ＳＫＰ2218より古い。平面形は長さ4.21ｍ×幅0.23ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.05ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2088（第93・94図）

ＭＦ44・45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ2130・ＳＤ2087・ＳＫＰ2106・ＳＫＰ2218と重複し、ＳＫＩ2130より新しく、ＳＢ2401・ＳＤ2087・ＳＫＰ2218より古い。平面形は長さ3.14ｍ×幅0.27ｍを測り、Ｌ字状に延びる。検出面からの深さは0.1ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2089（第93・94図）

ＭＦ44・45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2087、ＳＫＰ2402と重複し、ＳＫＰ2402より新しく、ＳＤ2087より古い。平面形は長さ2.45ｍ×幅0.2ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.04ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2090（第93・94図）

ＭＥ44・45、ＭＧ44・45、ＭＦ45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＢ2131、ＳＫＩ2130・ＳＤ2087・ＳＫＰ2150・2221・2349・2390と重複し、ＳＫＩ2130・ＳＤ2087・ＳＫＰ2349・2390より新しく、ＳＢ2131・ＳＫＰ2150・2221より古い。平面形は長さ13.5ｍ×幅0.63ｍを測り、Ｌ字状に延びる。検出面からの深さは0.08ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2147（第93・94図）

ＭＨ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ2151と重複し、本遺構が古い。平面形は長さ2.68ｍ×幅0.25ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.04ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2153（第93・94図）

ＭＣ47・48、ＭＤ46・47グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫ2407と重複し、本遺構が新しい。平面形は長さ４ｍ×幅0.39ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.18ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。１層上位から須恵器系中世陶器片が１点出土した。

ＳＤ2181（第93・94図）

ＭＭ・ＭＮ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長さ1.7ｍ×幅0.17ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.04ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2182（第93・94図）

ＭＭ・ＭＮ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長さ3.18ｍ×幅0.21ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.03ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2183（第93・94図）

ＭＭ・ＭＮ43グリッドで検出した。平面形は長さ2.33ｍ×幅0.2ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.03ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2189（第93・94図）

ＭＨ43・44、ＭＩ43・44、ＭＪ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2191・2192・2193、ＳＫＰ2204・2209・2226・2227・2229・2260・2285と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長さ10.24ｍ×幅0.24ｍを測り、Ｚ字状に延びる。検出面からの深さは0.1ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや

緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁が１点出土した。

ＳＤ2190（第93・94図）

ＭＪ43・44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ2204・2206・2209・2215・2285・2411と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長さ4.84ｍ×幅0.26ｍを測り、西側にやや湾曲して延びる。検出面からの深さは0.1ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2191（第93・94図）

ＭＨ44、ＭＩ43・44、ＭＪ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2192・2415・ＳＫＰ2248・2249・2253・2257・2269・2271と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長さ8.68ｍ×幅0.5ｍを測り、Ｌ字状に曲がりながら延びる。検出面からの深さは0.08ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2192（第93・94図）

ＭＨ44、ＭＩ44・45、ＭＪ43・44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2191・2193、ＳＫＰ2216・2217・2253・2256・2257・2269・2279と重複し、ＳＤ2191より新しく、ＳＤ2193・ＳＫＰ2216・2217・2253・2256・2257・2269・2279よりも古い。平面形は長さ8.82ｍ×幅0.4ｍを測り、Ｌ字状に曲がりながら延びる。検出面からの深さは0.1ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は青磁が１点、鉄製品が２点出土した。

ＳＤ2193（第93・94図）

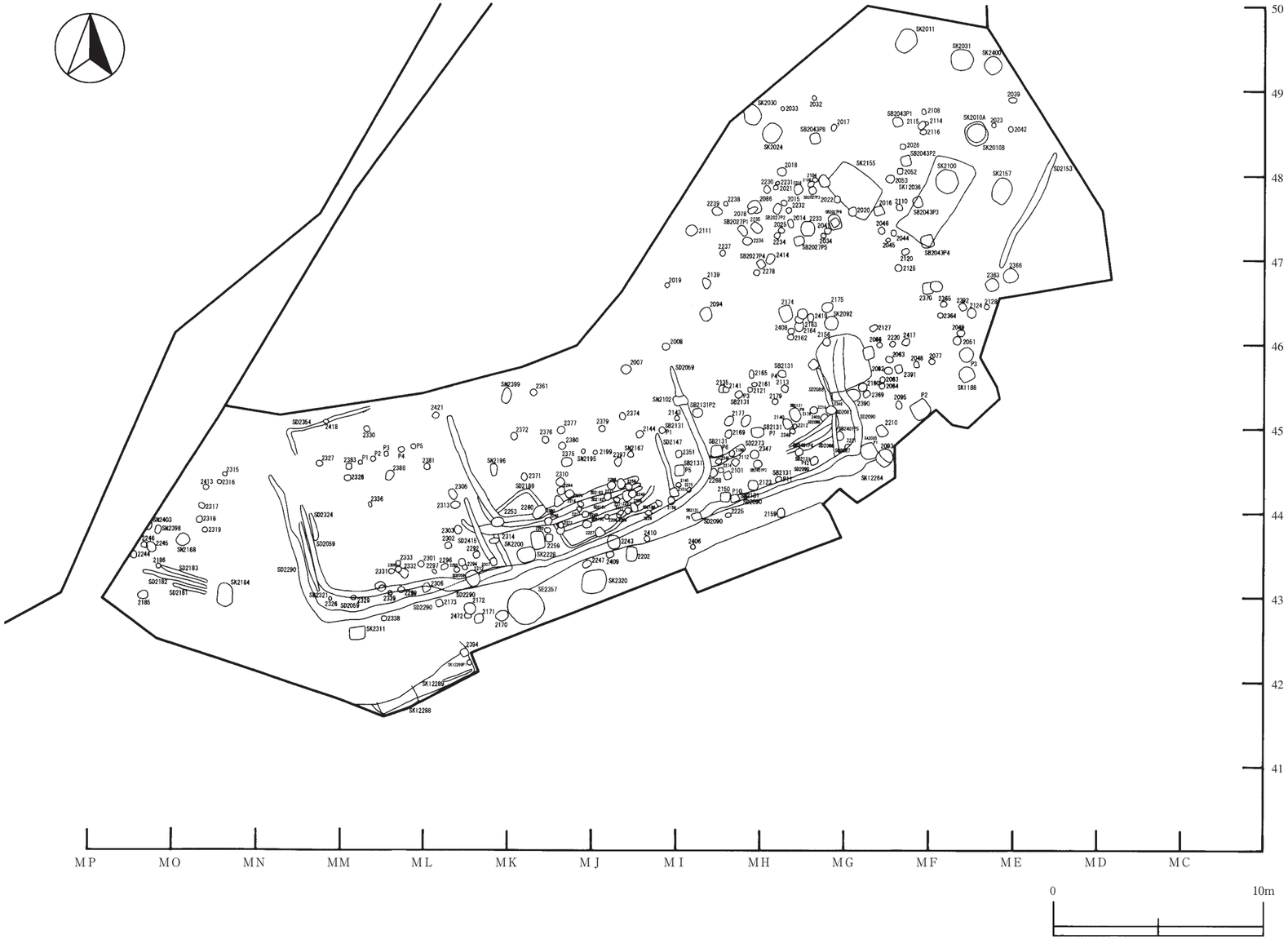
ＭＨ44、ＭＩ43・44、ＭＪ43～45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2192、ＳＫＰ2253・2256・2258・2260・2270と重複し、ＳＤ2192より新しく、ＳＫＰ2253・2256・2258・2260・2270より古い。平面形は長さ12.56ｍ×幅0.4ｍを測り、Ｌ字状に曲がりながら延びる。検出面からの深さは0.16ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は鉄製品が１点出土した。

ＳＤ2273（第93・94図）

ＭＧ44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2059・ＳＫＰ2180・2345と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長さ1.7ｍ×幅0.36ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.06ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2290（第93・94図）

ＭＩ43、ＭＪ43、ＭＫ42・43、ＭＬ42～44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2059・2193、ＳＫＰ2312・2314と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長さ15.19ｍ×幅0.60ｍを測り、コの字状に延びる。検出面からの深さは0.06ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたと考える。遺物は出土しなかった。



第88図　Ⅴ郭遺構配置図

ＳＤ2321（第93・94図）

ＭＬ43グリッドで検出した。平面形は長さ3.14ｍ×幅0.27ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.07ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2324（第93・94図）

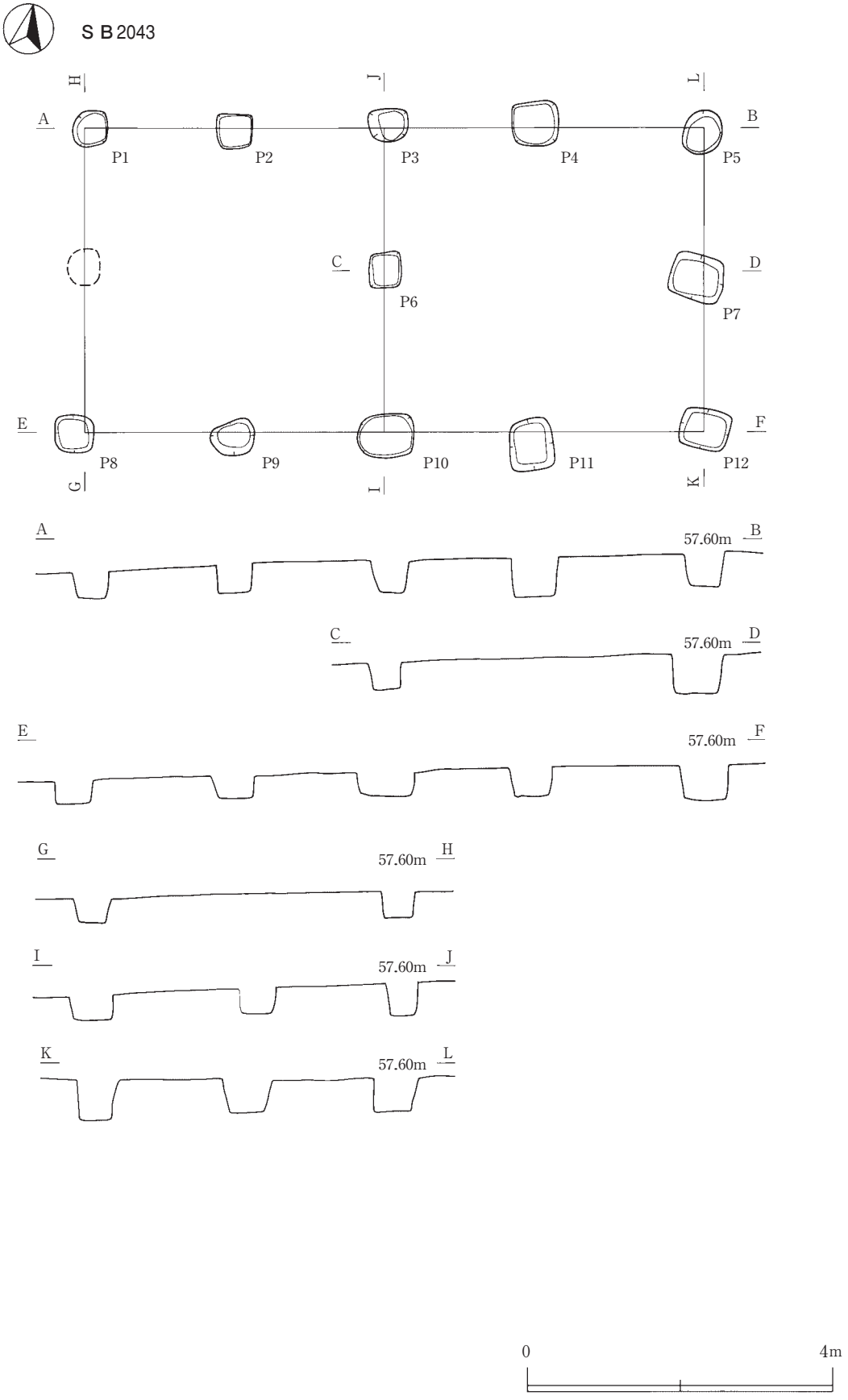
ＭＬ43グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長さ1.33ｍ×幅0.25ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.11ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2354（第93・94図）

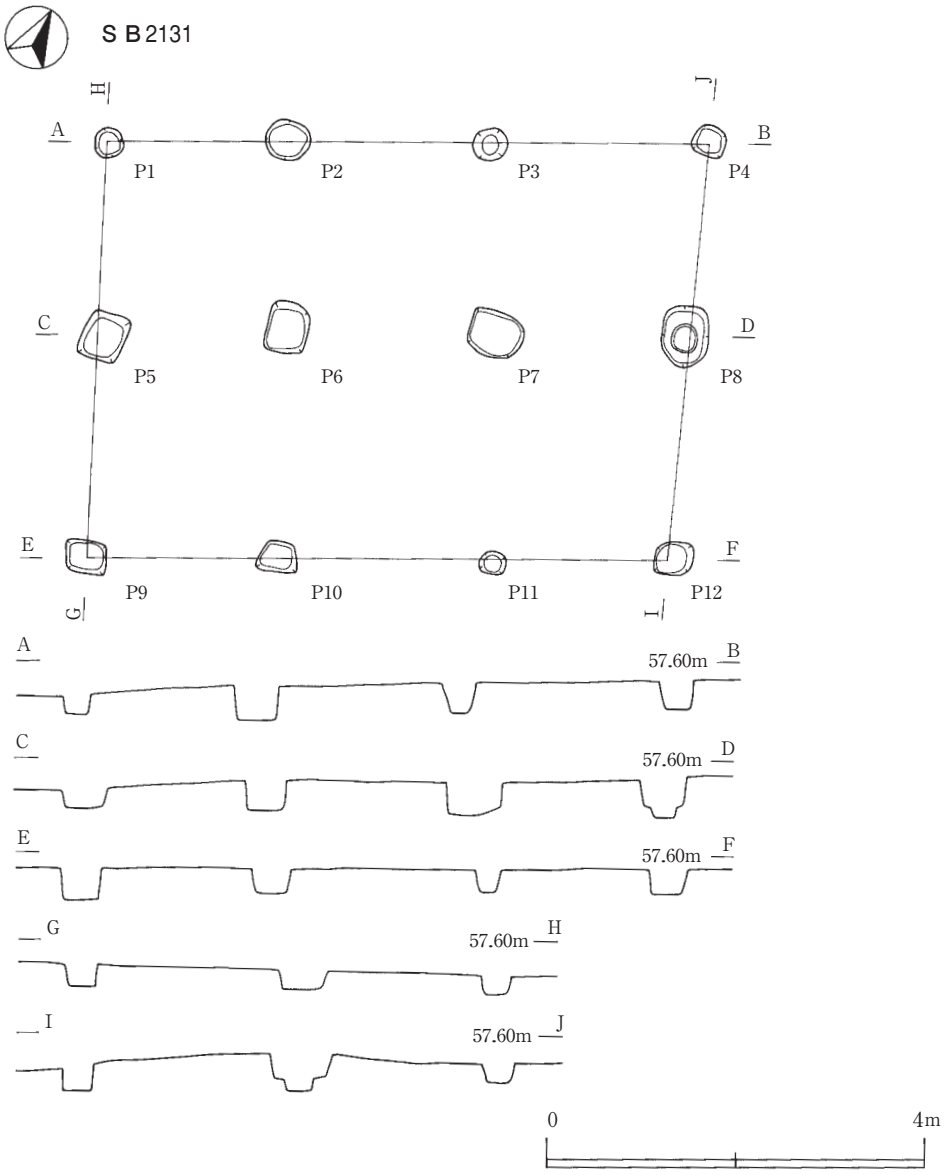
ＭＫ45、ＭＬ44・45グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ2418と重複し、本遺構が古い。平面形は長さ5.26ｍ×幅0.2ｍを測り、Ｌ字状に曲がりながら延びる。検出面からの深さは0.11ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2415（第93・94図）

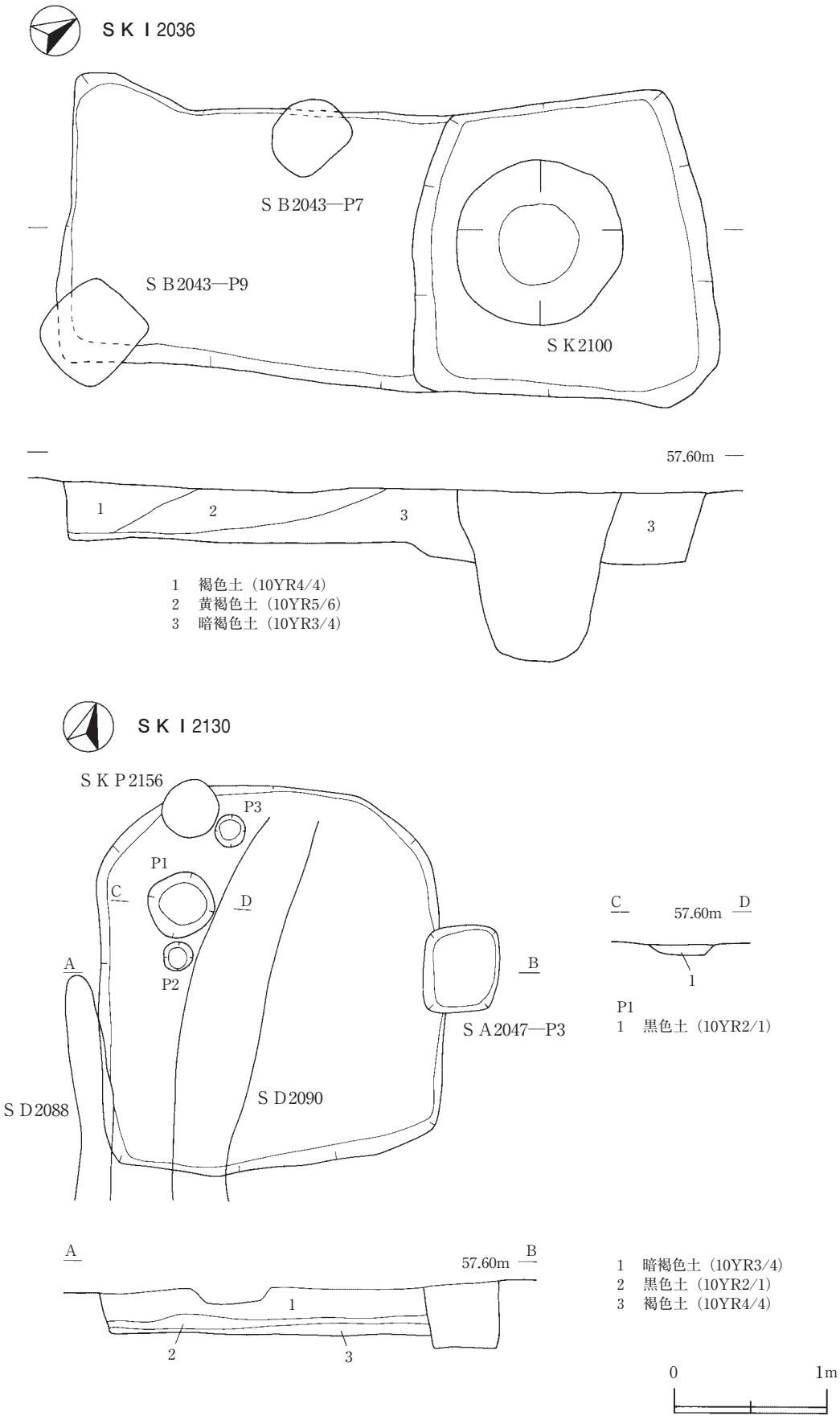
ＭＪ43・44グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＤ2191、ＳＫＰ2307と重複し、ＳＤ2191より新しく、ＳＫＰ2307より古い。平面形は長さ3.16ｍ×幅0.28ｍを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.08ｍである。底面は丸く、壁の傾きはやや緩やかで、断面はＵ字状となる。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。



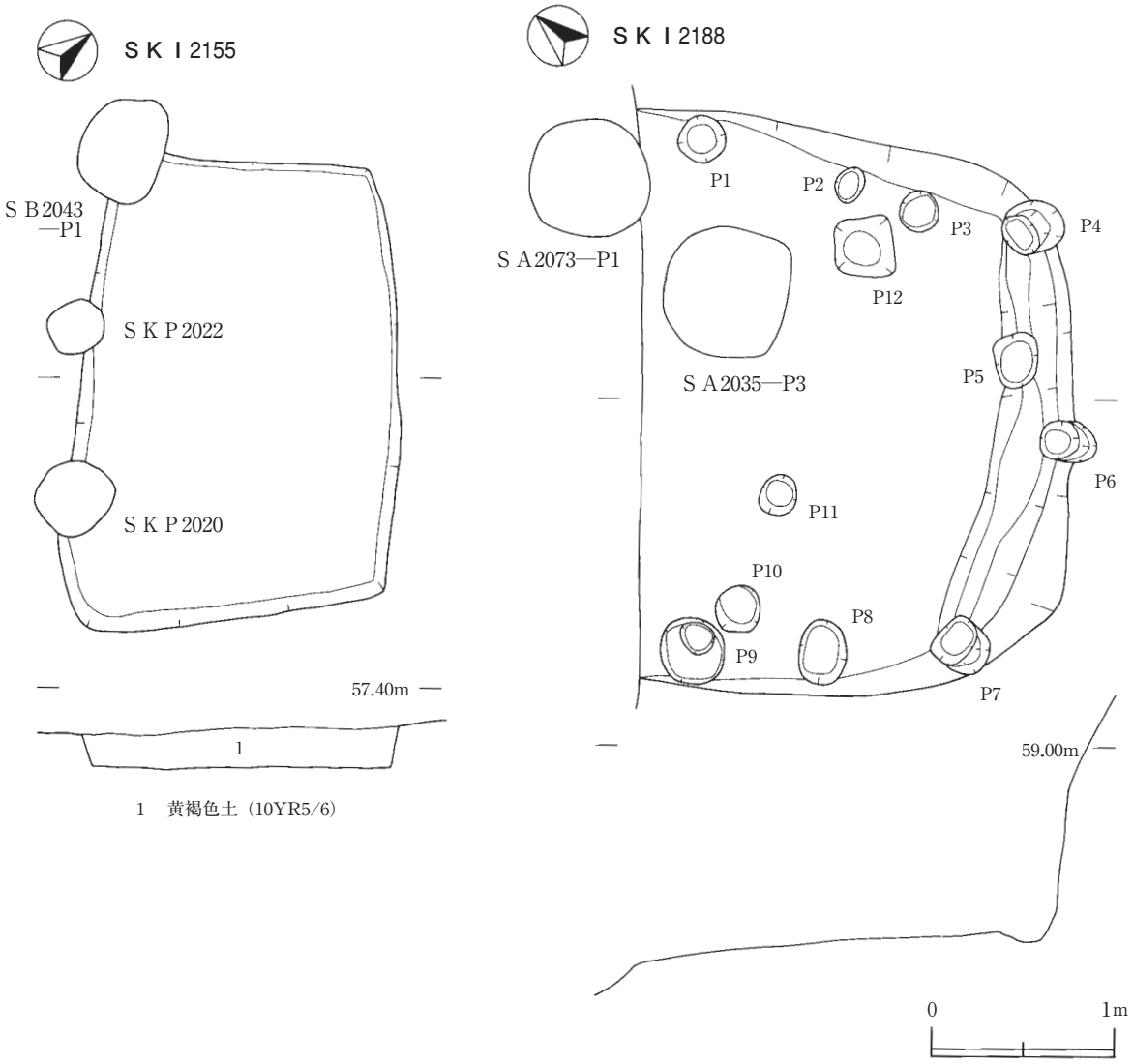
第89図　掘立柱建物跡（１）



第90図　掘立柱建物跡（２）

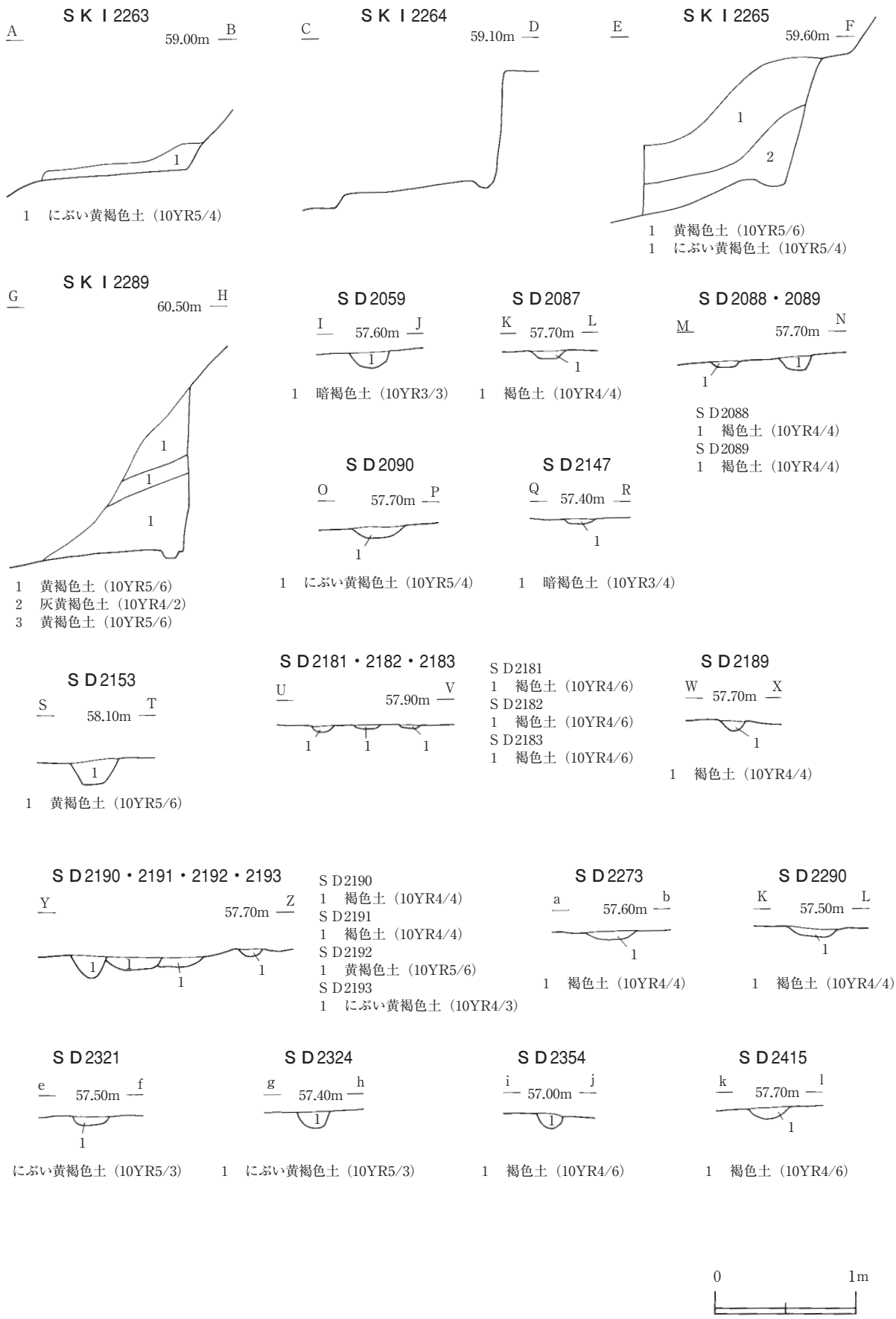

ＳＫＩ2036
ＳＢ2043―P7
ＳＢ2043―P9
ＳＫ2100
57.60m
1
2
3
3
1　褐色土（10YR4/4）
2　黄褐色土（10YR5/6）
3　暗褐色土（10YR3/4）
ＳＫＩ2130
ＳＫＰ2156
P3
P1
C
D
A
P2
B
ＳＡ2047―P3
ＳＤ2088
ＳＤ2090
C
57.60m
D
1
P1
1　黒色土（10YR2/1）
A
57.60m
B
1
2
3
1　暗褐色土（10YR3/4）
2　黒色土（10YR2/1）
3　褐色土（10YR4/4）
0
1m

第91図　竪穴状遺構（１）

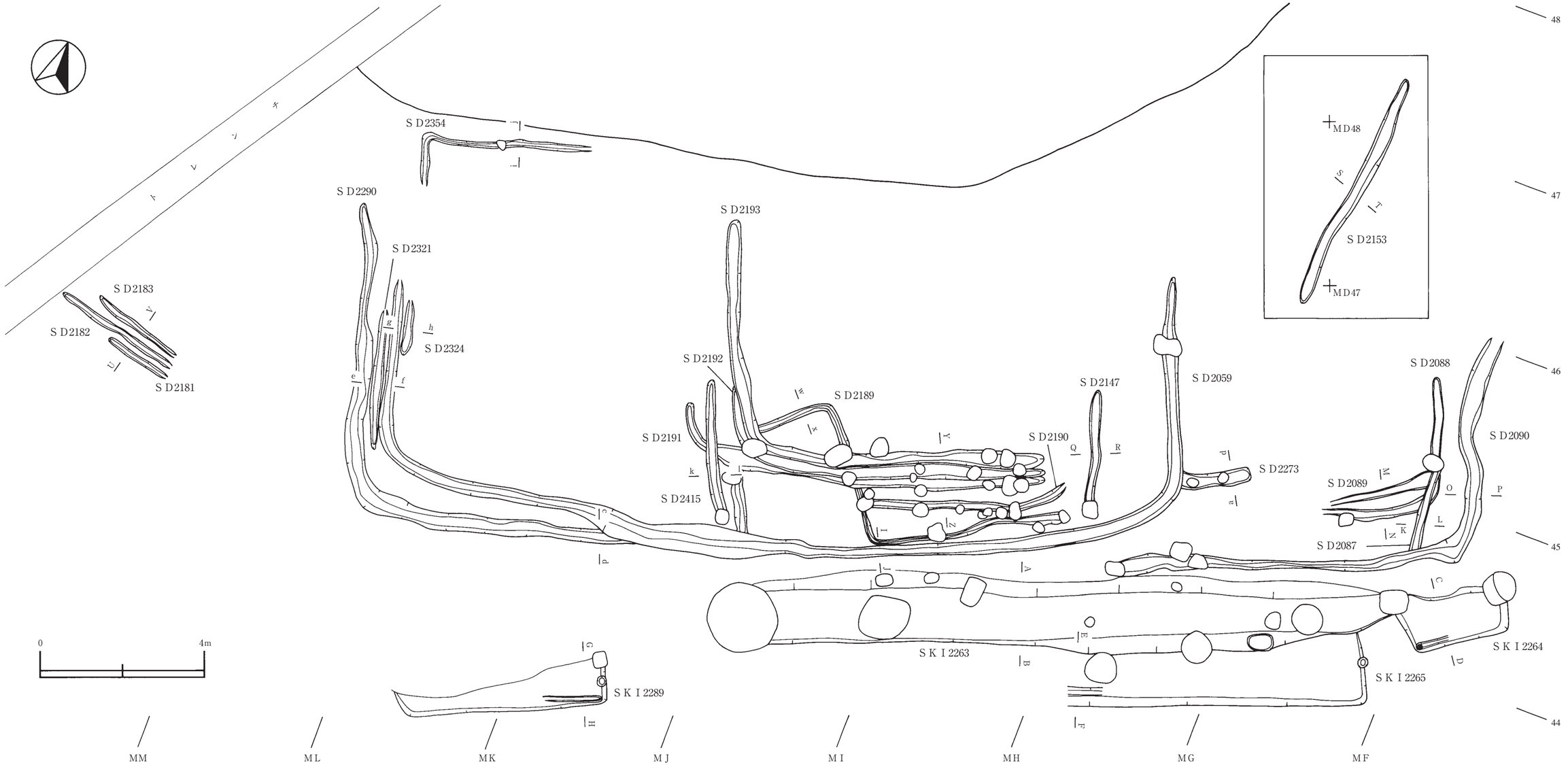


1　黄褐色土（10YR5/6）

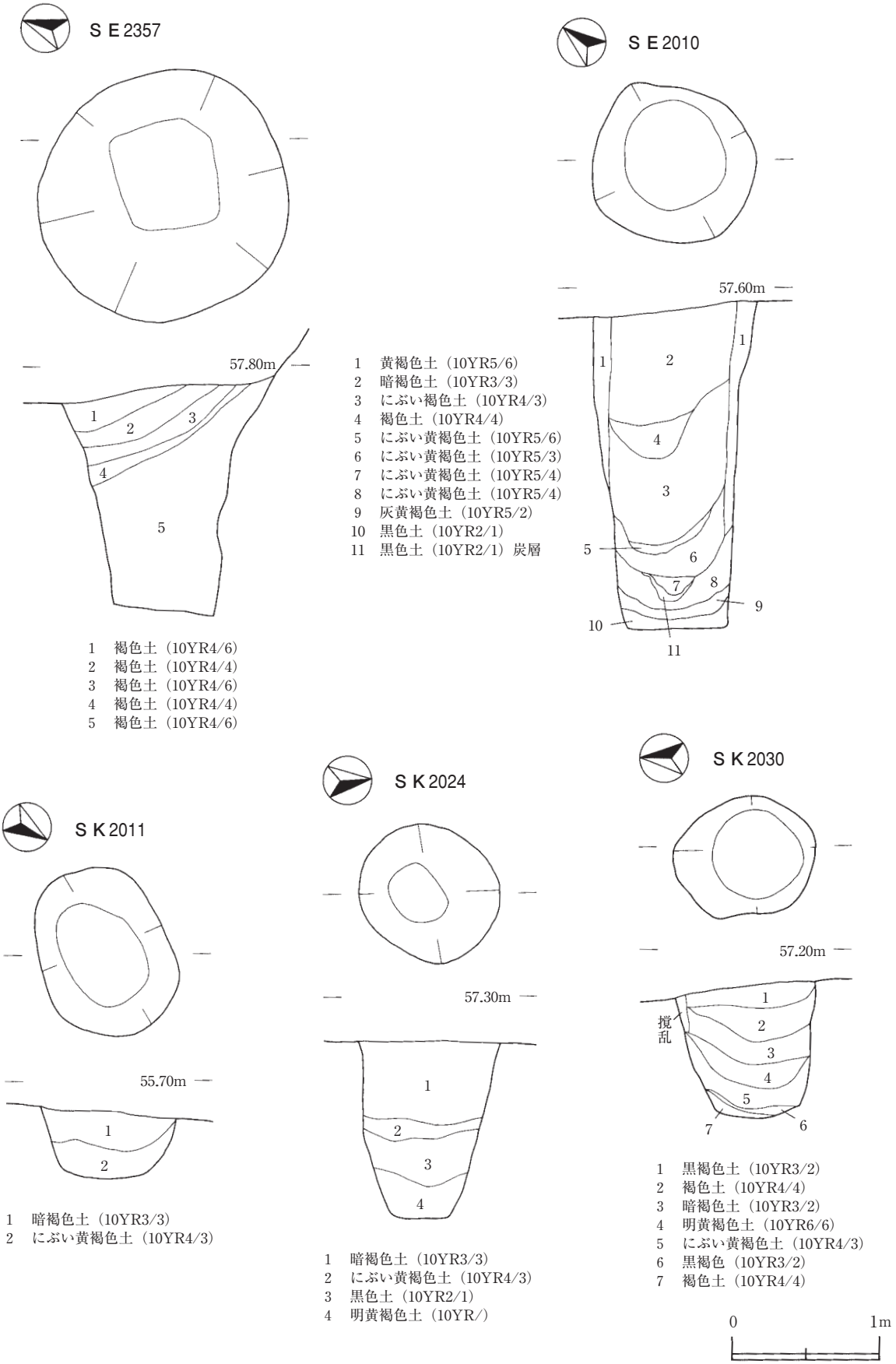
第92図　竪穴状遺構（２）



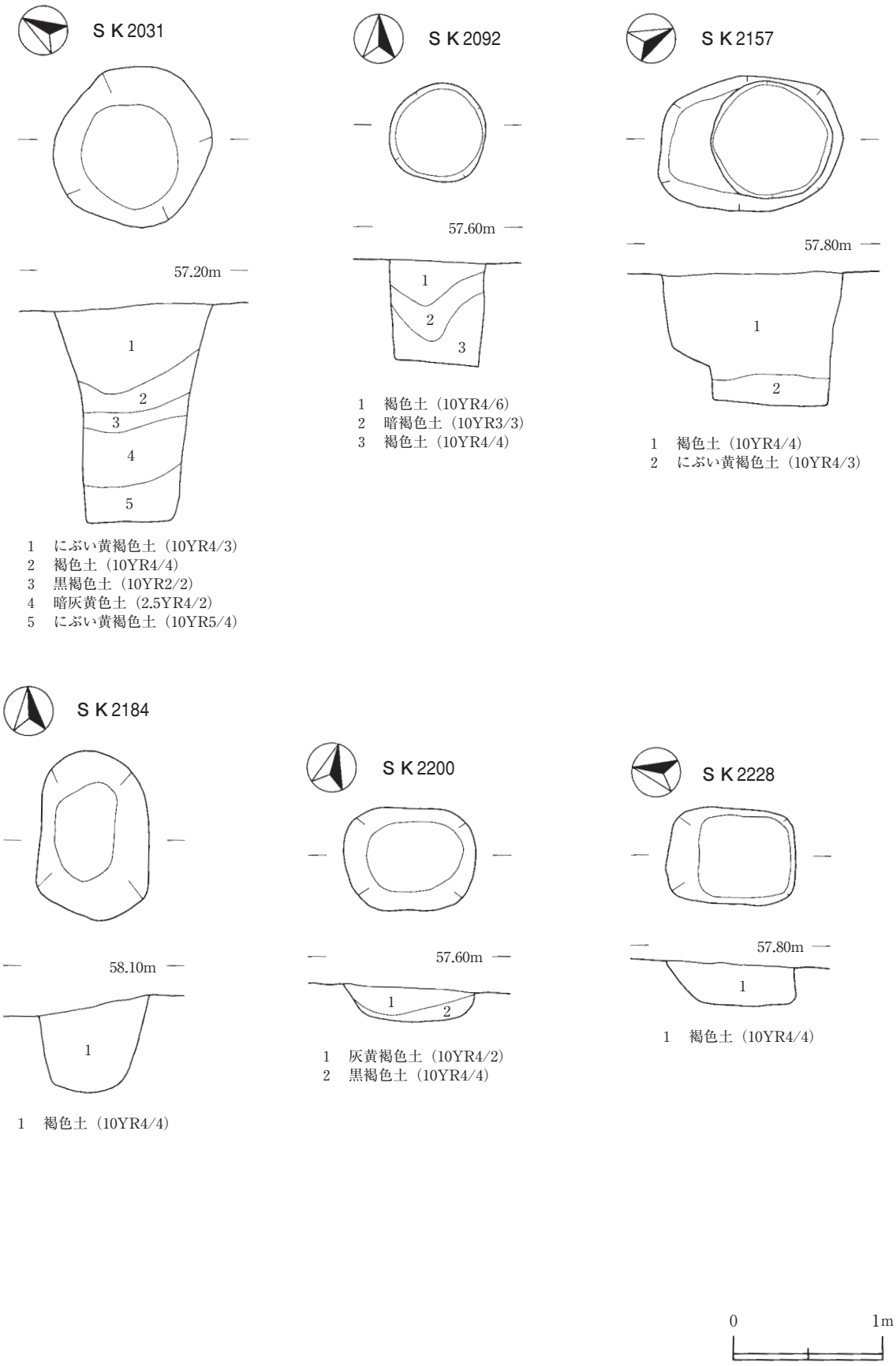
第93図　竪穴状遺構（３）と溝跡断面図



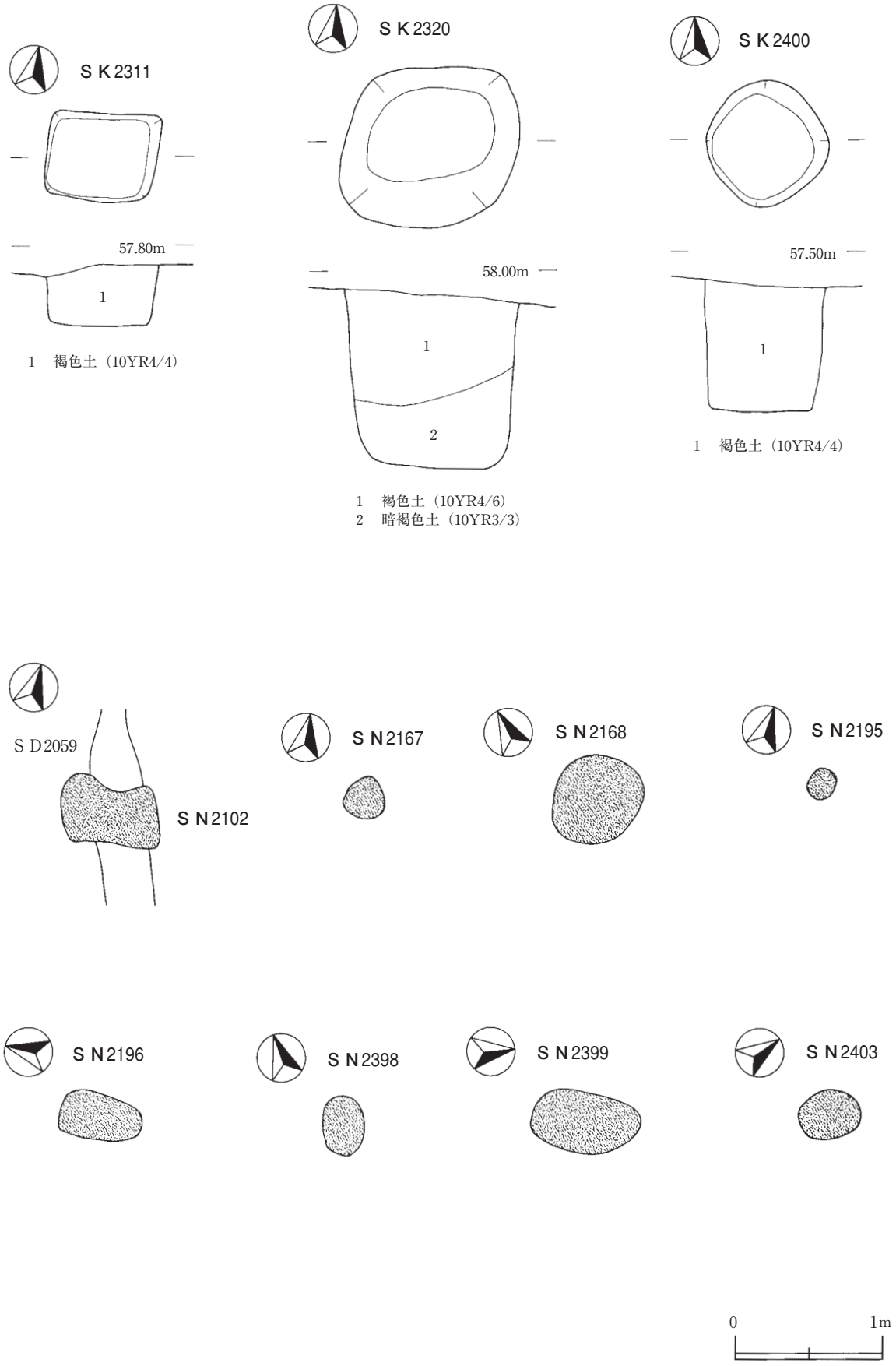
第94図　竪穴状遺構（３）と溝跡平面図


ＳＥ2357
57.80m
1
2
3
4
5
1　褐色土（10YR4/6）
2　褐色土（10YR4/4）
3　褐色土（10YR4/6）
4　褐色土（10YR4/4）
5　褐色土（10YR4/6）
ＳＥ2010
57.60m
1　黄褐色土（10YR5/6）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　にぶい褐色土（10YR4/3）
4　褐色土（10YR4/4）
5　にぶい黄褐色土（10YR5/6）
6　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
7　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
8　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
9　灰黄褐色土（10YR5/2）
10　黒色土（10YR2/1）
11　黒色土（10YR2/1）炭層
ＳＫ2011
55.70m
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ2024
57.30m
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
3　黒色土（10YR2/1）
4　明黄褐色土（10YR/）
ＳＫ2030
57.20m
撹乱
1　黒褐色土（10YR3/2）
2　褐色土（10YR4/4）
3　暗褐色土（10YR3/2）
4　明黄褐色土（10YR6/6）
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
6　黒褐色（10YR3/2）
7　褐色土（10YR4/4）
0
1m

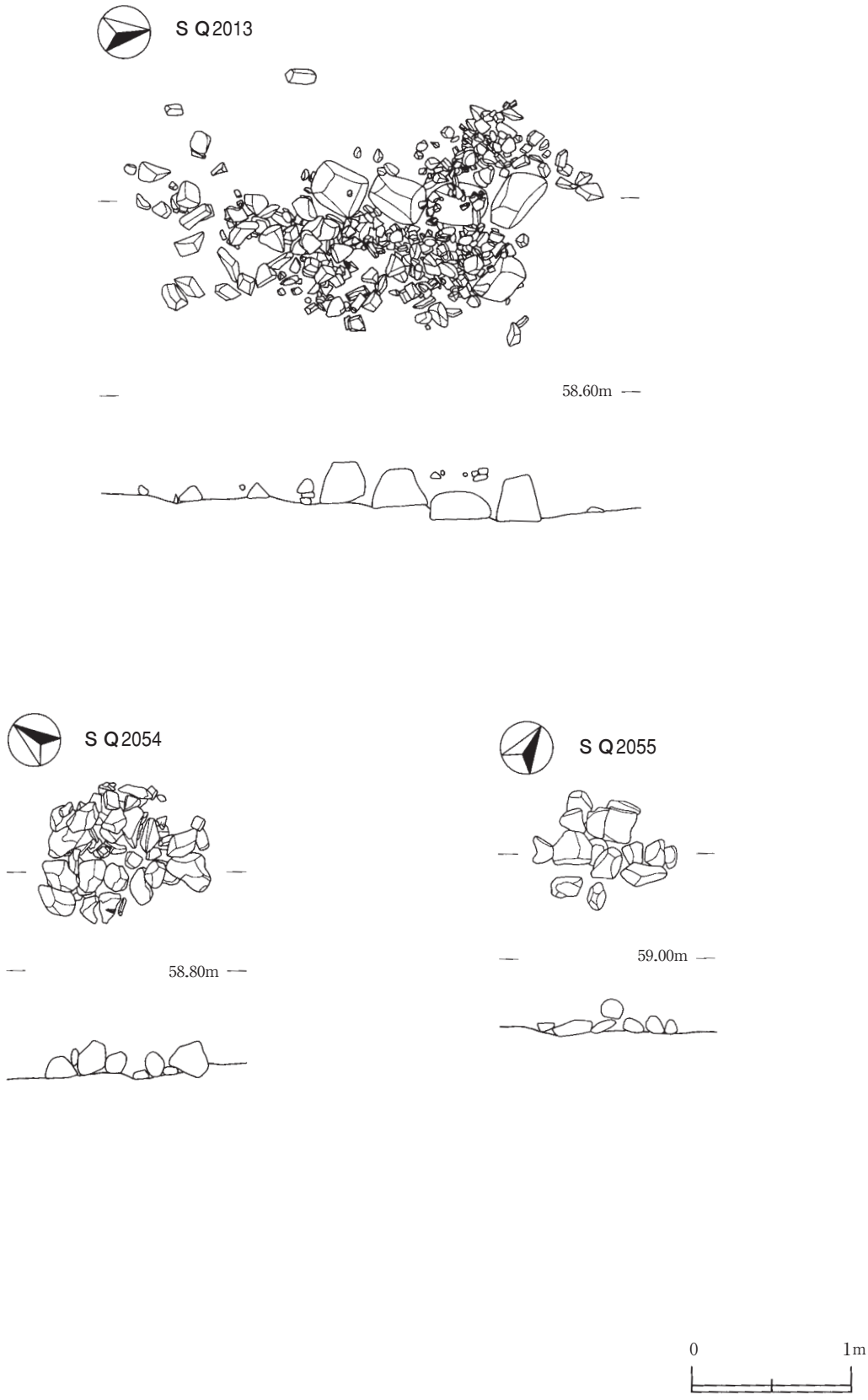
第95図　井戸跡・土坑（１）


ＳＫ2031
57.20m
1
2
3
4
5
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　褐色土（10YR4/4）
3　黒褐色土（10YR2/2）
4　暗灰黄色土（2.5YR4/2）
5　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
ＳＫ2092
57.60m
1
2
3
1　褐色土（10YR4/6）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ2157
57.80m
1
2
1　褐色土（10YR4/4）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ2184
58.10m
1
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ2200
57.60m
1
2
1　灰黄褐色土（10YR4/2）
2　黒褐色土（10YR4/4）
ＳＫ2228
57.80m
1
1　褐色土（10YR4/4）
0
1m

第96図　土坑（２）



第97図　土坑（３）・焼土遺構



第98図　集石

第８表　Ⅴ郭出土遺物一覧表（１）

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
99- 1	49- 2	MC47	磁器	青磁	碗	(11.8)	—	—	15ｃ後	蓮弁文
2	3	SKP2277	磁器	青磁	碗	(12.1)	—	—	15ｃ中	蓮弁文　龍泉窯系
3	4	MF46	磁器	青磁	碗	(13.5)	—	—	14ｃ末～15ｃ初	雷文　龍泉窯系
4	5	ME44、MI43	磁器	青磁	碗	(13.0)	—	—		龍泉窯系
5	6	MK44	磁器	青磁	碗	—	—	(5.3)		龍泉窯系
6	7	MN43	磁器	青磁	碗	—	—	(5.5)	15ｃ中	蓮弁文　龍泉窯系
7	8	MI46	磁器	青磁	碗	—	—	(4.6)	15ｃ中	龍泉窯系
8	—	MI44	磁器	青磁	碗	—	—	(5.5)		龍泉窯系
9	9	SKI2263	磁器	青磁	稜花皿	(11.2)	2.7	(4.6)		龍泉窯系
100-10	10	表採	磁器	青磁	稜花皿	(11.1)	2.8	(5.6)		龍泉窯系
11	50- 2	表採	磁器	青磁	皿	—	—	(5.0)		龍泉窯系
12	1	MF46、MJ44	磁器	青磁	皿	(11.1)	—	—		龍泉窯系
13	3	表採	磁器	白磁	皿	(7.2)	1.8	(3.5)	15ｃ中～後	切り高台
14	4	表採	磁器	白磁	皿	(7.9)	—	(4.6)	15ｃ中～後	切り高台
15	5	MJ47	磁器	白磁	皿	—	—	(4.3)	15ｃ中～後	切り高台
101-16	—	MC47	磁器	白磁	皿	(9.0)	—	—	15ｃ中～後	
17	—	表採	磁器	白磁	皿	(9.8)	—	—		
18	—	ML44	磁器	白磁	—	—	—	(3.5)	15ｃ	
19	6	MI43	磁器	白磁	碗	(11.2)	—	—	15ｃ	
20	7	MF45	磁器	白磁	皿	(12.2)	—	(6.6)		
21	8	MJ44	磁器	染付	皿	(11.6)	—	(6.6)		
22	9	SKP2205	磁器	染付	皿	(11.8)	—	(6.3)		
23	10	MI43	磁器	染付	皿	(11.7)	—	(6.4)		
24	11	MM43	磁器	染付	皿	(5.7)	—	(6.2)		
102-25	51- 1	MI44	磁器	染付	碗	—	—	—		
26	2	ME44	磁器	染付	碗	—	—	—		
27	3	MJ44	磁器	染付	皿	—	—	—		
28	4	表採	磁器	染付	皿	—	—	—	15ｃ後～16ｃ前	
29	5	MD47	磁器	染付	碗	—	—	—		
30	6	表採	磁器	染付	皿	—	—	—		
31	7	MF47	磁器	染付	皿	—	—	—		
32	8	表採	磁器	染付	皿	—	—	—		
33	9	MJ49	磁器	染付	皿	—	—	—		
34	10	表採	磁器	染付	皿	—	—	—		
35	11	MD47	磁器	染付	皿	—	—	—		
36	12	MI43	磁器	染付	皿	—	—	—		
37	13	ML48	磁器	染付	皿	—	—	—		
38	14	表採	磁器	染付	皿	—	—	—		
39	15	MH44	磁器	染付	皿	—	—	—		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、Ａ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径を示す。なお、（　）内の数値は推定値である。

第９表　Ⅴ郭出土遺物一覧表（２）

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
102-40	51-17	表採	磁器	染付	碗	—	—	(5.0)		
103-41	16	MF47	磁器	染付	皿	—	—	(9.0)		
42	18	MI44	磁器	染付	皿	—	—	(6.6)		
43	19	MD45	磁器	染付	皿	—	—	(7.4)		
44	20	MI44	磁器	染付	皿	—	—	(6.6)		
45	21	ML48	磁器	染付	皿	—	—	(4.6)		
46	22	表採	磁器	染付	皿	—	—	(5.5)	15ｃ後～16ｃ前	
47	23	MD47	磁器	染付	皿	—	—	(8.4)		
48	24	MI43	磁器	染付	皿	—	—	(6.4)		
49	25	MM43	磁器	染付	皿	—	—	(7.2)		
104-50	52- 1	SQ2013	陶器	珠洲系	壺	(15.2)	32.1	(10.9)		
51	2	表採	陶器	珠洲系	壺	(10.0)	—	—		
52	3	MJ45	陶器	珠洲系	壺	(10.6)				
53		表採	陶器	珠洲系	壺		—			
105-54		MI44	陶器	珠洲系	壺	—	—			
55		MG44	陶器	珠洲系	壺		—	—		
56		表採	陶器	珠洲系	壺		—	—		
57	4	MF46、MI44	陶器	珠洲系	壺	—	—	(9.0)		
58	5	MH44	陶器	珠洲系	擂鉢		—	(10.0)		
59	6	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	(34.8)	—			
60	7	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
61	8	ML42	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
62	9	MM44	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
63	10	MM44	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
106-64	11	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
65	12	MF45	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
66	13	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
67	14	MN43	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
68	16	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
69	17	MC47	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
70	15	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
71		SKI2263	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
72		MI44	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
73		表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
74		ME45	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
107-75		MI44	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
76		SKP6740	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
77		MK50	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
78		MJ43	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(14.6)		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、Ａ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径を示す。なお、（　）内の数値は推定値である。

第10表　Ⅴ郭出土遺物一覧表（３）

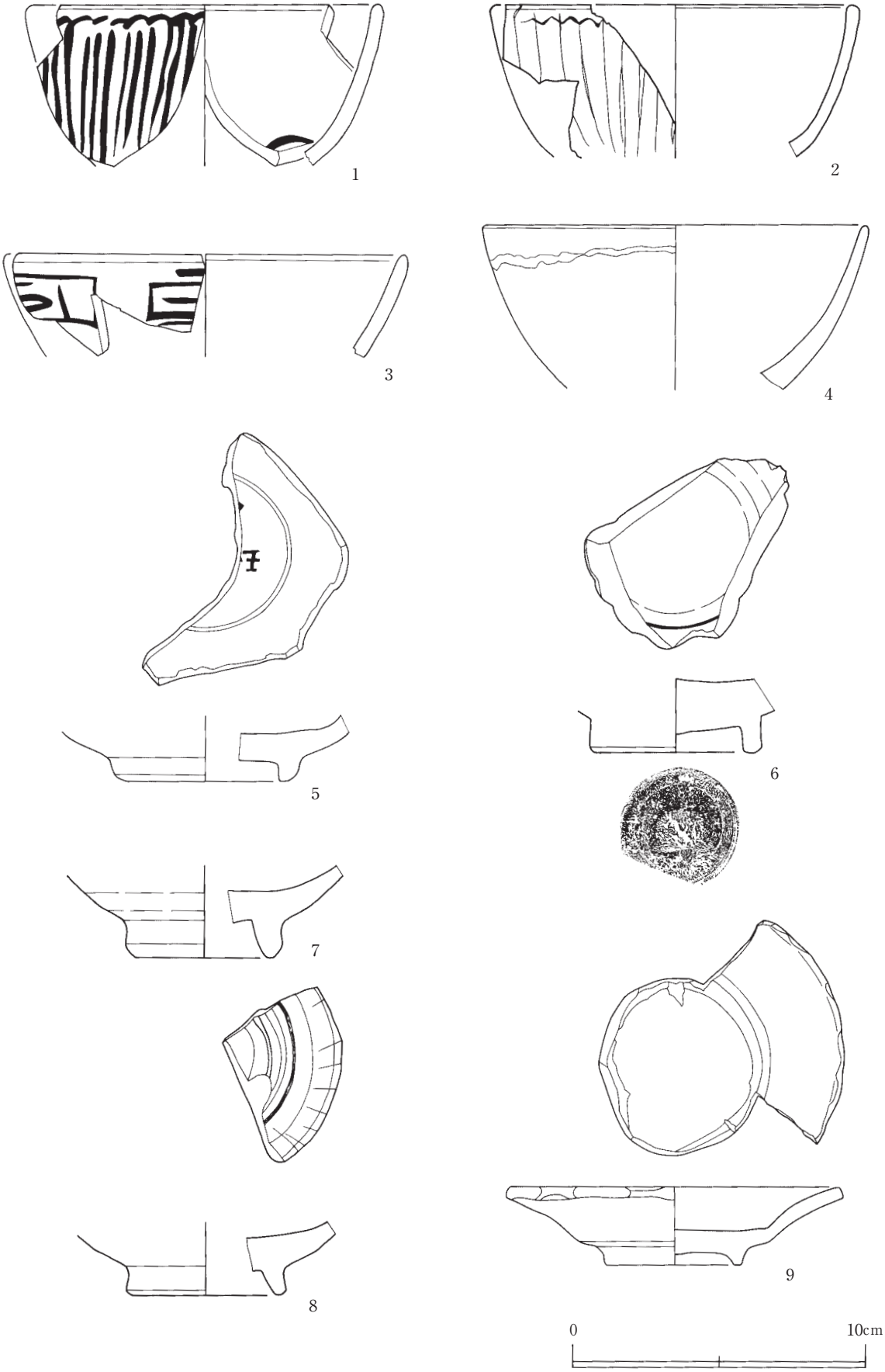
挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
107- 79	—	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
80	—	MO43・47	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(13.9)		
108- 81	52-18	SKI2263	陶器	越前	擂鉢	(33.5)	15.1	(15.1)		
82	53- 1	MJ43	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
83	2	MD47	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
84	3	MJ44	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
85	4	表採	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
109- 86	5	表採	陶器	越前	擂鉢	—	—	—		
87	6	表採	陶器	越前	甕	—	—	(20.4)		
88	7	MG・MK44	陶器	瀬戸・美濃		(16.5)	—	(4.9)		
89	8	MF45	陶器	瀬戸・美濃	縁釉小皿	—	—	(5.6)		
110- 90	9	MK43	陶器	瀬戸・美濃	縁釉小皿	(10.2)	2.15	(4.4)	15ｃ	
91	10	MJ43	陶器	瀬戸・美濃	縁釉小皿	(9.8)	—	(5.8)		
92	54- 1	表採	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
93	2	MC47	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
111- 94	6	SQ2013	土器	瓦質土器	火鉢	(34.5)	—	—		
95	7	MJ43	土器	瓦質土器	火鉢	(31.9)	—	—		
96	3	MJ45	土器	瓦質土器	火鉢	—	—	—		
97	4	MI42	土器	瓦質土器	火鉢	—	—	—		
98	5	表採	土器	瓦質土器	火鉢	—	—	—		
99	8	ML45	木製品	—	箆	21.7	7.3	0.9		
100	9	ML45	木製品	—	箸	20.2	0.7	0.4		
101	10	ML46	木製品	—	箸	13.0	0.7	0.5		
102	11	ML46	木製品	—	箸	11.0	0.8	0.4		
112-103	12	SD2059	金属	—	和鏡	10.0	—	0.7		青銅　重さ153.2ｇ
104	13	MG43	金属	—	和鏡	8.0	—	0.7		青銅　重さ63.6ｇ
105	14	MJ45	金属	—	金具	8.6	2.3	2.3		木質部あり　重さ42.4ｇ
106	15	MF47	金属	—	金具	4.4	5.2	0.7		重さ26.7ｇ
107	16	MJ46	金属	—	鉄製馬具	7.3	6.9	0.8		重さ31.1ｇ
108	55- 1	MJ44	金属	—	小札	5.0	2.6	0.5		重さ6.9ｇ
109	2	表採	金属	—	小札	4.2	2.1	0.3		重さ3.4ｇ
110	3	MH44	金属	—	小札	4.1	2.2	0.5		重さ3.0ｇ
111	4	MK44	金属	—	小札	4.1	2.3	0.4		重さ4.0ｇ
112	5	表採	金属	—	小札	6.3	3.3	0.7		重さ9.0ｇ
113	54-17	表採	金属	—	不明	4.3	1.5	0.7		重さ5.7ｇ
114	18	MJ44	金属	—	不明	5.2	1.5	1.0		重さ8.4ｇ
115	19	MH43	金属	—	鉄製刀	17.8	3.2	1.1		重さ54.4ｇ
113-116	55- 6	MJ44	金属	—	不明	(16.9)	(2.1)	(0.5)		重さ19.3ｇ
117	7	SK2036	金属	—	不明	11.1	1.4	1.3		重さ24.5ｇ

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。木製品・金属ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。なお、（　）内の数値は推定値である。

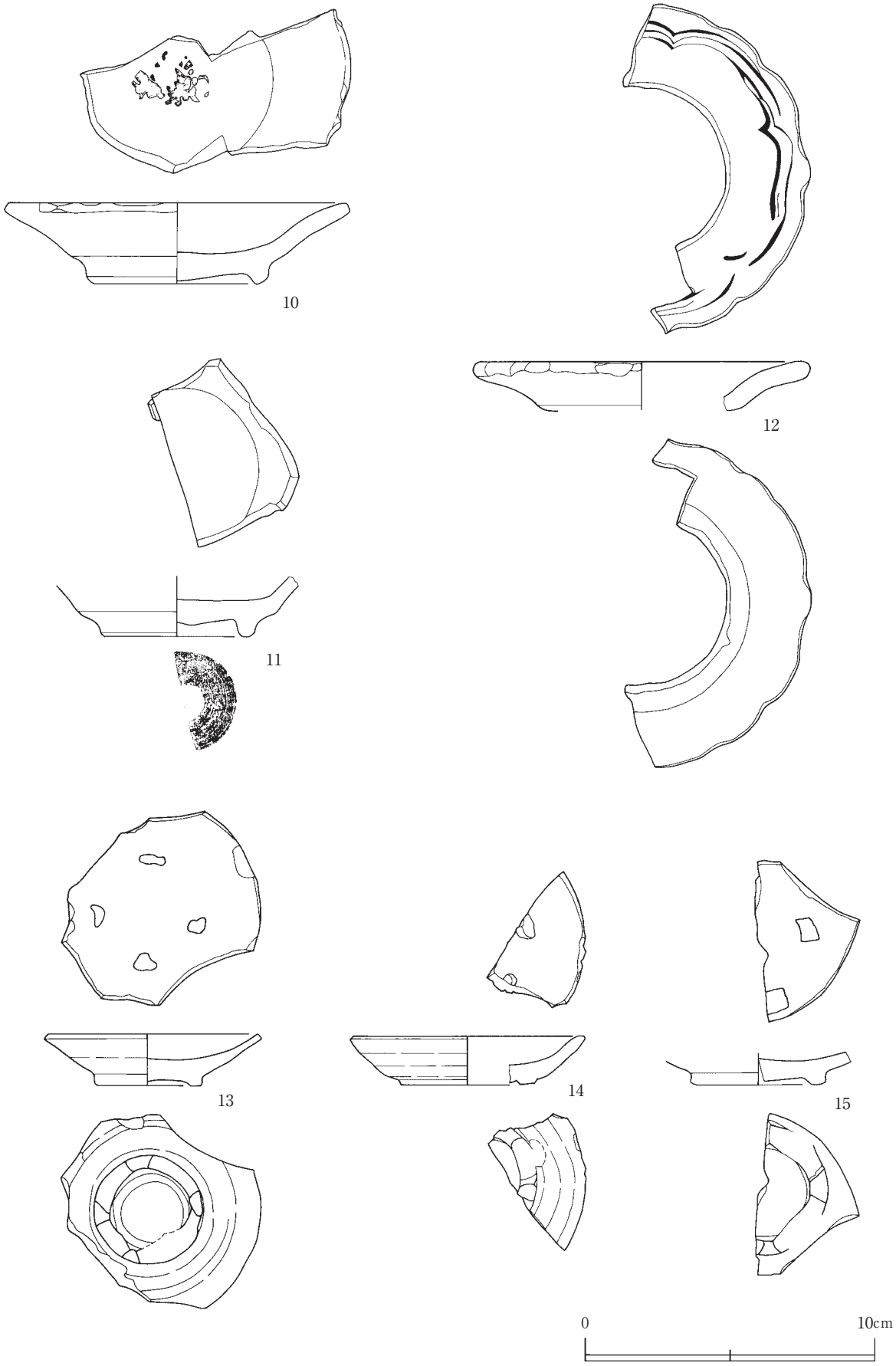
第11表　Ⅴ郭出土遺物一覧表（４）

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
113-118	55- 8	MJ44	金属	—	釘	7.2	1.5	0.8		重さ6.1ｇ
119	9	MC47	金属	—	釘	5.9	1.2	0.9		重さ7.6ｇ
120	10	表採	金属	—	釘	4.5	1.1	0.9		重さ4.2ｇ
121	11	表採	金属	—	釘	5.3	1.2	1.2		重さ4.0ｇ
122	12	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		景徳元寳　重さ2.5ｇ
123	13	SK2031	金属	—	銭貨	2.4	—	—		熈寧通寳　重さ2.7ｇ
124	14	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.9ｇ
125	15	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.7ｇ
126	16	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.4ｇ
127	17	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.2ｇ
128	18	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.5ｇ
129	19	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.2ｇ
130	20	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.4ｇ
131	21	MH45	金属	—	銭貨	—	—	—		洪□□寳　重さ1.7ｇ
114-132	22	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		洪武通寳　重さ2.2ｇ
133	23	SKI2036	金属	—	銭貨	2.4	—	—		永楽通寳　重さ2.5ｇ
134	24	SKI2036	金属	—	銭貨	2.4	—	—		永楽通寳　重さ3.5ｇ
135	25	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		不明　重さ3.6ｇ
136	26	ML44	石製品	—	硯	4.5	4.1	0.3		重さ8.0ｇ
137	27	MI43	石製品	—	不明	5.0	4.1	1.6		重さ16.0ｇ
138	28	MG43	石製品	—	砥石	8.7	3.5	3.8		重さ142.2ｇ
139	56- 1	ML42	石製品	—	石鉢	—	—	—		
115-140	4	MJ43	石製品	—	石臼	—	—	—		
141	2	MJ43	石製品	—	石臼	—	—	—		
142	3	表採	石製品	—	石臼	—	—	—		

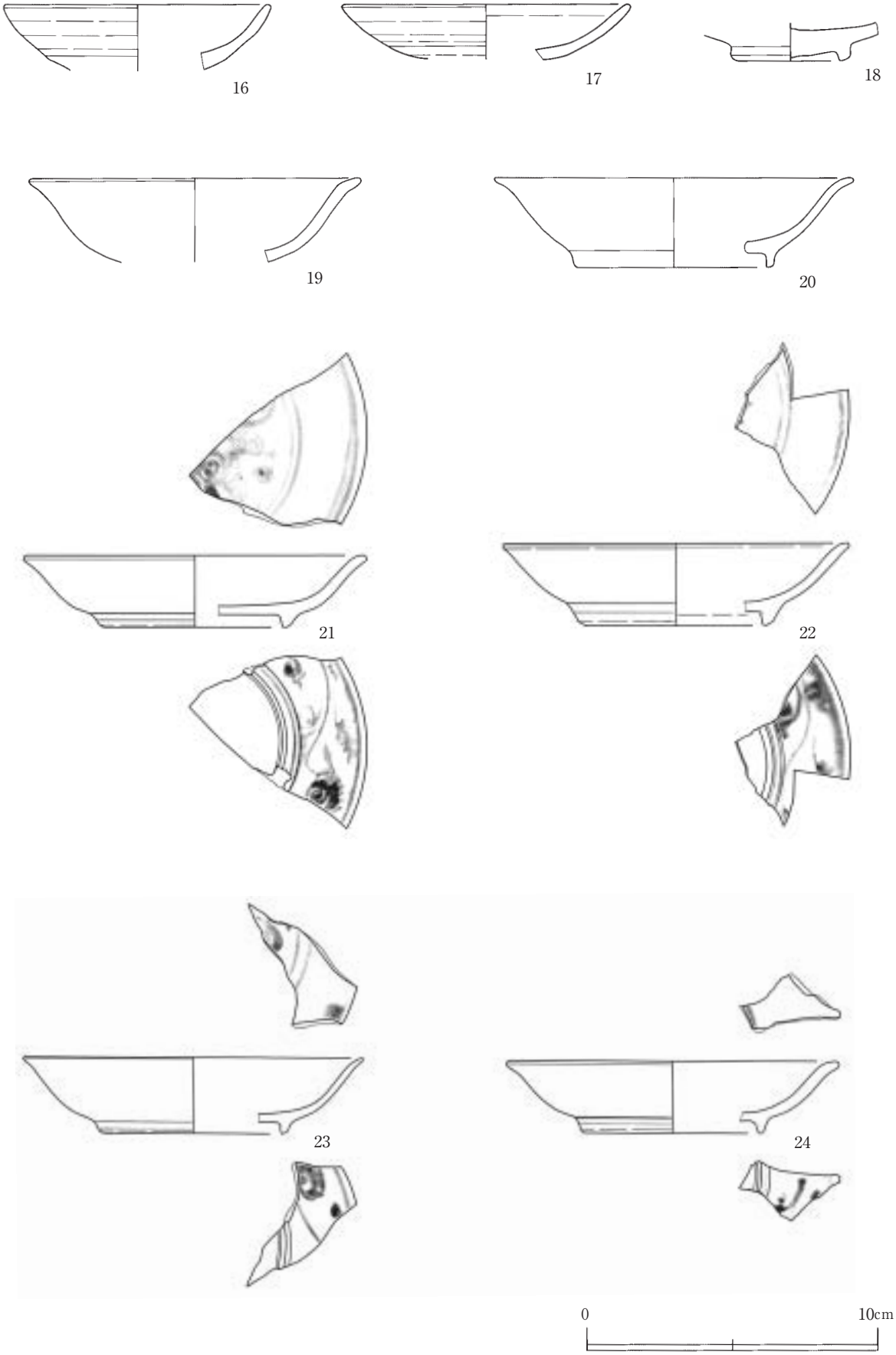
※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、金属・石製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さ。金属の銭貨ではＡ：径を示す。
　　なお、（　）内の数値は推定値である。



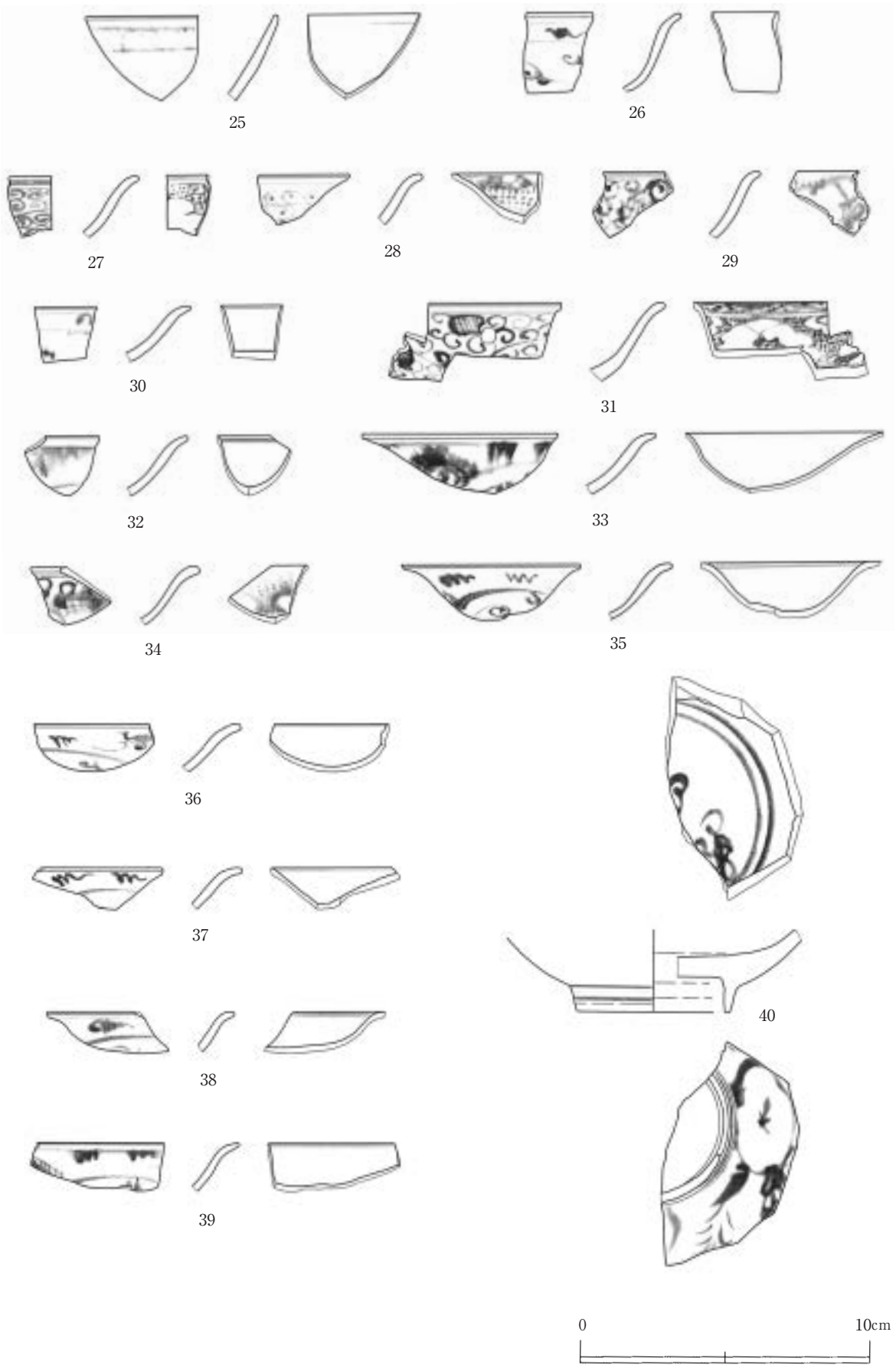
第99図　Ⅴ郭出土遺物（１）



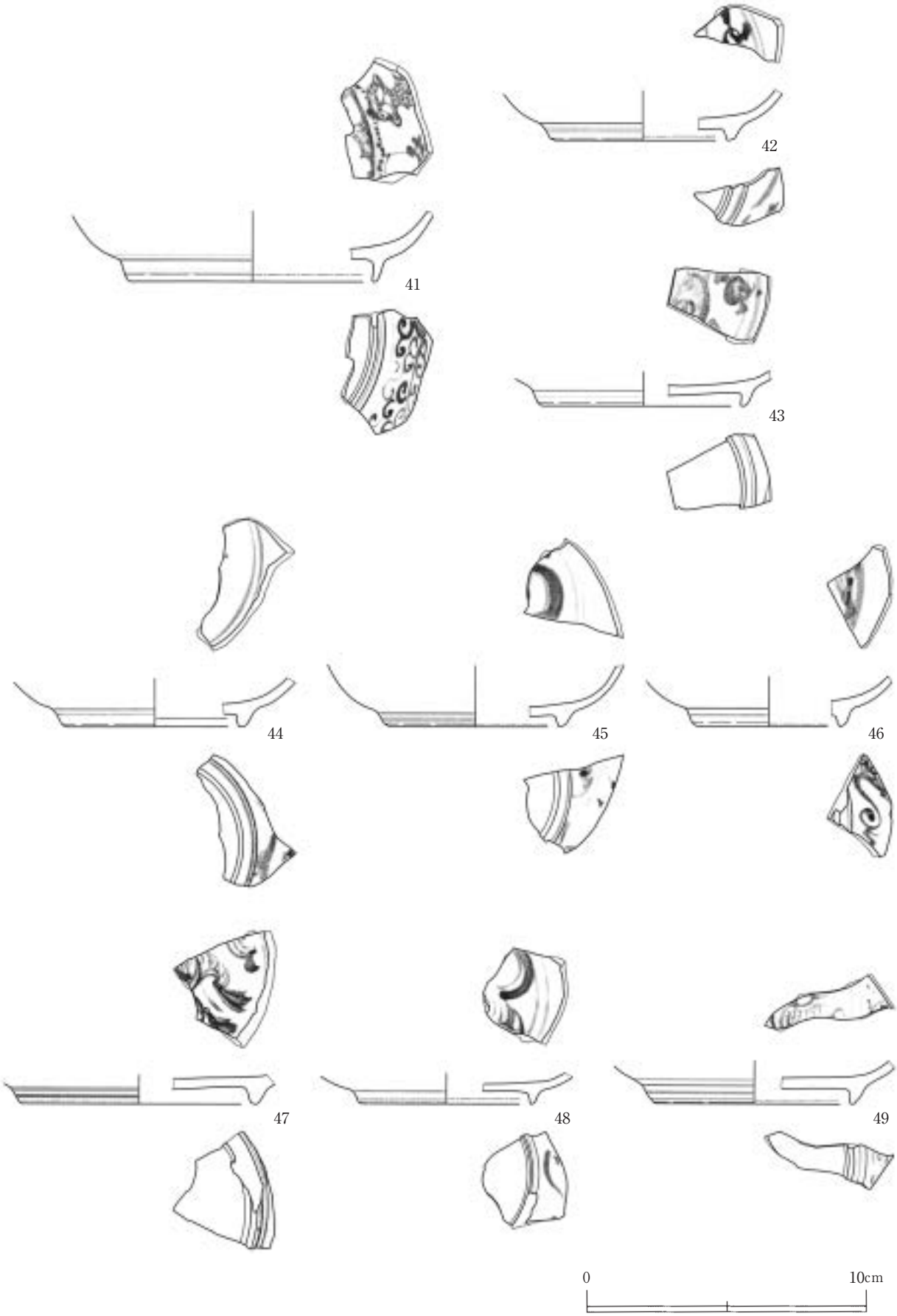
第100図　Ⅴ郭出土遺物（２）



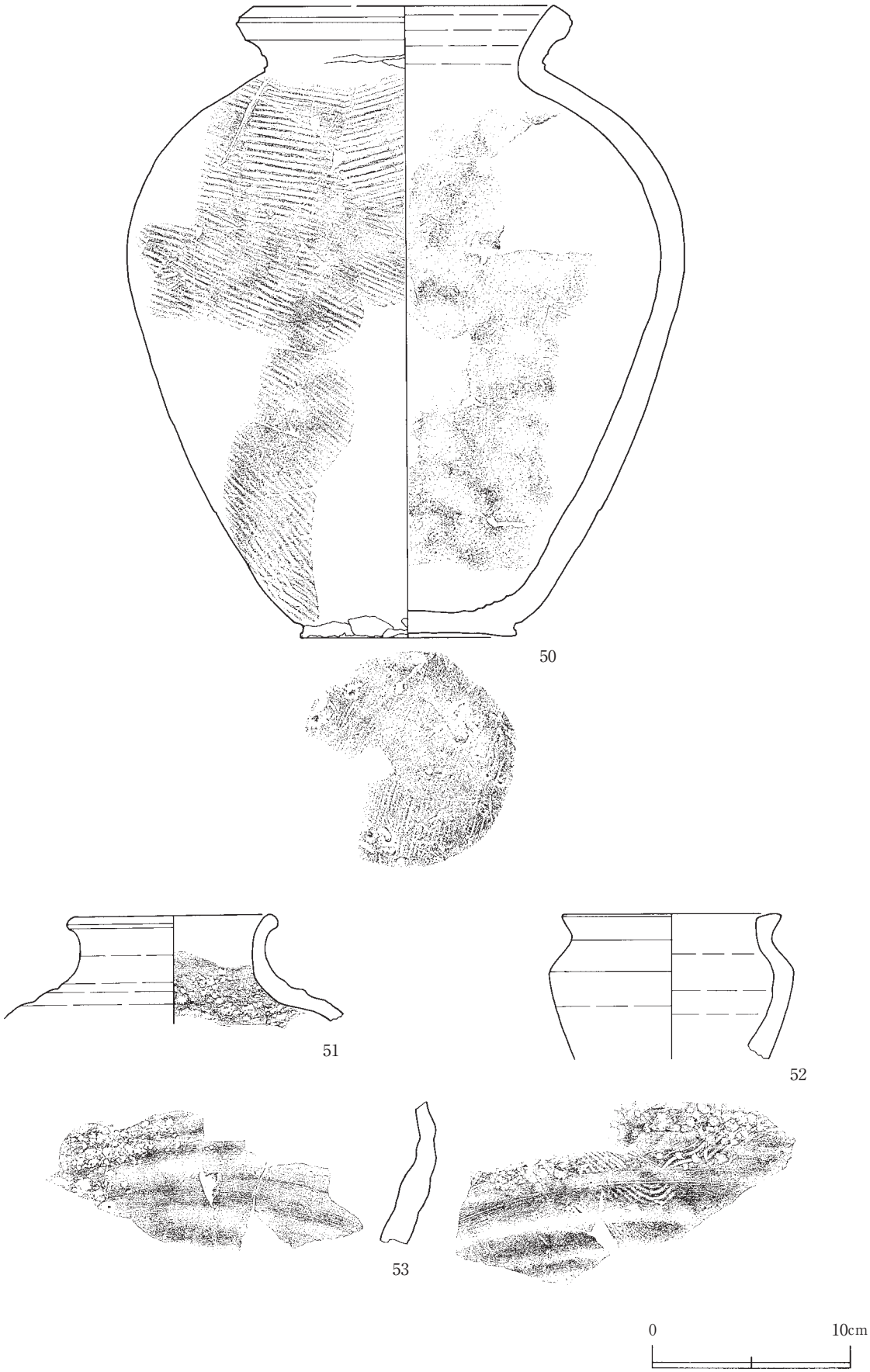
第101図　Ｖ郭出土遺物（３）



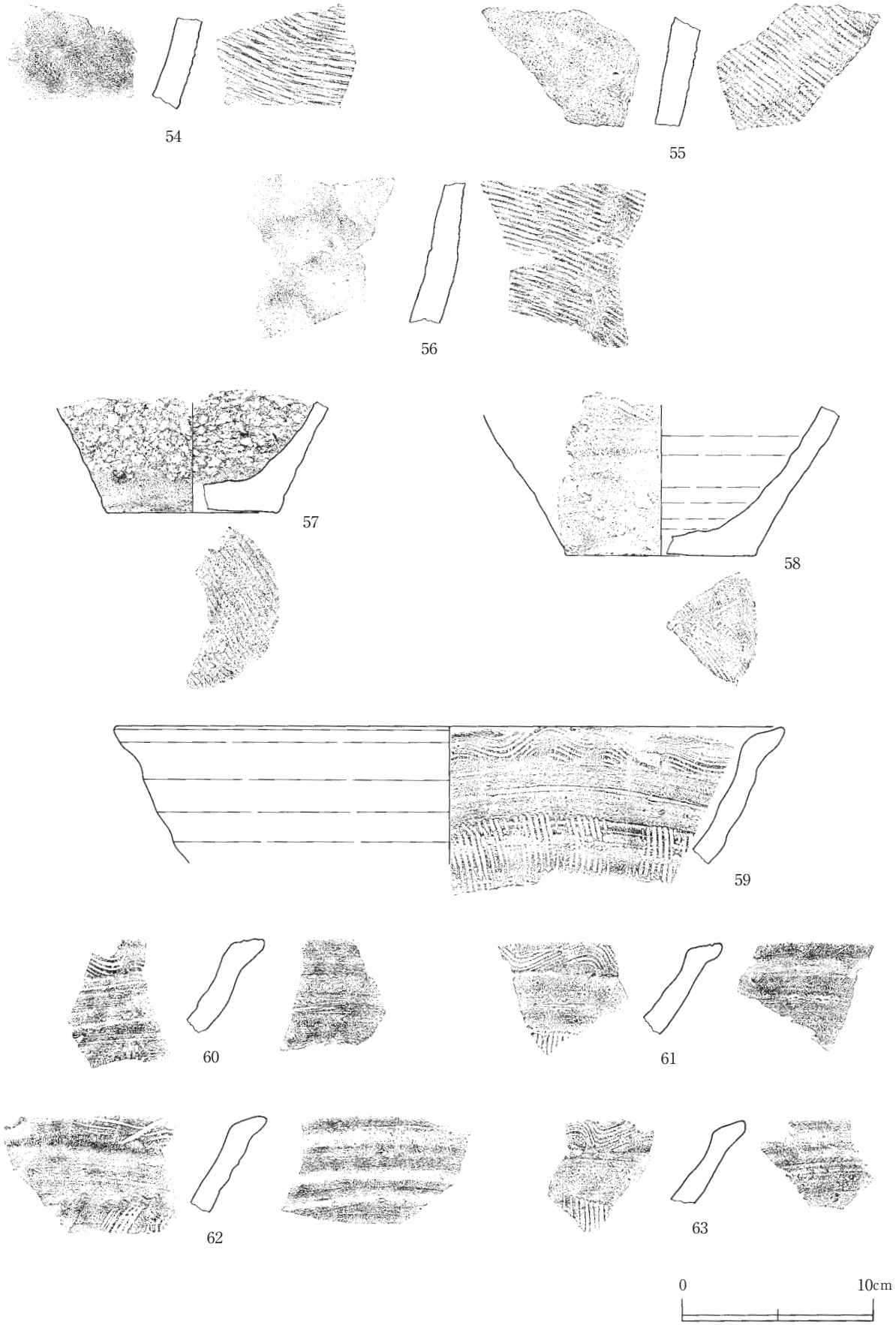
第102図　Ｖ郭出土遺物（４）



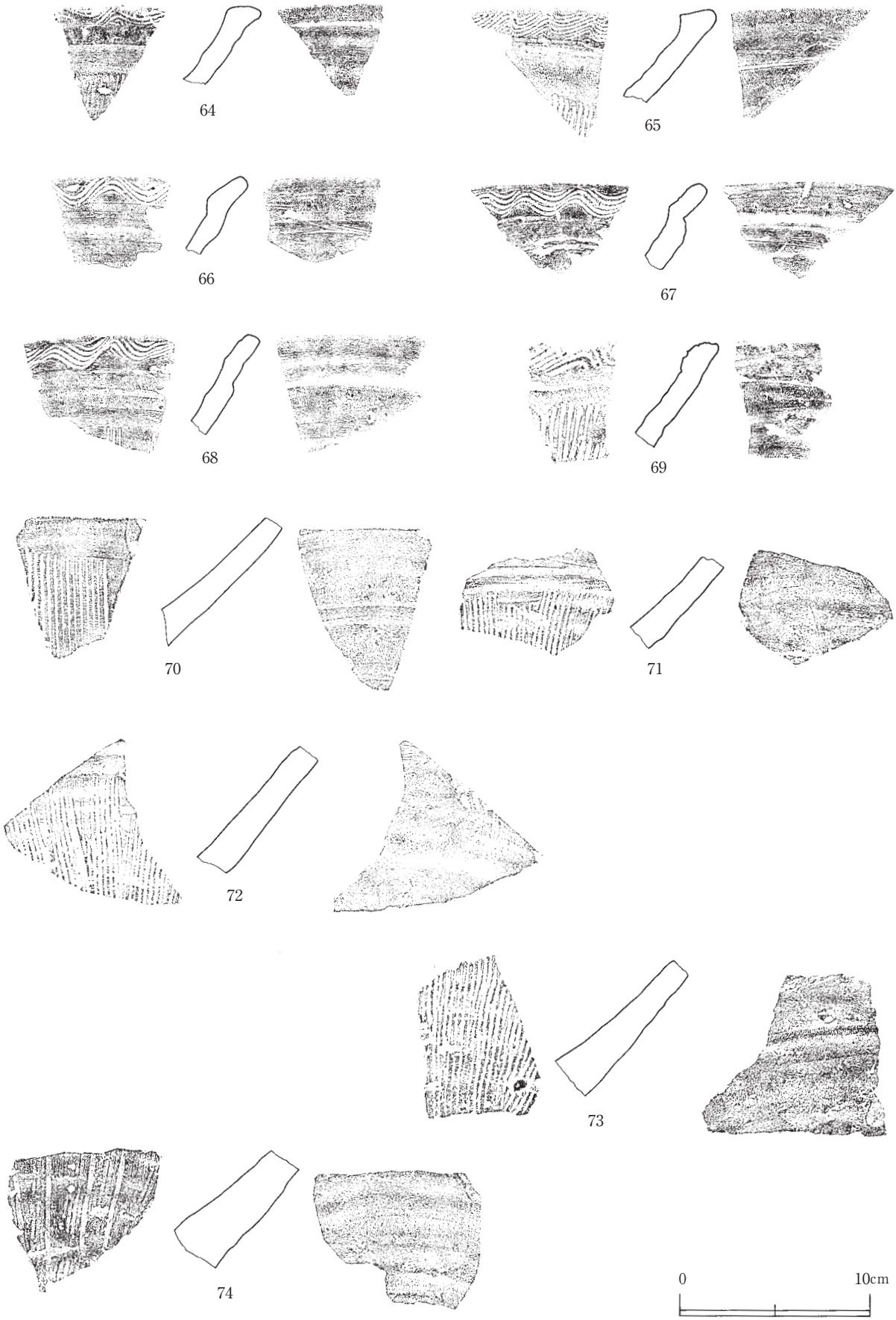
第103図　Ⅴ郭出土遺物（５）



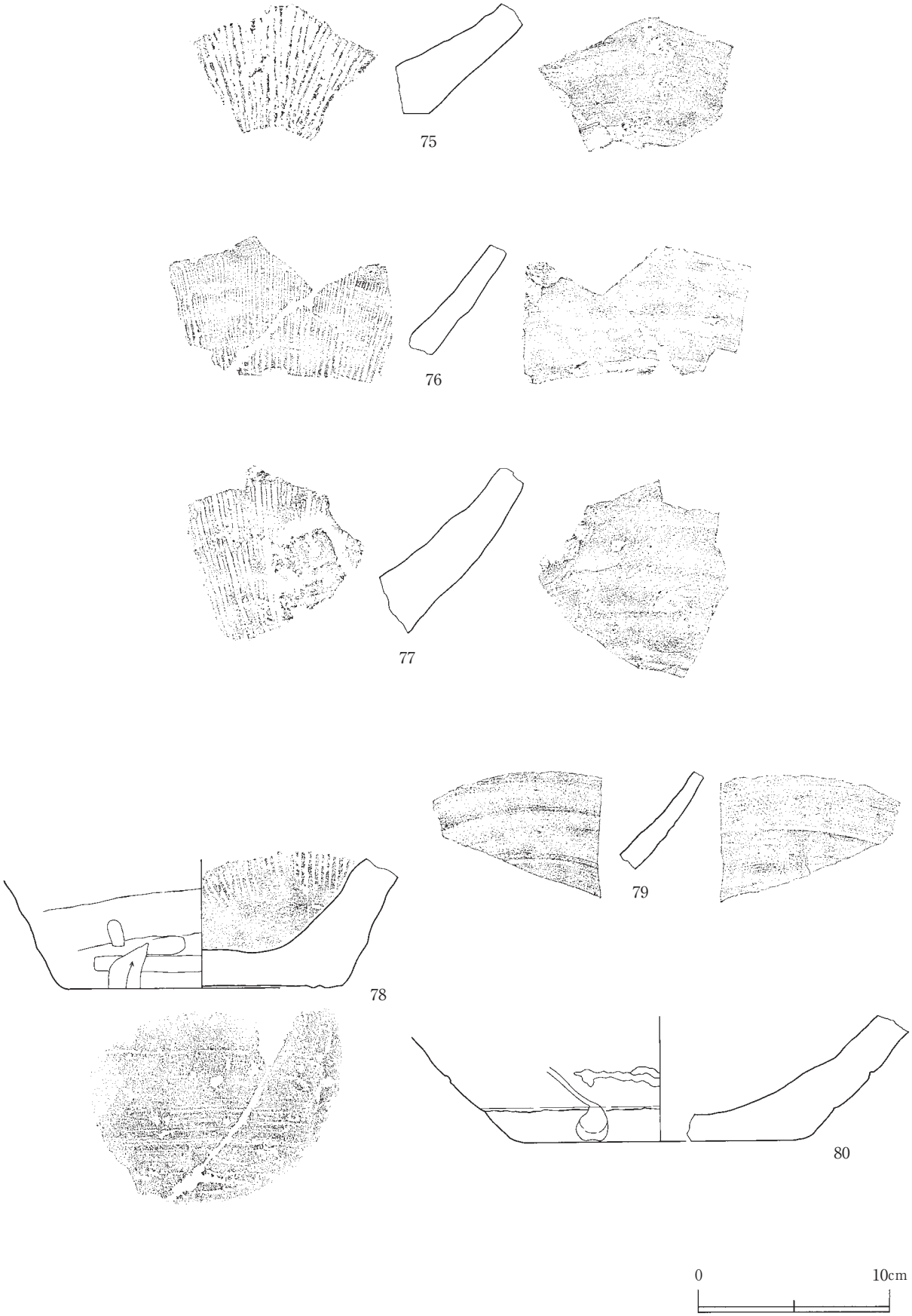
第104図　Ⅴ郭出土遺物（６）



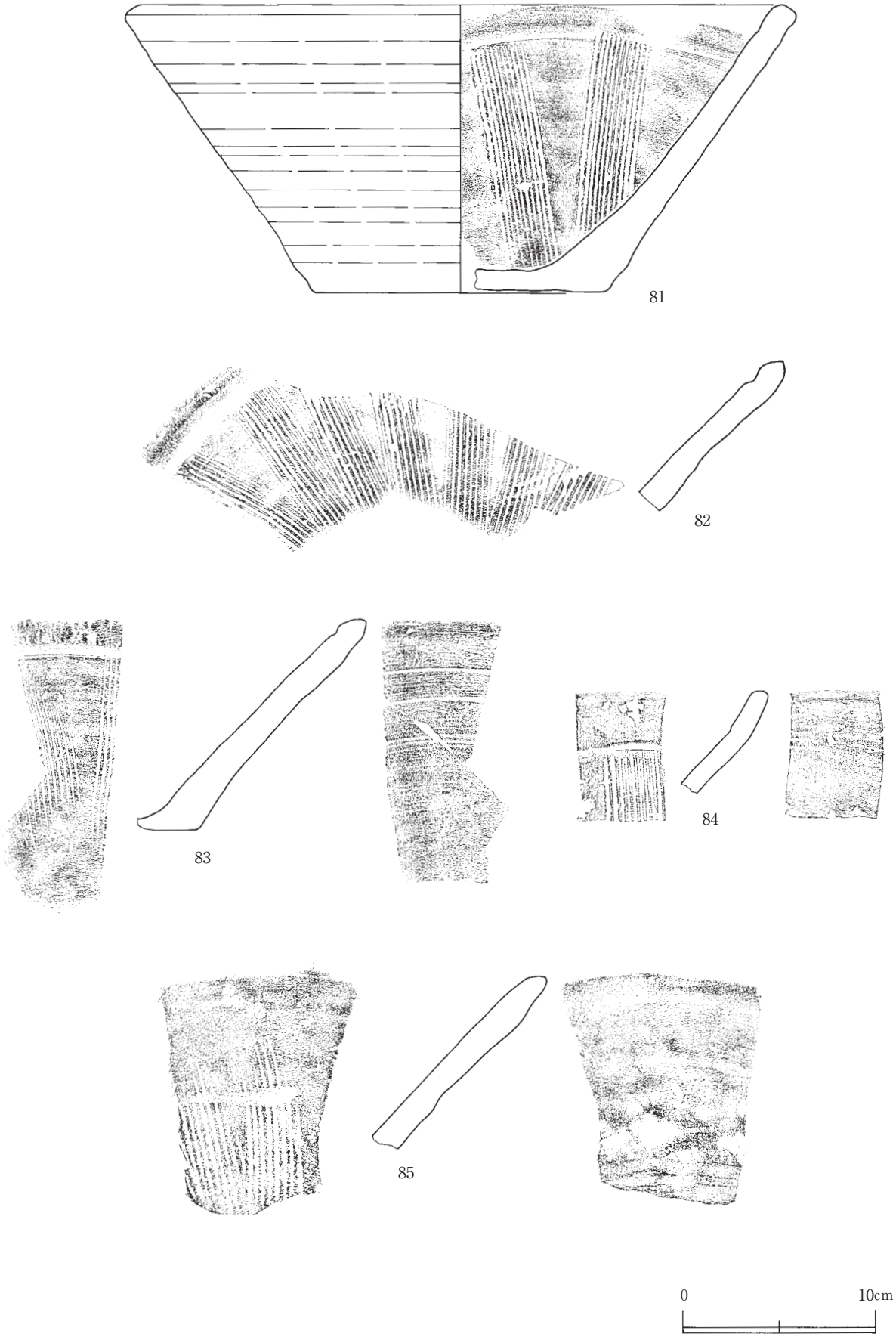
第105図　Ⅴ郭出土遺物（７）



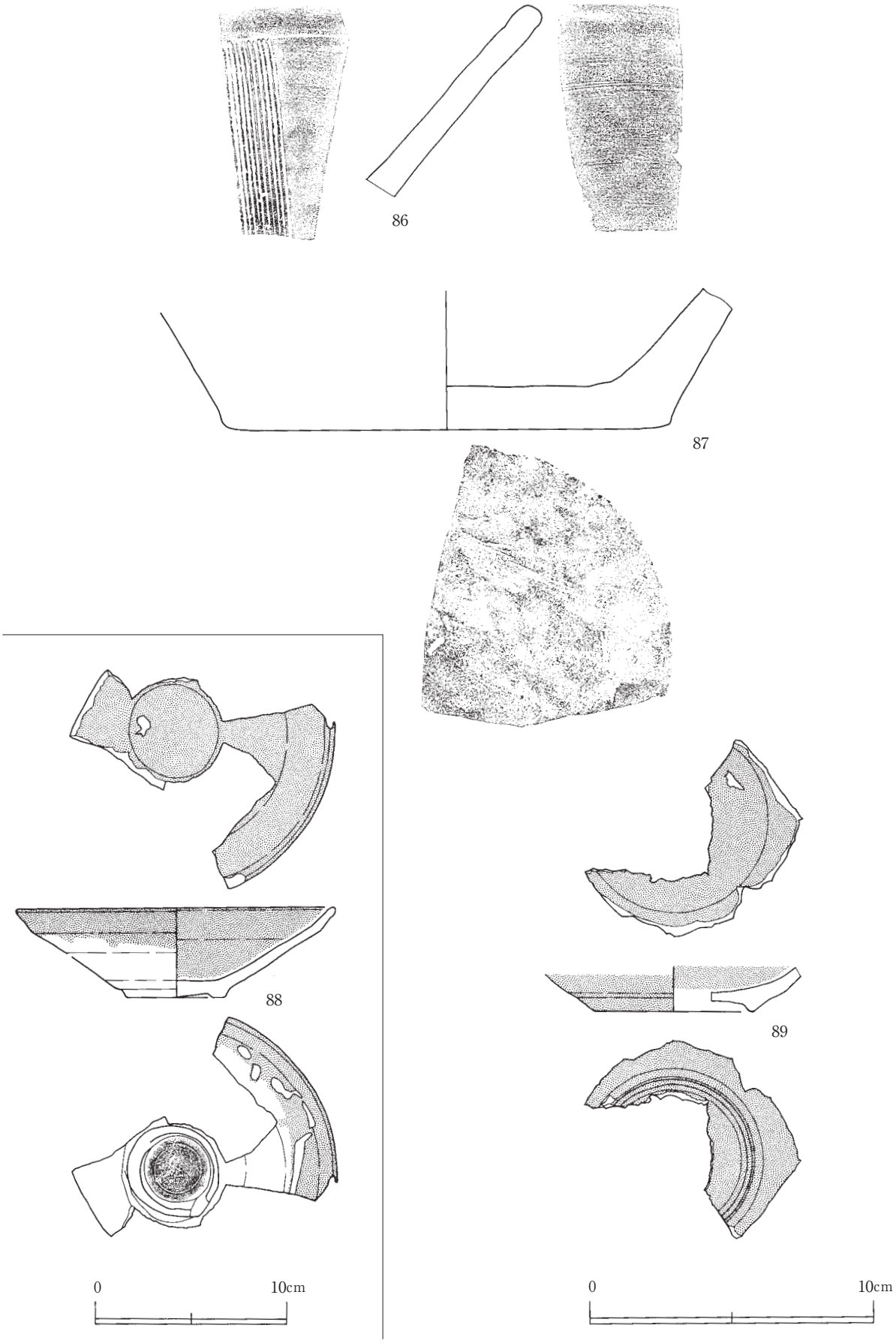
第106図　Ｖ郭出土遺物（８）



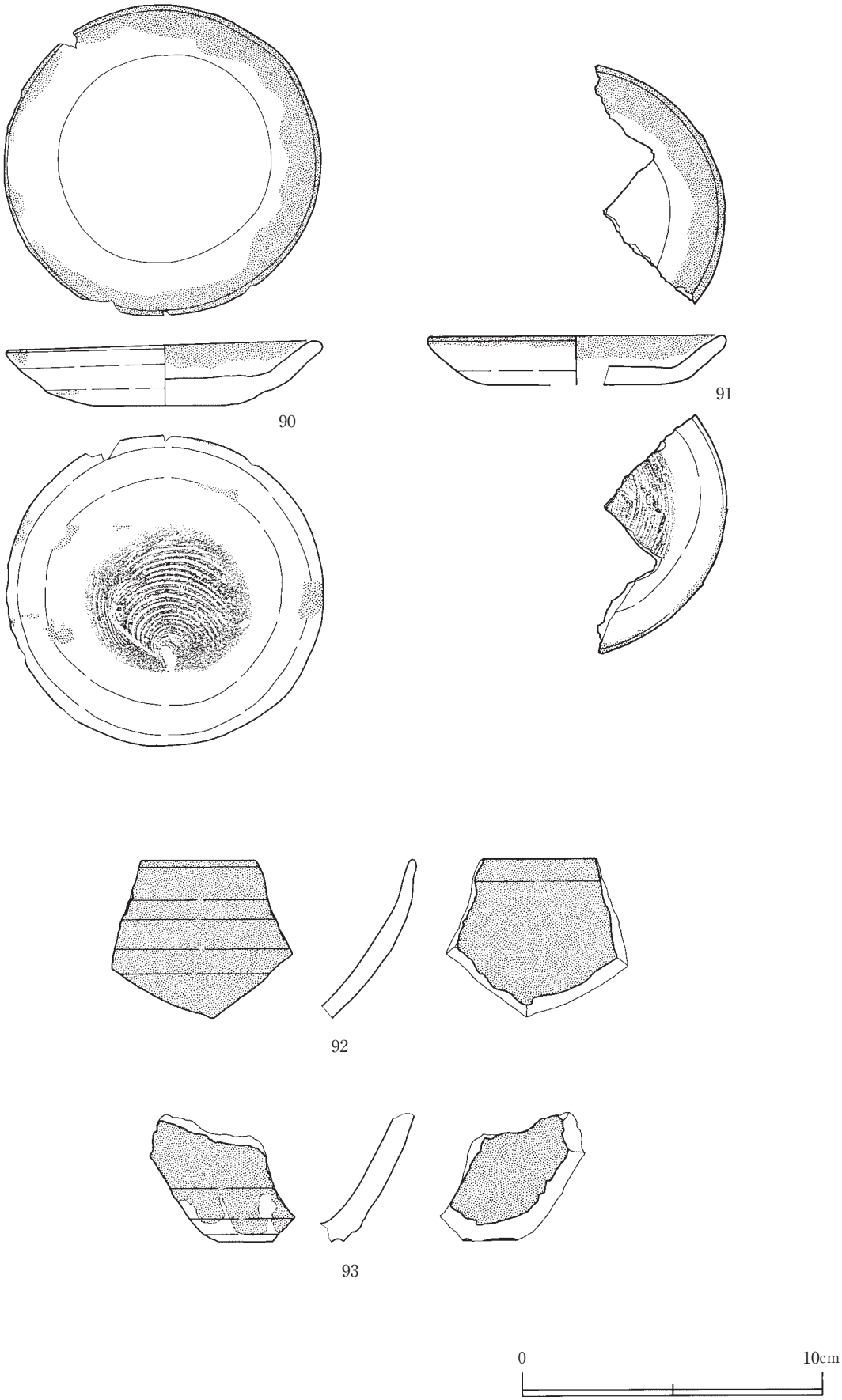
第107図　Ｖ郭出土遺物（９）



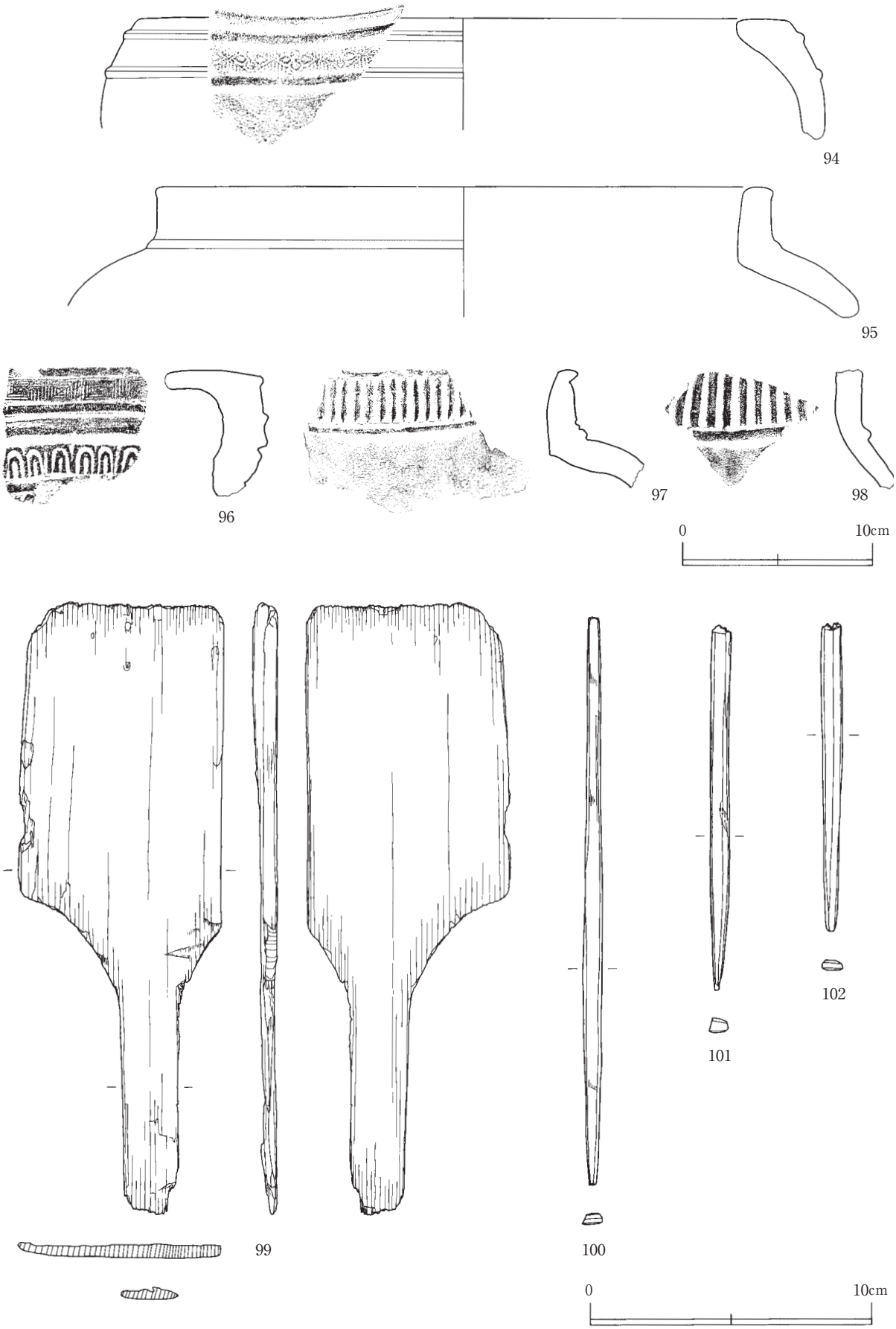
第108図　Ⅴ郭出土遺物（10）



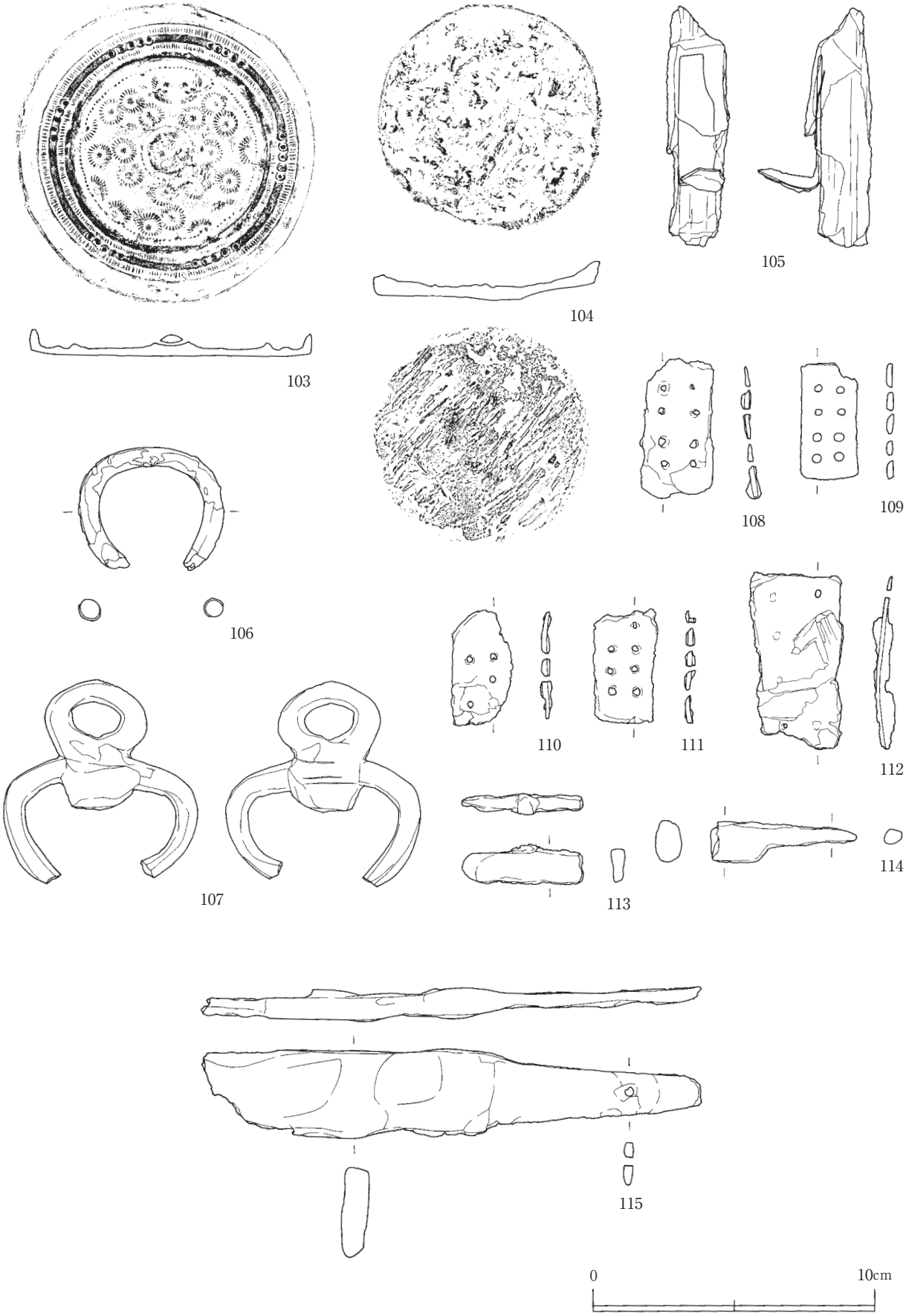
第109図　Ⅴ郭出土遺物（11）



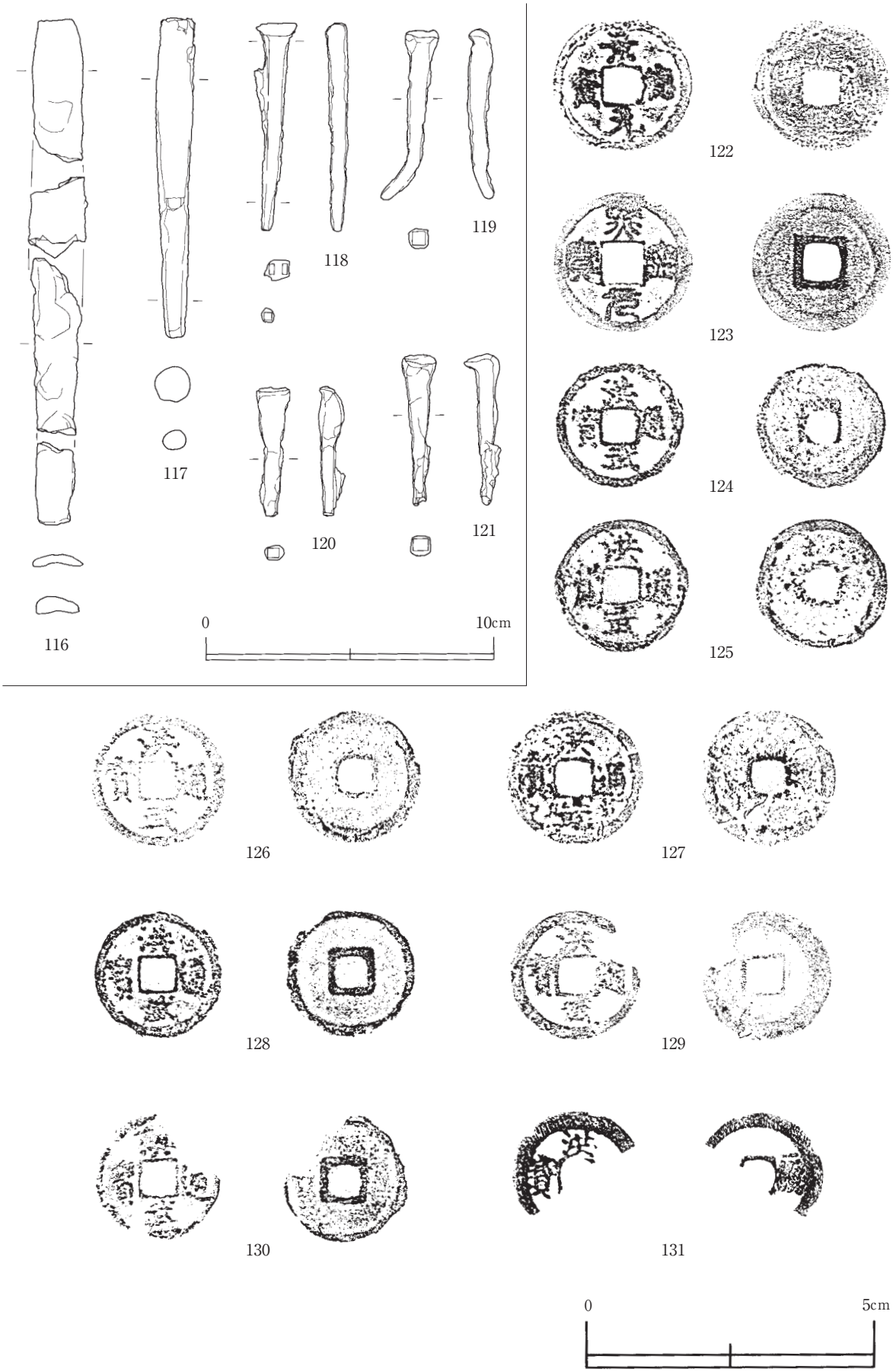
第110図　Ⅴ郭出土遺物（12）



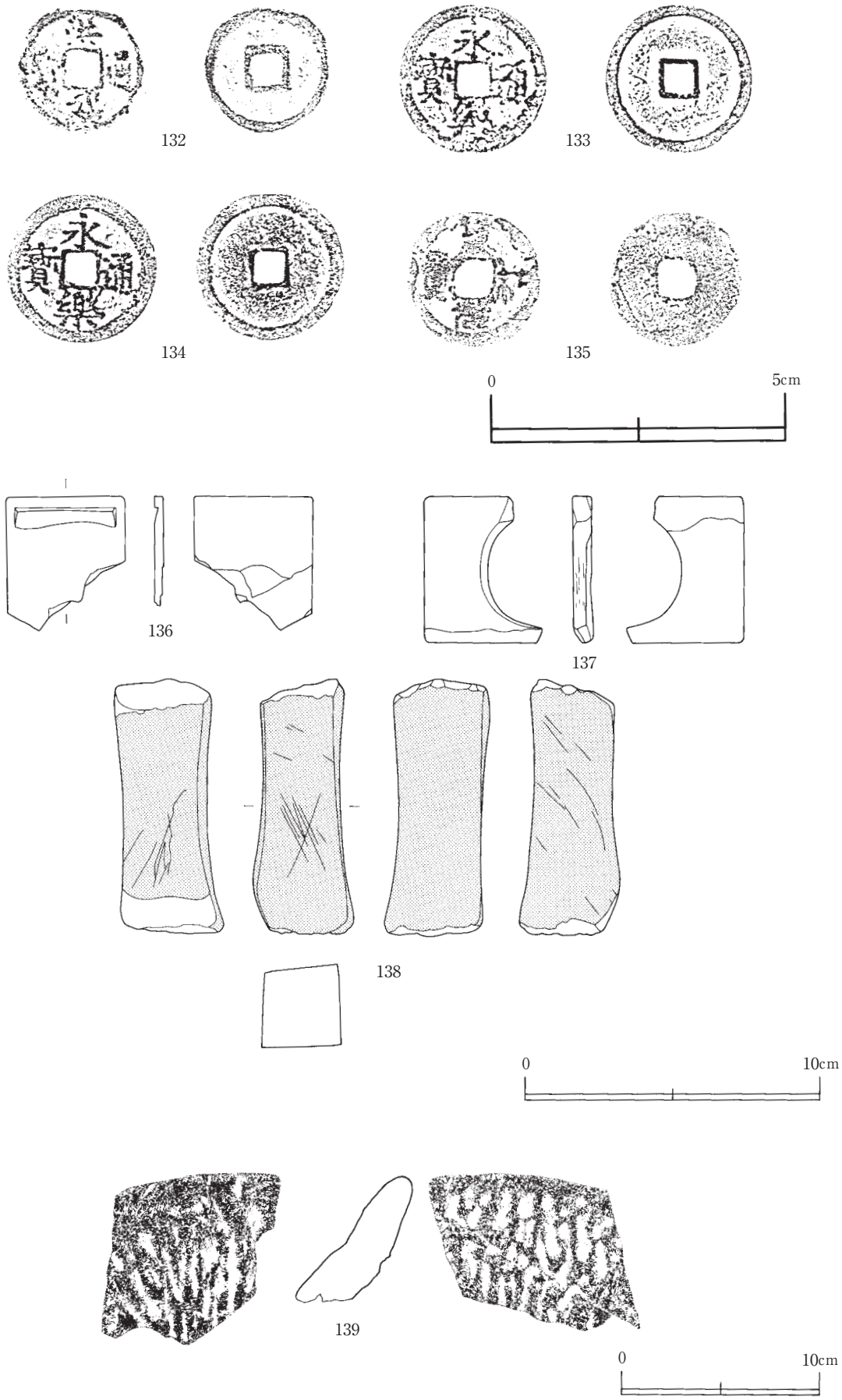
第111図　Ⅴ郭出土遺物（13）



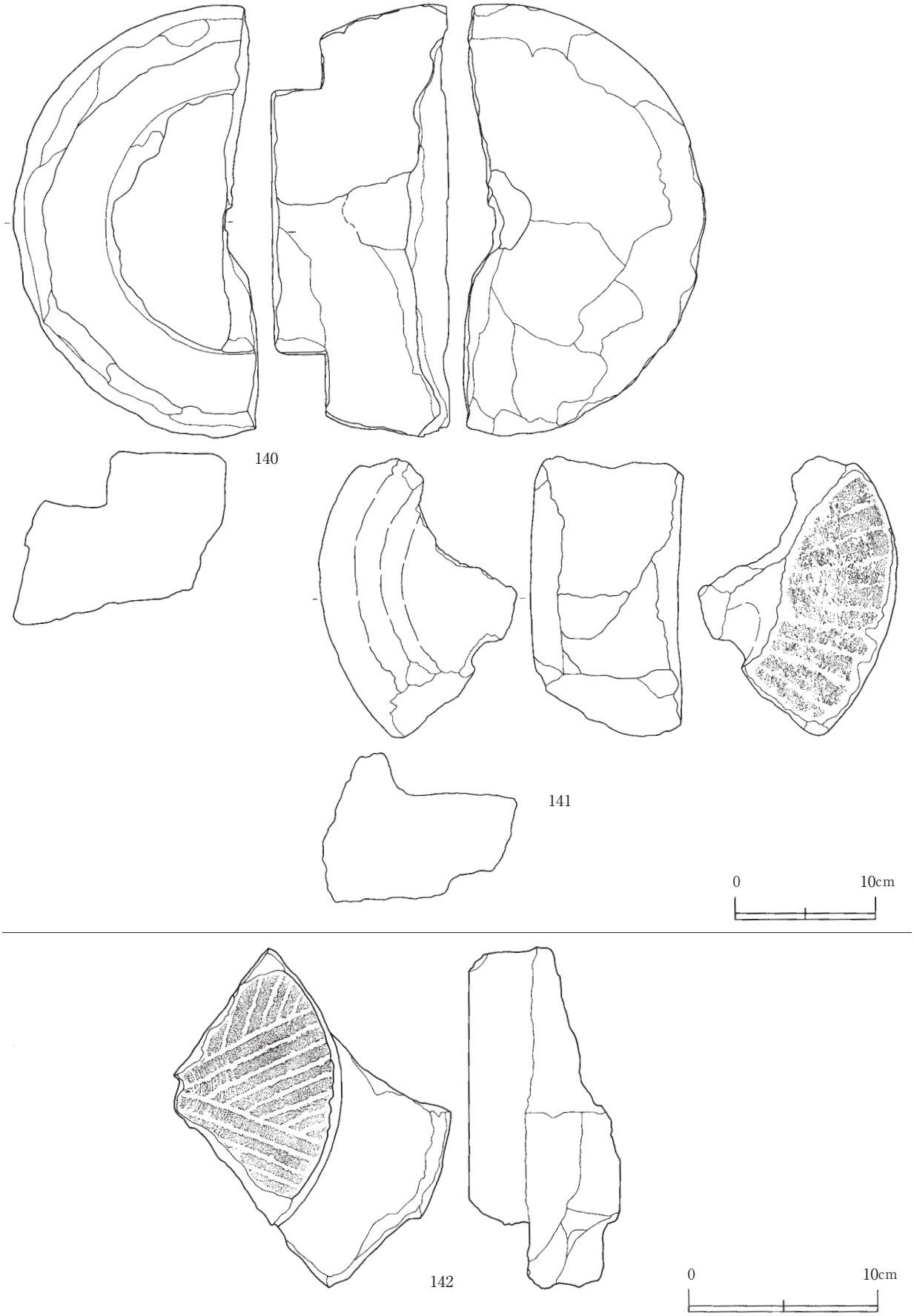
第112図　Ⅴ郭出土遺物（14）



第113図　Ⅴ郭出土遺物（15）



第114図　Ⅴ郭出土遺物（16）



第115図　Ⅴ郭出土遺物（17）

６　Ⅵ郭の検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ2535（第117図）

ＭＧ52・53グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＢ2531・2544、ＳＫＩ2707、ＳＫ2764と重複し、本遺構が最も新しい。規模は、桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）1.82m、梁行総長（Ｐ３～Ｐ５）1.25mである。柱掘形は径0.14～0.33mの楕円形で、深さは0.15～0.48mである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。柱痕は認められなかった。建物方位は北側柱列でＮ―57°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ2591（第117図）

ＭＦ53～55、ＭＧ53・54グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＩ2592・2707と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長軸（北東―南西）7.92m×短軸（北西―南東）4.02mの北西側が開口した方形の遺構で、最も深い南西側で検出面からの深さは0.52mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。付随する溝２条と柱穴12基を検出した。壁際にある溝１の平面形は全長（北東―南西）2.12m×最大幅（北西―南東）0.31mを測り、壁に沿って直線的に延び、底面からの深さは0.2mである。その内側にある溝跡２全長（北―南）0.88m、最大幅（東―西）0.22mを測り、直線的に延び、底面からの深さは0.21mである。この２条の溝は本来壁面に沿って掘り込まれていたと考えられることから、本遺構は一度修復したか建て替えられた可能性がある。付随する遺構も含めて堆積土は４層に分けたが大差はなく、一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.04～0.21mで、深さは0.1～0.46mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2592（第118図）

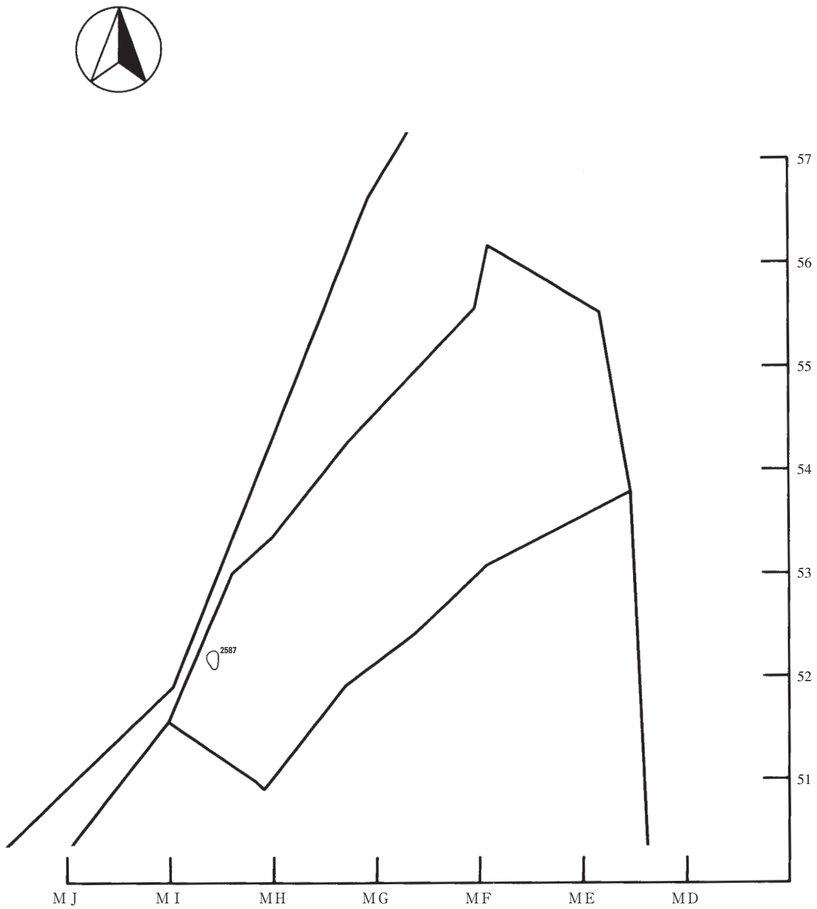
ＭＧ・ＭＨ44グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ2591・2707と重複し、本遺構が最も古い。平面形は重複関係により大部分が失われているが、長軸（北―南）2.74m×短軸（東―西）2.38mの北側が開口した方形の遺構で、最も深い南側で検出面からの深さは0.29mである。北側に緩やかに傾斜しているが、本来は平坦に作りだしたと思われる。壁の傾きはやや急である。付随する柱穴４基を検出した。各柱穴の大きさは径0.22～0.44mで、深さは0.03～0.46mである。

ＳＫＩ2660（第118図）

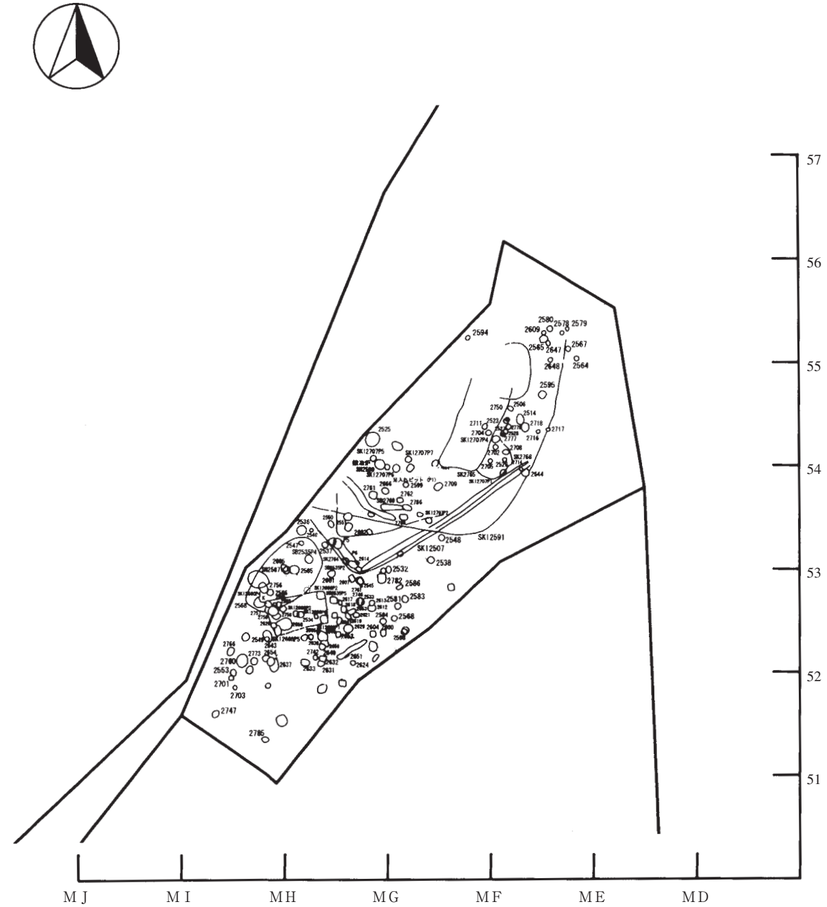
ＭＧ・ＭＨ52グリッドのＩ期生活面で検出した。平面形は整地や崩落等により西側を失っているが、検出した範囲で長軸（東―西）2.16m×短軸（北―南）1.28mの西側が開口する方形と推定され、検出面からの深さは0.04mである。底面は平坦で、僅かに残った壁の傾きは急である。付随する柱穴５基を検出した。付随する遺構も含めて堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.24～0.39mで、深さは0.13～0.3mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ2707（第118図）

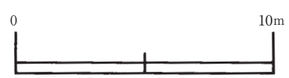
ＭＦ53・54、ＭＧ53・54グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫＩ2591・2592と重複し、ＳＫＩ2591より新しく、ＳＫＩ2592より古い。平面形は長軸（北東―南西）7.61m×短軸（北西―南東）4.02mの北西側が開口した方形の遺構で、最も深い南西側で検出面からの深さは0.52mである。底面



Ⅵ郭上層



Ⅵ郭下層



第116図　Ⅵ郭遺構配置図

は北西側に向かって緩やかに傾斜するが本来は平坦だったと考えられ、壁の傾きは緩やかである。付随する溝２条と柱穴７基を検出した。南東側の壁に沿った溝跡１の全長（北東―南西）7.34m、最大幅（北西―南東）0.26mを測り、壁に沿って直線的に延び、底面からの深さは0.17mである。南西側の壁に沿った溝２の平面形は全長（北―南）0.64m×最大幅（東―西）0.32mを測り、壁に沿って直線的に延び、底面からの深さは0.12mである。この２条の溝は本来同一の溝であった可能性と、修復等に伴う時期差のある溝の可能性の両方が考えられるが、明確にすることは出来なかった。付随する遺構も含めて堆積土は２層に分けられたが大差はなく、一括して埋め戻されたものと考えられる。各柱穴の大きさは径0.19～0.34mで、深さは0.12～0.56mである。遺物は出土しなかった。

（３）土坑

ＳＫ2764（第119図）

ＭＧ52・53、ＭＨ52・53グリッドのＩ期生活面で検出した。 平面形は長軸（北西―南東）3.47m×短軸（北東―南西）1.91mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.81mである。底面は平坦で、壁の傾きは急で、上部は緩やかである。堆積土は３層に分けられ、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ2765（第119図）

ＭＥ54、ＭＦ53・54グリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫ2787と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は検出した範囲で長軸（北東―南西）3.53m×短軸（北西―南東）1.58mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.48mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層に分けたが、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

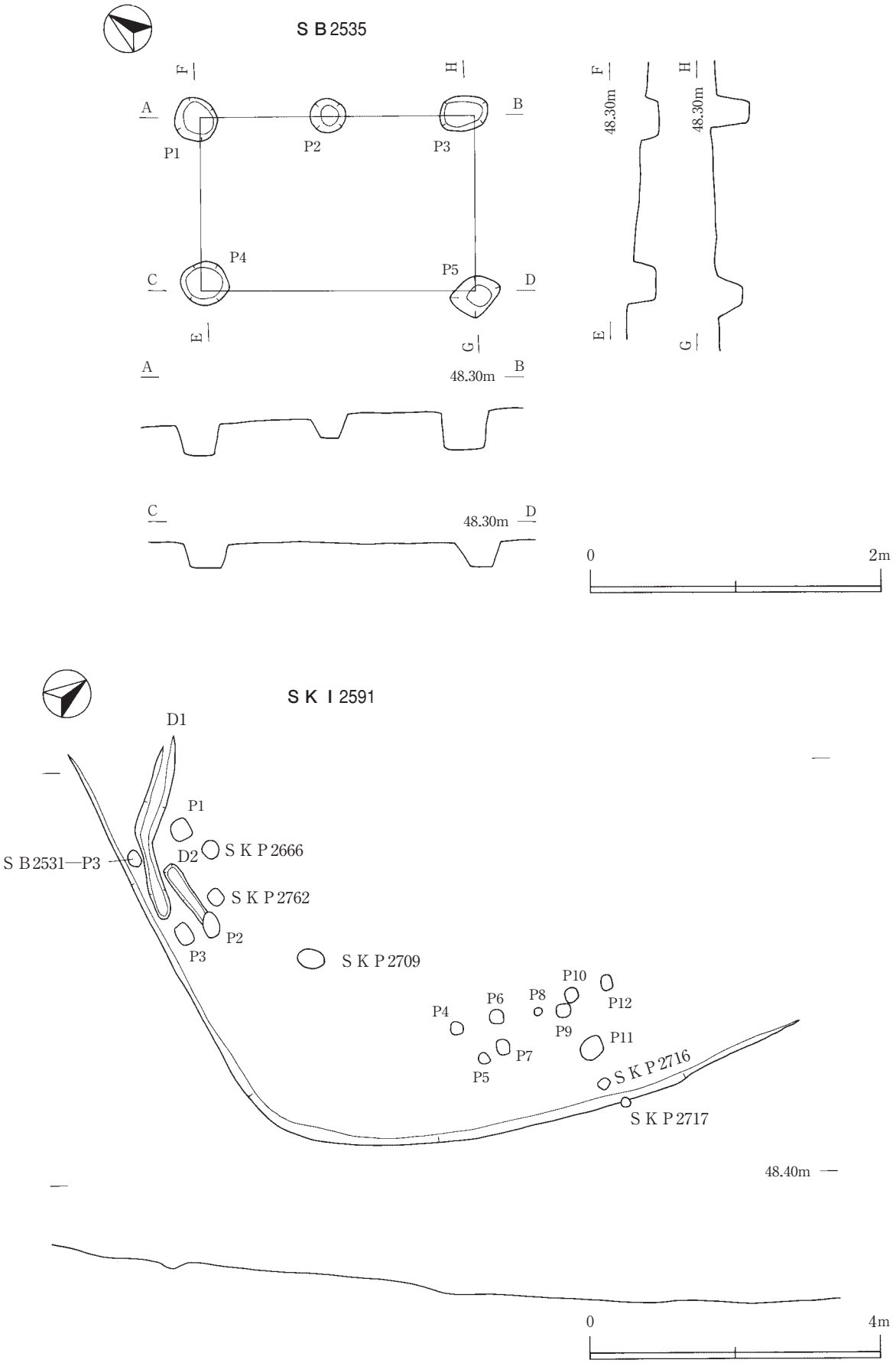
ＳＫ2768（第119図）

ＭＥ・ＭＦグリッドのＩ期生活面で検出した。ＳＫ2765と重複し、本遺構が新しい。平面形は検出した範囲で長軸（北東―南西）1.46m×短軸（北西―南東）1.09mの北西側が開口するコの字型の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.36mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

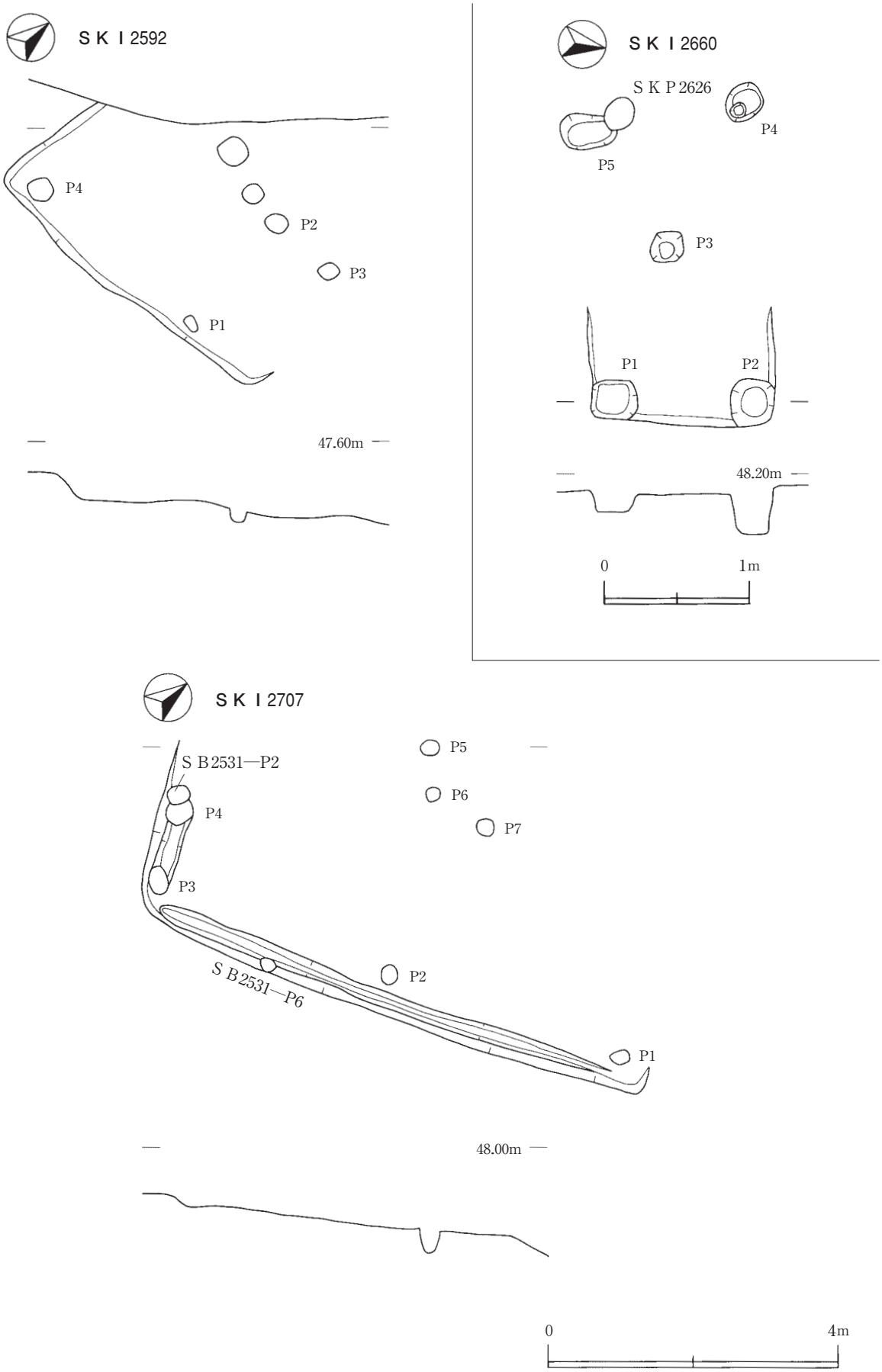
（４）焼土遺構

ＳＮ2587（第119図）

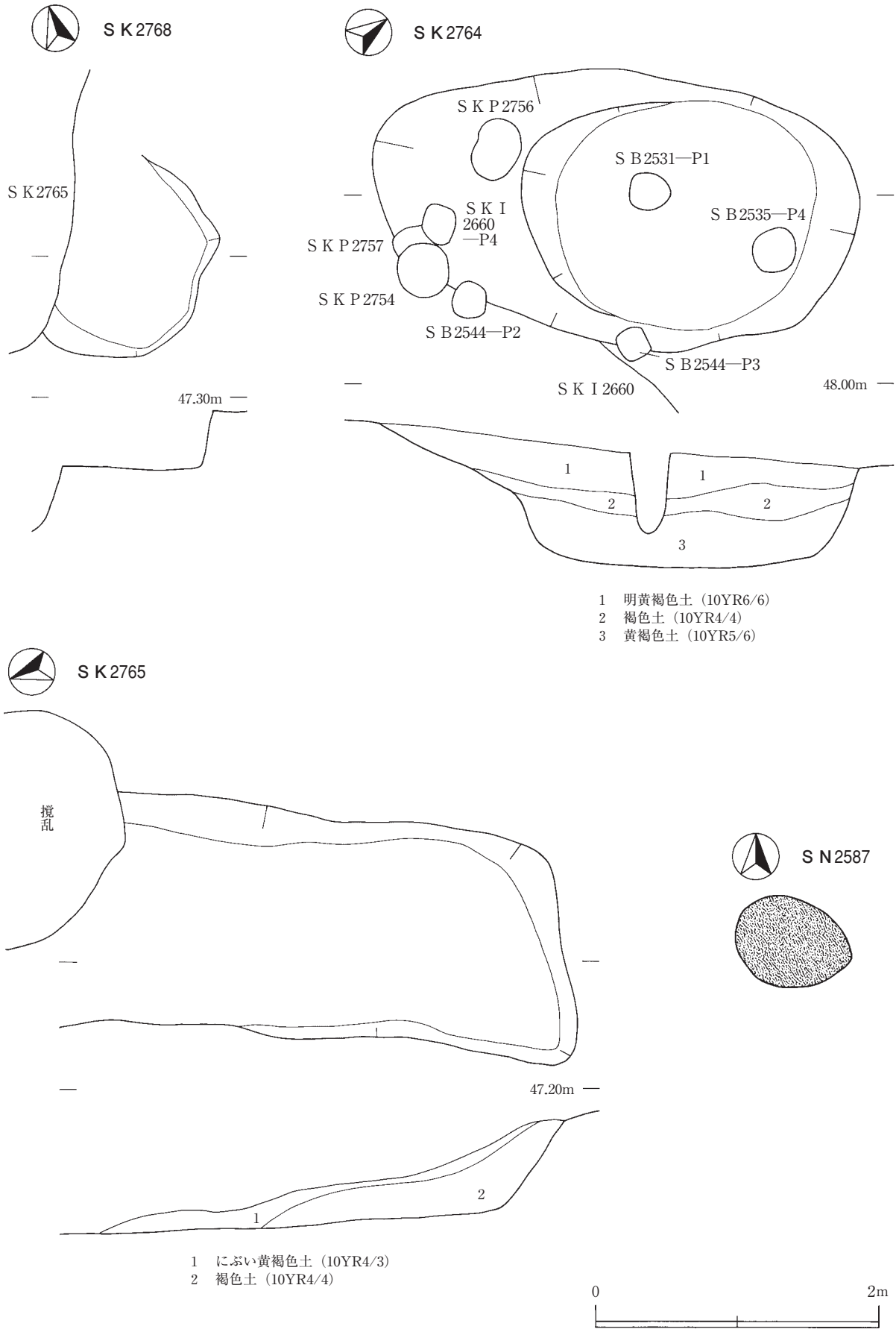
ＭＨ52グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.84m×短軸（北東―南西）0.63mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02～0.04mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。



第117図　掘立柱建物跡・竪穴状遺構（１）



第118図　竪穴状遺構（２）

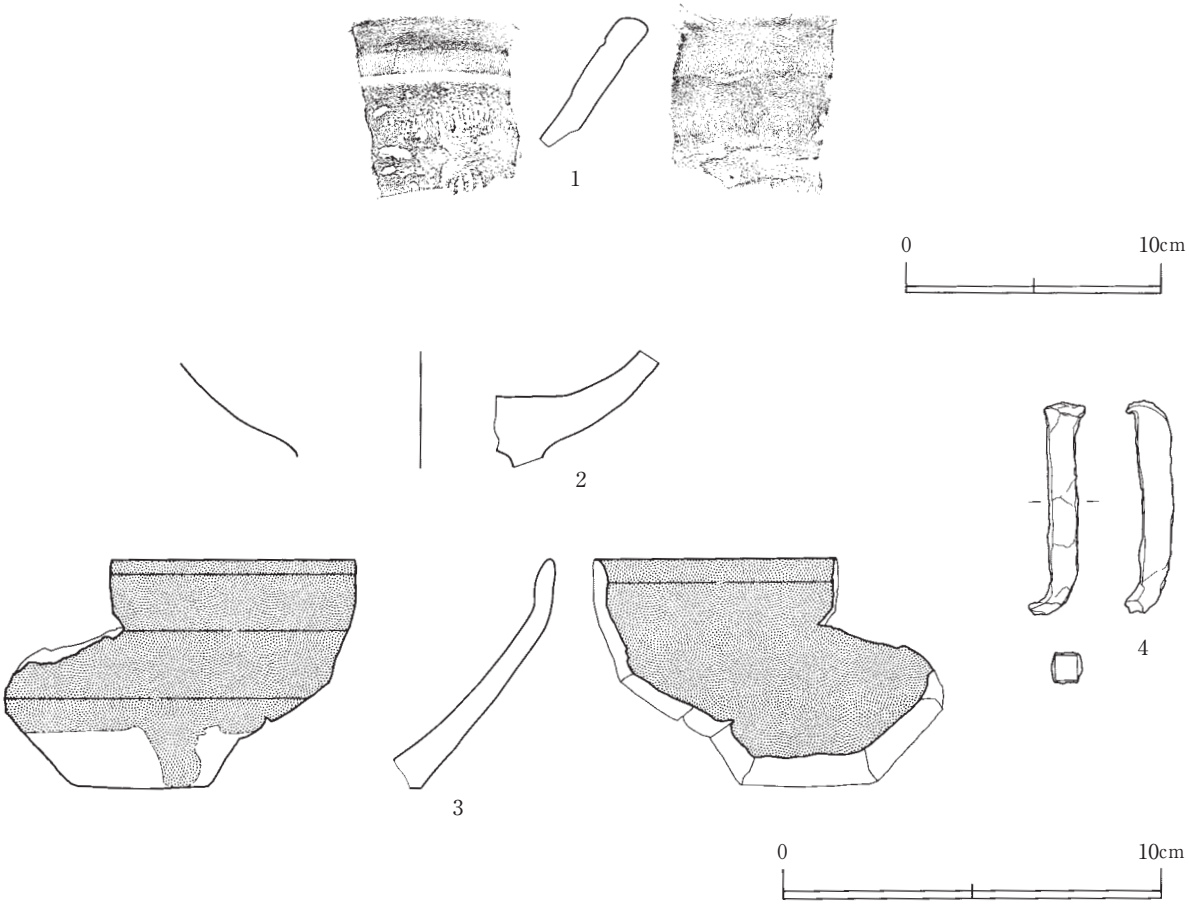


第119図　土抗・焼土遺構

第12表　Ⅵ郭出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
120-1	56- 5	表採				—	—	—		
2	—	ME54	磁器	青磁	碗	—	—	—		龍泉窯系
3	6	表採	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—		
4	7	MF55	金属	—	釘	5.6	1.1	1.0		重さ9.9ｇ

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。



第120図　Ⅵ郭出土遺物

７　Ⅶ郭の検出遺構と出土遺物

（１）焼土遺構

ＳＮ2560（第122図）

ＬＳ60グリッドにある、ＳＤ2530内の南側の平坦面に盛られた黄褐色土の上面に、炭化物範囲を検出した。炭化物範囲は長軸（北―南）2.24m×短軸（東―西）1.05mの楕円形である。掘り込みは長軸（北―南）2.2m×短軸（東―西）1.04mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.17mである。底面は北側に行くに従い標高を下げ開口し、壁の傾きは急傾斜である。凸型の赤褐色の焼土範囲を内包し、堆積土は３層に分けられた。遺物は出土しなかった。

（２）溝跡

ＳＤ2518（第121図）

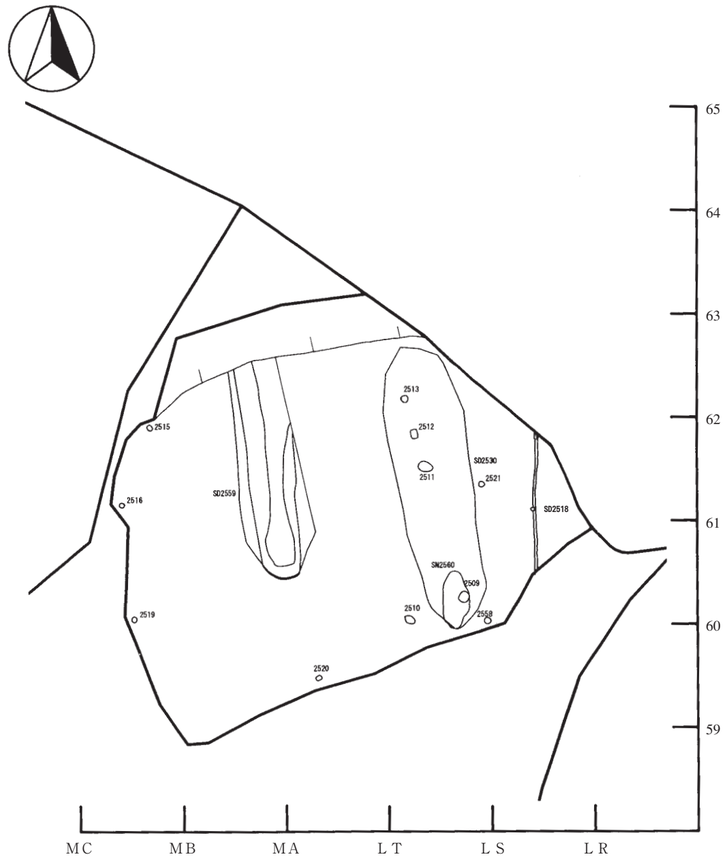
ＬＲ60・61グリッドのⅡ期生活面で検出した。北側は攪乱を受け、南側は調査区外に延伸するため全体は明らかでないが、検出できた範囲で長さ5.1m×幅0.11mを測り、緩やかに蛇行しながらもほぼ直線的に延びる。検出面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。付随する柱穴１基を検出した。Ｐ１の平面形は、長軸（東―西）0.17m×短軸（北―南）0.12mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.11mである。堆積土は１層で自然堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

ＳＤ2530（第122図）

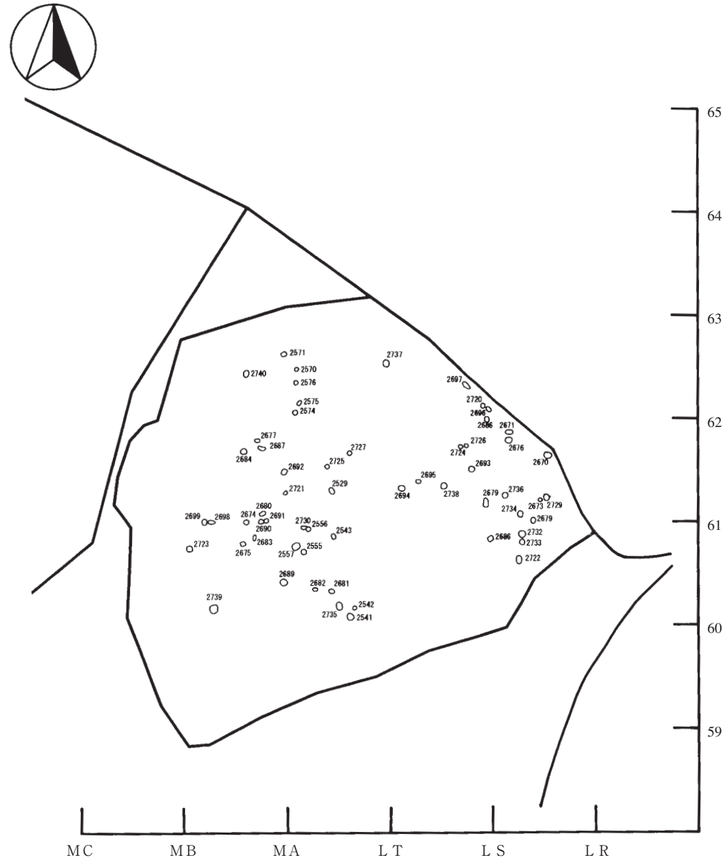
ＬＳ60～62、ＬＴ61・62グリッドのⅡ期生活面で検出した。ＳＫＰ2509・2511～2513と重複し、本遺構が最も古い。南側が調査区外に延伸するため全体は明らかでないが、検出できた範囲において、平面形は長さ11.1m×幅3.11mを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは1.4mである。底面は平坦で、壁の傾きは下部が急で、上部では外側に広がりながら緩やかである。堆積土は３層からなり、下位１層が自然堆積で、上位２層は一括して埋め戻したものと考えられる。

ＳＤ2559（第123図）

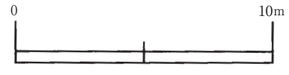
ＬＴ60～62、ＭＡ60～62グリッドのⅡ期生活面で検出した。平面形は長さ8.8m×幅2.72mを測り、直線的に延びる。検出面からの深さは1.19mである。底面は平坦で、東側の壁の傾きは下部が急で、上部は外反しながら緩やかである。堆積土は５層に分けられた。遺物は出土しなかった。



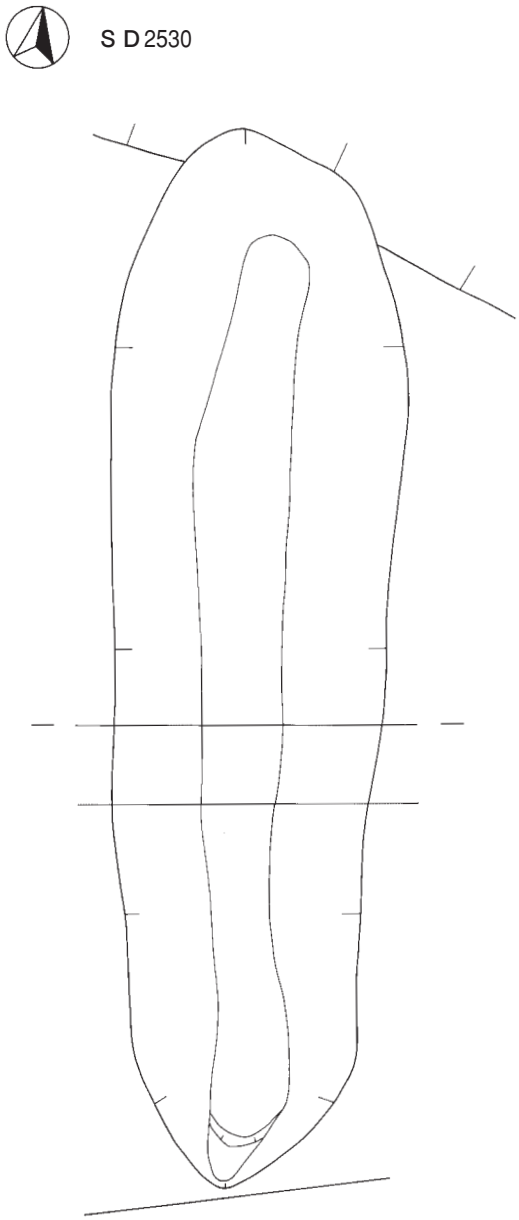
Ⅶ郭上層



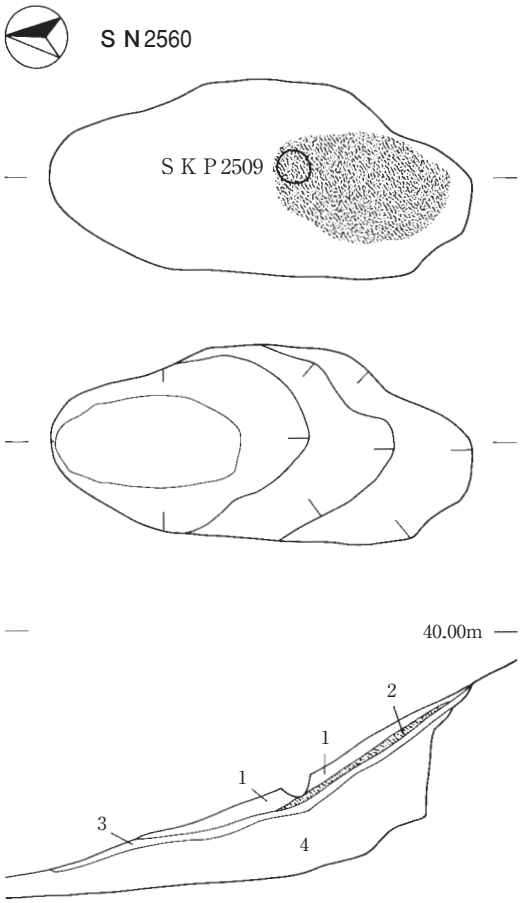
Ⅶ郭下層



第121図　Ⅶ郭遺構配置図

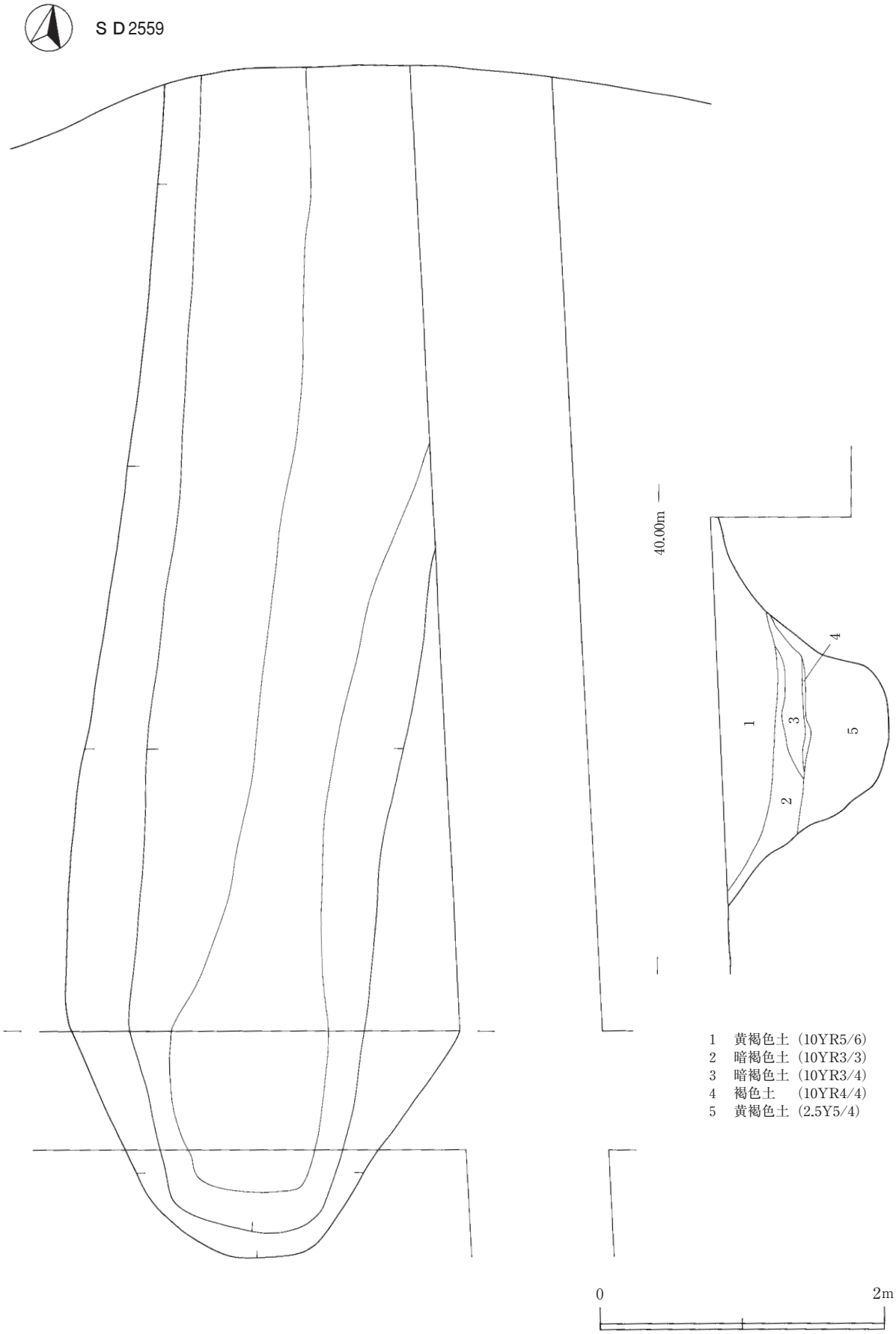


1　褐色土（10YR4/6）
2　褐色土（10YR4/4）
3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）



1　暗褐色土（10YR3/4）
2　赤褐色土（2.5YR4/8）
3　炭層
4　にぶい黄褐色土（10YR5/4）

第122図　溝跡（１）・焼土遺構


ＳＤ2559
40.00m
1
2
3
4
5
1　黄褐色土（10YR5/6）
2　暗褐色土（10YR3/3）
3　暗褐色土（10YR3/4）
4　褐色土　（10YR4/4）
5　黄褐色土（2.5Y5/4）
0
2m

第123図　溝跡（２）

８　Ⅷ郭の検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ227（第125図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＴ79～81、ＭＡ79～81、ＭＢ79～81グリッドで検出した。ＳＫＩ239・260と重複し、本遺構が最も新しい。規模は、桁行４間×梁行３間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ５）8.14m、梁行総長（Ｐ５～Ｐ14）6.30mである。柱掘形は一辺34～74cmの楕円形で、深さ32～92cmである。堆積土は色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列で、N―82°―Wの方向性がある建物跡である。堆積土はどの柱穴も１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。どの柱穴からも遺物は出土しなかった。

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ238（第126図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＡ80・81・82、ＭＢ81・82グリッドで検出した。ＳＫＰ271と重複し、本遺構が古い。西側が調査区域外に延伸するが検出できた範囲から長軸（北―南）3.24m×短軸（東―西）2.02mの隅丸方形と推定され、南側に長軸（北―南）1.35m×短軸（東―西）0.83mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する柱穴５基を検出した。柱穴も含めて堆積土は２層に分けたが大差はなく、人為的に埋め戻されたものと判断した。各ピットの大きさは径14～40cmで、深さは21～47cmである。遺物は鉄製品が４点、鉄滓が２点出土している。

ＳＫＩ239（第126図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＳ79・80、ＬＴ79・80グリッドで検出した。ＳＫＰ225・245・249・277と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北―南）2.55m×短軸（東―西）2.50mの隅丸方形を呈し、南側に長軸（北―南）0.82m×短軸（東―西）0.77mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する炭だまり１基と柱穴７基を検出した。炭だまりは残存状態が悪いが、長軸（北―南）0.66m×短軸（東―西）0.34mの楕円形を呈し、床面からの深さが0.18m。柱穴も含めて堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。各ピットの大きさは径13～66cmで、深さは12～25cmである。遺物は鉄製品が１点出土している。

ＳＫＩ240（第127図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＴ80・81、ＭＡ80・81グリッドで検出した。ＳＫＩ280、ＳＫＰ209と重複し、ＳＫＩ280より新しくＳＫＰ209より古い。平面形は長軸（北―南）2.82m×短軸（東―西）2.8mの隅丸方形を呈し、南側に長軸（東―西）0.77m×短軸（北―南）0.32mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.42mである。床面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する炭だまり１基と柱穴３基を検出した。炭だまりは長軸（北―南）1.08m×短軸（東―西）1.02mの楕円形を呈し、床面からの深さが0.17mである。炭だまりには被熱を受けた所がごくわずかだが検出でき、炭化物がラミナ状に混入する。柱穴も含めて堆積土は３層に分けたが、大差はなく人為的に埋め戻されたものと判断した。Ｐ２～Ｐ４は、対応する柱穴を検出できなかったが、壁際に配置されていることから主柱穴と考えられる。各ピットの大きさは径15～83cmで、深さ７～15cmである。遺物は鉄製品が３点、

中世陶器が１点出土している。

ＳＫＩ260（第128図）　ＩかⅡ期相当

ＭＡ78グリッドで検出した。ＳＫＰ266・344～346と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北―南）2.54m×短軸（東―西）2.43mの隅丸方形を呈し、北側に長軸（東―西）0.73m×短軸（北―南）0.42mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.58mである。床面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する炭だまり１基と柱穴５基を検出した。炭だまりは長軸（北―南）0.59m×短軸（東―西）0.5mの楕円形を呈し、床面からの深さが0.17m。柱穴も含めて堆積土は２層に分けたが大差はなく、人為的に埋め戻されたものと判断した。各ピットの大きさは径16～59cmで、深さ17～32cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ270（第128図）　ＩかⅡ期相当

ＭＡ・ＭＢ79グリッドで検出した。平面形は長軸（東―西）2.78m×短軸（北―南）2.34mの隅丸方形を呈し、西側に長軸（東―西）0.78m×短軸（北―南）0.52mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.25mである。床面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。付随する炭だまり１基を検出した。柱穴も含めた堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。ピットの大きさは径37～42cmで、深さ10cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ280（第127図）　ＩかⅡ期相当

ＬＴ79・80、ＭＡ80グリッドで検出した。ＳＫＩ240、ＳＫＰ241・283・288と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北―南）2.68m×短軸（東―西）2.3mの隅丸方形を呈し、北側に長軸（東―西）0.72m×短軸（北―南）0.62mの半楕円形に張り出した出入り口が付設される。検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。付随する炭だまり１基と柱穴２基を検出した。炭だまりは長軸（北東―南西）0.8m×短軸（北西―南東）0.56mの楕円形を呈し、床面からの深さは0.17m。柱穴も含めた堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。各ピットの大きさは径18～91cmで、深さ11～17cmである。遺物は出土しなかった。

（３）土坑

ＳＫ231（第129図）　ＩかⅡ期相当

ＬＳ79グリッドで検出した。ＳＫＰ199と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北―南）1.9m×短軸（東―西）1.6mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.24mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は染付片２点・灰釉陶器片６点・鉄製品１点、陶器が１点出土した。

ＳＫ242（第129図）　ＩかⅡ期相当

ＬＴ82・83、ＭＡ82・83グリッドで検出した。平面形は長軸（北西―南東）3.23m×短軸（北東―南西）2.44mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.34mである。底面はやや丸みを帯びて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は４層で、全て自然堆積と考えられる。遺物は青磁の口縁部が１点出土している。

ＳＫ464（第129図）　ＩかⅡ期相当

ＬＴ77グリッドで検出した。ＳＫＰ470と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.79

m×短軸（北西―南東）0.58mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.25mである。底面は平坦で、北側の壁の傾きは緩やかだが、他はオーバーハングしている。堆積土は２層で人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は出土しなかった。

ＳＫ480（第129図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＳ77グリッドで検出した。ＳＤ462と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）0.88m×短軸（北東―南西）0.75mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.37mである。底面は平坦で壁の傾きはやや急である。堆積土は２層で人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は出土しなかった。

（４）焼土遺構

ＳＮ217（第130図）　Ⅳ期相当

ＬＴ79グリッドで検出した。平面形は長軸（北―南）0.53m×短軸（東―西）0.34mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ218（第130図）　Ⅳ期相当

ＬＳ・ＬＴ81グリッドで検出した。平面形は長軸（北―南）0.49m×短軸（東―西）0.28mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ219（第130図）　Ⅳ期相当

ＬＳ81グリッドで検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.5m×短軸（北西―南東）0.38mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ233（第130図）　Ⅳ期相当

ＭＢ79グリッドで検出した。平面形は長軸（東―西）0.49m×短軸（北―南）0.37mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ234（第130図）　Ⅳ期相当

ＭＡ78グリッドで検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.54m×短軸（北西―南東）0.37mの楕円形範囲に暗暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ235（第130図）　Ⅳ期相当

ＬＴ79グリッドで検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.3m×短軸（北西―南東）0.16mで楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ236（第130図）　Ⅳ期相当

ＭＢ78グリッドで検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.42m×短軸（北西―南東）0.27mの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02mで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ237（第130図）　Ⅳ期相当

ＭＢ79グリッドで検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.4ｍ×短軸（北西―南東）0.25ｍの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

（５）溝跡

ＳＤ461（第130図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＴ・ＭＡ77グリッドで検出した。平面形は長さ5.1ｍ×幅0.32ｍを計り、弧を描きながら延びる。検出面からの深さは0.16ｍである。底面は丸みを帯びて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は出土しなかった。

ＳＤ462（第130図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ77グリッドで検出した。ＳＫ480と重複し、本遺構が新しい。西側が調査区外に延伸し、また東側は谷まで続くと思われたが安全を考慮したため掘り進めなかった。全てを検出できなかったが、検出した範囲で平面形は長さ19.92ｍ以上×幅0.48～1.28ｍを計り、弧を描きながら延び、東側は途中から二股に別れる。検出面からの深さは0.3ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は出土しなかった。

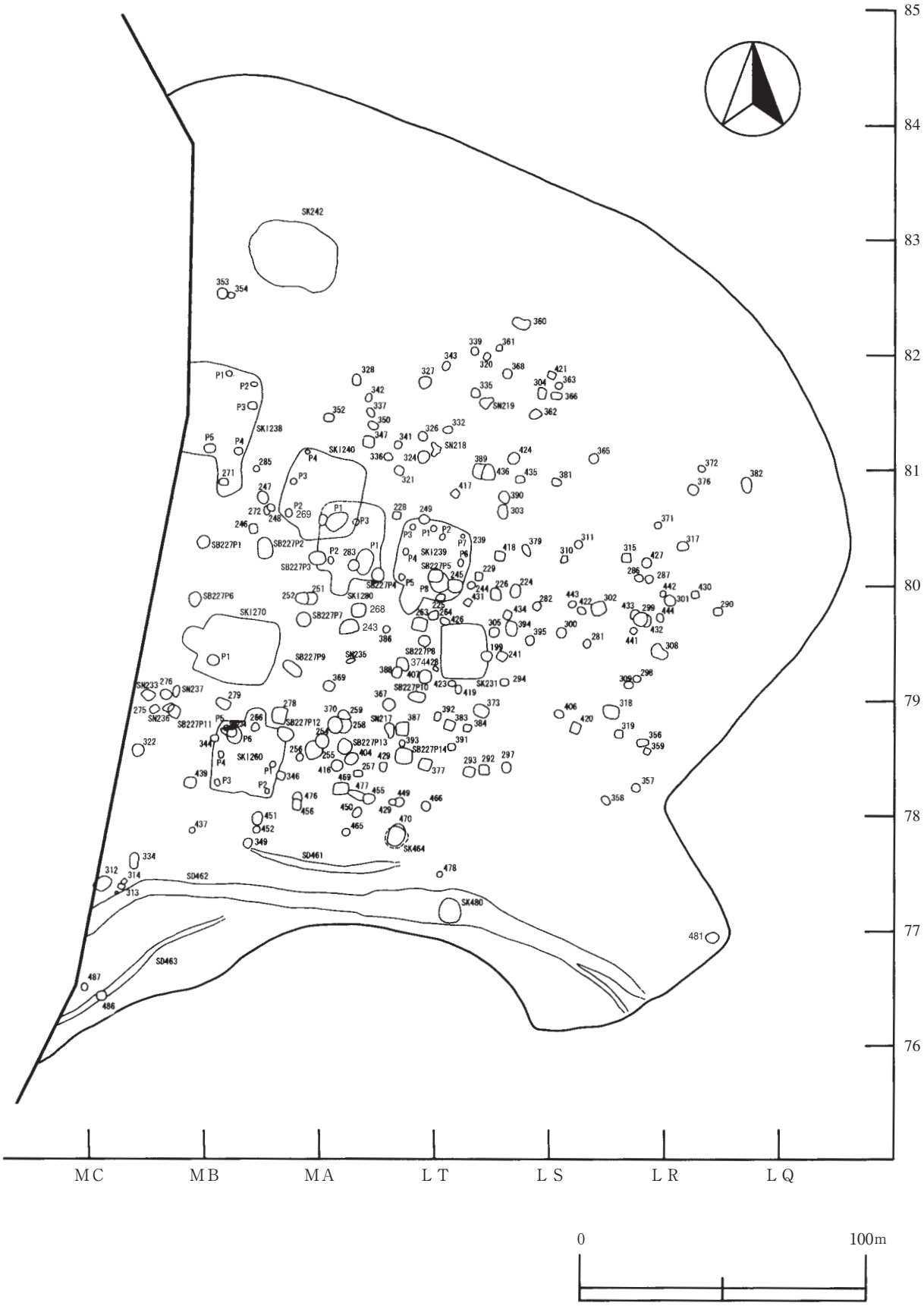
ＳＤ463（第130図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ77・78、ＭＣ77・78グリッドで検出した。ＳＫＰ486と重複し、本遺構が古い。西側が調査区外に延伸しているが、検出できた範囲の平面形は長さ6.16ｍ以上×幅0.28ｍを計り、直線的に延びる。検出面からの深さは0.15ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。遺物は出土しなかった。

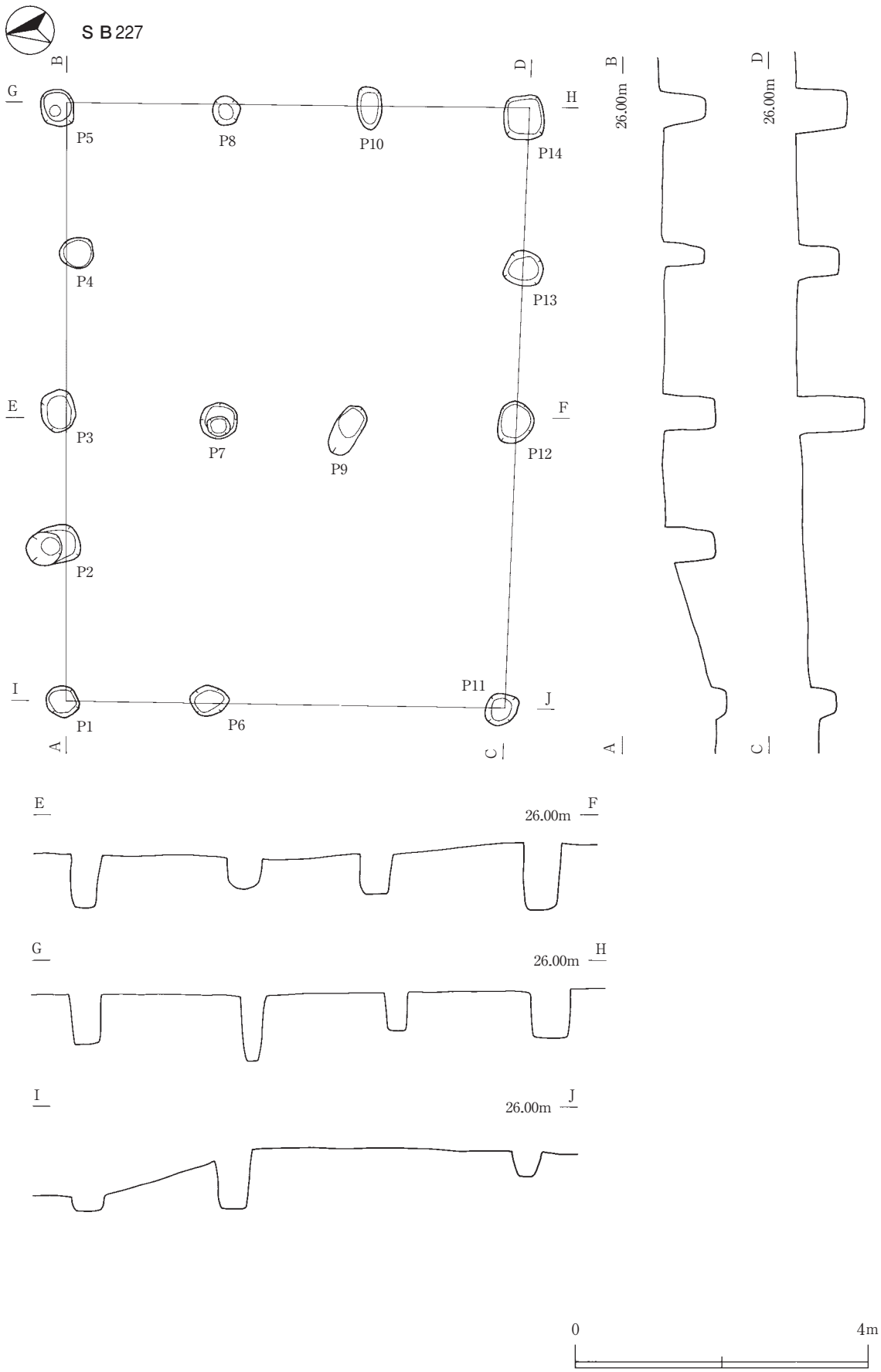
第13表　Ⅷ郭出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
131- 1	56- 8	LS81	陶器	珠洲系	擂鉢	(39.1)	—	—		
2	57- 4	LT82	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
3	5	MA80	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
4	1	MA79	磁器	青磁	碗	—	—	(5.3)	15ｃ	龍泉窯系
5	2	LR79	磁器	染付	皿	—	—	—	16ｃ前～中	花唐草文被熱　景徳鎮
6	3	SK231	陶器	瀬戸・美濃	皿	(11.3)	2.3	(5.9)	16Ｃ前	
7	6	SKI240	金属	—	小札	7.2	4.1	0.3		重さ11.0ｇ
8	7	SK231	金属	—	刀子	4.9	1.8	2.1		重さ6.0ｇ
9	8	SK231	金属	—	刀子	3.8	1.2	0.4		重さ3.5ｇ
10	9	SK231	金属	—	刀子	5.8	1.4	0.5		重さ3.6ｇ
11	—	LT89	陶器	須恵器	坏	(13.7)	—	—		

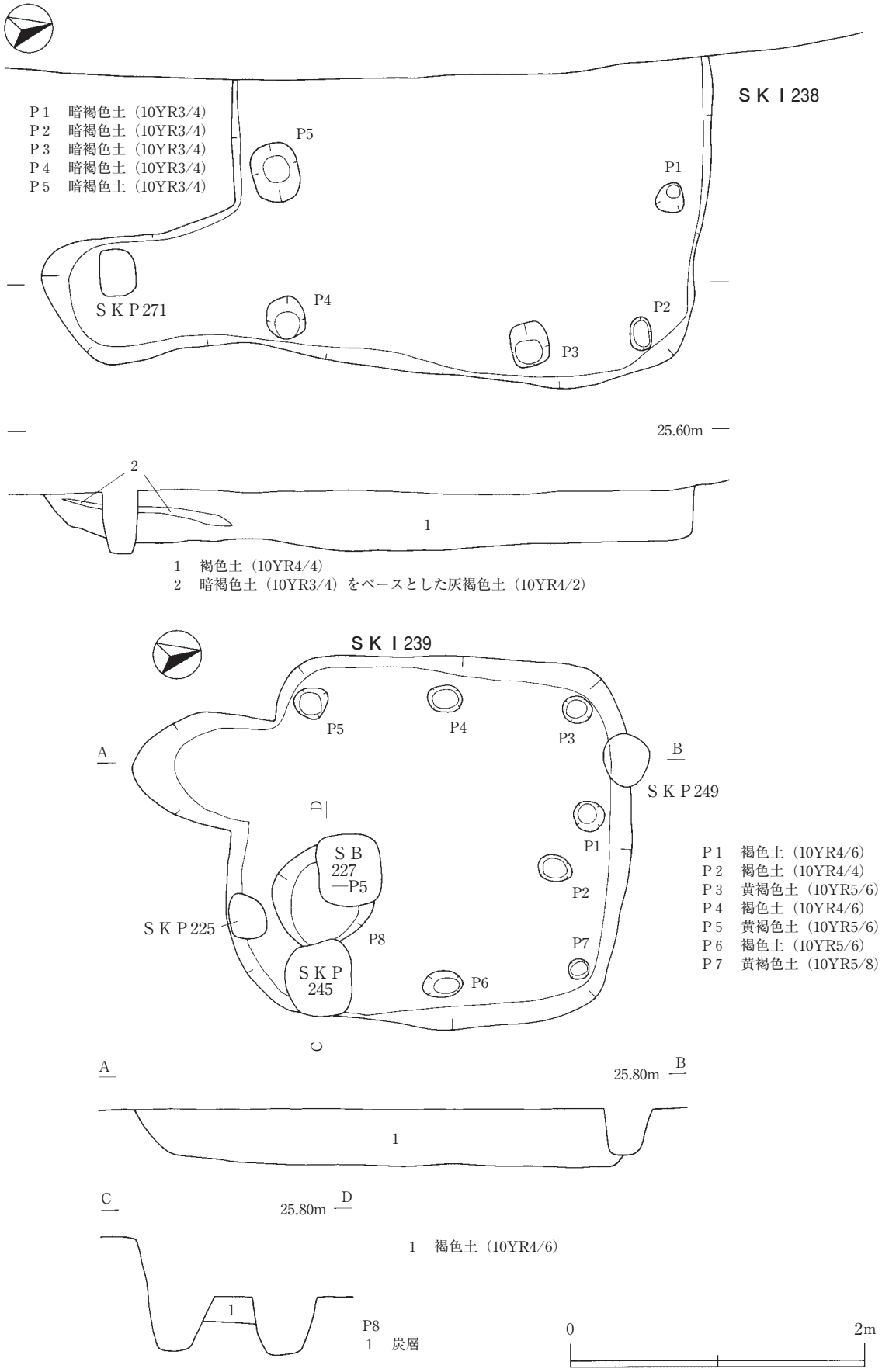
※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
　　なお、（　）内の数値は推定値である。



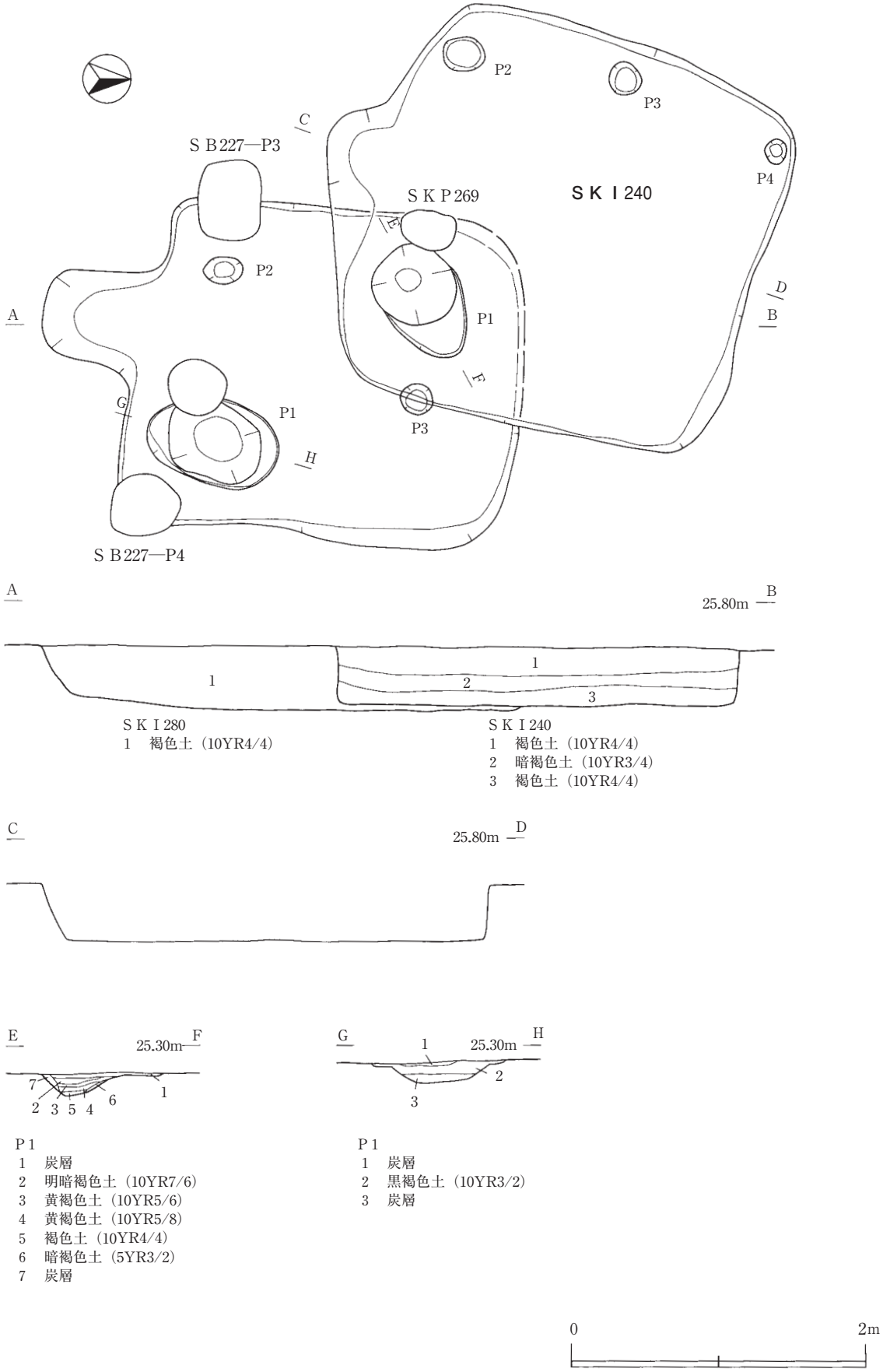
第124図　Ⅷ郭遺構配置図



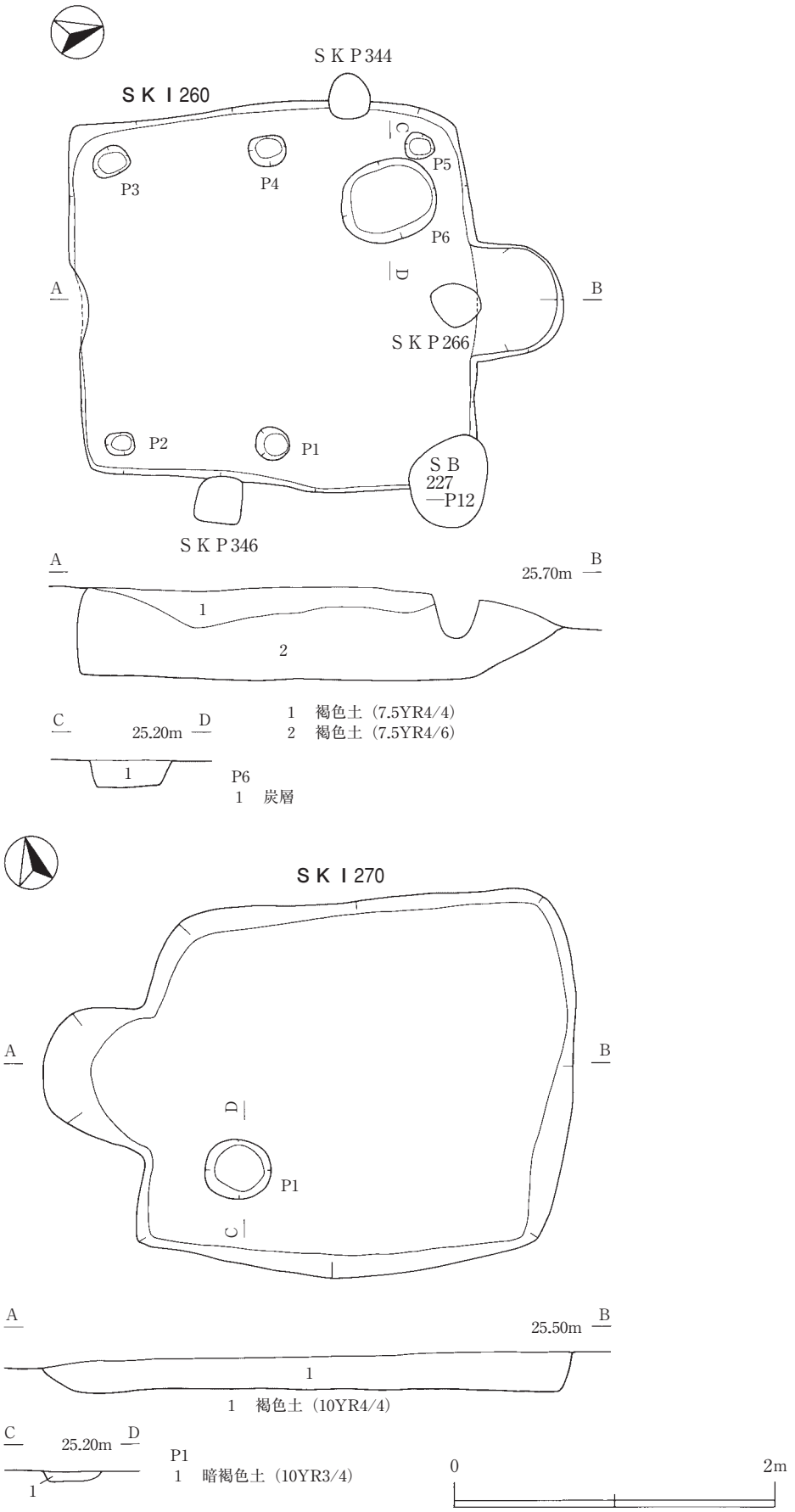
第125図　堀立柱建物跡



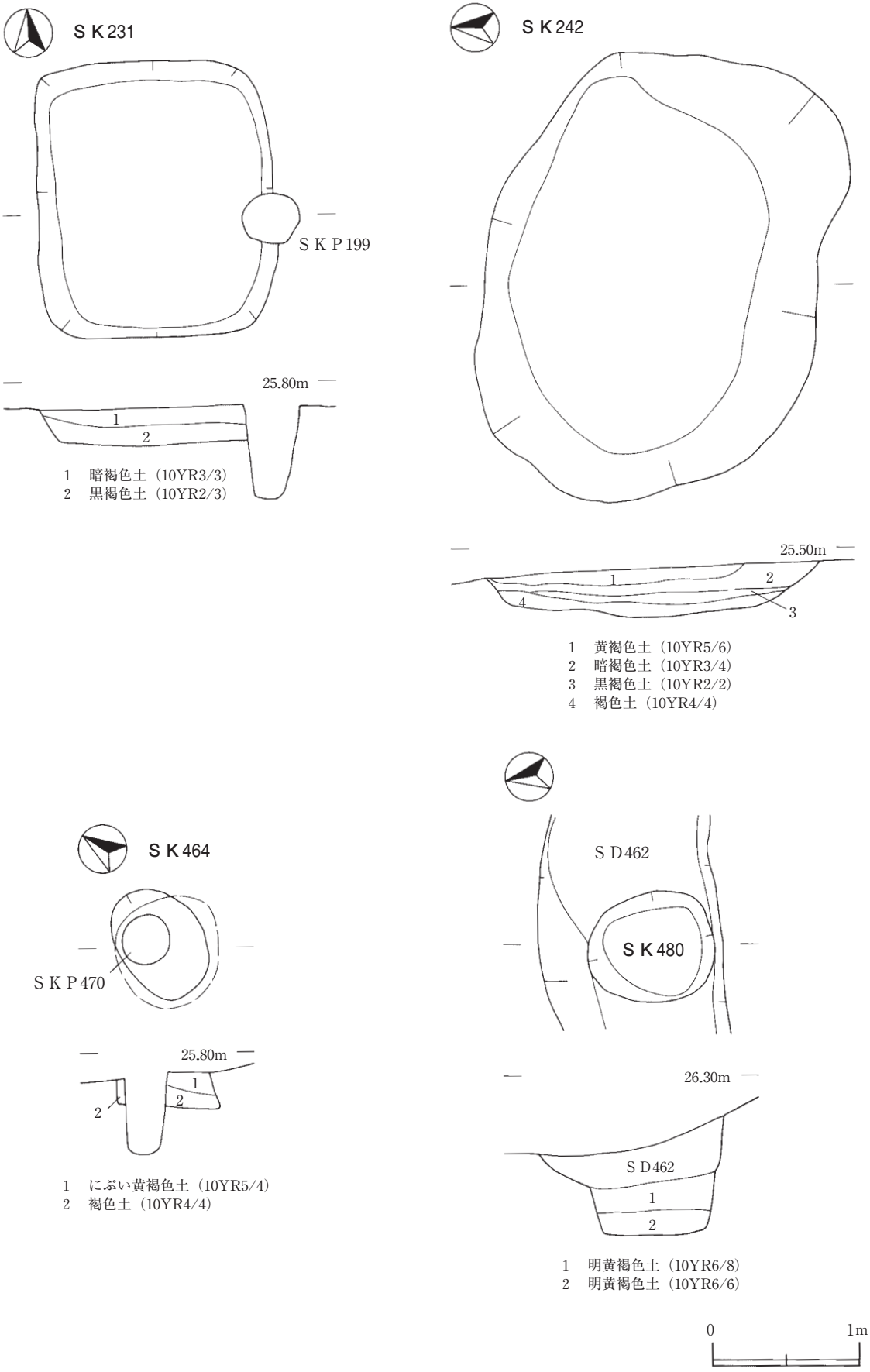
第126図　竪穴状遺構（１）



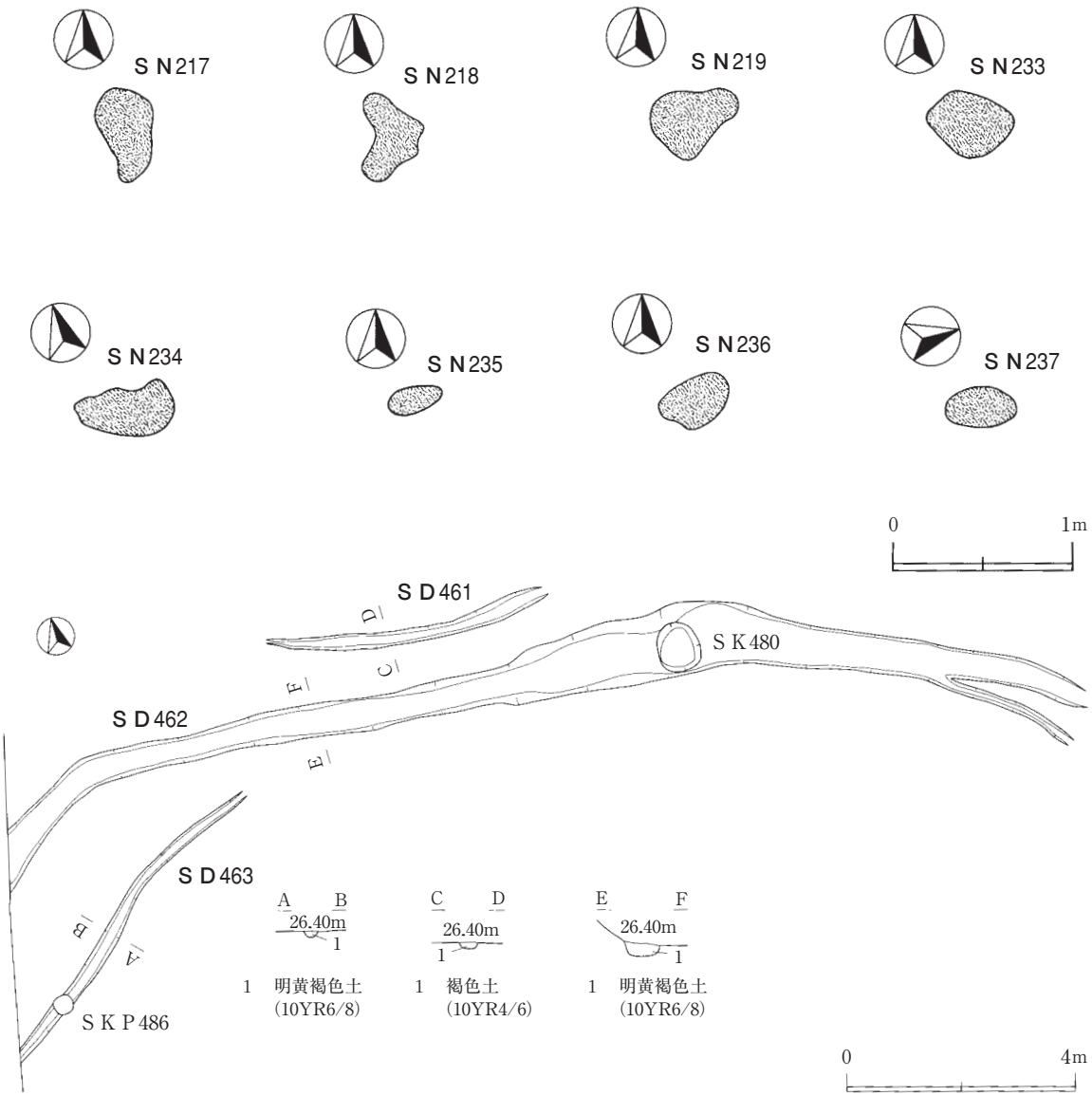
第127図　竪穴状遺構（２）



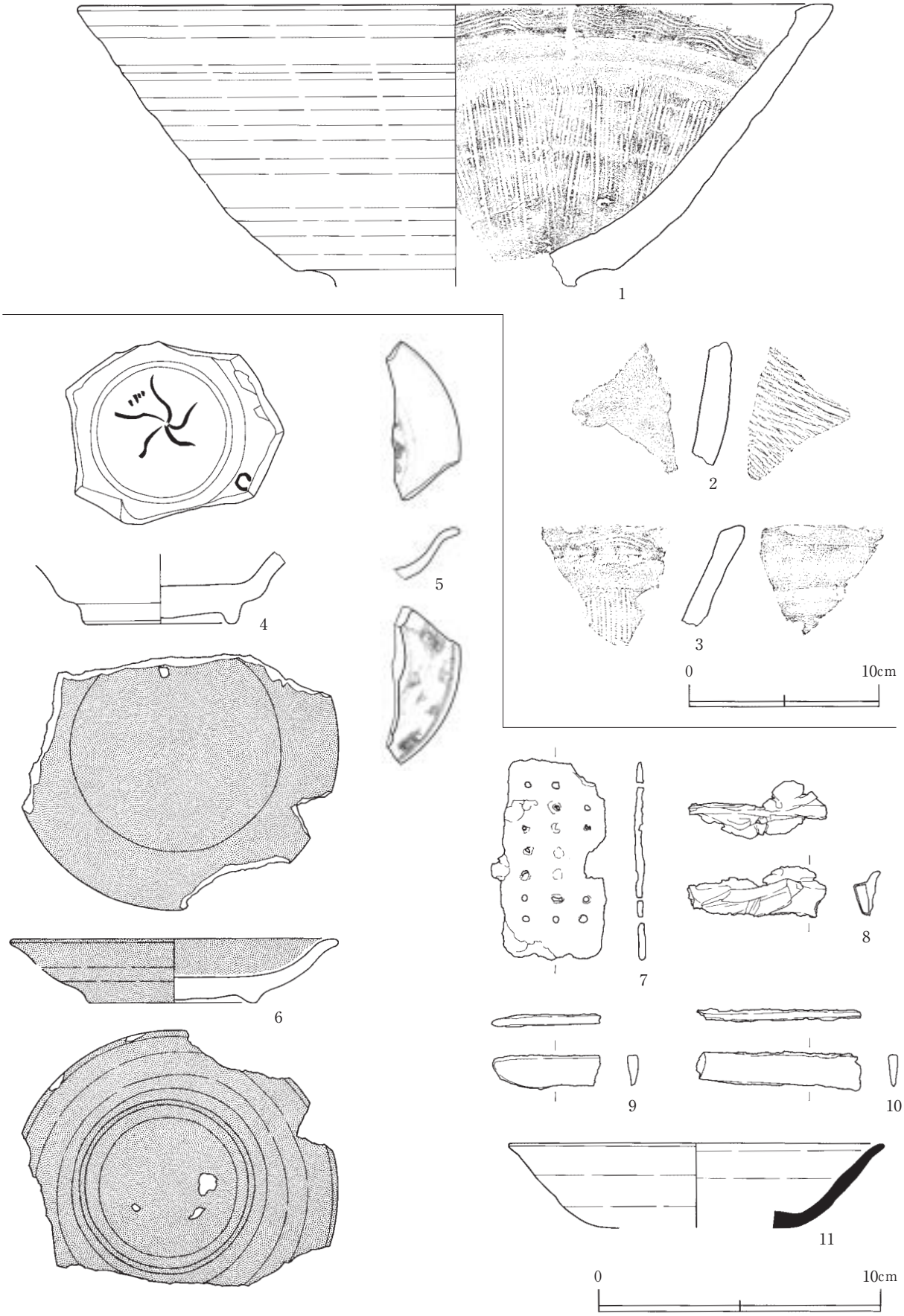
第128図　竪穴状遺構（３）


ＳＫ231
ＳＫＰ199
25.80m
1
2
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　黒褐色土（10YR2/3）
ＳＫ242
25.50m
1
2
3
4
1　黄褐色土（10YR5/6）
2　暗褐色土（10YR3/4）
3　黒褐色土（10YR2/2）
4　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ464
ＳＫＰ470
25.80m
1
2
2
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
2　褐色土（10YR4/4）
ＳＤ462
ＳＫ480
26.30m
ＳＤ462
1
2
1　明黄褐色土（10YR6/8）
2　明黄褐色土（10YR6/6）
0
1m

第129図　土坑



第130図　焼土遺構・溝跡



第131図　Ⅷ郭出土遺物

９　Ⅸ郭の検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ4003（第133図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＰ54グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ３～Ｐ４）2.31m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ３）2.20mである。柱掘形は径0.25～0.41mの楕円形を呈し、深さは0.21～0.44mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、南側柱列でＮ―85°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ4005（第134図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＮ53・54、ＬＯ53・54、ＬＰ53・54グリッドの地山面で検出した。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）5.41m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ４）3.01mである。柱掘形は径0.22～0.39mの楕円形を呈し、深さは0.24～0.34mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でＮ―88°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ4012（第135図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＮ・ＬＯ53グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）2.72m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ２）2.68mである。柱掘形は径0.26～0.34mの楕円形を呈し、深さは0.18～0.36mである。堆積土は色土の１層であり、柱痕は認められなかった。堆積土は褐色土の１層で、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でＮ―25°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ4013（第136図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＯ53・54、ＬＰ53・54グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ２）2.18m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ３）2.17mである。柱掘形は径0.25～0.38mの楕円形を呈し、深さは0.36～0.51mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でＮ―２°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ4023（第137図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＯ54・55、ＬＰ55グリッドの地山面で検出した。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ２）3.86m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ５）2.60mである。柱掘形は径0.29～0.42mの円形で、深さ0.33～0.49mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、東側柱列でＮ―33°―Ｗである。遺物は出土しなかった。

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ4087（第138図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＮ56・57、ＬＯ56・57グリッドの地山面で検出した。遺構の東側が調査区外にかかっているため、全容は把握できなかったが、検出した範囲で平面形は、長軸（東―西）3.53m×短軸（北―南）1.36mで、北側が開口するコの字型の長方形を呈するものと推定される。最も深い南側で検出面からの深さは、0.49mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。西寄りの南壁下の底面で柱穴を２基（Ｐ１・Ｐ２）検出した。各柱穴の大きさは径0.2m～0.25m、深さ0.17～0.56mである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ4088（第138図）　ＩかⅡ期相当

ＬＯ57・58グリッドの地山面で検出した。遺構の東側が調査区外にかかっているため、全容は把握できなかっが、平面形は北側が開口するコの字型の長方形を呈するものと推定される。検出した範囲の長軸（東―西）2.16ｍ×短軸（北―南）1.09ｍで、最も深い南側で検出面からの深さは0.35ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。底面で北西―南東を向く溝１条を検出した。検出した範囲で長さ2.37ｍ、最大幅0.4ｍで、深さは0.08ｍである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（３）焼土遺構

ＳＮ4017（第138図）　Ⅳ期相当

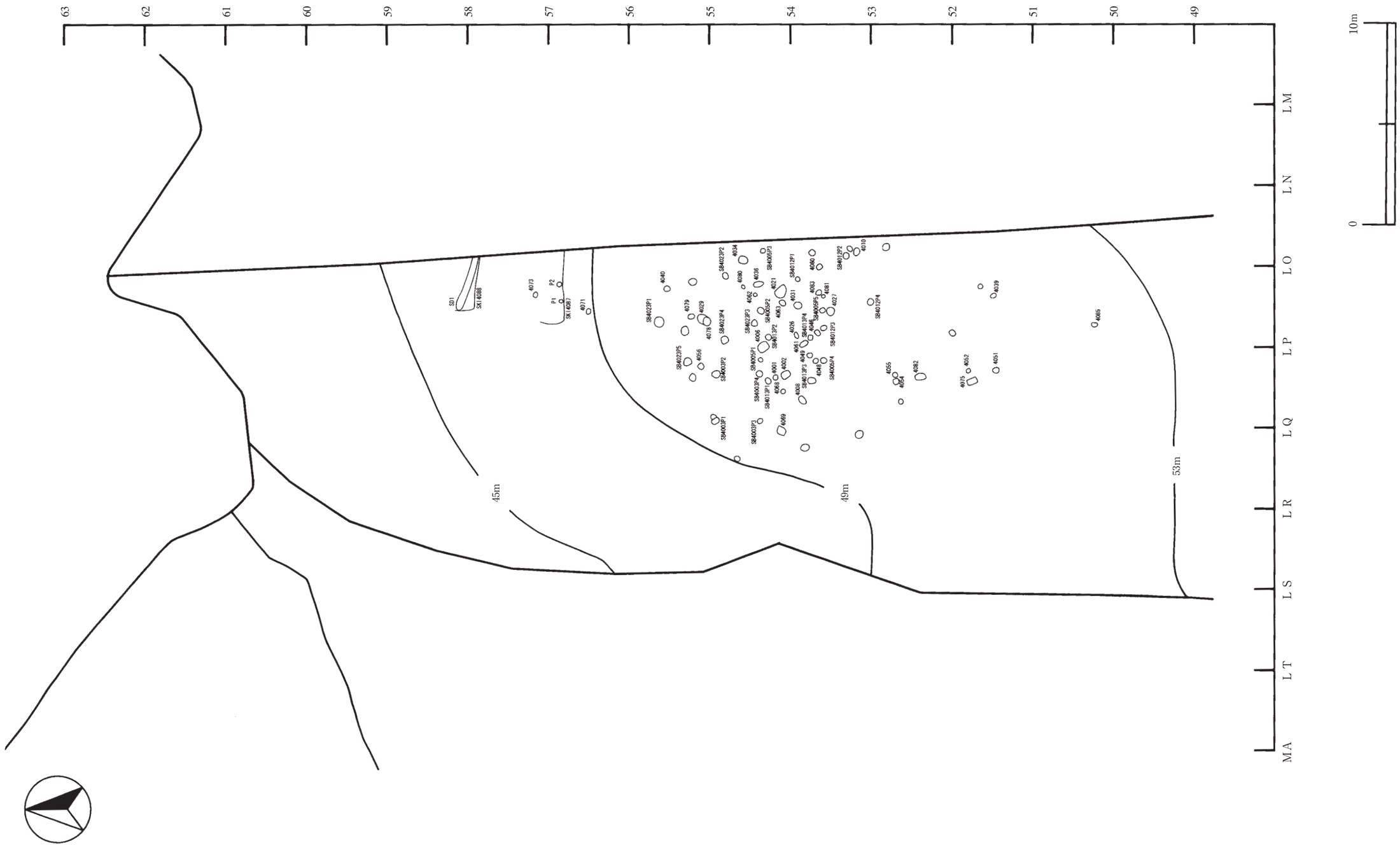
ＬＰ53グリッドの漸移層下位で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.27ｍ×短軸（北東―南西）0.26ｍの円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ4018（第138図）　Ⅳ期相当

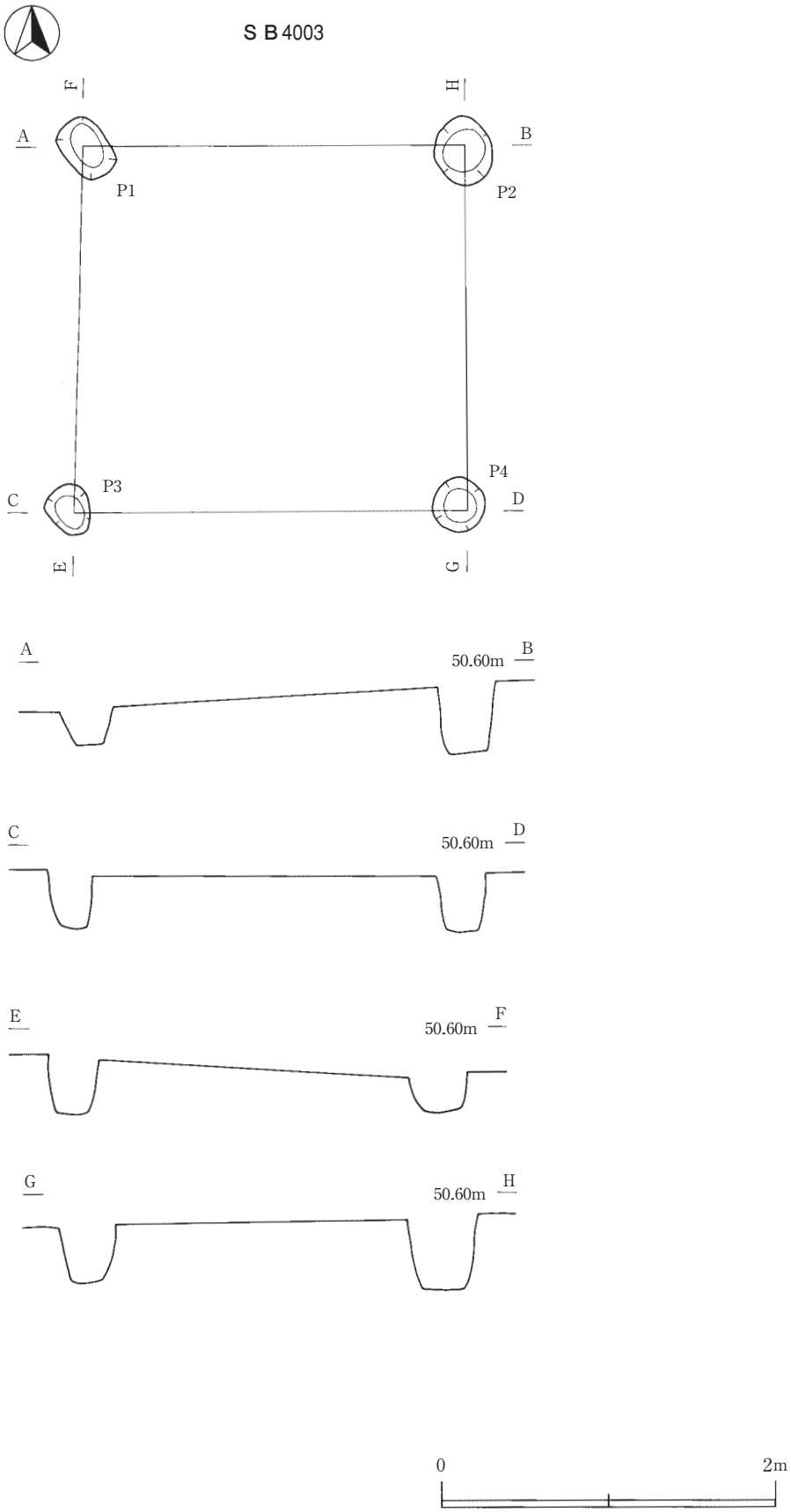
ＬＯ54グリッドの漸移層下位で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.58ｍ×短軸（北東―南西）0.42ｍの楕円形範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.04ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ4037（第138図）　Ⅳ期相当

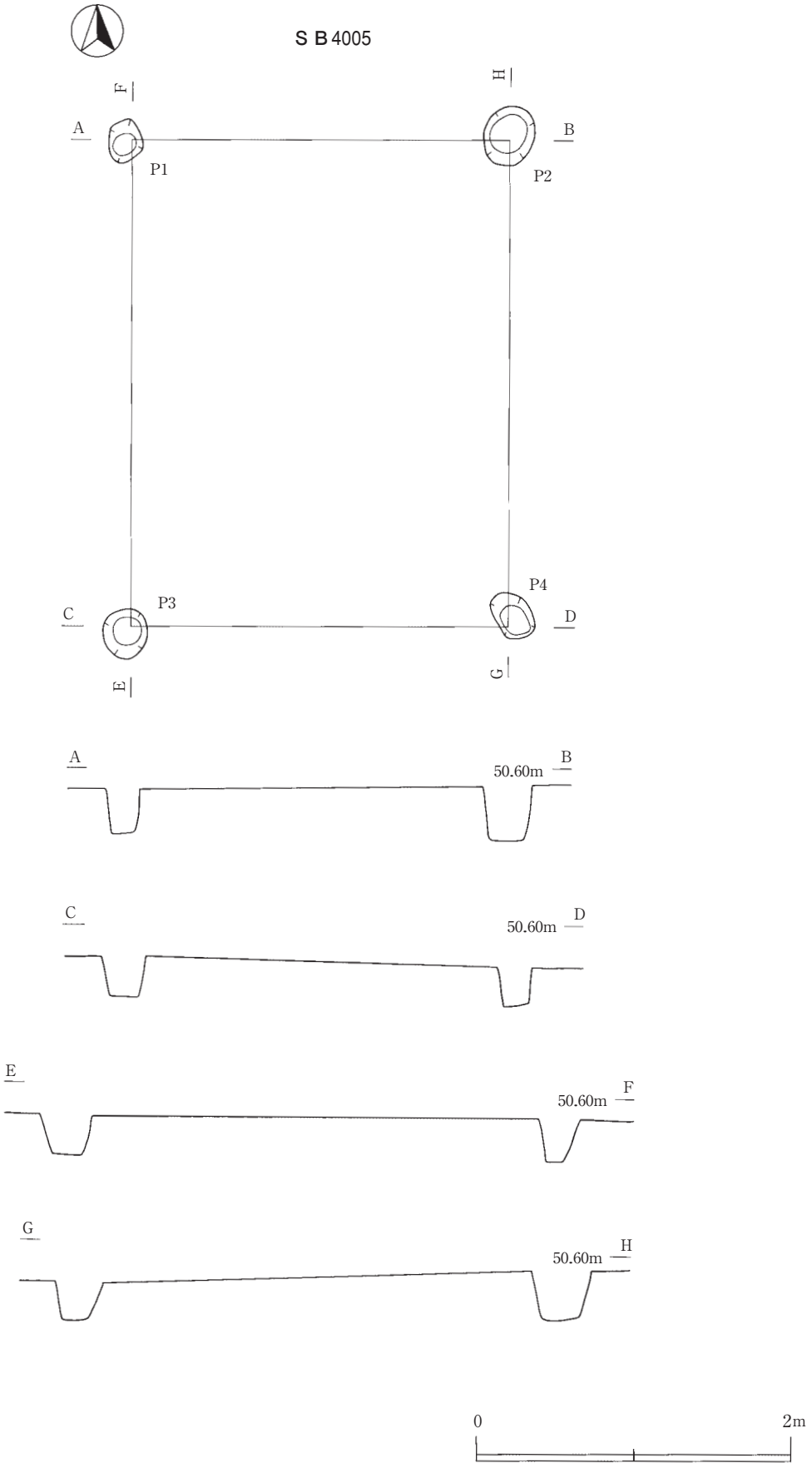
ＬＯ55グリッドの漸移層下位で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.35ｍ×短軸（北東―南西）0.31ｍの円形範囲に赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.07ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。



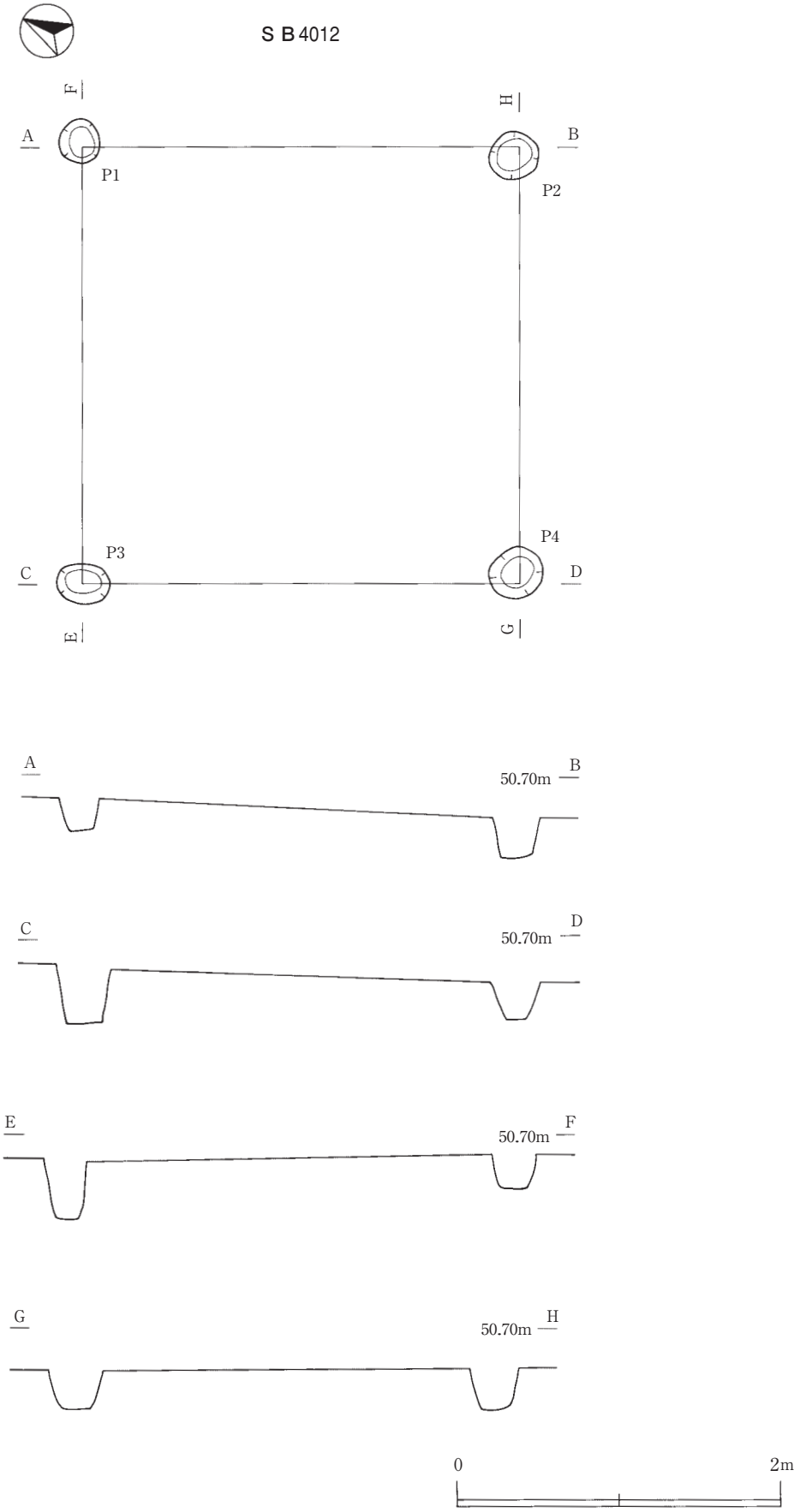
第132図　Ⅸ郭遺構配置図



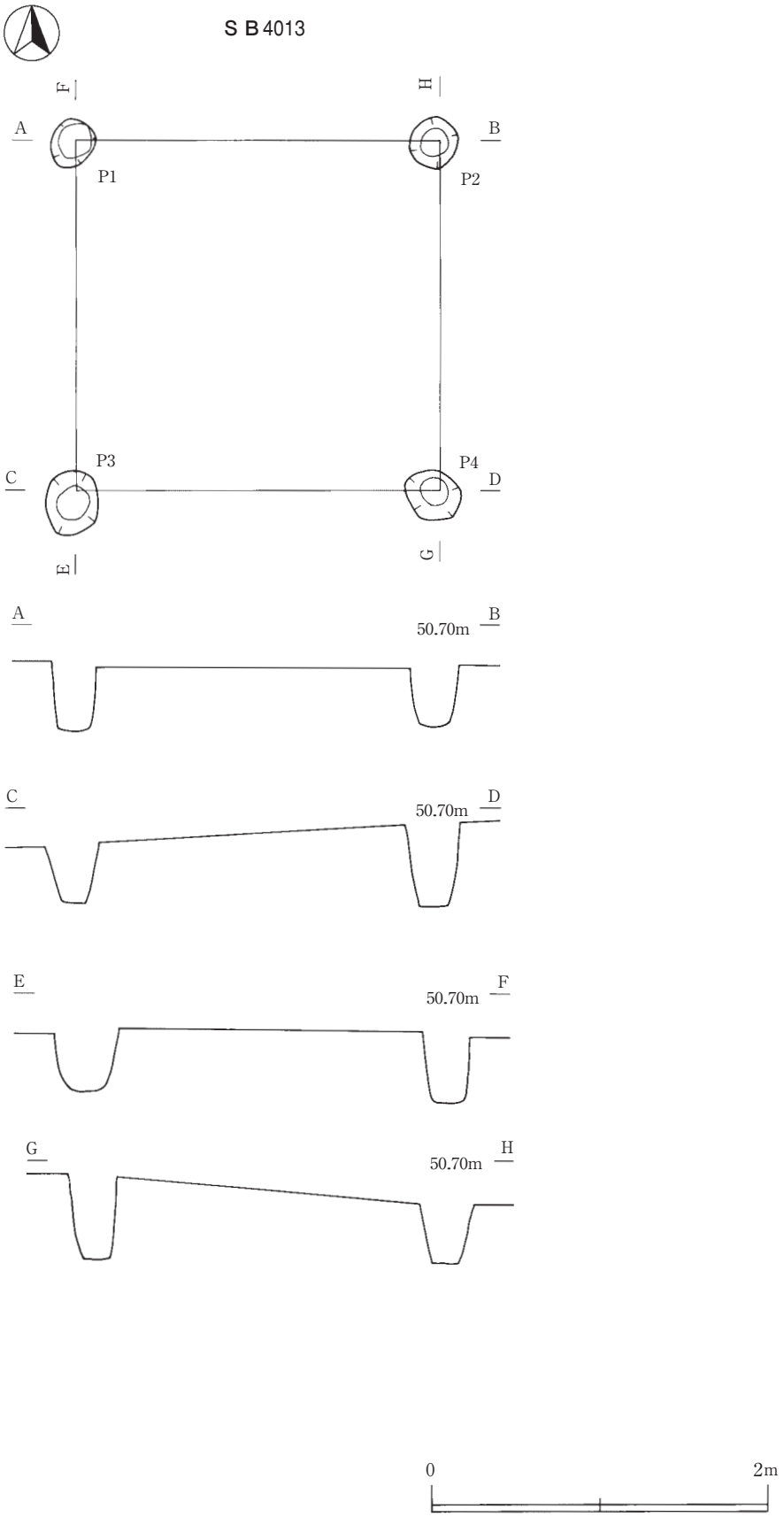
第133図　掘立柱建物跡（１）



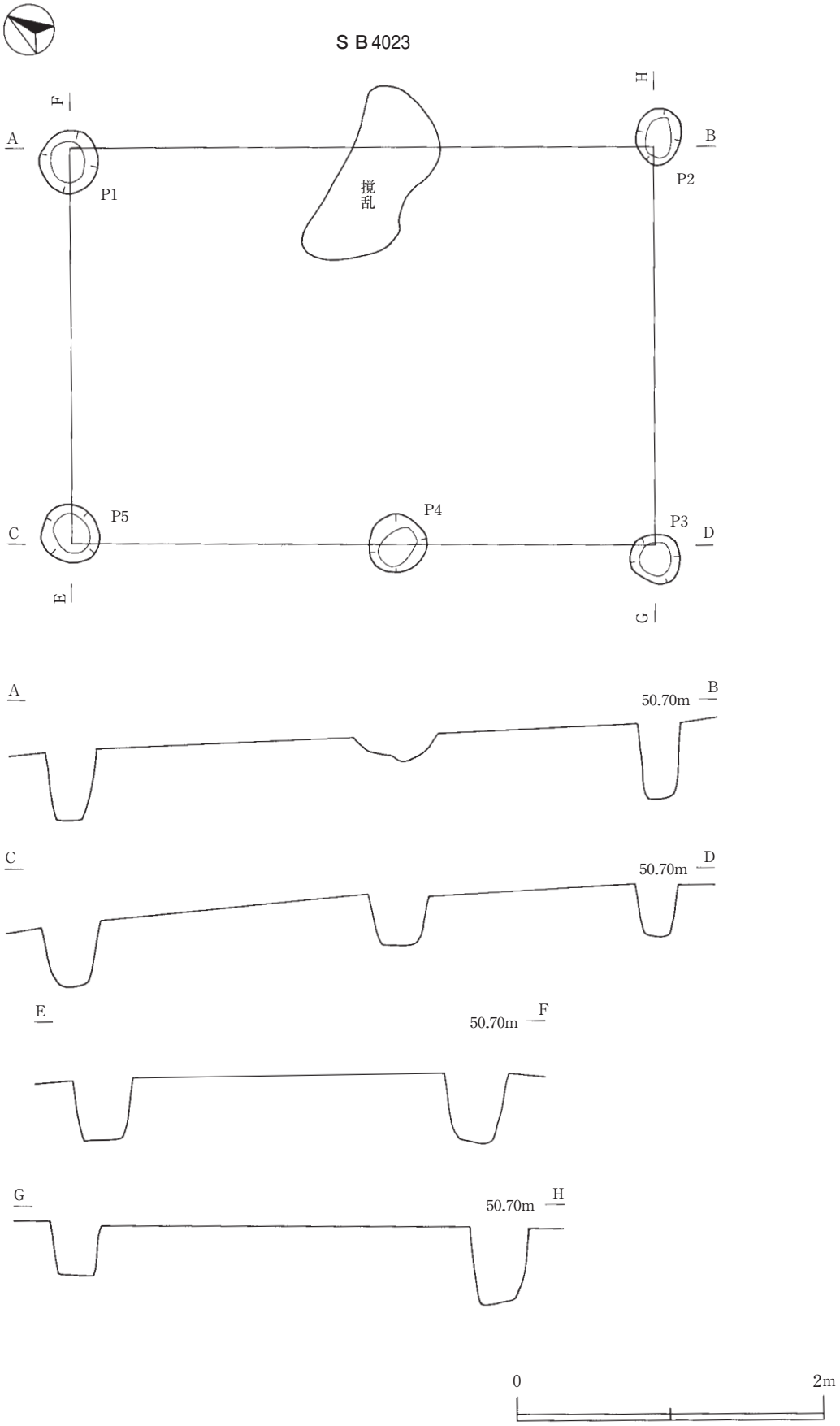
第134図　掘立柱建物跡（２）



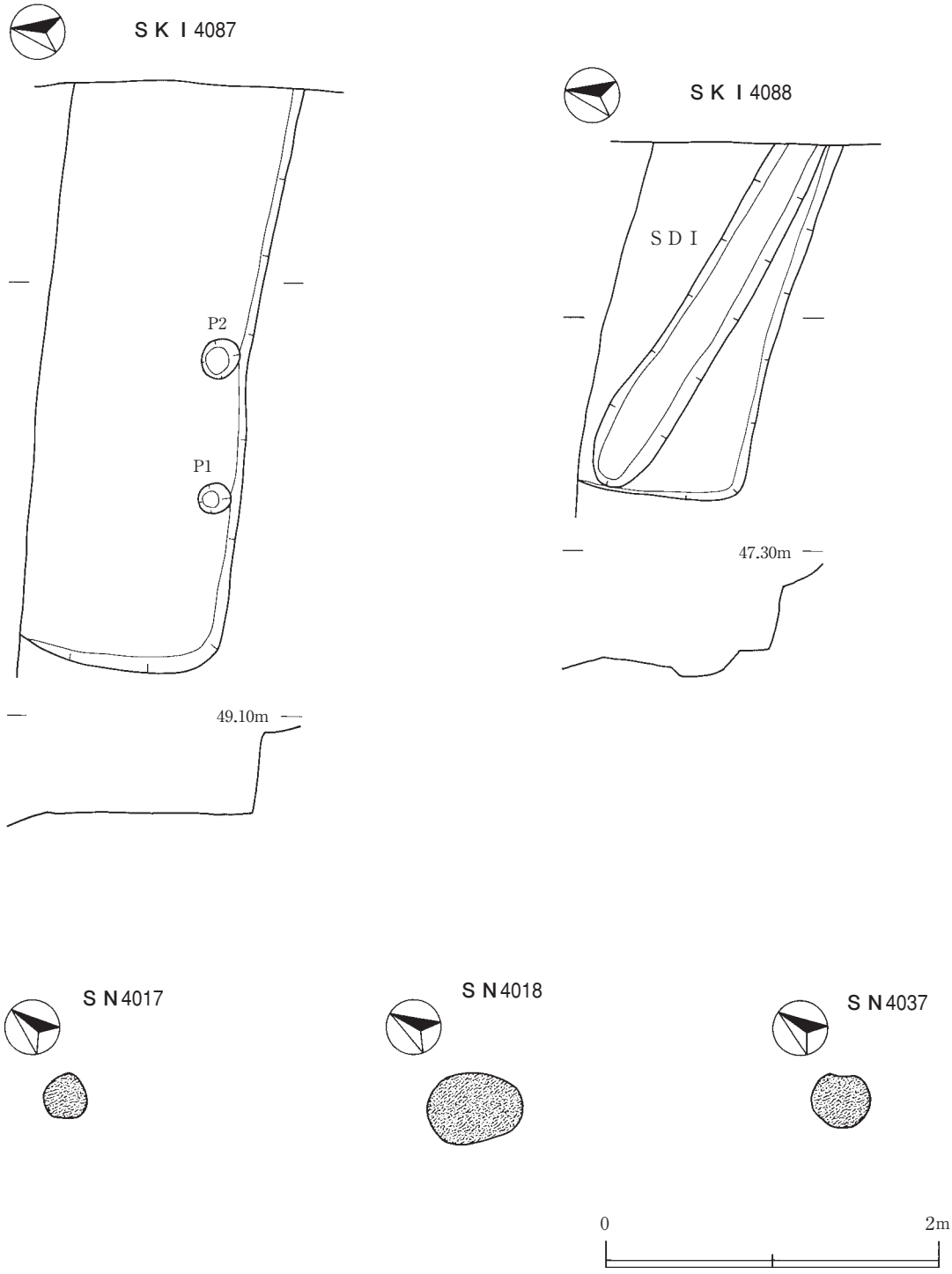
第135図　掘立柱建物跡（３）



第136図　掘立柱建物跡（４）



第137図　掘立柱建物跡（５）



第138図　竪穴状遺構・焼土遺構

第14表　Ⅸ郭出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
139- 1	57-10	LQ54	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—	15ｃ	
2	11	SKP4036	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、Ａ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径を示す。

第139図　Ⅸ郭出土遺物

10　Ｘ郭の検出遺構と出土遺物

（１）竪穴状遺構

ＳＫＩ513（第141図）　Ⅱ期相当

ＭＬ25・26、ＭＭ25・26、ＭＮ25グリッドの地山面で検出した。ＳＤ502と重複し、本遺構が新しい。南西側は近年の攪乱によって不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。検出した範囲平面形は、長軸（北東―南西）6.2m×短軸（北西―南東）2.02m、検出面からの深さ0.63mである。底面は南西方向に緩やかに傾斜しているおり、南東側が開口している。壁の傾きは垂直である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

（２）土坑

ＳＫ509（第141図）　Ⅱ期相当

ＭＮ・ＭＯ22グリッドの地山面で検出した。ＳＤ503、ＳＫＰ510と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北―南）1.19m×短軸（東―西）0.84mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.23mである。底面は平坦で、北西寄りに赤褐色の焼土範囲が円形に広がり、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、下層には炭が充填されていた。上層は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ512（第141図）　Ⅱ期相当

ＭＬ25グリッドの地山面で検出した。ＳＤ502と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）0.94m×短軸（北東―南西）0.84mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ0.17mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（３）溝跡・空堀

①溝跡

ＳＤ501（第143図）　Ⅲ期相当

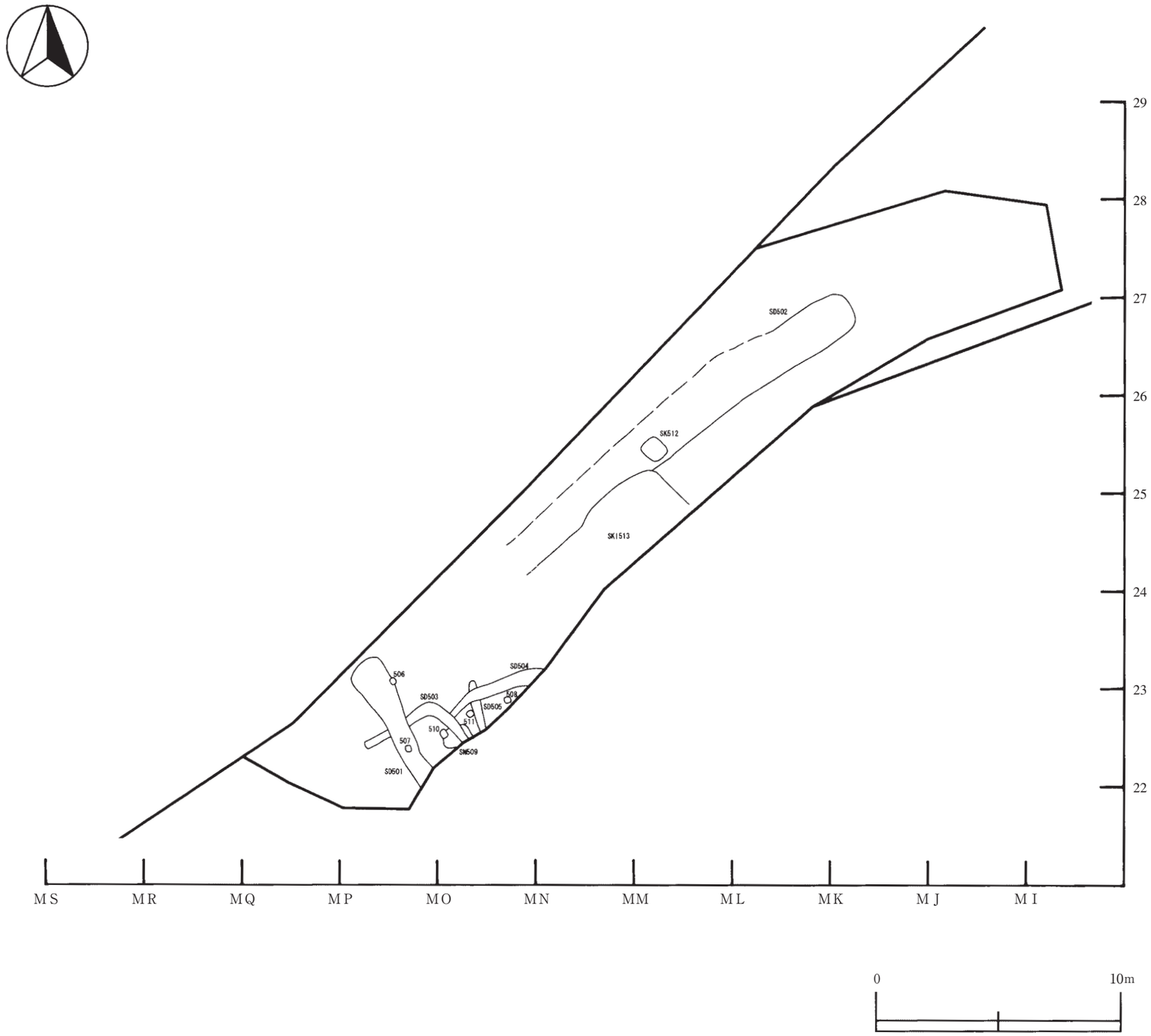
ＭＯ21・22・23グリッドの地山面で検出した。ＳＤ503、ＳＫＰ506・507と重複し、本遺構が最も新しい。直線的に延びる溝で、長さ5.35m、幅1.42m、検出面からの深さ0.2mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は３層に分けられ、北側の一部で薄い炭化物層が見られた。遺物は青磁２点が出土した。

ＳＤ503（第143図）　Ⅱ期相当

ＭＮ・ＭＯ22グリッドの地山面で検出した。ＳＤ501、ＳＫ509と重複し、本遺構はＳＫ509より新しく、ＳＤ501より古い。Ｌ字状を呈する溝で、長さ5.17m、幅0.45m、検出面からの深さ0.22mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は珠洲系陶器４点（第144図３・５・７・10）が出土した。

ＳＤ504（第143図）　Ⅱ期相当

ＭＮ22・23グリッドの地山面で検出した。ＳＤ503・505と重複し、本遺構はＳＤ505より新しく、ＳＤ503より古い。東側が調査区外へ延伸するため、全体を知ることは出来なかったが、検出した範囲で長さ3.99m、幅0.52m、検出面からの深さ0.12mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やか



第140図　Ｘ郭遺構配置図

である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

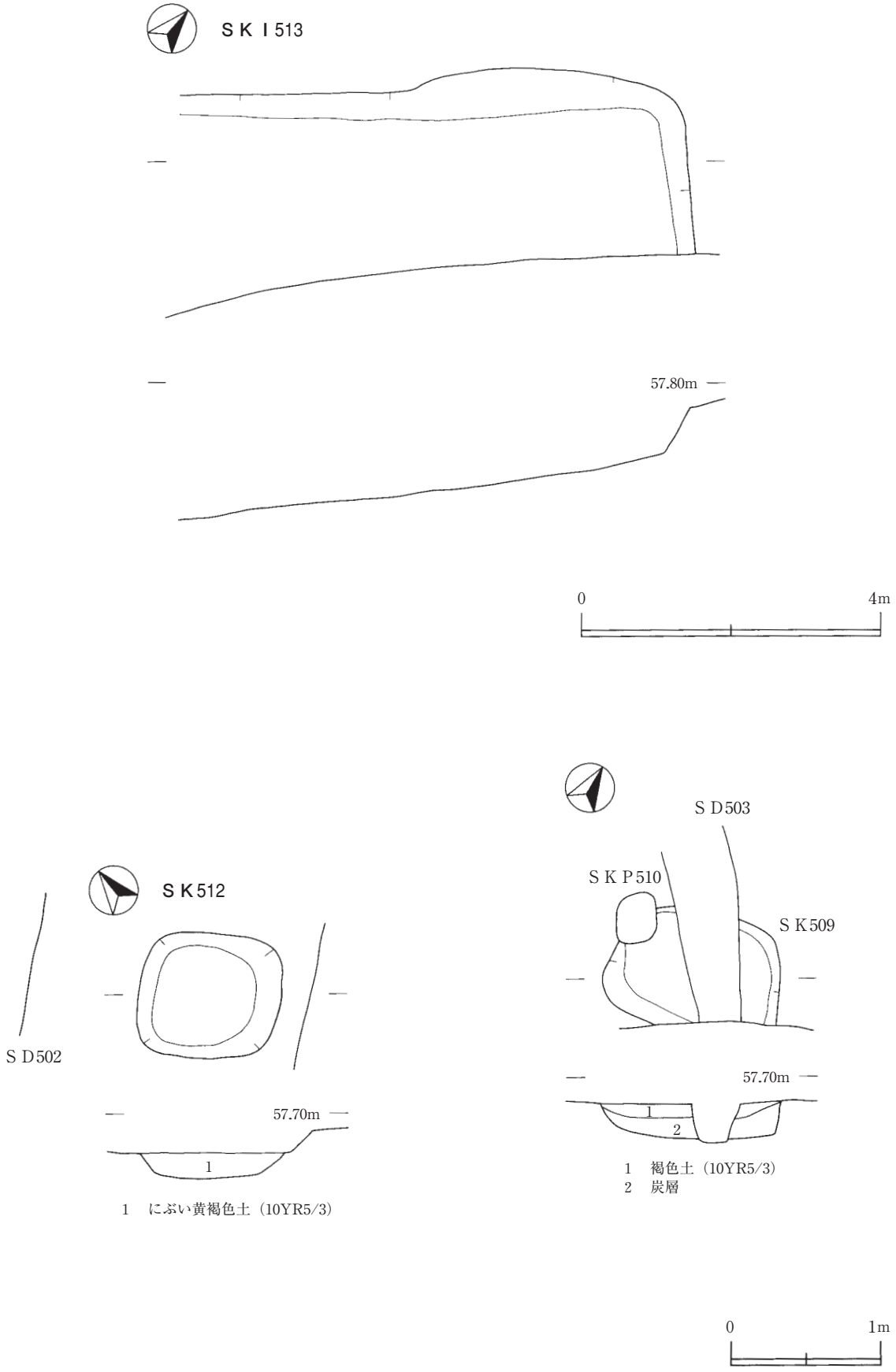
ＳＤ505（第143図）　Ⅱ期相当

ＭＮ22グリッドの地山面で検出した。ＳＤ504と重複し、本遺構が古い。直線的に延びる溝で、長さ2.15ｍ、幅0.38ｍ、検出面からの深さ0.06ｍである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

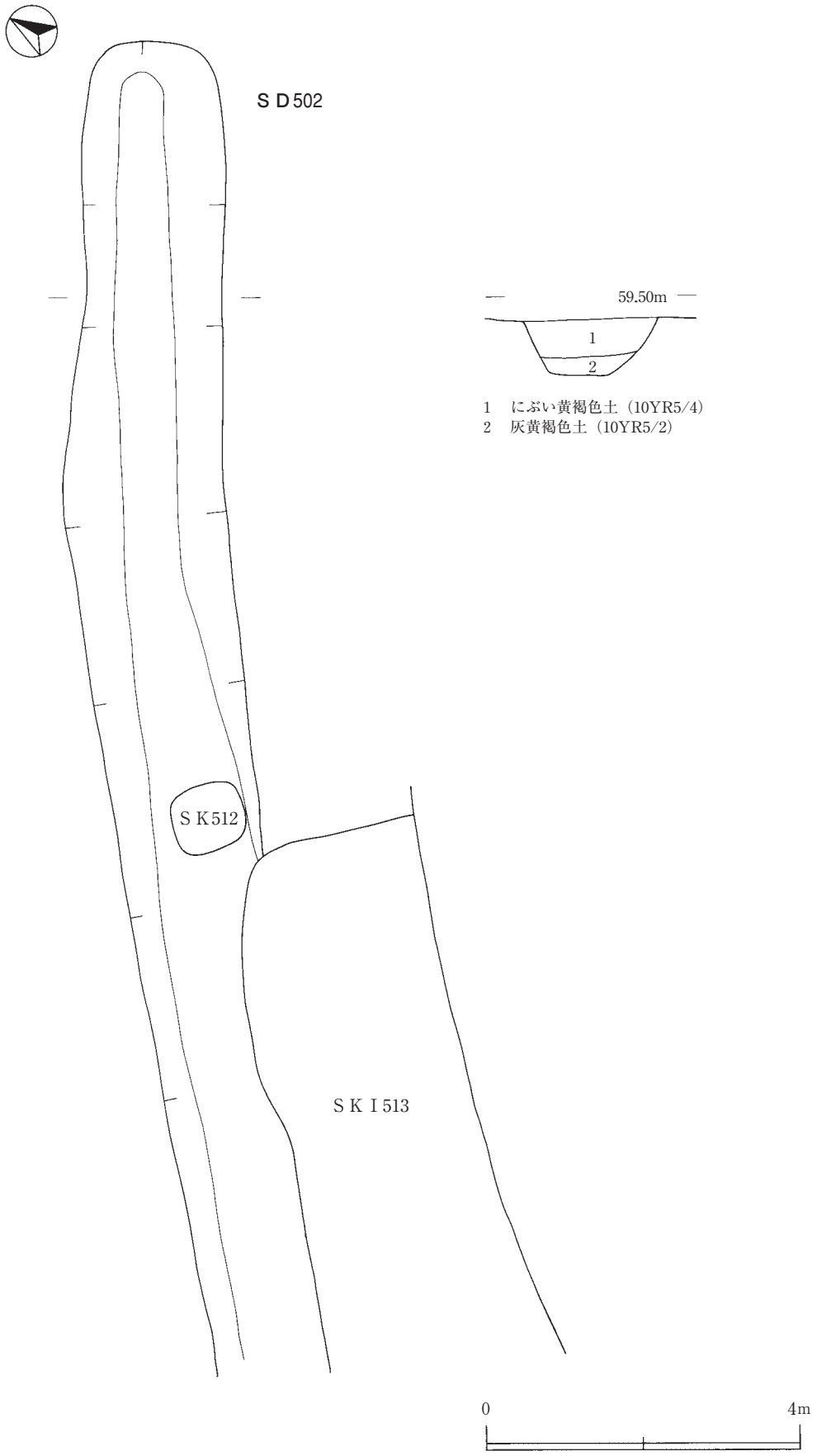
②空堀

ＳＤ502（第142図）　Ⅲ期相当

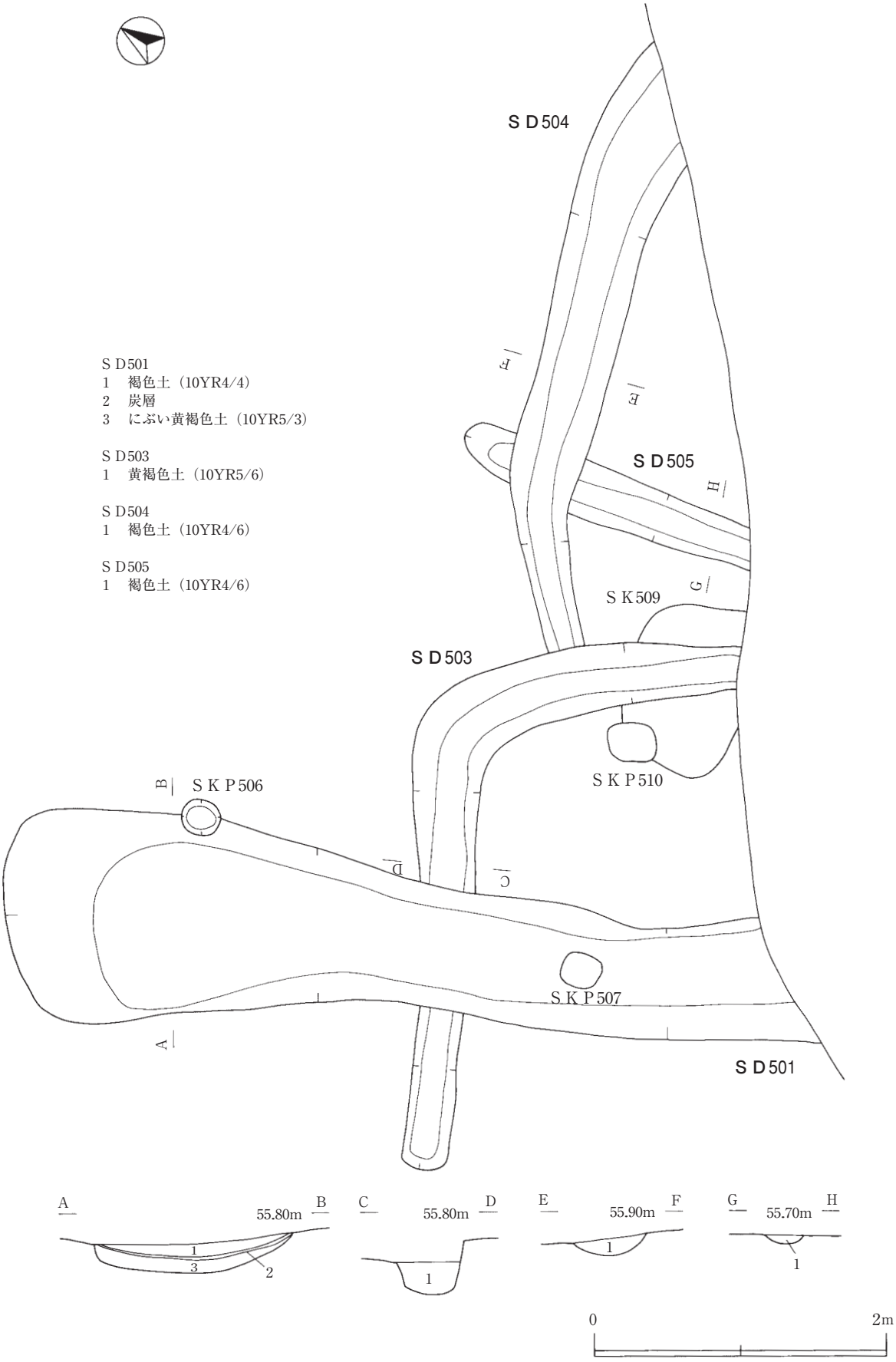
ＭＪ25・26、ＭＫ25・26、ＭＬ25・26、ＭＭ25・26、ＭＮ24グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ513、ＳＫ512と重複し、本遺構が新しい。Ⅳ郭南東側斜面下の裾を巡るように概ね北東―南西方向に延びる空堀である。この方向性からＥ区で検出したＳＤ3507と同一の空堀の可能性がある。北東側が大きく攪乱を受けているが、検出した範囲で全長（北東―南西）17.1ｍ×最大幅（北西―南東）1.72ｍ、検出面からの深さは0.7ｍである。底面は平坦で南西に行くに従い標高を下げる。壁の傾きは急であり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に分けられ、自然堆積と考えられる。なお、湧水点の近くにあることからグライ化している。遺物は珠洲系陶器１点（第144図４）が出土した。



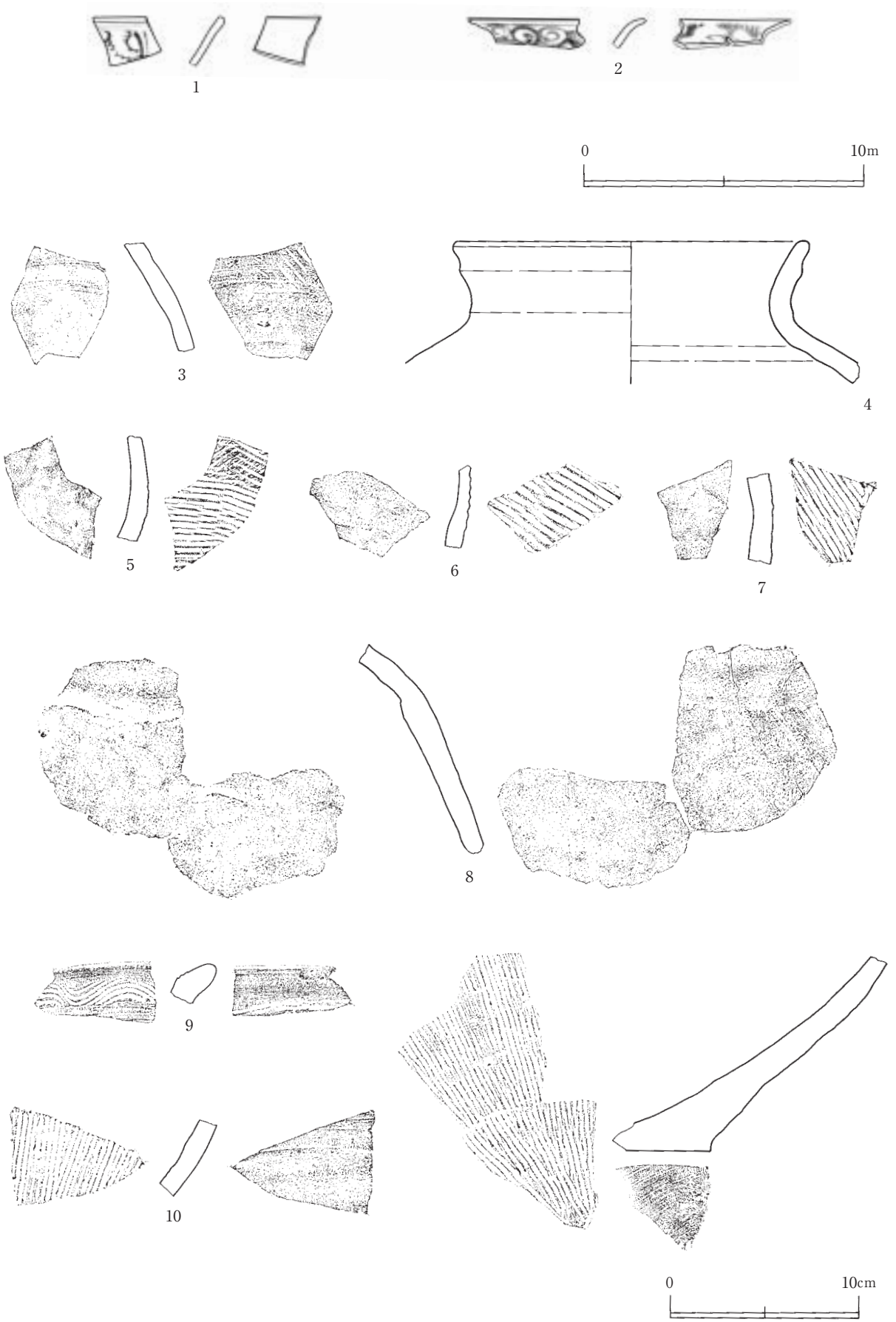
第141図　竪穴状遺構・土抗


ＳＤ502
59.50m
1
2
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
2　灰黄褐色土（10YR5/2）
ＳＫ512
ＳＫＩ513
0
4m

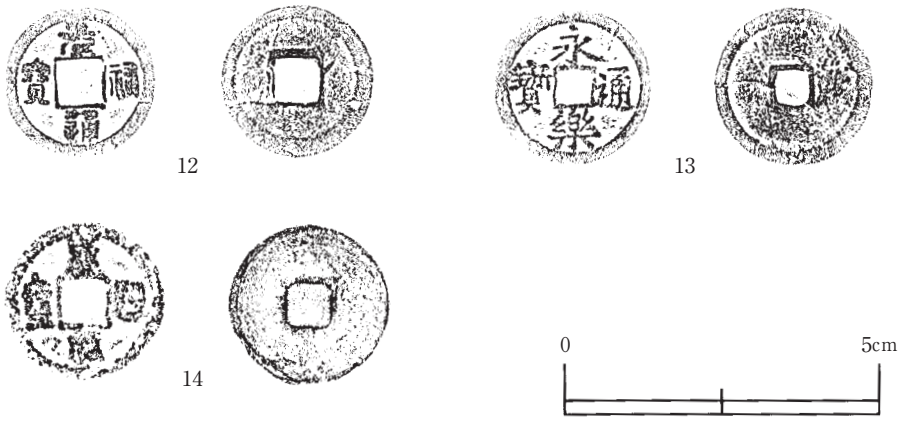
第142図　溝跡（１）


ＳＤ504
ＳＤ505
ＳＫ509
ＳＤ503
ＳＫＰ510
ＳＫＰ506
ＳＫＰ507
ＳＤ501
A
B
C
D
E
F
G
H
ＳＤ501
1　褐色土（10YR4/4）
2　炭層
3　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
ＳＤ503
1　黄褐色土（10YR5/6）
ＳＤ504
1　褐色土（10YR4/6）
ＳＤ505
1　褐色土（10YR4/6）
55.80m
55.80m
55.90m
55.70m
0
2m

第143図　溝跡（２）



第144図　Ｘ郭出土遺物（１）



第145図　Ｘ郭出土遺物（２）

第15表　Ｘ郭出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
144- 1	58- 1	表採	磁器	染付	不明	—	—	—		
2	2	表採	磁器	染付	不明	—	—	—		
3	3	SD503	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
4	4	SD502	陶器	珠洲系	壺	(18.6)	—	—		
5	5	SD503	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
6	6	表採	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
7	7	SD503	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
8	8	MN･MO22	陶器	珠洲系	甕	—	—	—		
9	9	表採	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
10	—	SD503	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
11	—	MN･MO22	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	—		
145-12	10	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		元祐通寶　重さ1.9ｇ
13	11	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		永楽通寶　重さ1.8ｇ
14	12	表採	金属	—	銭貨	2.4	—	—		不明　　重さ3.1ｇ

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属の銭貨ではＡ：径を示す。
　　なお、法量の（　）内の数値は推定値である。

11　Ｄ区の検出遺構と出土遺物

（１）土坑

ＳＫ262（第146図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＯ62グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.59ｍ×短軸（北―南）0.49ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14ｍである。底部はやや丸みを帯び、その中心部には被熱硬化面がみられ、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。

ＳＫ265（第146図）　Ⅳ期相当

ＬＭ62・63、ＬＮ62・63グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.87ｍ×短軸（北―南）1.12ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.1ｍである。底面は平坦だが西側に向かって傾斜し、その一部に被熱硬化面が見られ、さらにその周辺には炭化物が散在している。壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ380（第146図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＱ63・64、ＬＲ63・64グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.66ｍ×短軸（北―南）0.6ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.09ｍである。底部は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ397（第146図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ66グリッドの地山面で検出した。ＳＮ398と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.58ｍ×短軸（北西―南東）0.44ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.23ｍである。底部は平坦で、被熱により硬化している面が見られる。壁の傾きは緩やかである。堆積土は３層で一括して埋め戻されたものと考えられる。

ＳＫ398（第146図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ66グリッドの地山面で検出した。ＳＮ397、ＳＫＰ412と重複し、ＳＮ397より新しく、ＳＫＰ412より古い。平面形は長軸（東―西）0.68ｍ×短軸（東―西）0.60ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.28ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層、で一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ408（第146図）

ＬＴ68グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.76ｍ×短軸（北東―南西）1.13ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.21ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ409（第146図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＴ67グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ472と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）1.85ｍ×短軸（北東―南西）1.45ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.35ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。底面と壁に強く被熱した痕跡が残る。堆積土は４層に分けたが、大差はなく人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ411（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＳ67グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.82ｍ×短軸（北西―南東）0.84ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.41ｍである。底面は丸みを帯び、南西側が一段窪んで

いて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ454（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＡ68・69グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.71ｍ×短軸（北東―南西）0.64ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.32ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は３層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ474（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＡ68・69グリッドの地山面で検出した。土層観察トレンチにより北半分が失われているが、残存範囲の平面形は長軸（北東―南西）1.02ｍ×短軸（北西―南東）0.64ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.28ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（２）焼土遺構

ＳＮ261（第147図）　Ⅳ期相当

ＬＭ62グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.34ｍ×短軸（北西―南東）0.28ｍの楕円形の範囲に、にぶい赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ396（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＰ・ＬＱ64グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.44ｍ×短軸（北東―南西）0.31ｍの楕円形の範囲に、にぶい暗赤灰色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ402（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＴ66グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.32ｍ×短軸（北西―南東）0.15ｍの楕円形の範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.03ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ445（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ68グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.20ｍ×短軸（北西―南東）0.18ｍの楕円形の範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ446（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ68グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.35ｍ×短軸（北西―南東）0.25ｍの楕円形の範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＮ471（第147図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＢ67グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.21ｍ×短軸（北西―南東）0.09ｍの楕円形の範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.02ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

（３）溝跡

ＳＤ415（第148図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＲ・ＬＳ65グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ448と重複し、本遺構が古い。北側にやや湾曲して延びる溝で、長さ2.34m、幅0.23m、検出面からの深さ0.16mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ447（第148図）　Ⅳ期相当

ＬＮ65、ＬＯ63～65グリッドの地山面で検出した。弧状に延びる溝で、その南端は近年の攪乱で失われた部分が多かったが、長さ12.32m、幅0.5m、検出面からの深さ0.46mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ460（第148図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＣ65・66グリッドの地山面で検出した。やや湾曲して延びる溝で、長さ3.45m、幅0.41m、検出面からの深さ0.08mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ473（第148図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＡ67、ＭＢ66・67グリッドの地山面で検出した。直線的に延びる溝で、長さ3.52m、幅0.26m、検出面からの深さ0.07mである。底面は丸みを帯び、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ479（第148図）　ⅠかⅡ期相当

ＭＡ66・67、ＭＢ66グリッドの地山面で検出した。やや湾曲して延びる溝で、長さ3.52m、幅0.33m、検出面からの深さ0.09mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

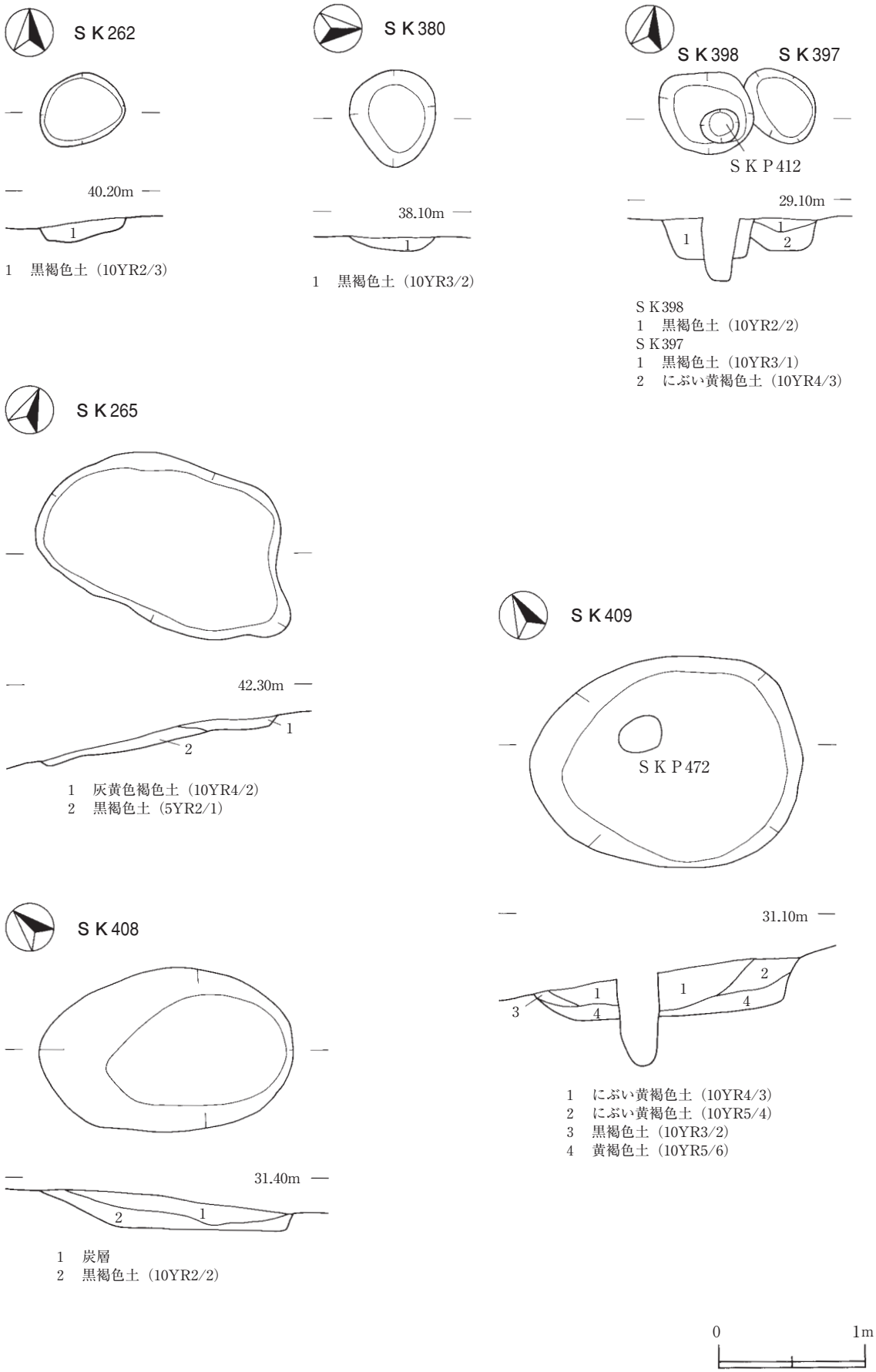
（４）炭窯

ＳＷ400（第149図）

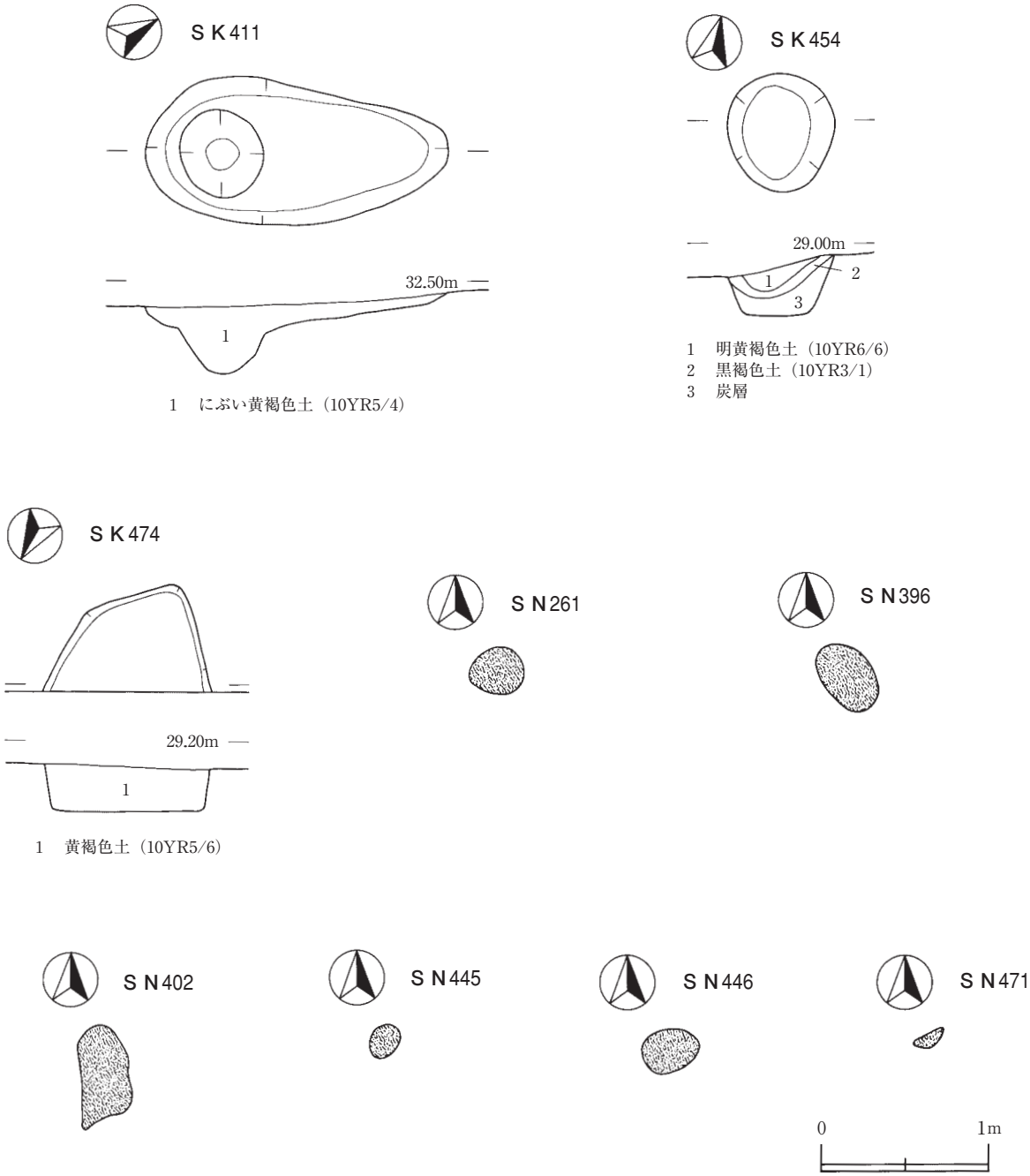
ＭＢ70、ＭＣ69・70グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）5.70m×短軸（北西―南東）1.15mの長方形を呈し、検出面からの深さは1.10mである。底面は南西から北西に傾斜し、壁の傾きは急である。北西部に径0.20mの円形の空気穴と思われる穴がある。床や壁が強く被熱を受け、その上に炭がこびりついている。堆積土は７層に分けられたが、下部５層は壁や天井の崩落したもので、上部２層は自然堆積である。時期は中世以降のものと考えられる。

（５）段状遺構

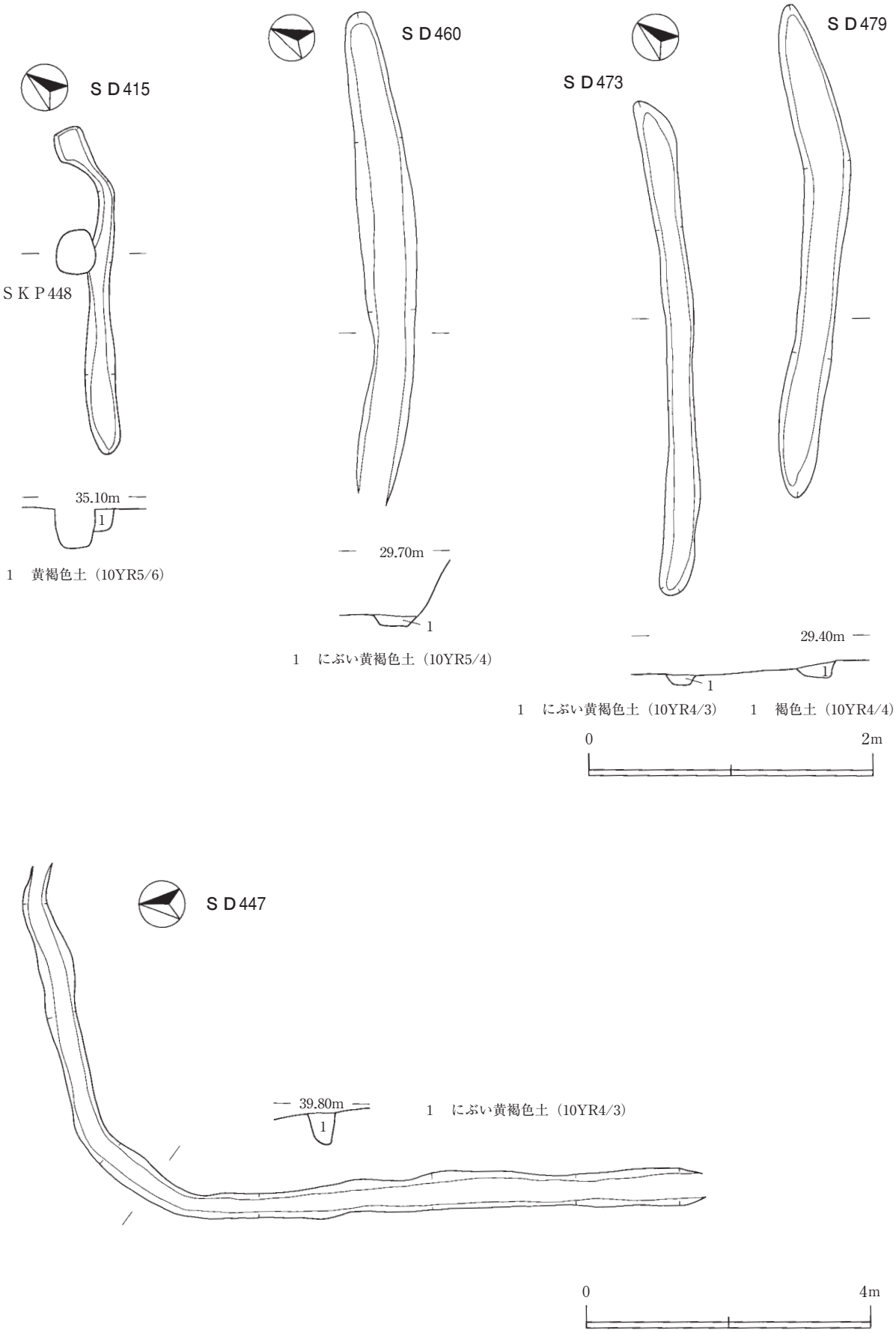
61ラインから77ラインとＬＩラインからＭＣラインの範囲内で検出した。緩やかな尾根地形を削り取り、階段状に７段造成している。各段の広さは１段目が40.94㎡、２段目が45.75㎡、３段目が25.2㎡、４段目が26.66㎡、５段目が20.04㎡、６段目が29.68㎡、７段目が85.86㎡である。機能としては全体で通路の役割を担っていたもので、Ⅰ期からⅣ期の城館廃絶まで使われていたものと考えられる。


ＳＫ262
40.20m
1
1　黒褐色土（10YR2/3）
ＳＫ380
38.10m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ398
ＳＫ397
ＳＫＰ412
29.10m
1
1
2
ＳＫ398
1　黒褐色土（10YR2/2）
ＳＫ397
1　黒褐色土（10YR3/1）
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＫ265
42.30m
1
2
1　灰黄色褐色土（10YR4/2）
2　黒褐色土（5YR2/1）
ＳＫ409
ＳＫＰ472
31.10m
1
2
3
4
1
4
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
3　黒褐色土（10YR3/2）
4　黄褐色土（10YR5/6）
ＳＫ408
31.40m
2
1
1　炭層
2　黒褐色土（10YR2/2）
0
1m

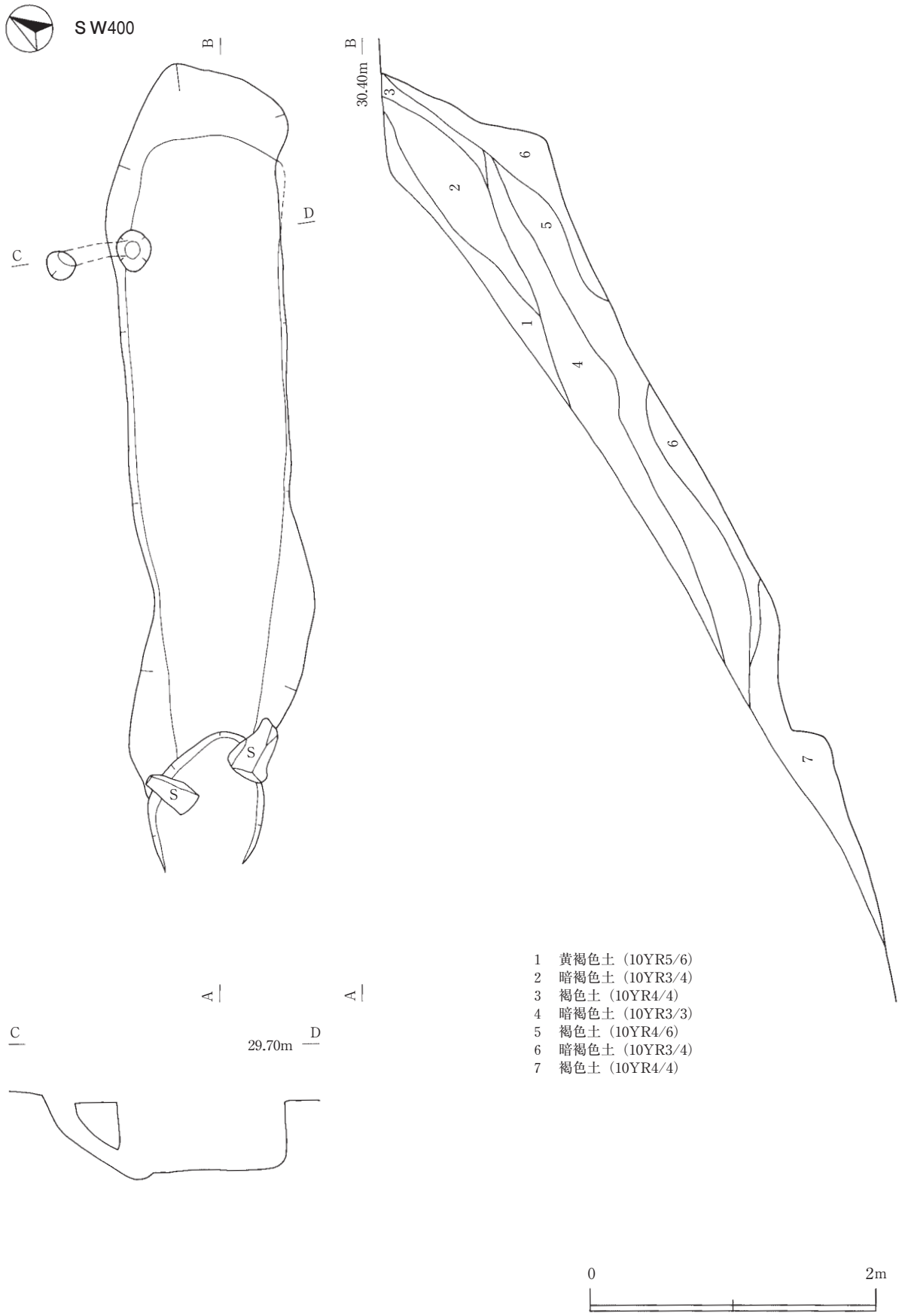
第146図　土抗（１）



第147図　土坑（２）・焼土遺構


ＳＤ415
ＳＫＰ448
35.10m
1
1　黄褐色土（10YR5/6）
ＳＤ460
29.70m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
ＳＤ473
ＳＤ479
29.40m
1
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
1　褐色土（10YR4/4）
0
2m
ＳＤ447
39.80m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
0
4m

第148図　溝跡

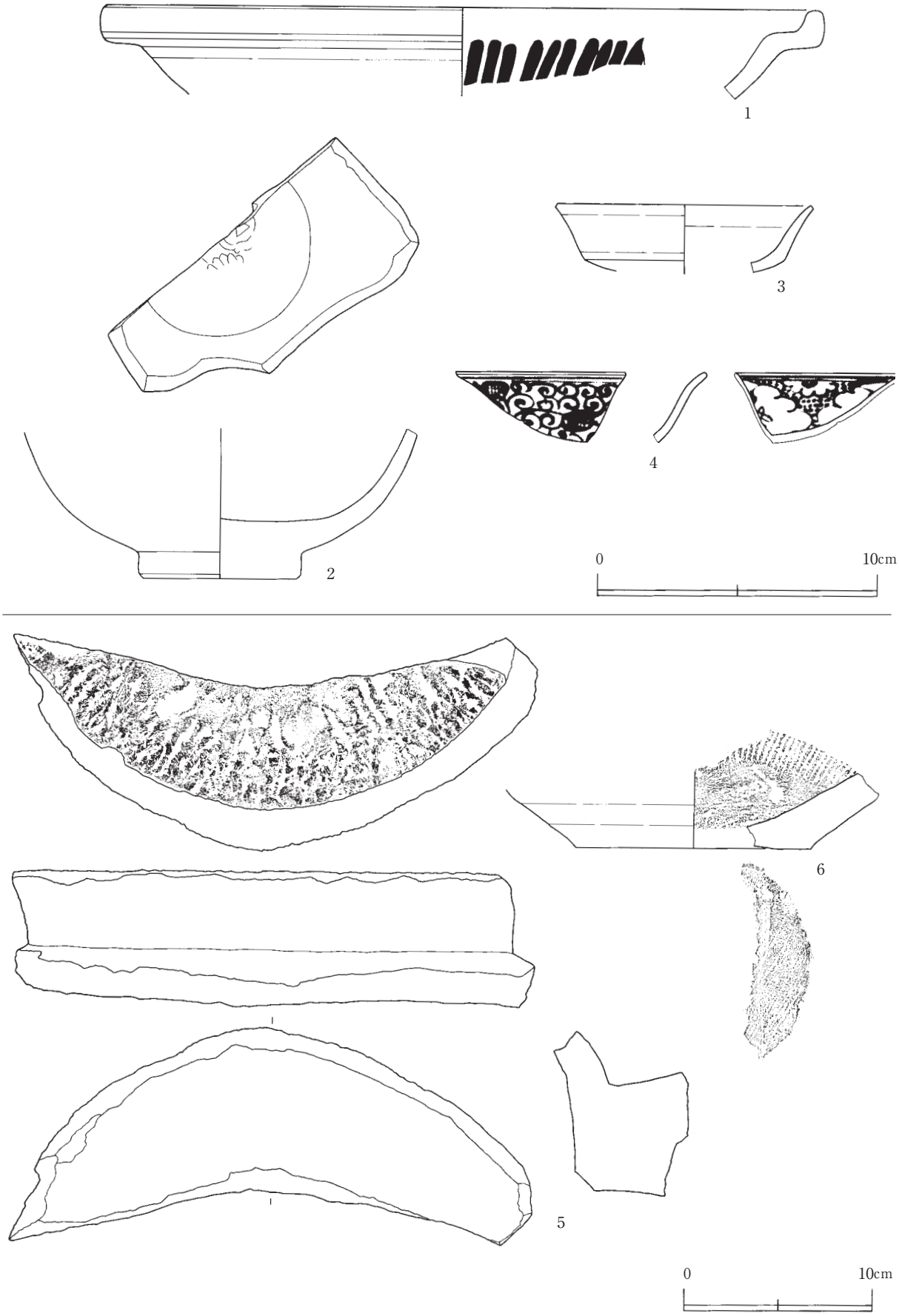

S W400
B
B
30.40m
3
2
6
5
1
4
6
7
D
C
S
S
A
A
C
D
29.70m
1　黄褐色土（10YR5/6）
2　暗褐色土（10YR3/4）
3　褐色土（10YR4/4）
4　暗褐色土（10YR3/3）
5　褐色土（10YR4/6）
6　暗褐色土（10YR3/4）
7　褐色土（10YR4/4）
0
2m

第149図　炭焼遺構

第16表　Ｄ区出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
150- 1	58-13	MB67	磁器	青磁	盤	(25.5)	—	—	14ｃ～15ｃ中	龍泉窯系
2	15	MB68	磁器	青磁	碗	—	—	(5.4)	14ｃ～15ｃ中	龍泉窯系又は福建系
3	14	MB65	磁器	白磁	皿	(9.1)	—	—	14ｃ	
4	59- 1	MA66	磁器	染付	皿	—	—	—	16ｃ前～中	景徳鎮
5	3	LT73	石製品	—	石臼	(28.0)	(11.5)	(7.3)		茶臼
6	2	MB72	陶器	珠洲系	擂鉢	—	—	(4.1)		

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。石製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
　　なお、法量の（　）内の数値は推定値である。



第150図　Ｄ区出土遺物

12　Ｅ区の検出遺構と出土遺物

（１）竪穴状遺構

ＳＫＩ3519（第151図）　Ⅲ期相当

ＬＱ39～41、ＬＲ39～41グリッドのＳＦ3527の３回目の盛土上面で検出した。平面形は長軸（北―南）5.99m×最大幅（東―西）5.74mの楕円形で、最も深い南側で検出面からの深さは0.89mである。底面は平坦で、壁の傾きは明瞭な南側が緩やかで、東西の壁の傾きは不明瞭であるが、テラス状の平坦面を造成していたことが分かる。付随する遺構は検出されなかった。堆積土は１層でＳＦ3527の４回目の盛土の際に一括して埋めたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3520（第151図）　ＩかⅡ期相当

ＬＲ37～40、ＬＳ37～40グリッドのＳＦ3527の盛土を全て除去して検出した。平面形は近年の攪乱によって一部失われたり、崩落等により変形しているが、残存範囲で長軸（北東―南西）9.68m×最大幅（北西―南東）4.65mの隅丸長方形と推定され、最も深い南東側で検出面からの深さは4.03mである。南西側の壁が残存していることから、本来は西壁の北寄りの一部だけが入り口として開口していたと考えられ、一辺全てが開口する他のＳＫＩとは形状が異なる。付随する遺構は検出されなかった。堆積土はＳＦ3527造成時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3521（第151図）　ＩかⅡ期相当

ＬＲ29～31、ＬＳ29～31グリッドの南向き斜面の地山面で検出した。平面形はⅢ期～Ⅳ期の空堀によって失われているが、残存範囲で長軸（北東―南西）5.37m×最大幅（北西―南東）5.02mの隅丸方形と推定され、最も深い北東側で検出面からの深さは1.71mである。底面は緩やかに傾斜していて凹凸があるが、本来は平坦であったと考えられ、壁の傾きはやや急である。付随する遺構は検出されなかった。堆積土は17層に分けたが、Ⅲ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3522（第151図）　ＩかⅡ期相当

ＬＲ31・32、ＬＳ31・32グリッド西及び南西向き急斜面中の漸位層下で検出した。急斜面に立地し直下には空堀が存在することなどから安全を考慮し、全容を明らかにすることはなかったが、長軸（北―南）8.99m以上×最大幅（東―西）3.08mの長方形と推定され、最も深い東側で検出面からの深さは0.63mである。ボーリング棒による試掘で同様の断面Ｌ字状の掘り込みが更に北側に延びることを検出した。竪穴状遺構としてはいるが規模・形状・立地などから生活空間とは捉えにくく、犬走り状の通路などの役割が考えられるが明言できない。同様の形態をした遺構がⅤ郭に存在する。付随する遺構は検出されなかった。堆積土は１層で斜面上方からの流れ込みか、自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3523（第151図）　Ⅱ期相当

ＬＲ29・30、ＬＳ29・30グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ3524と重複し、本遺構が新しい。平面形はⅢ期～Ⅳ期の空堀によって失われるなどして全容は明らかでないが、検出できた範囲で長軸（北西―南東）3.12m以上×最大幅（北東―南西）2.52m以上の隅丸方形と推定され、最も深い北側で検出面からの深さは0.56mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや緩やかである。付随する遺構は検出されなかった。堆積土はⅢ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3524（第151図）　ＩかⅡ期相当

ＬＳ29・30、ＬＴ29・30グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ3524・3526と重複し、ＳＫＩ3526より新しく、ＳＫＩ3524より古い。平面形は遺構の重複などで全容は明らかでないが、検出できた範囲で長軸（北西―南東）2.96m×最大幅（北東―南西）1.58m以上の隅丸方形と推定され、最も深い北側で検出面からの深さは1.34mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土はⅢ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3525（第151図）　ＩかⅡ期相当

ＬＴ・ＭＡ30グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ3524・3525と重複し、本遺構が最も古い。平面形は遺構の重複などで全容は明らかでないが、検出できた範囲で長軸（北西―南東）5.19m以上×短軸（北東―南西）3.98m以上の隅丸方形と推定され、最も深い北側で検出面からの深さは0.95mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土はⅢ期の整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ3526（第151図）　Ⅲ期相当

ＬＰ43～45、ＬＱ43～45、ＬＲ43～45グリッドのＳＦ3527の３回目の盛土上面で検出した。平面形は長軸（北―南）8.96m×最大幅（東―西）6.71mの長方形で、最も深い南側で検出面からの深さは1.56mである。底面は平坦で、壁の傾きは明瞭な南壁では緩やかで、東西の壁の傾きは不明瞭であるが、テラス状の平坦面を造成していたことが分かる。付随する遺構は検出されなかった。堆積土は16層に分けたが、下位の３層は斜面上方からの流れ込みで、それより上位はＳＦ3527の４回目の盛土時に一括して埋めたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（２）空堀

ＳＤ3001（第151・152図、図版33）　Ⅳ期相当

ＬＱ26・27、ＬＲ26～29、ＬＳ29・30、ＬＴ29・30グリッドで検出した。長さ21.63m×幅1.43～2.96mを計り、検出面からの深さは1.59mあり、南側は開口する。２つの土塁や頂上部の３条の空堀と同時存在した防御施設群の１つである。底面は丸味を帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は４層に分けられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3501（第151・152図、図版32・33―１）　Ⅳ期相当

ＬＯ32～36、ＬＰ35・36グリッドで検出した。長さ18m×幅2.6mを計り、検出面からの深さは1.2mである。堆積土は１層である。断面形はＶ字形を呈する。

ＳＤ3502（第151・152図、図版32・33―１）　Ⅳ期相当

ＬＬ33、ＬＮ34～36、ＬＭ33～36グリッドで検出した。長さ16m×幅2.4mを計り、検出面からの深さは1.6mである。堆積土は５層に分けられる。断面形はＶ字形を呈する。

ＳＤ3503（第151・152図、図版32・33―１）　Ⅳ期相当

ＬＪ34、ＬＫ34～37、ＬＬ34・36・37グリットで検出した。長さ13m×幅3.5mを計り、検出面からの深さは1.1mである。堆積土は２層に分けられる。断面形はＶ字形を呈する。

ＳＤ3505（第151・152図）　Ⅲ～Ⅳ期相当

ＬＯ46・47、ＬＰ46・47グリッドのＳＦ3527の３回目の盛土上面で検出した。平面形は、近年の攪

乱で西側が失われているが残存範囲で、長さ9.79ｍ×幅1.13～1.62ｍを計り、検出面からの深さは0.58ｍでＳＦ3527の北端に沿って弧状に延びる。土層観察からＳＦ3527とはⅢからⅣ期にかけて同時に存在していたことが分かった。本遺構はＳＦ3527とセットで防御施設群の一翼を担っていたと考えられる。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかであり、規模は小さいが薬研堀の特徴を備えている。堆積土は１層で城館廃絶後に崩落や自然堆積で埋まったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3506（第151・152図）　Ⅲ期相当

ＬＱ29・30、ＬＲ29～31、ＬＳ29～31、ＬＴ31グリッドの地山面で検出した。ＳＤ3508と重複し本遺構が新しい。平面形は南側をⅣ期のＳＤ3001や崩落で失っているが、残存範囲で長さ8.47ｍ×幅2.16～3.37ｍを計り、検出面からの深さは1.21ｍあり、ほぼ直線的に延びる南側が開口した空堀であったと推定される。北西側には長さ2.2ｍ×幅0.49ｍ、深さ0.67ｍの溝が付随する。底面は狭く平坦、壁の傾きは緩やかなＶ字型で典型的な薬研堀である。堆積土は11層に分けたが、Ⅳ期の整地時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3507（第151・152図）　Ⅲ期相当

ＬＴ32・33、ＭＡ30～33、ＭＢ30・31、ＭＣ29・30グリッドの地山面で検出した。平面形は近年の攪乱などにより著しく残存状態が悪いが、検出できた範囲で長さ19.59ｍ以上×幅0.63～2.13ｍを計り、検出面からの深さは0.49ｍであり、弧を描きながら延びる。北側は竪堀ＳＤ6538方向に延び、南側はＸ郭のＳＤ502方向に延びる。底面は狭く平坦で、壁の傾きは緩やかである。残存状態が悪いが薬研堀の特徴を僅かに留める。堆積土は３層に分けたが、Ⅳ期整地時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3508（第151・152図、図版33―１・34―１）　Ⅲ期相当

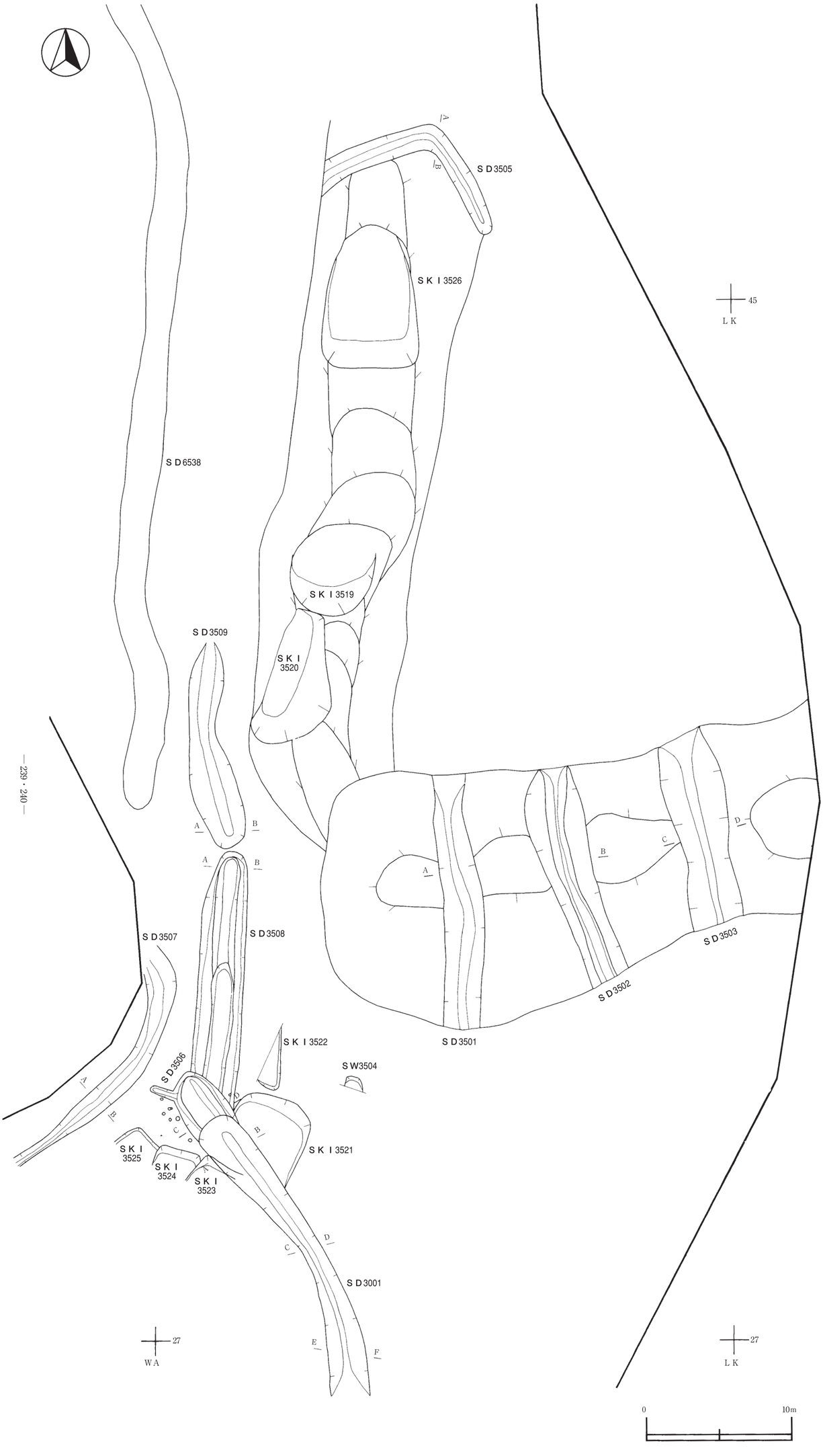
ＬＲ30～35、ＬＳ30～35グリッドの地山面で検出した。ＳＤ3506と重複し本遺構が古い。平面形は南側をⅣ期のＳＤ3001や遺構の重複で失っているが、残存範囲で長さ19.59ｍ×幅2.08～3.27ｍを計り、検出面からの深さは1.63ｍあり、直線的に延びる。底面は平坦で約半分の地点で0.4ｍほどの段差がある。壁の傾きは段差の北側で標高の高い方が急で箱堀の特徴を示し、段差の南側で標高の低い方が緩やかで、薬研堀の特徴を示す。堆積土は土層観察２カ所で21層に分けたが、ＳＤ3506造成時やⅣ期の整地時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ3509（第151・152図、図版33―１・34―２）　Ⅲ期相当

ＬＳ35～38、ＬＴ35～38グリッドの地山面で検出した。平面形は近年の攪乱などにより著しく残存状態が悪いが、検出できた範囲で長さ15.32ｍ以上×幅2.34～3.12ｍを計り、検出面からの深さは1.67ｍあり、やや蛇行しながら延びる。北側はＳＦ3527に沿って延びていた可能性もあるが、検出できた範囲でも徐々に浅くなることから開口していた可能性が高い。底面は平坦で、壁の傾きは急で、箱堀の特徴を示す。堆積土は11層に分けたが、Ⅳ期の整地時に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ6538：竪掘（第151図）

Ⅱ郭の東斜面下を頂点にして、Ⅶ郭の西側までの細長い沢筋は全体がＳＤ6538とした竪堀を指す。表土除去時に重機によるトレンチ調査を行い、堀の中に整地や埋め戻しなどの痕跡が見られないことからⅣ期の城館廃絶時まで使われていた自然地形を利用した竪堀であることが分かった。ＬＴ36～39・



第151図　竪穴状遺構・溝跡・空堀・炭焼遺構

41～49、ＭＡ36～46・48～50グリッドの表土で検出した。Ⅳ期に竪堀として機能していたことは窺われるが、それ以前はどの時点まで遡るのか定かではないがＥ区の空堀群との位置関係などから見てⅢ期には既に竪堀として利用されていたと考えられる。平面形は長さ94ｍ×幅1.65～2.2ｍを計り、検出面からの深さは最も深い北側で5.2ｍ、浅い南側で0.83ｍで、やや蛇行し、緩やかに弧を描きながらながら延びる。底面はトレンチ調査をした中央部ではやや丸味を帯びていて、壁の傾きは東側は緩やかに、西側は急傾斜である。堆積土は表土と漸位層以外には崩落の痕跡らしき土しかなく、大半が自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

（３）土塁

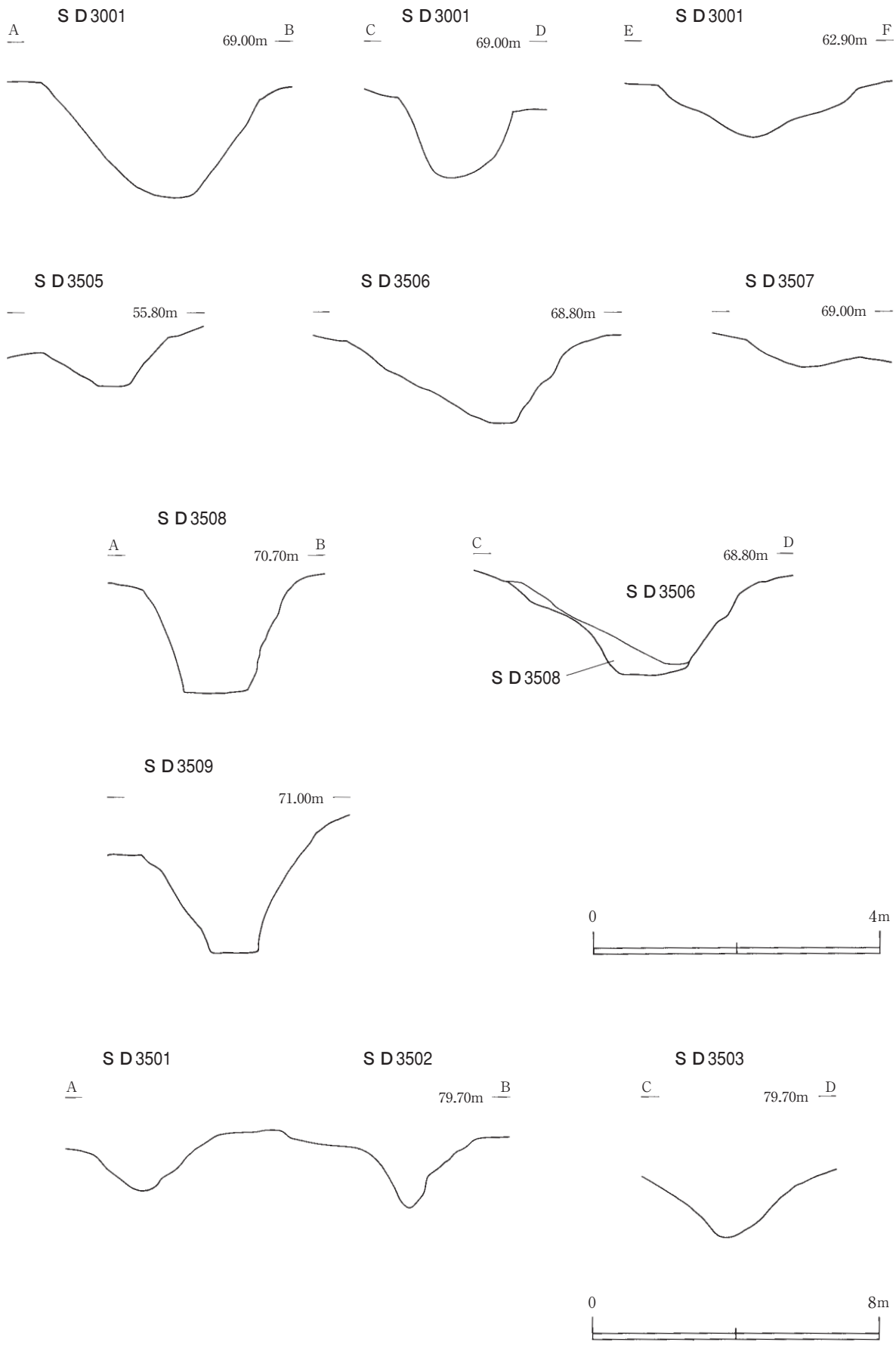
ＳＦ3527（第151図）　Ⅲ～Ⅳ期

ＬＯ44～47、ＬＰ35～47、ＬＱ35～47、ＬＲ35～47、ＬＳ35～47グリッドで検出した。北端はＳＤ3505に接している。上面形は全長（北―南）48.4ｍ×基底幅（東―西）8.3～11.7ｍを計り、やや蛇行し北進しながら標高を下げる。全体の標高差は13ｍほどで、盛土の厚さは最も浅い箇所で1.8ｍで平均で２～３ｍである。本遺構は大きく４回に分けて盛土造成された痕跡が見られ、盛土間には黒色土層があり、明確に区分できることから各盛土には時間差があったことが伺える。１～２回の盛土では主に北側を造成し、３回目の盛土上面でテラス状のＳＫＩ3519・3526が造成され、北側で接するＳＤ3505も同層位から検出されている。４回目の盛土ではテラスを埋めて連続した土塁に姿を変え、頂上部にあるＳＤ3501～3503、西側にあるＳＤ6538・Ⅱ郭から延びるＳＦ1923らと同時に存在し、大規模な防御施設群の一翼を担っていた。本遺構を東西に横断するように概観すると、東から城館を区画する深く急峻な沢→自然地形を利用した高低差の大きい尾根→やや緩やかな沢→本遺構→竪掘ＳＤ6538→ＳＦ1923と大きな高低差を有し、地形的にやや緩やかな東～北東の防御を強く意識していたことが分かる。遺物は出土しなかった。

（４）炭窯

ＳＷ3504（第151図）　ⅠかⅡ期相当

ＬＱ31グリッドの地山面で検出した。平面形は近年の攪乱によって大半を失っているが、残存範囲で全長（北東―南西）1.18ｍ以上×幅（北西―南東）0.83ｍを計り、検出面からの深さは0.77ｍである。本遺構は本来、地下式炭窯であったと推定されるが、僅かに窯尻部を残すに留まり窯体の傾斜角度などの情報が乏しい上に、付随するはずの煙出も検出できなかった。底面は平坦で、東西の壁の傾きは攪乱を受けてはいるがほぼ垂直で、北方の奥壁の傾きは緩やかであるが、本来は垂直かオーバーハングしていたと考えられ一部にその痕跡らしきものが検出できた。本遺構は縦長のかまぼこ型の窯体で、窯尻は若干オーバーハングして、煙出は窯体上部に付随するものと考えられる。堆積土は８層に分けられ、壁の崩落土も見られるが、他は人為的に埋め戻されたものと考えられる。底面に直径１～３mm の炭化物が充填されていた。土層観察で見た限りでは１回の操業で廃絶したようだ。

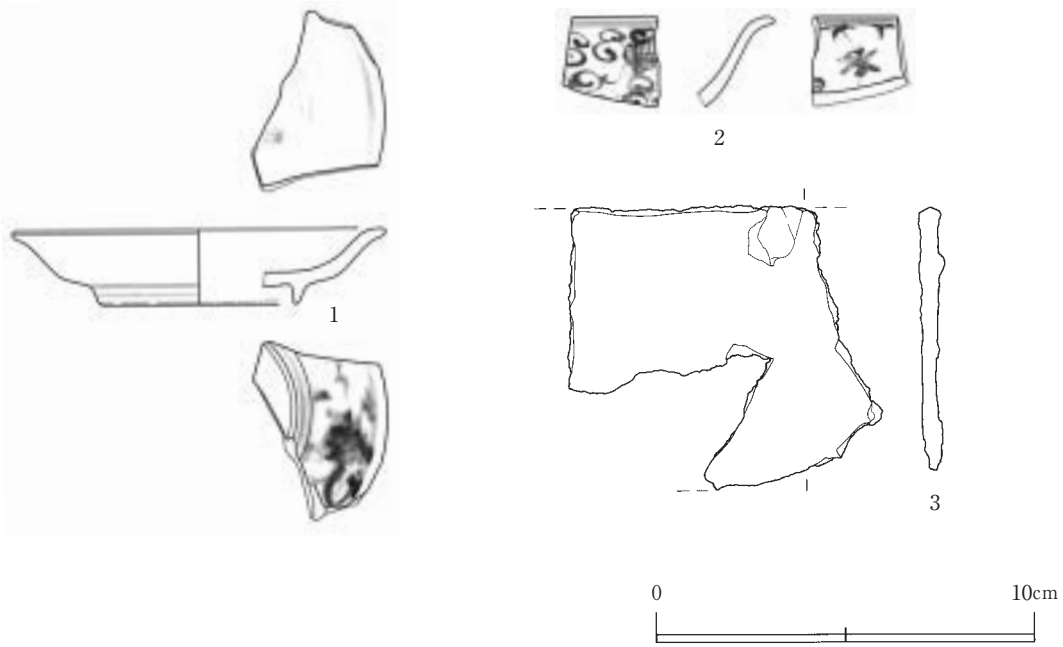


第152図　溝跡・空堀断面図

第17表　Ｅ区出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
153- 1	59- 4	表採	磁器	染付	皿	(9.7)	—	—		
2	5	SD3001	磁器	染付	皿	—	—	—		
3	6	SD3001	金属	—	不明	7.5	8.3	0.7		重さ40.3ｇ

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
　　なお、法量の（　）内の数値は推定値である。



第153図　Ｅ区出土遺物

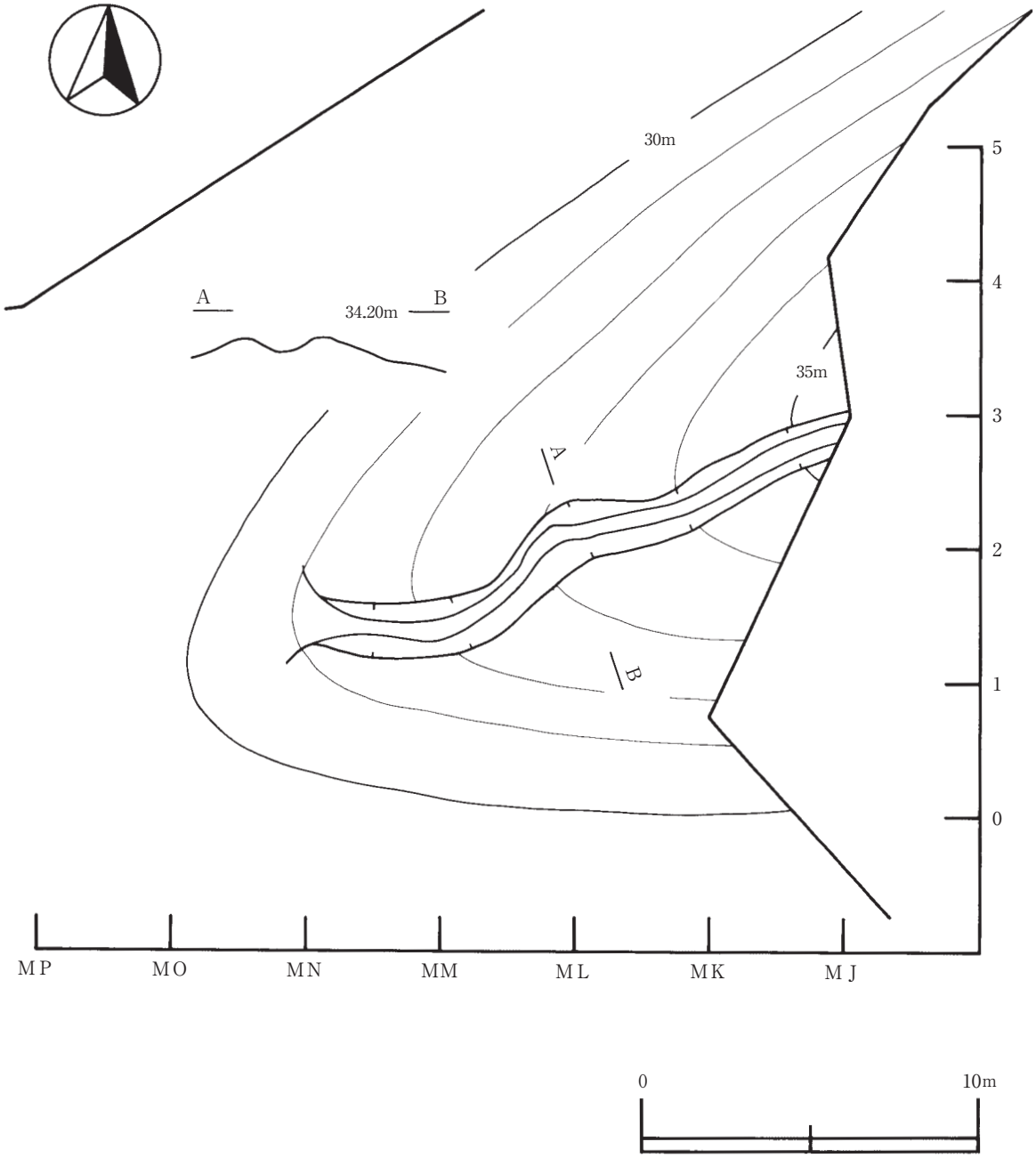
13　南調査区の検出遺構と出土遺物

（１）通路跡

ＳＭ425（第154図）

南調査区全体で表土除去する前から、尾根の中央部で溝状の窪みが確認されていた。その窪みは近年の植樹や伐採の際にも利用されていたと地域住民が話すほど、明瞭なものであった。

調査はトレンチによる部分的な調査であるが、全範囲で溝状の遺構を検出した。そこから推定される平面形は全長（北東―南西）17.40ｍ、最大幅1.78ｍを測り、尾根の稜部を忠実にたどる。検出面からの深さは0.27～0.45ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。一部で溝がＳ字に曲がる箇所を検出した。虎口と考えられるが、残存状態が悪く、確証を得るには至らなかった。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。



第154図　南調査区遺構配置図

14　北調査区Ａの検出遺構と出土遺物

（１）土坑

ＳＫ55（第155図）

ＬＤ100グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.21ｍ×短軸（北東―南西）0.91ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.25ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ72（第155図）

ＫＲ118グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.61ｍ×短軸（東―西）0.59ｍのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.14ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ140（第155図）

ＬＣ・ＬＤ104グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.84ｍ×短軸（北東―南西）0.85ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.58ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは北側が緩やかで、南側が急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は縄文土器片が２点出土した。

ＳＫ147（第155図）

ＬＥ87グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.94ｍ×短軸（北―南）0.75ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.34ｍである。底面は丸みを帯びて、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ148（第155図）

ＬＦ85グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.75ｍ×短軸（北東―南西）0.64ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.24ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ175（第155図）

ＫＴ101・102グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）0.75ｍ×短軸（東―西）0.53ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.35ｍである。底面は凹凸が見られ、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ189（第155図）

ＬＡ・ＬＢ113グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）１ｍ×短軸（北西―南東）0.92ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.48ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は縄文土器片が５点出土した。

ＳＫ190（第155図）

ＫＳ112グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.26ｍ×短軸（東―西）1.2ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.32ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層で人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は剥片が３点出土した。

ＳＫ204（第155図）

ＬＦ・ＬＧ90グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.01ｍ×短軸（東―西）0.74ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.22ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土

は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ210（第156図）

ＬＢ104グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.27ｍ×短軸（北東―南西）0.5ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.61ｍである。底面は最深部が北西側に寄り、緩やかに傾斜していて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ4549（第156図）

ＬＣ97・98、ＬＤ97・98グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ4520・4535と重複し、本遺構が最も古い。平面形は長軸（北東―南西）2.25ｍ×短軸（南東―北西）1.24ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.53ｍである。底面はほぼ平坦で、北東から中央部にかけて緩やかに傾斜している。壁の傾きは急傾斜である。堆積土は４層に分けられ、下位２層は埋め戻しによるもので、上位２層は自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

（２）土器埋設遺構

ＳＲ100（第156図）

ＬＢ104グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）0.41ｍ×短軸（北―南）0.33ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.29ｍである。底面は丸みを帯びており、壁の傾きは急である。堆積土は４層であり、下位２層は埋め戻しによるもので、上位２層は自然堆積である。

（３）焼土遺構

ＳＮ68（第156図）

ＬＣ103グリッドの地山面で検出した。長軸（南西―北東）0.55ｍ×短軸（北西―南東）0.46ｍの楕円形範囲に赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.01ｍで、掘り込みは見られない。遺物は出土しなかった。

（４）溝跡

ＳＤ25（第157図）

ＬＡ・ＫＲ・ＫＳ・ＫＱ・ＫＴ117グリッドの地山面で検出した。ＳＤ28、ＳＫＰ54と重複し、本遺構が最も古い。直線的に延びる溝で、長さ16.64ｍ、幅2.04ｍ、検出面からの深さは0.35ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層で自然堆積である。遺物は縄文土器片が３点出土した。

ＳＤ28（第157図）

ＫＲ・ＫＳ115、ＫＴ115・116グリッドの地山面で検出した。ＳＤ25と重複し、本遺構が新しい。Ｌ字状に曲がりながら延びる溝で、長さ11.7ｍ、幅0.56ｍ、検出面からの深さは0.17ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。また、溝底面でピット３基（Ｐ１～Ｐ３）を検出した。各ピットの大きさは径0.55～0.8ｍ、深さ0.17～0.3ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ66（第158図）

ＫＲ114、ＫＳ113～115、ＫＴ114・115グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ492と重複し、本遺構が古い。ほぼ直線上に延びる溝で、長さ7.72m、幅0.83m、検出面からの深さは0.25mである。底面は平坦で、北東側の壁の傾きはやや急であり、南西側壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ70（第158図）

ＫＳ118・119、ＫＴ118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ73・75・489と重複し、本遺構が最も古い。南側が開口するコの字型に延びる溝で、長さ9.25m、幅0.25m、検出面からの深さは0.11mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。溝底面でピット５基（Ｐ１～Ｐ５）を検出した。各ピットの大きさは径0.19～0.35m、深さ0.15～0.26mである。遺物は剥片が１点出土した。

ＳＤ150（第159図）

ＫＴ・ＬＴ104グリッドの地山面で検出した。北東から南西へほぼ直線上に延びる溝で、長さ4.64m、幅0.54m、検出面からの深さは0.29mである。底面は丸みを帯びており、北東側の壁の傾きは急で、南西側の壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ162（第159図）

ＬＦ84～86グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ195と重複するが、新旧関係不明である。ほぼ直線的に延びている溝で、長さ8.8m、幅0.4m、検出面からの深さは0.15mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

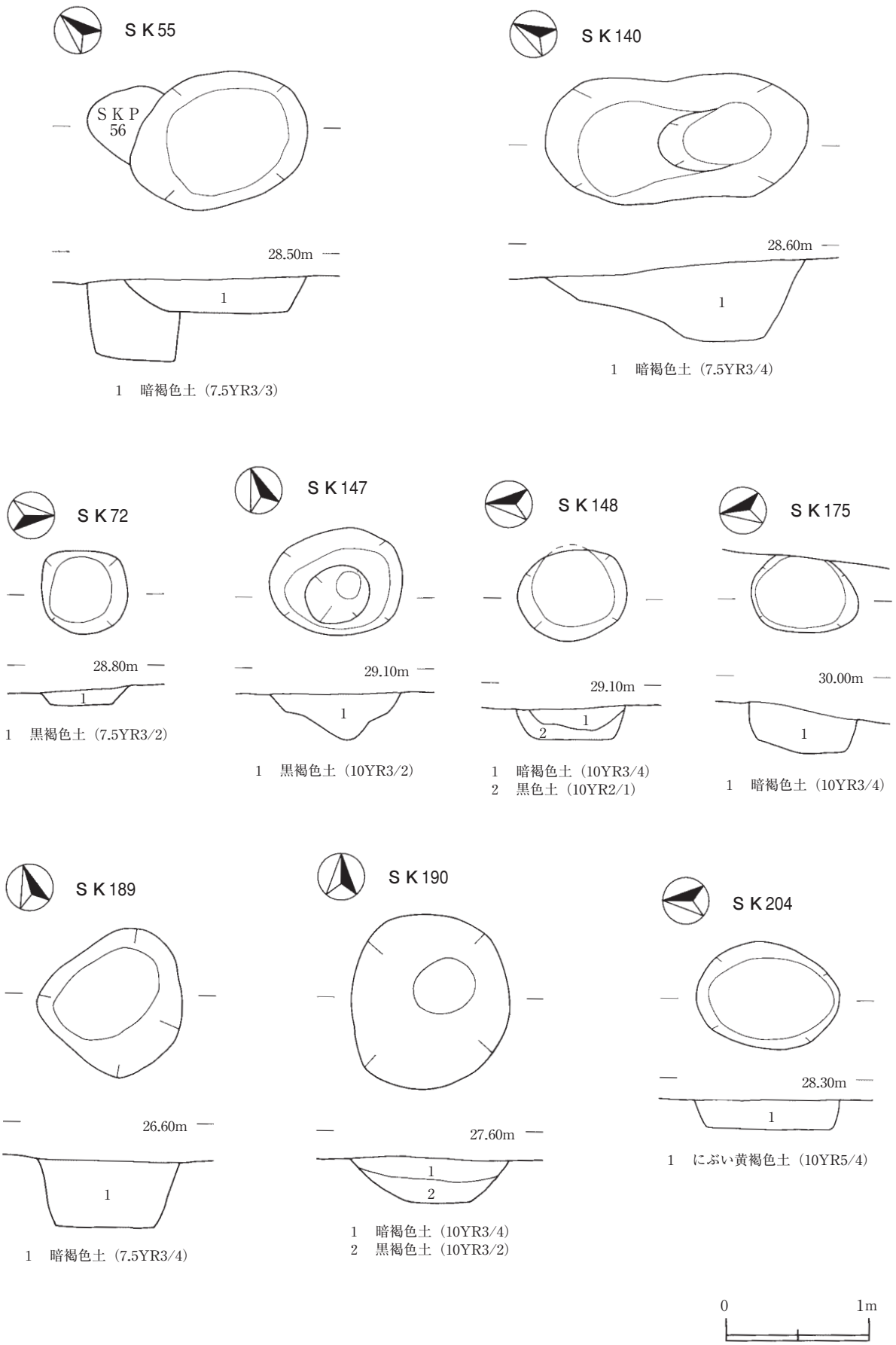
ＳＤ163（第159図）

ＬＦ83～86グリッドの地山面で検出した。ほぼ直線的に延びる溝で、長さ12.96m、幅0.38m、検出面からの深さは0.13mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で自然堆積である。遺物は出土しなかった。

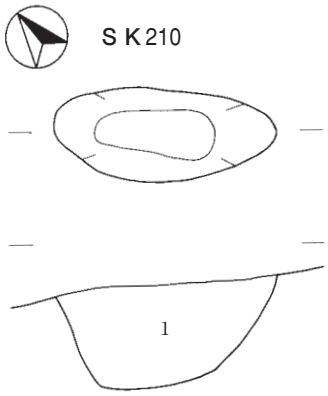
（５）炭窯

ＳＷ215（第156図）

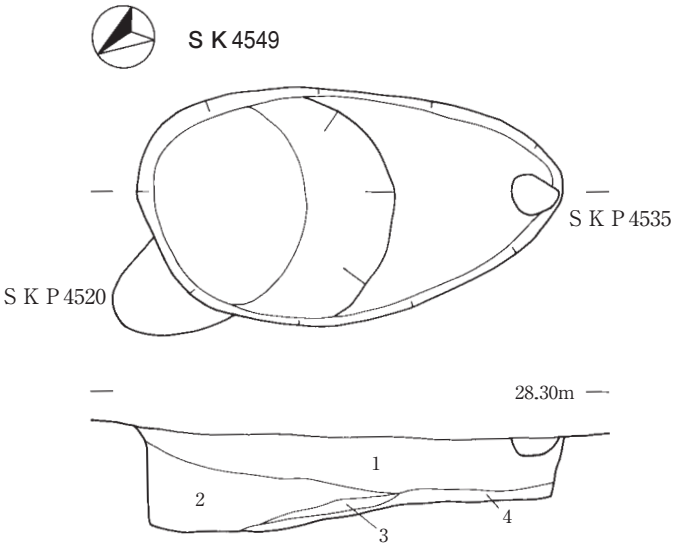
ＬＨ95グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）1.29m×短軸（北東―南西）1.22mの方形を呈し、検出面からの深さは0.33mである。底面には北西と南東の壁に沿って２条の溝状の窪みがあり、長さ0.93～0.94m、幅0.19～0.23mで、底面からの深さは0.06～0.09mである。この溝状の窪みは炭焼成の際に生じる木酢液や水蒸気を集め、排出する役割を果たすものと考えられる。壁の傾きはやや急である。堆積土は２層であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物はかわらけ片と剥片が各１点出土した。


ＳＫ55
ＳＫＰ
56
28.50m
1
1　暗褐色土（7.5YR3/3）
ＳＫ140
28.60m
1
1　暗褐色土（7.5YR3/4）
ＳＫ72
28.80m
1
1　黒褐色土（7.5YR3/2）
ＳＫ147
29.10m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ148
29.10m
1
2
1　暗褐色土（10YR3/4）
2　黒色土（10YR2/1）
ＳＫ175
30.00m
1
1　暗褐色土（10YR3/4）
ＳＫ189
26.60m
1
1　暗褐色土（7.5YR3/4）
ＳＫ190
27.60m
1
2
1　暗褐色土（10YR3/4）
2　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ204
28.30m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
0
1m

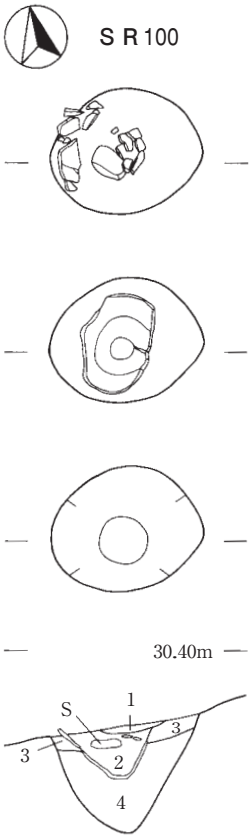
第155図　土坑（１）



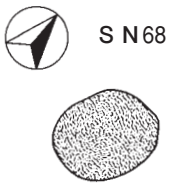
1　暗褐色土（7.5YR3/4）

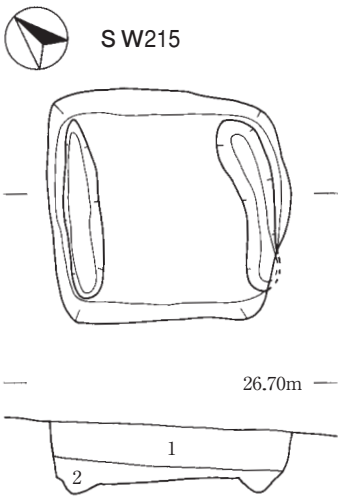


1　暗褐色土（10YR3/3）
2　暗褐色土（10YR3/4）
3　褐色土（10YR4/4）
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）



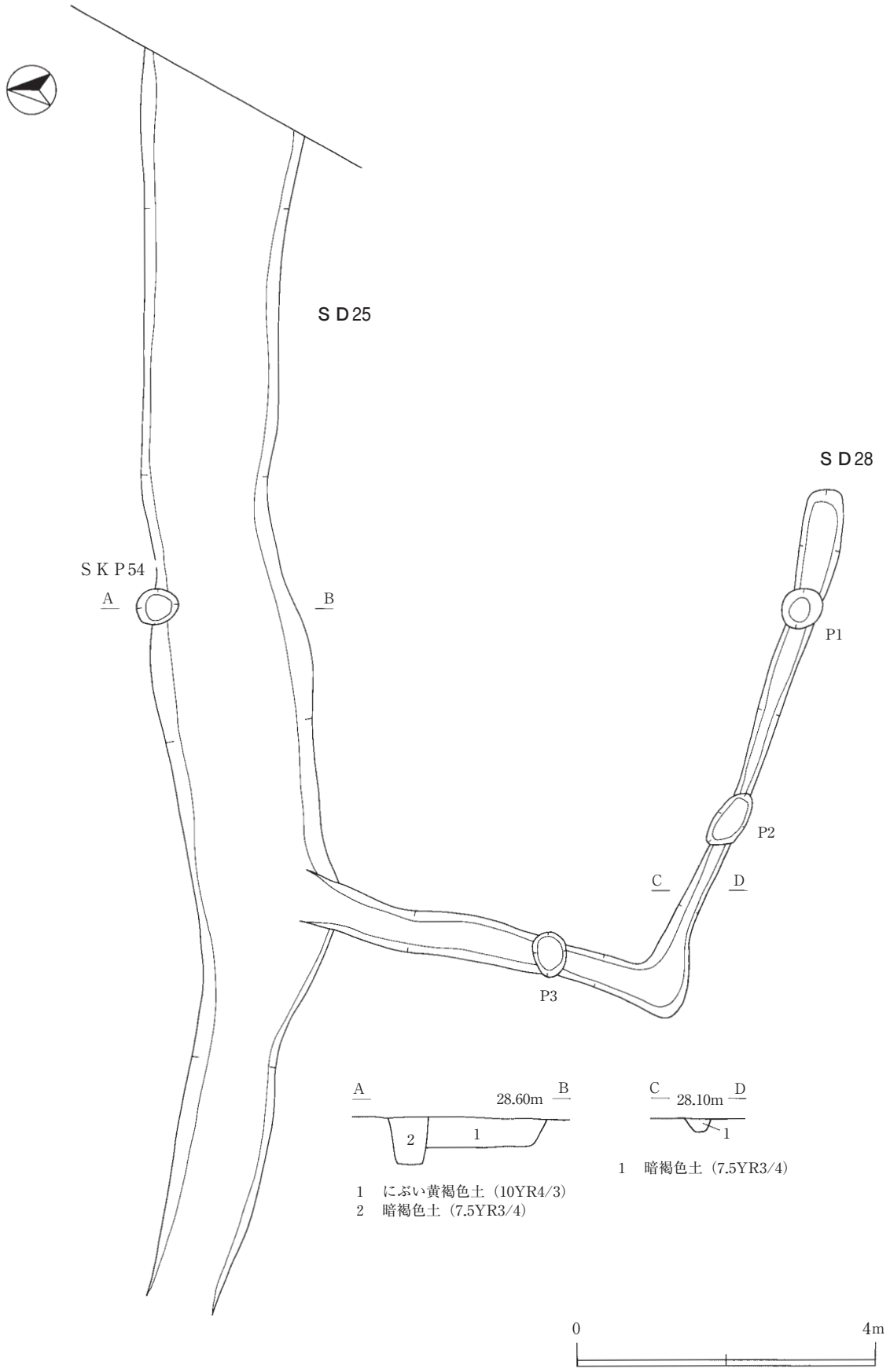
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　褐色土（10YR4/4）
3　暗褐色土（10YR3/4）
4　褐色土（7.5YR4/4）



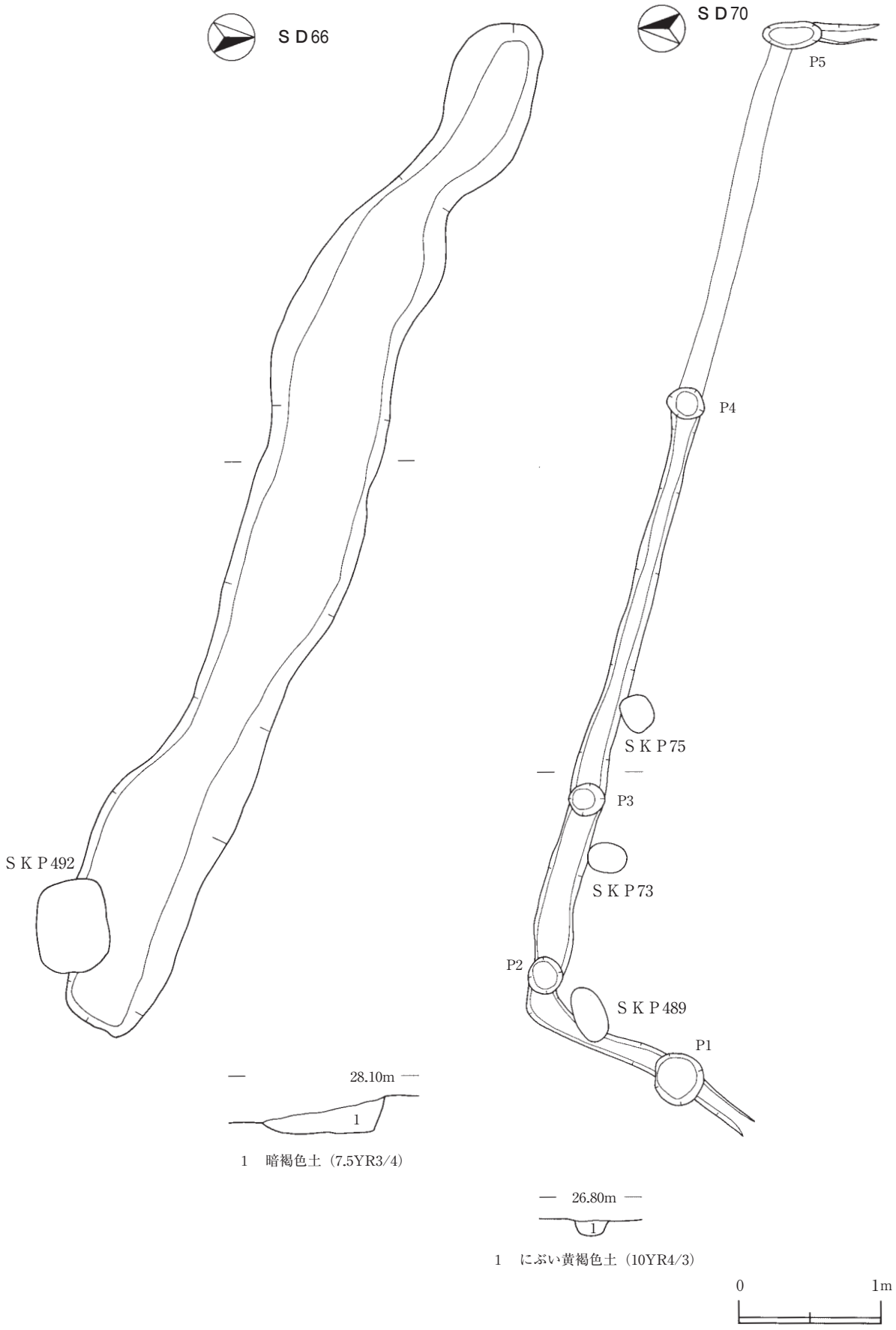


1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　炭層

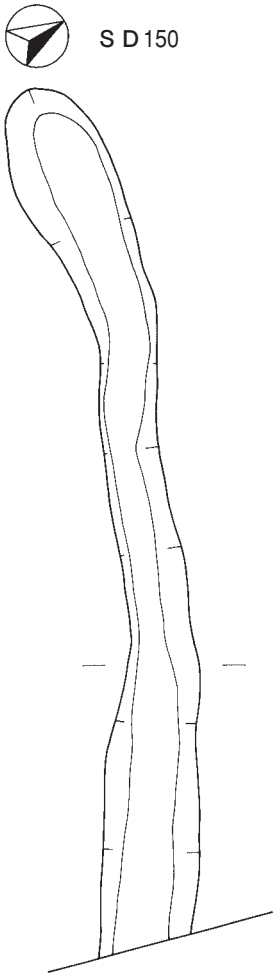
第156図　土坑（２）・土器埋設遺構・焼土遺構・炭焼遺構


ＳＤ25
ＳＤ28
ＳＫＰ54
A
B
P1
P2
C
D
P3
A
28.60m
B
2
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
2　暗褐色土（7.5YR3/4）
C
28.10m
D
1
1　暗褐色土（7.5YR3/4）
0
4m

第157図　溝跡（１）

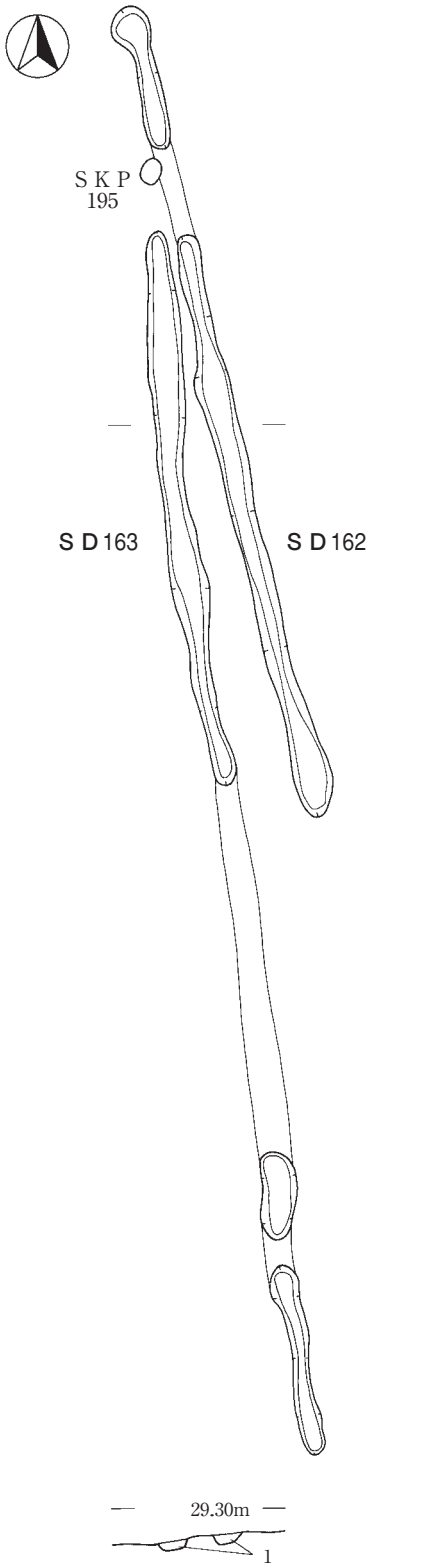

ＳＤ66
ＳＤ70
P5
P4
ＳＫＰ75
P3
ＳＫＰ73
P2
ＳＫＰ489
P1
ＳＫＰ492
28.10m
1
1　暗褐色土（7.5YR3/4）
26.80m
1
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
0
1m

第158図　溝跡（２）



1　暗褐色土（10YR3/4）

0　1m



ＳＤ162
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
ＳＤ163
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）

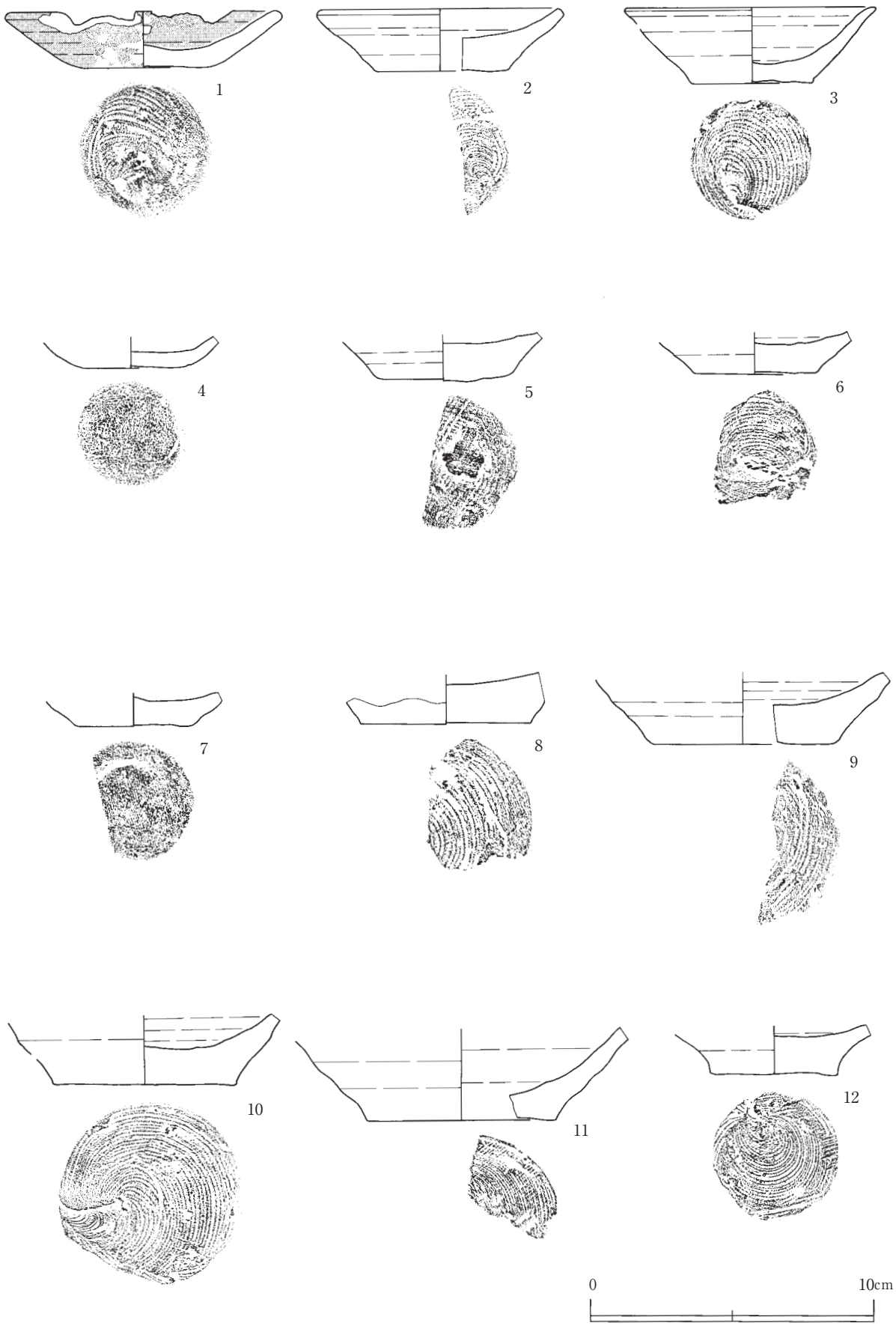
0　4m

第159図　溝跡（３）

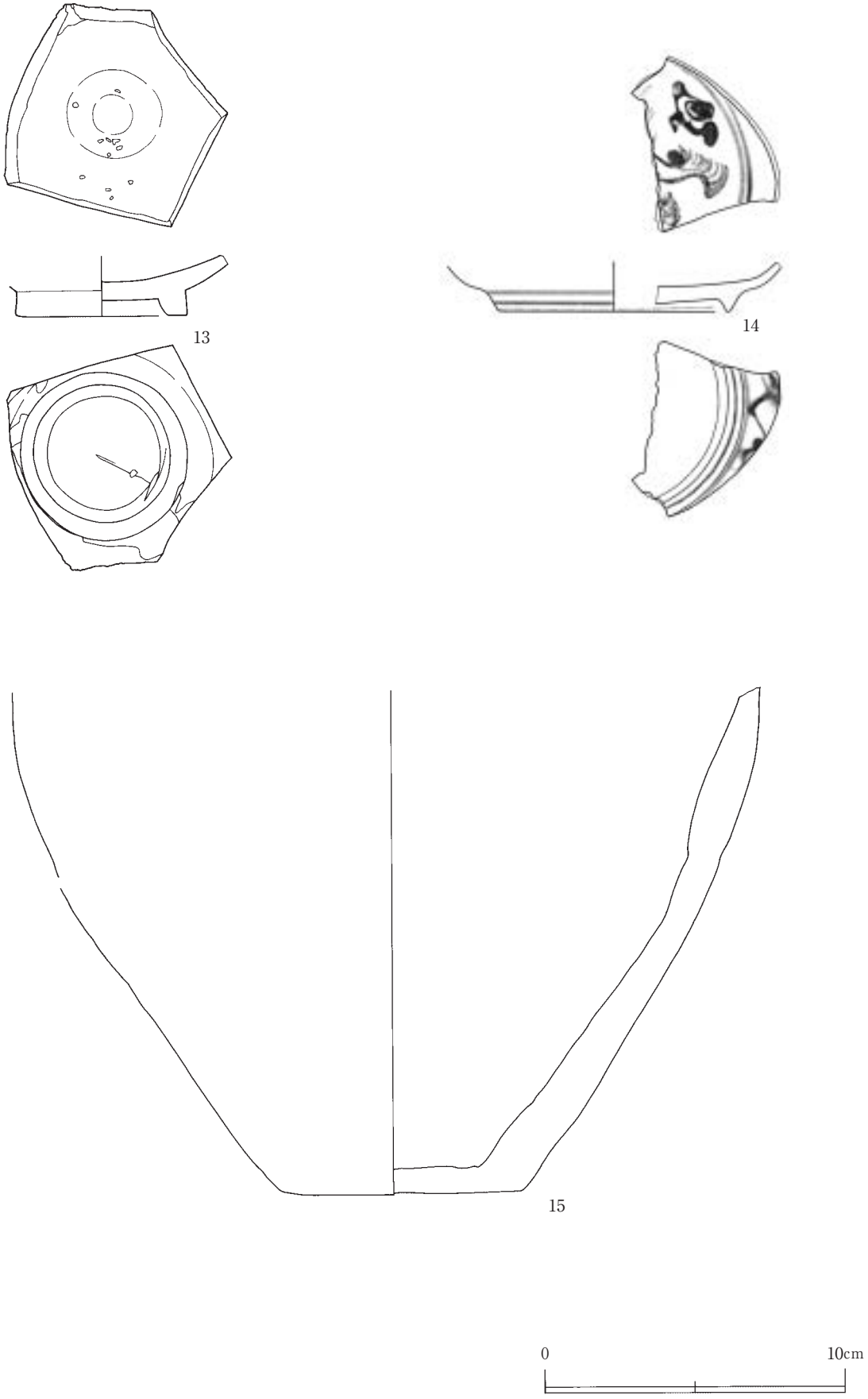
第18表　北調査区Ａ出土遺物一覧表

挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
160- 1	59- 7	表採	土器	かわらけ	皿	(9.5)	2.0	(4.4)	12C	ロクロ(回転糸切り)
2	8	SKP103	土器	かわらけ	皿	(8.4)	—	(4.5)	12C	ロクロ(回転糸切り)
3	9	LJ97	土器	かわらけ	皿	(8.7)	2.7	(4.2)	12C	ロクロ(回転糸切り)
4	—	LK97	土器	かわらけ	皿	—	—	(3.7)	12C	ロクロ
5	—	LC103	土器	かわらけ	皿	—	—	(4.5)	12C	ロクロ(回転糸切り)
6	—	LB105	土器	かわらけ	皿	—	—	(4.4)	12C	ロクロ(回転糸切り)
7	—	表採	土器	かわらけ	皿	—	—	(3.9)	12C	ロクロ(回転糸切り)
8	—	KT113	土器	かわらけ	皿	—	—	(6.0)	12C	ロクロ(回転糸切り)
9	—	LF103	土器	かわらけ	皿	—	—	(6.3)	12C	ロクロ(回転糸切り)
10	—	表採	土器	かわらけ	皿	—	—	(6.4)	12C	ロクロ(回転糸切り)
11	—	表採	土器	かわらけ	皿	—	—	(6.6)	12C	ロクロ(回転糸切り)
12	—	LA103	土器	かわらけ	皿	—	—	(4.5)	12C	ロクロ(回転糸切り)
161-13	60- 1	LJ98	磁器	白磁	碗	—	—	(5.7)		
14	2	LH98	磁器	染付	皿	—	—	—	15C後～16C前	
15	3	SR100	土器	瓦質土器	甕	—	—	(8.1)		
162-16	4	表採	石製品	五輪塔	空輪･風輪	21.3	15.0	13.8		
17	5	表採	石製品	五輪塔	火輪	(17.4)	(31.3)	(19.7)		

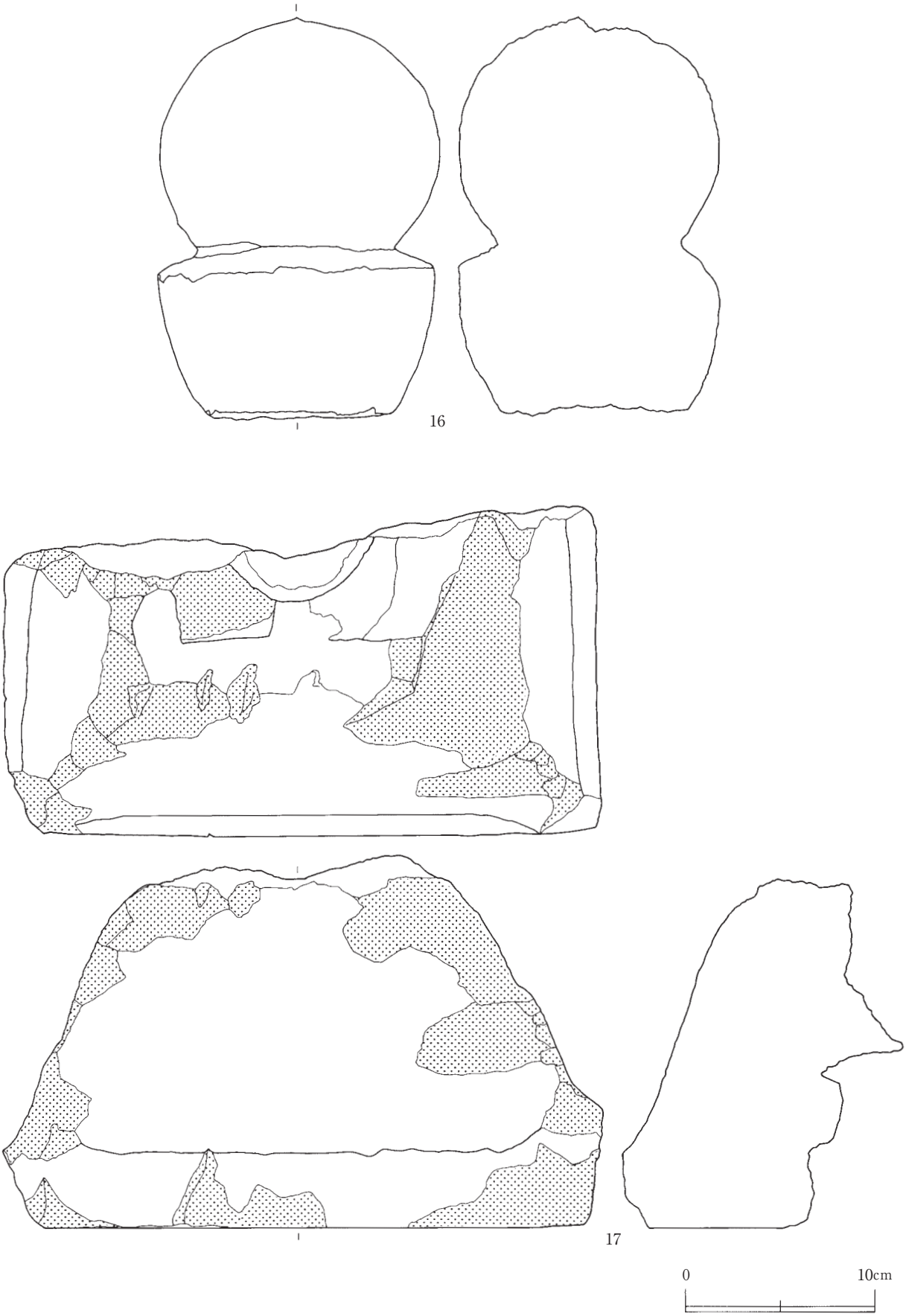
※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。石製品ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
　　なお、法量の（　）内の数値は推定値である。



第160図　北調査区Ａ出土遺物（１）



第161図　北調査区Ａ出土遺物（２）



第162図　北調査区Ａ出土遺物（３）

15　北調査区Ｂの検出遺構と出土遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ5023（第163図）

ＬM111、ＬＮ110～112、ＬＯ112グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5192・5219・5220と重複し、本遺構が古い。母屋部分が桁行５間×梁行１間で、南東側に１間×１間の張り出し部が取り付く。桁行総長（Ｐ１～Ｐ５）9.67m、梁行総長（Ｐ６～Ｐ12）1.96mである。張り出し部を含む北東―南西方向の総延長は3.96m（Ｐ６～Ｐ14）である。柱掘形は径0.24～0.68mの楕円形で、深さ0.16～0.54mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でN―51°―Wである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5026（第164図）

ＬＮ111・112、ＬＯ112グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5186・5380・7008と重複し、本遺構が古い。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ４～Ｐ６）5.11m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ４）2.47mである。柱掘形は径0.25～0.78mの楕円・隅丸方形で、深さ0.41～0.52mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でN―55°―Wである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5039（第164図）

ＬM111～113、ＬＮ112グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5230と重複し、本遺構が古い。母屋部分が桁行２間×梁行１間で、北東方向に１間幅（Ｐ２～Ｐ５）1.43mの庇が取り付く。桁行総長（Ｐ３～Ｐ５）3.84m、梁行総長（Ｐ５～Ｐ８）1.70mで、庇を含む建物方向の総延長は（Ｐ２～Ｐ８）3.13mである。柱掘形は径0.32～0.53mの隅丸方形で、深さ0.23～0.54mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、北側柱列でN―50°―Wである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5098（第165図）

ＬＫ113、ＬＬ112・113、ＬM113グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5208・5300と重複し、本遺構が古い。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ４～Ｐ６）4.11m、梁行総長（Ｐ１～Ｐ４）1.83mである。柱掘形は径0.22～0.56mの楕円・隅丸方形で、深さ0.24～0.45mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でN―37°―Eである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5235（第165図）

ＬＮ111、ＬＯ110・111グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ２～Ｐ４）2.07m、梁行総長（Ｐ３～Ｐ４）2.04mである。柱掘形は径0.33～0.48mの楕円・隅丸方形で、深さ0.3～0.44mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、側柱列でN―40°―Eである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5581（第166図）

ＬＪ108・109、ＬＫ108・109グリッドの地山面で検出した。桁行２間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ３）4.89m、梁行総長（Ｐ２～Ｐ５）3.06mである。柱掘形は径0.18～0.29mの楕円形で、深さ0.18～0.29mである。堆積土は褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でN―38°―Eである。遺物は出土しなかった。

ＳＢ5596（第166図）

ＬＩ・ＬＪ107グリッドの地山面で検出した。桁行１間×梁行１間で、桁行総長（Ｐ１～Ｐ２）1.70ｍ、梁行総長（Ｐ２～Ｐ４）1.23ｍである。柱掘形は径0.19～0.32ｍの楕円形で、深さ0.53～0.66ｍである。堆積土は色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は、西側柱列でＮ―39°―Ｅである。遺物は出土しなかった。

（２）柱列跡

ＳＡ5005（第167図）

ＬＫ113～115、ＬＬ114～116、ＬＭ115グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ7063・7199と重複し、本遺構が古い。長さ8.53ｍで、５基の柱穴列からなる。Ｎ―48°―Ｗの方向性がある。柱掘形は径0.3～0.54ｍの楕円・隅丸方形で、深さ0.28～0.4ｍである。堆積土は全て１層で人為的堆積である。遺物は出土していない。

ＳＡ5132（第167図）

ＬＬ117、ＬＭ115～117グリッドの地山面で検出した。長さ6.55ｍで、４基の柱穴列からなる。Ｎ―40°―Ｅの方向性がある。柱掘形は径0.29～0.46ｍの楕円形で、深さ0.29～0.37ｍである。各柱穴の堆積土は全て１層で人為的堆積である。どの柱穴からも遺物は出土しなかった。

ＳＡ5505（第167図）

ＬＨ119、ＬＩ118・119グリッドの地山面で検出した。長さ4.62ｍで、５基の柱穴列からなる。Ｎ―38°―Ｅの方向性がある。各柱穴の堆積土は１層で人為的堆積である。Ｐ１～Ｐ４は杭跡と見られ、底面は円錐状に尖る。柱掘形は径0.18～0.34ｍの楕円形で、深さ0.13～0.33ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＡ5509（第167図）

ＬＩ119、ＬＪ118グリッドの地山面で検出した。ＳＫ5516と重複し、本遺構が古い。長さ6.02ｍで、４基の柱穴列からなる。Ｎ―40°―Ｅの方向性がある。柱掘形は径0.26～0.44ｍの円形で、深さ0.14～0.2ｍである。各柱穴の堆積土は全て１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＡ5609（第167図）

ＬＫ108・109、ＬＬ108グリッドの地山面で検出した。長さ3.61ｍで、３基の柱穴列からなる。Ｎ―18°―Ｅの方向性がある。Ｎ―40°―Ｅの方向性がある。柱掘形は径0.25～0.4ｍの円形で、深さ0.15～0.32ｍである。各柱穴の堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

（３）竪穴状遺構

ＳＫＩ5006（第168図）

ＬＬ114・115、ＬＭ115・114グリッドの地山面で検出した。ＳＫ7038・7039、ＳＤ7159、ＳＫＰ5171・5174・7015と重複し、ＳＫ7039、ＳＫＰ5171・5174・7015よりも古く、ＳＫ7038、ＳＤ7159より新しい。平面形は長軸（北西―南東）3.53ｍ×短軸（北東―南西）3.12ｍの方形を呈し、検出面からの深さは0.1ｍである。底面は平坦であるが若干の凸凹が見られ、壁の傾きは急である。付随する柱穴２基を検出した。各柱穴の底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、竪穴も柱

穴も人為的堆積である。西側と中央付近の底面の一部に貼床状に修築した痕跡が見られる。各柱穴の大きさは径0.22～0.3mで、深さ0.1～0.12mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ5052（第168図）

ＬＮ111グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5380・5388・5399・7154と重複し、ＳＫＰ5380・7154より古く、ＳＫＰ5388・5399より新しい。平面形は長軸（北西―南東）2.24m×短軸（北東―南西）1.84mの方形を呈し、検出面からの深さは0.29mである。底面は平坦であるが、若干の凹凸が見られ、壁の傾きはやや急である。付随する柱穴を中央に１基検出した。堆積土は６層に分けられ、柱穴と最下層土は自然堆積と判断し、それよりも上層土は人為的堆積である。柱穴の大きさは径0.25～0.31mで、深さ0.09mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ5055（第169図）

ＬＫ119・120、ＬＬ118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5056と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）6.89m×短軸（北西―南東）3.71mで北側が開口するコの字型の長方形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは0.46mである。底面は平坦で、壁の傾きは急であり、Ｌ字状の断面形をしている。付随する溝１条と柱穴６基を検出した。溝は全長4.08m、最大幅0.22mを計り、西から東へ直線的に延びる。底面からの深さは0.08mである。堆積土は１層で人為的堆積である。各柱穴の大きさは径0.22～0.41mで、深さ0.08～0.58mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ5056（第169図）

ＬＮ117～119、ＬＭ117～119、ＬＬ118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5055・7190と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（東―西）10.43m×短軸（北―南）4.08mで北側が開口するコの字型の長方形を呈し、最も深い南側で検出面からの深さは0.72mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。付随する溝１条と長軸方向に４基・短軸方向に２基の８基の柱穴を検出した。溝は全長5.88m最大幅0.2mを計り、西壁から南西隅を通り南壁に沿うようにＬ字状に延びる。底面からの深さは0.08mである。本来の溝は竪穴の掘り込みに沿ってコの字型に延びていたと考えられるが、遺存状態が悪く、その一部しか検出できなかった。各柱穴の距離はＰ１～Ｐ２間が3.37m、Ｐ２～Ｐ３間が3.22m、Ｐ３～Ｐ４間が3.13m、Ｐ５～Ｐ６間が3.2m、Ｐ６～Ｐ７間が3.37m、Ｐ７～Ｐ８間が3.29m、Ｐ１～Ｐ８間が2.98m、Ｐ４～Ｐ５間が3.08mで、長軸方向の最長は9.86m、短軸方向の最長は3.08mである。堆積土は３層に分けたが、大きな差異はなく人為的堆積である。各柱穴の大きさは径0.2～0.59mで、深さ0.08～0.59mである。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ7190（第169図）

ＬＯ118、ＬＮ118・119、ＬＭ・ＬＬ119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5056、ＳＫ7134と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）10.48m×短軸（北西―南東）1.85mで北西方向が開口するコの字型の台形に近い長方形を呈し、最も深い南東側で検出面からの深さは0.2mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。付随する溝１条と柱穴９基を検出した。溝は全長4.06m、最大幅0.29mを計り、北東から南西に直線的に延びる。底面からの深さは0.08mである。堆積土は３層に分けたが、大きな差異はなく人為的堆積である。各柱穴の大きさは径0.18～0.41mで、深さ0.08～0.31mである。遺物は出土しなかった。

（４）土坑

ＳＫ5032（第170図）

ＬＯ114グリッドでの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.20ｍ×短軸（北―南）1.13ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.21ｍである。底面は緩やかな丸みを帯びていて、壁の傾きは北東側がやや急で、それ以外は緩やかである。堆積土は１層で人為的に埋め戻されたものと判断し、全体的に炭化物が混入している。覆土中から礫が４点出土しているが、いずれも被熱痕や使用痕は見られなかった。

ＳＫ5057（第170図）

ＬＫ・ＬＬ113グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）1.05ｍ×短軸（東―西）0.98ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.45ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は２層に分けられ、一括して埋め戻されたものと考えられる。覆土中から57個のコイン大～人頭大の礫が出土しているが、いずれも被熱痕や使用痕は見られなかった。同質の礫が調査区内外でよく見られることから井戸の廃絶時に周辺から石を拾い集めて埋めたものと考えられる。また遺構の西側部分には炭化物が弧状に集中する範囲があり、井戸の構造を示す物と思われたが明確にすることが出来なかった。現在でも湧水が見られる。

ＳＫ5365（第170図）

ＬＮ・ＬＯ116グリッドの地山面で検出した。ＳＷ5384、ＳＫＰ5400・5431・7186と重複し、ＳＷ5384よりも古く、ＳＫＰ5400・5431・7186よりも新しい。平面形は長軸（北西―南東）3.46ｍ×短軸（北東―南西）2.03ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.7ｍである。底面は狭小で北西側に寄った最深部から長軸方向に、明瞭な階段状の２段の段差が見られる。壁の傾きは長軸方向が段差に沿って緩やかであり、短軸方向はやや急である。堆積土は７層に分けられたが、下位の５層は自然堆積と判断し、上位２層には径0.07～0.26ｍの礫が11点混入している事から、人為的堆積である。遺物は白磁が１点出土した。

ＳＫ5384（第170図）

ＬＯ116グリッドの地山面で検出した。ＳＫ5365と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）1.10ｍ×短軸（北西―南東）0.93ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.22ｍである。底面は西側に向かって傾斜し、木酢液や水蒸気を集め、排出する役割を果たしたと考えられる径0.2ｍの凹みが見られる。堆積土は４層で、１・２層は炭焼成時に簡易に設けられた天井が崩落したもので、３・４層は完成した炭を取り出した後の残土である。覆土中から被熱赤化した礫が４点出土した。

ＳＫ5408（第170図）

ＬＮ115グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.84ｍ×短軸（北東―南東）0.58ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.3ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5414（第170図）

ＬＮ115グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）12.1ｍ×短軸（東―西）11.1ｍ楕円形を呈し、検出面からの深さは0.26ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は３層に分けたが、人為的堆積である。堆積土中から径0.05～0.1ｍの礫が４点出土したが、いずれも

被熱痕や使用痕は見られなかった。

ＳＫ5462（第171図）

ＬM118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5056と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（北東―南西）2.83m×短軸（北西―南東）1.5mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.19mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は瀬戸・美濃産の水注１点が出土した。

ＳＫ5512（第171図）

ＬＩ・ＬＪ114グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北―南）2.38m×短軸（東―西）2.19mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.41mである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5515（第171図）

ＬＩ・ＬＪ116グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸0.55m（北東―南西）×短軸（北西―南東）0.53mの円形を呈し、検出面からの深さは0.5mである。堆積土は１層で、人為的に埋め戻されたものと判断した。底面は平坦で、壁の傾きはやや垂直である。現在でも水が湧出していることから、井戸跡の可能性もある。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5516（第171図）

ＬＩ・ＬＪ118グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5566と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北西―南東）1.85m×短軸（北東―南西）1.49mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.33mである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5545（第171図）

ＬＨ119・120グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）1.32m×短軸（北西―南東）0.75mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.26mである。堆積土は１層で、一括して埋め戻されたものと考えられる。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5607（第171図）

ＬＩ106グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.79m×短軸（北東―南西）0.67mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.25mである。堆積土は３層に分けたが、どれも自然堆積層と判断した。底面は平坦で、壁の傾きは西側は緩やかで、東側は急である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5620（第171図）

ＬＭ・ＬＬ102グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）0.98m×短軸（北東―南西）0.77mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.1mである。堆積土は２層に分けたが、どれも自然堆積層と判断した。底面は西側に向かって傾斜し、壁の傾きは段差をつけながら緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ5628（第172図）

ＬＫ・ＬＬ111グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）2.72m×短軸（北東―南西）2.43mの円形を呈し、検出面からの深さは0.34mである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は東から西方向に傾斜し、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7038（第172図）

ＬＭ115グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5006と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.89ｍ×短軸（北西―南東）0.74ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.4ｍである。底面は緩やかな丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で人為的堆積である。覆土中より径0.08～0.17ｍの65個の礫が出土したが、いずれも被熱痕や使用痕は見られなかった。

ＳＫ7039（第172図）

ＬＬ・ＬＭ115グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5006、ＳＤ5002・7080・7159と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長軸（東―西）1.61ｍ×短軸（北―南）1.42ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.94ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。覆土中から径0.04～0.17ｍの87個の礫が出土したが、いずれも被熱痕や使用痕は見られなかった。

ＳＫ7113（第172図）

ＬＭ119グリッドの地山面で検出し、遺構の一部分が北側調査区外に延びる。検出できた範囲での平面形は長軸（北西―南東）1.19ｍ×短軸（北西―南東）0.90ｍの楕円形と推定され、検出面の深さは0.24ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7125（第172図）

ＬＬ118グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5056、ＳＫＰ7131と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長軸（南西―北東）2.45ｍ×短軸（北東―南西）1.51ｍの楕円形を呈し、検出面から深さは0.13ｍである。底面は東から西にかけて緩やかに傾斜し、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ7134（第172図）

ＬＬ119グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ7190と重複し、本遺構が新しい。平面形は長軸（北西―南東）0.78ｍ×短軸（北東―南西）0.66ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは0.24ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

（５）焼土遺構

ＳＮ5475（第172図）

ＬＭ118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫ5462と隣接し、ＳＫＩ5056・7190よりも本遺構が新しい。平面形は長軸（北―南）0.31ｍ×短軸（西―東）0.3ｍの楕円形の範囲に暗赤褐色の焼土が広がる。焼土の厚さは0.1ｍである。堆積土は２層である。浅い掘り込みが見られ、底面から壁面にかけ硬化している。遺物は出土しなかった。

（６）溝跡

ＳＤ5001（第173図）

ＬＫ・ＬＬ115グリッドの地山面で検出した。ＳＤ7080、ＳＫＰ5464・7059と重複し、本遺構が最も古い。北から南へ蛇行しながら延びる溝で、先端は北側へ湾曲する。長さ2.25ｍ、幅0.19ｍ、検出面からの深さは0.1ｍである。底面は平坦で、北西側の壁がやや急な以外は緩やかである。堆積土は

１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5002（第173図）

ＬＬ・ＬＭ115、ＬＬ116グリッドの地山面でＳＫＩ5006をコの字型に取り囲むようにして検出した。ＳＫ7039・7080、ＳＫＰ5397・7178と重複し、本遺構が最も古い。北から南へやや蛇行しながら直線的に延び、東へ直角に曲がり直線的に延び、更に北へ直角に曲がり直進し、コの字型になっている溝で、長さ8.77ｍ、幅0.29ｍ、検出面からの深さは0.11ｍである。底面はやや丸みを帯びており、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5485（第173図）

ＬＫ・ＬＬ116グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5492・7200と重複し、本遺構が古い。北西から南東へ直線的に延びる溝で、長さ4.35ｍ、幅0.5ｍ、検出面からの深さは0.15ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5507（第176図）

ＬＩ116・117、ＬＪ115・116、ＬＫ115グリッドの地山面で検出した。北東から南西に直線的に延びる溝で、北側の先端部が北方へ緩やかに湾曲する。長さ11.3ｍ、幅0.96ｍ、検出面からの深さは0.21ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は陶器片が一点出土した。

ＳＤ5532（第174図）

ＬＨ119、ＬＩ118・119グリッドの地山面で検出した。ＳＫ5545と重複し、本遺構が古い。北東から南西方向に直線的に延びる溝で、長さ5.15ｍ、幅0.2ｍ、検出面からの深さは0.05ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5534（第174図）

ＬＩ120グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ5571と重複し、本遺構が古い。北東から南西方向に直線的に延びる溝で、長さ2.55ｍ、幅0.39ｍ、検出面からの深さは0.09ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5593（第174図）

ＬＨ108・109、ＬＩ108グリッドの地山面で検出した。ＳＫ5594と重複し、本遺構が古い。北東から南西方向にやや蛇行しながらも直線的に延びる溝で、長さ6.95ｍ、幅0.48ｍ、検出面からの深さは0.07ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5619（第174図）

ＬＫ110・111、ＬＬ110グリッドの地山面で北東から南西への緩傾斜地で検出した。北東から南西方向にほぼ直線的に延びる溝で、長さ5.36ｍ、幅0.24ｍ、検出面からの深さは0.13ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ5625（第176図）

ＬＫ110・111、ＬＬ110グリッドの地山面で検出した。北→南→西方向に「Ｌ」字状に延びる溝で、長さ10.40ｍ、幅0.44ｍ、検出面からの深さは0.12ｍである。堆積土は１層で人為的堆積である。底面はやや丸みを帯びており、壁の傾きは緩やかである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ7030（第175図）

ＬＮ・ＬＭ114グリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5006と重複し、本遺構が古い。北東から南西へ蛇行しながら延びる溝で、長さ3.19m、幅0.46m、検出面からの深さは0.06mである。底面は平坦で、南東側の壁がやや急で、それ以外は緩やかである。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ7080（第176図）

ＬＪ117、ＬＫ115～117、ＬＬ115グリッドの地山面で検出した。ＳＤ5001・5002・7159、ＳＫ7039、ＳＫＰ7132・7133と重複し、ＳＤ5001・5002・7159よりも新しく、ＳＫ7039、ＳＫＰ7132・7133よりも古い。弧状を呈する溝で、長さ13.62m、幅1.52m、検出面からの深さは0.54mである。底面はほぼ平坦であるが、中央部が丸みを帯びてくぼんでおり、壁の傾きは急である。堆積土は２層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ7159（第175図）

ＬＬ・ＬＭ115のグリッドの地山面で検出した。ＳＫＩ5006、ＳＫ7039、ＳＤ7161、ＳＫＰ7191と重複し、ＳＤ7161よりも新しく、ＳＫＩ5006、ＳＫ7039、ＳＫＰ7191よりも古い。北西―南東へほぼ直線的に延び、南側は二股に分かれている溝で、長さ4.48m、幅0.47m、検出面からの深さは0.09mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

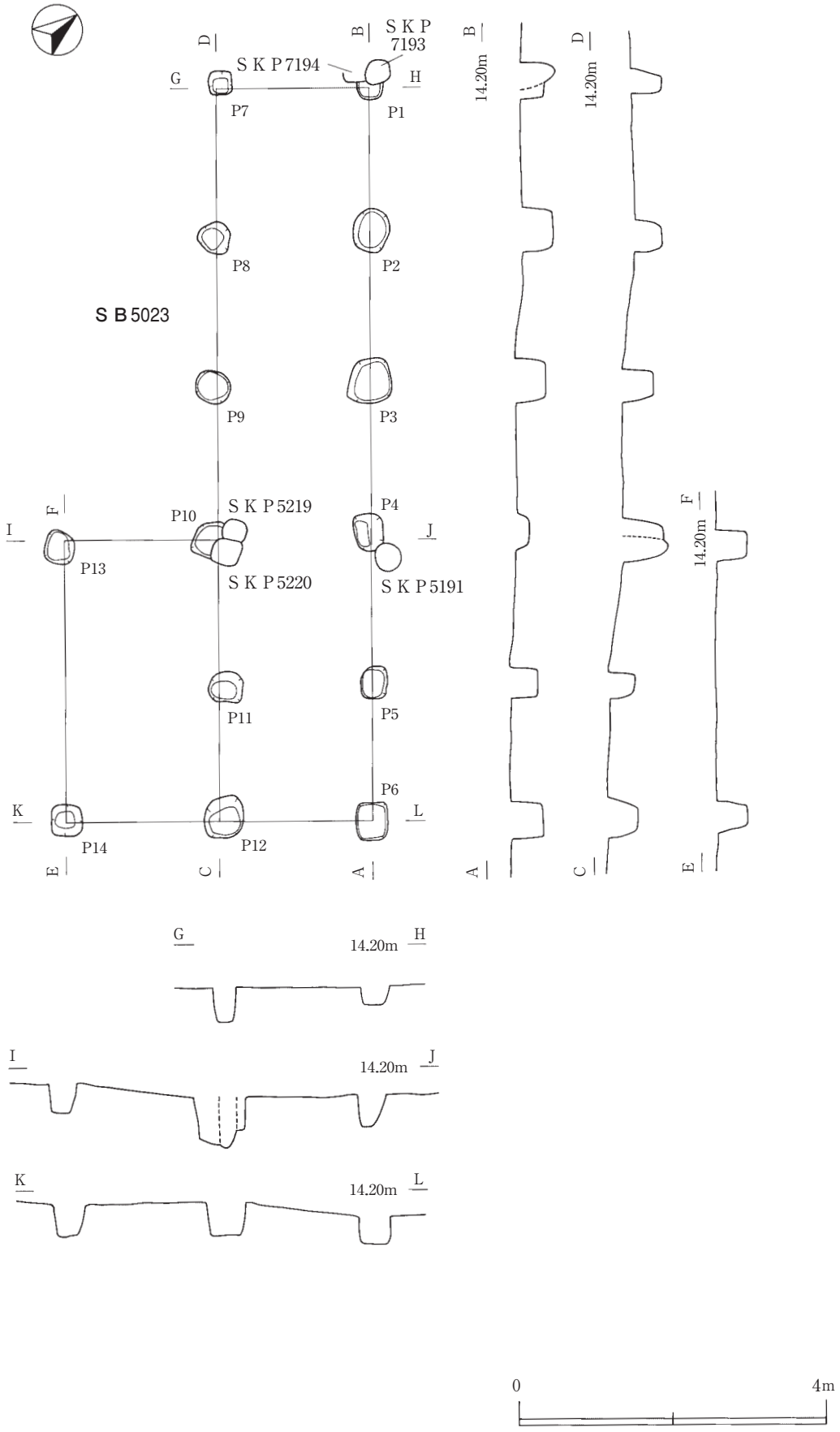
ＳＤ7161（第175図）

ＬＭ115グリッドの地山面で検出した。ＳＤ7159、ＳＫＰ5496と重複し、本遺構が古い。北西―南東方向に直線的に延びる溝で、長さ2.47m、幅0.27m、検出面からの深さは0.1mである。底面は丸みを帯びており、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で人為的堆積である。遺物は出土しなかった。

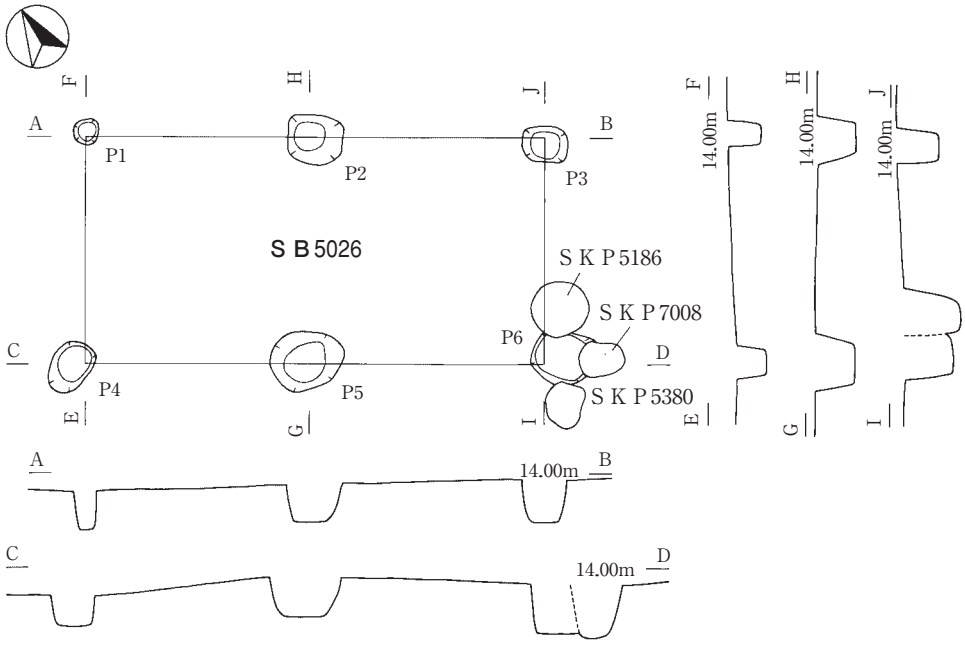
第19表　北調査区Ｂ出土遺物一覧表

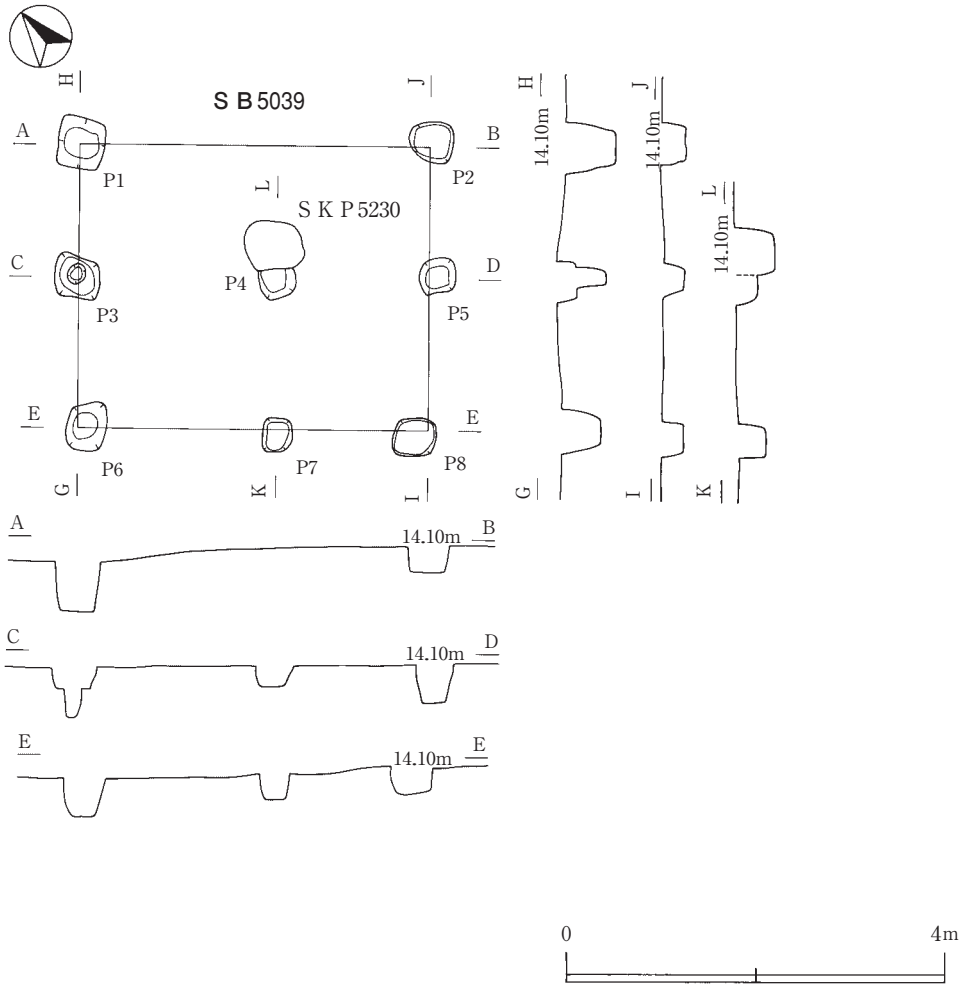
挿図番号	図版番号	出土地点	区別	種類	器種	法量（cm）			年代	備考
						A	B	C		
177- 1	60- 6	LT121	陶器	珠洲系	擂鉢	(29.5)	—	(4.4)	15C代	
2	61- 1	LI120	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	—	—	—	15C代	
3	2	表採	磁器	染付	碗	—	—	—	15C後～16C前	
4	3	SX5462	陶器	瀬戸・美濃	灰釉水注	2.6	3.0	3.2	14C末～15C初	
5	4	SKP5004	土製品	—	土錘	5.5	3.9	3.6		
6	5	表採	土製品	—	土錘	6.0	3.8	2.0		
7	6	SX5462	金属	—	銭貨	2.4	—	—	初鋳年1086年	元祐通寶重さ1.4ｇ
8	7	SX5462	金属	—	銭貨	2.4	—	—	初鋳年1101年	聖宋元寶重さ2.4ｇ
9	8	LJ111	金属	—	銭貨	2.2	—	—		寛永通寶重さ1.8ｇ

※　法量のＡ・Ｂ・Ｃは、陶磁器ではＡ：口径、Ｂ：器高、Ｃ：底径。金属ではＡ：長さ、Ｂ：幅、Ｃ：厚さを示す。
　　なお、法量の（　）内の数値は推定値である。

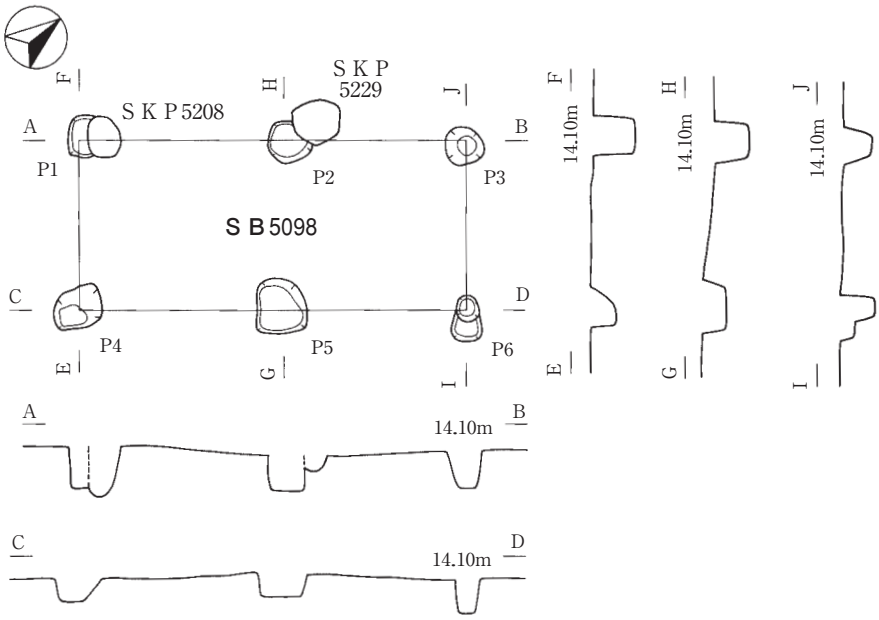


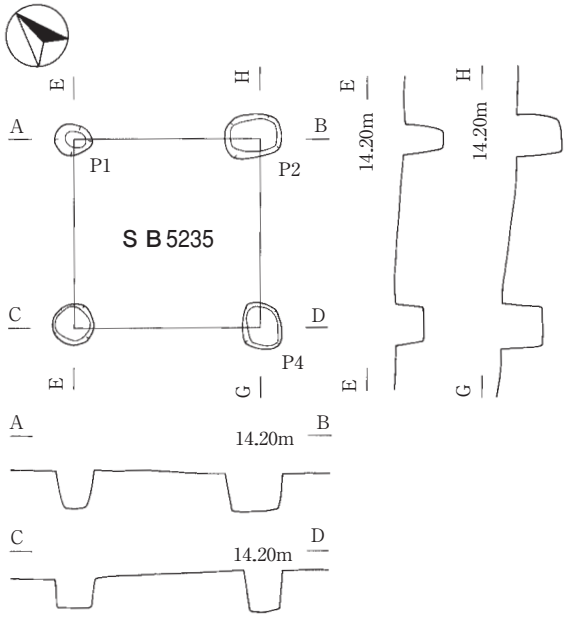
第163図　掘立柱建物跡（１）



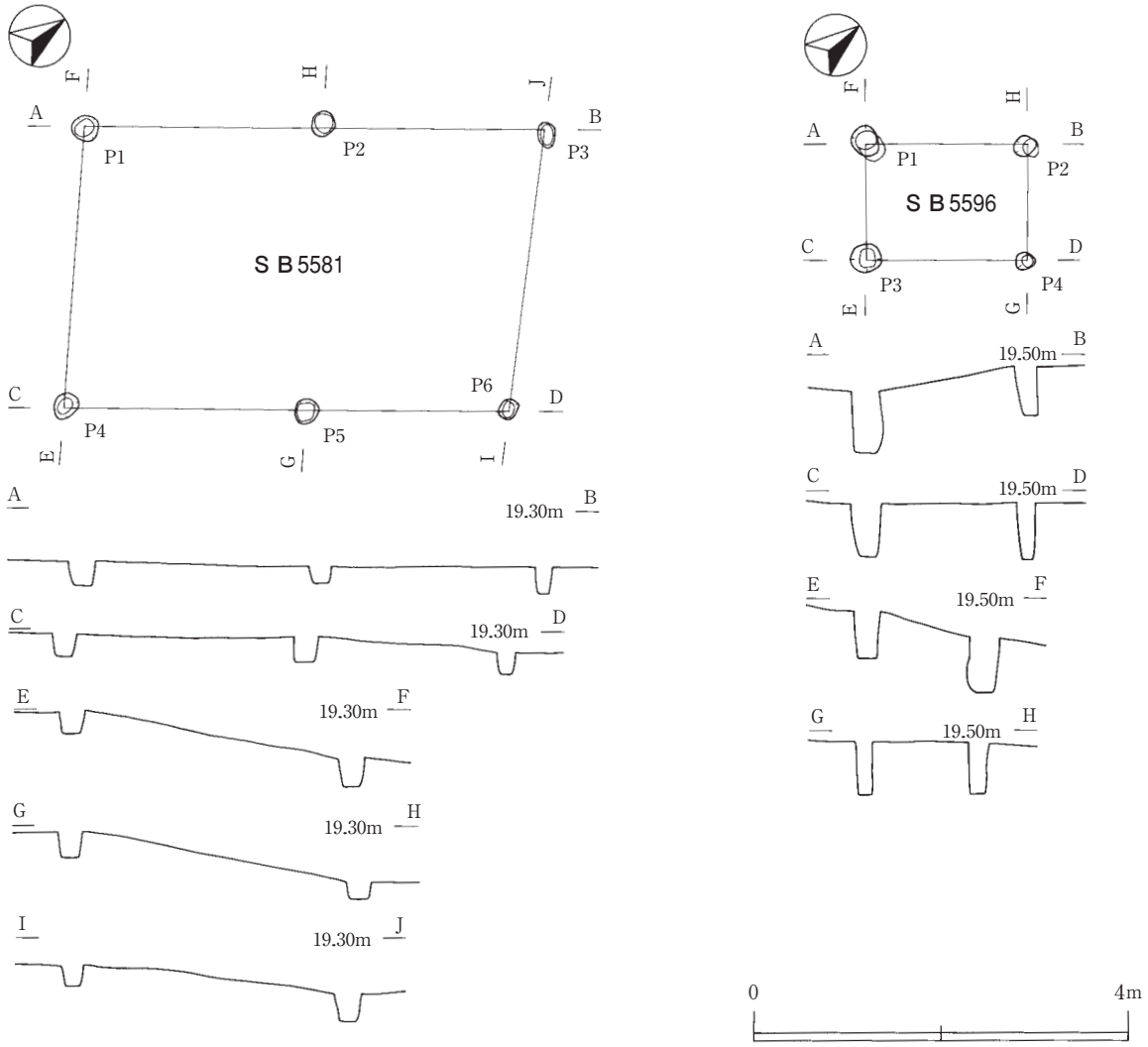


第164図　掘立柱建物（２）

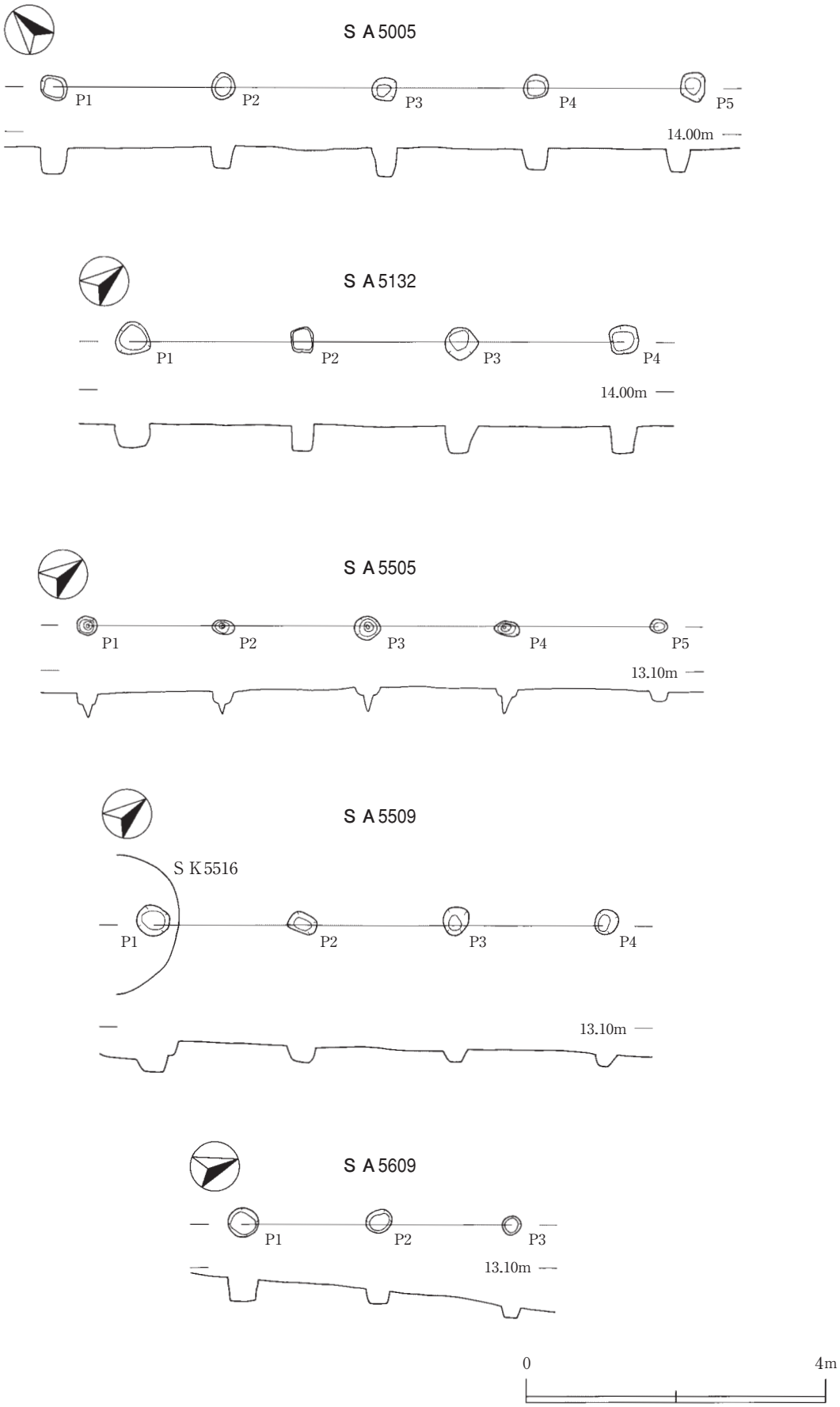




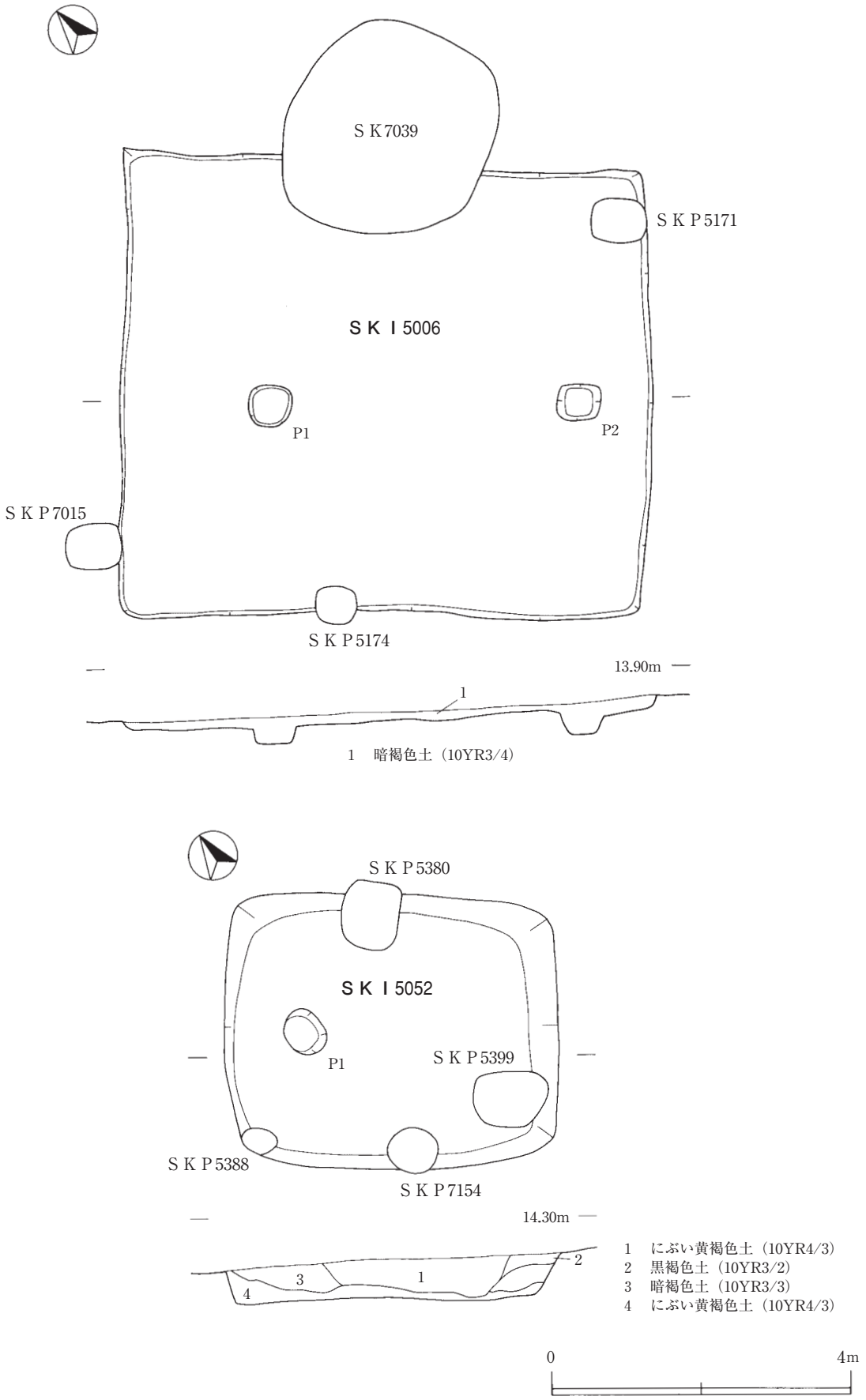
第165図　掘立柱建物跡（３）



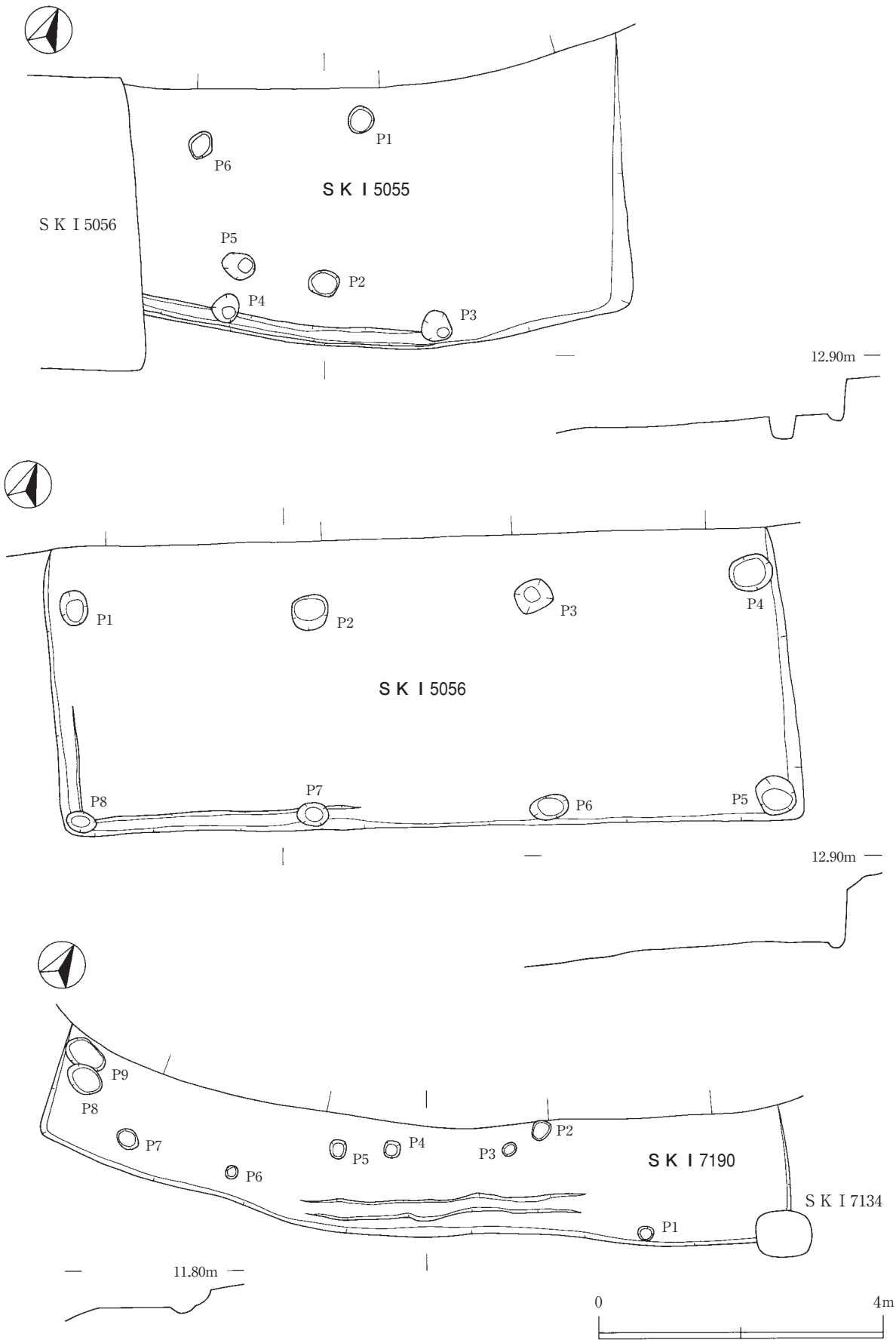
第166図　掘立柱建物跡（４）


ＳＡ5005
P1
P2
P3
P4
P5
14.00m
ＳＡ5132
P1
P2
P3
P4
14.00m
ＳＡ5505
P1
P2
P3
P4
P5
13.10m
ＳＡ5509
ＳＫ5516
P1
P2
P3
P4
13.10m
ＳＡ5609
P1
P2
P3
13.10m
0
4m

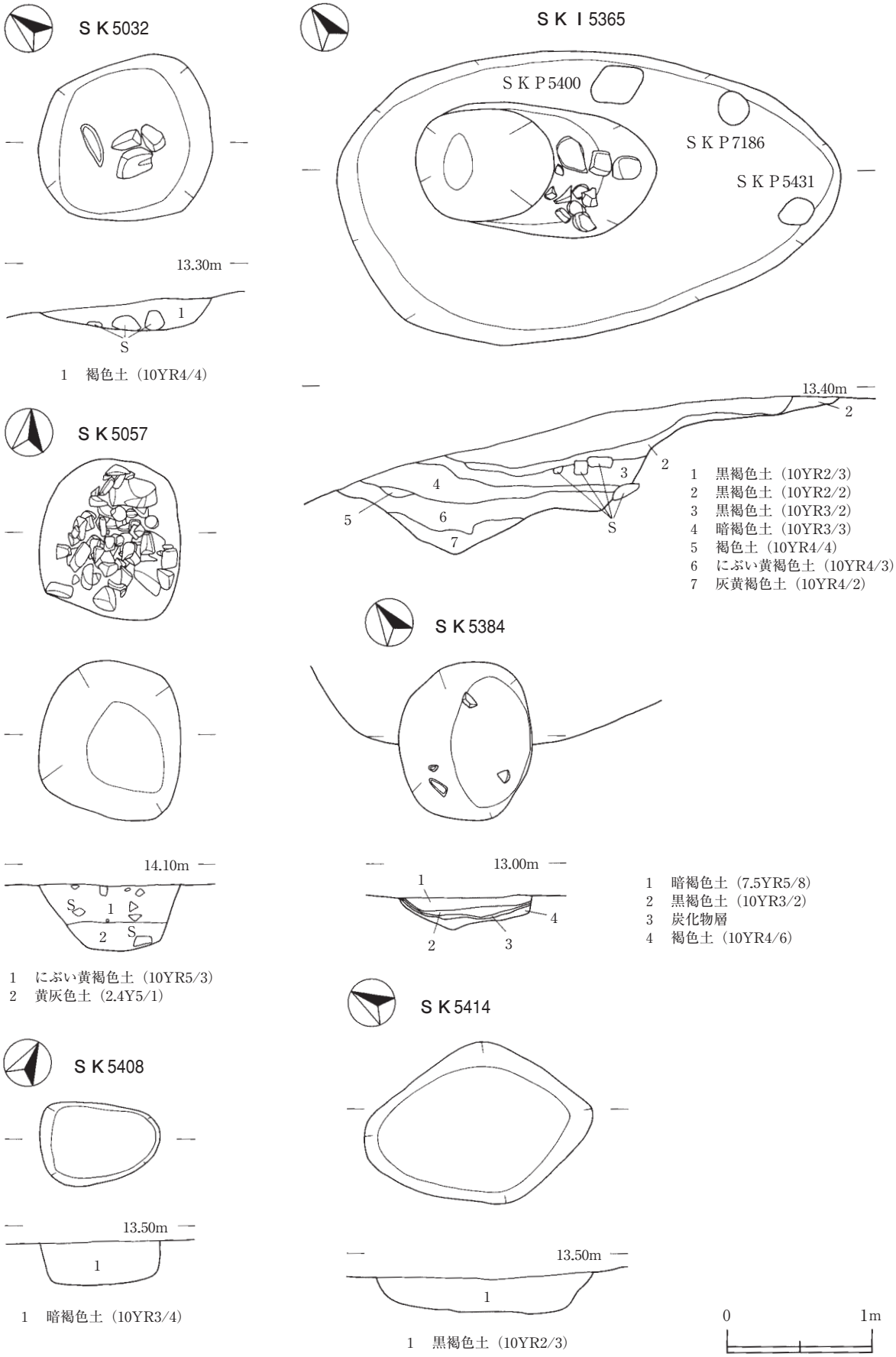
第167図　柱別



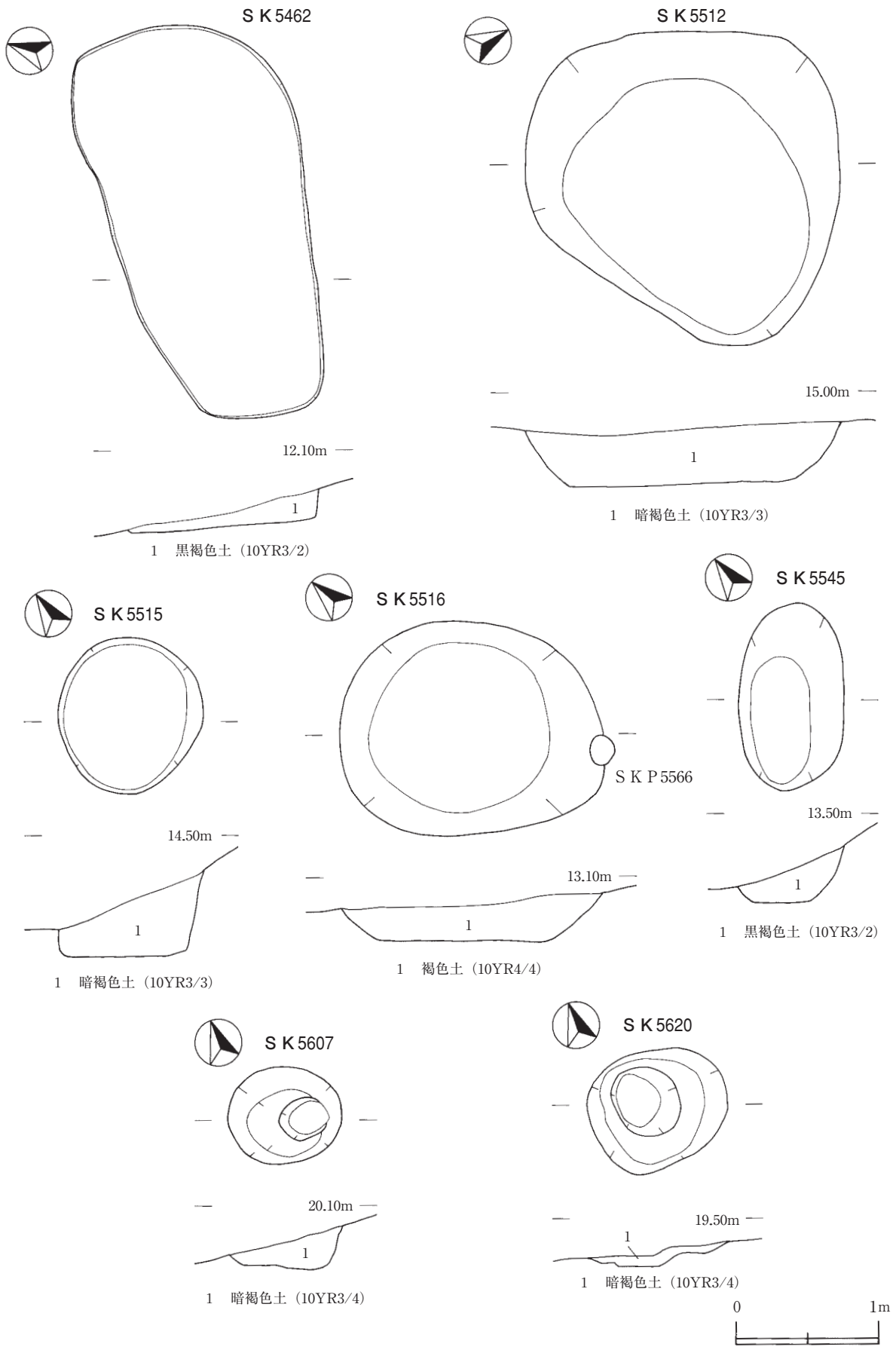
第168図　竪穴状遺構（１）



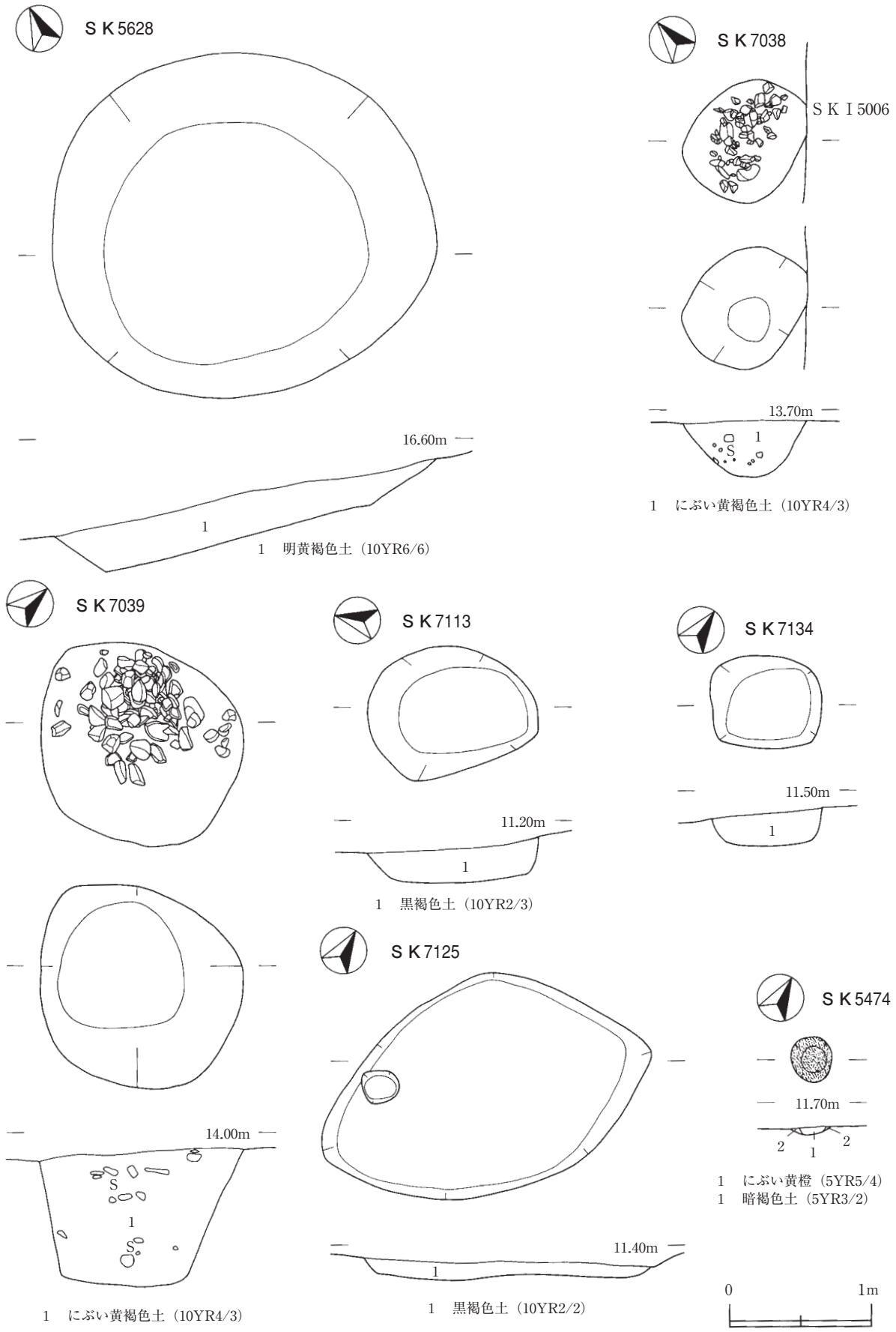
第169図　竪穴状遺構（２）


ＳＫ5032
13.30m
1
S
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＫＩ5365
ＳＫＰ5400
ＳＫＰ7186
ＳＫＰ5431
13.40m
1　黒褐色土（10YR2/3）
2　黒褐色土（10YR2/2）
3　黒褐色土（10YR3/2）
4　暗褐色土（10YR3/3）
5　褐色土（10YR4/4）
6　にぶい黄褐色土（10YR4/3）
7　灰黄褐色土（10YR4/2）
ＳＫ5057
14.10m
1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）
2　黄灰色土（2.4Y5/1）
ＳＫ5384
13.00m
1　暗褐色土（7.5YR5/8）
2　黒褐色土（10YR3/2）
3　炭化物層
4　褐色土（10YR4/6）
ＳＫ5408
13.50m
1　暗褐色土（10YR3/4）
ＳＫ5414
13.50m
1　黒褐色土（10YR2/3）
0
1m

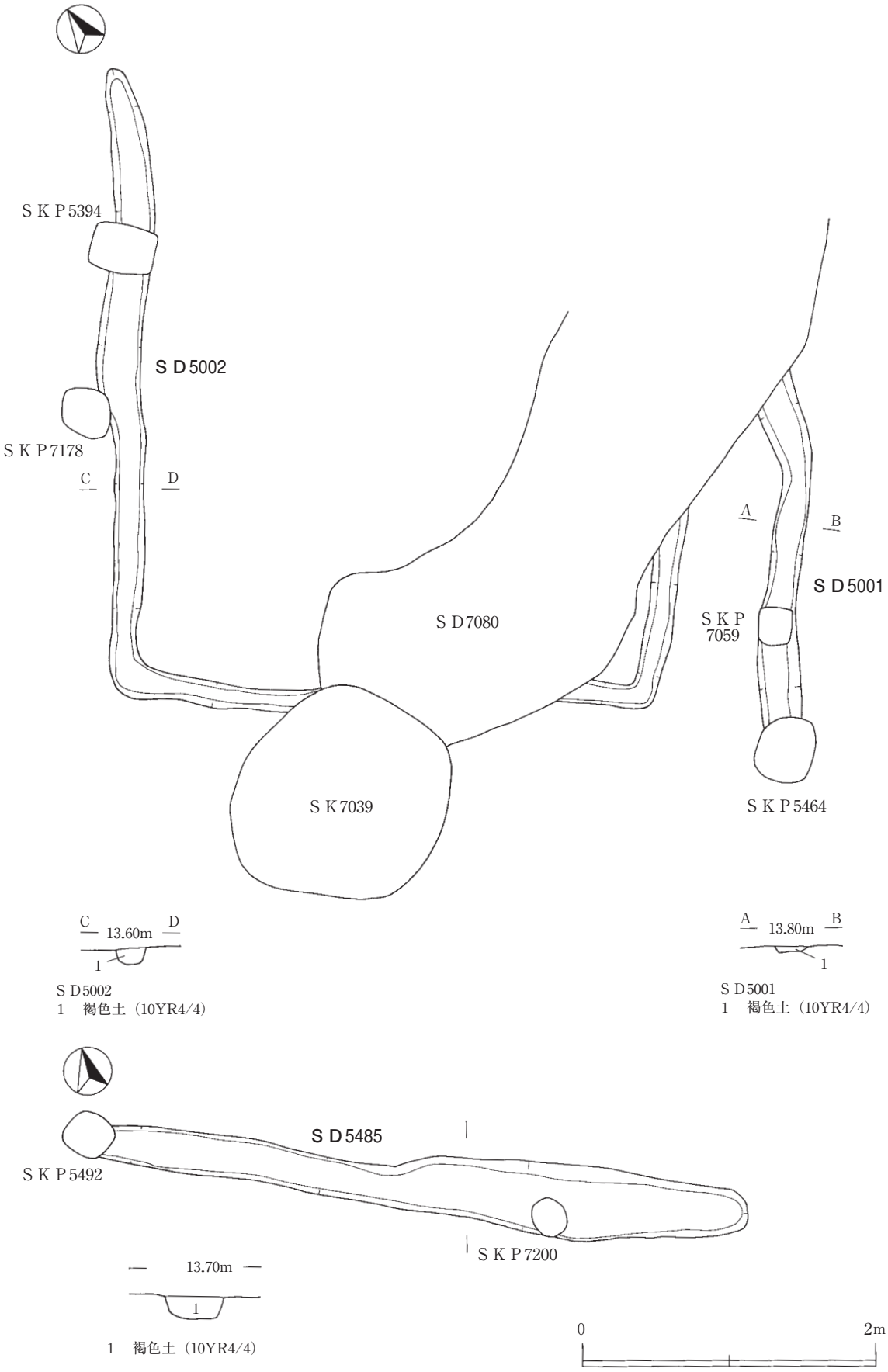
第170図　土坑（１）


ＳＫ5462
12.10m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ5512
15.00m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＫ5515
14.50m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＫ5516
ＳＫＰ5566
13.10m
1
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＫ5545
13.50m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＫ5607
20.10m
1
1　暗褐色土（10YR3/4）
ＳＫ5620
19.50m
1
1　暗褐色土（10YR3/4）
0
1m

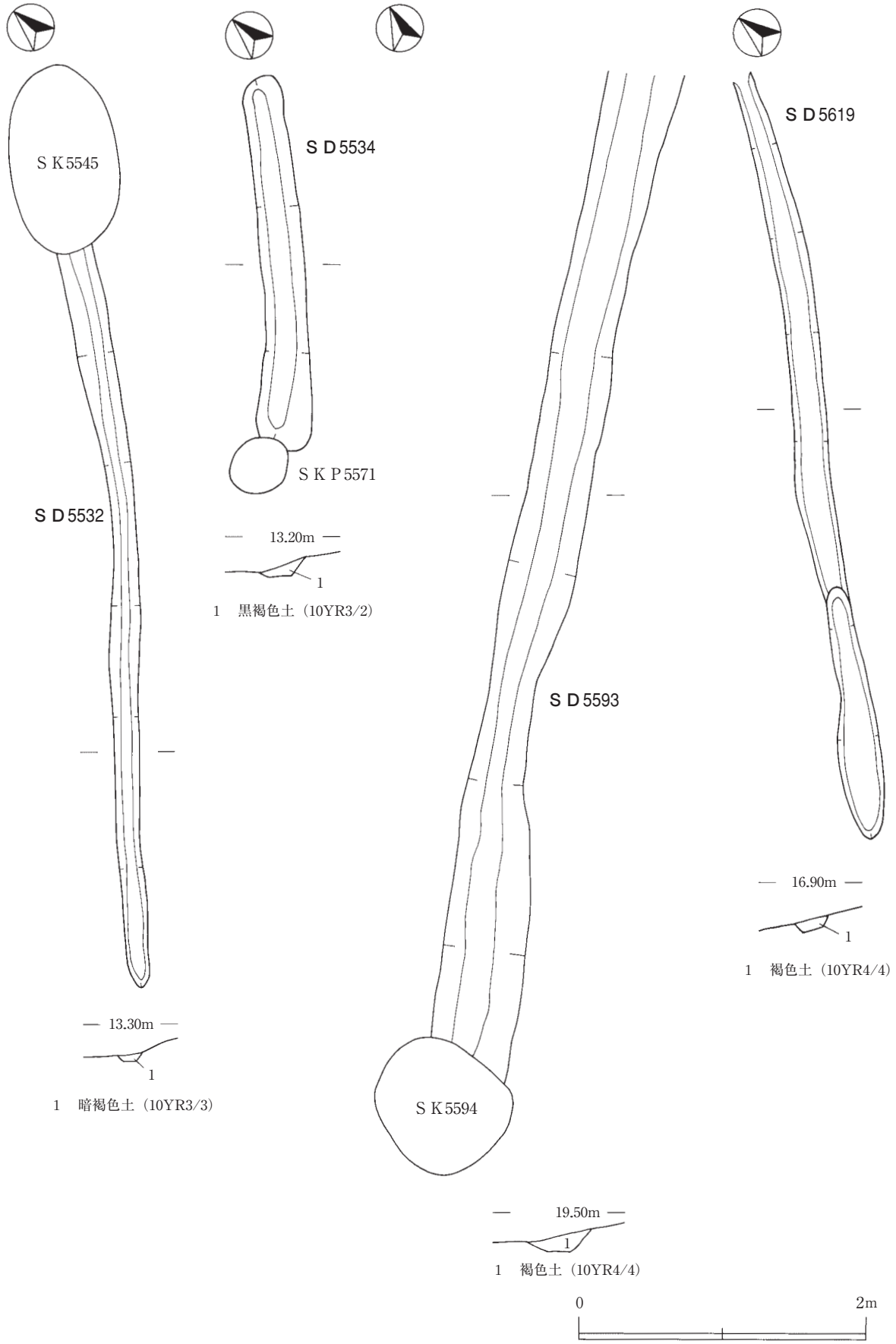
第171図　土坑（２）



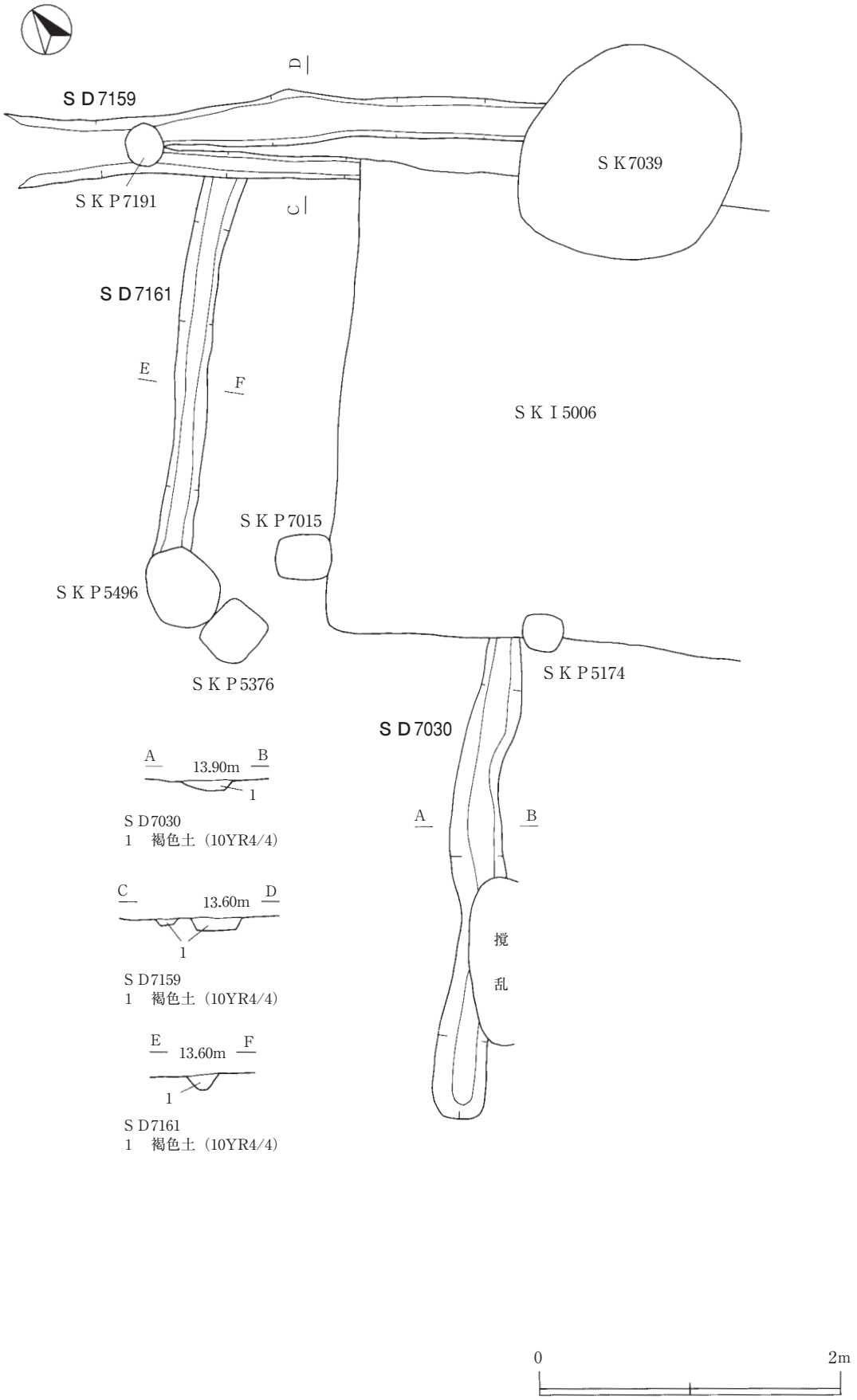
第172図　土坑（３）・焼土遺構


ＳＫＰ5394
ＳＤ5002
ＳＫＰ7178
C
D
ＳＤ7080
ＳＫ7039
A
B
ＳＤ5001
ＳＫＰ
7059
ＳＫＰ5464
C
13.60m
D
1
ＳＤ5002
1　褐色土（10YR4/4）
A
13.80m
B
1
ＳＤ5001
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＤ5485
ＳＫＰ5492
ＳＫＰ7200
13.70m
1
1　褐色土（10YR4/4）
0
2m

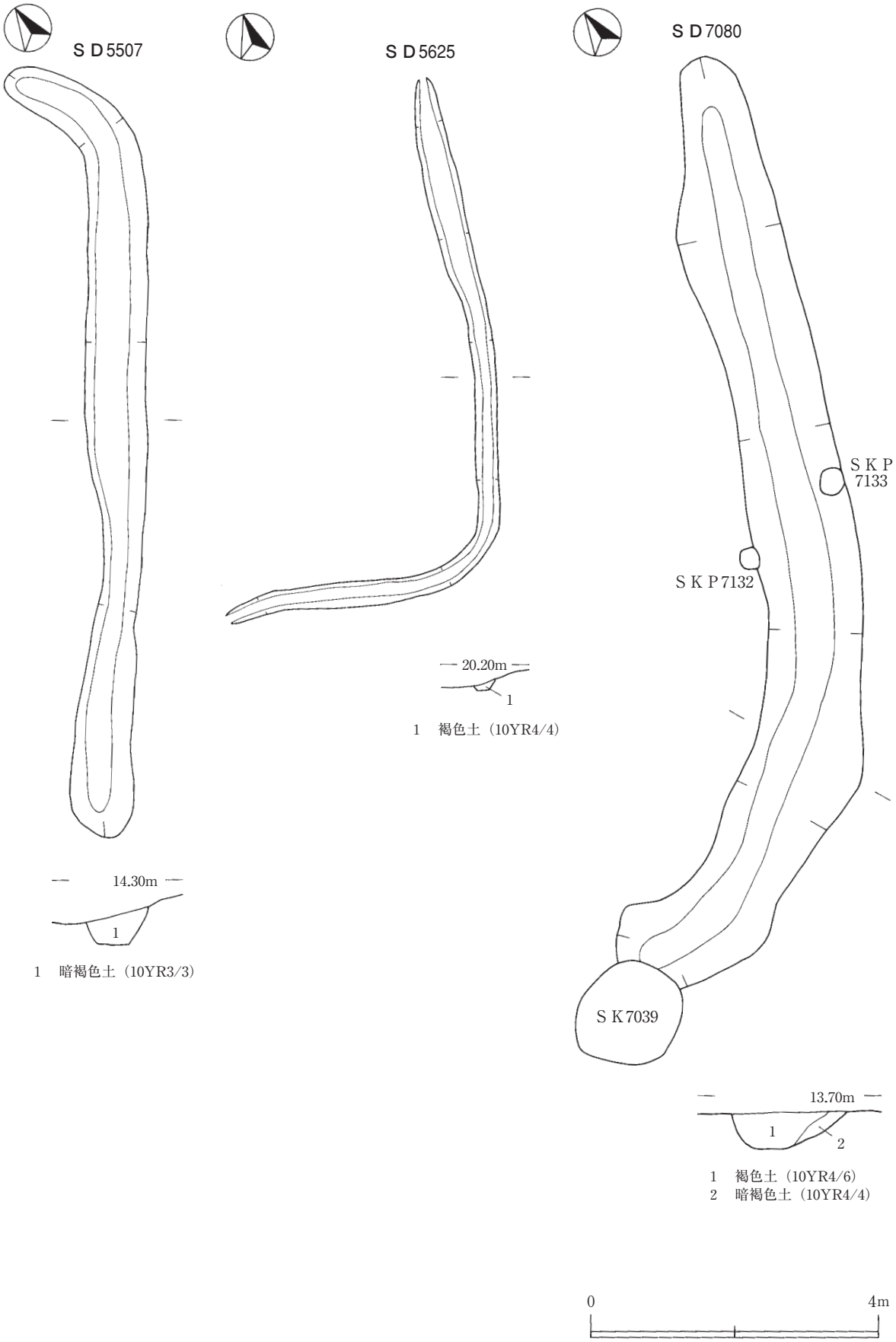
第173図　溝跡（１）


ＳＫ5545
ＳＤ5532
13.30m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＤ5534
ＳＫＰ5571
13.20m
1
1　黒褐色土（10YR3/2）
ＳＤ5593
ＳＫ5594
19.50m
1
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＤ5619
16.90m
1
1　褐色土（10YR4/4）
0
2m

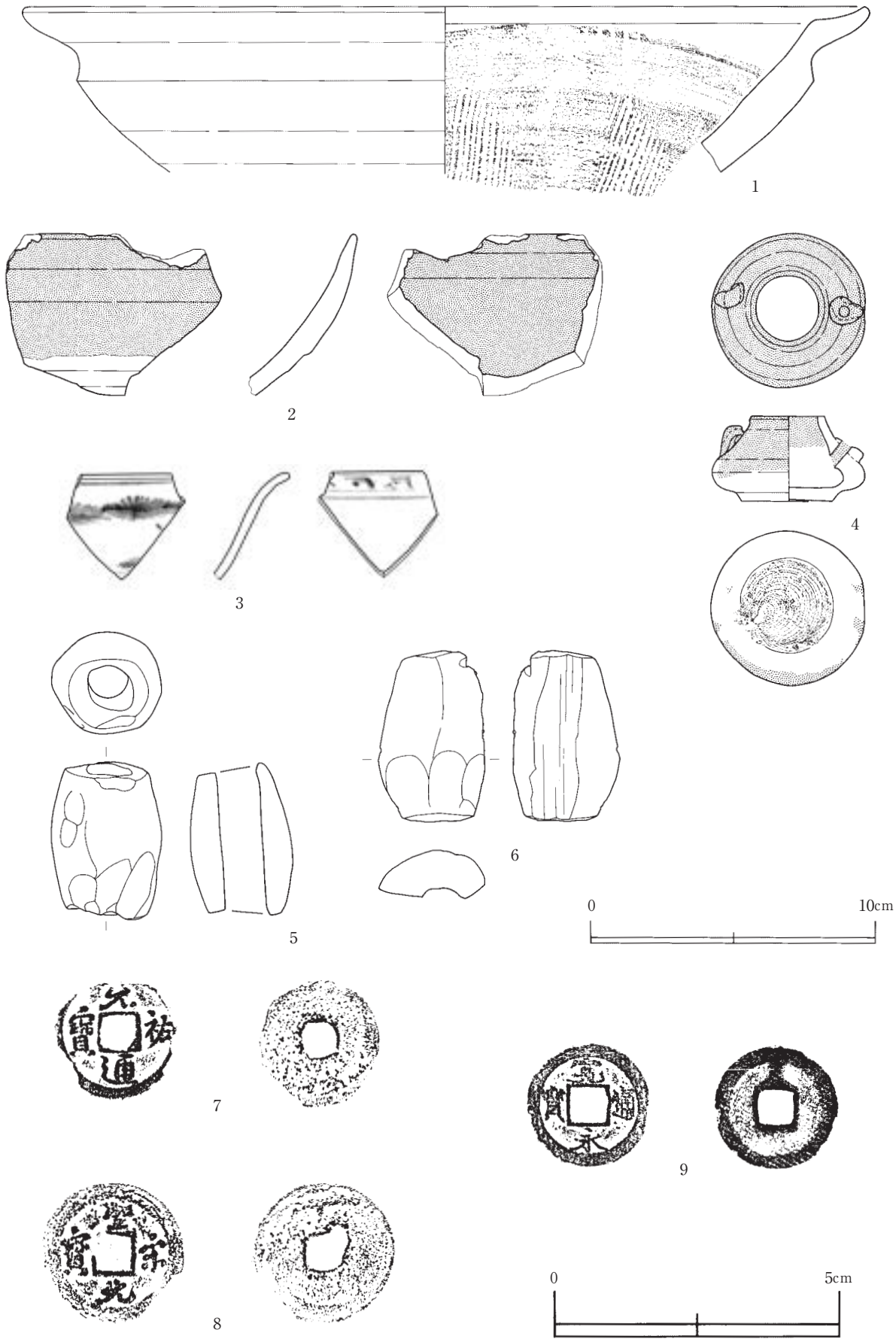
第174図　溝跡（２）


ＳＤ7159
ＳＫ7039
ＳＫＰ7191
ＳＤ7161
ＳＫＩ5006
ＳＫＰ7015
ＳＫＰ5496
ＳＫＰ5376
ＳＫＰ5174
ＳＤ7030
13.90m
ＳＤ7030
1　褐色土（10YR4/4）
13.60m
ＳＤ7159
1　褐色土（10YR4/4）
13.60m
ＳＤ7161
1　褐色土（10YR4/4）
撹
乱
0
2m

第175図　溝跡（３）


ＳＤ5507
14.30m
1
1　暗褐色土（10YR3/3）
ＳＤ5625
20.20m
1
1　褐色土（10YR4/4）
ＳＤ7080
ＳＫＰ
7133
ＳＫＰ7132
ＳＫ7039
13.70m
1
2
1　褐色土（10YR4/6）
2　暗褐色土（10YR4/4）
0
4m

第176図　溝跡（４）



第177図　北調査区Ｂ出土遺物

16　北調査区Ｃの検出遺構と出土遺物

（１）土坑

ＳＫ１（第178図）

ＬＴ・ＬＳ101グリッドの地山面で検出した。ＳＫＰ36と重複し、本遺構が古い。平面形は長軸（北東―南西）0.63ｍ×短軸（北西―南東）0.31ｍ円形を呈し、検出面からの深さ0.19ｍである。底面は丸みを帯びており、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ10（第178図）

ＬＳ101グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北東―南西）0.64ｍ×短軸（北西―南東）0.59ｍの円形を呈し、検出面からの深さは0.64ｍである。底面は丸みを帯びており、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、自然堆積である。遺物は出土しなかった。

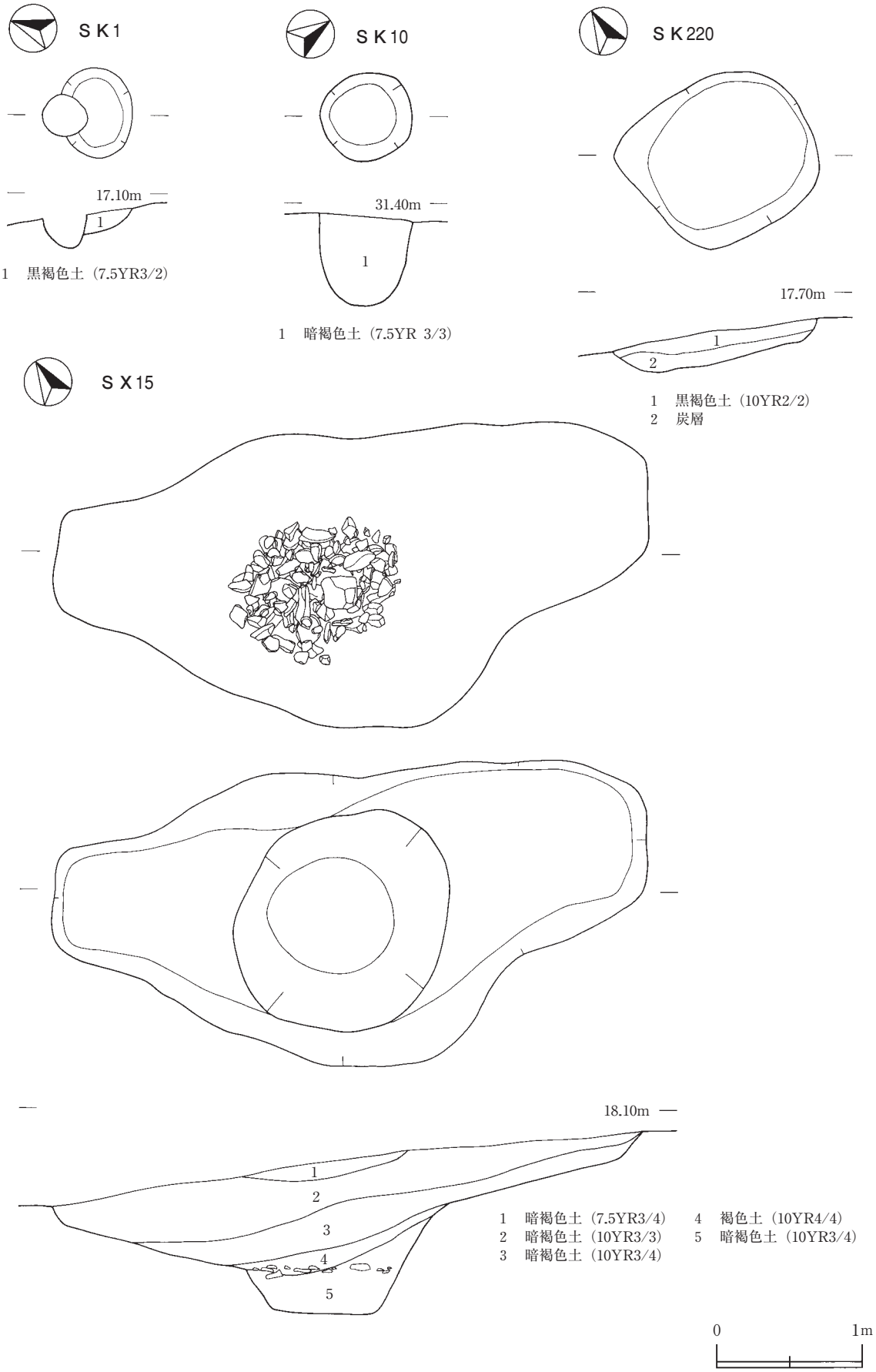
ＳＫ220（第178図）

ＬＲ100・101グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（東―西）1.22ｍ×短軸（北―南）1.11ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ0.38ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は２層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は縄文土器片が３点出土した。

（２）その他の遺構

ＳＸ15（第178図）

ＬＳ・ＬＲ100グリッドの地山面で検出した。平面形は長軸（北西―南東）4.10ｍ×短軸（北東―南西）2.03ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.2～0.63ｍである。底面は中央部に向かって傾いており、壁の傾きは急である。また、底面の中央部には長軸1.64ｍ×短軸1.43ｍ、底面からの深さ0.3～0.76ｍのピットがあり、このピットを塞ぐように152個の礫が楕円形に配されていた。堆積土は５層に分けられた。ピット内の５層は人為的に埋め戻されたもので、１～４層は自然堆積と考えられる。遺物は縄文土器片が２点出土した。



第178図　土坑・その他の遺構

第５章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定結果

株式会社　加速器分析研究所

1　年代測定結果

1）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用しています。

2）BP 年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。

3）付記した誤差は、次のように算出しています。

複数回（通常は４回）の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が１つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。

4）δ^{13}C の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS 測定の場合に同時に測定される δ^{13}C の値を用いることもあります。

δ^{13}C 補正をしない場合の同位対比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位対比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{14}A_{PDB})/{}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：資料炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算をします。但し、IAA では加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}C も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した δ^{13}C を用いることもあります。この場合には表中に［加速器］と注記します。

また、Δ^{14}C は、試料炭素が $\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値です。（１）式の^{14}C 濃度を、δ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算します。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$ として^{14}C/^{12}C を使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$ として^{14}C/^{13}C を使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない δ^{14}C に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ^{14}C との関係は次のようになります。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

第20表　放射性炭素年代測定結果（１）

Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位対比
IAAA-42160	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）１：ＳＫＩ7222（Ⅲ郭）	Libby Age (yrBP)　：　570±40 $\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)　＝　−33.19±0.67 $\Delta^{14}C$ (‰)　＝　−68.6±5.1 pMC (%)　＝　93.14±0.51
#848-1	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)、(加速器)　＝　−84.2±4.8 pMC (%)　＝　91.58±0.48 Age (yrBP)　：　710±40
IAAA-42161	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化材 試料名（番号）２：ＳＫＩ7529	Libby Age (yrBP)　：　280±40 $\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)　＝　−26.26±0.62 $\Delta^{14}C$ (‰)　＝　−34.6±4.4 pMC (%)　＝　96.54±0.44
#848-2	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)、(加速器)　＝　−37.1±4.2 pMC (%)　＝　96.29±0.42 Age (yrBP)　：　300±40
IAAA-42162	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）３：ＳＫＩ6030（Ⅳ郭）	Libby Age (yrBP)　：　350±40 $\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)　＝　−24.89±0.63 $\Delta^{14}C$ (‰)　＝　−42.5±4.3 pMC (%)　＝　95.75±0.43
#848-3	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)　＝　−42.3±4.1 pMC (%)　＝　95.77±0.41 Age (yrBP)　：　350±40
IAAA-42163	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）４：ＳＫＩ6503（Ⅱ郭）	Libby Age (yrBP)　：　380±40 $\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)　＝　−26.34±0.60 $\Delta^{14}C$ (‰)　＝　−46.6±4.5 pMC (%)　＝　95.34±0.45
#848-4	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)　＝　−49.2±4.3 pMC (%)　＝　95.08±0.43 Age (yrBP)　：　410±40

第21表　放射性炭素年代測定結果（２）

Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位対比
IAAA-42164 #848-5	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：生材 試料名（番号）５：ＳＥ7238（Ⅲ郭）	Libby Age (yrBP) ： 400±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −27.52±0.58 Δ^{14}C (‰) ＝ −48.9±4.5 pMC (%) ＝ 95.11±0.45
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −53.8±4.3 pMC (%) ＝ 94.62±0.43 Age (yrBP) ： 440±40
IAAA-42165 #848-6	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）６：ＳＫ6011（Ⅰ郭）	Libby Age (yrBP) ： 520±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −27.34±0.57 Δ^{14}C (‰) ＝ −62.4±4.4 pMC (%) ＝ 93.76±0.44
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −66.9±4.3 pMC (%) ＝ 93.31±0.43 Age (yrBP) ： 560±40
IAAA-42166 #848-7	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）７：ＳＤ1816（Ⅲ郭）	Libby Age (yrBP) ： 1280±70 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −21.87±0.74 Δ^{14}C (‰) ＝ −146.9±6.8 pMC (%) ＝ 85.31±0.68
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −141.4±6.8 pMC (%) ＝ 85.86±0.68 Age (yrBP) ： 1,220±60
IAAA-42167 #848-8	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）８：ＳＫＰ7220（Ⅲ郭）	Libby Age (yrBP) ： 510±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −24.10±0.72 Δ^{14}C (‰) ＝ −60.9±4.6 pMC (%) ＝ 93.91±0.46
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −59.2±4.4 pMC (%) ＝ 94.08±0.44 Age (yrBP) ： 490±40
IAAA-42168 #848-9	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）９：ＳＫＰ7960（Ⅳ郭）	Libby Age (yrBP) ： 550±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −25.55±0.78 Δ^{14}C (‰) ＝ −65.8±4.3 pMC (%) ＝ 93.42±0.43
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −66.8±4.1 pMC (%) ＝ 93.32±0.41 Age (yrBP) ： 560±40

第22表　放射性炭素年代測定結果（３）

Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位対比
IAAA-42169	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）10：ＳＫＰ8090（Ⅳ郭）	Libby Age (yrBP) ： 420±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −27.75±0.34 Δ^{14}C (‰) ＝ −50.6±4.1 pMC (%) ＝ 94.94±0.41
#848-10	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −56.0±4.0 pMC (%) ＝ 94.40±0.40 Age (yrBP) ： 460±40
IAAA-42170	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）11：ＳＫ2010（Ⅴ郭）	Libby Age (yrBP) ： 380±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −26.71±0.79 Δ^{14}C (‰) ＝ −46.2±4.4 pMC (%) ＝ 95.38±0.44
#848-11	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −49.5±4.1 pMC (%) ＝ 95.05±0.41 Age (yrBP) ： 410±40
IAAA-42171	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）12：ＳＫＩ2263（Ⅴ郭）	Libby Age (yrBP) ： 450±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −26.40±0.69 Δ^{14}C (‰) ＝ −54.0±4.2 pMC (%) ＝ 94.60±0.42
#848-12	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −56.7±4.0 pMC (%) ＝ 94.33±0.40 Age (yrBP) ： 470±30
IAAA-42172	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：生材 試料名（番号）13：ＭＫ48（Ⅴ郭）	Libby Age (yrBP) ： 410±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −25.01±0.67 Δ^{14}C (‰) ＝ −49.7±4.5 pMC (%) ＝ 95.03±0.45
#848-13	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −49.8±4.3 pMC (%) ＝ 95.02±0.43 Age (yrBP) ： 410±40
IAAA-42173	試料採取場所：岩倉館跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）14：ＳＤ2530（Ⅶ郭）	Libby Age (yrBP) ： 1,210±40 δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −26.59±0.78 Δ^{14}C (‰) ＝ −139.8±4.2 pMC (%) ＝ 86.02±0.42
#848-14	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) ＝ −142.6±4.0 pMC (%) ＝ 85.74±0.40 Age (yrBP) ： 1,240±40

第23表　放射性炭素年代測定結果（４）

Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位対比
IAAA-42174	試料採取場所：岩倉舘跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉舘１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）15：ＬＴ59（Ⅶ郭）	Libby Age (yrBP)　：　1,790±50 δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝ −27.58±0.82 Δ^{14}C (‰)　＝ −199.3±4.5 pMC (%)　＝　80.07±0.45
#848-15	（参考）δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰)、(加速器)　＝ −203.5±4.2 pMC (%)　＝　79.65±0.42 Age (yrBP)　：　1,830±40
IAAA-42175	試料採取場所：岩倉舘跡 秋田県由利本荘市福山字岩倉舘１外 試料形態：炭化物 試料名（番号）16：ＬＳ60（Ⅶ郭）	Libby Age (yrBP)　：　570±40 δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝ −9.79±0.63 Δ^{14}C (‰)　＝ −68.9±4.6 pMC (%)　＝　93.11±0.46
#848-16	（参考）δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰)、(加速器)　＝ −39.7±4.6 pMC (%)　＝　96.03±0.46 Age (yrBP)　：　330±40

第２節　出土材の樹種同定

株式会社　加速器分析研究所

１　はじめに

岩倉館跡は、中世の城館跡であり、数面の郭が確認されている。各面からは、堀立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑等の遺構が検出されている。

本報では、遺構内から出土した木材・炭化材について、木材利用に関する資料を得るための樹種同定を実施する。

２　試料

出土した木材３点（試料番号２，６，13）である。このうち、試料番号２，６の２点は炭化材である。

３　分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接戦断面）の３断面の徒手切符を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

４　結果

樹種同定結果を表１に示す。木材は落葉広葉樹のクリに同定された。また、炭化材は針葉樹のスギと落葉広葉樹のクリに同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L.f.）D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管を主とし、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。主として晩材部に樹脂細胞が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２―４個。放射組織は単列、１―15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は２―４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１―15細胞高。

５　考察

樹種同定を実施した木材は、試料番号２が構造材、試料番号13が坑である。試料番号６は、炭化していることから何らかの理由により火を受けたことが推定されるが、用途等の詳細は不明である。試料番号２，13がクリ、試料番号６はスギであった。クリは重硬で強度及び耐朽性に優れた材質を有するが、加工はやや困難な部類に入る（平井，1980）。一方、スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。いずれも現在の本地域に生育している種類である。また、スギは有用材として、クリは果実の収穫を目的として植栽されることもある。いずれも、館内あるいは館周辺で木材の入手が可能であったと考えられる。

構造材や杭については、クリの強度や耐朽性を利用した可能性がある。一方、スギについては、加工性が高く、とくに割裂性を利用した板材の製作などに適していることから、遺跡内でも板等に利用されていた可能性がある。ただし、今回の試料はいずれも出土状況や形状の詳細が不明であり、今後このような情報も含めて木材利用について検討することがのぞまれる。

引用文献

平井　信二、1980、木の事典　第４巻　かなえ書房

第24表　樹種同定結果

番号	地区・層位	遺構など	性状	樹種
2	Ⅳ郭	ＳＫＩ7222	炭化材	クリ
6	Ⅰ郭	ＳＫ6011	炭化材	スギ
13	Ⅴ郭	ＭＫ48	生木	クリ

以上測定委託パリノ・サーブェイ株式会社

第３節　卒塔婆放射性炭素年代測定結果

㈱吉田生物研究所

１　はじめに

SE1720から出土した卒塔婆について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料

試料は卒塔婆１点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、グラファイトに調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、補正した^{14}C 濃度を用いて^{14}C 年代を算出した。

３　結果

第25表に、試料の同位体分別効果の補正値、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C 年代、第26表に^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、^{14}C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C 年代が、その^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68％であることを意味する。表２には参考として確率95％も掲載しておく。

１）BP 年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。

２）付記した誤差は、標準偏差（１σ）に相当する年代で、次のように算出する。

複数回（通常は４回）の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。

３）δ^{13}C の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定されるδ^{13}C の値を用いることもある。

δ^{13}C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として掲載しておく。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB})/{}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

但し、加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}C も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}C を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記している。

また、Δ^{14}C は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C 濃度を、δ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{12}C を使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{13}C を使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R)/{}^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなる。多く

の場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく 使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$

第25表　放射性炭素年代測定の結果

試料No.	試　　料	BP年代および炭素の同位対比
No. 1	試料採取場所： 試料形態：卒塔婆 試料名（番号）：Y－040802	Libby Age (yrBP)　：　280±40 $\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)　＝ －24.48±0.67 $\Delta^{14}C$ (‰)　＝ －34.4±5.2 pMC (%)　＝ 96.56±0.52
	（参考）$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)　＝ －33.4±5.0 pMC (%)　＝ 96.66±0.50 Age (yrBP)　：　270±40

第26表　^{14}C年代を暦年代に較正した年代（範囲）結果　【参考値】

試料名	1σ暦年代範囲（68.2%）	1σ暦年代範囲（95.4%）
卒塔婆	1520ＡＤ－1590ＡＤ(40.9%) 1620ＡＤ－1670ＡＤ(27.3%)	1480ＡＤ－1670ＡＤ(91.4%) 1780ＡＤ－1800ＡＤ(4.0%)

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を変換することです。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU－Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出します。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）をしています。なお、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当す

る暦年代範囲です。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率です。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示しました。

第４節　卒塔婆樹種同定

㈱吉田生物研究所

1　試料

試料はＳＤ1720から出土した卒塔婆１点である。

2　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3　結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）

（遺物 No.1）

（写真 No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

第27表　出土木製品同定表

No.	品名	樹　種
1	卒塔婆	スギ科スギ属スギ

第６章　まとめ

岩倉館跡の発掘調査は、『秋田県の中世城館』および『遺跡詳細分布調査報告書』に記載された範囲のうち、遺跡が立地する丘陵地のほぼ中央部を南北に縦貫する道路工事区域について実施した。調査地域は館跡が占める標高38～77ｍの丘陵地南部と、館の縄張りから外れる北調査区とした標高12～28ｍの丘陵地北部である。調査の結果、館跡や北調査区からは中世の遺構が検出され、中世の遺物が出土した。また縄文土器や平安時代の土師器・須恵器が僅かに出土したが、これらの遺構は検出されなかったため、当該期における具体的な様子は不明である。以下には中世の遺構と遺物について若干ふれてまとめとする。

【検出遺構】

調査地域で検出した遺構は、尾根や斜面を平坦に造成された郭（Ⅰ～Ⅹ郭）内と北調査区の平坦面に構築された掘立柱建物跡・竪穴状遺構・井戸跡・土坑・溝跡および柱穴様ピット、郭の周辺に設けられた防御施設の堀切、空堀、竪堀、土塁などである。

堀切は館跡東側の東西に延びる尾根上（Ｆ区）に等間隔に南北に３条（東からＳＤ3503・3502・3501）掘られている。この尾根とⅡ郭を南北に区切る幅13ｍ、深さ7.3ｍの切通しの底面東辺には空堀が南（ＳＤ3508）と北（ＳＤ3509）に向けて掘られ、同底面の西辺から竪堀（ＳＤ6538）が北下方のⅦ郭の西側に延びている。またＦ区の南斜面下に沿う空堀（ＳＤ3001・3506）、Ⅱ郭東斜面下の裾から南西方向に延びる空堀（ＳＤ3507）が掘られている。Ｅ区に集中する一連の堀跡の時期はＳＤ3506～3509が館跡のⅢ期、ＳＤ3505・6538がⅢ～Ⅳ期、ＳＤ3001・3501～3503が館跡の終末期のⅣ期である。またⅡ郭東辺の土塁（ＳＦ1923）とＥ区西辺の土塁（ＳＦ3527）は館跡の終末期のⅣ期に造成されたものである。これらがＥ区に多く配置されているのは、堀切３条が構築されたＥ区の尾根部が館内に出入りする通路上にあたり、戦時の際には敵の侵入を防ぐためと推定される。なお、Ｅ区から南西約150ｍ下方に位置する南調査区は、ちょうどＥ区から派生する標高24.7ｍの尾根にあたり、ここから尾根伝いに登り詰めるとＥ区の標高77ｍの尾根頂部にたどり着く。したがって、南調査区で検出された通路跡（ＳＭ425）は、館内に出入りする時の通路として使われていたものと考えられる。

各郭や北調査区などで検出した遺構は重複が著しく、遺構をどのように配置したものか、またその変遷の把握も容易ではなく、明確に把握することができなかった。その中で今回注目したのがⅠ郭とⅣ郭東斜面、Ⅲ郭やⅤ郭の斜面などに作られた竪穴状遺構である。この遺構の特徴は、①斜面に構築されていること。②壁を３面しかもたず一方向が開口しており、壁下に沿ってめぐる溝があるものと無いものがあること。③平面形がコ字状、半円形、楕円形を呈することなどである。これらは簡易な住居施設として使われていたものと想定され、ＳＫＩ7529では屋根に葺いたと思われる炭化した茅などを検出した。県内の中世遺跡ではこうした例が見あたらないが、古代では能代市鴨巣Ⅰ遺跡、鴨巣Ⅱ遺跡でも斜面に作られた竪穴状遺構が見つかっており、その起源は古代までさかのぼれそうである。ともあれ、中世山城において検出例は稀であると思われ、今後同様な遺構の発見が待たれるところである。

また、検出遺構の中で最も多かったのが柱穴様ピット（ＳＫＰ）であり、検出総数は3001基であっ

た。しかし、その数が多くかつ切り合いが著しいことに加えて、時間的な制約により十分に検討できなかったため、数棟の掘立柱建物跡と数条の柱穴列しか復元できなかった。

なお、柱穴様ピット群の平面形は円形・楕円形・方形を呈するものであり、柱痕跡を認めることはできなかった。

【出土遺物】

出土遺物は陶磁器、木製品、金属製品、土製品、石製品と炭化米や雑穀類などである。

出土遺物のうちで量的に多かった陶磁器は舶載品と国産品に大別される。舶載品は、中国明代の青磁・青白磁・白磁・染付である。器種は青磁が碗・皿・盤・香炉、青白磁が皿・水差し、白磁が碗・皿、染付が碗・皿などであり、青磁の大半は龍泉窯系で、染付は景徳鎮である。時期は青磁が14世紀中頃から16世紀初め頃、青白磁が14世紀代と15世紀後半、白磁が14世紀代と15世紀代、染付が15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。また朝鮮青磁の皿が１点出土しており、時期は15世紀代と見られる。国産品は珠洲系、越前、瀬戸美濃である。器種は珠洲系が甕・壺・擂鉢、越前が擂鉢、瀬戸美濃が皿・天目茶碗・茶壺・水注などと、瓦質土器の火鉢か風呂がある。これらの時期は概ね14世紀から16世紀代までと見られる。このほかかわらけが出土した。全てロクロで製作されたもので、時期は12世紀代と推定される。

木製品は卒塔婆・箸・箆などが出土した。卒塔婆はⅢ郭の井戸跡から出土したもので、その両面に墨書を認めたが、判読できたのは片面の「大霊追善供養　大菩薩」である。金属製品は鉄製の刀・刀子・足金物・小札・馬具・鎌・火打金・金具・釘・湯口鉄塊、銅製の鏡、銭貨である。出土した銭貨は宋銭（景徳元寶：1004年・熙寧元寶：1068・元祐通寶：1086年・聖宋元寶：1101年）、明銭（洪武通寶：1368年・永楽通寶：1408年〔西暦は初鋳年〕）などの渡来銭である。土製品は土錘・坩堝・羽口である。石製品は砥石・石臼・石鉢や五輪塔を構成する空輪・風輪・火輪である。

炭化米や雑穀類が各郭の遺構内外から多量に出土した。その総数量は炭化米が約43kg で、アワ・ヒエ・その他が約31kg であった。おそらく館内に備蓄した一部と考えられる。

以上、岩倉館跡は大規模な館造営が行われていることから、相当の経済力を持った館主がいたと思われる。また、行政的要素をもった館ではなく集落堡塞的で軍事的要素を併せ持つものと思われ、館跡の存続時期は出土した遺物などから14世紀から16世紀までは使用されていたと考えられる。

北調査区Ａからは12世紀代のかわらけが出土し、北調査区Ｂからは15世紀代の瀬戸美濃の水注が出土したことから、北調査区は岩倉館築城以前から利用され、北調査区Ａで五輪塔の一部が出土したことから、宗教に関連する場所があったものと推測される。

遺跡全景（真上）：昭和23年撮影

図版2

遺跡全景（真上）：平成15年撮影

1　遺跡遠景（南西→）

2　遺跡遠景（北西→）

図版4

北調査区・Ⅷ郭・D区遠景（北→）：平成15年度調査（北上空から）

北調査区・Ⅷ郭・D区遠景（西→）：平成15年度調査（西上空から）

図版5

1　南調査区遠景（南→）：平成15年度調査

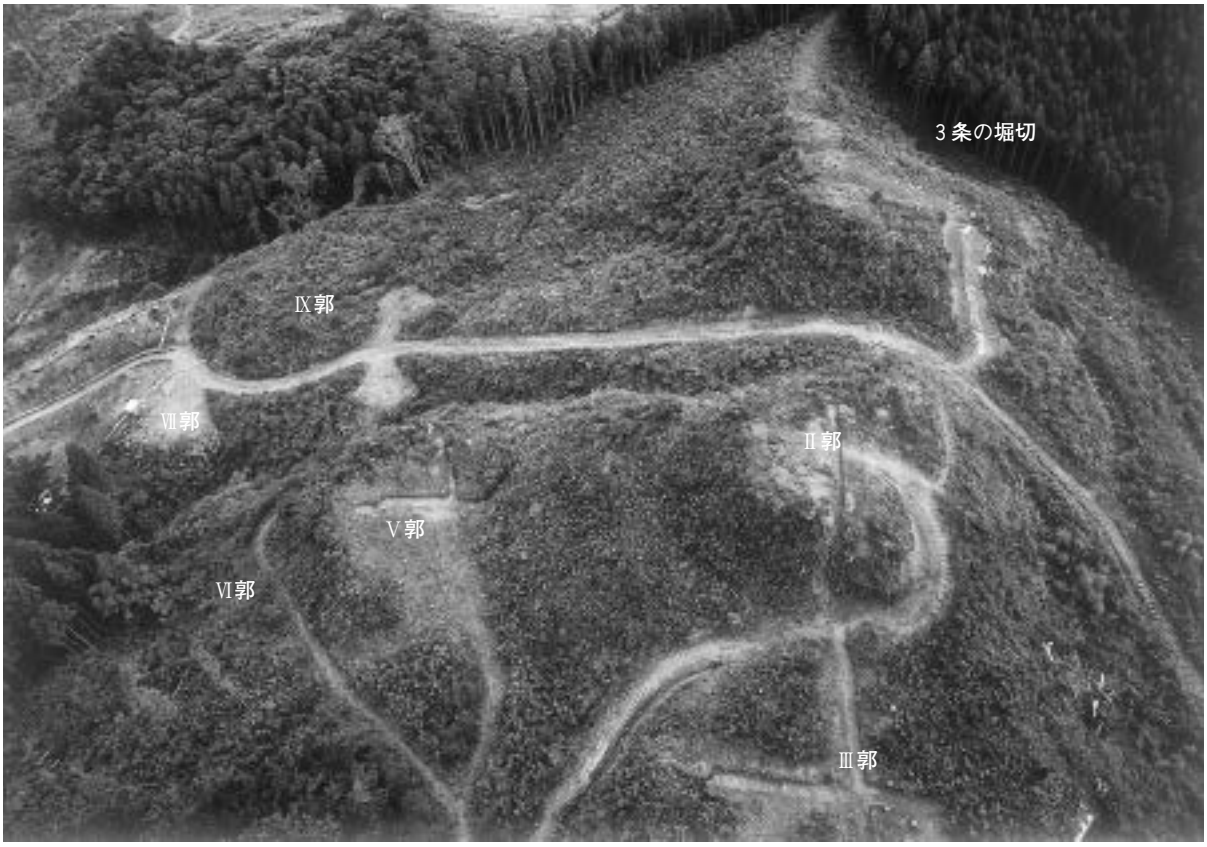
2　南調査区近景（南→）：平成15年度調査

南調査区全景（南西→）：平成15年度調査

1　調査区中央部（南→）：調査前

2　調査区中央部（南→）：調査前

1　調査区中央部（南→）：調査前



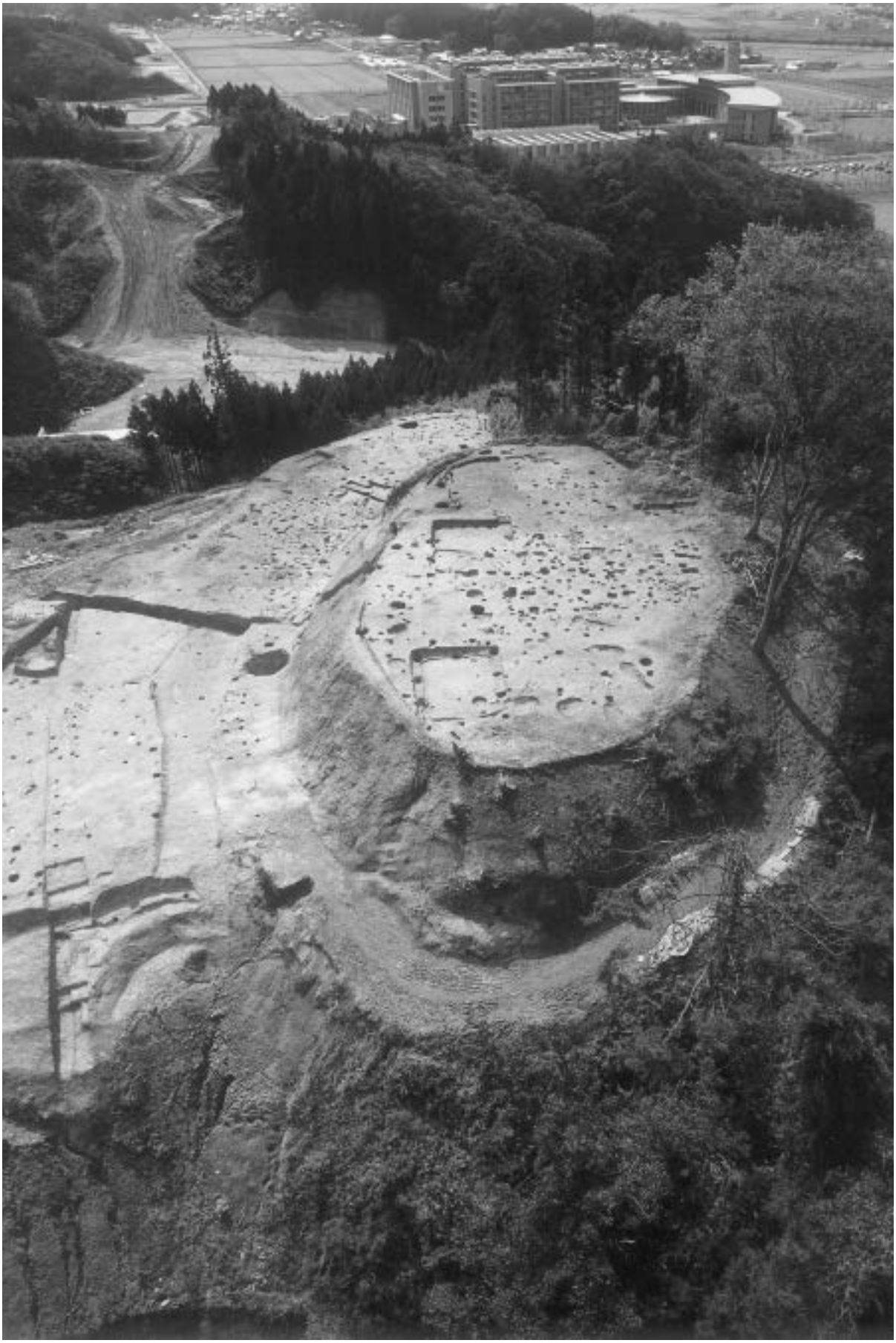
2　調査区中央部（西→）：調査前

図版10

調査区中央部（北東→）

調査区中央部（南→）

Ⅰ郭全景（真上）



Ⅰ郭全景（北→）

1　ＳＫＩ6040（真上）

2　ＳＤ6045（南→）

Ⅱ郭全景（真上）

図版16

Ⅱ郭全景（北→）

ＳＦ1923（西→）

Ⅲ郭全景（真上）

1　Ⅲ郭全景（北→）

2　ＳＫＩ7222・7223、ＳＤ1816（北→）

1　ＳＥ1720（南→）：卒塔婆が出土した井戸跡

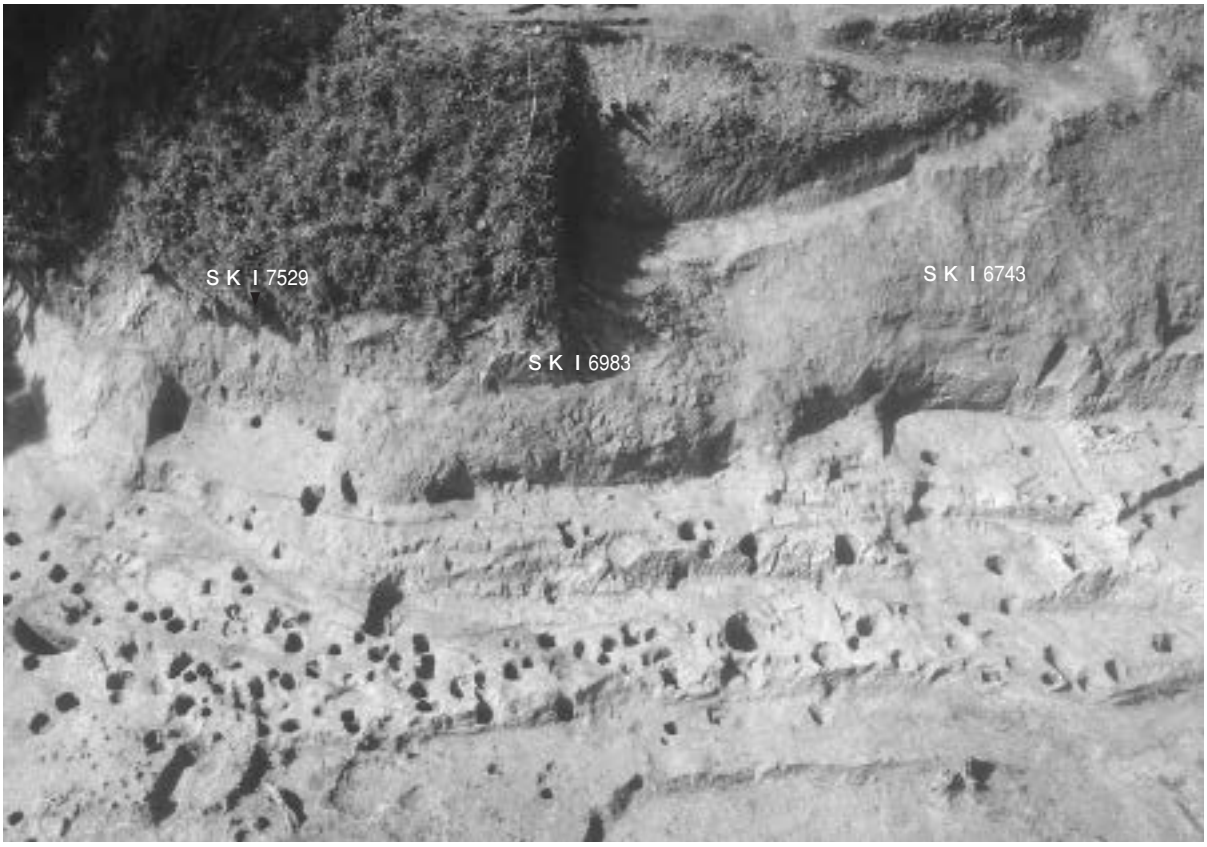
2　ＳＥ7238（東→）

1　ＳＤ1816（南→）

2　ＳＤ1816（南西→）

図版22

Ⅳ郭全景（南東→）



1　斜面に構築された竪穴状遺構（東→）

2　斜面に構築された竪穴状遺構（東→）

Ⅴ郭全景（真上）

1　Ⅴ郭近景（南→）

2　Ⅴ郭近景（東→）

1　Ⅵ郭２回目造成面（北西→）

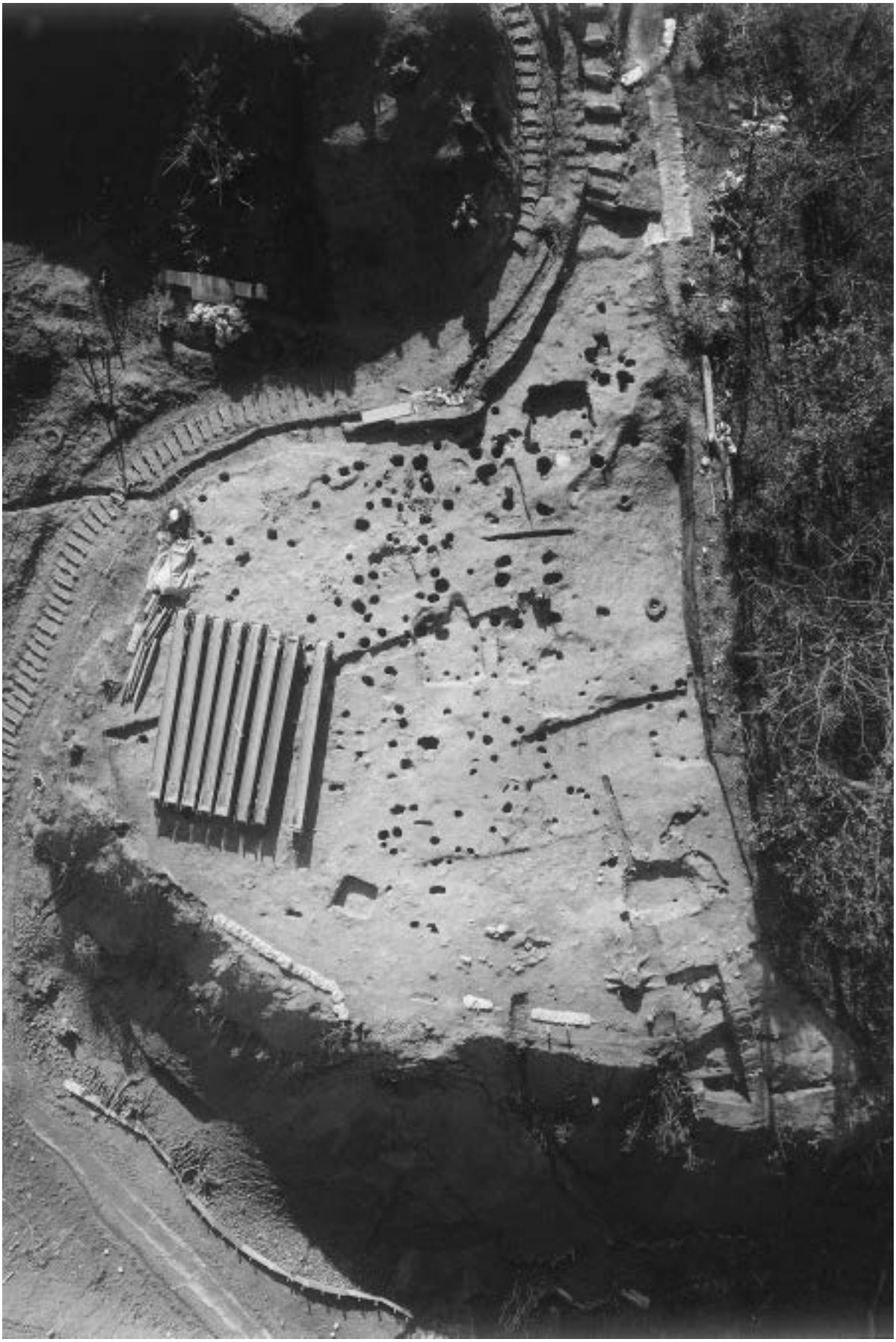
2　Ⅵ郭１回目造成面（南→）

1　Ⅶ郭最終造成面（東→）

2　Ⅶ郭２回目造成面（南東→）

1　ＳＤ2559（北→）

2　Ⅶ郭１回目造成面（南東→）



Ⅷ郭全景（真上）

1　Ⅸ郭全景（西→）

2　Ⅸ郭全景（南→）

1　Ⅷ郭とD区遠景（西→）

2　D区全景（東→）

1　SD3501・3502・3503（北→）：堀切調査前

2　SD3501・3502・3503（北西→）：堀切調査後

1　SD3051・3502・3503〔堀切〕と SD3001・3508・3509〔空堀〕（北→）

2　SD3001（東→）：空堀

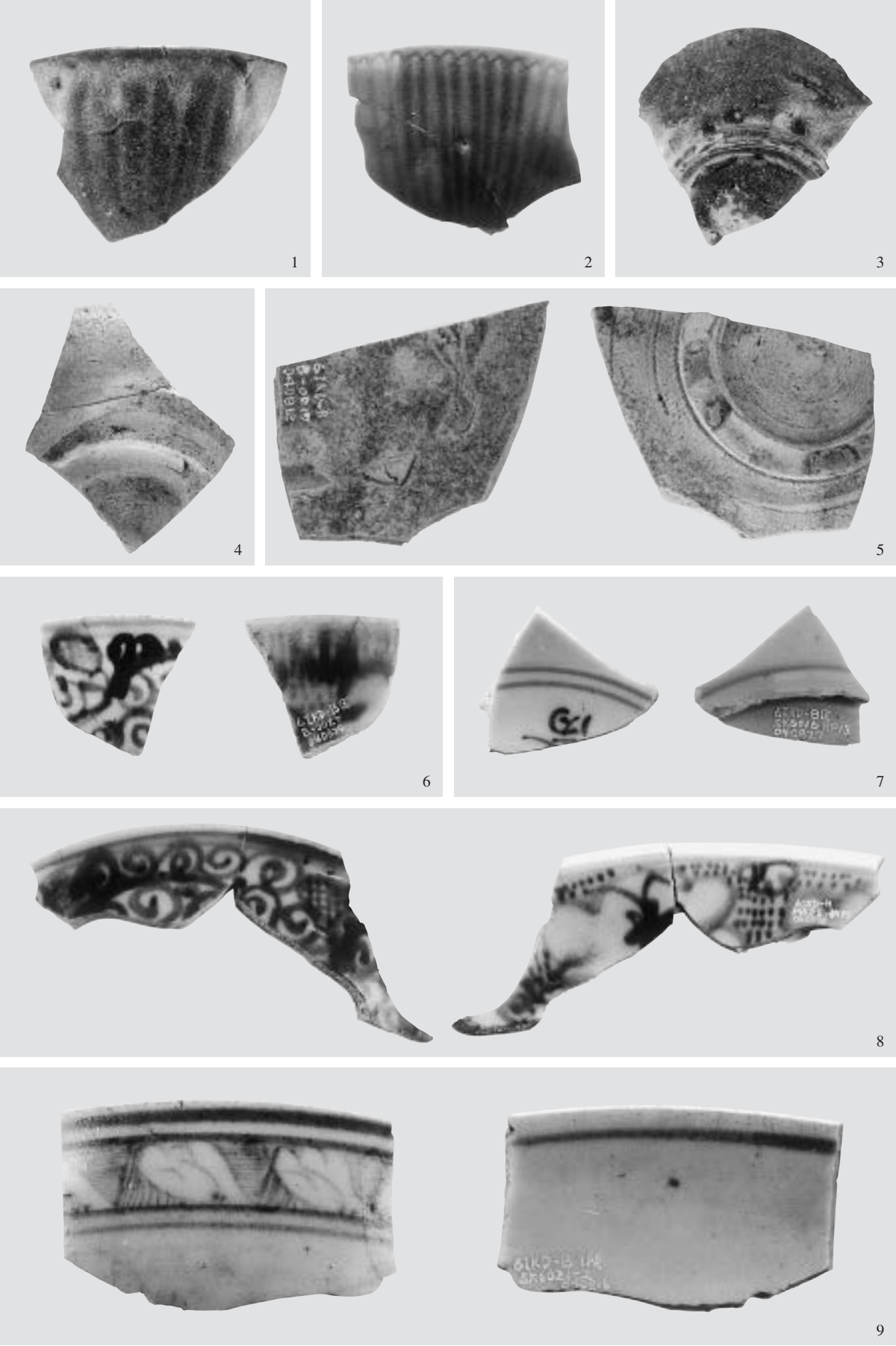
1　SD3508（南→）：空堀

2　SD3509（北→）：空堀

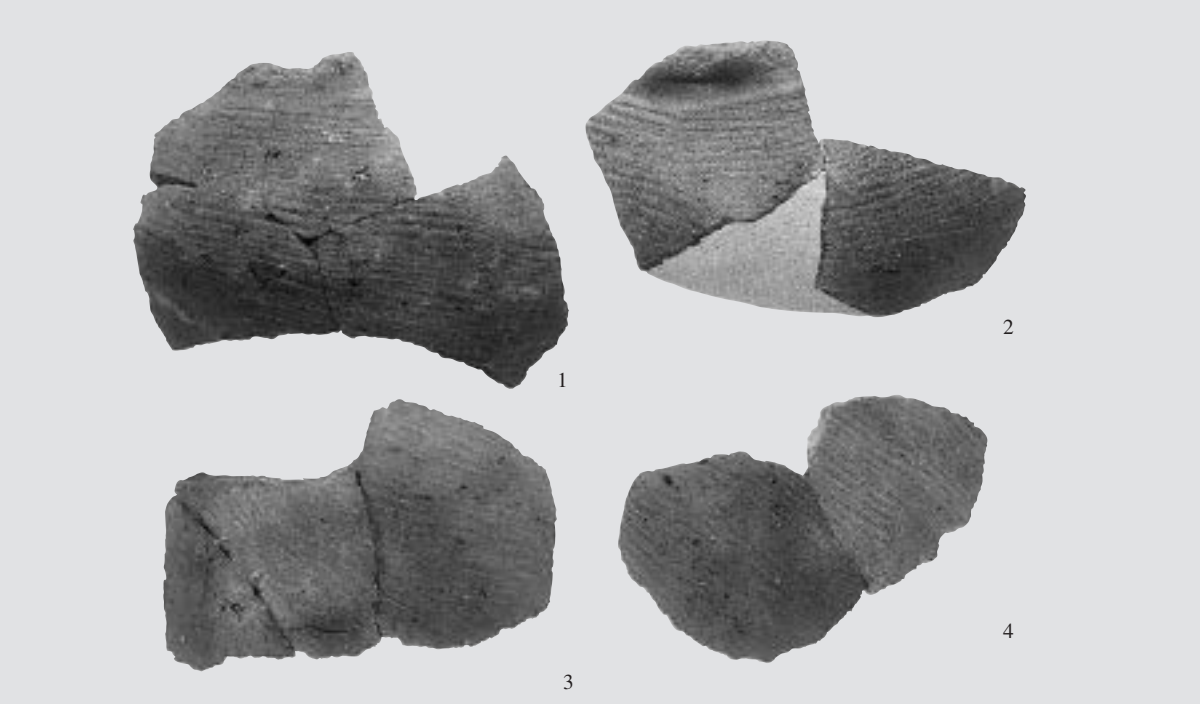
1　北調査区全景（北→）：平成16年度調査

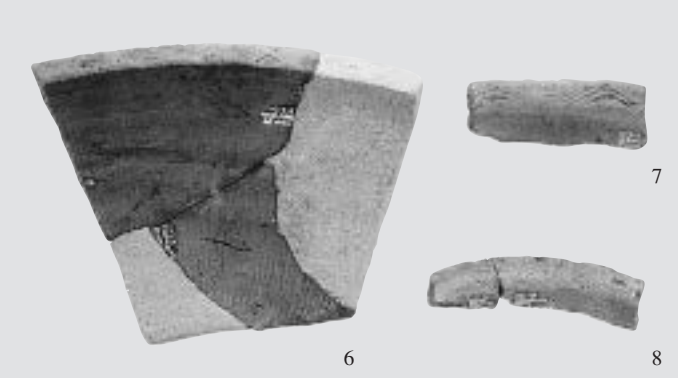
2　北調査区 B 全景（真上）：平成16年度調査

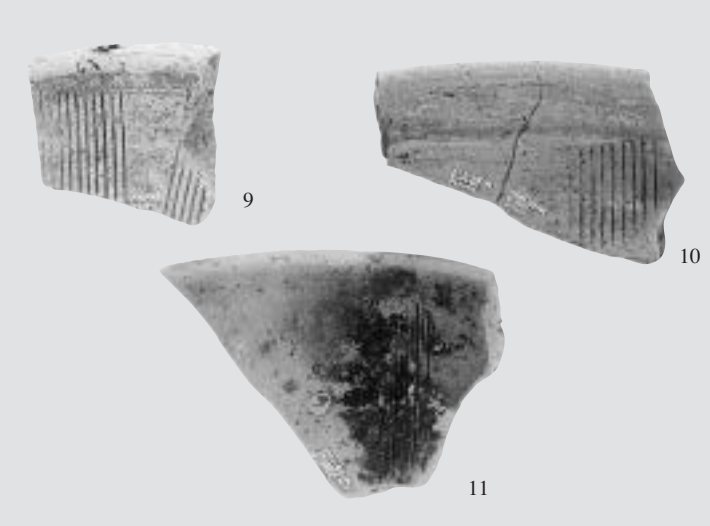
北調査区調査後全景（北→）：平成16年度調査



Ⅰ郭出土遺物

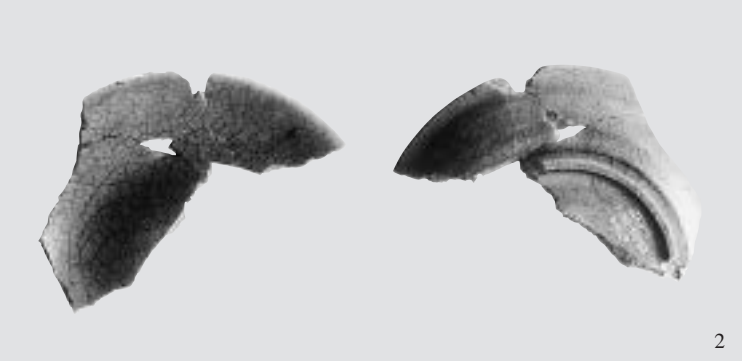






Ⅰ郭出土遺物

1

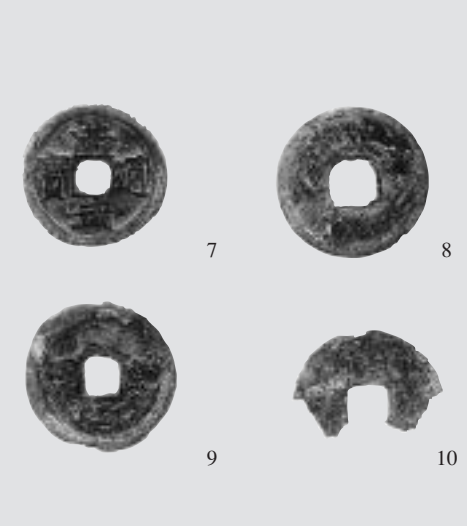

2

3

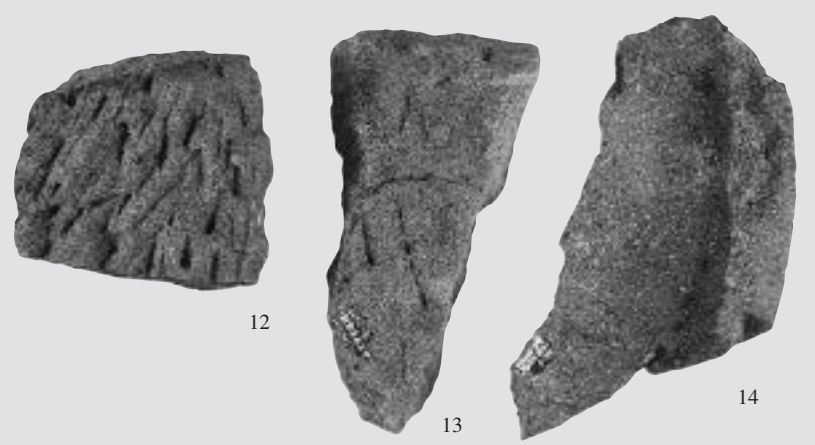
4

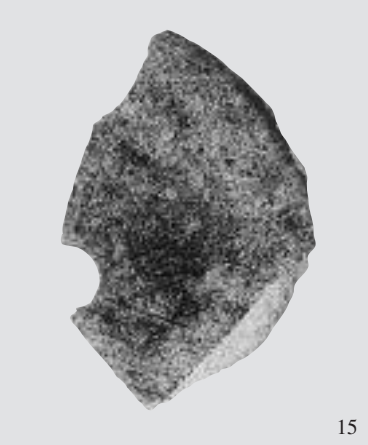
5

6

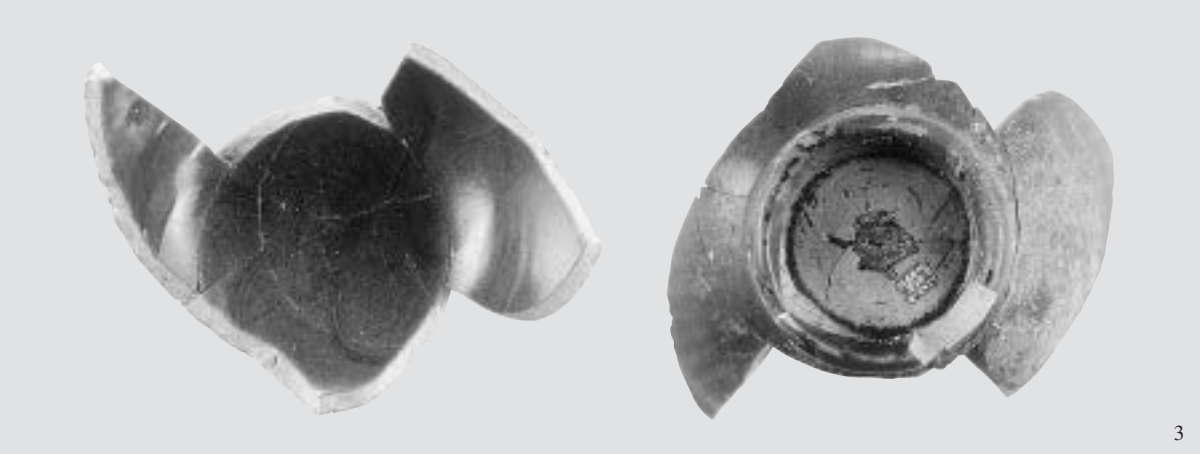

7 8 9 10

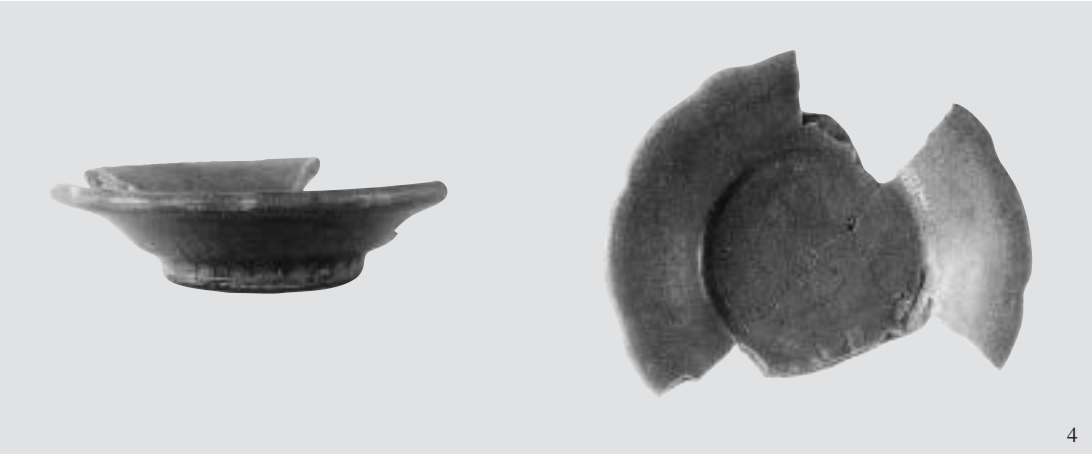
11


12 13 14

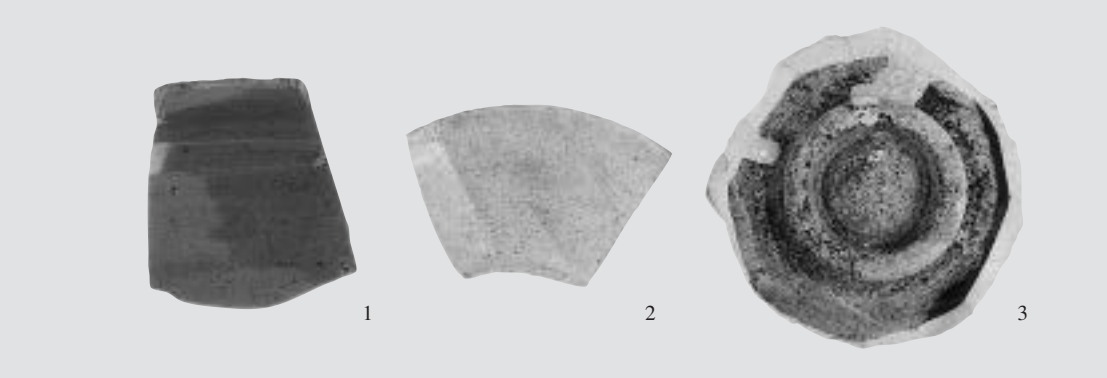

15

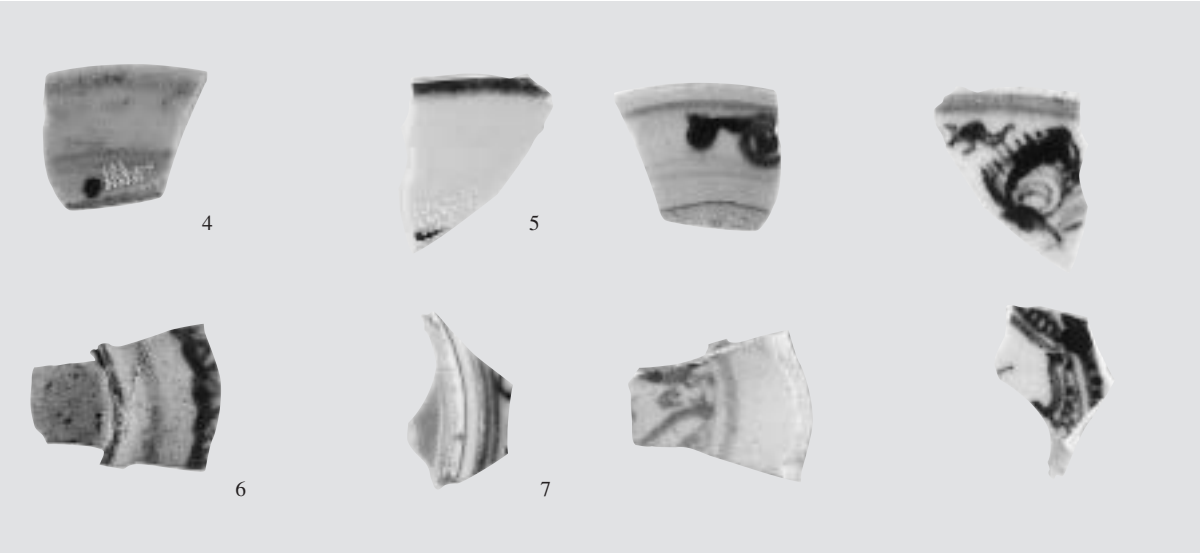
1
2

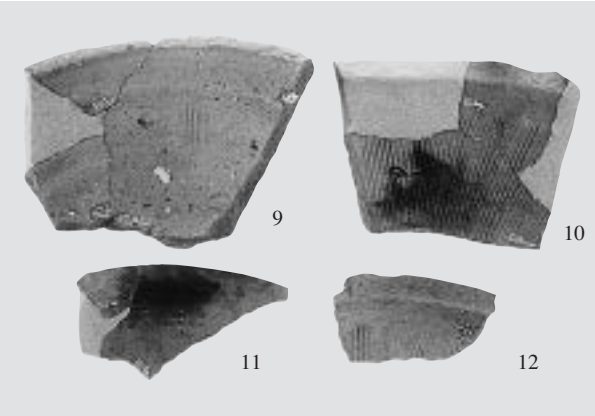

3

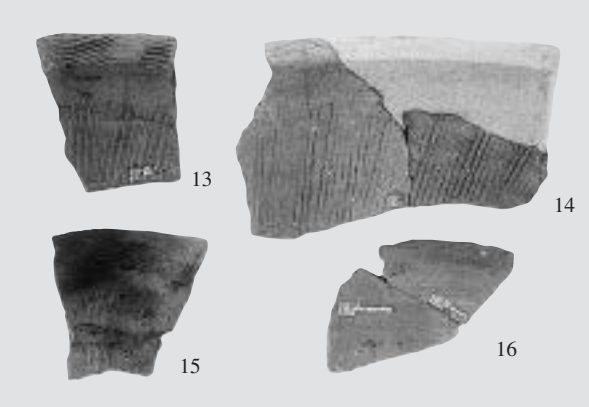

4

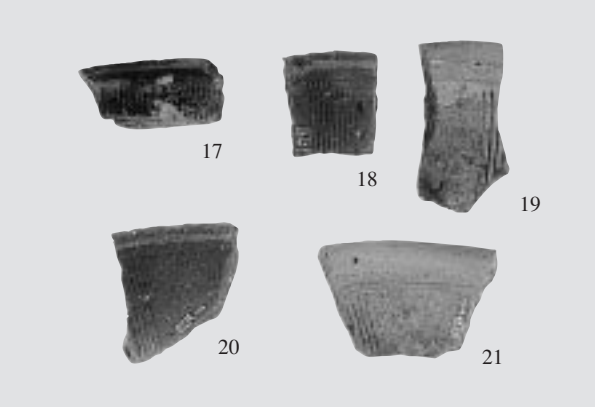
5











Ⅲ郭出土遺物

1

2

3

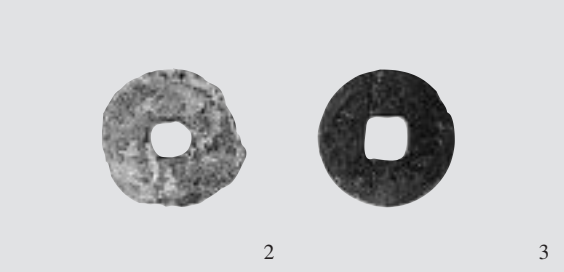
4

5 6 7

8

Ⅲ郭出土遺物

1

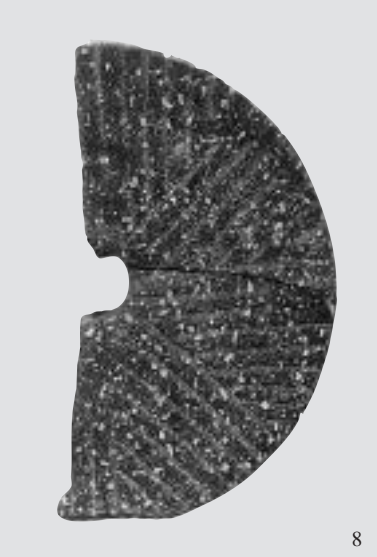

2 3

4

5

6

7

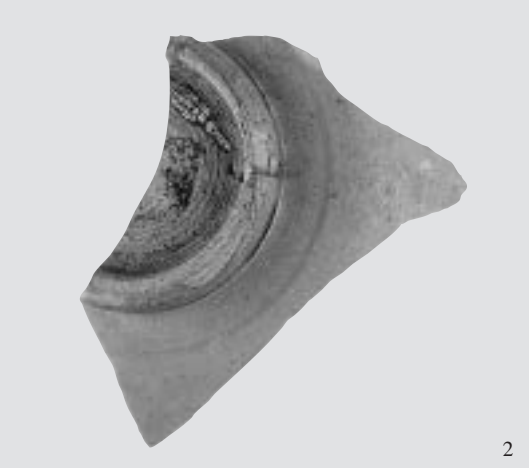

8

9

10

Ⅲ郭出土遺物

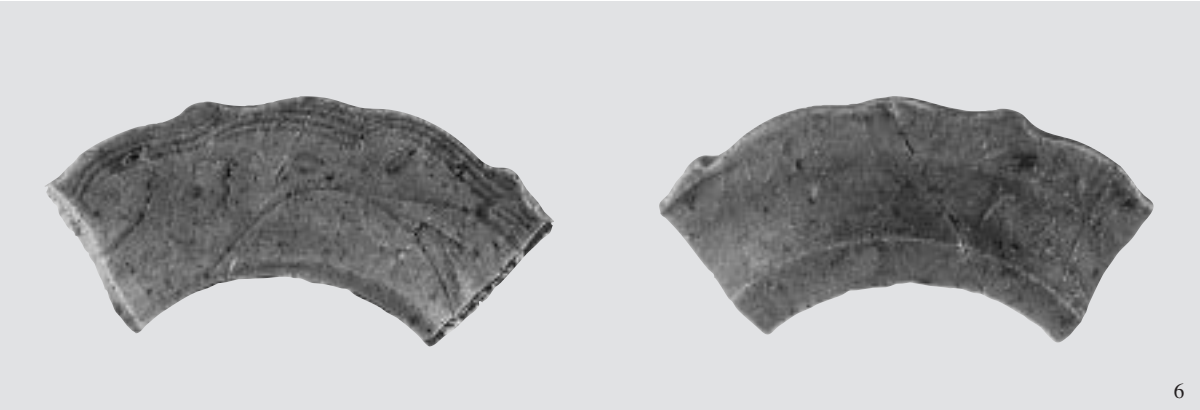
1

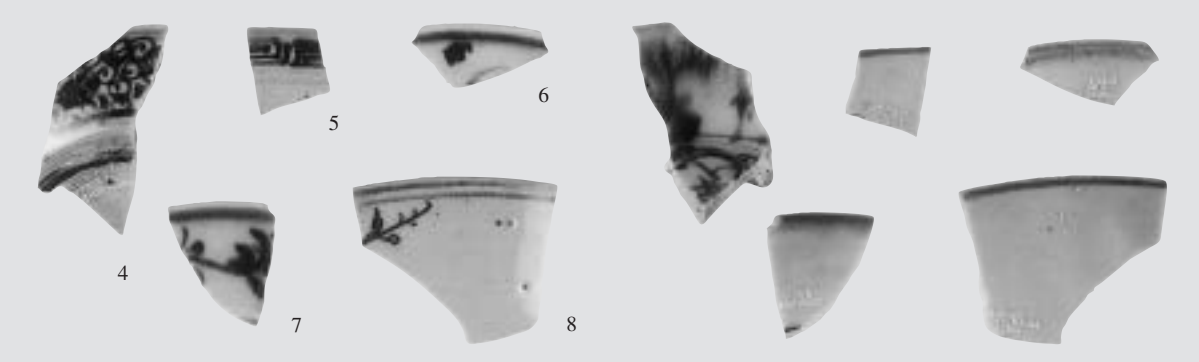

2

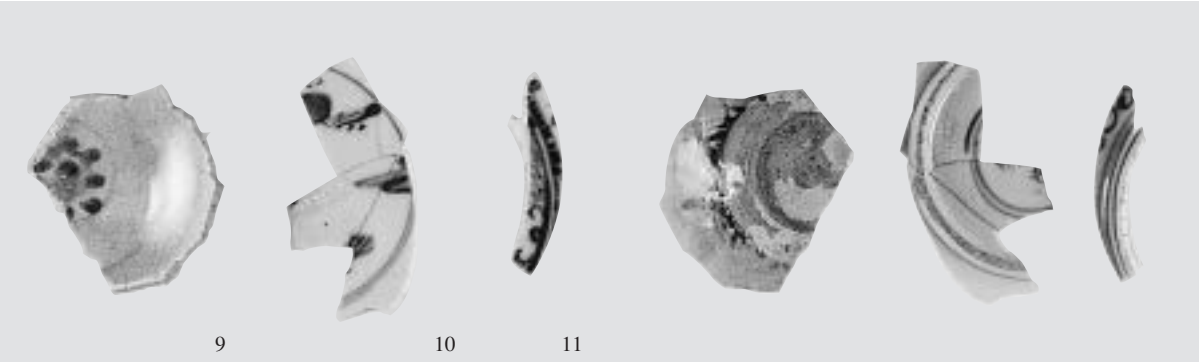
3

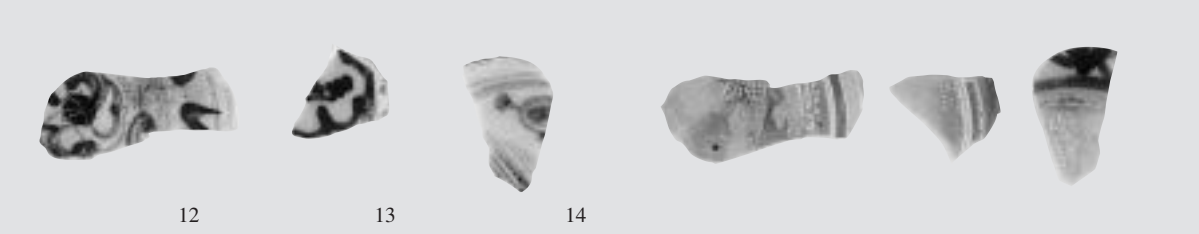
4

5

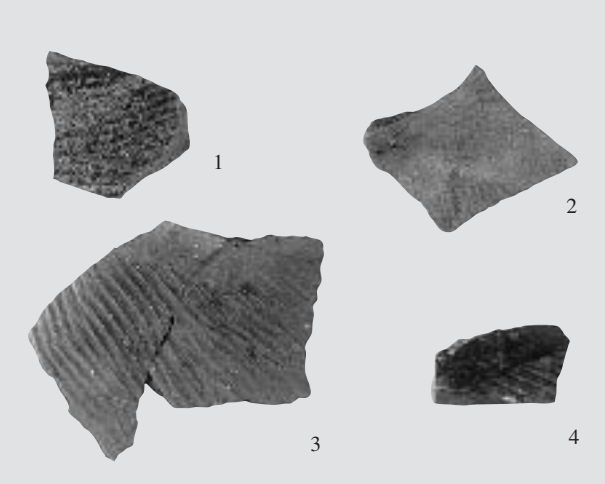

6

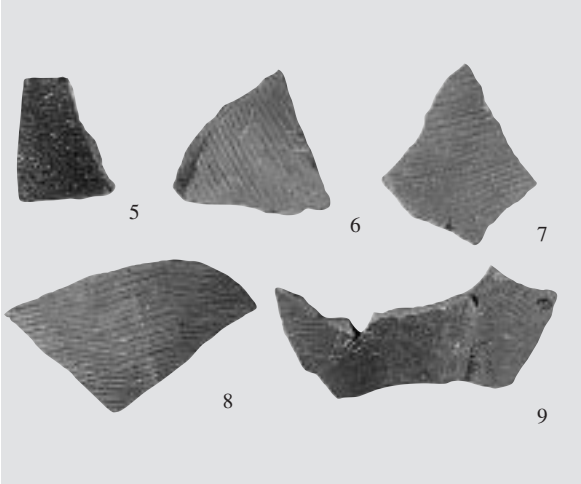


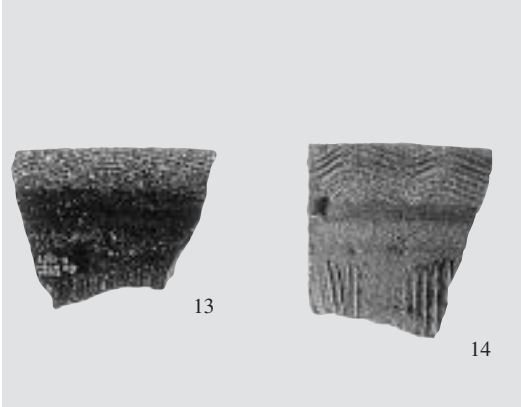


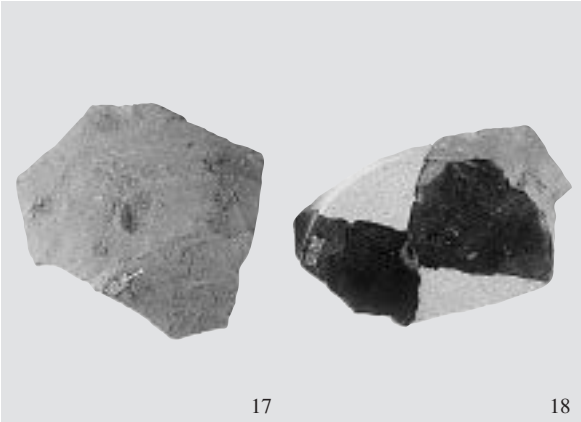


Ⅳ郭出土遺物

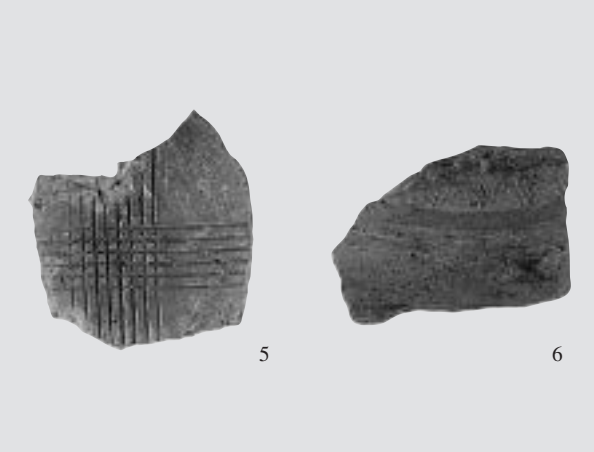


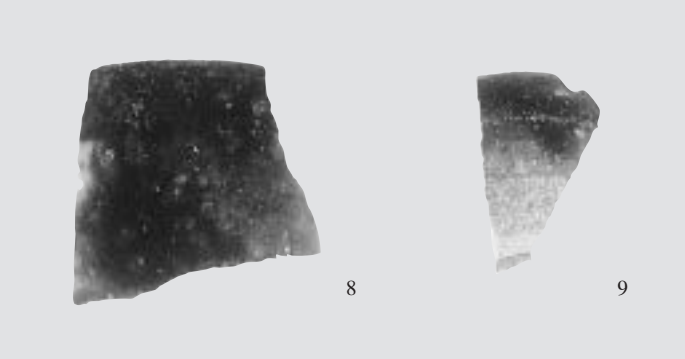


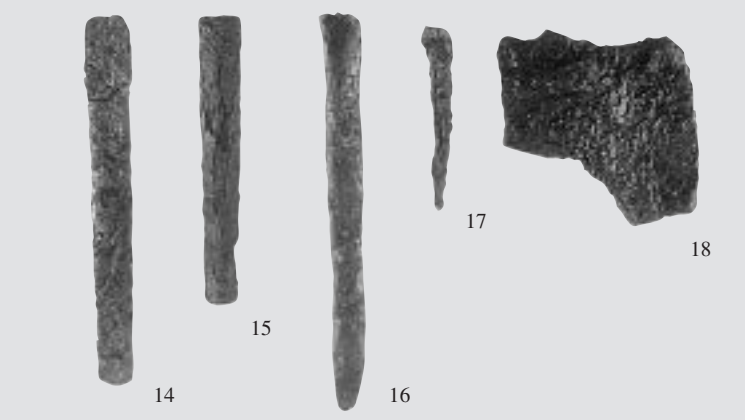




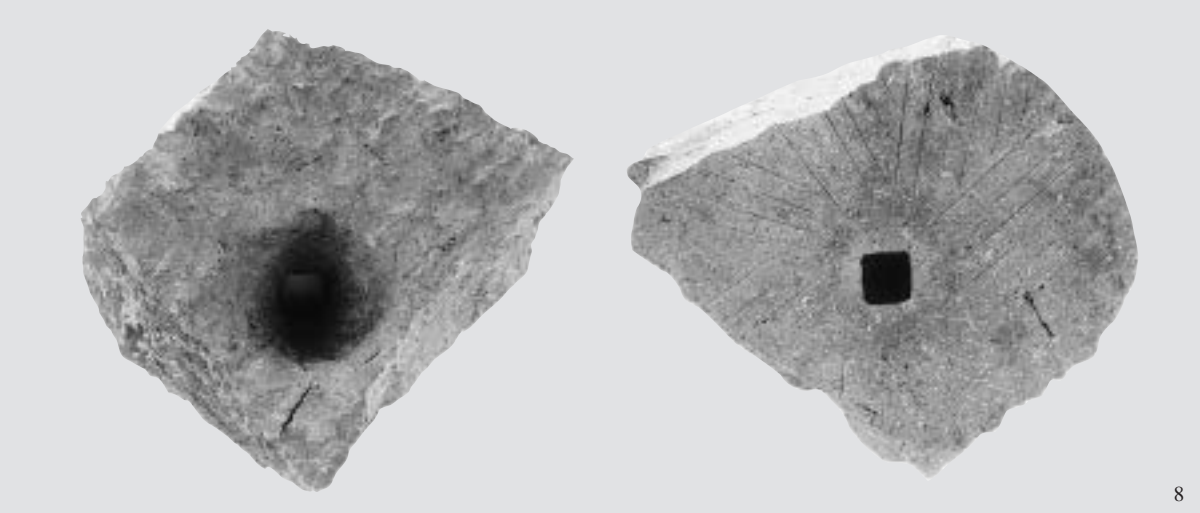
Ⅳ郭出土遺物



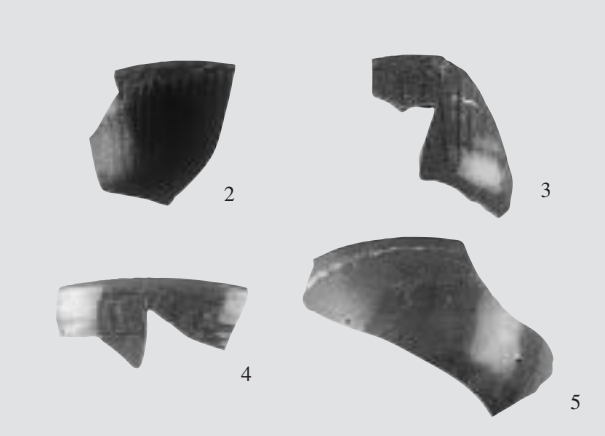


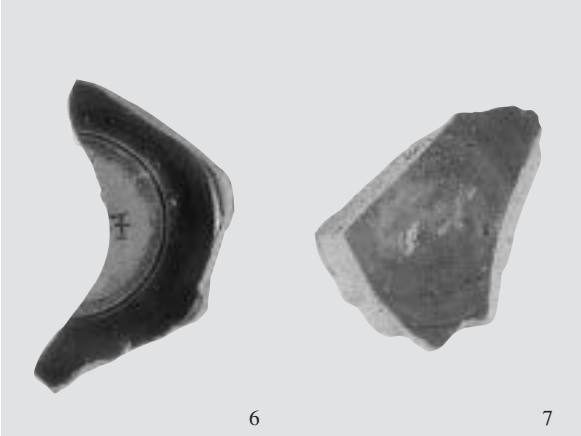


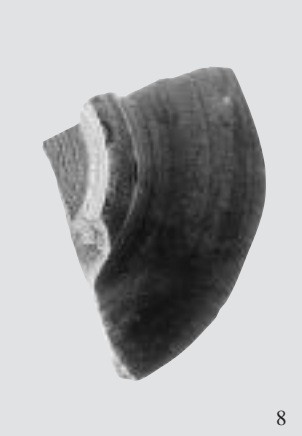
Ⅳ郭出土遺物



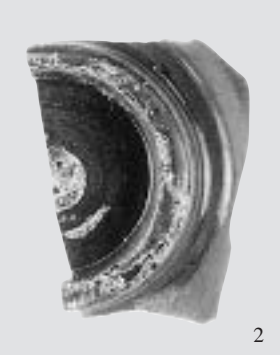
Ⅳ郭出土遺物

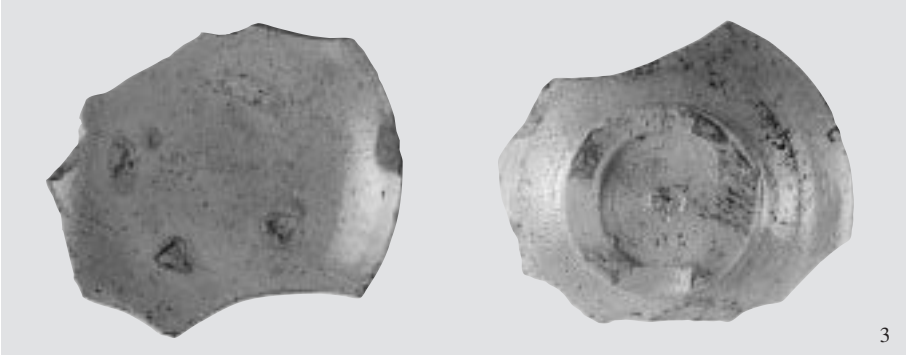


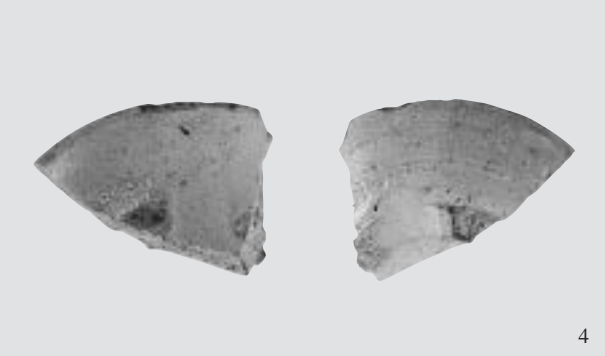


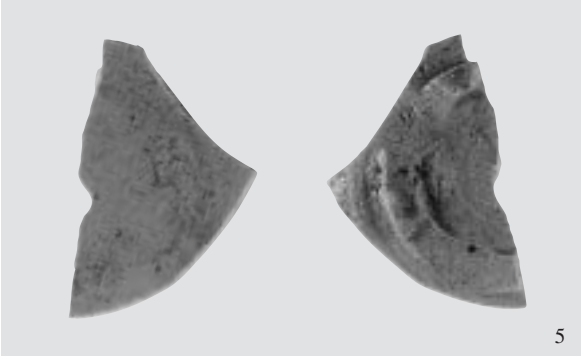


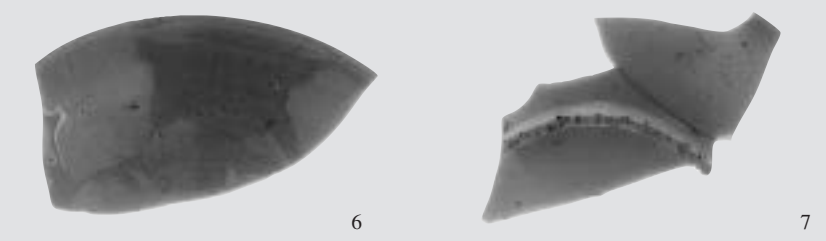
Ⅳ・Ⅴ郭出土遺物

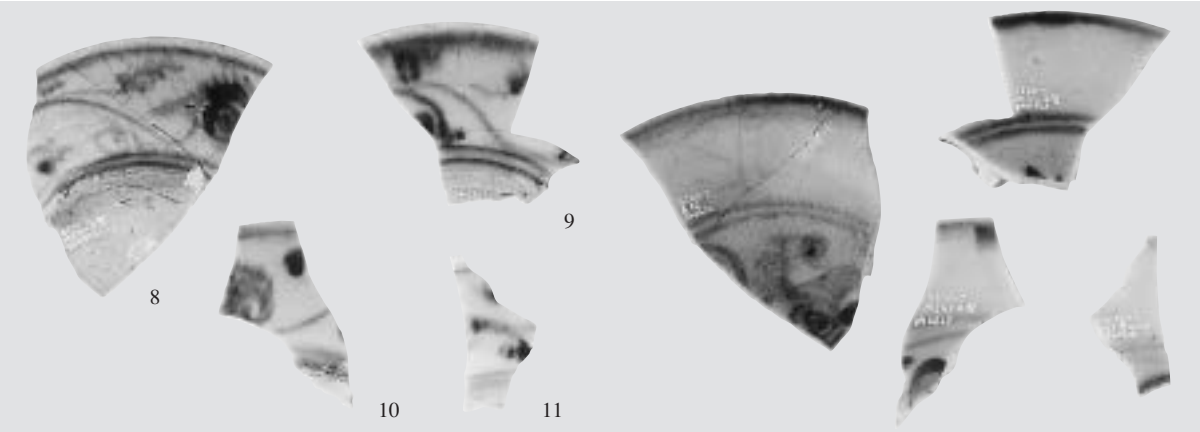




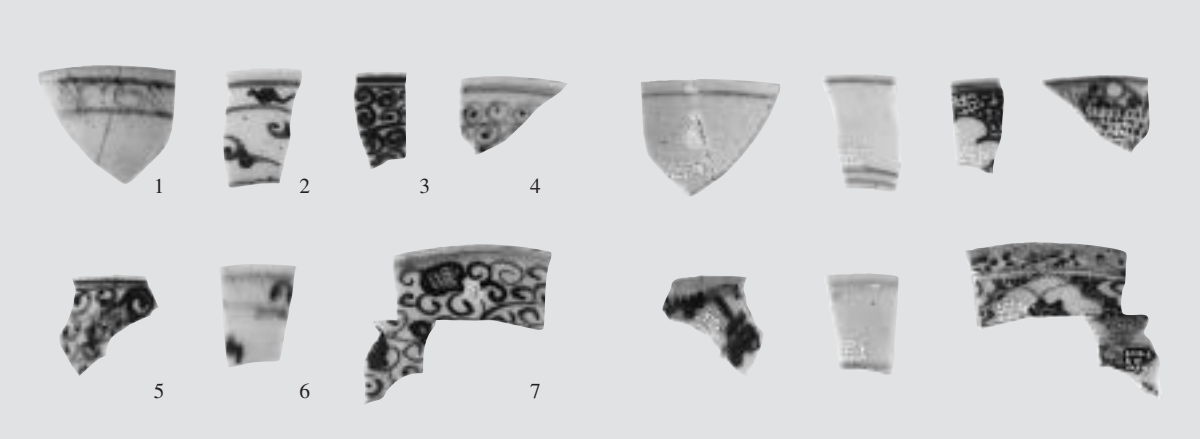


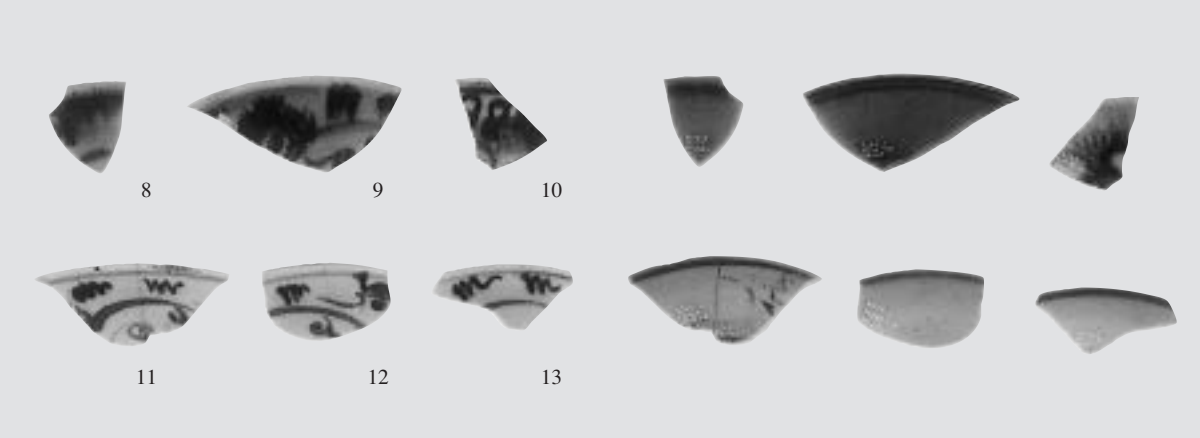


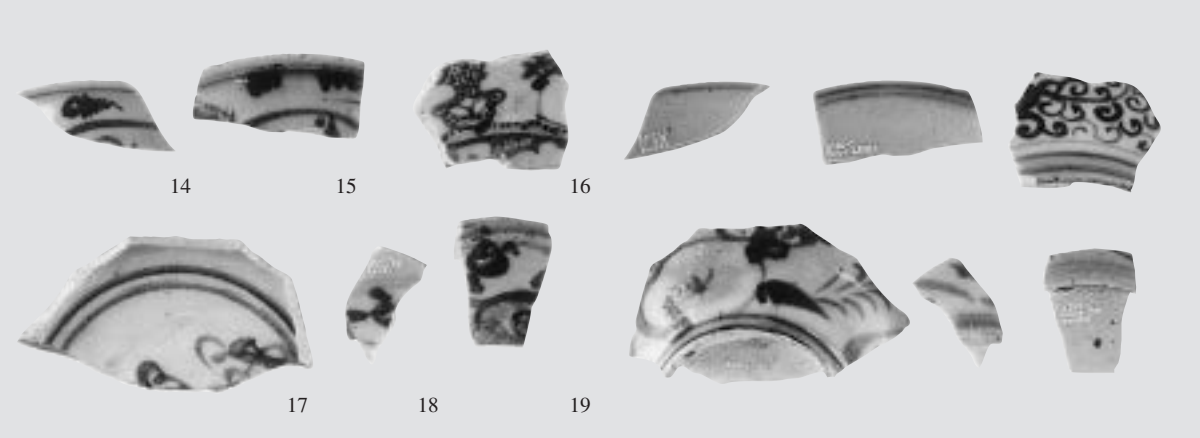


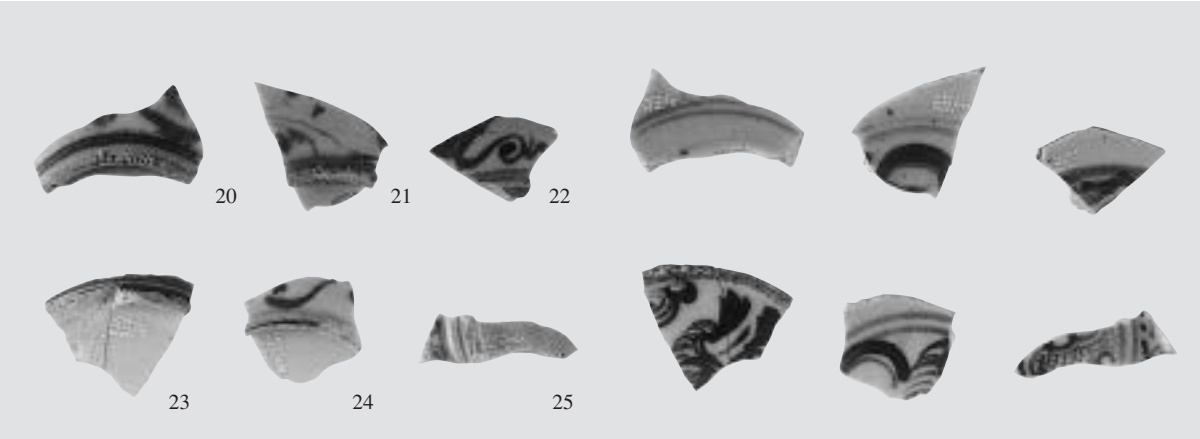


V郭出土遺物

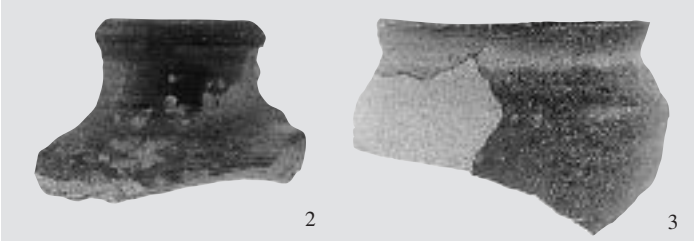


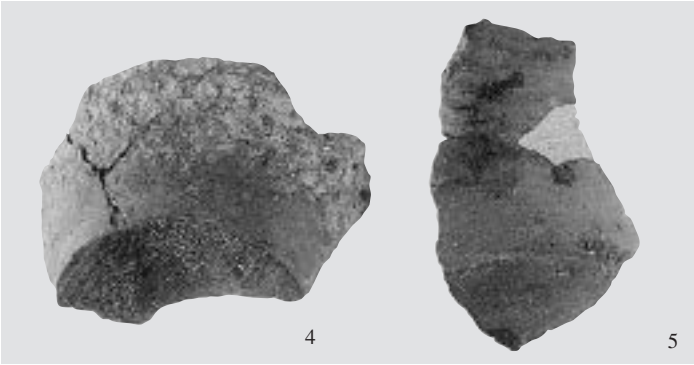


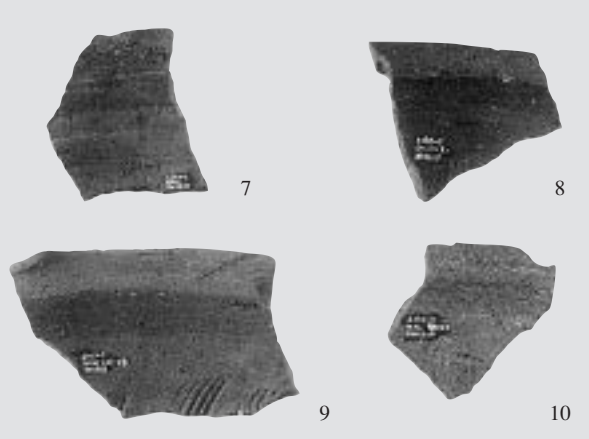


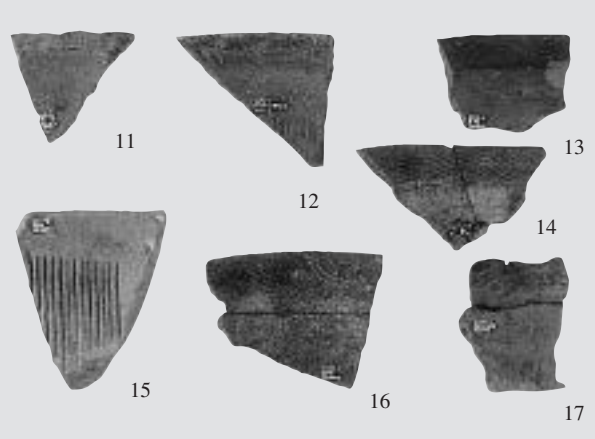


V郭出土遺物

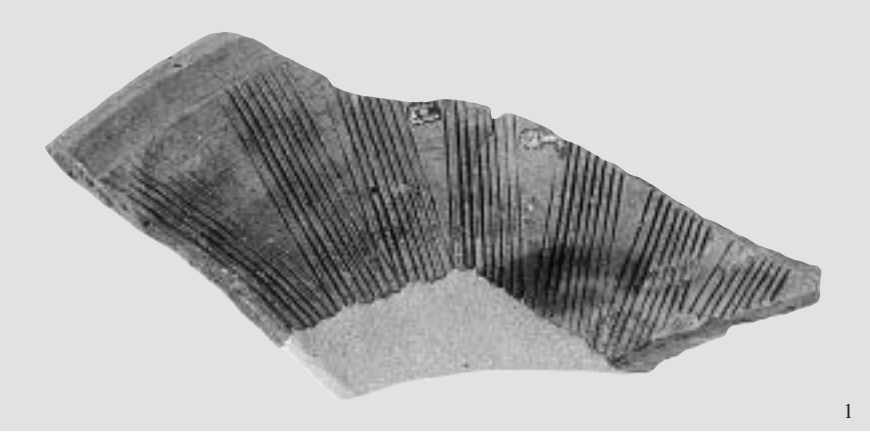


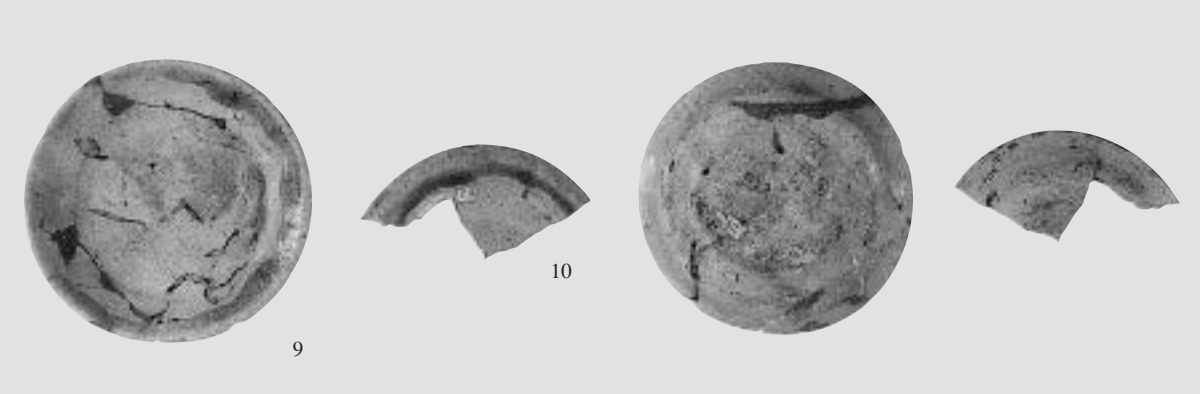






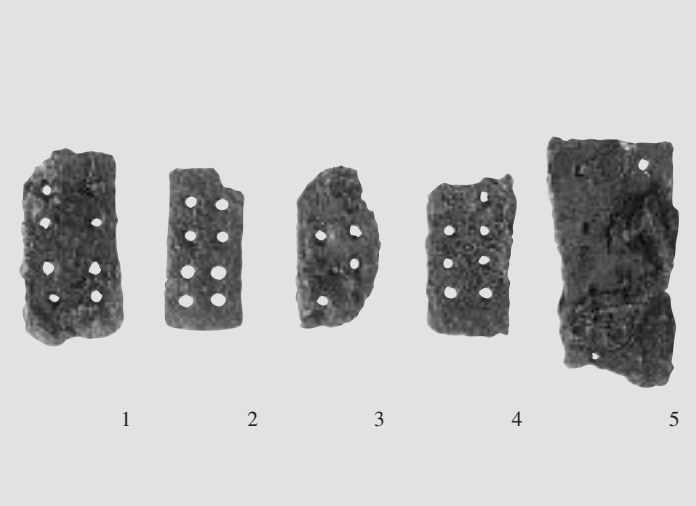
V郭出土遺物

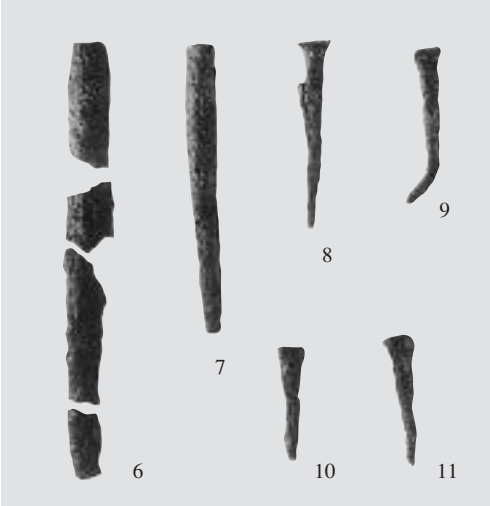


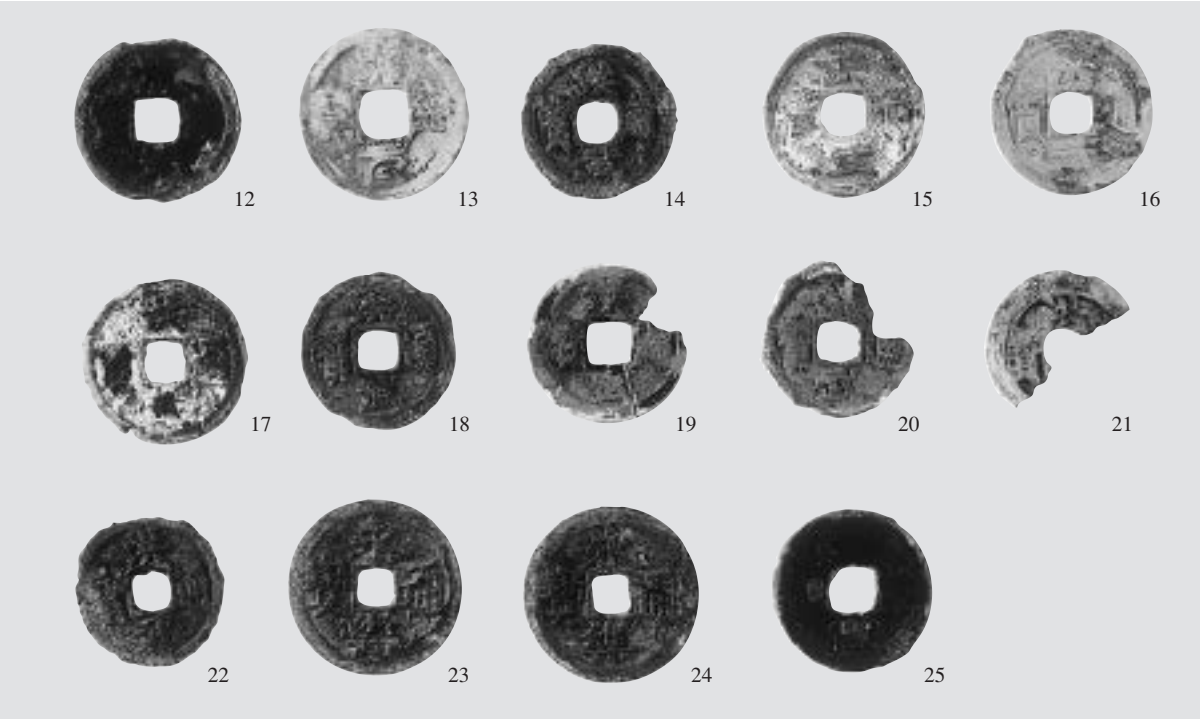


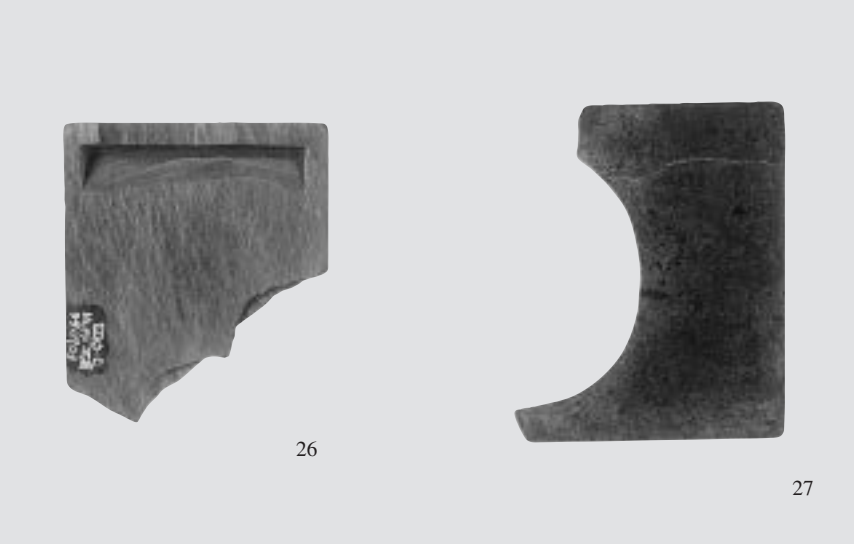
V郭出土遺物

V郭出土遺物



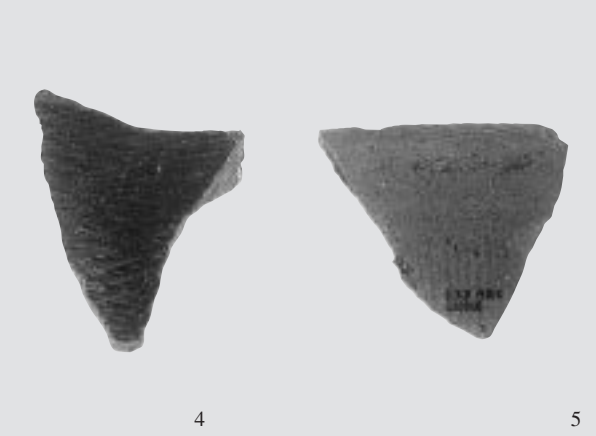


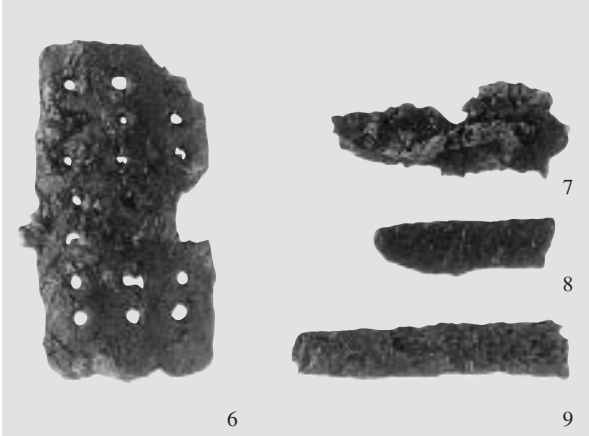


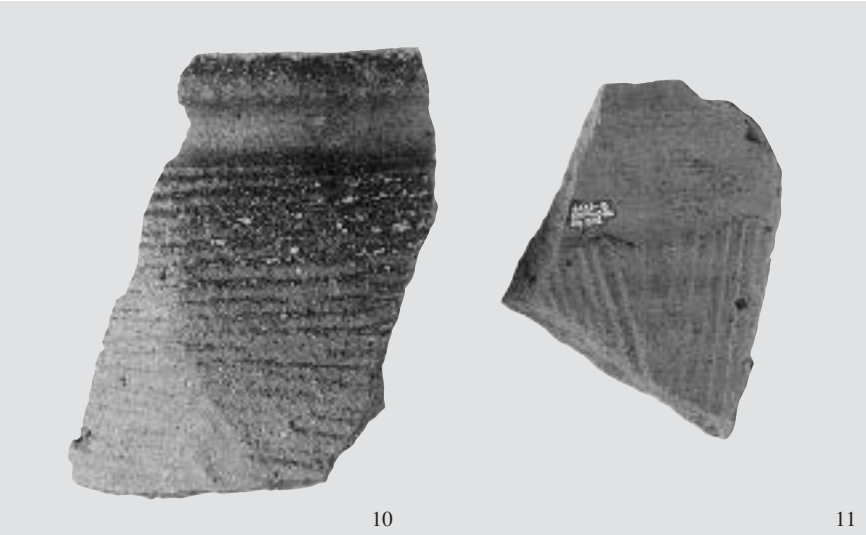


V郭出土遺物

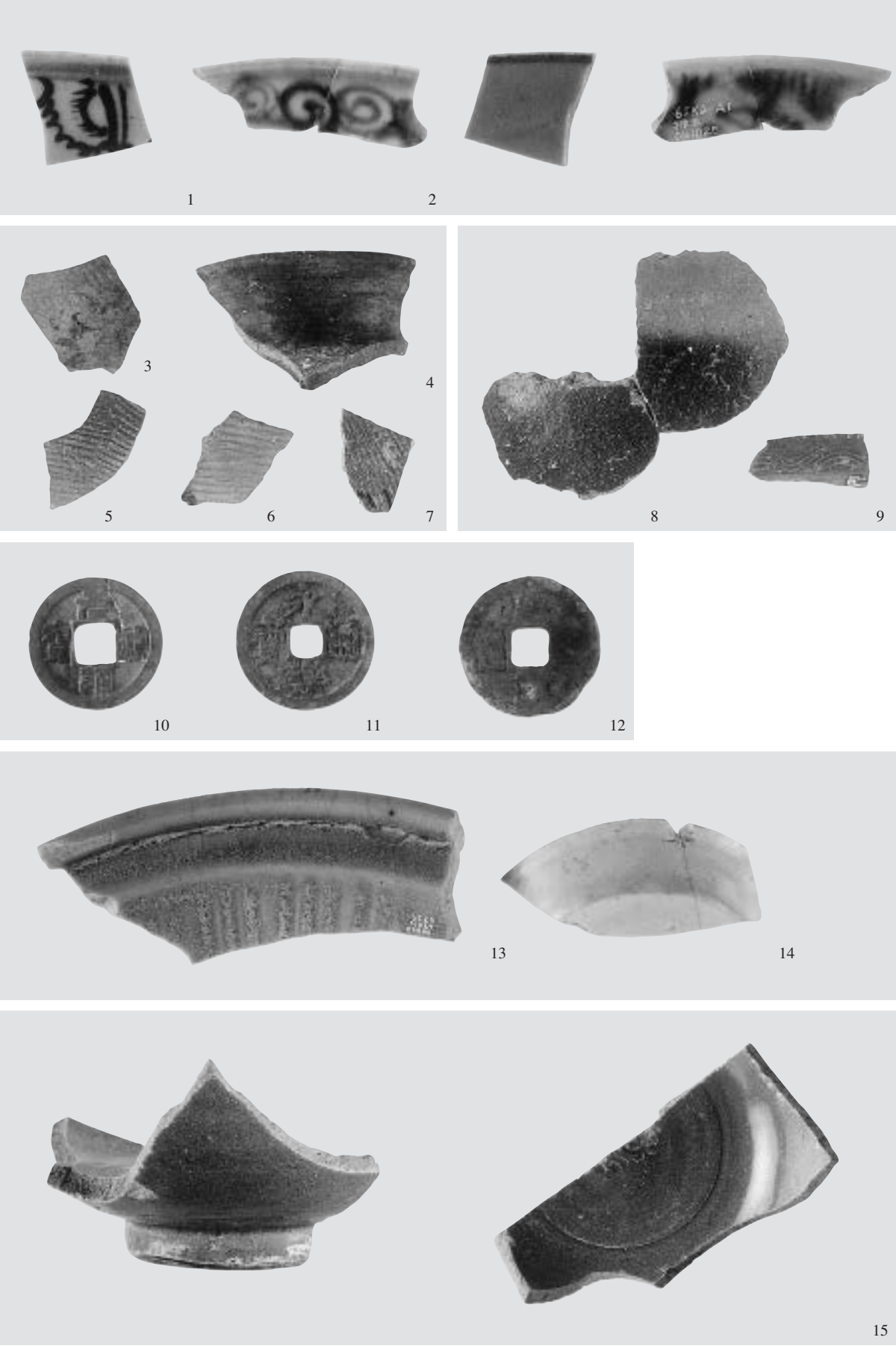
Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ郭出土遺物



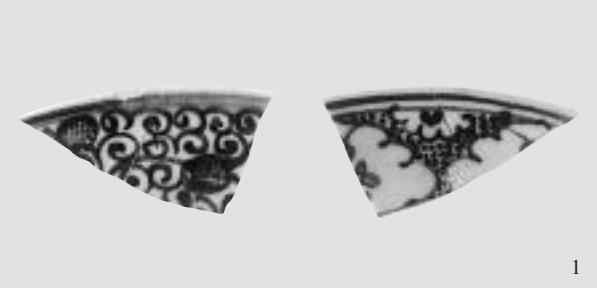


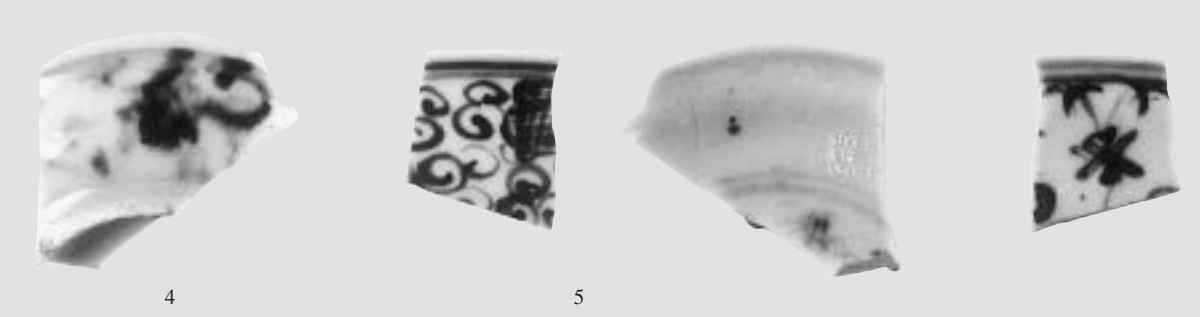


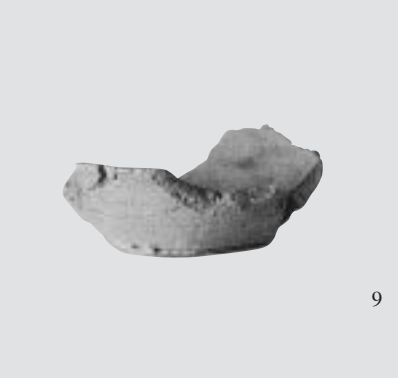
Ⅷ・Ⅸ郭出土遺物



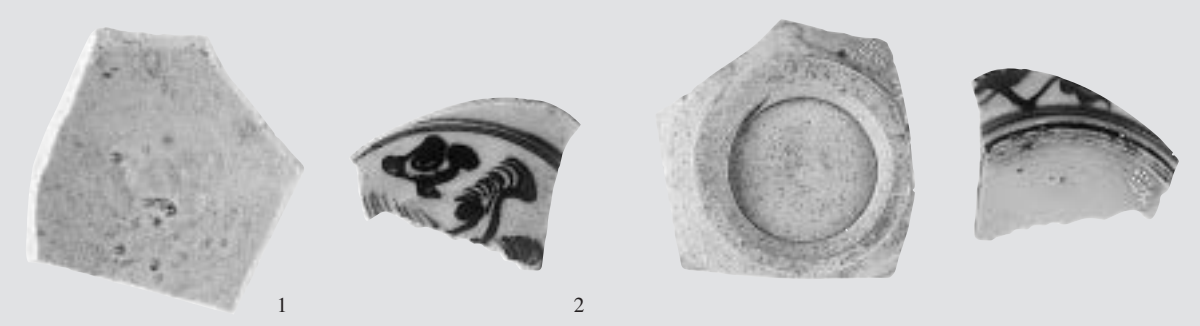
X郭・D区出土遺物

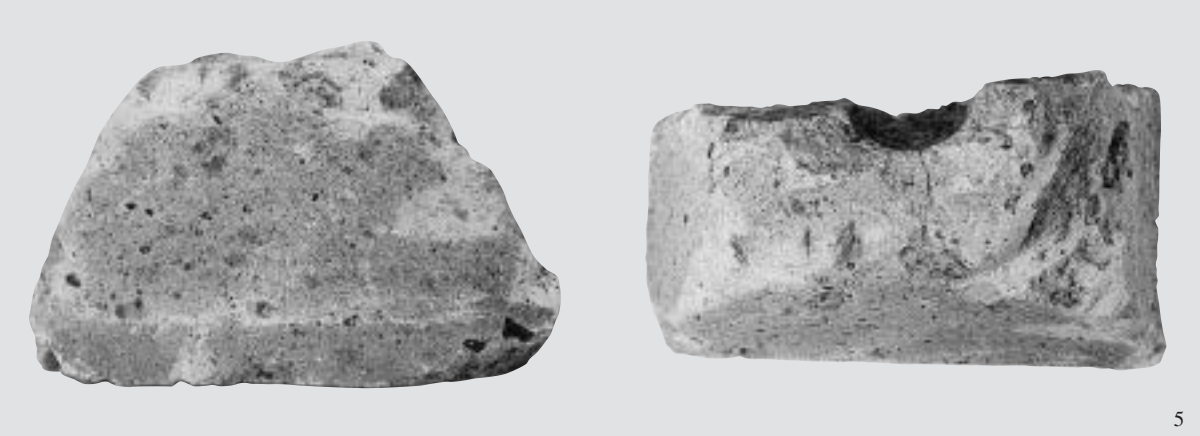




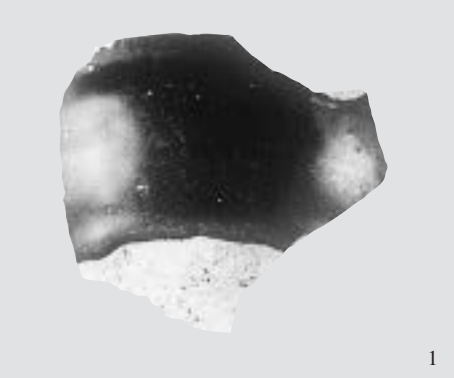


D・F区・北調査区 A出土遺物





北調査区 A・B 出土遺物


1

2

3

4

5

6 7 8

北調査区 B 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわくらだてあと
書名	岩倉館跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財文化財発掘調査報告書
巻次	XXⅣ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第423集
編著者名	栗澤光男
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20　TEL 0187―69―3331
発行年月日	西暦2007年8月

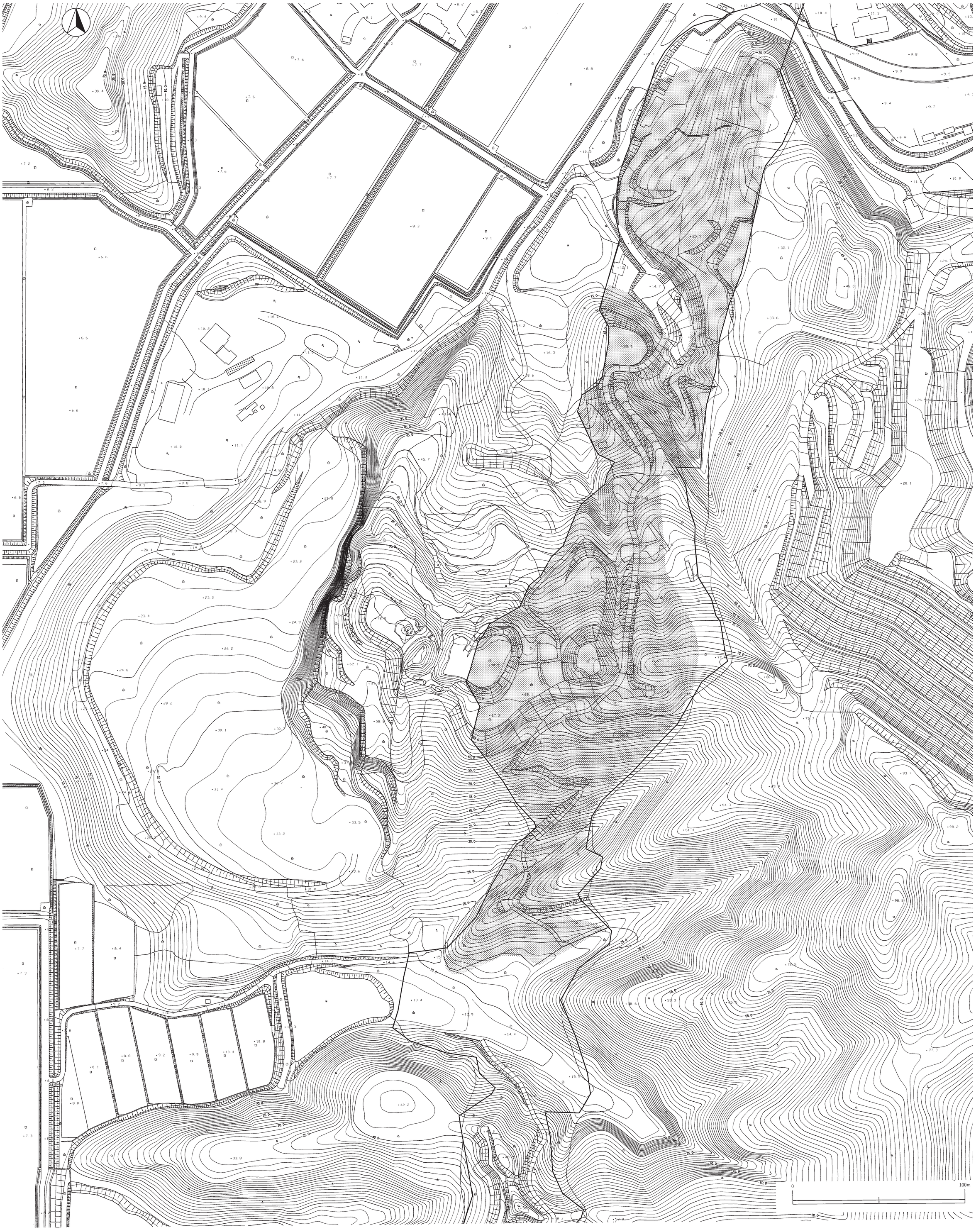
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわくらだてあと 岩倉館跡	あきたけんゆりほん 秋田県由利本 じょうしふくやまあざいわ 荘市福山字岩 くらほか 倉1外	05205	―	39° 23′ 45″	140° 04′ 49″	20030701 ～ 20031128 20040511 ～ 20041029	35,900㎡	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
岩倉館跡	散布地	縄文時代			縄文土器、石篦	
	散布地	平安時代			土師器・須恵器	
	城館跡	中世	掘立柱建物跡	22軒	陶磁器	
			柱列跡	5基	木製品	
			竪穴状遺構	71基	金属製品	
			井戸跡	3基	土製品	
			土坑	107基	石製品	
			焼土遺構	35基		
			集石遺構	12基		
			溝跡・空掘・竪掘	83条		
			土塁跡	2軒		
			土器埋没遺構	1基		
			炭焼遺構・炭窯	3基		
			通路跡	1軒		
			その他の遺構	5基		
			柱穴様ピット	3,001基		

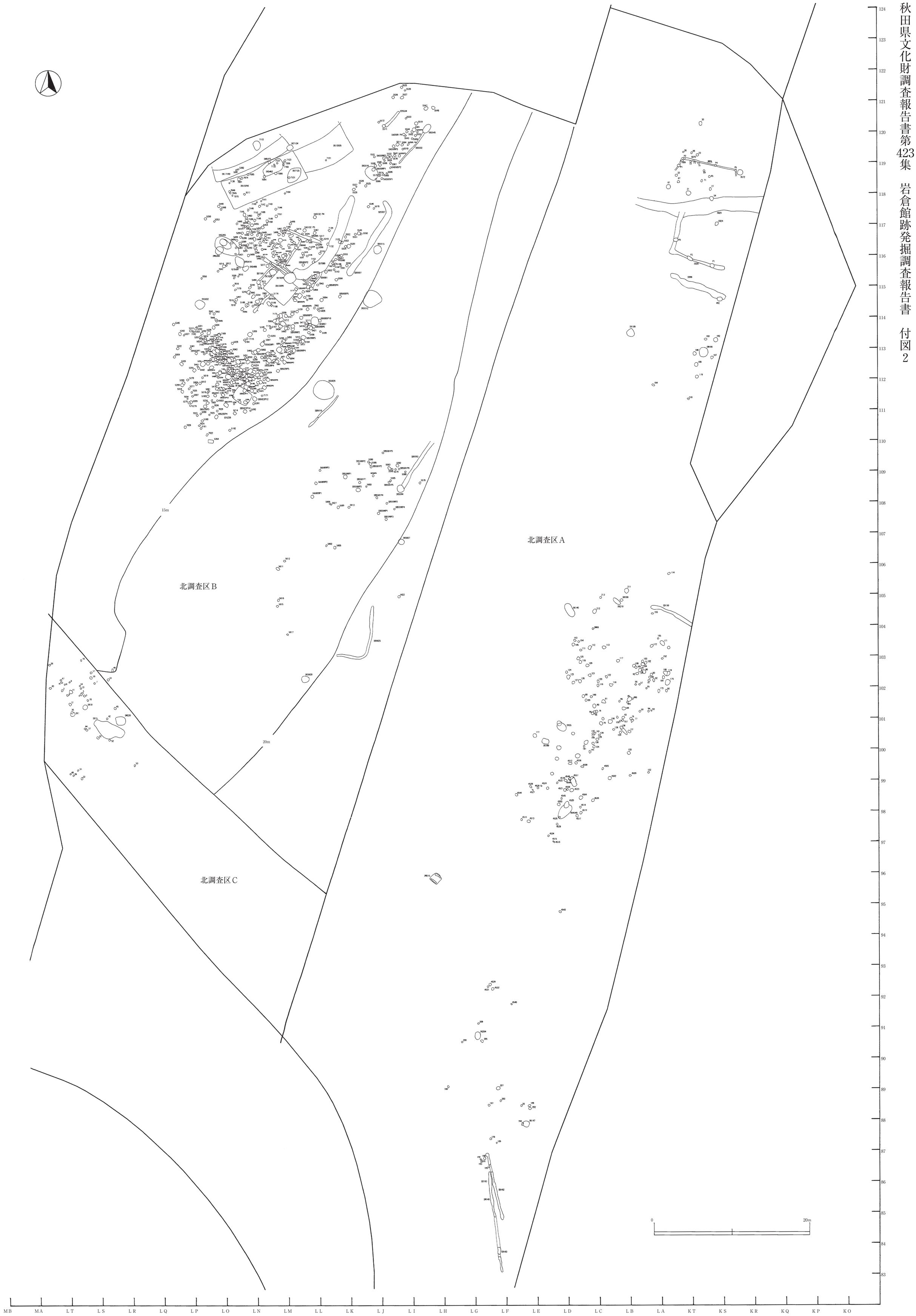
秋田県文化財調査報告書第423集
岩　倉　館　跡
―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ―

印刷・発行　平成19年８月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331 ＦＡＸ(0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860-5193
印　　刷　秋田活版印刷株式会社

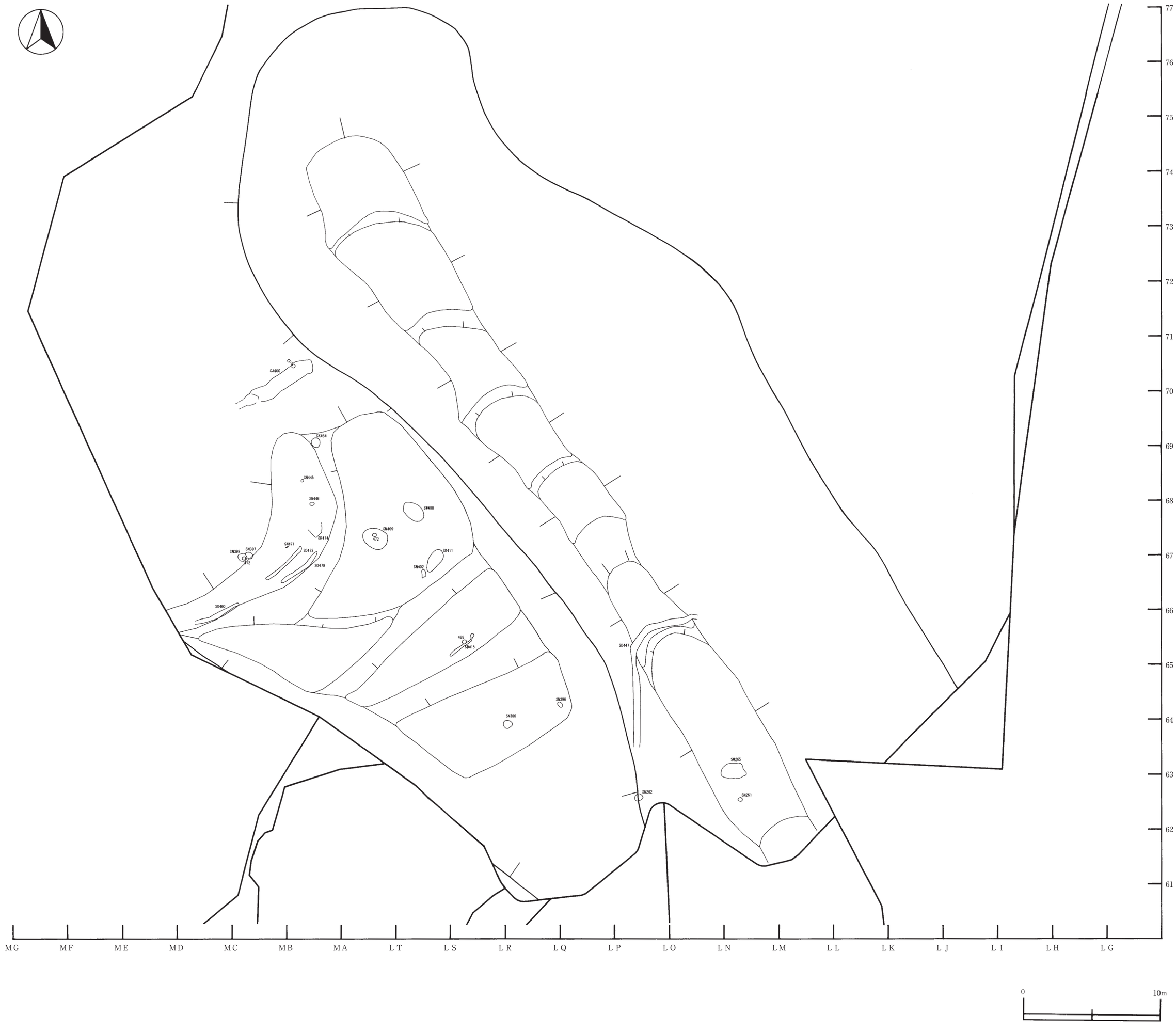
R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています



付図１　岩倉館跡周辺地形図



付図2　岩倉館北調査区A・B・C遺構配置図


77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
MG
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
LI
LH
LG
SJ400
SK454
SN445
SN446
SN408
SN409
472
SK474
SN398
SN397
412
SN471
SD473
SD479
SN402
SK411
SD460
488
SD415
SD447
SN396
SN380
SN265
SN262
SN261
0
10m

付図３　Ｄ区遺構配置図

51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
LI
LH
LG
LF
0
10m
SD3505
SF3527
SK13526
SD6538
SK13519
SK13520
SD3509
SD3508
SD3507
SD3506
SD3503
SD3502
SD3501
SW3504
SK13522
SK13521
SK13521
SK13525
SK13524
SK13523
SD3001
3515
3513
3510
3514
3517
3511
3516
3512

付図4　E区遺構配置図